

目次

序文	北村哲郎	51
----	------	----

序文にかえて	山邊知行	52
--------	------	----

はじめに		55
------	--	----

束帯

縫腋袍	57
下襲	65
相	70
単	73
表袴	76
大口	81

十二単

唐衣	84
表着	88
打衣	94
五衣	96
単	106
裳	112
長袴	116

正倉院宝物の模造

大歌袍	122
赤地蒔縷袍	128
紅縹縷布袍	129
茶蒔縷半臂	133
安君子半臂	136
布衫衣第参拾貳号	139
布衫百参拾参之参	141
汗衫衣第参拾六号之貳	144
呉女背子 呉楽八拾五物之壹	145
呉女背子の下に着用の上衣	147
白橡絶袷裳 九拾七之参	150
白絶袷袴 南百参拾六之参	154
久太袴 度羅楽八物之壹	157
白絶袷下袴	159
布袴四号	161
腕貫 第一号	163
破陣楽接腰 二隻四 唐古楽拾九物之壹	164
布接腰 五隻之参	166
白絶脛裳 呉楽八拾五物之壹	167
襪 函第六拾四号之拾貳	169
笛吹襪 呉楽八拾五物之壹	171

厳島神社所蔵御神服の模造

赤地向鶴文錦半臂	172
紅色麻地単	174

中尊寺遺品の模造

藤原基衡公白平絹小袖	177
藤原基衡公白平絹単	181
藤原清衡公白平絹袷袴	186
藤原清衡公白綾袷袴	191

鶴岡八幡宮御神服の模造

第一御衣(桂:表着)	195
第二御衣(桂)	201
第三御衣(桂)	206
第四御衣(単)	211
第五御衣(小桂)	216

直衣	220
童水干	226
童水干用の指貫	230
紅白段牡丹唐草文様打掛	235
白小袖	240
淡藍地花重模様葵文辻ヶ花染小袖の模造	243

淡紅地観世水桐模様摺箔の模造	248
片倉家伝来小紋染胴服の模造	253
白地蛇籠晒布模様縫箔振袖の模造	256

長袴

肩衣	261
長袴	264

平舞装束

袍	272
半臂	278
下襲	282
表袴	288

衲裆装束

毛縁衲裆	294
袍	296
指貫	303
紅地竜目牡丹文様唐織	308

あとがき	314
------	-----

序 文

北村哲郎(共立女子大学教授)

博物館・文化庁に在職中、私はいくつかの指定文化財の染織品関係の修理や復元新調の仕事にたずさわらせて頂きました。修理の場合はまず出来るだけ現状を詳細に記録し、復元に際しては可能な限り、旧態に近づけることに心掛けてきましたが、そうした際、一番やっかいなのは縫製の部分でした。修理ばかりでなく、時代を経た衣裳を扱う場合も、それが後の時代に仕立なおしされていないかどうか、つまり製作時のままのうぶな姿で伝世してきたかどうか、縫製がそのままかどうかを判断することは、非常にむずかしいことでした。御承知の通り、直線裁ちの和服では、昔から仕立なおし、繰り廻し、あるいは寸法を縮めたりして、一領のきものも、いろいろに利用し、活用して参りました。したがって、仕立替は決して珍らしいことではありませんから、余程はっきりした痕跡でもない限り、縫製がうぶなものであるかないかは、わかりにくいのが実状です。

それというのも、衣服の時代的変遷やその特色を、縫製の面から明らかにした参考書や研究論文がこれまでほとんどなく、その点が不明確であるからです。申すまでもなく、古い衣服の資料は、正倉院の伝世品をのぞけば、近世まで遺品が極めて少なく、また種類も片寄っていて、各時代の推移を明らかにすることは、ほとんど不可能と思いますが、現状で出来る限りの資料を集積し、裁断、縫製という衣服構成の面で、その変遷を明らかにすることは、前に述べた修理や復元、あるいは遺品がうぶか否かを判断する上にも、極めて重要なことと考えられます。

一つのデザインに従って、裂を裁断し、縫製することは、衣服を作り上げる最後の工程として大変重要な意味をもっています。従来特に和装の世界では、衣服の形が長着、羽織などとほぼ一定している関係上、裁断、縫製も一定の方式にのっとりなされてきましたから、習熟の度合いをのぞけば、ある程度誰にでも出来ます。したがって、裁断や縫製は単なる技術の問題、あるいは職人仕事と考えられ、学問の対象としては、あまり重視されてこなかった面もあったように思われます。しかし、現

実の問題として、公家装束と小袖などは、裁断、縫製の上で、著しい違いがあります。それは生地材質や寸尺、あるいは形状の違い、着装様式の相違などによっていますが、それだけの理由でしょうか。装束にはそれなりの長い伝統や、伝承、方式が何らかの理由で生まれてきたでしょうし、小袖にはまた小袖としての必然的な理由があったと思われます。そうした理由を究明することは、それらの製作にたずさわった当時の人々の考え方や技術の度合い、道具の存在、経済性など、さまざまな事柄が考究され、生活史の一端を明らかにすることにもなります。

本書は共立女子大学家政学部の被服研究室で、長年実施してこられた、正倉院御物をはじめとする、歴史的に重要な服飾遺品の実測調査に基いて得た知見を、そのまま生かして、復元品を製作した結果を、裁ち方、標つけ、縫い方という被服構成の立場から、わかりやすく、具体的な図解によって、まとめられたものです。

共立女子大学は創立時から、衣服構成教育に力をそそぎ、現在も実技教育に大きな比重をかけている数少ない学校です。特に山辺知行先生の一文にもあるように、昭和27年以降、本校の大黒柱であった故山本らく先生と山辺先生との絶妙なコンビによって、古い服飾品の構成技法研究の道が開かれ、以後その伝統は大切に継承、今日に及んでいるのです。その意味で、今回現在の被服研究室を背負っておられる栗原・河村両先生によって、これまでの研究成果の一端が上梓されるに至ったことは、誠に有意義なことであり、世に出るべきものが、ようやく出たとの思いを新にするものです。

本書は上述のように、これまでの研究成果を、なるべく平易に図をもって明示することを主眼とされていますから、復元模造などに役立てて頂ければ幸いです。また今後の被服構成の歴史的研究にも裨益するところは極めて大きいと考えられますから、本書を土台として、その方面の研究が一層進展されることを願う次第です。

序文にかえて

山邊知行（遠山美術館館長）

今回共立女子大学家政学部被服学科の被服研究室で、過去約三十年間にわたって行われて来た日本の古い服飾品の実測調査、そしてその結果として製作された実物見本、模造約六十四点の写真図録が源流社から出版されることになった。これは同研究室の主任教授であった、故山本らく先生が中心となって、一つ一つ実物資料について綿密、正確な実測、考証のもとに製作された実物大の復原模造で、少くとも形の上では——模造といってもその材質素材から染織の技術、文様までを原物と全く同じに作るということは、種々の点、とくに費用の点などから学校で行うのは無理なことが多い——単なる縫い方や裁ち方の方法を示した雛型や標本と違って、裂の裁ち合わせや、構成の細部にわたっての裁縫の技術や、着装の仕方を含めた服飾史的な意味からも、類のない参考資料であると思う。

現在の共立女子大学の前身が、共立女子職業学校であったことは人の知るところであるが、ここで行われた教育の内容は、裁縫、刺繍、造花、組紐など、染織関係の技術の修得を主としたものであったようである。そして其処でこうした技術を教えた先生方には、当時一流の専門の技術者（職匠）の方が多かった。これは今日学校に保存されている、その頃、学生がこうした先生方の指導のもとに製作した作品——刺繍の屏風や扁額など——を見ると、その技術の水準が非常に高かったことが知られる。造花は毎年その作品を室内の装飾に御所へ献上するのが例になっていたという。

山本先生は若い学生時代をこうしたきびしい技術の伝統の中で修業され、卒業後引き続き、ずっとここで学生の教育に従って、大学になってからはこの被服学科の主任教授をしておられたのであるから、いいかえれば、共立女子大学の家政学部の被服学科というのは、この頃的女子職業学校の姿を、最もまともな形で伝えて来たとい

ってもいいであろう。そしてここでこうした息の長い被服調査研究の仕事が三十年にもわたって持ち続けられたということは、そこに山本先生という大きな存在が研究室の栗原さんはじめ若いメンバーを統率して力強く引っ張って行かれたからに外ならないであろう。

私が東京国立博物館に勤める傍ら、ここで講師として服装史の講義を受持ったのは、この調査の始まる少し前の昭和二十六年のことだったと思う。そして丁度その頃——昭和二十五年——朝日新聞がスポンサーになって、中尊寺の藤原三代のミイラの調査が行われ、私も偶然それに加わって服飾品や染織品を調べに行ったことがあった。ところがそれまで博物館できれいに保存されたものばかり扱って居たのであるから、ミイラになった遺体から着ている衣服を剥ぎ取るなどということは全くやったことがないのに加えて、これが総合調査で、しかも日数を限られての仕事だったから、他の遺体や骨などを担当する人類学や考古学の先生方の仕事とのかね合いもあって、自分ばかりそうそうゆっくり時間をかけてやっては居られない。時には引きむしるようなして採取した資料は、とてもその場で結着のつくものではないので、寺側の諒解を得て、一括して博物館へ持って帰って調べることにした。

さてこれからが大へんで、バラバラになった衣類を、大きな仕事台の上へ拡げて、何とか元の形を作らなければならない。子供のおもちゃの絵合わせのように、これが袖か、これが裾かといじくって見ても一向にさまにならない。中に一つ、基衡の遺体にかかって居た、裾の広がったような形の大きな裂は、全く何だか見当もつかず、毎日睨めっこをして一ヶ月半、遂に思案に余って、恐る恐る山本先生に事情を話して何とか見て戴きたいと御願ひした。恐る恐るというのは、別に私は山本先生がこわかった理ではないのだが——先生は授業や指導のこととなると大へんきびしい方で、よく部屋へ呼びつけられ

た学生が、いいかげんな仕事をしているというので、それこそコテンコテンにたたかれているのを見たり、時には部屋の若い助手たちや、栗原さんなどでさえ、かなりきびしく叱られることもあって、こわい先生なんだなどは思っ

て居たが——ただ先生は、恐ろしく潔癖で、稀代の「きたながり」な方なので、とてもミイラから剥ぎっ放しの、腐ったしみだらけの衣服など見ては下さるまいと思ったからであった。ところが意外にも二つ返事で是非見たいからと言われるので気の変らぬ中にこそと早速博物館の仕事場へ来て戴いた。そして驚いたことに、特に用意したゴム手袋やピンセットなど見向きもしないで、素手で断片を掴んで、これはここへ附きます。この針目はこっちへ繫ります。はいこれは袖、これは襟とばかり、こっちがあれあれと驚いて居る中に、断片は忽ち大きな広袖の単衣のきものとなってしまった。私が裾と思って居たのは実は袖で、遺体の上に上下転倒して掛けられて居た「逆さ衣」であった。

この間の所用時間十五分。一ヵ月半と十五分の違いは、結局裁縫の技術と経験の有る無し。恐ろしいことである。被服の構成も知らないで、何の服装史かということはこの時ほど思い知らされたことはなかった。

このことは私にとって染織の勉強をする上での一つの大きな転機であったが、恐らく山本先生にしても、古い——きたない——破損したものがその構成を辿ることによって原形に復元されることに大きな興味を感じられたのではなかったかと思う。文部省の科学研究費による、正倉院の服飾品の調査が始められたのが、昭和二十七年、そしてその結果が昭和三十年と三十四年に「上代被服構成技法の研究」として共立女子大の紀要に発表されたのであるが、これは今まであまり問題にされなかった古代の衣服に対する被服構成という、裁断、裁縫の面からの新しい研究として、服飾史や風俗史の専門家の間に大きな反響を呼んだのはもちろんで、このことは、その後

の調査を進める上にも大きなプラスになった。かくして、昭和三十四年の中尊寺、三十五年の熱田神宮、三十六年の巖島神社など引き続き調査が行われ、私もこれらの調査旅行には、大低栗原さんと一緒に全行したが、山本先生と栗原さんのコンビは、長年の師弟関係のベテラン同士で、以心伝心というか息の合ったというか、その作業は実にキビキビしたもので、先生が観て言われることが栗原さんの手で忽ち測定され作図されて行く。この鮮やかな仕事振りを見て、当時巖島神社の宮司であった故野坂元定氏など、あのやかまし屋で、すじの通らぬこととなったら、てこでも動かぬむずかしい方が、すっかり気を好くして、帰りには、台風の際、潮を被って廃品になってしまったという、舞楽装束の傷んだものを一束、参考品に持って行きなさいとって頂戴して来た。(あとでこの話を人にしたら、そりゃ奇蹟だといわれた)

ここに挙げられた模造品は、全部こうした現地における実測に基づいた実測図によって製作されたものであるが、前述したごとく、布地や模様、色まで原形と同じように作られたものは、偶々以前に高田装束店の高田義男氏のところに重要無形文化財有職織物の技術保持者である喜多川平朗氏の模織した裂地のあったもの数点で、あとはまずそれに近い市販の布地を捜して用いたものが多い。然しそれでも色や文様は——主として「染め」のもの——できるだけ原形に近く模したものが多い。そしてこの染色には学校の染色研究室の、青木美津枝教授が大変骨を折って、正倉院の纏纈や藤纈、徳川美術館の辻が花の小袖等を見事に染め上げられたことを忘れることはできない。

以上の外、これは原品からの実測ではなくして——原品が現存しないので——種々の文献や、絵巻物其他の絵画資料などを参考にして作られた、十二単其他一連の有職服飾がある。主として高田装束店の高田義男氏、高田俊男氏の考証によって織られた裂地を用いて作られたも

ので、これらは人形に着装して陳列したり、時には学生に、服装史の参考に着装して見せたりすることに用いられた。

このような古い服飾、染織品の模造、復原等は、当然、こういったものの修理、補修にも関連して来て、その後東京国立博物館に保管されている、旧法隆寺伝来および正倉院の染織品の修理、補修なども、専ら共立女子大の被服研究室がその依頼を受けて行って来た。

昭和五十四年五月、山本先生はその九十才の生涯を閉じられたが、研究室ではその後もなお引き続きこうした調査模造が続けられている。これは主として、修理を依頼された際に行われた、細かい実測調査に基づいて製作されたものであって、例えば東京国立博物館の「淡紅地観世水桐文摺箔」、宮城県白石市の片倉家伝来の片倉小十郎所用の「小紋染胴服」等で、前者は高田装束研究所が裂地を担当して、染織家の稲垣二郎氏が箔置きしたもの、後者は松原染色工房で型紙製作と染色が行われている。

以上、共立女子大学家政学部被服研究室で製作された模造品の概略を述べたが、ふり返って見ると大学の研究室で、これだけの模造の製作が行なわれたことは、やはり共立女子大の被服研究室が女子職業学校以来の裁縫に関しての高い水準を持っていたことと、そしてこれが山本教授の熱意と指導によってその力を十全に発揮したからだと思う。

女子大学の家政学部というのは、その中に裁縫や染色、刺繡、機織其他いろいろのものを教科課程として持って居り——その中の多くが現在はクラブ活動的なものになっているとしても——これを動かして行く中心がしっかりして居れば、以上述べたような、かなり大きな仕事ができるものだということを、示していると言えるであろう。

近頃一般に女子大学における裁縫というものがあまり関心を持たれず、隅に追いやられて行く様な傾向が見られるようである。「大学でお針の勉強などに時間をかけるのはもったいない」「減多に着物も着られないのに何の裁縫か」「裁縫などは、裁断と縫製の理論だけで充分」といったような声を聞くことがある。

もとより学校の裁縫というものは、仕立ての職人を養成するのが目的でないことは明らかなことである。然し、現在古い美術品や工芸品に対する関心も高まり、各地に博物館や美術館、資料館なども作られて行く折から、こうした染織品の保存、修理や模造、復元の世界を考えると、そこに裁縫を必要とする分野はますます拡って行くのではないかと思う。

将来、学芸員の資格を取得する、博物館学の実習——実技修得——の一つに写真撮影や、模写などの技術とともに——少くとも女子大では——染織品の保存修理に関する技術を加えてもいいのではないかということが考えられるのだが如何なものであろうか。

私共の所属している共立女子大学家政学部被服研究室では、前主任教授・故山本らく先生が、昭和27年に文部省の科学研究費を受けて正倉院宝物の染織品の調査研究を行って以来現在に至るまで、日本の伝統衣服の実物調査を行い、各時代の衣服の形態および構成技法等について研究を続け、さらにその結果を基にして復元模造を行ってまいりました。

この間、実物の調査につきましては、正倉院事務所、東京国立博物館、黎明会徳川美術館、厳島神社をはじめとする諸機関の多くの関係者の御好意、御配慮をいただきました。現在までに正倉院宝物86点の調査をはじめ、国宝や重要文化財を含めて非常に多くの遺品の調査を行うことが出来たのも、ひとえに御関係者の御援助あったことでした。

また、それらの遺品のうちで、損傷の著しいもの何点かについては、関係の方々から修理の御依頼を受け、その際により詳しい調査が可能となりました。特に解体修理を行ったものの中には、表面からの調査では解らなかった特殊な裁ち方や縫い方等を観察することが出来、大変参考になりましたし、模造する際の大切な資料とさせていただくことが出来ました。

模造品を製作するためには、調査資料に基づいて布幅を決め、裁ち方を考察して用布を見積り、実物と同じ技法によって構成するのですから、出来得る限り実物に近い模造品を製作するためには、材料も実物と寸分違わぬ物が入手出来ればそれに越したことはありません。しかし、材質、織り方、裂幅、文様、色彩等すべて一致したものを製作することは至難の技であり、さらに費用との関係もあって、調査したものすべてについて、こうした意味での十分な復元を望むことは、到底出来るものでは

ありません。したがって、私共の模造は、その主眼を衣服の構成、形態に置いたものであると云わなければなりません。

しかしこの点につきましても、高田装束店（現高田装束研究所）、松原染色工房、共立女子大学当局、共立女子短期大学染色研究室等各方面の多くの方々の熱心な御協力によって、まずまず実物に近い材料を得ることが出来たことを感謝する次第です。

このようにして出来た模造品は、これを実際に着用してみることによって、原品を観察しただけでは解らなかった着装法が解ってきたり、損失、脱落して不明だった部分を、かれこれ勘合して復元することの出来たものもあり、また材質のまったく異った試作品では納得出来なかったものが、実物に近い材料で製作してみればじめて理解出来たという場合もありました。

本書は、現在までに被服研究室で復元した衣服のうちから、日本の伝統的な衣服64点を選び、その裁断、縫製等について一般の方々に容易に理解していただけるようにという点を考慮して、出来るだけ平明、簡潔に書きました。

なお、64点の中には、原品の破損が甚だしくて、完全な形の観察出来なかったものについては、同時代の同種のものと、原品の残存部分から判断して、形および寸法を決めたもののあることを申し添えます。

また、十二単、束帯、唐織等は、現存遺品を何点か調査したその平均的な寸法と技法によって製作したものです。

多くの方々のお力添えによって出来上った本書が、被服に関心を持たれる方々に、少しでもお役に立つことが出来れば、この上もない幸せに存じます。

著 者 識

束帯

束帯は平安中期頃から朝廷の儀式に着用された正装で、
大口の上に表袴をつけ、上は単、相、下襲、半臂の順に
つけて一番上に袍を着るのが定型である。

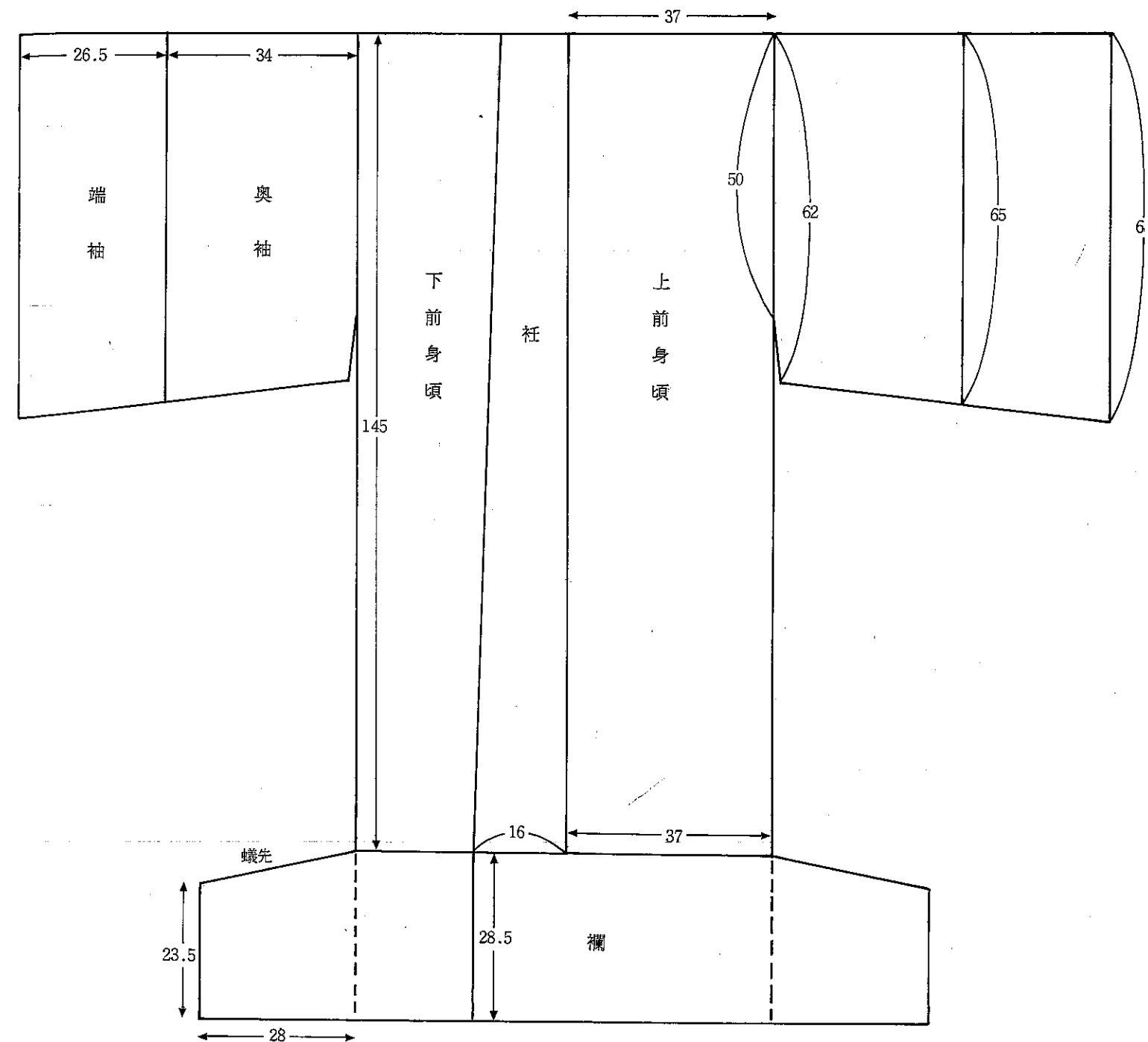
縫腋袍

袍は束帯の一番上に着用するもので、その形式には主
として武官の着用する縫腋袍、主として文官の着用する
縫腋袍がある。

この袍は縫腋袍で、表裂には黒地勝見襷文綾を、裏裂
には黒平絹を使用する。

凡 例

- 標つけ方図は、すべて実物の寸に縮尺。
- 標つけ方図中の寸法には、きせ分が含まれている。
- 裁ち方図は、紙面の関係で幅寸、丈寸の縮尺にし、さ
らに途中で切り、二段、三段になる場合は☆印で明示。
- 裁ち方図で小さく解りにくいと思われるものは、丈を
寸の縮尺にし、図中に明示。
- 縫い方については、前述した説明で足りと思われる
ものについては(〇〇の項参照)として省略したものも
ある。
- 糸の種類のうち、S撚り絹糸は市販の絹手縫い糸を使
用し、太口Z撚り絹糸は、絹の穴糸またはS撚り絹手
縫い糸を二本撚り合わせて使用。

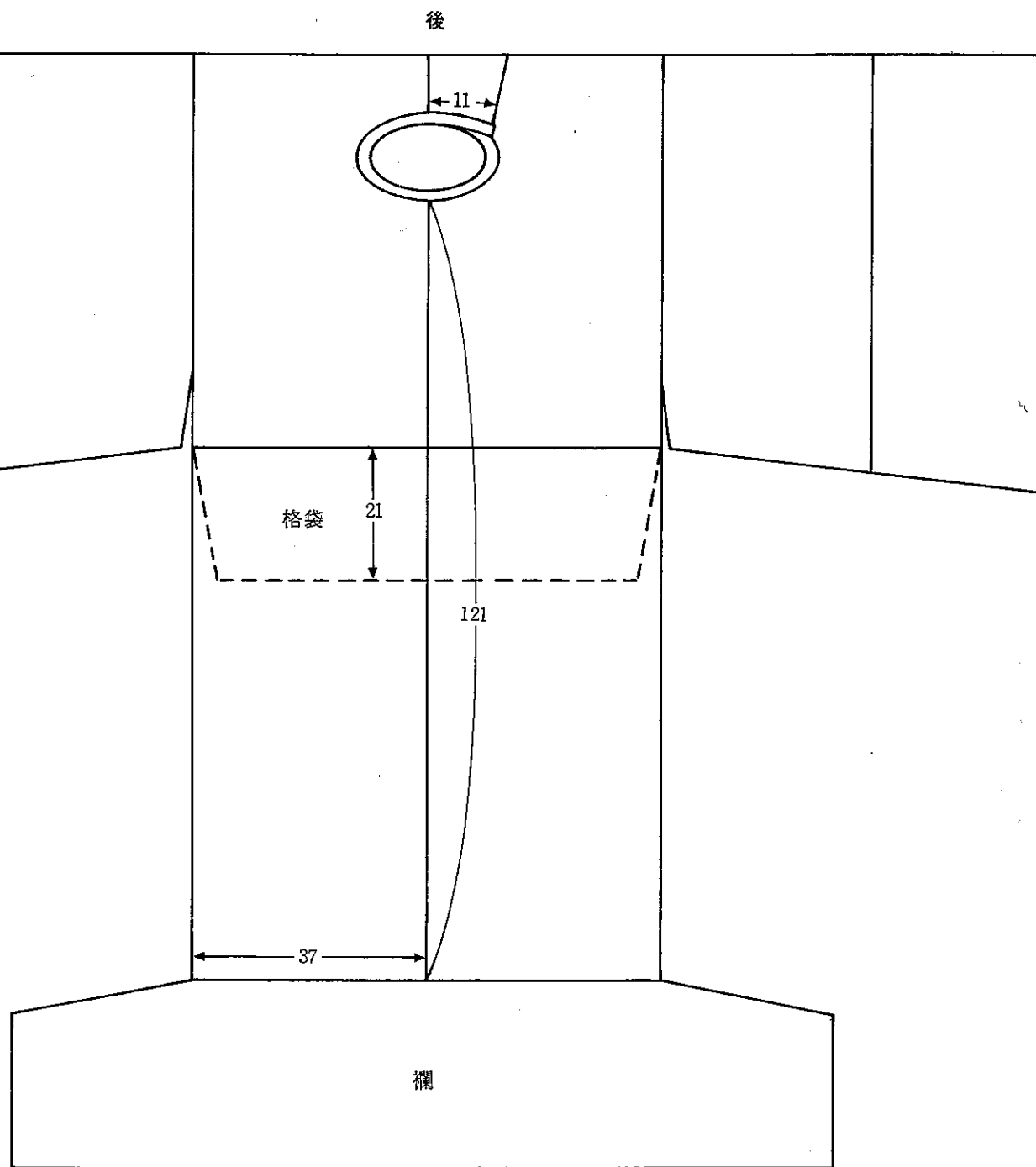


出来上り寸法

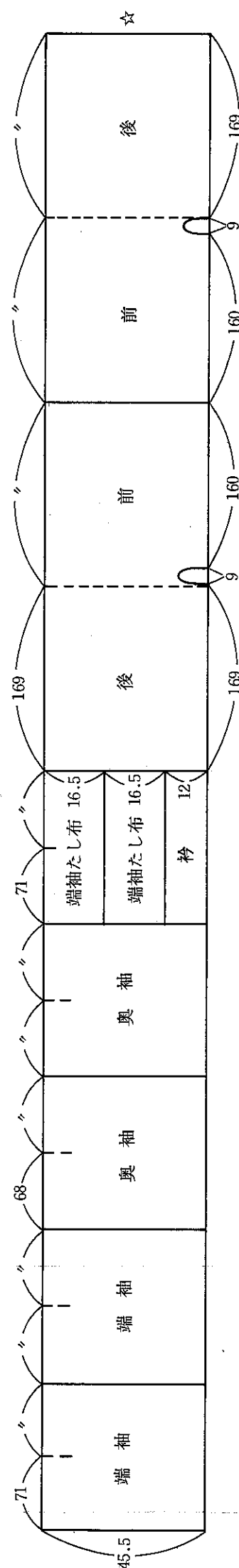
出来上り図の寸法のとおりである。

裁ち方

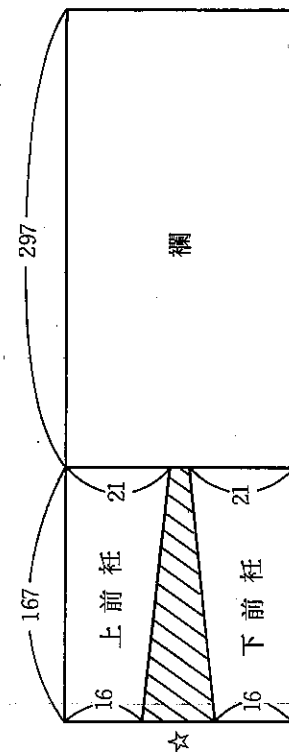
●表布は裁ち方図のように端袖、奥袖、端袖足し布、身頃、衽、欄、衿を裁ち、裏布は奥袖、身頃、衽、欄を裁つ。



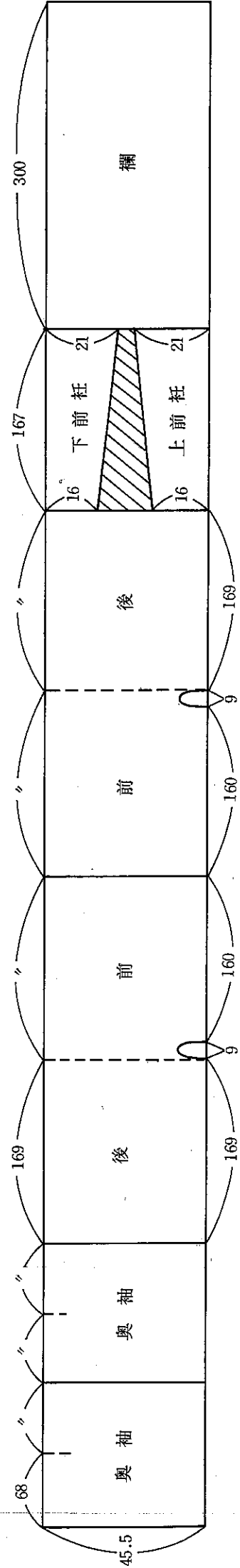
表布



端袖×6+奥袖×4+身丈×4+衽丈+欄丈=表総丈
 $71 \times 6 + 68 \times 4 + 169 \times 4 + 167 + 297 = 1,838\text{cm}$
 (衽幅+前幅+後幅+端先×2)×2+縫い代=欄丈
 $(16 + 37 + 37 + 28 \times 2) \times 2 + 5 = 297\text{cm}$
 上り身丈+格袋+裾縫い代=後丈……前丈も同寸
 $145 + 21 + 3 = 169\text{cm}$



裏布



(袖丈+身丈)×4+衽丈+欄丈=裏総丈
 $(68 + 169) \times 4 + 167 + 300 = 1,415\text{cm}$

標つけ方

- 袖は表端袖、端袖奥裏、表奥袖、裏奥袖の順に図のよう
に標をつける。
- 身頃は図のように表身頃、裏身頃の順に標をつける。
- 襦は表布と裏布を重ねて、図のように標をつける。

裏身頃も表身頃と同様に標をつける。

奥袖裏の標つけは、袖丈を表袖丈より
0.2 cm 短く標す以外は表と同様につける。

縫い方

●縫い糸は白色S撚り絹糸とZ撚り絹糸(穴糸)を使用する。

●針目は、四つ縫いは0.7~0.8cm、そのほかは0.5~0.6cmで縫う。きせは0.2cmにする。

袖

●端袖の裏に端袖の奥裏を縫い合わせ、きせをかけて、縫い代は奥裏の方へ返す。

●端袖の袖底を、内袖の表裏で外袖の表裏をはさみ四つ縫いをする。このとき袖口のところは5cmほど表裏別々に縫う。きせをかけて縫い代は表内袖に折る。

●奥袖の袖底を、端袖と同様に四つ縫いをする。

●端袖および奥袖の幅標のところを、表裏合わせてしつけ糸でとじる。

●端袖と奥袖を合わせて四つ縫いをする。この場合、縫い代は裏に出る。

●袖幅の標を表裏合わせてしつけ糸でとじる。

身頃

●背は、右身頃を表裏合わせてしつけ糸でとじた後、左身頃の表裏で右身頃をはさみ、四つ縫いをする。きせをかけて表へ返す。

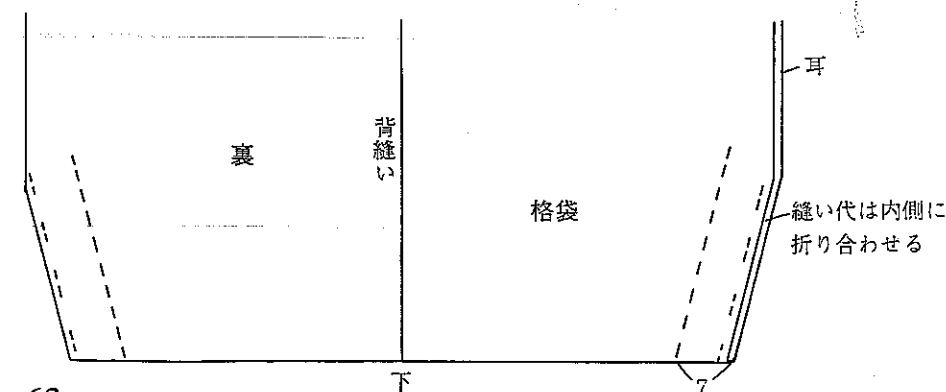
●前後脇は表裏の標を合わせてそれぞれしつけ糸でとじる。

●格袋は両端を図のように縫い、その縫い代は内側へ折り合わせて、1cm内側を二目落としてとじる。折りは下方へ折り返す。

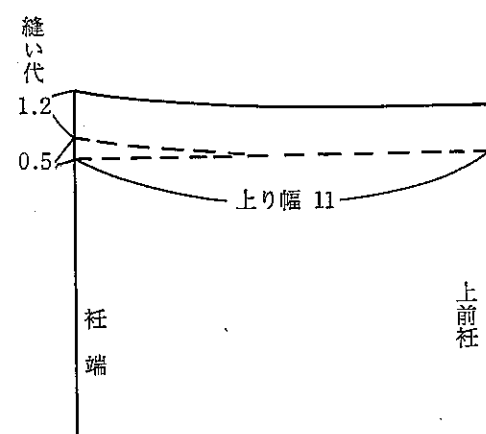
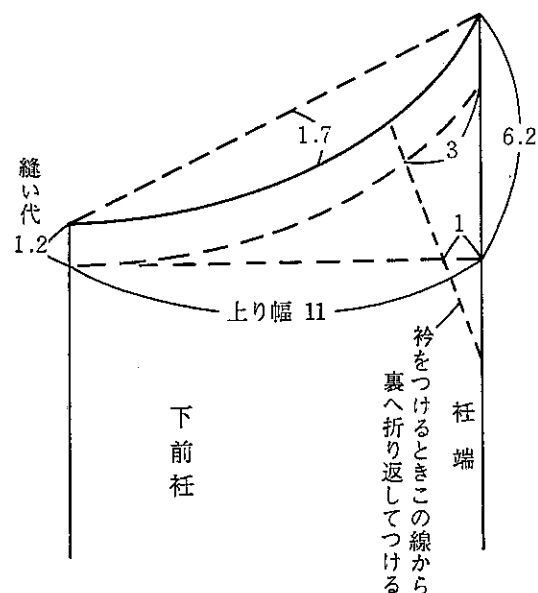
●前後の脇を合わせて四つ縫いをし、縫い目は割る。この際、格袋を下げて、一針脇縫いと一緒に縫う。

●前身頃の衿つけ縫い代を表裏合わせてしつけ糸でとじる。

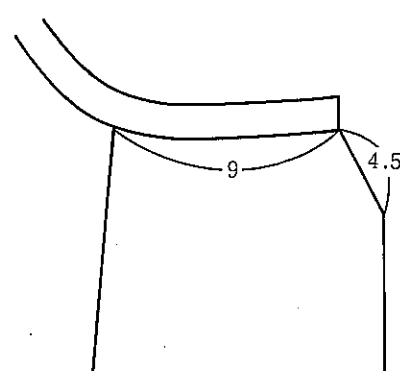
格袋の縫い方



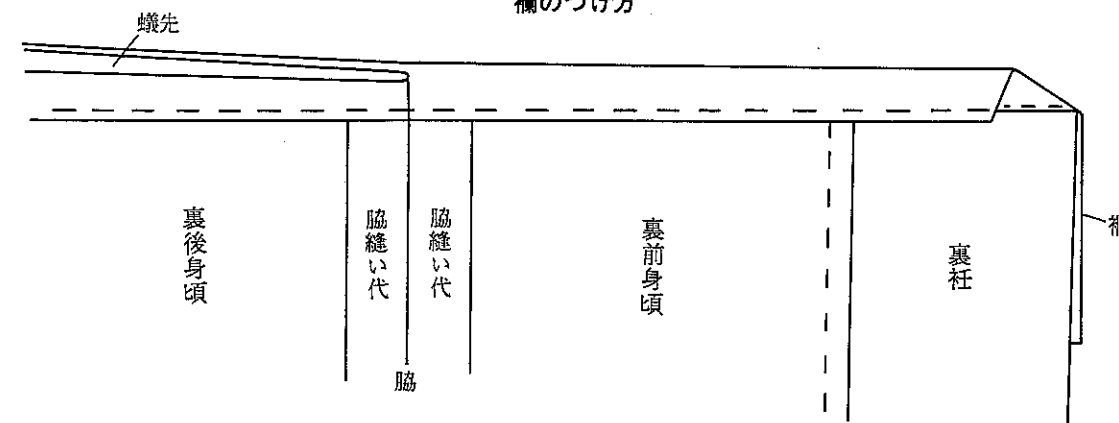
衿の衿割り



下前衿上部の折り方



襦のつけ方



衿つけ

●衿端を表は標より0.2cm先を、裏は標より0.2cm内側を表裏合わせて、針目0.5~0.6cmで縫い、きせをかけて衿裏へ折り返す。

●表へ返して、裏を0.2cm控えて、しつけをする。

●前身頃の衿つけの縫い代を表裏合わせてしつけ糸でとじる

●衿と前身頃を合わせて四つ縫いをし、きせをかけて縫い代は衿の方へ折る。

襦

●裾を表は標より0.2cm先を、裏は標から0.2cm内側を表裏縫い合わせ、きせをかけて縫い代は裏へ折り、表へ返して裏を0.2cm控える。

●両端を縫う。裾と同様、裏を0.2cm控える。

●上部は標どおり表裏を合わせてしつけ糸でとじる。

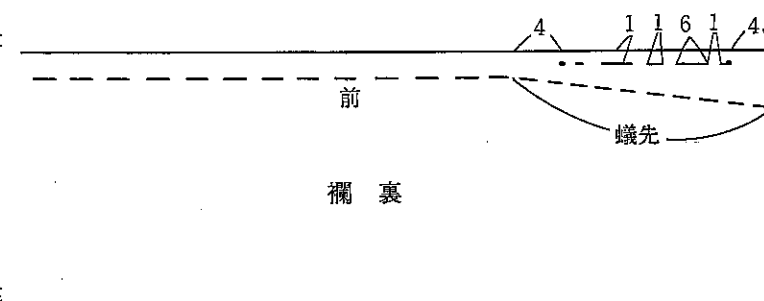
●襦のつけ方は、襦の上部の縫い代で身頃をはさみ、両端は図のように三角に折る。

●衿先の縫い代は、脇縫いのところから続けて折っておく。

●衿、前後の身頃を続けて襦を縫いつける。

●衿先は、別に標どおり斜めに縫う。縫い代の上部は図のように、二目落としてとめておく。

衿先の縫い方



袖つけ

●袖と身頃を標どおり合わせて四つ縫いをする。

●身頃の縫い代を山で2cm、袖つけ止まりで0.2cm出して斜めに折り、袖の方をみて二目落としての針目で押さえる。縫い目にきせをかけて袖の方へ折る。

●振りは標どおり裏へ折っておく。

衿

●芯型を図の寸法のように作る。

●衿芯は張子紙の薄いものを使用し、幅は衿幅の二倍の7cm、丈は71cmぐらいを四枚切る。

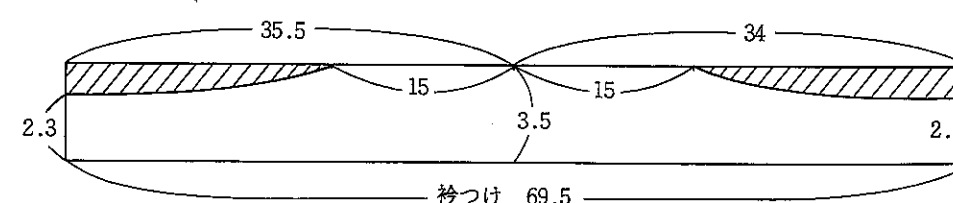
●四枚を薄のりで貼り合わせた後、幅を二つ折りにする。

●張子の上に西の内をはる。

●衿型に合わせて裁ち切る。

●丈75cm幅10cmに裁ってある衿布で芯を包み、表裏の衿つけおよび衿先の両端を、裏へ折り返して形を整える。

衿の芯型



衿つけ

●下前衿の上部を図の寸法のように、裏へ折り返してしつけ糸でとじる。

●表裏の衿で身頃の衿割りをはさみ、衿裏の方を見て、表裏一緒に衿つけをする。

●衿先のところを二回からげ、身頃および表衿と一緒に1cmすくって、裏衿の折り山より0.2cm内側に針を出し、この針目をくり返して衿をつける。

●裏衿の山はまつりぐけの針目のようになる。針目の間隔はおよそ1.5cmぐらいとする。

とんぼ頭と受緒

●表布で幅3cm、丈25cmの寸法で、二枚をすこし斜め布に裁ち切る。

●芯に紙捻りを入れる。紙捻りは西の内幅3.5cm、丈35

cmの寸法を二枚裁ち、20cmくらいの長さに捻る。

●表布の布端を0.5cmほど折って、紙捻りにのりをつけながら巻く。とんぼ頭および受緒はいずれも長さは同寸に作る。

●とんぼ頭は図のように、しゃか結びをして足の長さを3cmにする。

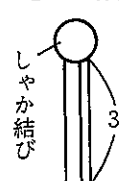
●受緒は図のように二本合わせて、捻りを強くかけて捻り合わせる。

●つけ方は、図の寸法の位置へ白色太口の絹糸でつける。

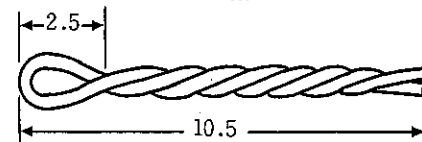
●とんぼ頭は上前衿先の表裏の間へ差し込み、その足のところを図の寸法のようにとめ、受緒は図の位置へとじつける。

●裏の針目は図のようにする。

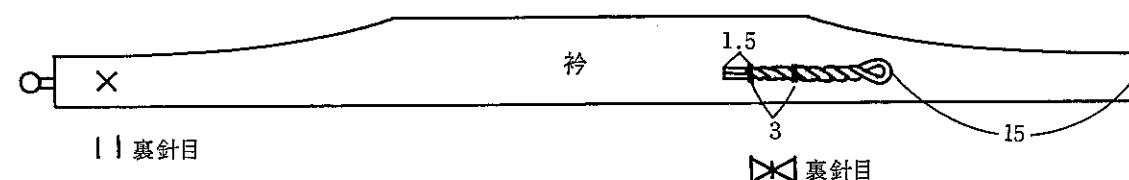
とんぼ頭



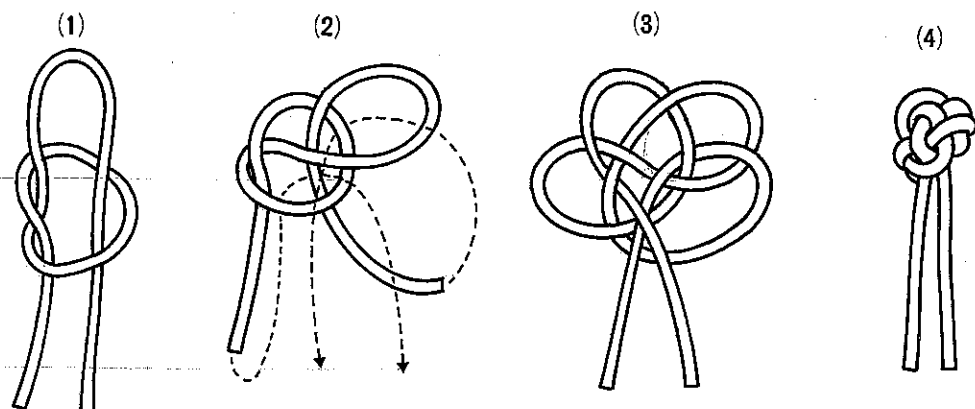
受緒



とんぼ頭と受緒のつけ方



釈迦結びの結び方

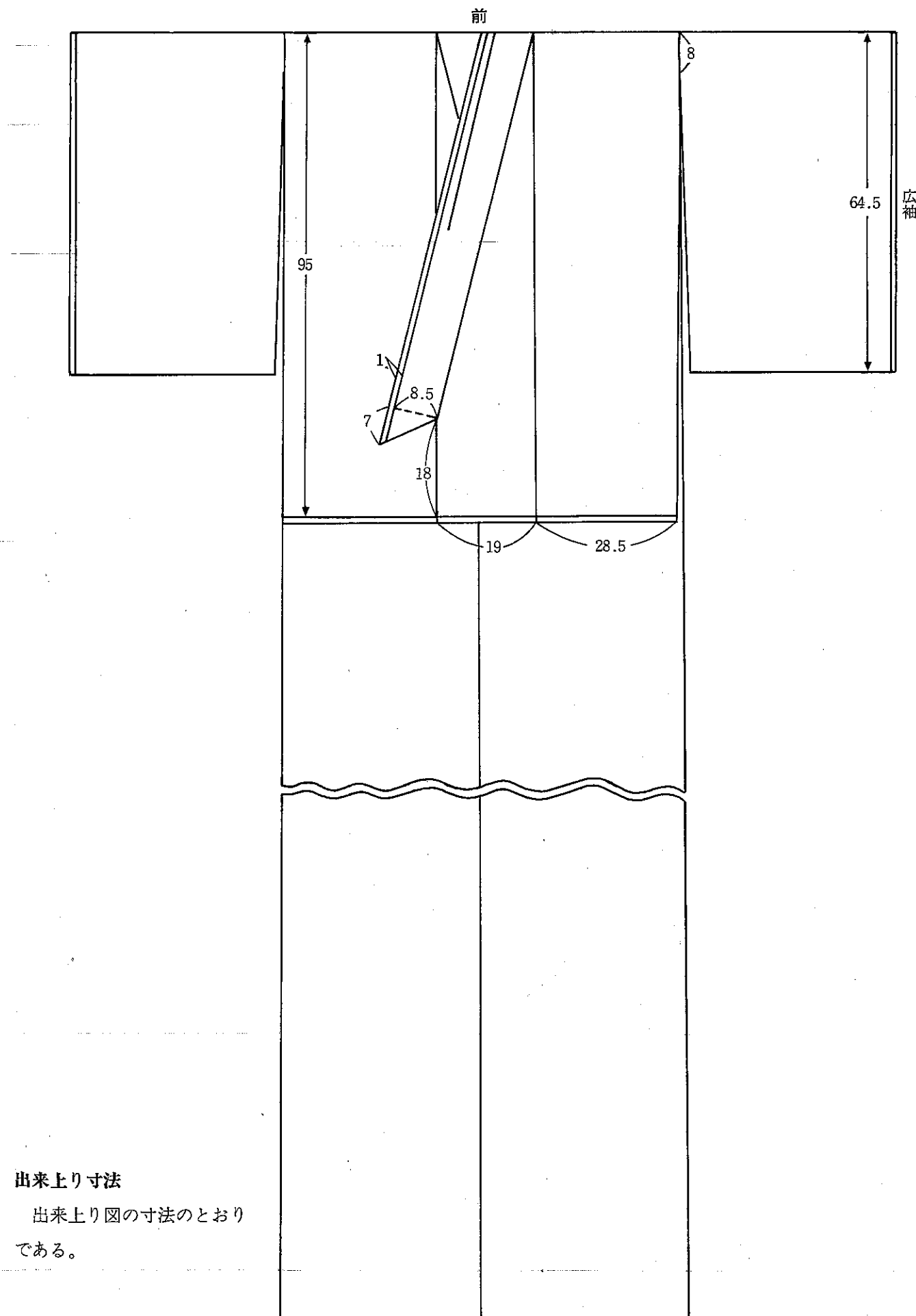


した 襲

って、袍の下から長く出して着用する。

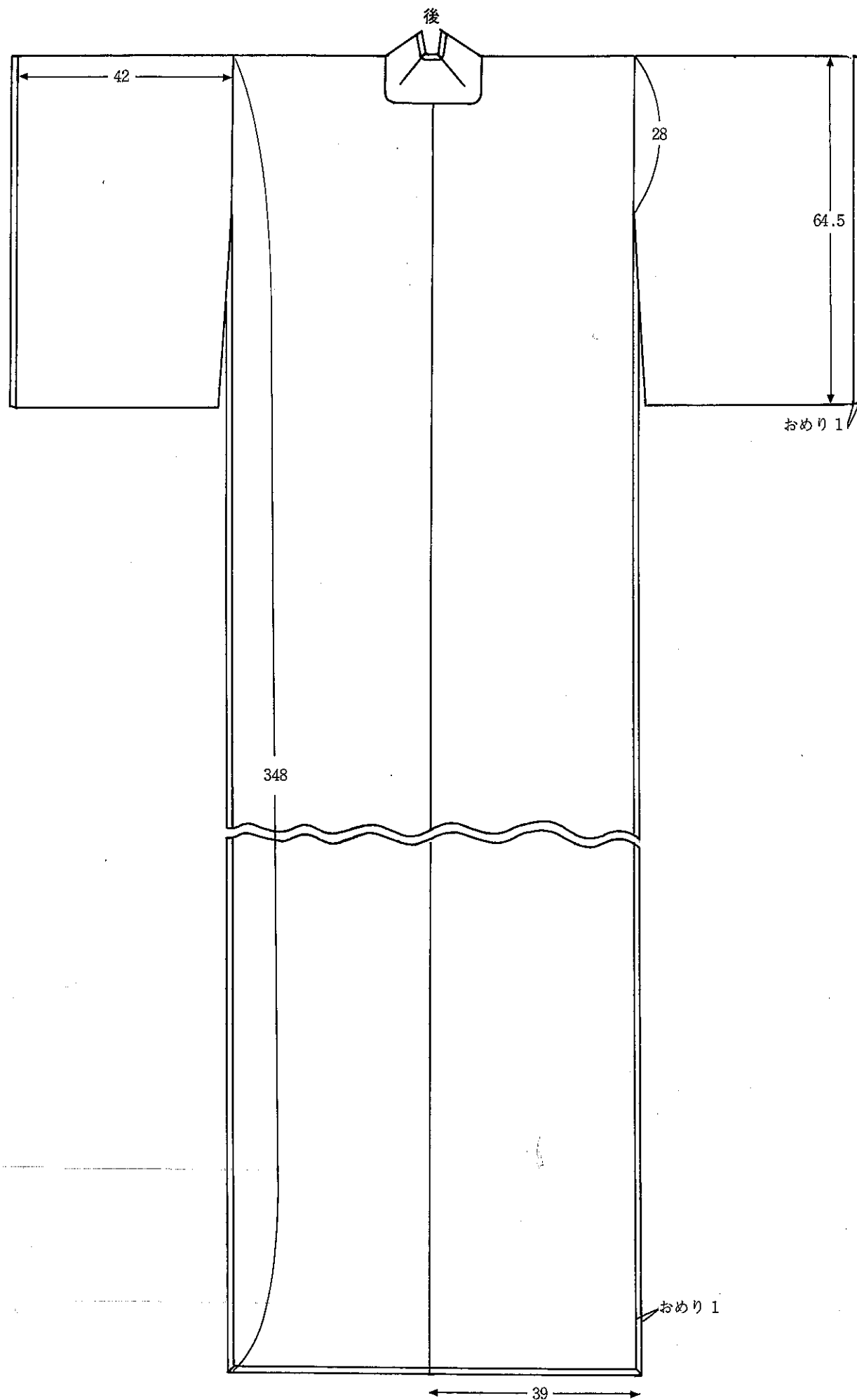
表裏には唐花文白綾を、裏には蘇芳地横遠菱文綾を使

袍の下に着用するもので、後身頃の裾をくきよと云用する。



出来上り寸法

出来上り図の寸法のとおりである。



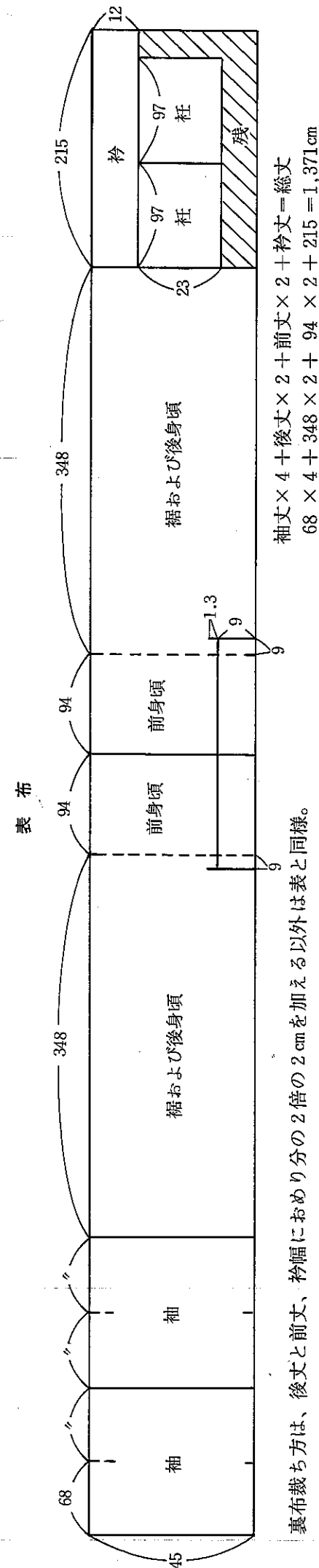
裁ち方

●表は45cm幅の布を1,371cm
使用し、裁ち方図のように
袖、前後の身頃（後身頃には
裾を続ける）、衿、衿を裁つ。

●裏布も表布と同様に裁つ
が、前後の身丈はおめり 1
cmの二倍長くし、衿幅はお
めりの二倍広く裁つ。

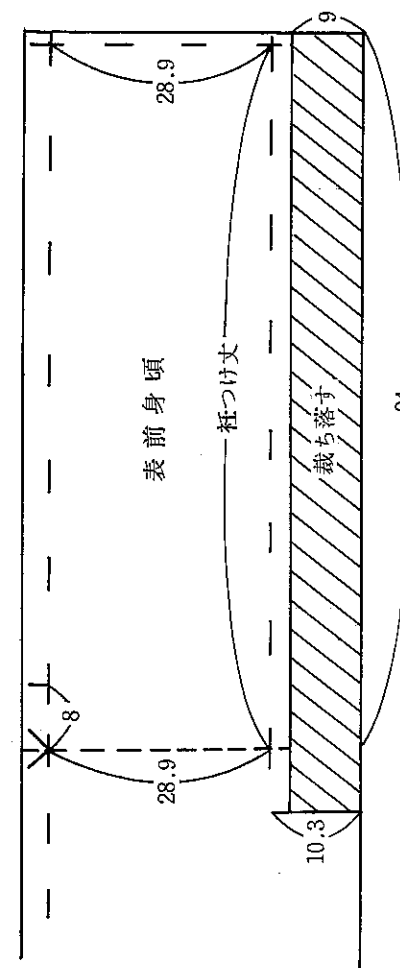
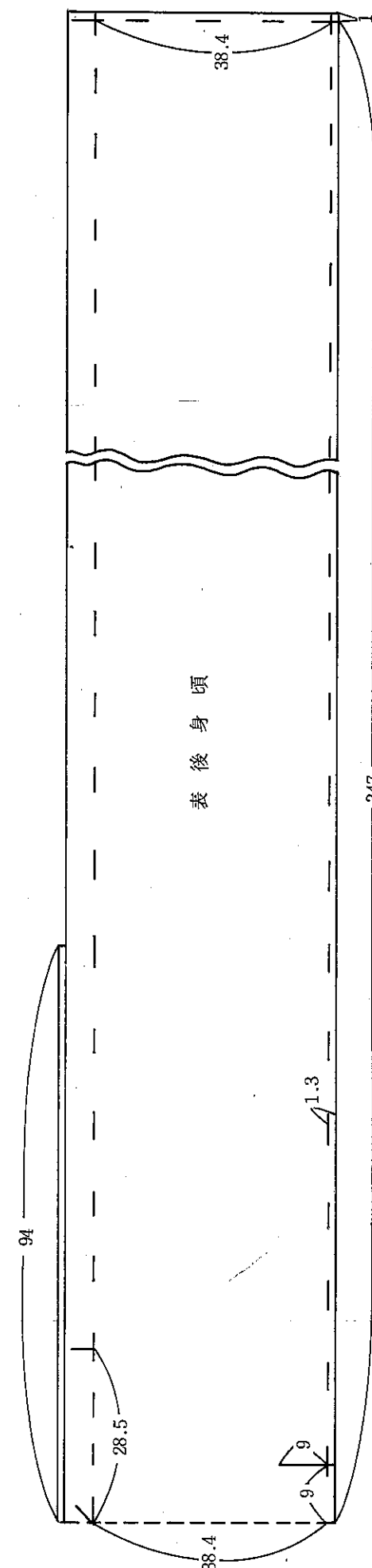
標つけ方

●表袖、裏袖、表身頃、裏
身頃、衿、衿の順にそれぞ
れ図のように標をつける。



袖丈 $\times 4 +$ 後丈 $\times 2 +$ 前丈 $\times 2 +$ 衿丈 $\times 2 =$ 総丈
 $68 \times 4 + 348 \times 2 + 94 \times 2 + 215 = 1,371\text{cm}$

裏布裁ち方は、後丈と前丈、衿幅におめり分の2倍の2cmを加える以外は表と同様。

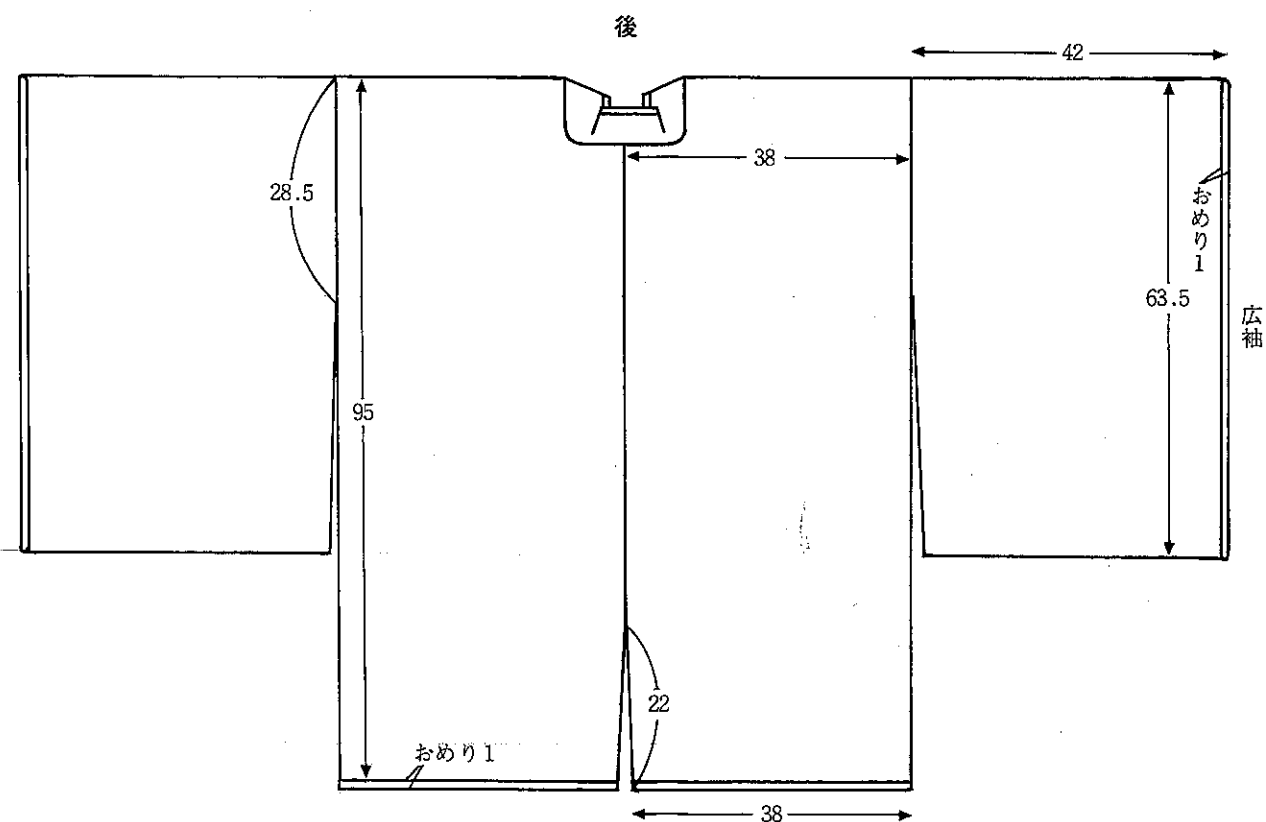
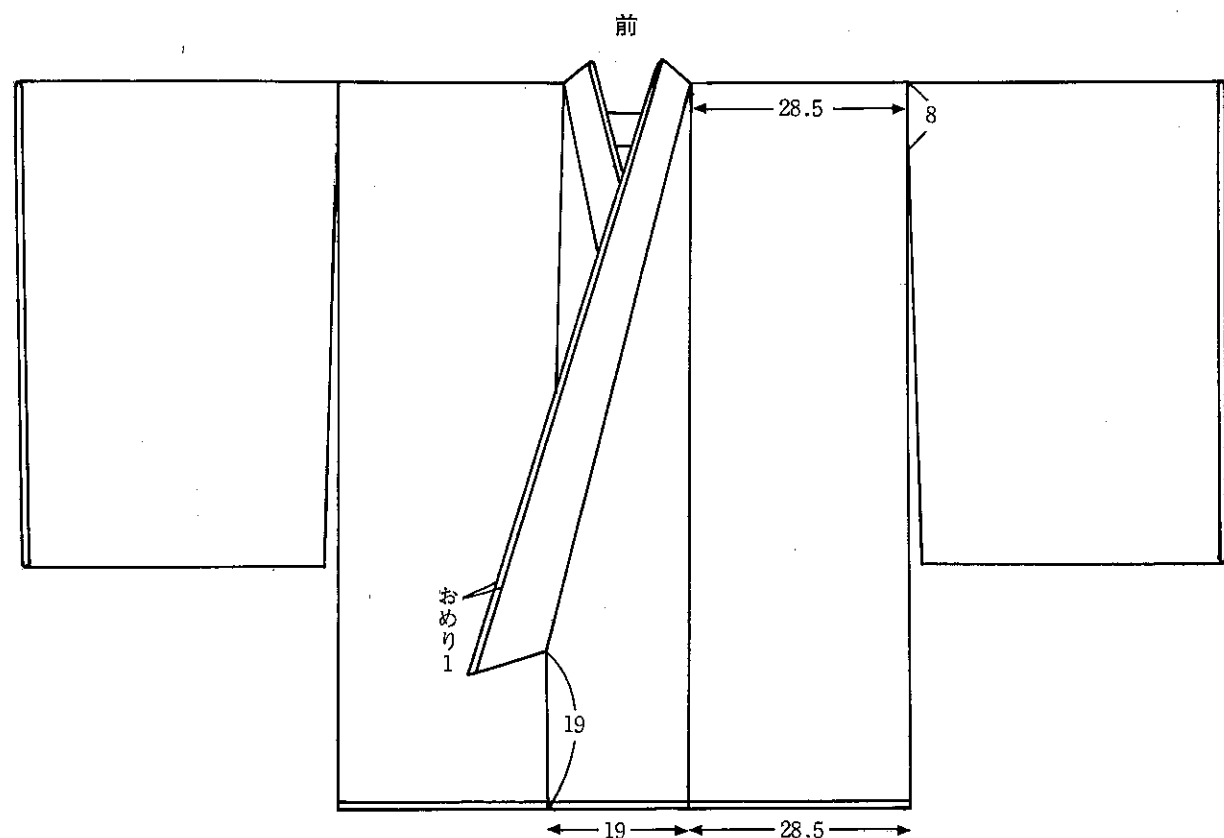


あこめ

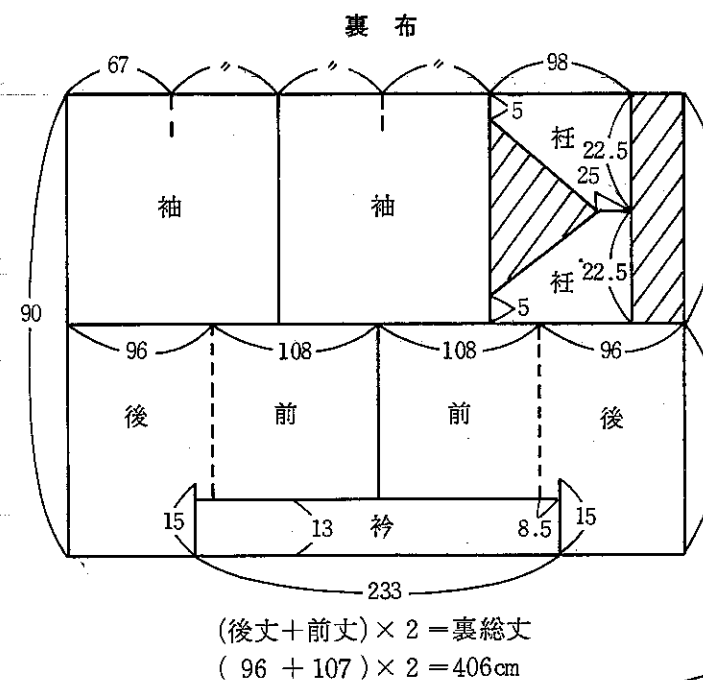
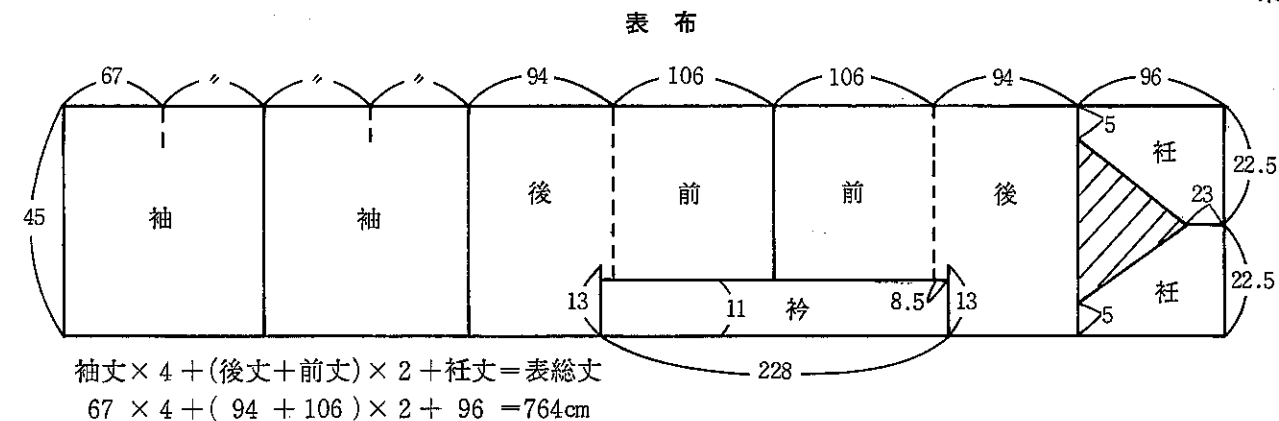
裃

裃は下襲の下、単衣の上に着用するもので、春および冬に用いる。

地質は、表は固地綾、裏は平絹、文様は小葵で、色は表裏ともに紅を使用するのが普通である。
これは表に紅地小葵文綾を、裏には紅平絹を使用する。



出来上り寸法 出来上り図の寸法のとおりである。

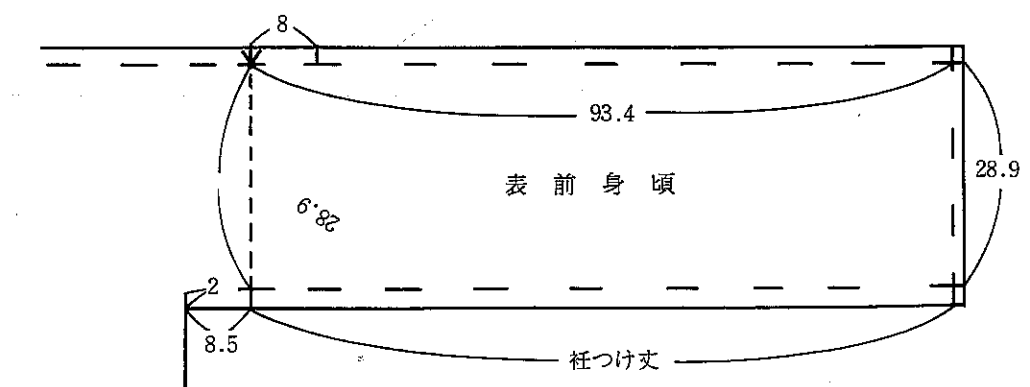
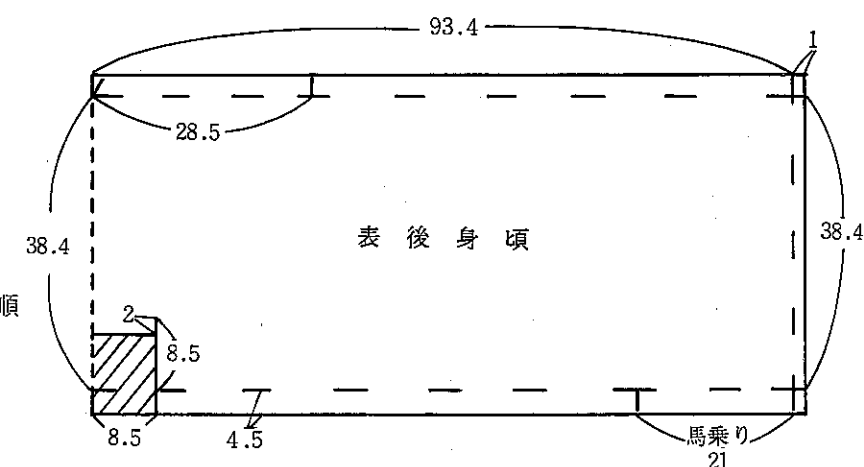


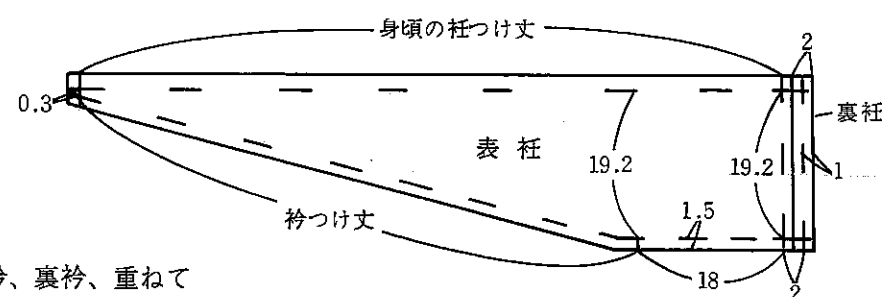
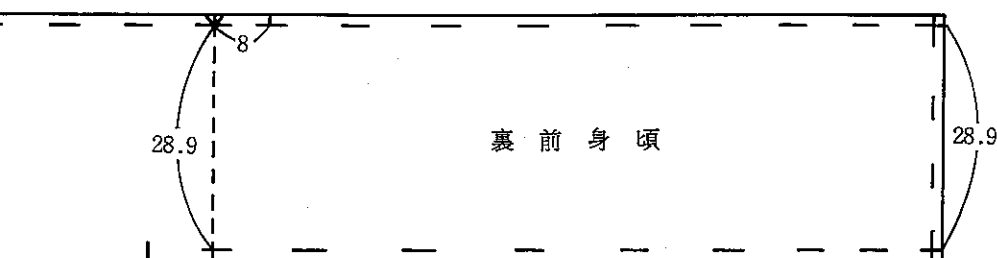
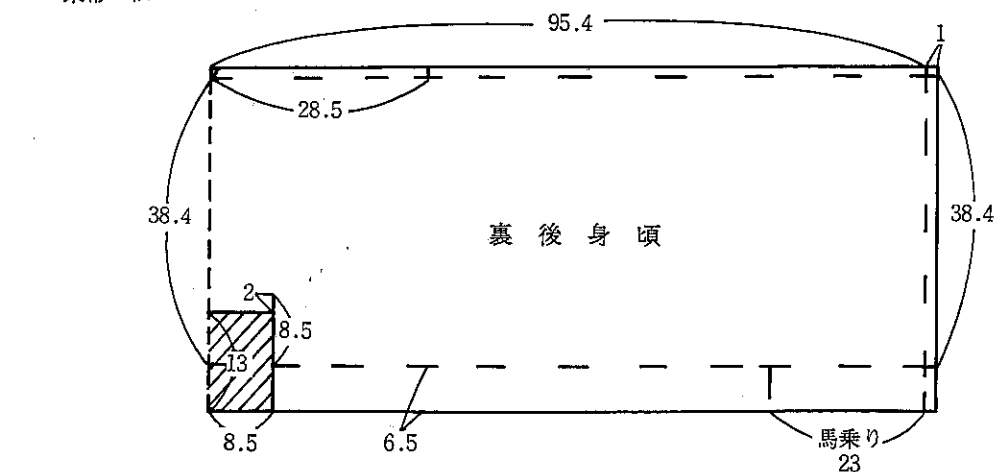
裁ち方

- 表布は45cm幅、764cm丈を使用して、裁ち方図のように袖、身頃、衿を裁つ。
- 裏布は90cm幅、406cm丈を使用して、表布と同様に裁つが、前後の身丈および衿幅は、おめり寸法の二倍長く裁つ。

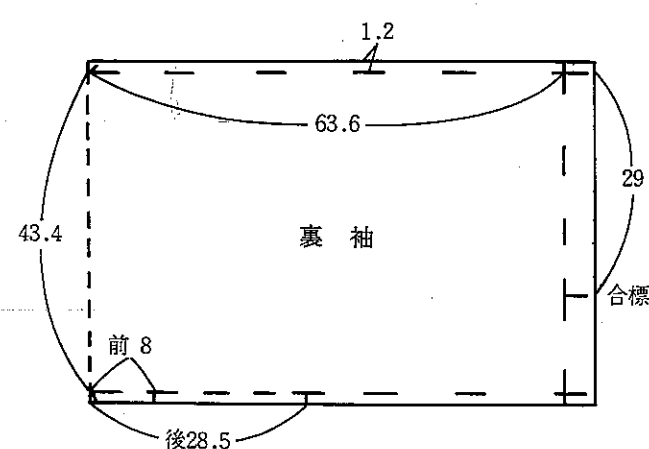
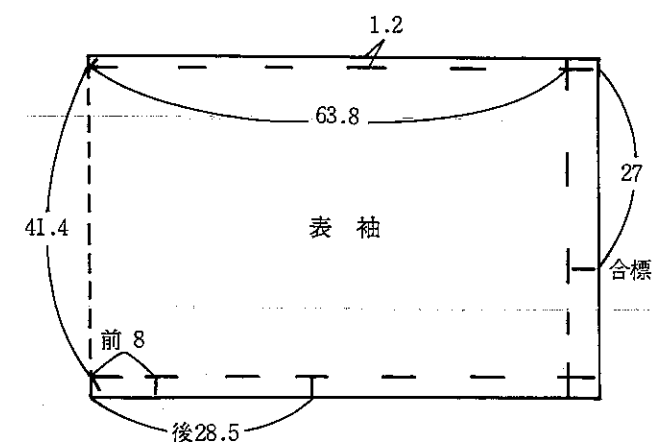
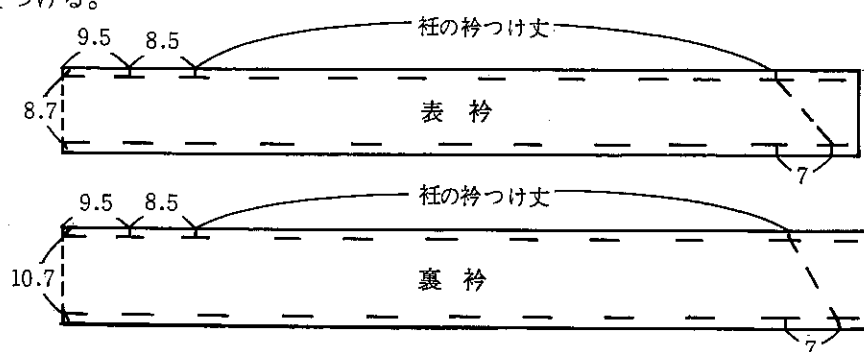
標つけ方

- 表袖、裏袖、表身頃、裏身頃、衿、衿の順に図のように標をつける。





表衿、裏衿、重ねて
標をつける。



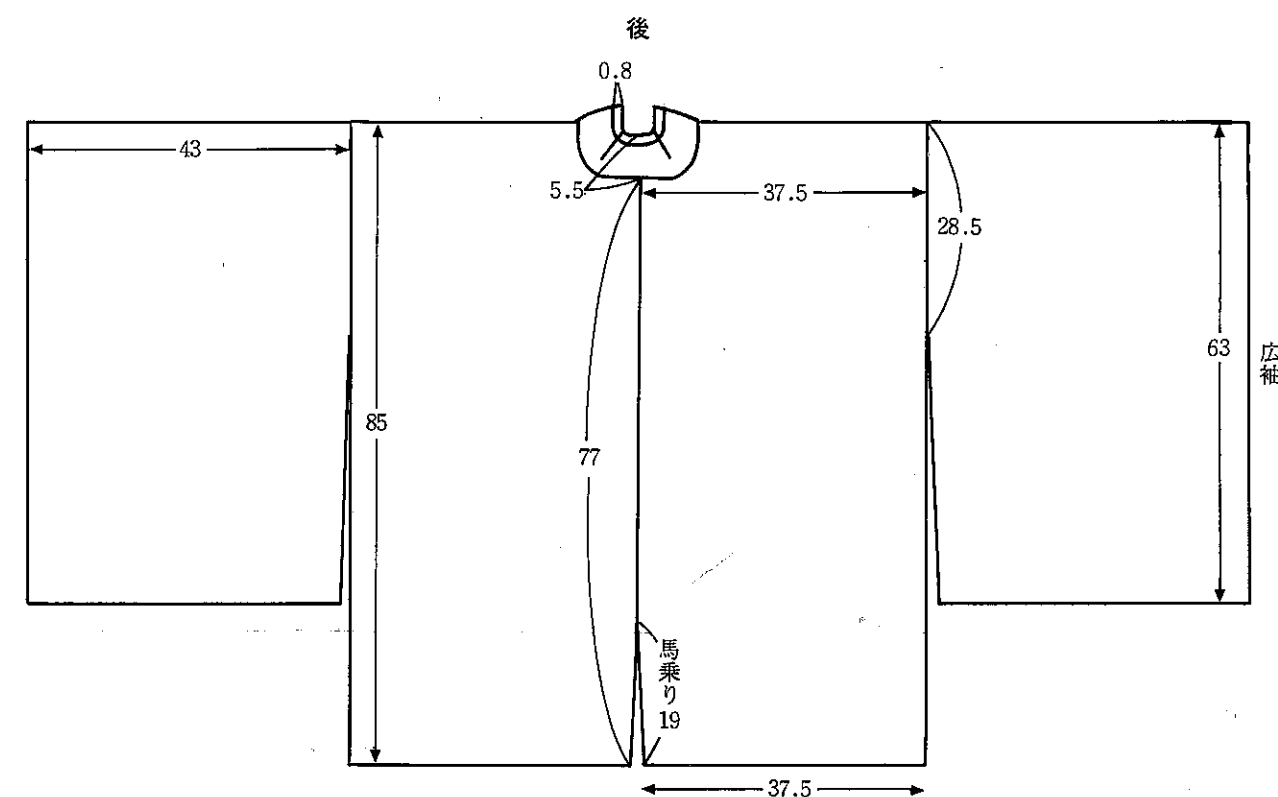
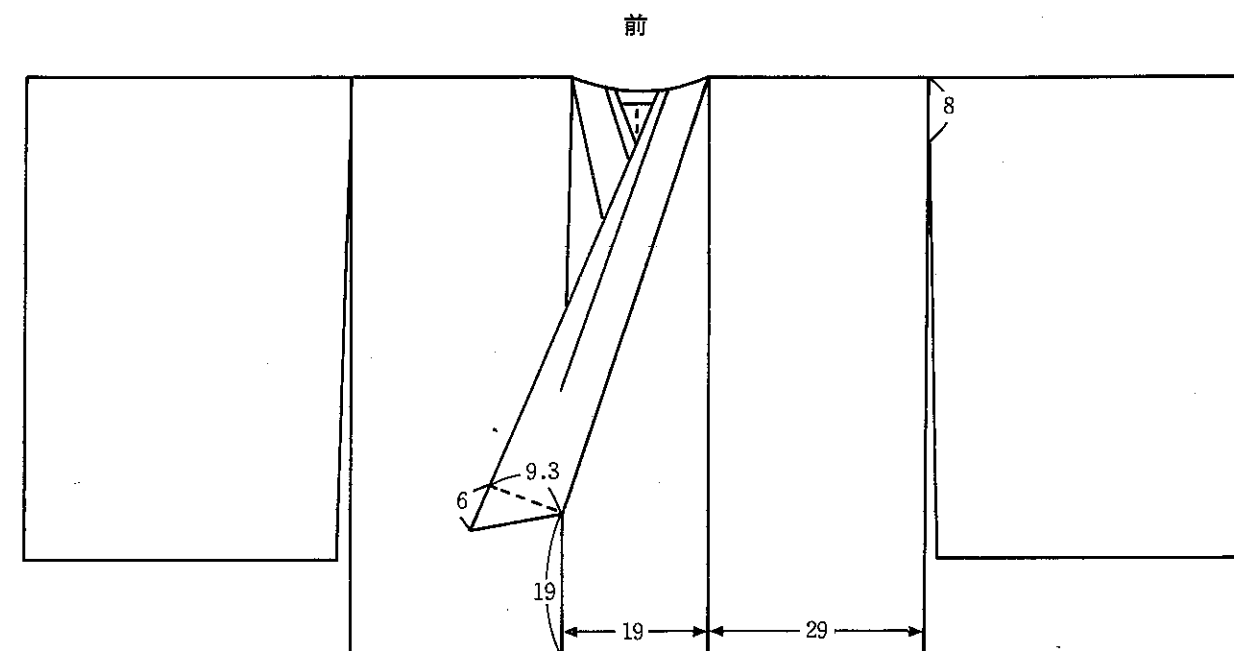
縫い方

- 縫い糸は白色S捻り絹糸とZ捻り絹糸を使用する。
- 針目は四つ縫いのところは0.7~0.8cm、そのほかは0.5~0.6cmで縫う。縫い目は0.2cmのきせをかける。
- 袖は、下襲の袖とすべて同じである。
- 後身頃は、まず裾を表裏縫い合わせ、おめり1cmを出す。
- 馬乗りを表裏縫い合わせ、表へ返して毛抜き合わせにする。
- 右後身頃の馬乗りから上の背縫い代を斜めに折り、左後身頃の表裏で右後身頃の表裏をはさみ、馬乗りの位置で留めをして、背を四つ縫いにする。縫い代の折りは左身頃へ折る。
- 留め方は、左表後身頃から針を出し、右後身頃の表裏を通し、左裏後身頃を縦にすくい、逆の順に戻して結ぶ。
- 両脇を表裏縫い合わせ、表へ返して毛抜き合わせにする。
- 前身頃および衽つけ、衿下、衿つけ、袖つけ、衿幅の折り方はすべて下襲と同様にする。

ひとえ 単

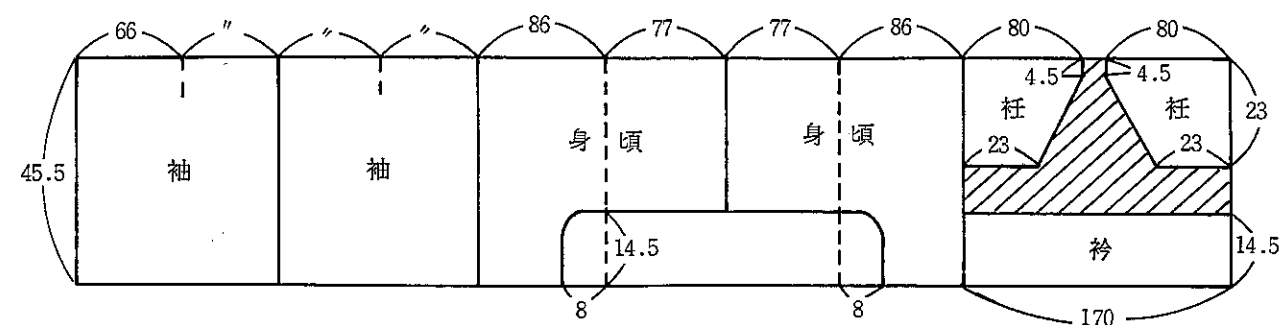
単はその名の示すように「単」、裏のない下着である。
単は相の下に着るもので、形は相とほぼ同形であるが、

袖口や裾など端がすべてひねり仕立てになっている。
地質は固地綾^{かたぢあや}を使用し、文様は緯縹菱^{よこしげひし}、色目は紅が普通である。
裂地は紅地縹菱文綾を使用する。



出来上り寸法

出来上り図の寸法のとおりである。



$$\text{袖丈} \times 4 + (\text{後丈} + \text{前丈}) \times 2 + \text{衿丈} \times 2 = \text{総丈}$$

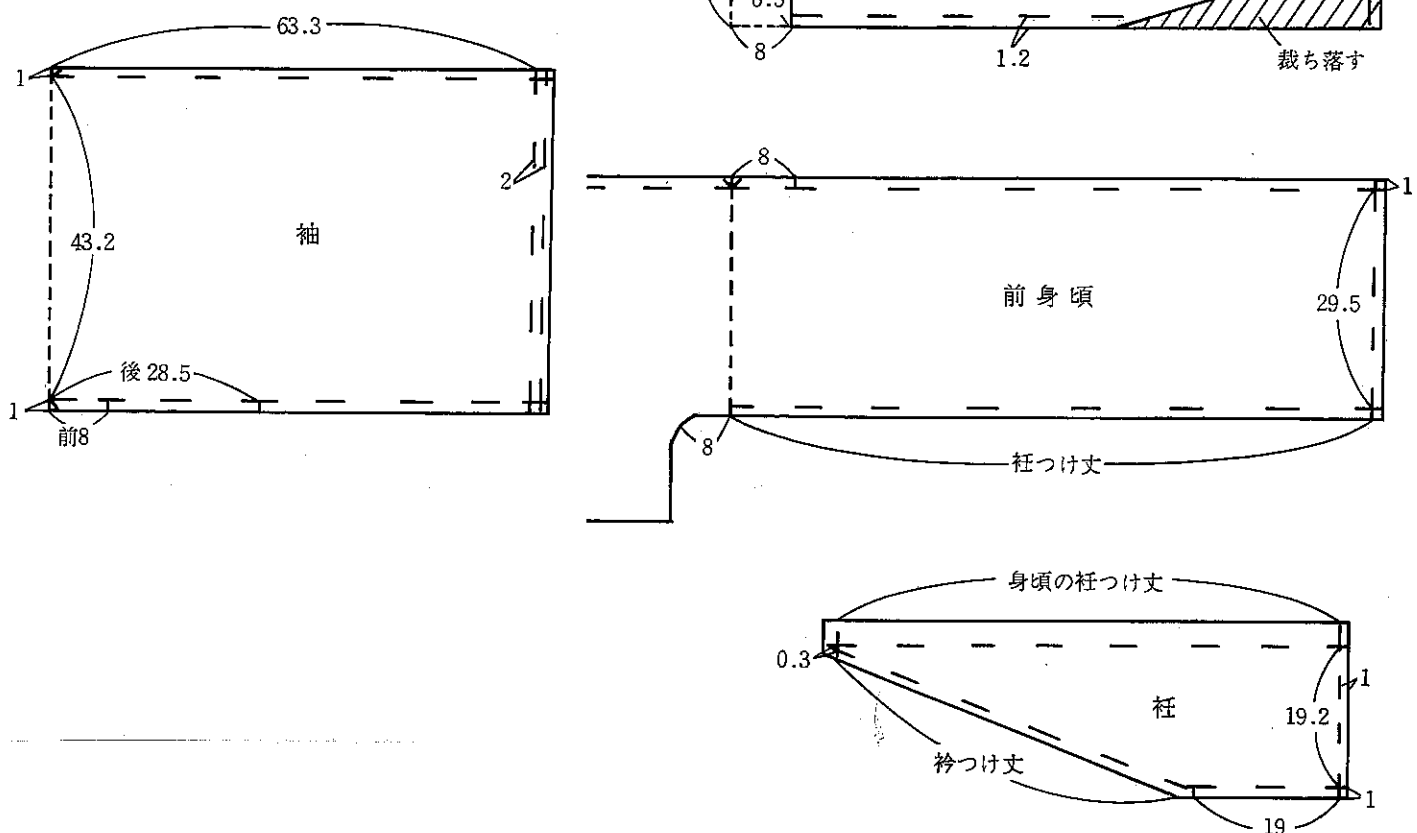
$$66 \times 4 + (86 + 77) \times 2 + 85 \times 2 = 760\text{cm}$$

裁ち方

- 45.5cm幅の布を760cm使用して、裁ち方図のように袖、身頃、衿、衿を裁つ。

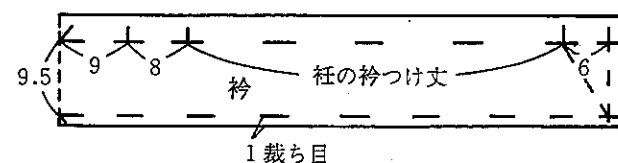
標つけ方

- 袖、身頃、衿、衿の順に図のように標をつける。

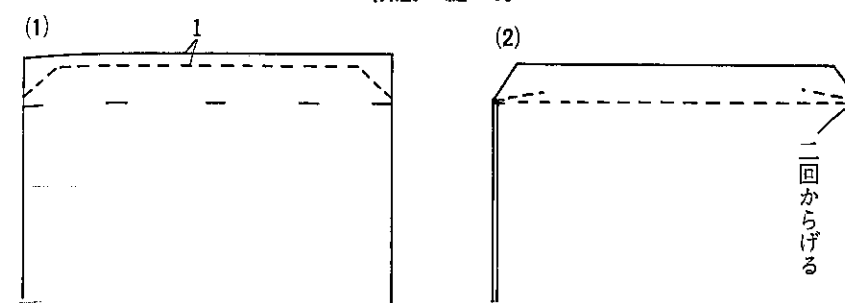


縫い方

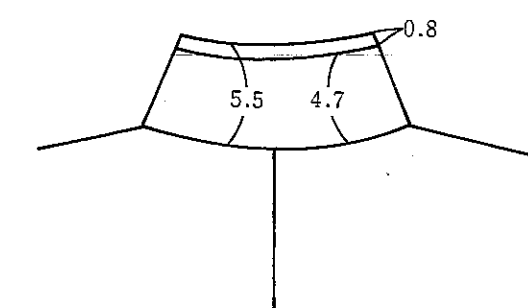
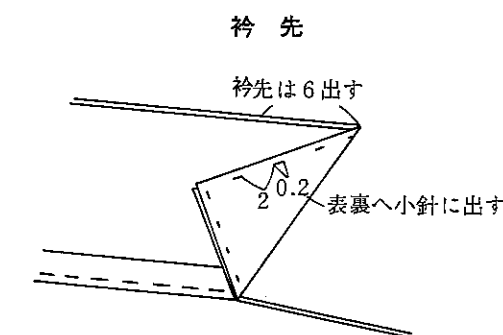
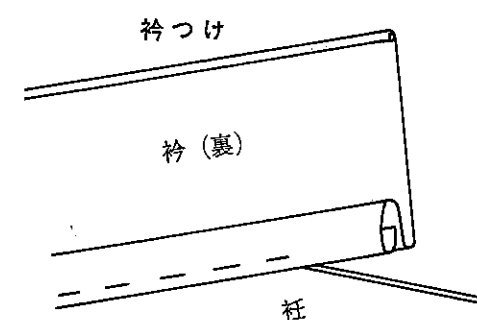
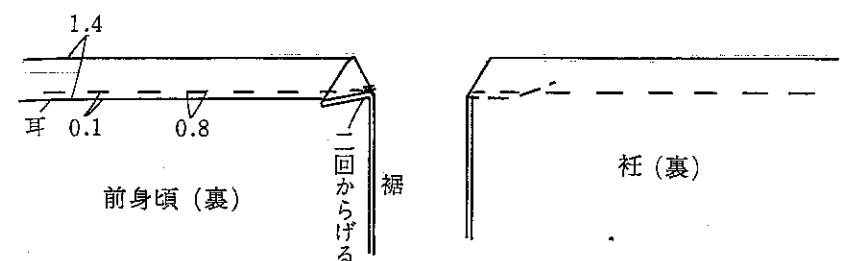
- 縫い糸は赤色S撚り絹糸を使用する。
- 0.8cmの針目で縫う。縫い代には0.2cmのきせをかける。
- 袖口、振り、脇、馬乗り、裾、衿裾、衿下、衿幅の縫



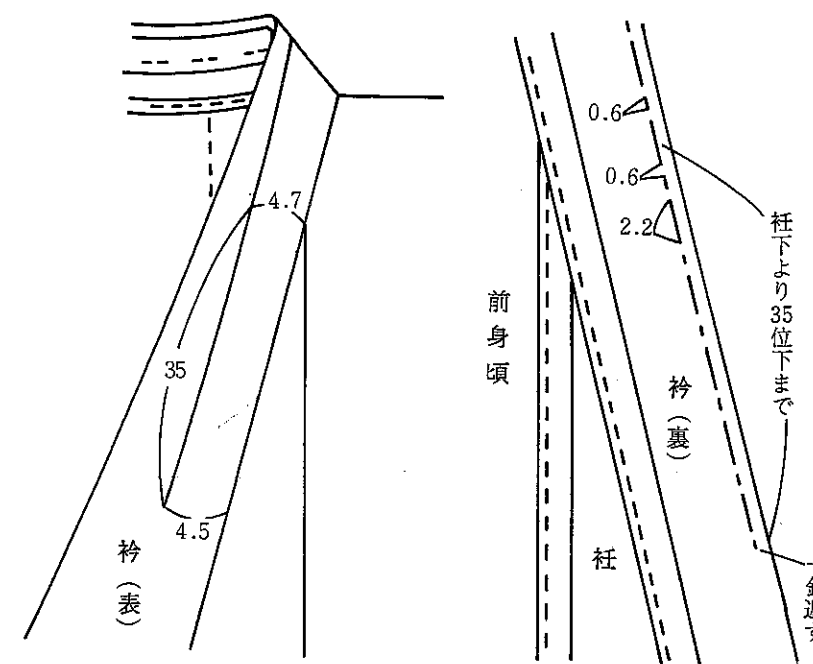
袖底の縫い方



衿のつけ方



衿のとじ方



い代に薄のりをつけて、ひねりをする。

(ひねりとは布はしを細く巻き込むこと)

- 袖は袖底を袋縫いにする。
- 一度縫いは図のように表より縫い、二度縫いは標どおり縫う。始めと終りは二回からげて二針返す。
- 後身頃の背を袋縫いにし、縫い代は左身頃に返す。
- 馬乗りのところは二回からげて留める。
- 衿つけは、衿と前身頃を標どおりに合わせ、衿の縫い代で身頃をくるんで、図のように衿つけをする。
- 裾口は二回からげて縫う。
- 縫い代は衿の方へ折る。

- 衿つけは、衿と身頃を標どおりに合わせ、衿の縫い代で身頃の縫い代をくるんで、図のように縫い、縫い代は衿の方へ折る。
- 衿先は図のように折って、表裏へ小針に出して留める。
- 袖つけは、袖と身頃を合わせてつける。始め、終りとも二回からげ、二針ほど返し、縫い代は袖に折り返す。
- 衿幅は図の寸法のように折りを付け、二目落としで留める。

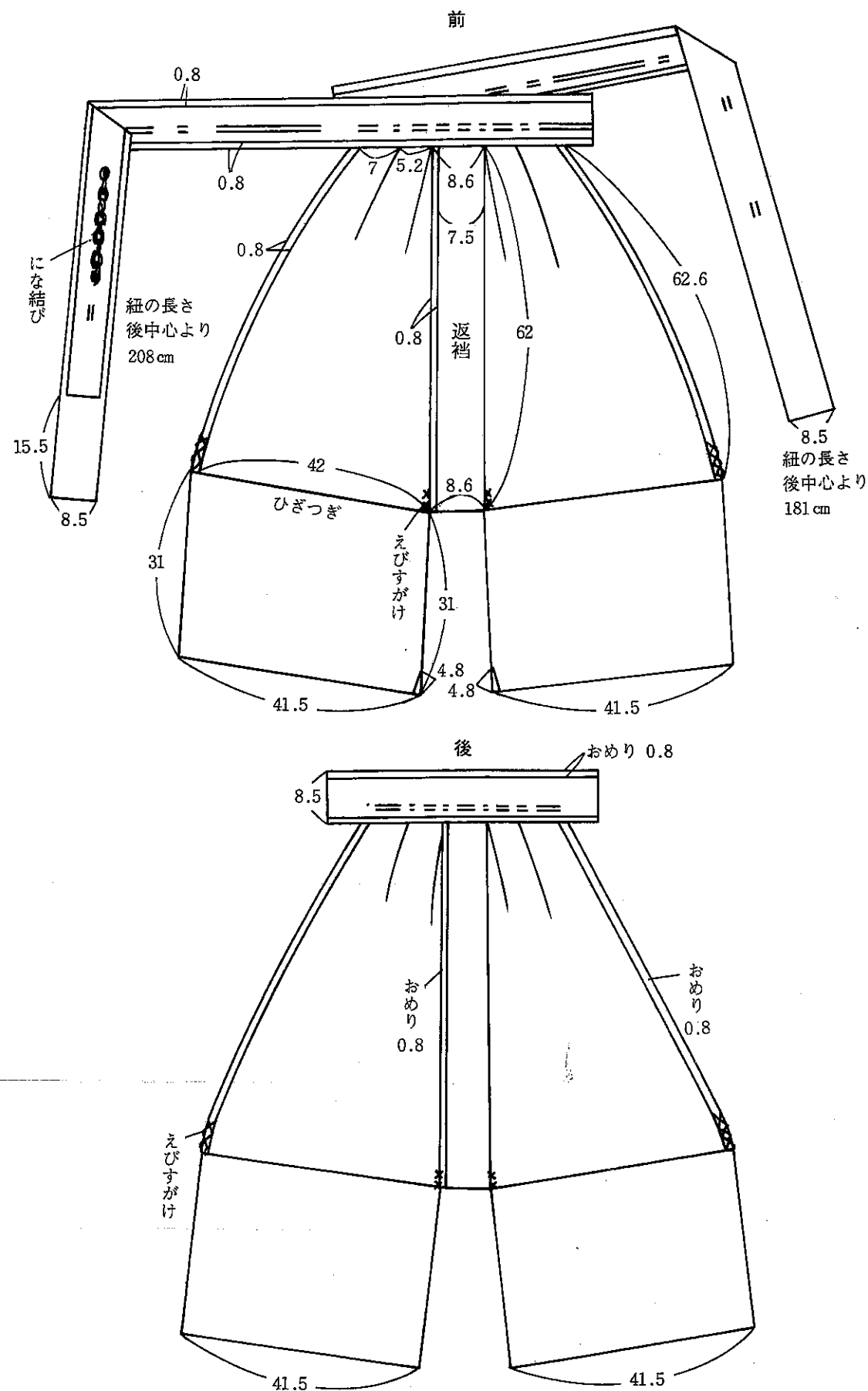
表袴

表袴は大口の上に着用する袴で、裾から約31cmのところに膝継があり、裾、紐、裆におめりを出すのが特徴であり、表は白、裏には紅を使用するものである。

この表袴は表裂には白の窠に霞文浮織物を、裏裂には紅地平絹を使用する。

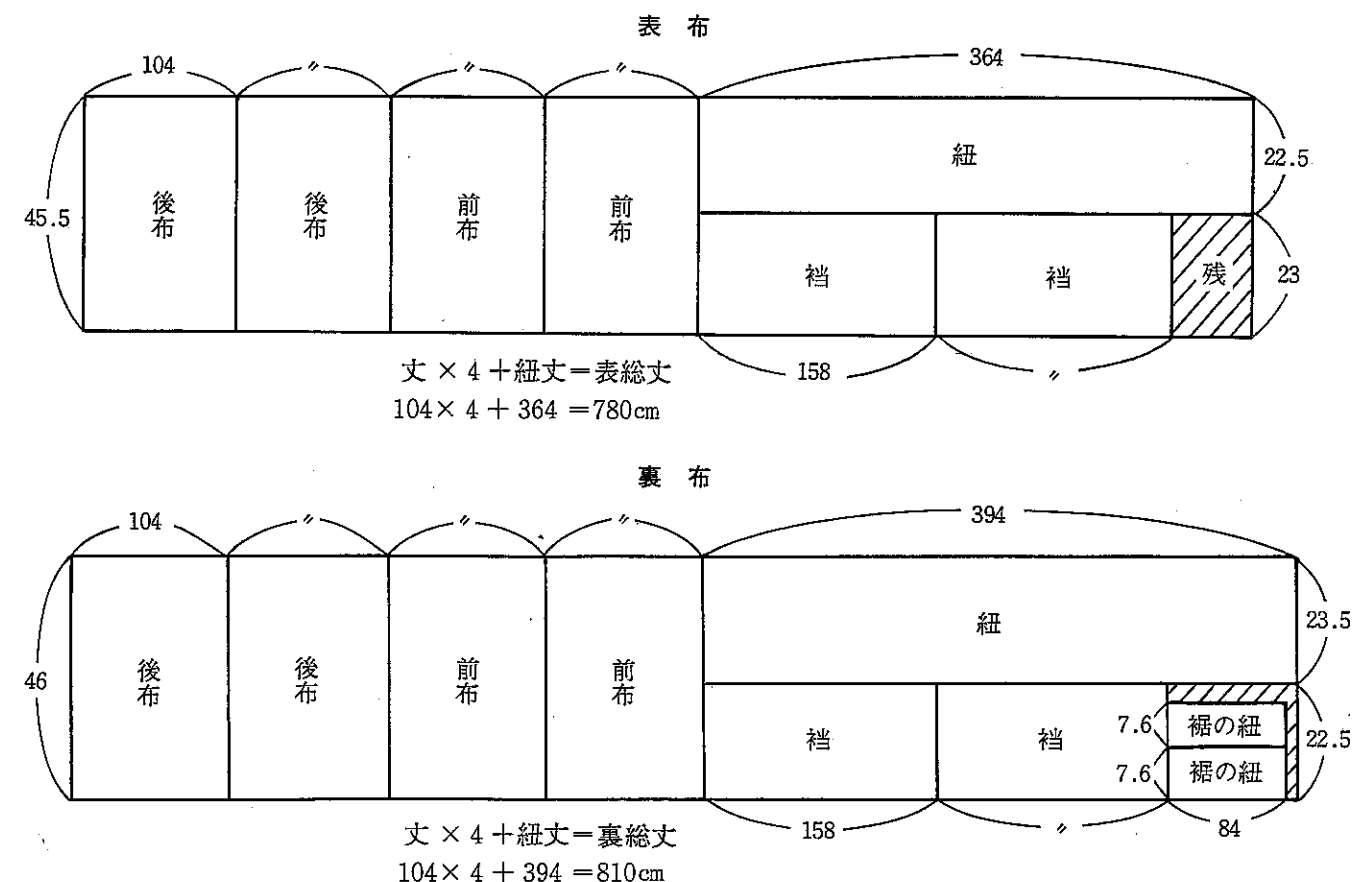
出来上り寸法

出来上り図に示す寸法のとおりである。



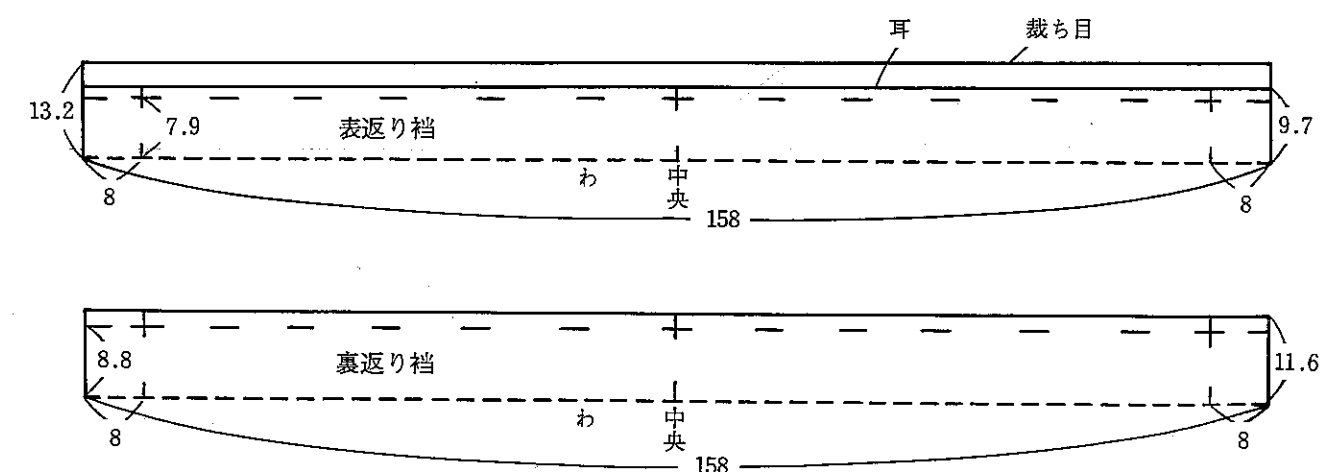
裁ち方

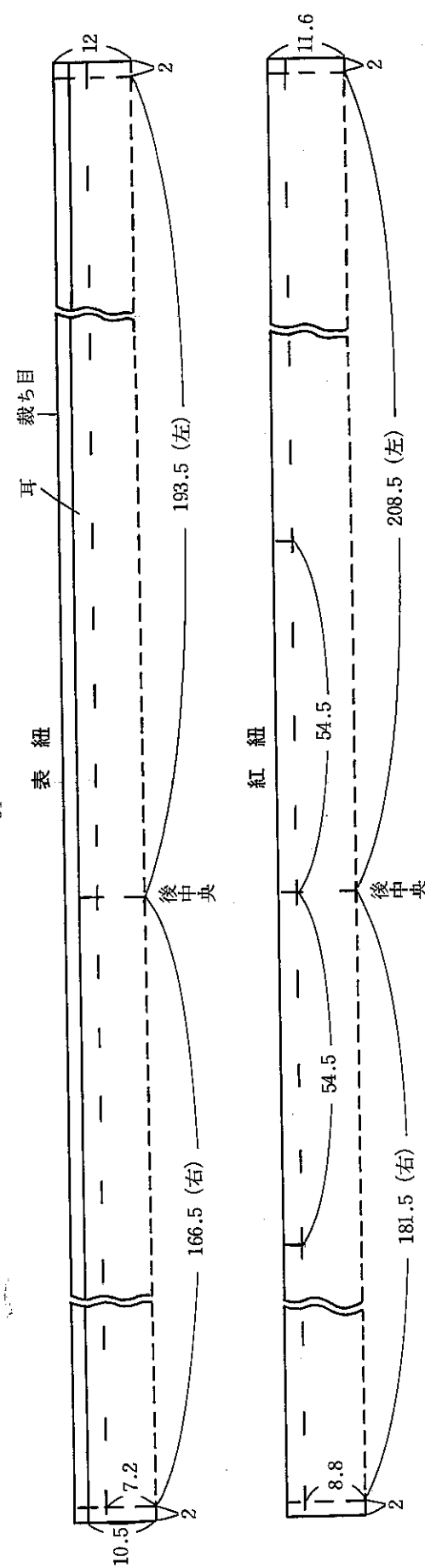
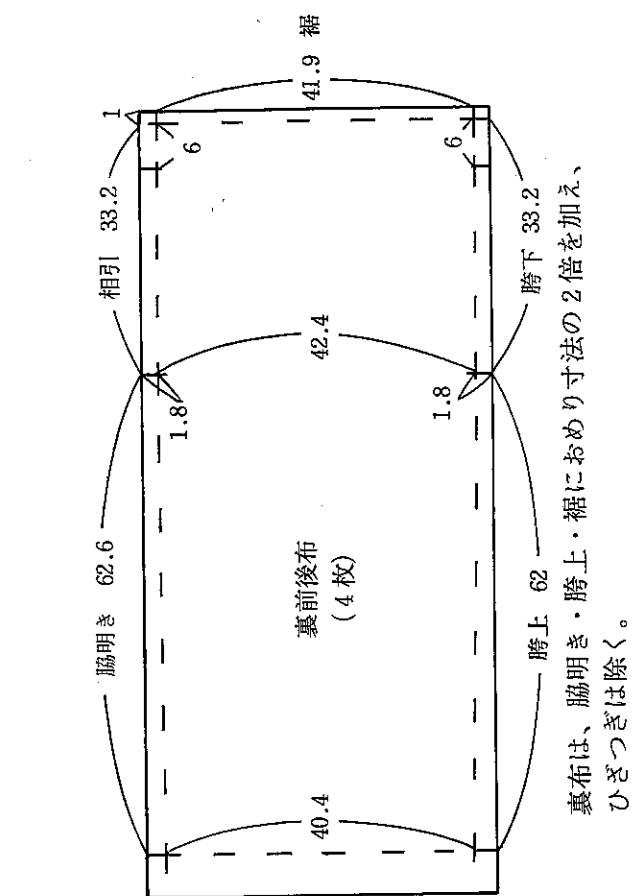
●表布および裏布を、後布二枚、前布二枚、紐一枚、裆二枚、それぞれ図のように裁つ。



標つけ方

- 表後布を図の寸法に標をつける。
- 表前布も表後布と同様に標をつける。
- 裏布は前後の布を四枚重ね、表布の寸法に脇明き、胯上、裾におめり寸法の二倍を加え、ひざつぎは除き、図の寸法のように標をつける。
- 表返り裆、裏返り裆、表紐、裏紐、裾の紐の順に標をつける。



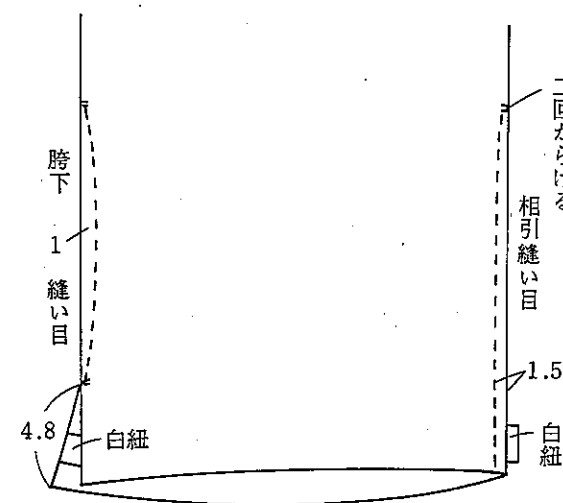


縫い方

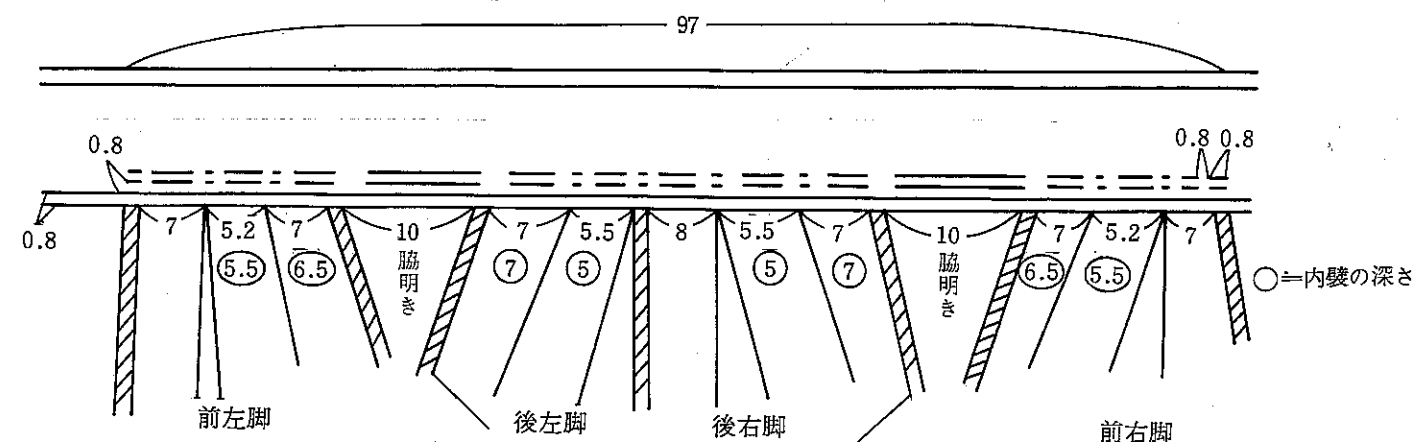
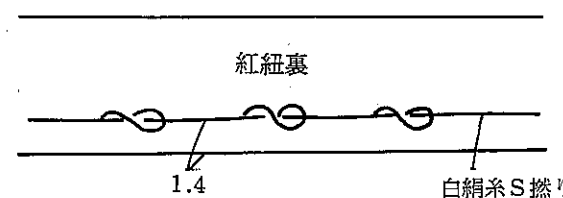
- 縫い糸は白色S撚り絹糸とZ撚り絹糸(穴糸)を使用する。
- 0.7~0.8cmの針目で縫い、縫い目には0.2cmのきせをかける。
- 表布の前後左右のひざつぎを標どおりつまんで縫い、つまみ代は裾の方へ折る。
- 前後左右の裾口を表裏標どおり縫い合わせ、きせをかけて表布の方へ折り、表へ返して裏布をおめり1cm出す。
- 脇明きおよび相引の表裏を標どおり縫い合わせる。この時、裾口は4.8cm縫い残す。
- 縫い代はきせをかけて表布へ折り、表へ返して相引のところは毛抜き合わせにする。
- 脇明きは裏布を相引止まりのところで毛抜き合わせにし、それより18cm上のところで、おめり分の0.8cmを出し、上部まで0.8cmふかせる。
- 脇上および脇下も、脇明きおよび相引と同様にする。
- 脇下のそれぞれ表裏を縫い合わせたものの前後を合わせて縫う。裾口4.8cmは縫い残す。折りは前布の方へ返す。
- 裾に白の紐をわを上に、縫い目を下にして、相引の方から通し一廻りしてまた相引に出して、裾幅と平らにしてとじる。
- 相引はそれぞれ表裏を縫い合わせてあるが、この前後の布を合わせて縫う。図のように裾口と相引止めのところは二回からげて、返し針をして留める。このとき紐も一緒に縫う。
- 脇下は、紐通しの上から脇上標まで図のように縫う。縫い始めと終りは、二回からげて留める。
- 返り裾は表裾、紅の裾とも幅をくける。

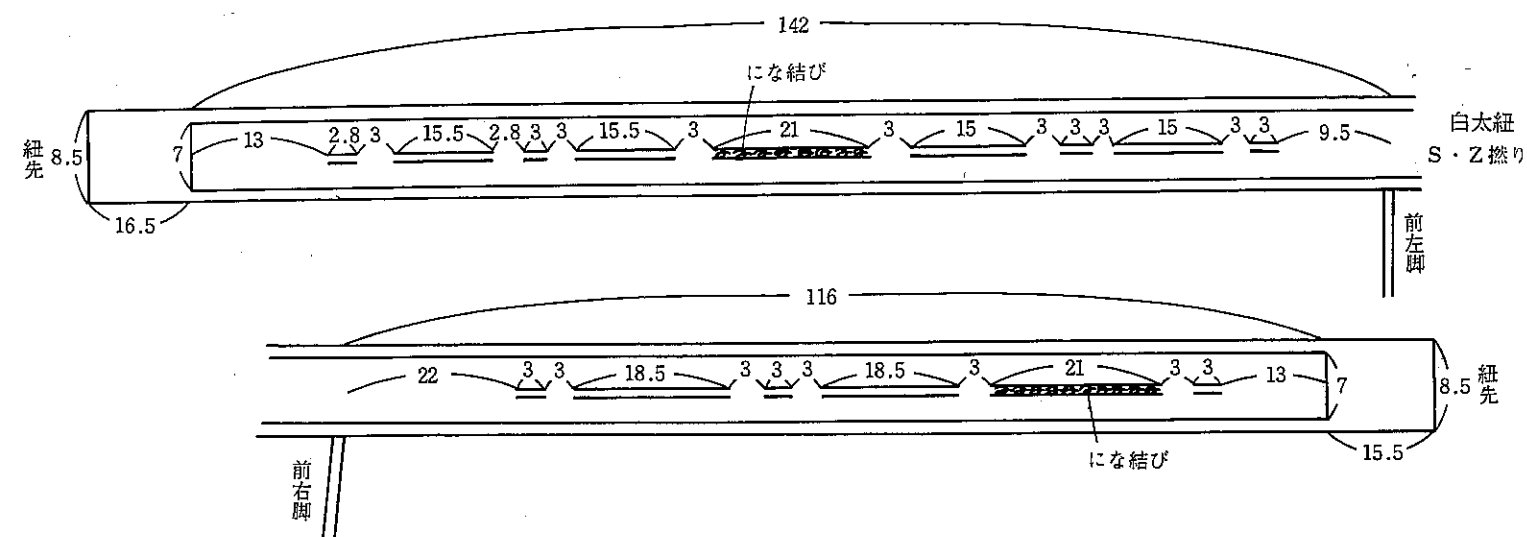
- 紅の裾の上に表裾を中央にのせ、しつけ糸でとじる。
- 左脚、右脚の前後とも、上から22cm(紐つけ縫い代8cmおよび紐つけ下14cm)に、返り裾を縫いつけ、縫い代は裾の方へ返す。
- 前布には裾の輪を縫いつけ、後布には裾の縫い目を縫いつける。
- 右脚前布につけた裾は左脚の後布につき、左脚前布につけた裾は右脚の後布につく。
- 後は、右脚を上、左脚を下にして、裾の幅だけ重ねてとじつける。
- 前は離しておく。

脇上および相引の縫い方



縫の取り方・上刺しの刺し方





- 襷を図のように寄せてとじる。
- 紐は表紐、紅の紐を別々にくける。
- 紅の紐は、後中央の標より左右に54.5cmずつつけ残す。
- 紅の紐の中央と表紐の中央を合わせてしつけをかけ、図のように紐の上刺しをする。
- 紐の上刺しの紐は太口白色S撚り、Z撚り二本で、右側は95cm、左側は120cm使用する。図の中の太いところは、**にな結び**とする。

- 腰の芯紙は西の内を使用し、図の寸法に折る。
- 紅の紐のくけ残したところに芯紙をとりつけて、表側紐つけの縫い代のところに当てる。腰幅およびそれぞれの襷山の位置を紐に標をつける。
- 表紐と紅の紐の表側とを一緒にして、紐だけで図のように上刺しをする。
- 腰の上刺しの紐は、細口白色S撚り、Z撚り二本で110cmを使用する。

- 上刺しは図のように、大針、小針ですが、小針を身の襷山に出すようにする。

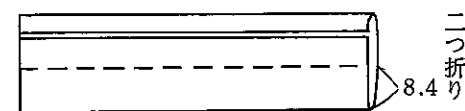
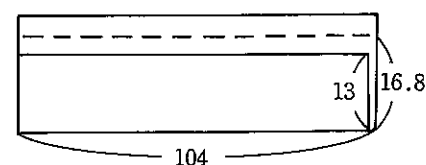
- 紅の紐で身をはさみ、先の上刺しのところ(襷山)を白色Z撚り一本で、返し針で一針ずつ出して、図のように糸をかけながらつける。

- 脇明きのところと、胯上のところに9.4cmほど、図のようにえびすがけ(千鳥がけ)をする。

- 紐は太口白色Z撚り、S撚り二本です。

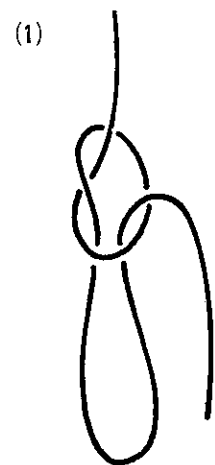
- 紐丈は80cm使用する。

腰の芯紙(西の内)二枚半

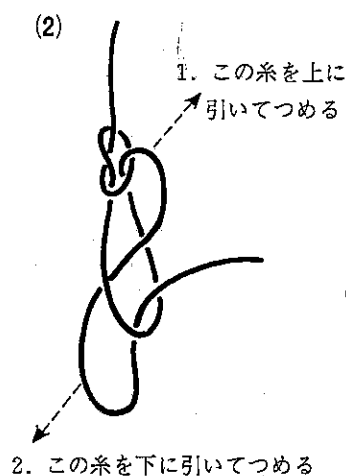


紅の紐の表側紐つけのところに当てる

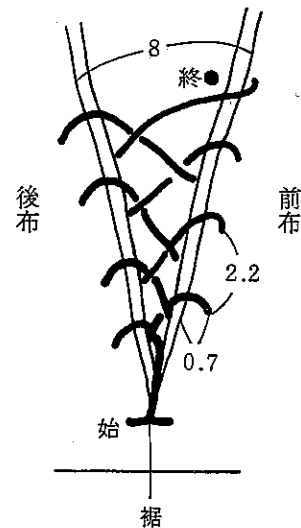
にな結び(鎖編の裏側)



(2)



えびすがけの仕方



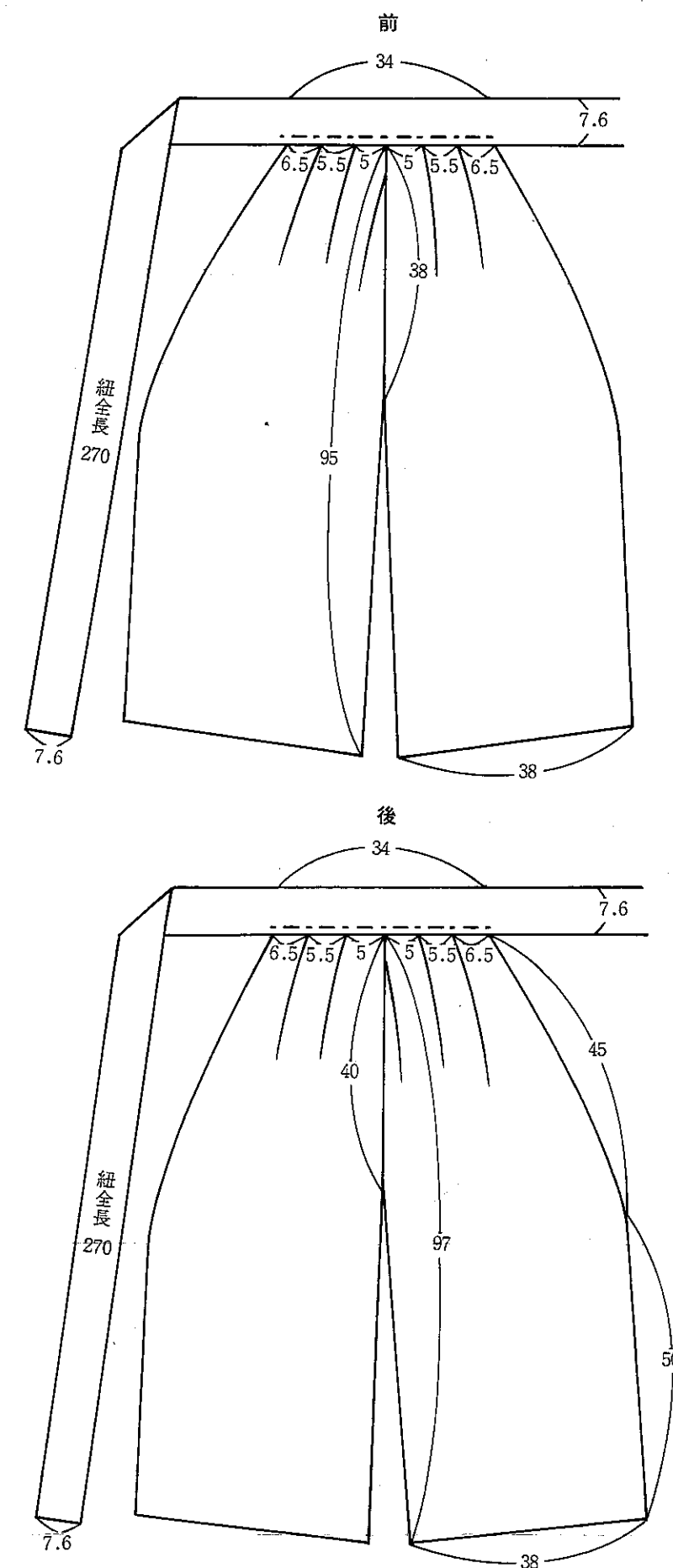
相引と内胯の上9.4 cmのところに、えびすがけをする。
白中紐Z、S撚り、長さ80cm。

(3)

(2)をくり返す。

大口

大口袴とも云い、表袴の下に着用するもので表布および裏布とも、紅平絹を使用して引き返し仕立てにする。腰の上刺しの紐は、白色Z撚り、S撚りのものを使用する。

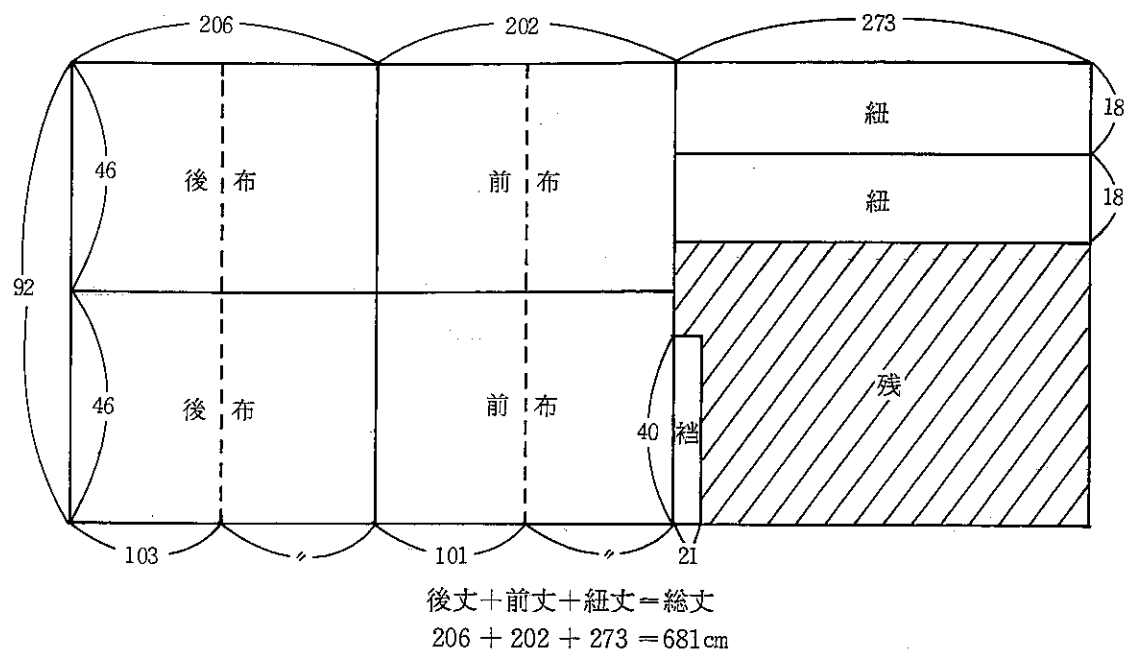


出来上り寸法

出来上り図の寸法のとおりである。

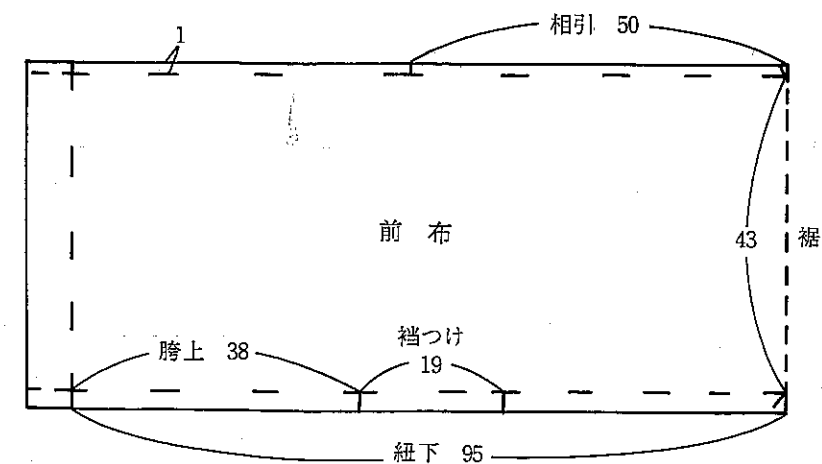
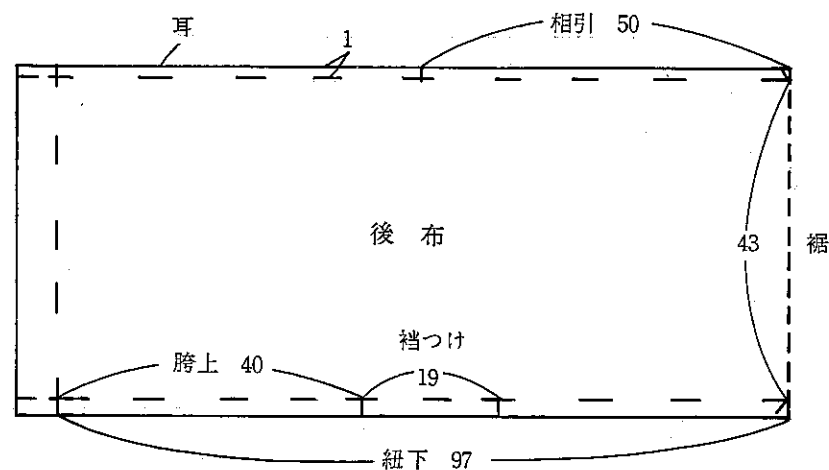
裁ち方

- 表裏同じ布を使用するので、図のように丈は表裏続けて裁つ。
- 紐および襷を、図の寸法どおりに裁ち切る。

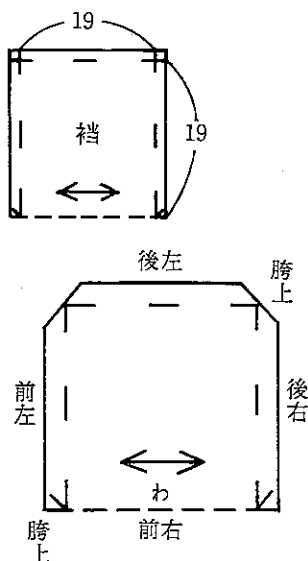


標つけ方

- 後布をそれぞれ中表にして、紐下、相引、股上、襷つけ寸法を標し、中央の縫い代および相引縫い代の1cmを標する。裾はわのままとする。
- 前布は、紐下および胯上寸法が異なるほかは、すべて後布と同じに標する。
- 襷は図のように標する。
- 紐は幅7.6cmの二倍15.2cmに標し、紐先は1cmを標し、中央の標をつけておく。



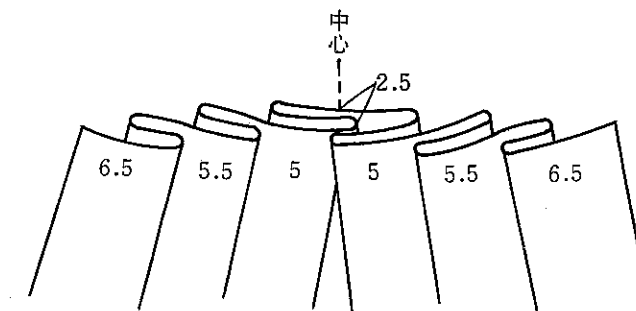
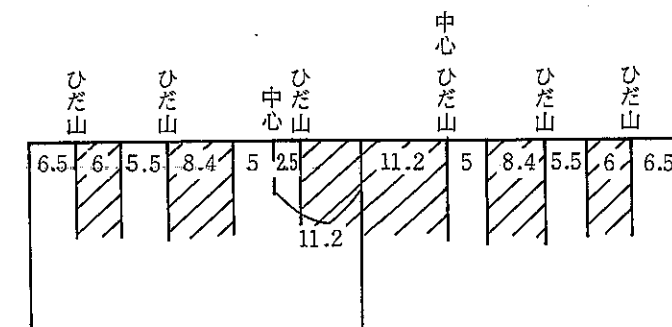
襷隅の折り方



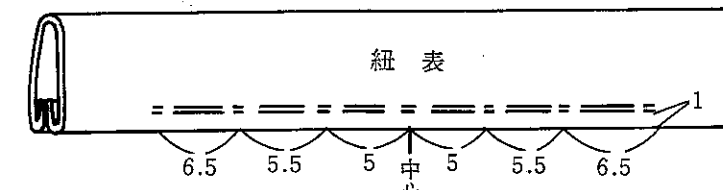
縫い方

- 縫い糸は四つ縫いの部分は赤色Z撚り絹糸を用い、そのほかはS撚り絹縫糸を用いる。
- 脇明きを縫う。このとき裏を0.2cm控える。
- 後布の相引の表裏をしつけでおさえる。
- 相引は前布の表裏で後布をはさんで四つ縫いにして、縫い代の折りは表の前布に返す。
- 襷つけは、左脚の表裏で後襷をはさんで四つ縫いにする。このとき襷の角を図のように内側に折り込み、三方をしつけでおさえ襷つけをする。
- 左脚の前襷つけを、後襷つけと同様に四つ縫いをする。
- 左脚の胯上を、前後とも表裏をしつけでおさえる。
- 左脚の後胯下の表裏をしつけでおさえる。
- 左脚前胯下の表裏の布で後胯下をはさみ、襷つけ留めをして、続きに四つ縫いをする。縫い代の折りは前に返す。
- 襷の留めは前の表から針を出し、後の表、襷の表裏、後の裏、前の裏を縦にすくい、逆の順に戻り、前の表で結ぶ。
- 右脚の後襷つけは、後布の表裏で襷をはさみ四つ縫いにする。
- 右脚の胯上の表裏で左脚の胯上をはさみ、襷つけ留めをしてから、胯上を四つ縫いにし、縫い代は右脚へ折る。
- 右脚の前襷は明き口にするため、前布の襷つけ寸法のところの表裏を縫い合わせる。
- 前胯上は、左脚を右脚の表裏ではさみ、また、右胯下は、後胯下を前胯下の表裏ではさみ、襷つけの上下に留めをして、それぞれ四つ縫いをする。縫い代は胯上では右脚へ、胯下では前へ返す。
- 襷の取り方は、紐つけの位置で図の寸法に標して襷を取り、襷山を返し針で押さえておく。
- 前後同様に襷を取る。
- 紐つけ
 - 紐の芯は晒木綿を使用し、幅は紐幅の二倍、丈は出来上り寸法に裁ち、紐に入れてくける。このとき中央を42cmくけ残しておく。
 - 中央には和紙を入れ、裏紐は除いて、表紐だけに上刺しをする。
 - 図の寸法の襷山の寸法位置を標して、S撚り、Z撚り

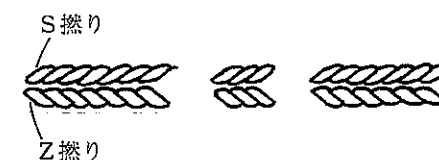
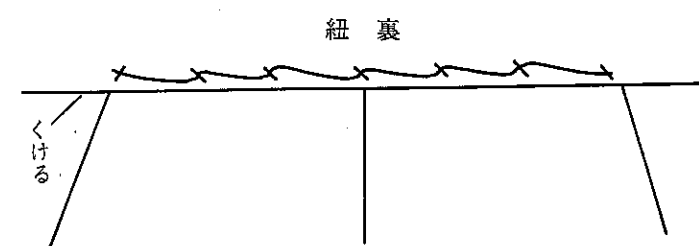
襷の取り方



上刺しのつけ方



紐のつけ方

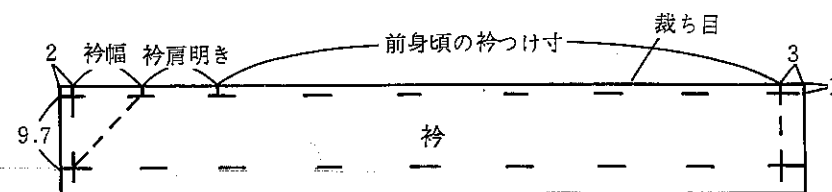
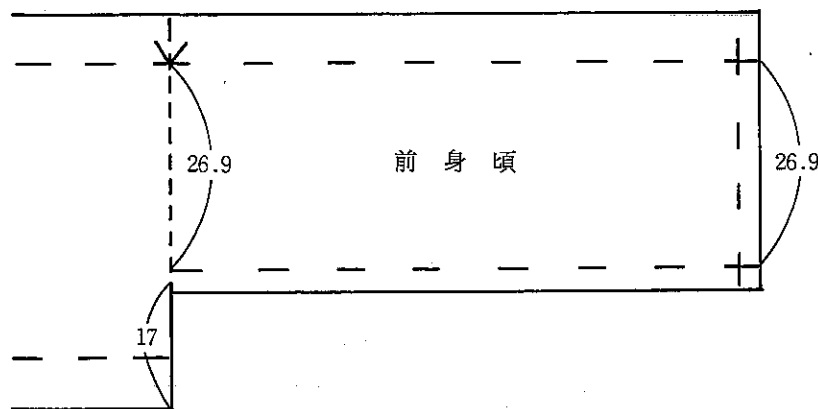
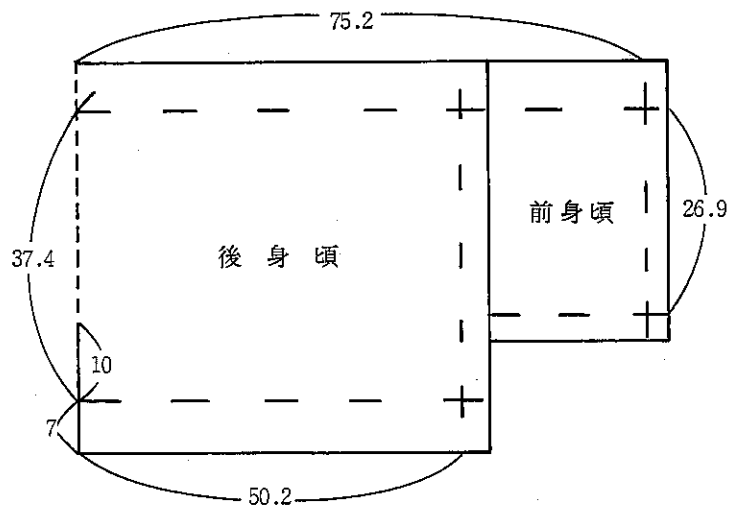
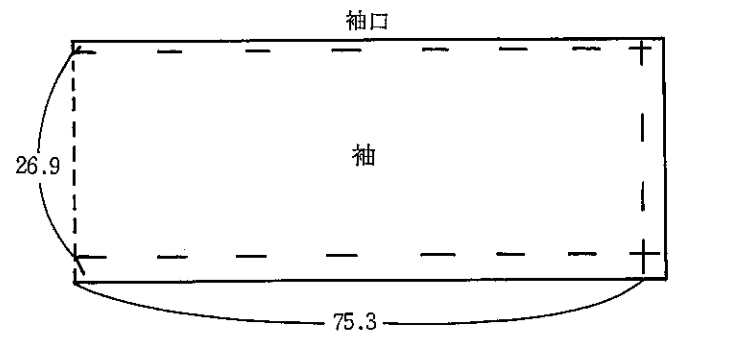


の紐二本を一緒に通して上刺しをする。

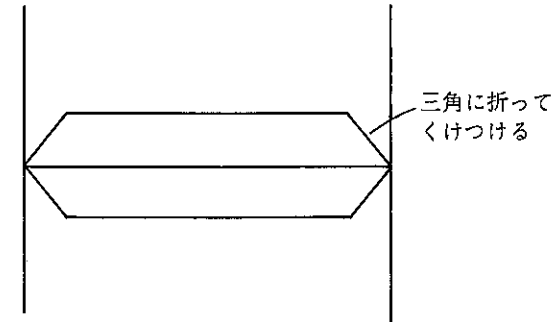
- 紐の表裏で紐下の縫い代をはさみ、上刺しの小針のところを、白色の穴糸で一針返し針にするようにして、紐つけをする。のち紐つけの両端をくける。

標つけ方

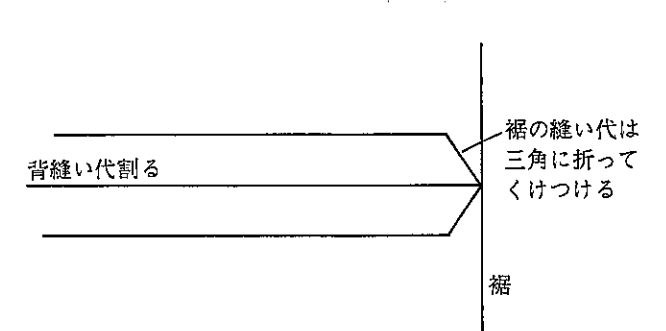
- 表袖を図のように標をつける。
- 裏袖も同様にする。
- 表身頃の前後を図のように標をつける。
- 裏身頃も同様に標をつける。
- 表裏の衿を図のように標をつける。



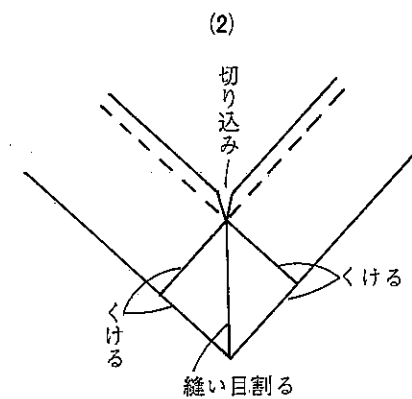
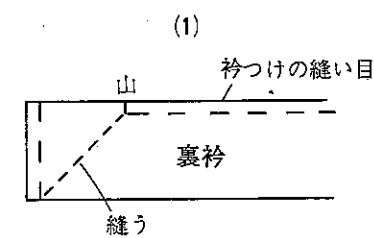
袖底縫い代の始末



背縫い裾の部分の縫い代の始末



髪置ききの始末



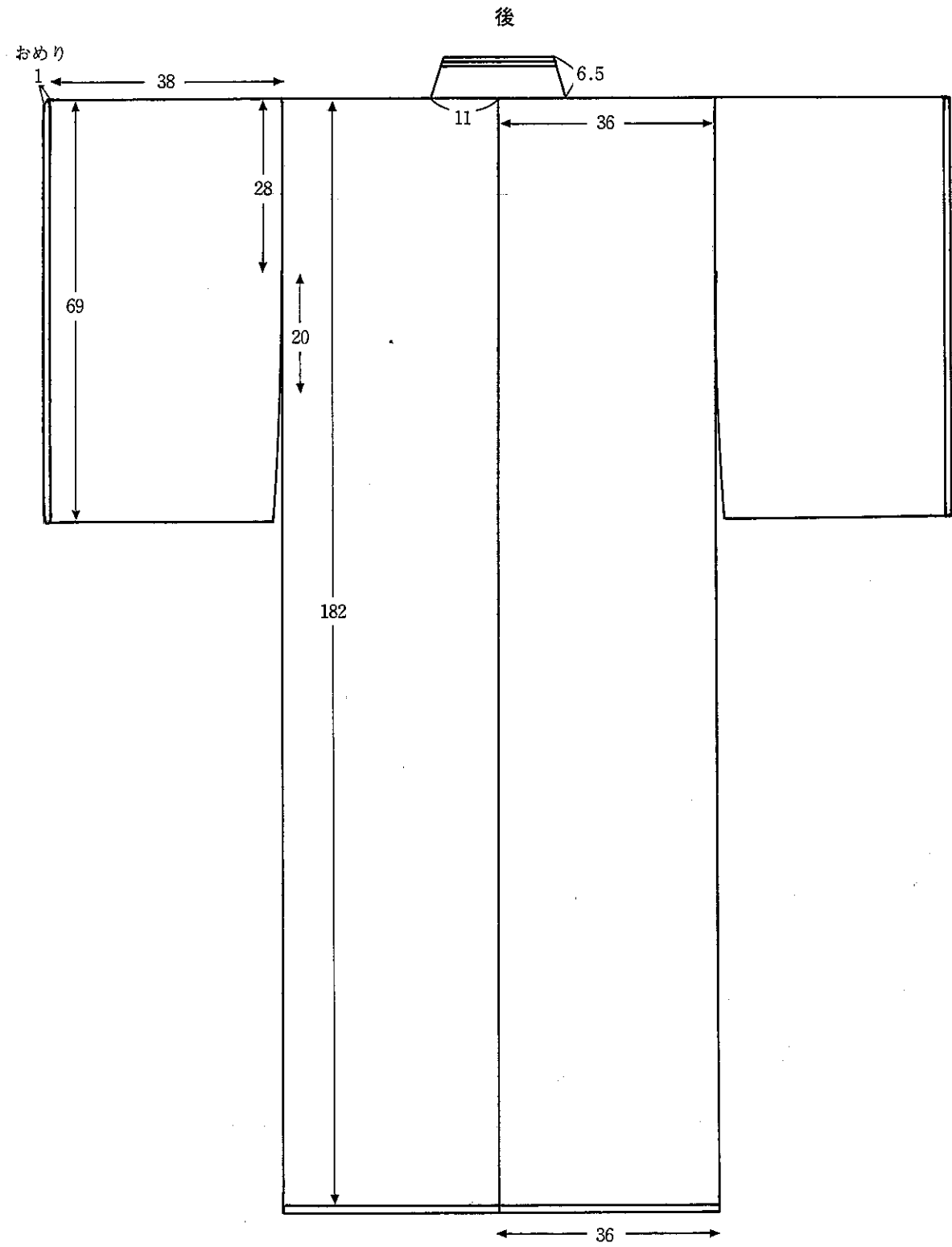
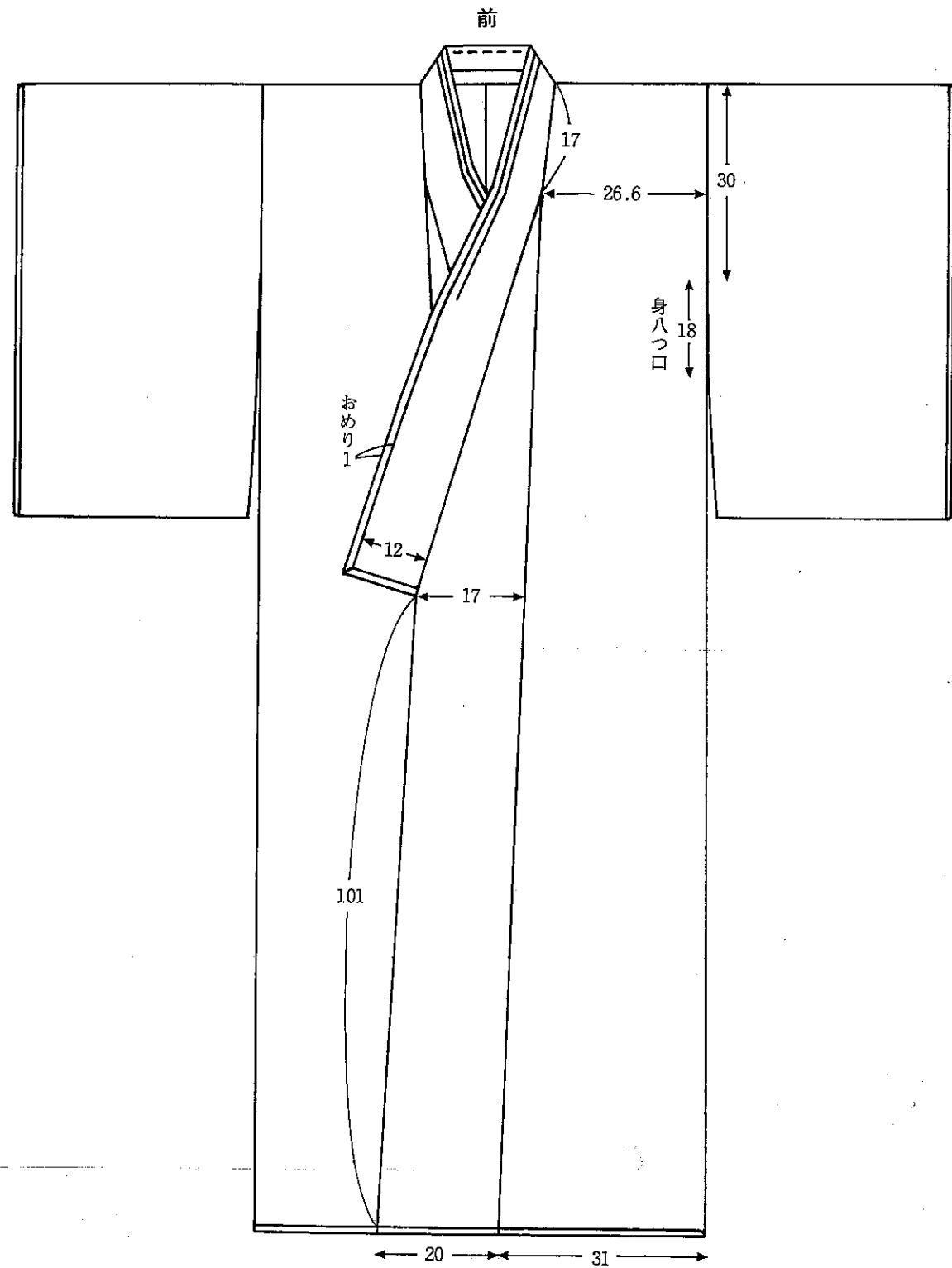
縫い方

- 縫い糸は表と同色のZ撚り絹糸を使用する。
- 縫い目は1cm、きせは0.2cmとする。
- 前身頃および後身頃の裾を、表は標どおり、裏は標より0.2cm縫い込んで縫い合わせ、きせをかけて裏身頃へ折り、表へ返して裏を0.1cm控えてしつけをする。
- 後身頃および前身頃の表裏を外表に合わせ、背、脇、衿肩明き、衿つけを標どおり合わせて、しつけで押さえておく。
- 袖つけは、袖の表裏で身頃をはさんで四つ縫いにする。
- このとき、後袖の振りを続けて縫う。きせをかけて縫い代は袖の方へ折り返す。
- 袖口は裏袖を0.1cm控えて、表裏を合わせてくける。
- 袖底は内袖、外袖とも表裏を標どおりに合わせて、しつけで押さえる。
- これを縫い合わせて縫い目を割り、袖口および振りの方は、図のように縫い代を三角に折って、袖底に1cmの針目でくける。

- 背は表、裏四枚の標を合わせて縫い、縫い目を割る。
- 裾の方は、図のように縫い代を三角に折って1cmの針目でくける。
- 衿幅および衿先を、表衿は標より0.2cm出し、裏衿は標どおり縫い合わせて、きせをかけて縫い代は裏衿の方へ折り、表へ返して裏衿を0.1cm控える。
- 衿つけの方を表裏標どおり合わせて、しつけで押さえておく。
- 衿つけは、それぞれ表裏をしつけで押さえておいた身頃の裏と衿の裏を合わせ、背縫いと衿の山標を合わせて四つ縫いをする。縫い代は身頃に折り返す。
- 衿の髪置ききの部分は、図のように山から衿幅まで斜めに0.6cmの針目で四枚縫い合わせ、縫い目を割り、衿山部分では縫い代まで図のように切り込みを入れて、縫い代を裏へ折って、四方を0.6cmの針目で衿にくけつける。
- 衿つけの身頃および衿の縫い代の裁ち目は、留めのりをしておく。(留めのりは、のりを水で薄くとき、裁ち目の端を織り糸がほつれないようにおさえる)

うわぎ
表着

表裂にはもえぎとおからくさもんからおり萌黄唐花唐草文唐織を、裏裂にはふじいろへいけん藤色平絹を使用する。



出来上り寸法

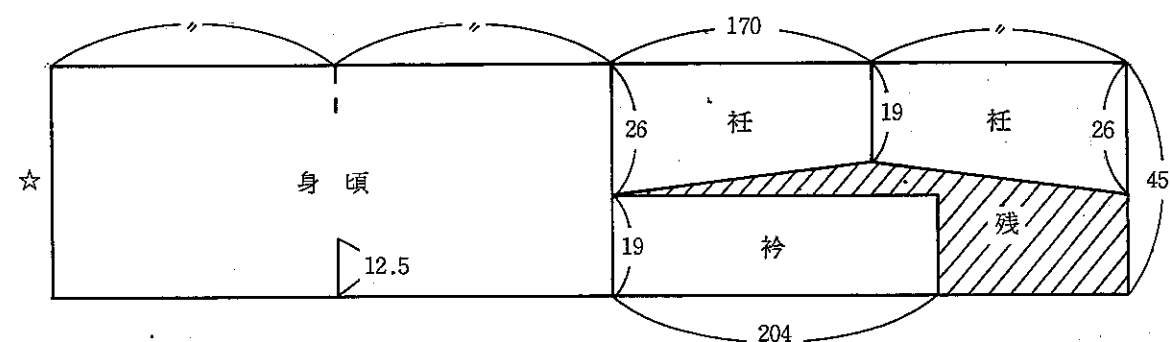
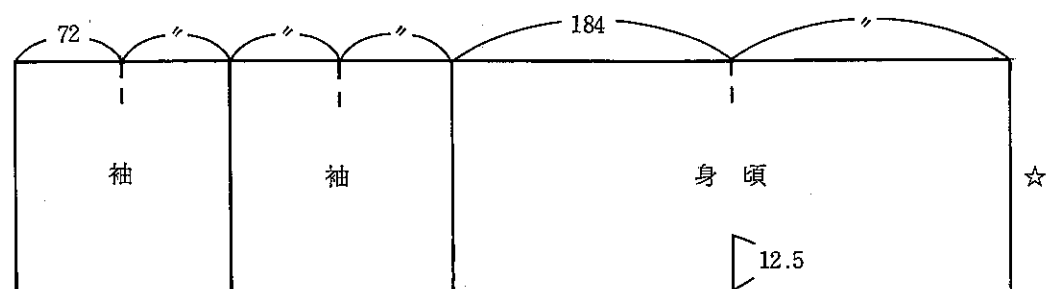
出来上り図の寸法のとおりである。

裁ち方

●表布は幅45cmの布1364cm、裏布は幅45cmの布1376cmを

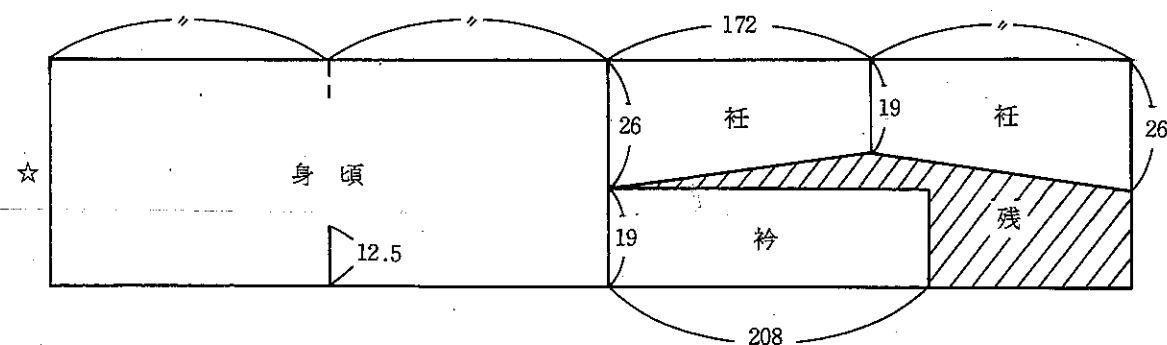
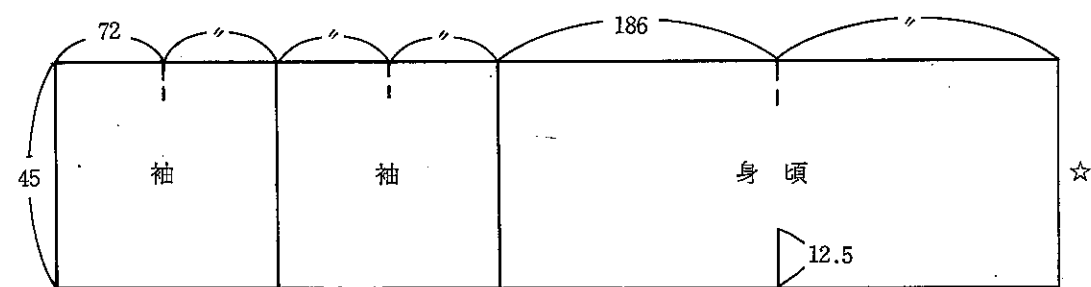
使用して、裁ち方図のようにそれぞれの布を裁つ。

表 布



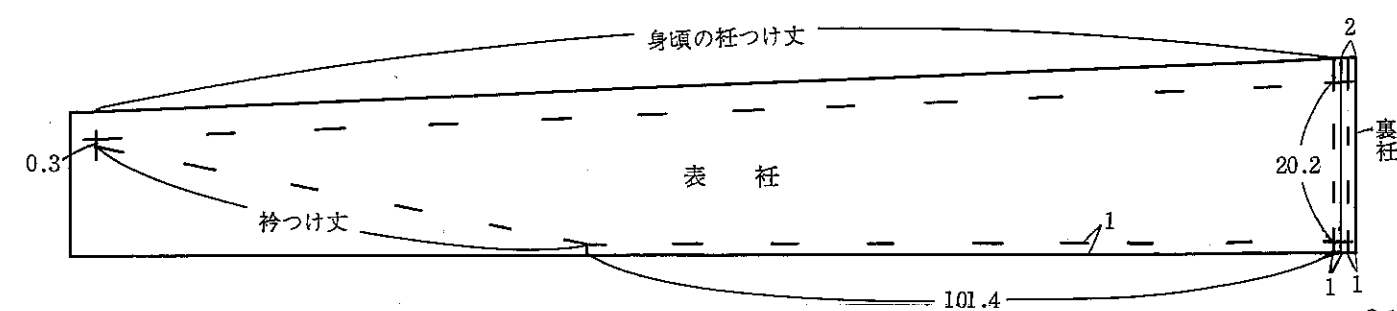
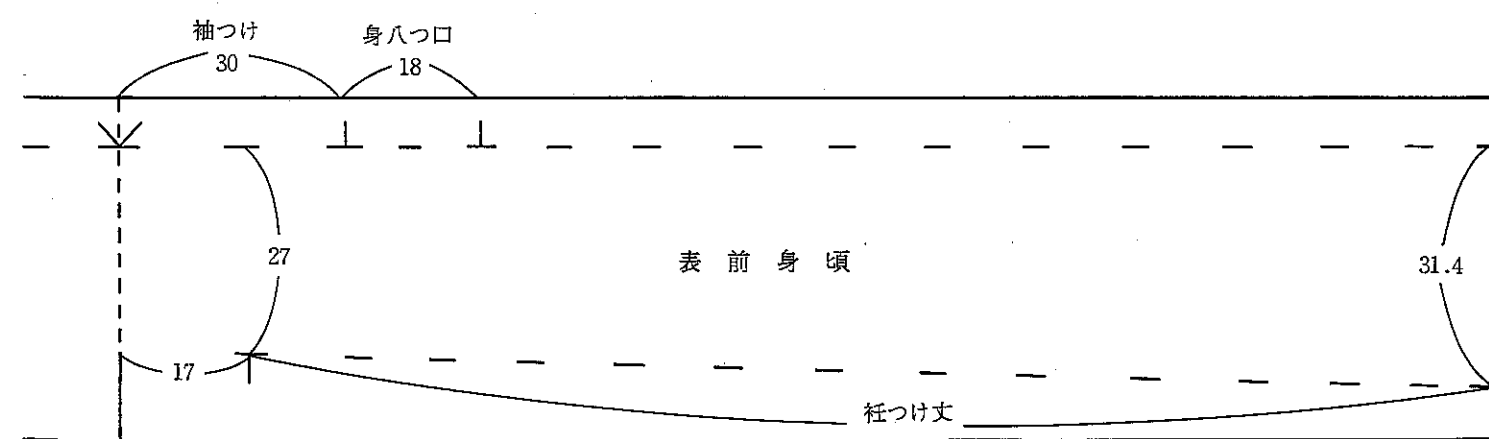
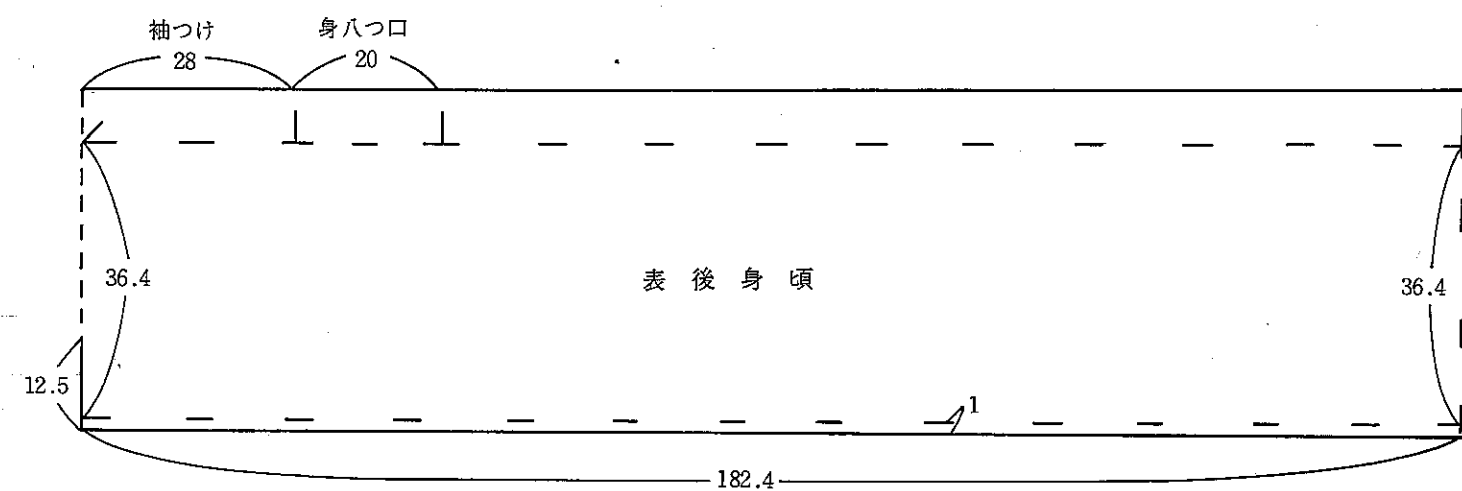
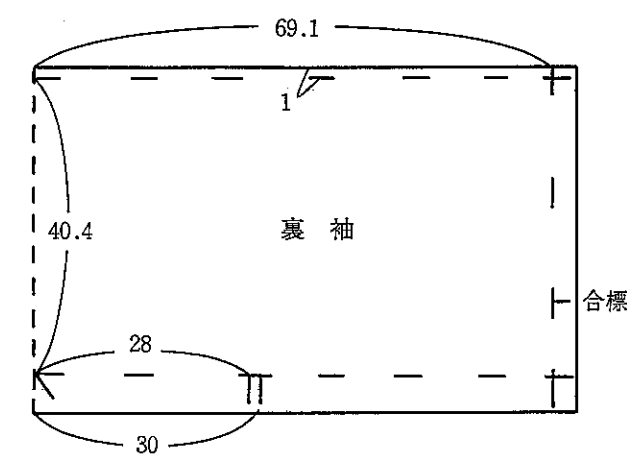
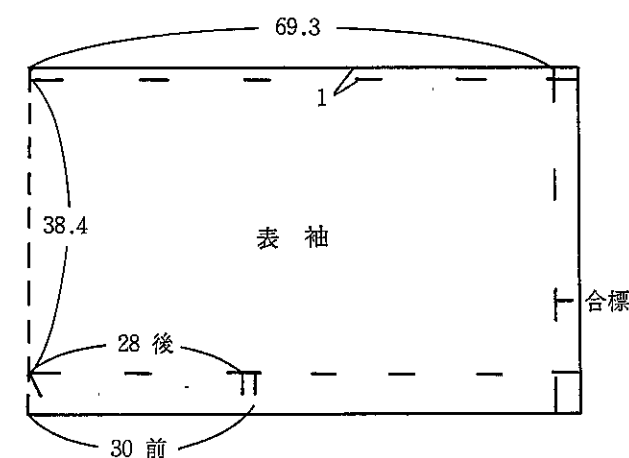
$$\begin{aligned} \text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 4 + \text{衿丈} \times 2 &= \text{表総丈} \\ 72 \times 4 + 184 \times 4 + 170 \times 2 &= 1,364\text{cm} \end{aligned}$$

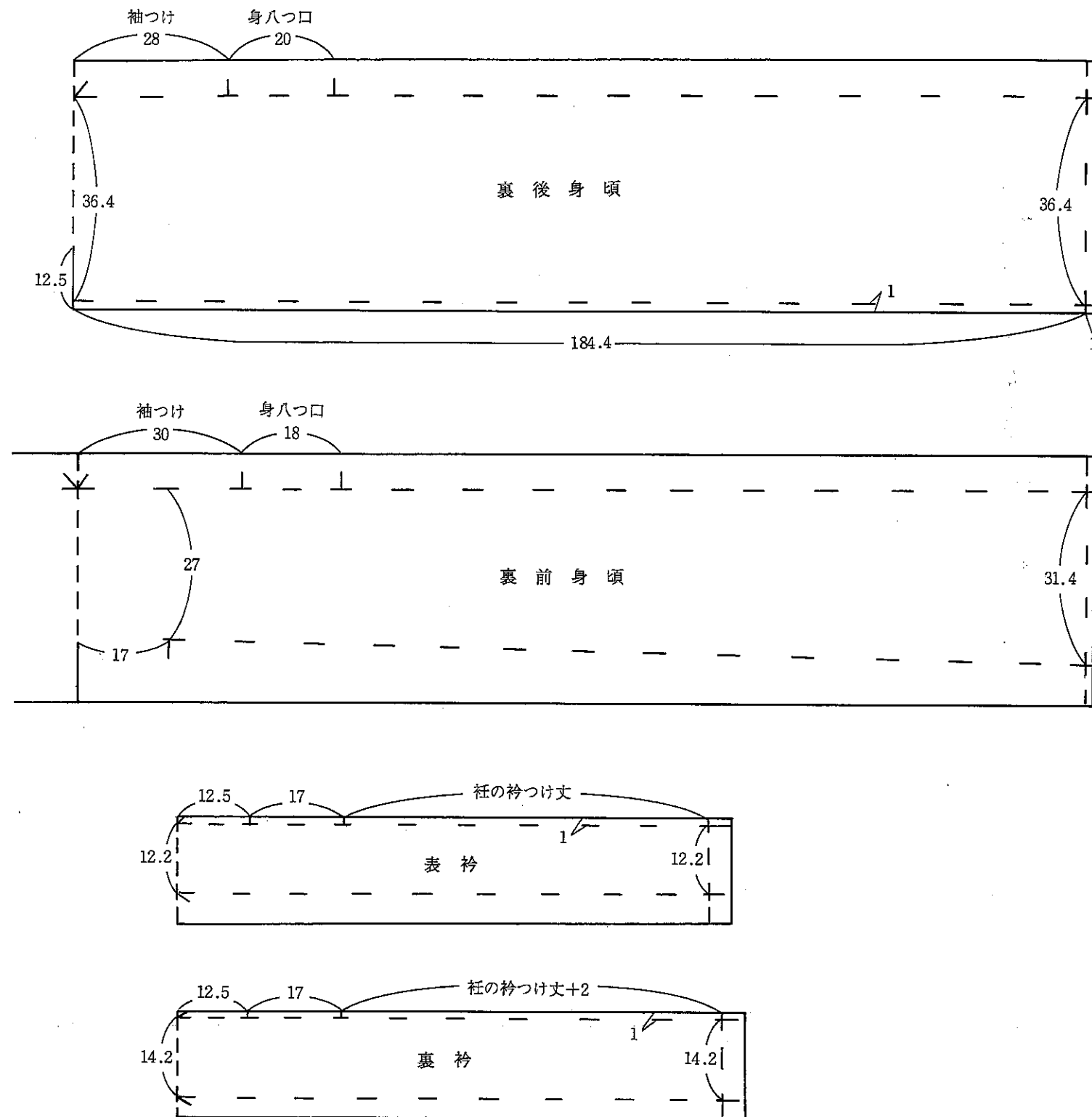
裏 布



$$\begin{aligned} \text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 4 + \text{衿丈} \times 2 &= \text{裏総丈} \\ 72 \times 4 + 186 \times 4 + 172 \times 2 &= 1,376\text{cm} \end{aligned}$$

標つけ方 ●表袖、裏袖、表身頃、裏身頃、衿の表裏、衿の表裏を
図のように標をつける。





縫い方

- 縫い糸は裂と同色のZ撚り絹糸を使用する。
- 縫い目は0.8～1cmで縫う。

袖

- 袖口を表裏縫い合わせ、0.2cmのきせをかけて表布の方へ折り、表側へ返して1cmのおめりを出して、しつけで押さえる。

- 袖底は内袖で外袖をはさみ、四つ縫いをする。ただし袖口のところ5cmほどは二枚で縫う。また振りの方は、合標から先は表裏別々に縫い、縫い代は0.3cmのきせをかけて内袖へ折る。
- 振りは表裏を縫い合わせ、縫い代は0.2cmのきせをかけて裏袖へ折り、表側へ返してしつけをかける。

身頃

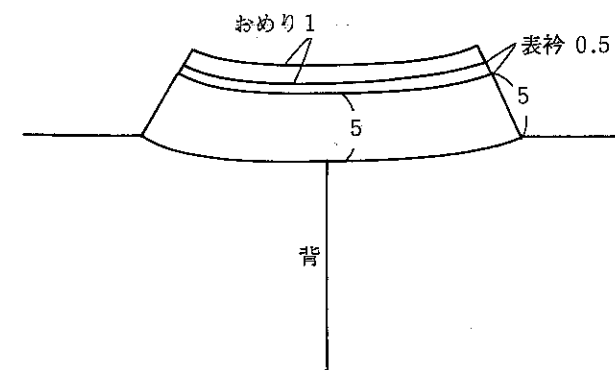
- 前後の裾および衿の裾を、それぞれ表裏を縫い合わせ、縫い代は0.4cmのきせをかけて表布の方へ折り、表側へ返しておめり1cmを出して、しつけをかける。
- 右後身頃の背および脇を外表にして、表裏の標を合わせ、縫い代のところをしつけで押さえる。脇は、身八つ口止まりのところを0.2cm出して、斜めに折っておく。
- 背縫いは、左後身頃で右後身頃をはさみ、四つ縫いをする。ただし、裾口から5cmの間は二枚で縫う。縫い代は0.2cmのきせをかけて表布の方へ折り、表側へ返す。
- 左後身頃の脇を、右後身頃の脇と同様に、しつけでとじておく。
- 脇縫いは、前身頃の表裏で後身頃をはさみ、四つ縫いをする。裾口は二枚で縫う。縫い代は0.2cmのきせをかけて表布の方へ折り、表側へ返す。
- 身八つ口の留めをして、表裏縫い合わせ、縫い代は0.2cmのきせをかけて裏へ折り、表側へ返してしつけをする。
- 留め方は、表前身頃より針を出し、表後身頃、裏後身頃、裏前身頃(縦に一針すくう)の順にすくい、逆に戻して結ぶ。

衿

- 前身頃の衿つけの表裏の標を合わせ、縫い代のところをしつけでとじておく。
- 衿つけは、表裏の衿で前身頃をはさみ、四つ縫いをする。ただし裾口5cmは二枚で縫う。縫い代は0.2cmのきせをかけて表布の方へ折り、表側へ返す。
- 衿下は表裏を出来上り幅に折り、しつけをかけて、0.8～1cmの針目でくけ合わせる。

衿

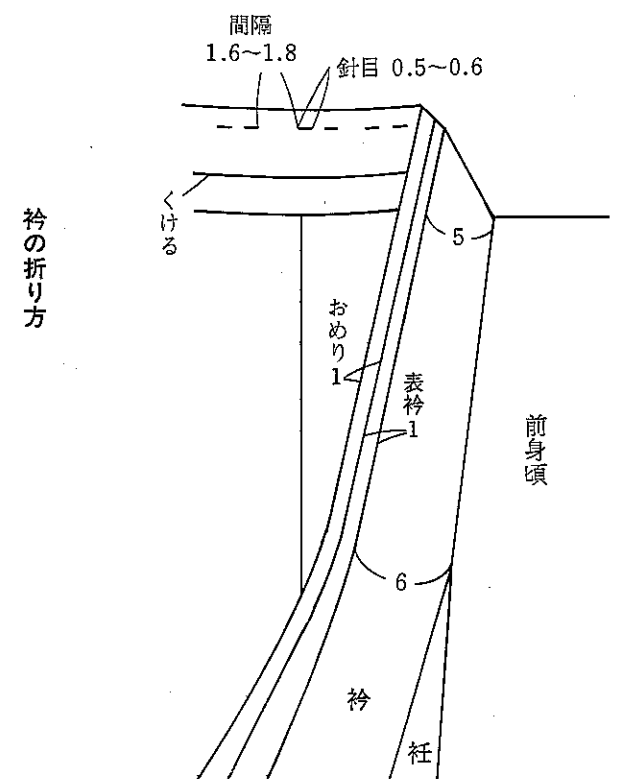
- 衿つけの仮りとじは、衿肩明き、衿下り、衿の衿つけ標を表裏合わせてとじる。



- 衿つけは、表裏の衿で身頃をはさみ、四つ縫いをする。
- 衿先の留めは、表衿から針を出し、衿下の表裏、裏衿を横にすくって、表衿へ戻して結ぶ。
- 表衿幅、衿先を標どおり折り、おめり1cmを出し、衿先の角は斜めに折って整え、しつけをかけてくける。
- 裏袖を出来上り幅に折って、袖つけ縫い代にのせてくける。

衿の折り方

- 衿の折り方は、衿肩のところは衿幅5cmとして裏へ折り、さらにおめりと表衿0.5cmを衿幅より出して図のように折る。
- 前は衿下りの位置で、衿幅6cmとして裏へ折り、さらにおめりと表衿を1cm出して、肩の衿幅と斜めに図のように折りをつける。
- 裏と同色の糸で、裏から折り山のところを、0.5～0.6cmくらいの針目で間隔1.6～1.8cmで二目落としにして、衿下りより2cm下までとじる。
- 裏衿の折り山を同じ位置まで、針目0.7cmでくける。



うちぎぬ
打衣

打衣は生地が異なるだけで、形は表着と同じものである。

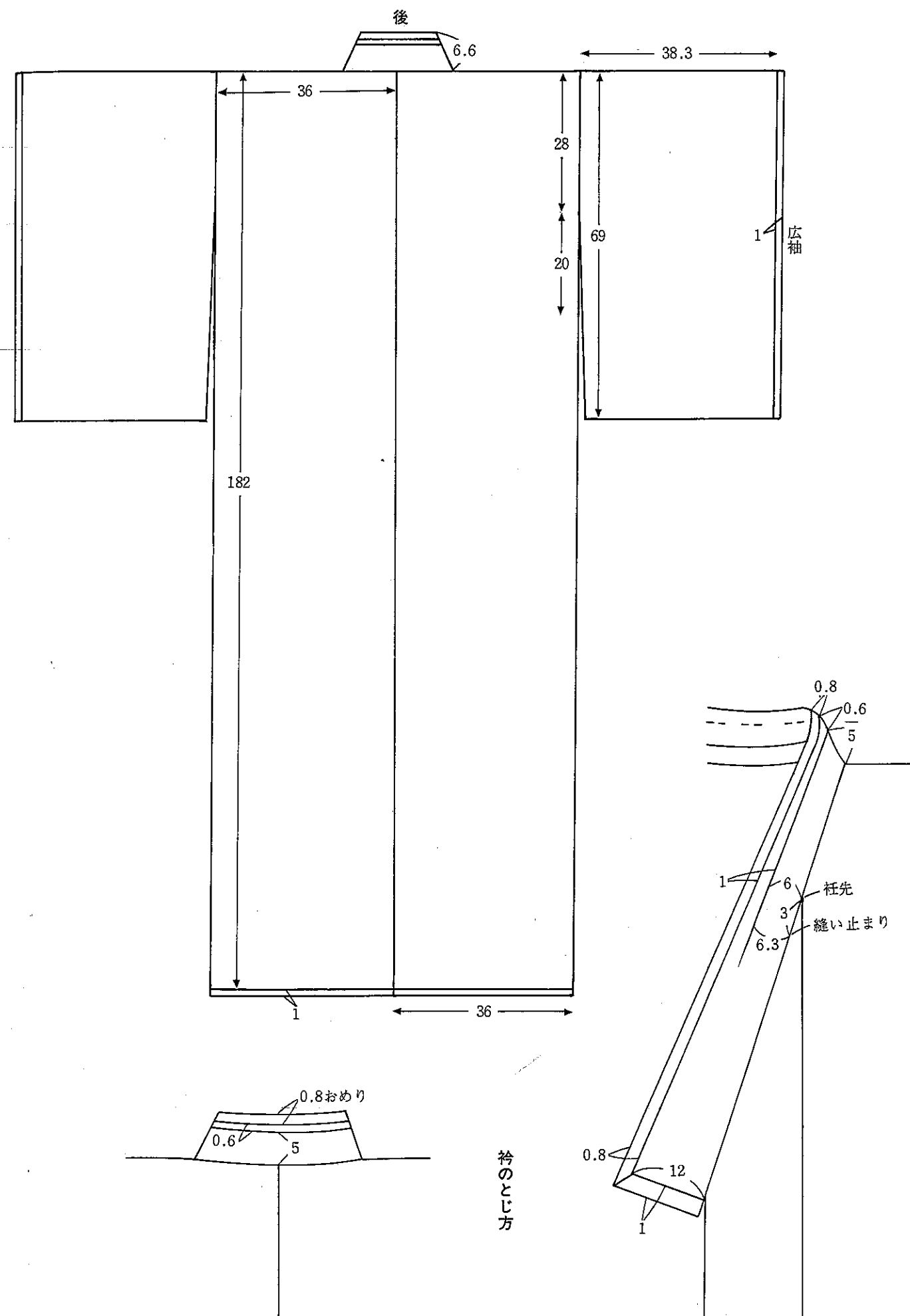
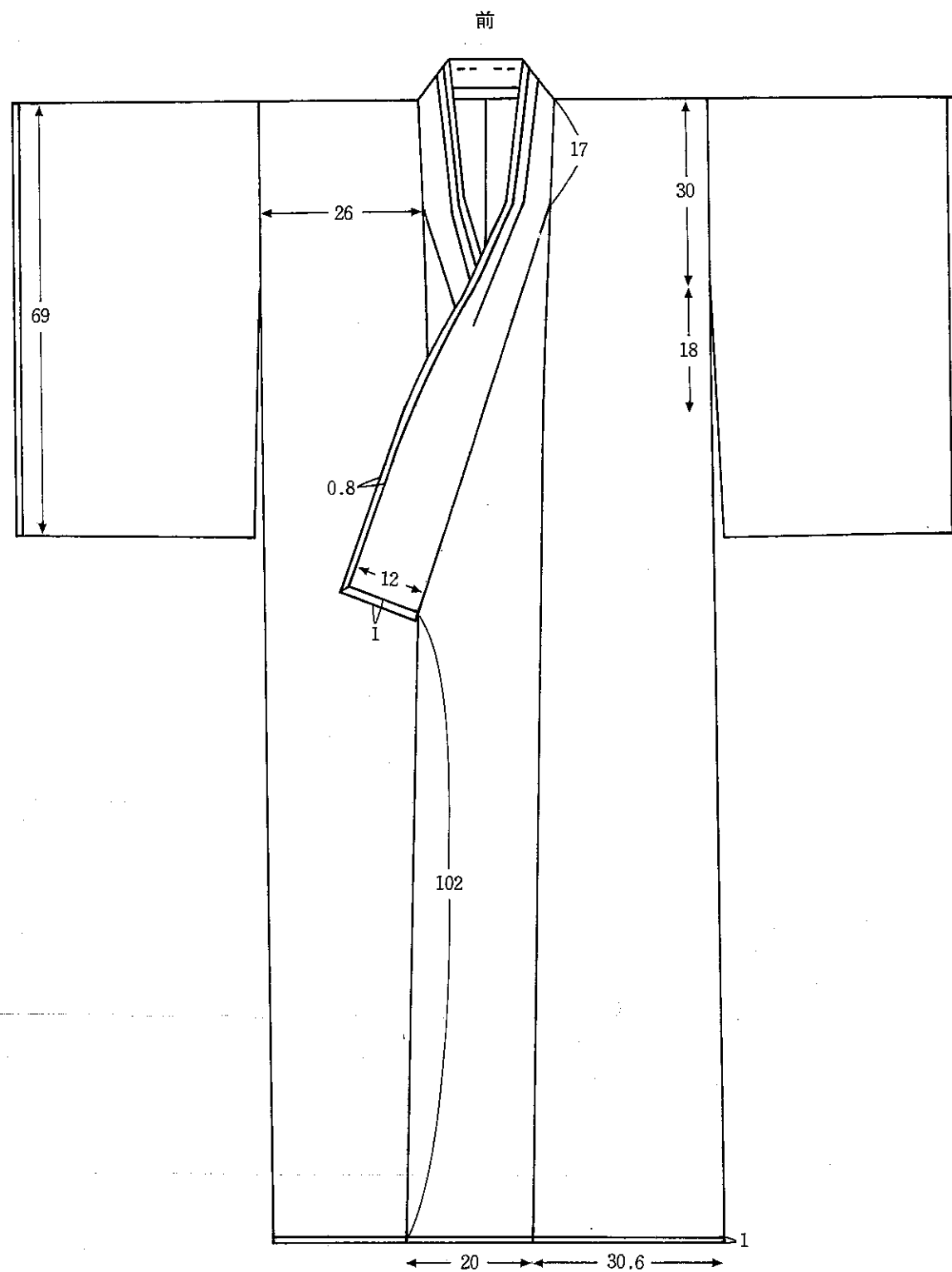
表裂は朱無紋綾を、裏裂には朱平絹を使用する。

出来上り寸法

出来上り図の寸法のとおりである。

裁ち方、標つけ方、縫い方

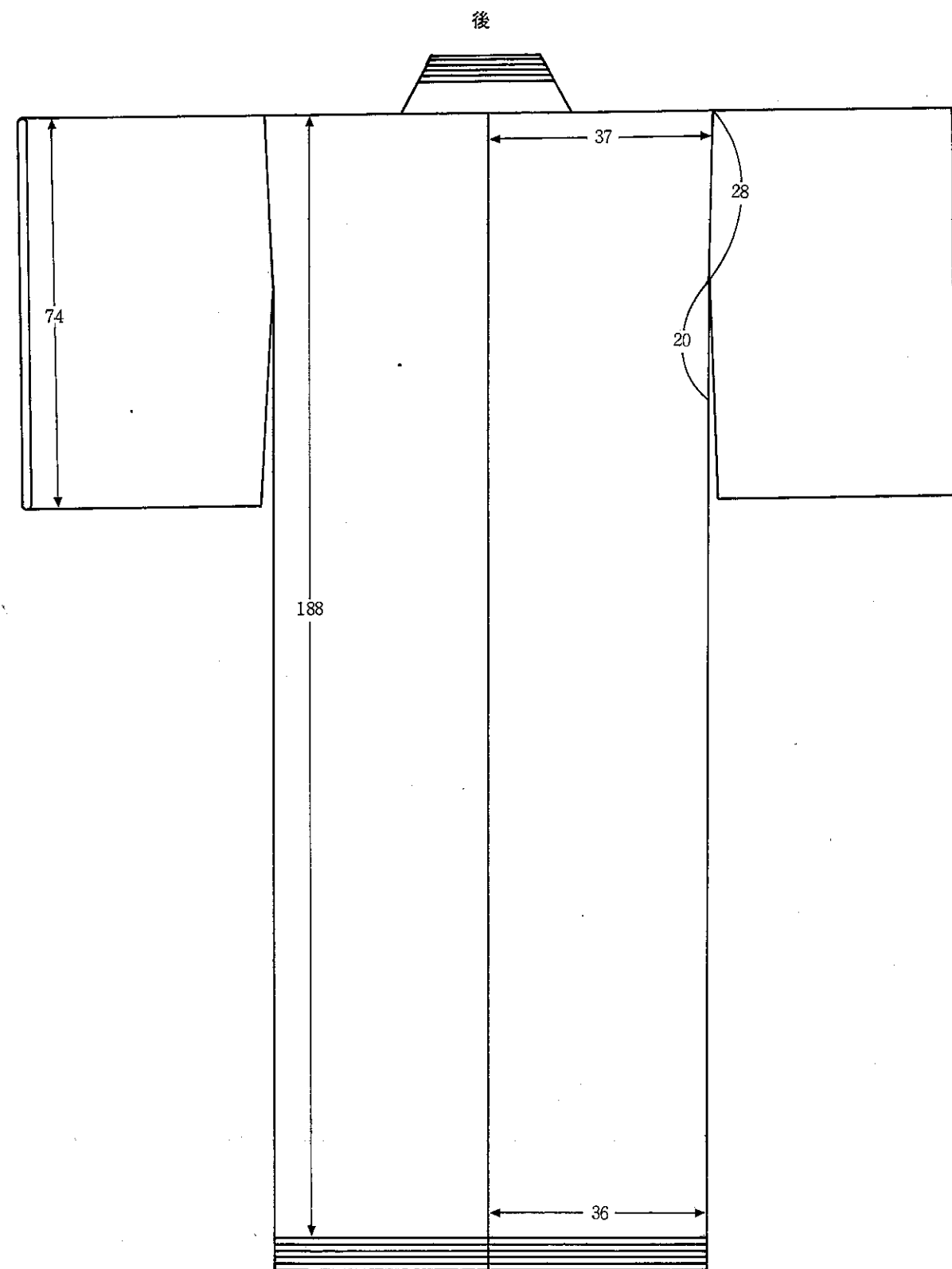
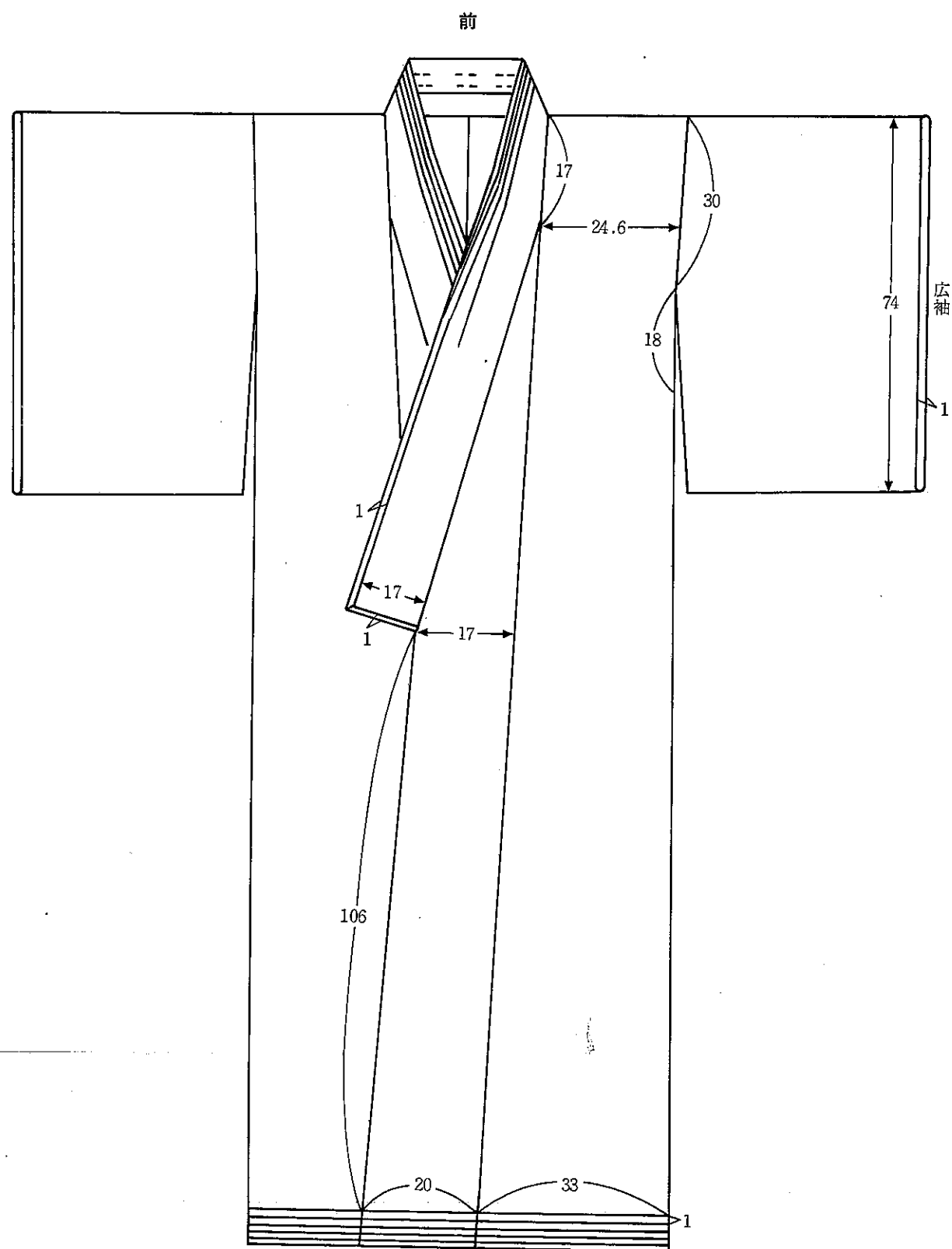
すべて表着と同様である。



いつ ぎぬ
五 衣

五衣とは桂を五枚重ねたものということで、この五衣は紅梅襲の五衣で、表裂には淡紅梅花文綾を、裏裂には紅梅色の濃淡五色の平絹を使用する。

上衣は淡色にして、下衣は順に濃色にする。
五枚襲であるが、袖、衿、裾廻り、身八つ口は比翼仕立てにする。



出来上り寸法

出来上り図の寸法の通りである。

裁ち方

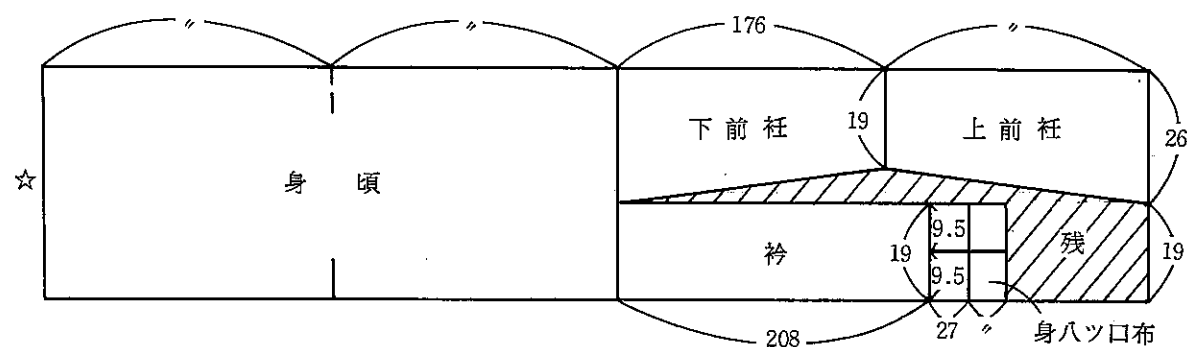
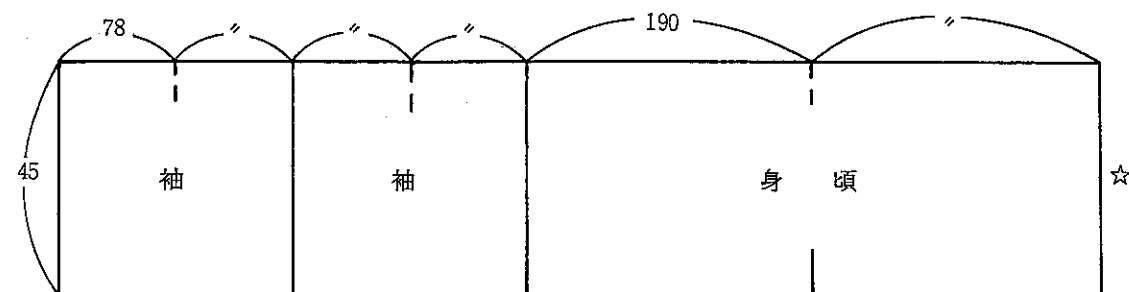
●表布は、上より一枚目は図のように身頃の丈を長く裁ち、二枚目、三枚目、四枚目、五枚目は比翼のため図のように裾丈だけを裁つ。

●裏布は、五枚目は図のように身頃の丈を長く裁ち、一枚目の裾丈を図のように短かく裁ち、二枚目、三枚目、四枚目の裾丈も短かく裁つ（寸法は図表参照）。

五衣 表・裏布丈の裁ち切り寸法

名称	袖丈	身丈・裾丈	衿丈	衿丈
上表・下表へ	表	裏	表	裏
1枚目	78	78	190	115
2枚目	78	78	114	116
3枚目	78	78	115	117
4枚目	78	78	116	118
5枚目	78	78	117	119

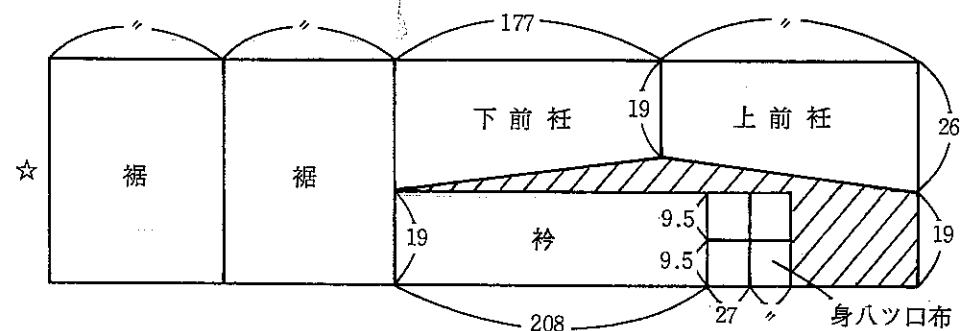
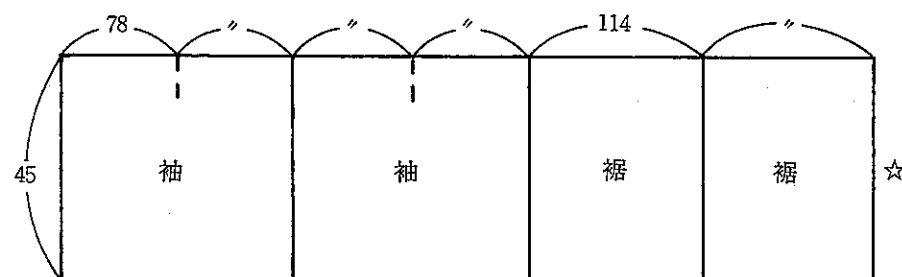
一枚目の表布



$$\text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 4 + \text{衿丈} \times 2 = \text{表総丈}$$

$$78 \times 4 + 190 \times 4 + 176 \times 2 = 1,424\text{cm}$$

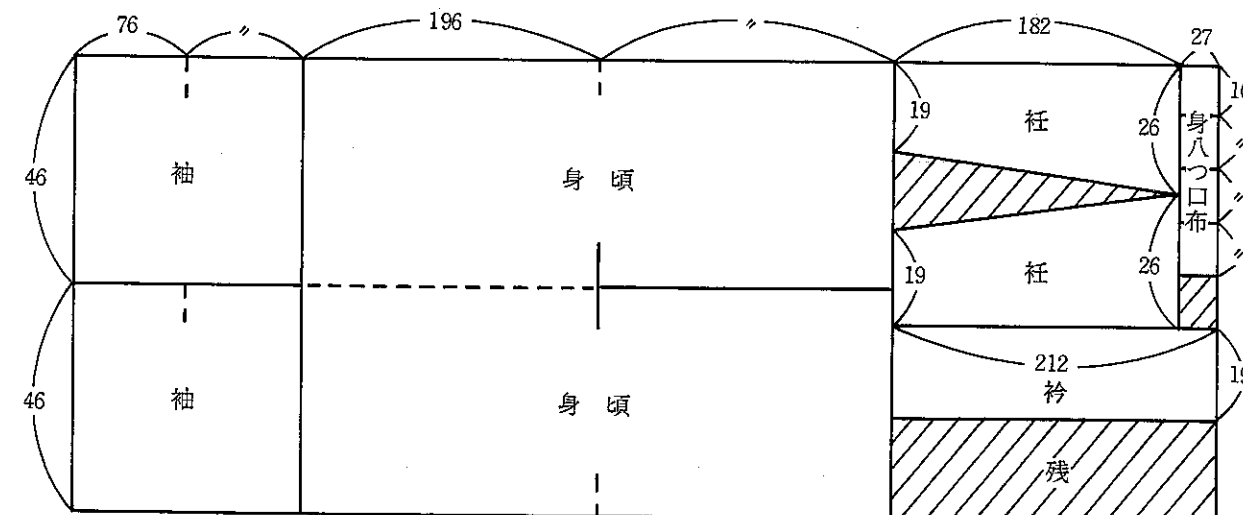
二、三、四、五枚目の表布比翼(二枚目表布の寸法)



$$\text{袖丈} \times 4 + \text{裾丈} \times 4 + \text{衿丈} \times 2 = \text{総丈}$$

$$78 \times 4 + 114 \times 4 + 177 \times 2 = 1,122\text{cm}$$

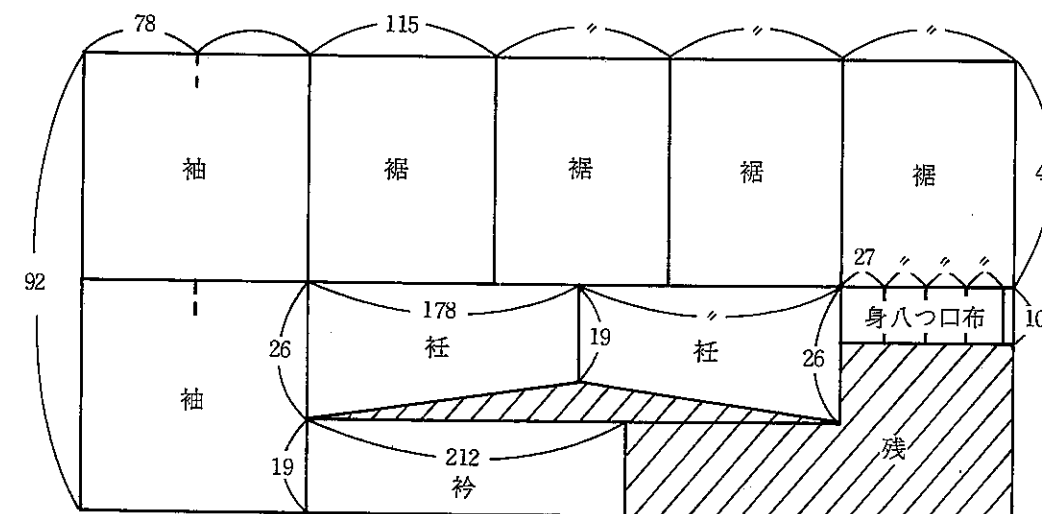
五枚目の裏布



$$\text{袖丈} \times 2 + \text{身丈} \times 2 + \text{衿丈} + \text{身八つ口布} = \text{総丈}$$

$$76 \times 2 + 196 \times 2 + 182 + 27 = 753\text{cm}$$

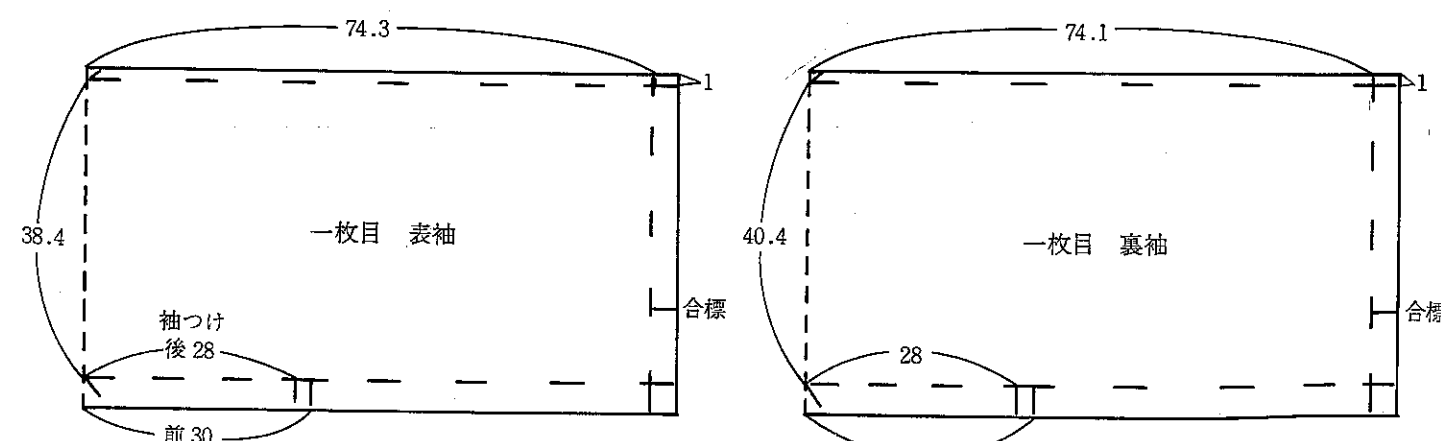
一、二、三、四枚目の裏比翼(一枚目裏布の寸法)

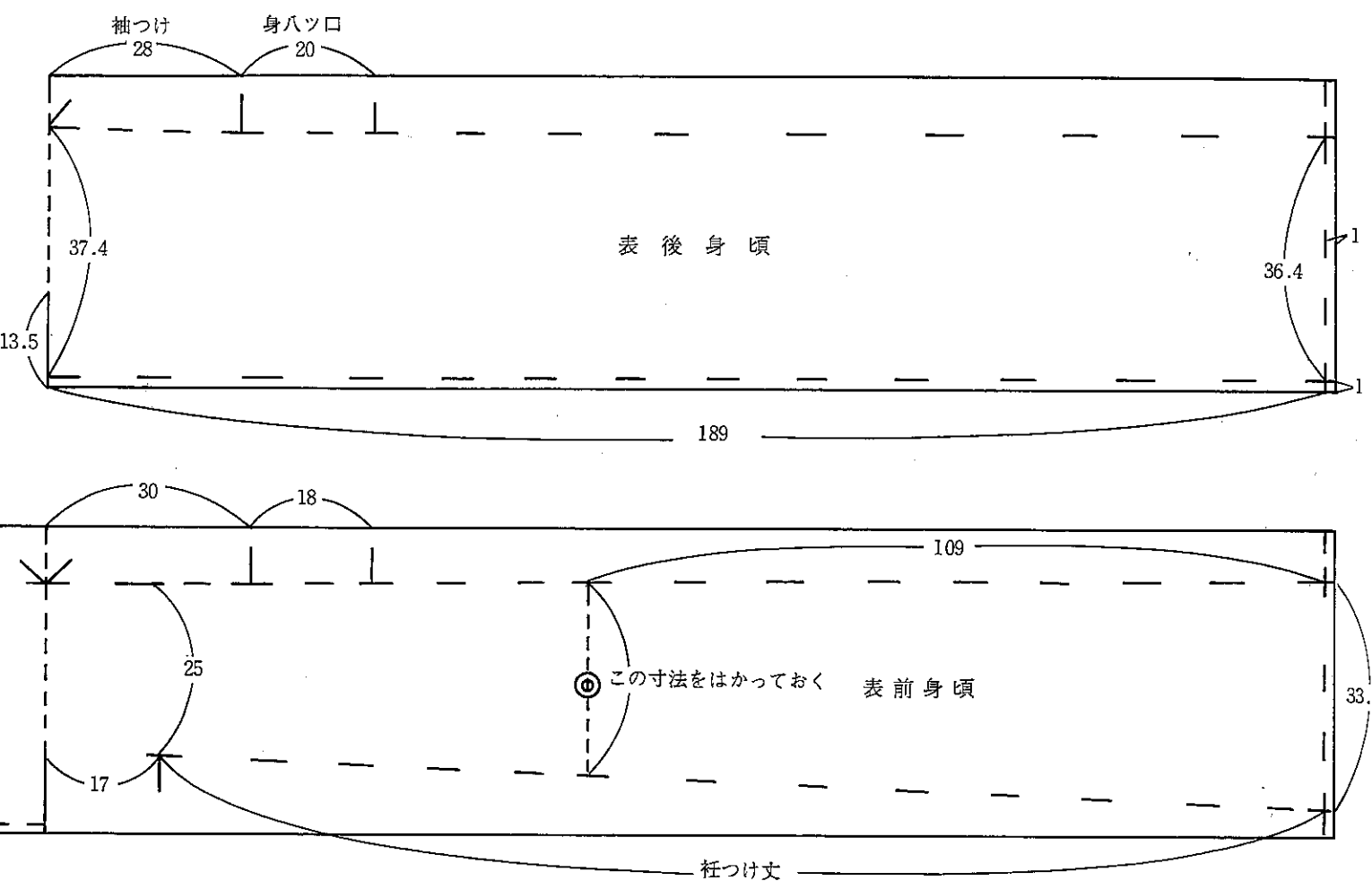


$$\text{袖丈} \times 2 + \text{裾丈} \times 4 = \text{総丈}$$

$$78 \times 2 + 115 \times 4 = 616\text{cm}$$

標つけ方





標つけ方

- 袖はまず一枚目の表袖、裏袖を図のように標をつける。
- 二枚目から五枚目までは、袖丈を0.8cmずつ順々に短かくする他は一枚目と同様に標をつける。
- 身頃は一枚目の表身頃に、図のように後身、前身の標をつける。
- つぎに、裾廻しの後・前の標をつける。このとき裾丈の寸法を計っておく。
- 二枚目の表裾の後・前の標をつける。このとき裾丈は一枚目の裾丈より1cm短かく標し、幅は後幅を裾口で、0.4cm、また前幅は0.8cmつめ、裾丈のところは後・前幅とも一枚目と同寸に標し、裾口の幅と斜めに結んで標をつける。
- 裏裾は、裾丈をおめり1cmの二倍の2cmを加えて裾丈を標し、幅は表と同じにして標つけをする。
- 三枚目、四枚目の表裾および裏裾を、二枚目と同様に標つけをする。ただし、裾丈は三枚目は二枚目より1cm長く、さらに四枚目はそれより1cm長くする。後・前幅

も順々につめる。

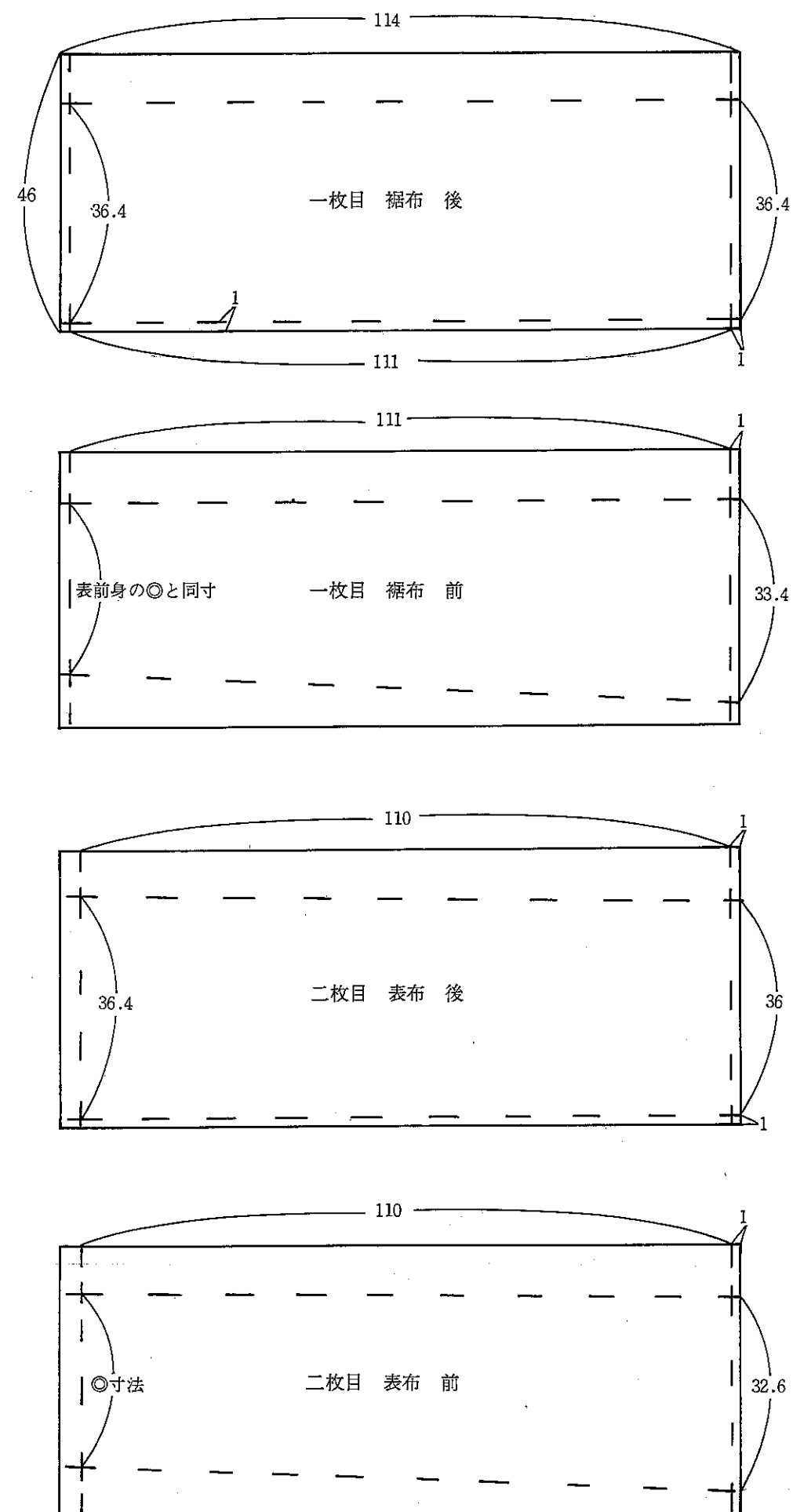
- 五枚目は、表裾の標を四枚目と同様につける。裏身頃は図のように衿肩明きをつめ、また丈は一枚目の表身丈より6cm長く標し、後幅・前幅は裾丈から上方は一枚目の表身頃と同寸にし、下方は裾口の幅と結んで標をつける。

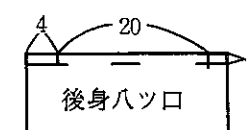
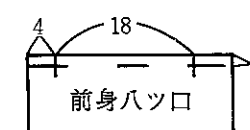
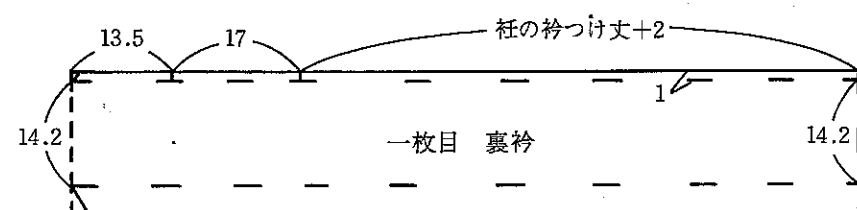
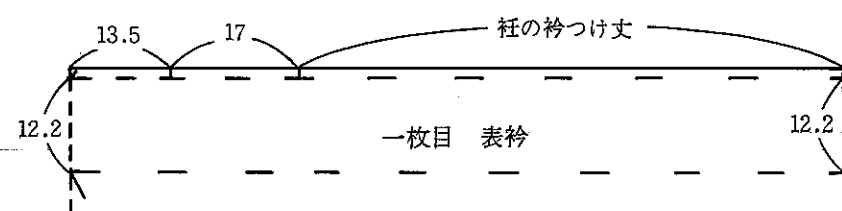
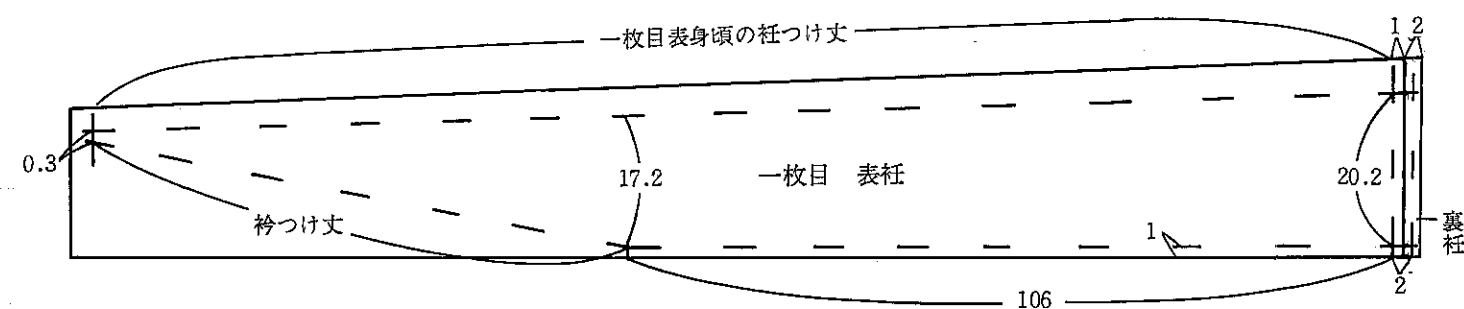
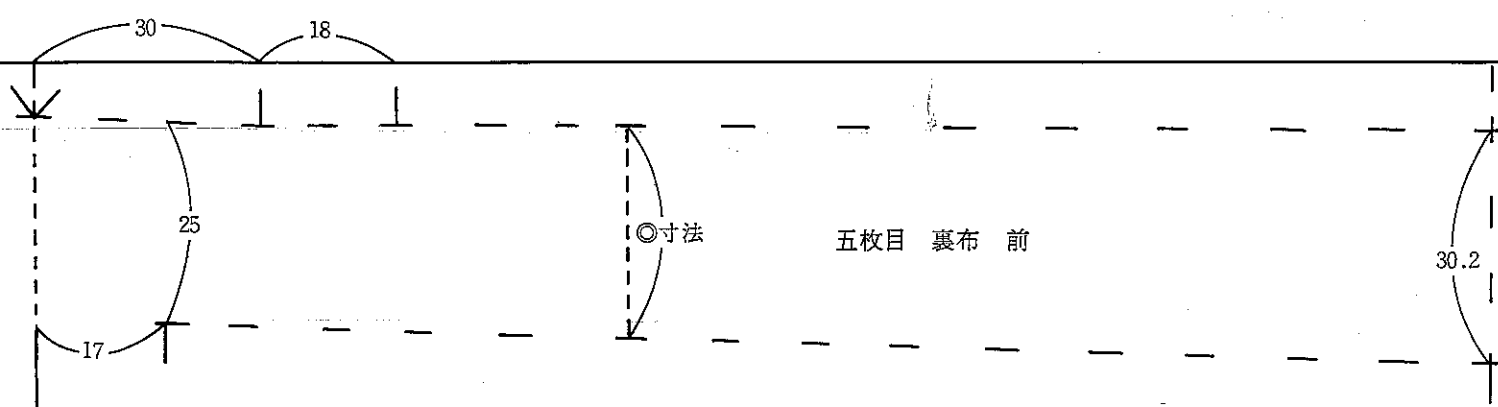
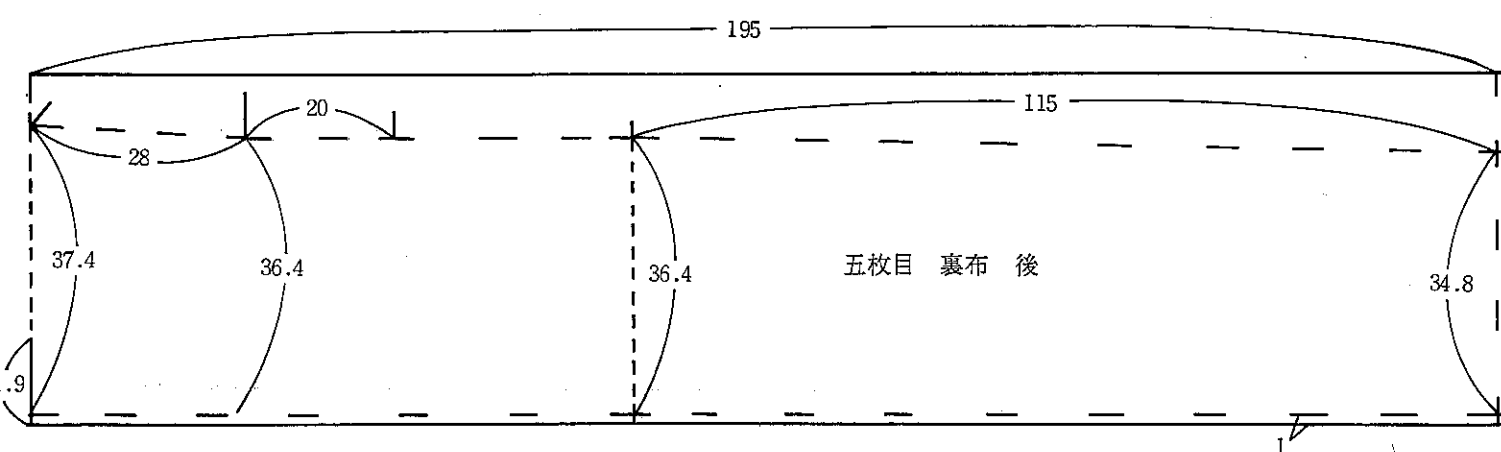
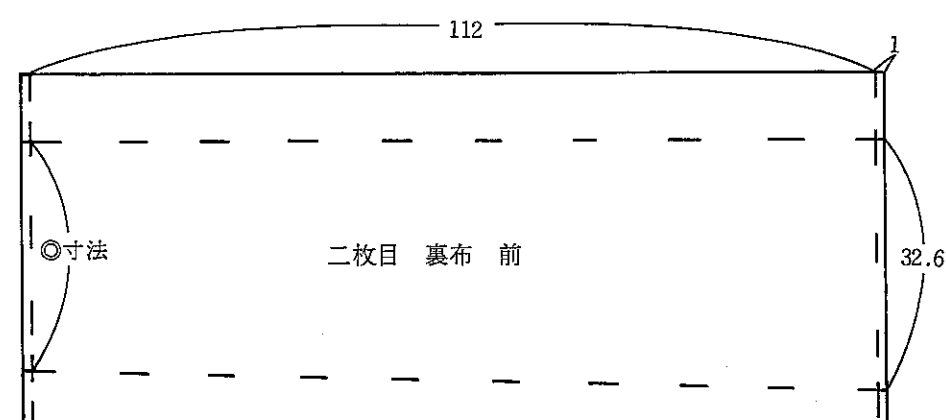
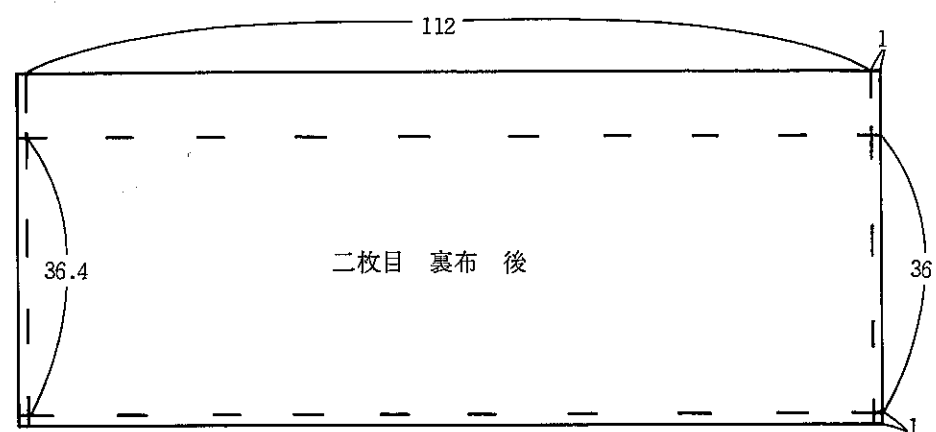
- 衿は一枚目の裏衿の裾を、おめり幅の二倍、2cm長く出して、表衿を重ね、図のように標をつける。二枚目、三枚目、四枚目、五枚目は、衿丈を1cmずつ長くする他は一枚目と同じである。

- 衿は一枚目の表衿を図のように標をつける。裏衿は衿幅および衿先は、おめり幅の二倍の2cmを表衿より広くする。

- 二枚目、三枚目、四枚目、五枚目は衿肩明きの寸法を0.4cmずつつめる以外は、一枚目と同様に標をつける。

- 身八ツ口布は、一枚目から五枚目まで同じ寸法で図のように標をつける。





縫い方

- 縫い糸は同色のZ撚り絹糸を使用する。
- 縫い目は0.7~0.8cmで縫う。

袖

- 表着の縫い方とすべて同様に縫って、五枚の袖を、袖口および振りを平らに合わせ、しつけで押さえる。
- 袖つけ部分は、一枚目の表袖と五枚目の裏袖を除いて、他の全部の袖つけを一緒に縫い糸でとじておく。

身頃

- 一枚目は表身頃の背縫い、脇縫いをする。背の縫い代は左身頃へ、脇縫いは前身頃へ折る。
- つぎに裏裾廻りの背縫い、脇縫いをする。縫い代は背は表と反対に折り、脇は前に折る。
- 裾合わせをして、おめりを1cm出してしつけをする。

- 背縫いと脇縫いは表裏を合わせて縦とじをする。

- 二、三、四枚目の背および脇は、裾口12cmは表裏別々に縫い、裾合わせをして、おめりを1cm出してしつけをかける。

- 上部は、背は左後裾の表裏で右後裾をはさみ、また脇は前裾で後裾をはさんで四つ縫いをする。

- 五枚目の裏身頃の背および脇を縫う。表裾廻りの背、脇を縫い、縫い代は一枚目と同様に折る。次に裾合わせをし、おめりを出してしつけをする。背縫いおよび脇縫いの縦とじをする。

- 一枚目の表身頃と、五枚目の裏身頃の肩山を合わせて、裾を平らにして、二、三、四枚目の裾を1cmずつずらして合わせ、裾廻りの上部を全部一緒に縫い糸でとじておく。

く。

●裾廻りから上部の背、脇の表裏を縦とじをする。

●身八つ口は、一枚目の表身頃の身八つ口に裏身八つ口布を縫い合わせ、身八つ口の留めをする。留めは表前身頃から針を出し、後身八つ口の表裏をすくい、裏前身頃を縦にすくい、逆の順に戻し、表前身頃に出して結ぶ。留めの下の裏脇縫いをする。

●五枚目は、裏身頃の身八つ口に表身八つ口布を縫い合わせ、身八つ口の留めをし、留めの下の表脇縫いをする。

●二枚目、三枚目、四枚目は身八つ口布の表裏を縫い合わせ、それぞれ身八つ口の留めをし、留めより下を、前の表裏で後の表裏をはさみ四つ縫いする。

●一、二、三、四、五枚目の身八つ口をそろえて、しつけでとじる。

袖つけ

●一枚目の表袖と表身頃を合わせ、袖つけの留めをして袖をつける。

●留めは表袖から針を出し、表身頃、裏身頃(身八つ口布)を通し、裏袖を縦にすくって逆の順に戻し、表袖へ出して結ぶ。

●袖つけをきせをかけて袖に折る。裏袖つけは、身八つ口裏布と縫い合わせる。

●二、三、四枚目は、それぞれ表袖と身八つ口表布と合わせ、なお裏袖と身八つ口裏布と縫い合わせる。袖つけの留めは一枚目と同じに留める。

●五枚目は表袖と身八つ口表布と合わせ、裏袖と裏身頃と縫い合わせる。袖つけの留めは前述と同様にして留める。袖つけの折りはきせをかけて袖に返す。

●一、二、三、四、五枚目の身八つ口布を平らに合わせ、上下と奥の三方をとじる。

●袖の二、三、四枚目の袖つけ縫い代を、一枚目の表袖つけと五枚目の裏袖つけではさみ、袖つけ縫い目のところを縫い糸でとじる。

●身八つ口布の上方を袖つけの縫い代に、下方を脇縫いの縫い代にとじつける。

衿

●一枚目および五枚目までの裾は、表裏の裾を合わせ、

おめり1cmとする。

●一枚目の衿つけは裾口10cmほど表裏別々に縫い、それより裾廻り丈までは、表裏の衿で前身頃の表裏をはさみ四つ縫いをし、それより上部は表衿だけつける。

●きせをかけて表衿に折り返す。

●つぎに、衿の裾から衿下のところまで綿を入れて、衿下を表裏くけ合わせる。

●衿つけの二枚目、三枚目、四枚目は、一枚目と同じに表裏の衿で前裾廻りの表裏をはさみ四つ縫いする。

●衿つけの上部の縫い代は平らにして、表裏をとじておく。

●五枚目の衿つけは、裾廻りより丈の四つ縫いまでは同じにし、それより上部は裏衿だけつける。

●衿の綿の入れ方、衿下くけは一枚目と同じにする。

●衿つけの上部の二、三、四枚目の縫い代は、一枚目と五枚目の衿つけではさみとじる。衿の衿つけ標を、それぞれ表裏合わせて仮りとじをする。

衿つけ

●一枚目および五枚目は、表裏の衿で身頃および衿をはさんで四つ縫いをする。

●二、三、四枚目は、いずれも衿の表裏で衿をはさんで四つ縫いをし、衿つけの縫い代は平らに開いてとじておく。

●衿先の留めは、一枚目から五枚目までそれぞれ表衿から針を出し、表裏の衿下、裏衿を横にすくって表衿に戻り、結ぶ。

●衿幅および衿先は、それぞれ表衿を標どおり裏へ折り、裏衿はおめり1cm出して衿幅を整え、衿先の角は斜めに折ってくる。

●つぎに、二枚目の表衿を一枚目の裏衿の山に、また四枚目の裏衿を五枚目の表衿の山に、衿肩から衿下りまでくけつける。

●衿の折り方は、一枚目は表着と同様に衿肩から衿下り2cm下まで折り、とじる。

●二、三、四、五枚目は、おめりを一枚目より0.2cmずつ順々に出るように折る。

●最後に、衿肩のところを図のように、裏と同色の糸で

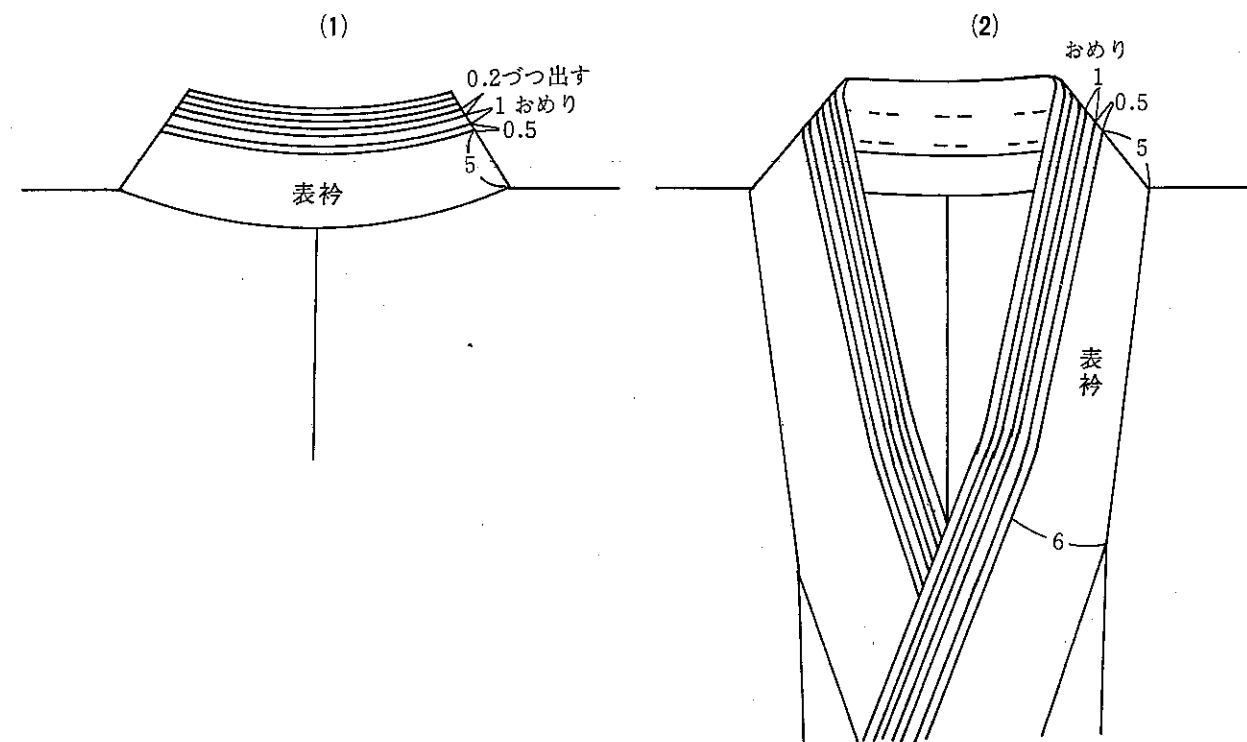
五枚の衿を一緒にとじる。

●衿つけの衿下りより5cm下、衿下より3cm上、その中間の三カ所を、五枚の衿を一緒に、針目1cmで一針すくい、とじて結ぶ。

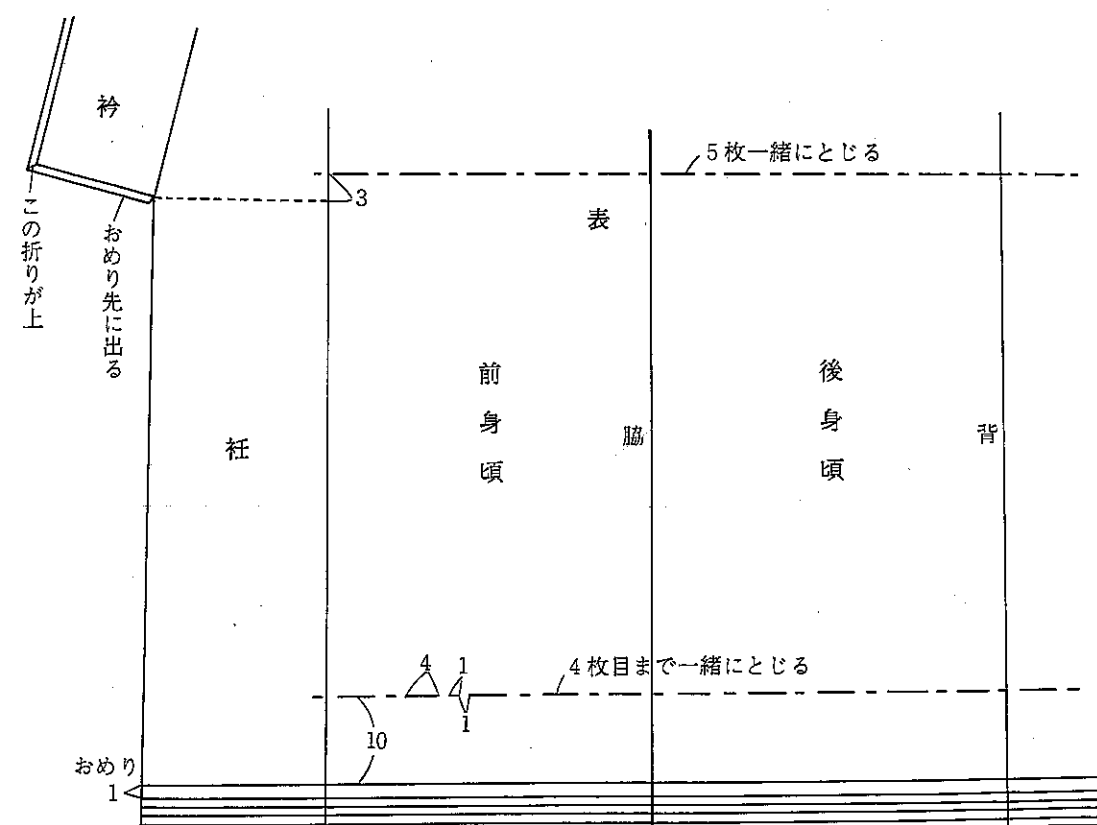
●裾および裾廻り丈のところを、図の位置に、裾の方は一、二、三、四枚目まで一緒に、衿つけより一針先までとじる。

●上部は衿下から3cm上を五枚一緒にとじる。

衿のとじ方

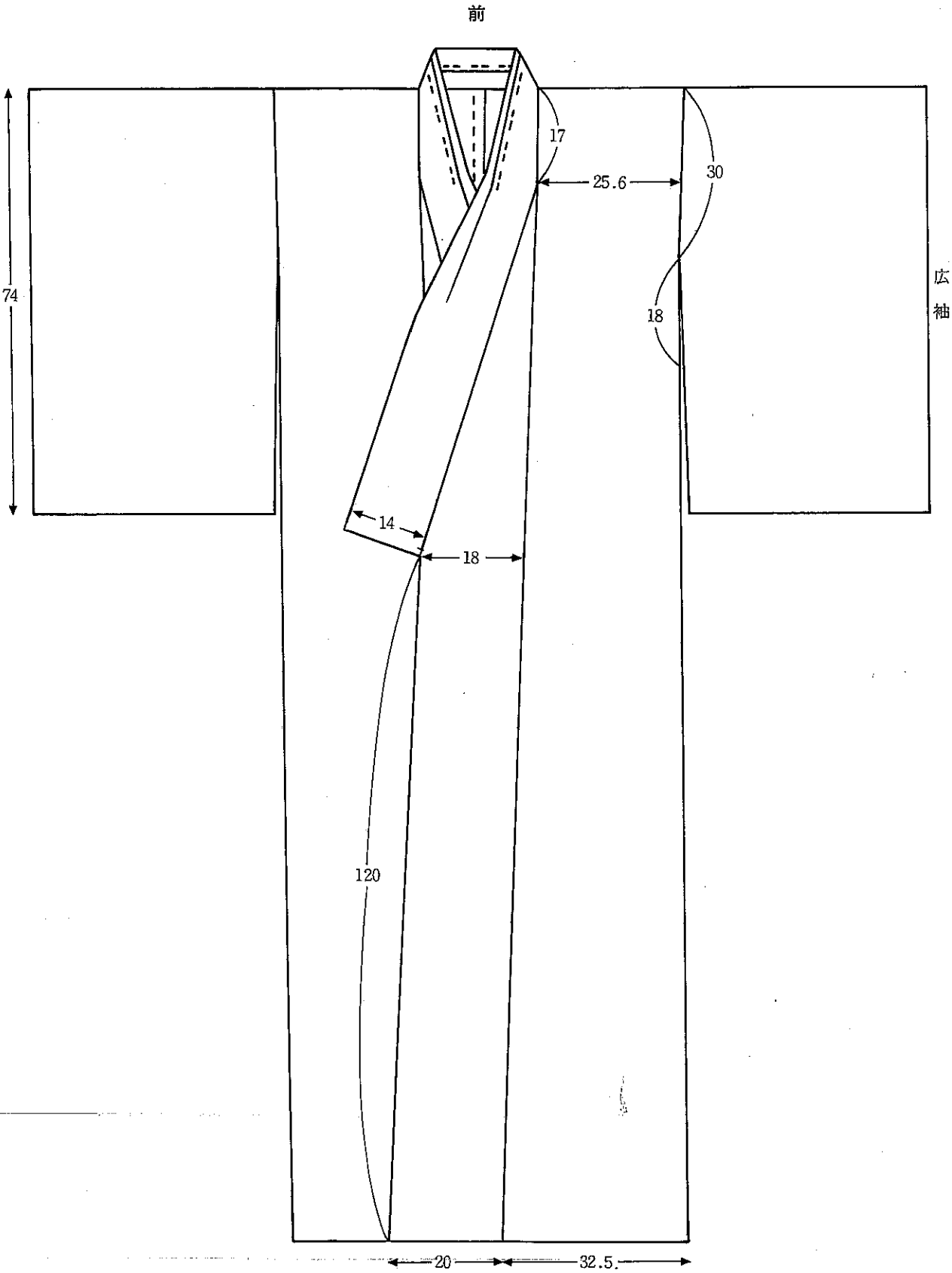


裾・裾廻り丈のとじ方



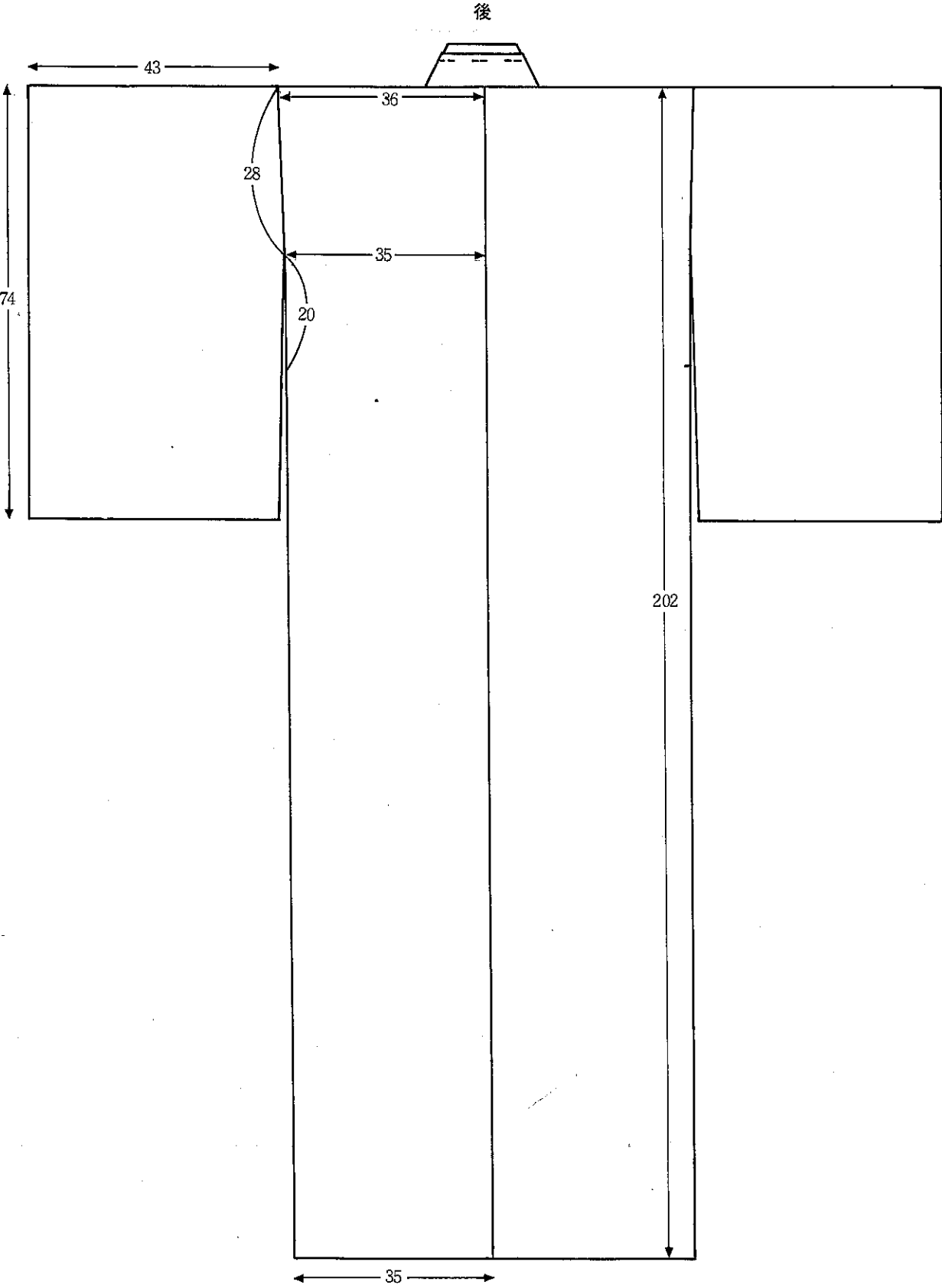
単

もえぎ きりぎりし もんかた おりあや
裂は萌黄幸菱文固織綾を使用する。



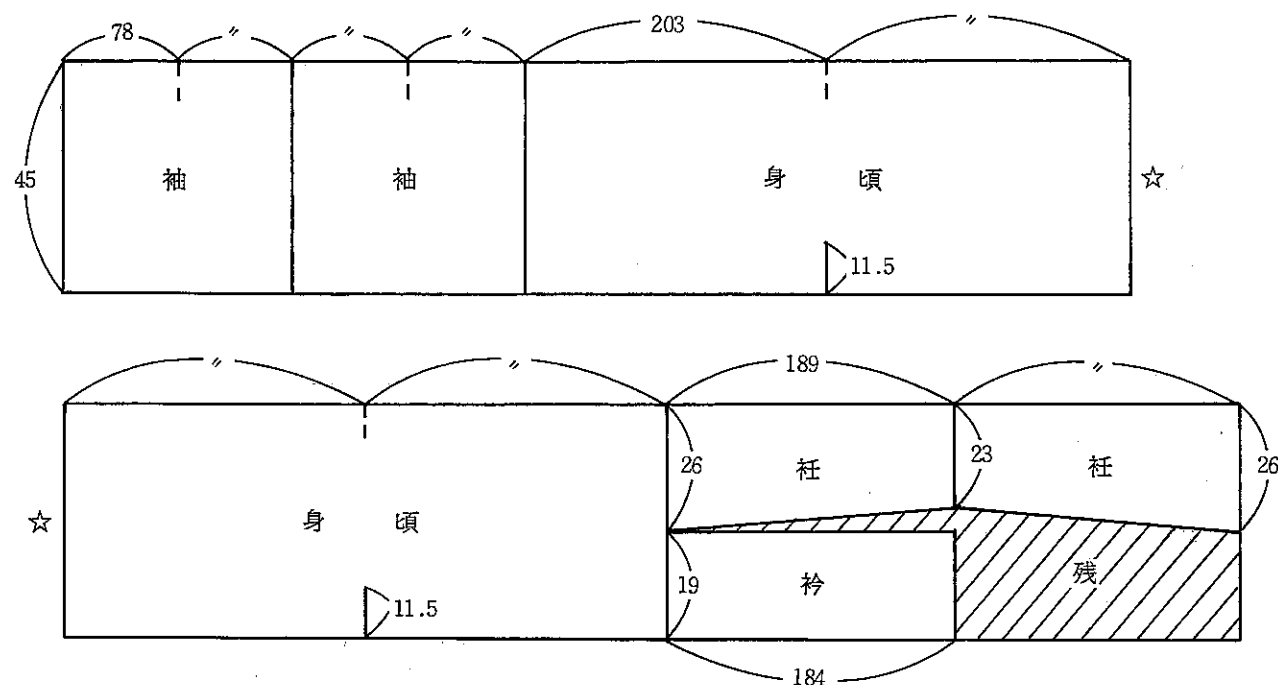
出来上り寸法

出来上り図の寸法どおりである。



裁ち方

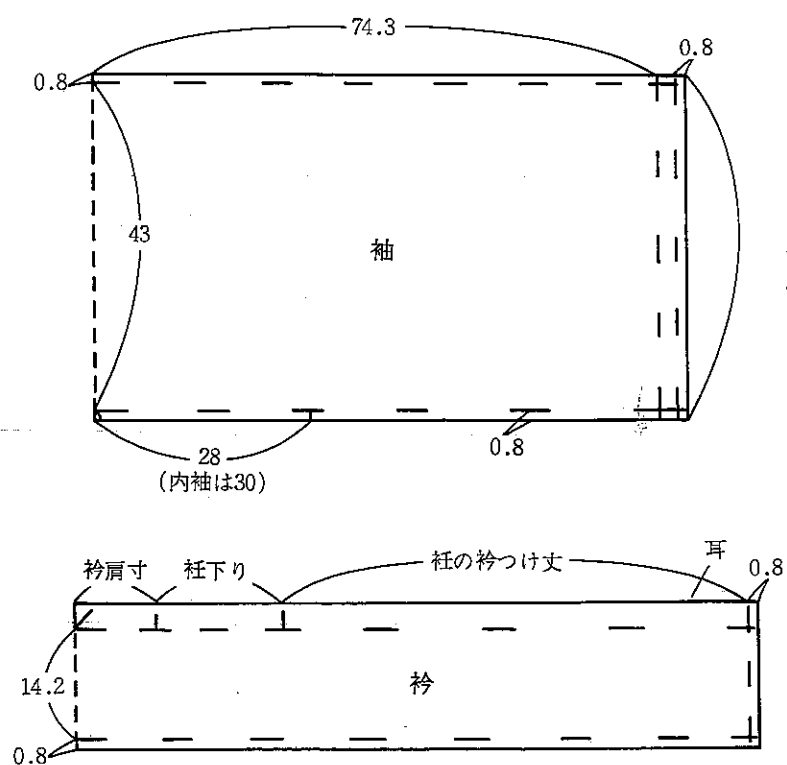
●布幅45cm、総丈1502cmで裁ち方図のように裁つ。



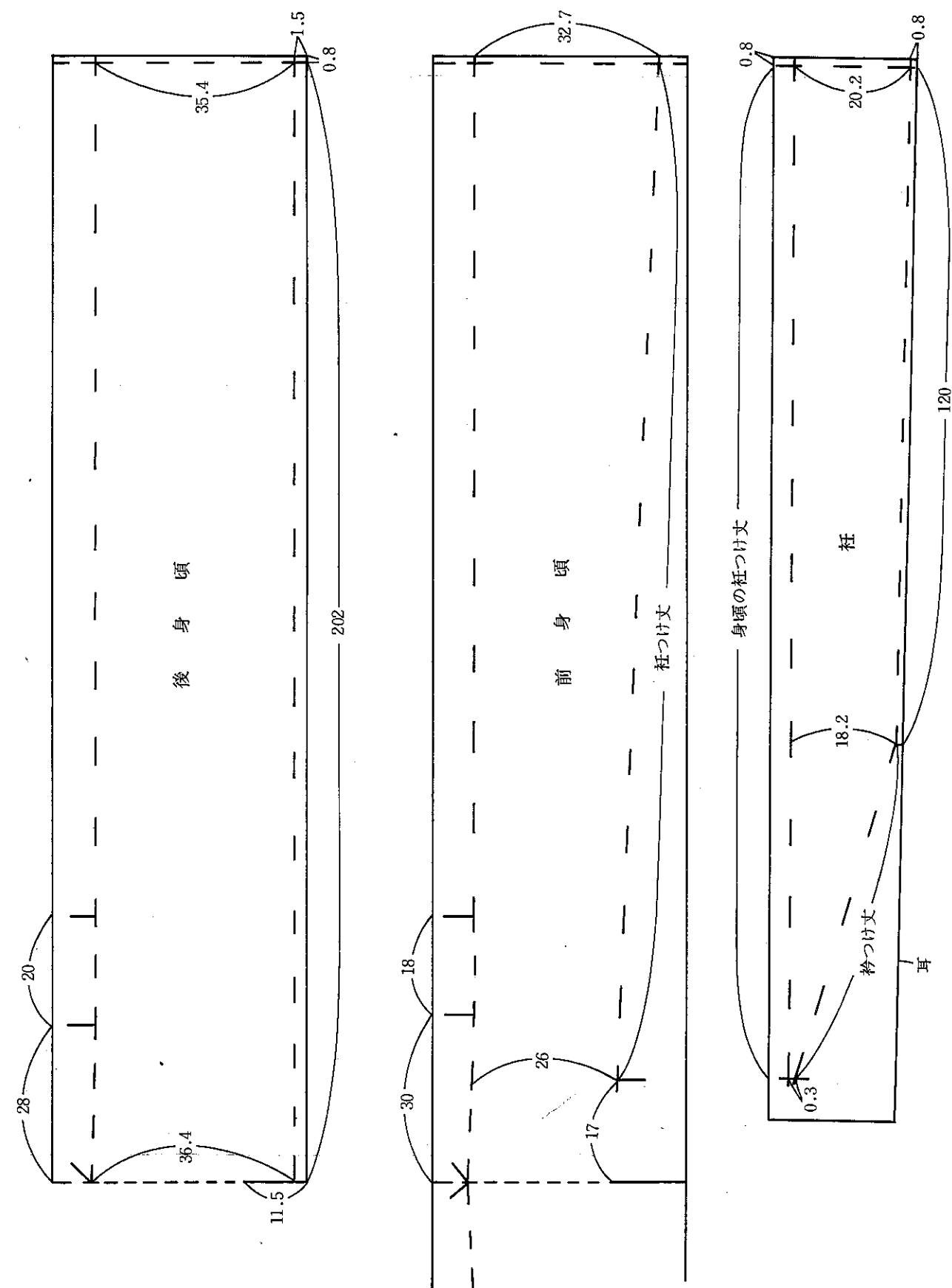
$$\begin{aligned} \text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 4 + \text{衿丈} \times 2 &= \text{総丈} \\ 78 \times 4 + 203 \times 4 + 189 \times 2 &= 1,502\text{cm} \end{aligned}$$

標つけ方

●袖、身頃、衿、衿を図のように標をつける。



1. 袖口と袖底の標つけ
2. 袖口のひねりをする
3. 袖幅の標つけ
4. 袖つけ縫い代0.8cmをつけ
余分の布は切り落とす



縫い方

●縫い目は0.7~0.8cmで縫う。縫い代のきせは0.2cmにする。

●縫い糸は同色のS撚絹糸を使用する。

●袖口、振、身八つ口、裾、衿下、衿幅および衿先は薄のりをつけてひねりをする。

袖

●袖底は袋縫いにする。

●二度縫いの時に、袖口と振の部分は二~三回からげて糸留めをする。

●袖口および振の袋縫いの縫い代を、三角に内側へ折り合わせてくける。

●袖底の縫い代はきせてかけて内袖へ折る。

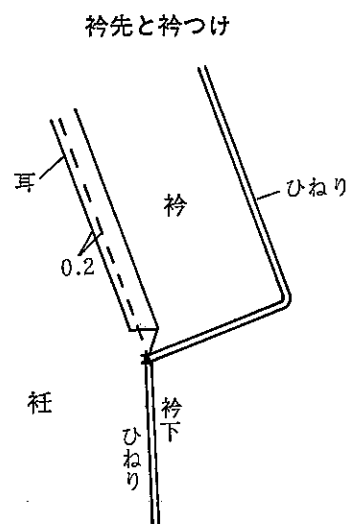
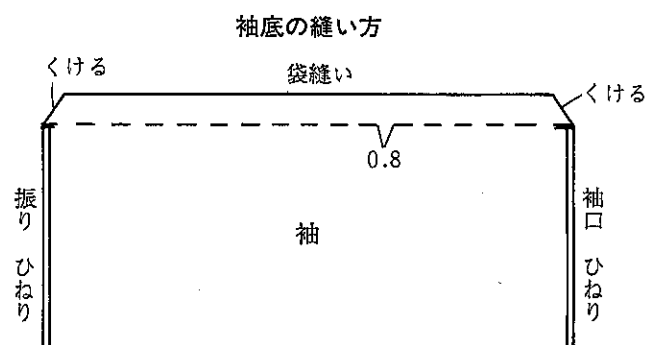
身頃

●背縫いは標どおりに袋縫いをして、縫い代はきせをかけて左身頃へ折る。(一度縫いの縫い代は0.5cm)

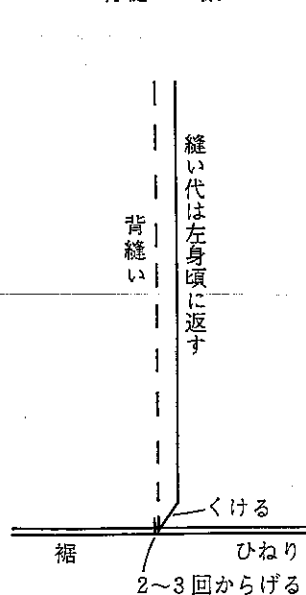
●裾の部分の糸の留め方および縫い代の三角の始末の仕方は袖口と同様にする。

衿

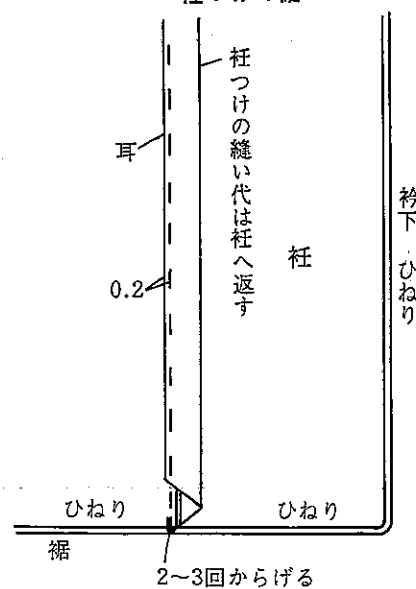
●前身頃の標と衿の標とを中表に合わせて待針を打ち、次に衿の縫い代の耳端から0.2cmのところへ待針を打ち直して、衿の縫い代を二つ折りにし、つまり衿の縫い代で前身頃をはさむようにして衿つけをして、きせをかけて縫い代は衿へ返す。



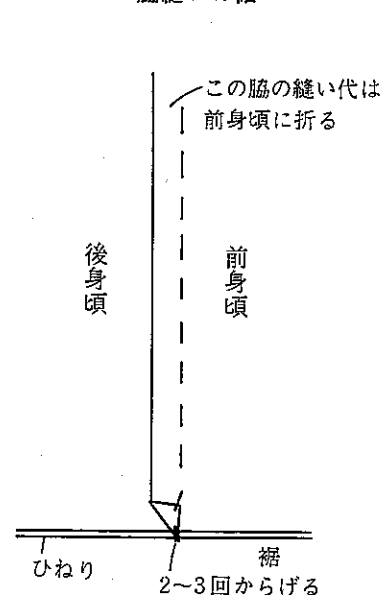
背縫いの裾



衿つけの裾



脇縫いの裾



●このとき、裾は図のように三角に折って縫う。

衿

●衿つけは、衿の縫い代で身頃をはさみ、衿つけと同様に衿先を三角に折って衿をつけ、縫い代はきせをかけて衿に折り返す。

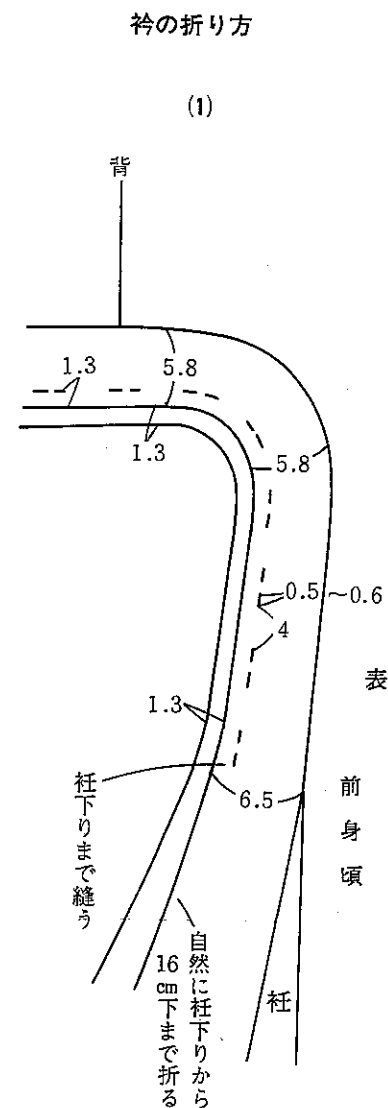
脇縫い

●つぎに脇縫いをする。裾は図のように三角に折って縫い、身八つ口は二~三回糸をからげて留めをする。

●縫い代はきせをかけて前身頃へ返す。

袖つけ

●袖つけは、袖と身頃を標どおり合わせ、袖つけのとき



ろは身八つ口と同様に二~三回糸をからげて留めをする。

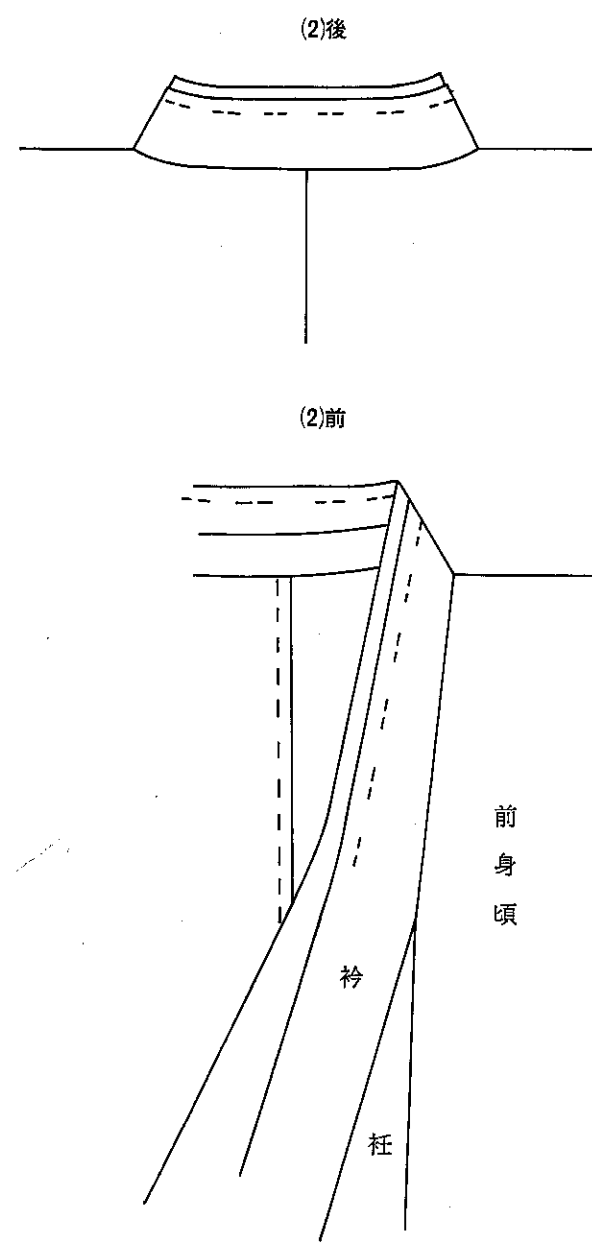
●縫い代はきせをかけて袖の方へ返す。

衿の折り方

●衿の折り方は、衿の表側で衿肩廻りを衿幅5.8cmとし、衿下りの位置で衿幅6.5cmとして、衿肩の幅より斜めにし、裏側へ折り、その衿幅から衿端を1.3cm出して図のように折る。

●つぎに、同色のZ撚り絹糸で衿幅から1.3cm内を針目0.5~0.6cm、間隔0.5~0.6cmで二針出し、さらに4cmの間隔で表裏同じように二針出して、衿下りのところまで図のようにとじる。このとき、4cmの間隔の糸は衿幅の間を通す。

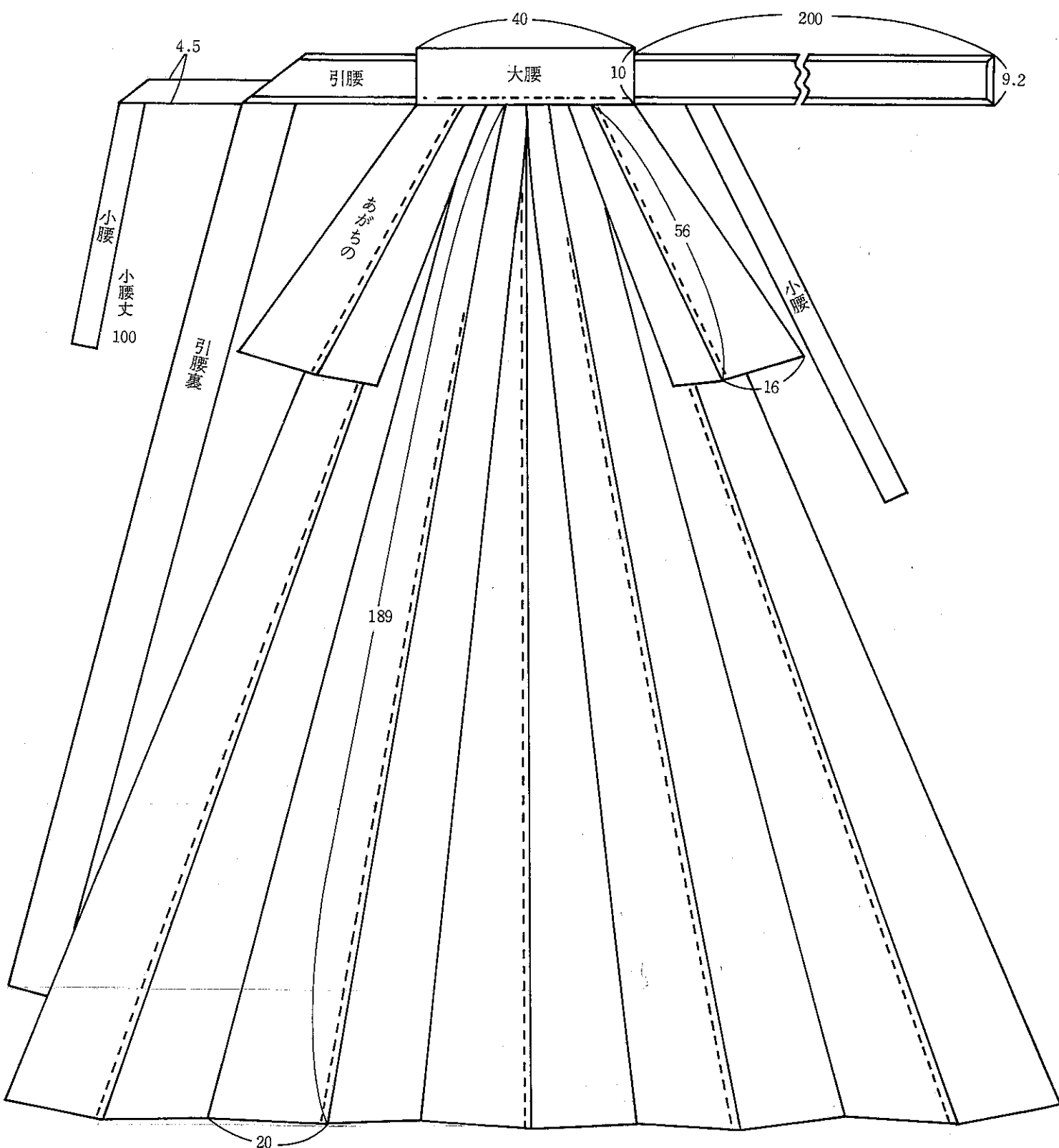
●とじより下は、図のように自然に折る。



も 裳

裳は大腰の下にあがちの十枚の裂を^は接いで裳をとつたもので、大腰の左右に引腰と小腰がつく。
裳には白紗地波文様に松島を^{しやうしやうなみんようまつしま}絵いた裂を使用する。

引腰および大腰の表裂には白地^{しろち}窠^{かに}蓑^{あはれ}文^{もん}様の綾を、裏裂は白羽^{はふたさ}二重を使用する。
小腰の裂は白と水浅葱色の^{みずあさぎいろ}だんだらに染め分けた塩瀬^{しおぜ}羽二重を使用する。



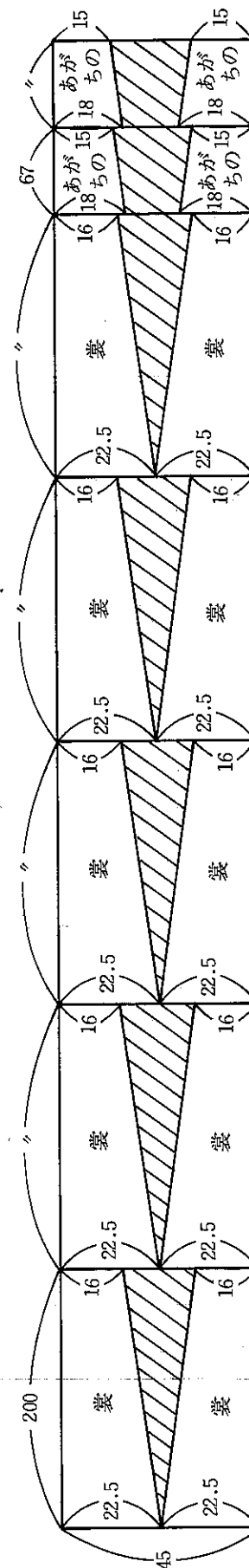
出来上り寸法

出来上り図の寸法のとおりである。

裁ち方

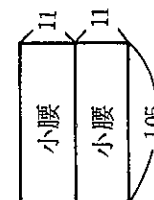
- 幅45cmで裳布十枚、あがちの布四枚を波模様が逆さにならないようにして、図のように裁つ。
- 引腰、大腰の表布、小腰および引腰、大腰の裏布をそれぞれ図のように裁つ。

裳

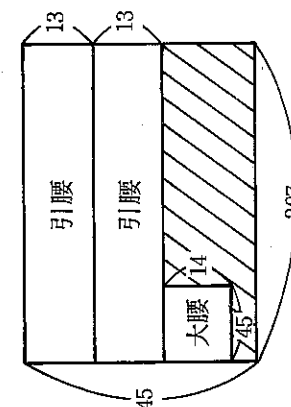


裳丈×5+あがちの丈×2=総丈
200×5+67×2=1,134cm

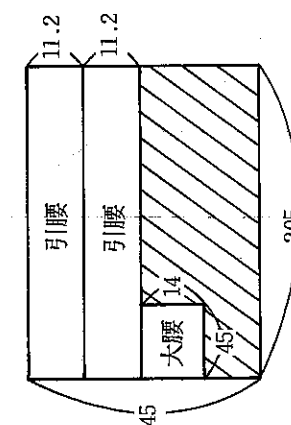
小腰



引腰・大腰裏布



引腰・大腰表布

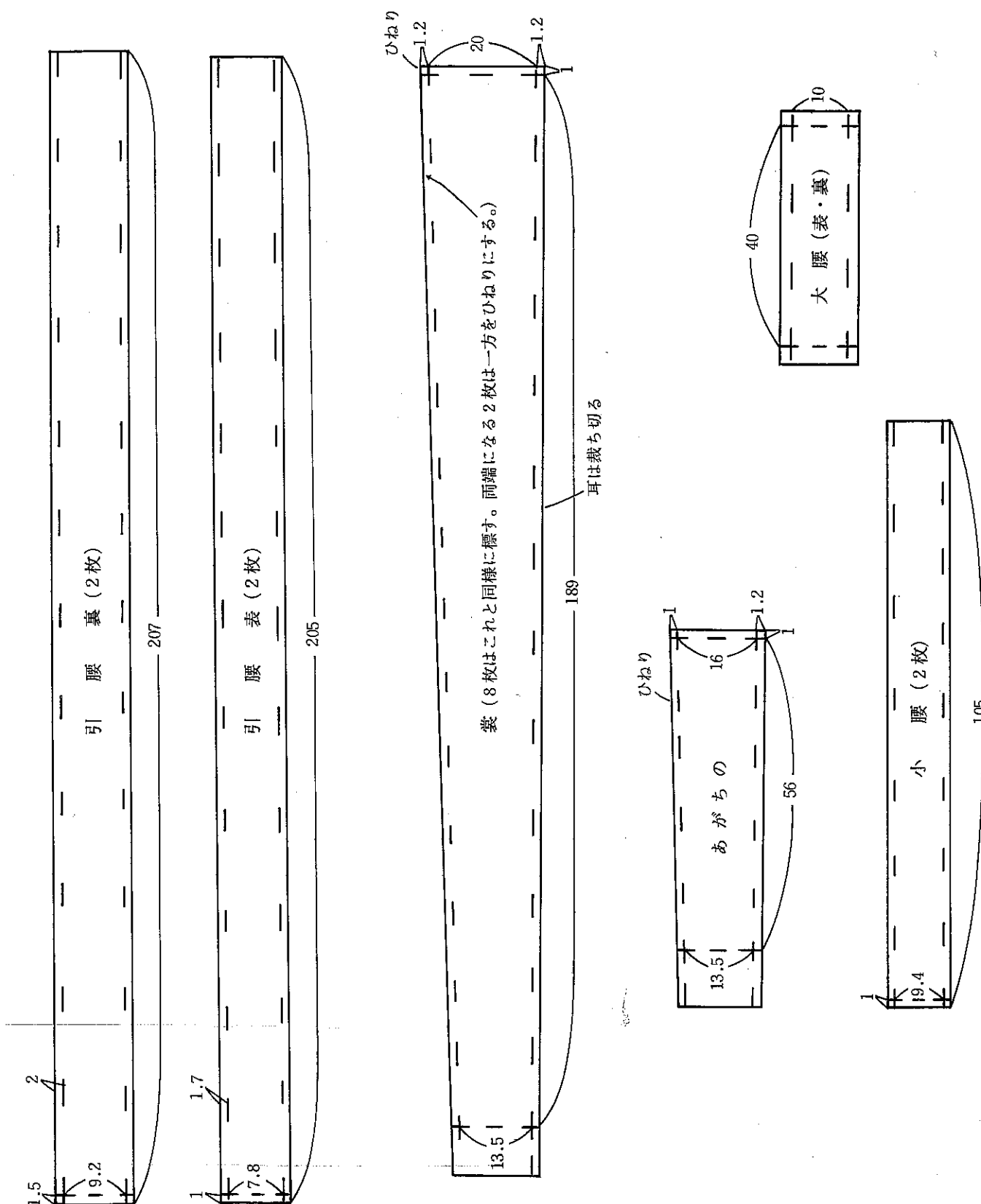


標つけ方

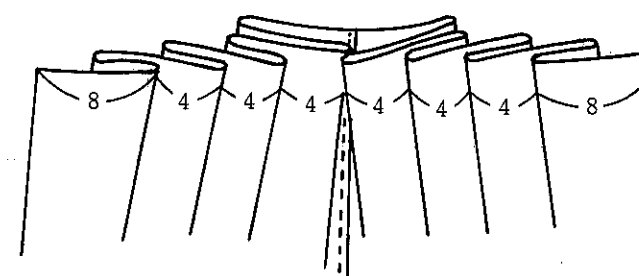
- 裳布およびあがちの布を、それぞれ二枚を中表にして図のように標つける(標をつけるとき耳は裁ち切る)。
- 引腰の表は幅7.8cm、丈はいっぱいに標をつける。裏は

図のように幅9.2cm、丈いっぱいに標をつける。

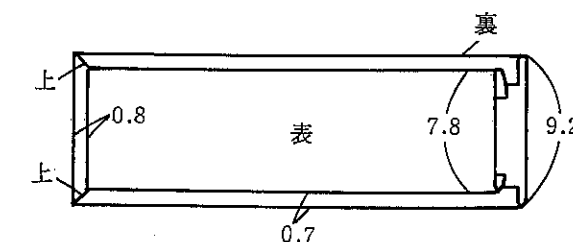
- 大腰は表裏とも腰幅40cm、高さ10cmに標をつける。
- 小腰は出来上り幅4.5cmになるように、丈はいっぱいに標をつける。



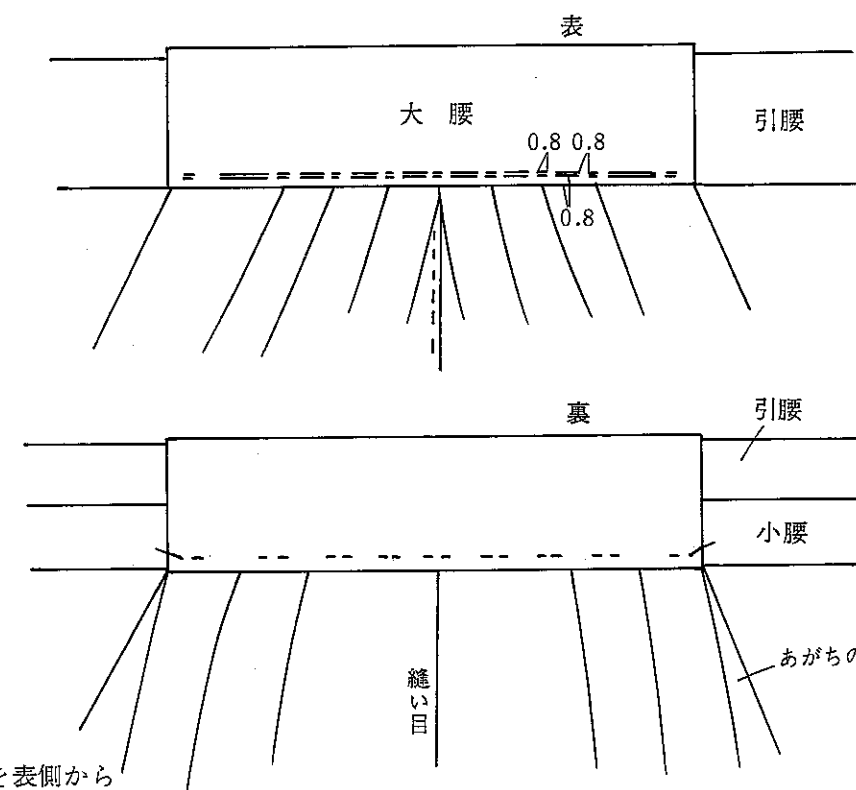
襷の寄せ方



引腰の作り方



腰の上刺し



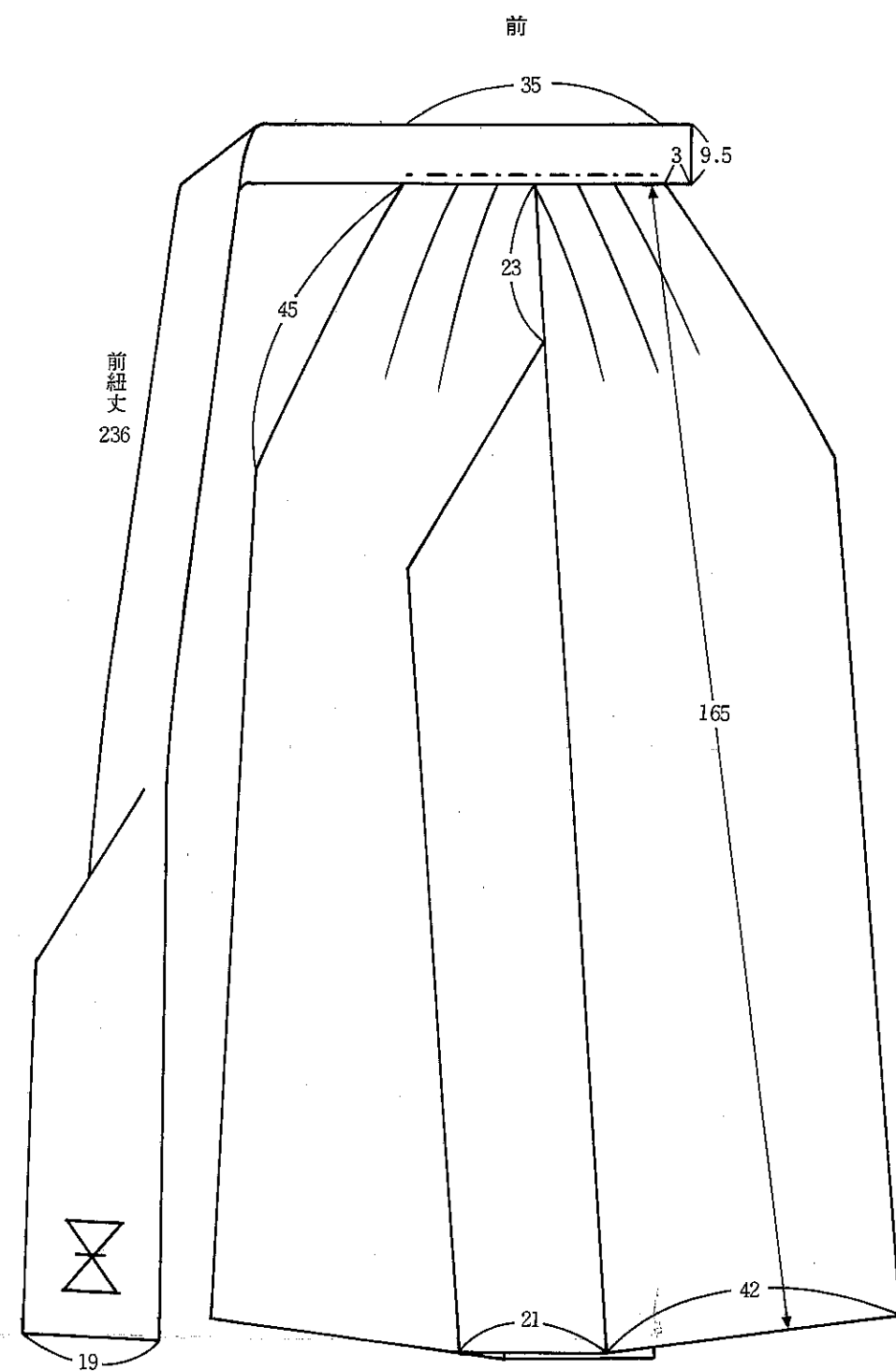
縫い方

- 縫い糸は白色のS撚り絹糸を使用する。
- 裳布およびあがちの布の裾に薄のりをつけて、出来上り幅0.2cmにひねりをする。このとき、裳布両端の二枚およびあがちの布両端二枚の端も、裾に続けてひねりをする。端はいずれも斜めに裁ち切った方を使い、これをひねる。
- 裳布の縫い合わせ方は、上部より裾の方へ縫い進む。
- 針目は大針1.5~2cm、小針0.8~1cmで二目おとしに縫い、裾はひねりのところを二回からげて玉結びをする。
- 中央の縫い目は、布目のまっすぐのところを表側から縫う。
- その他も、布目のまっすぐのところはいずれも表側から縫い合わせる。
- 布目の斜めのところは、全部裏側から、上部より裾の方へ縫い合わせる。
- あがちの布も同様に縫う。
- 縫い代の折りは、いずれもきせをかけて上部を右方にして手前に折る。
- つぎに図のように腰幅に襷を取り、しつけで押さえておく。
- 引腰は表裏とも標どおり折りをつけ、表を裏の上へ図のようにのせ、しつけで押さえて針目1cmで三方をくける。
- 小腰は幅を中表に折り合わせて、針目0.6cmで縫って、0.2cmのきせをかけて表に引き返す。

- 大腰の表布の方には、腰板として薄い板目紙を幅40cm、高さ10cmに裁ったものを入れる。
- また裏布の方へは、西の内を裏と同寸法に裁ち、周囲にのりをつけて裏打ちをする。
- 大腰の上部を表裏合わせ、針目0.6cmで縫う。
- 大腰の高さと幅を寸法どおりに折る。
- 大腰つけは、大腰の表裏で裳布をはさみ、また幅の両端へは引腰を表側の方へ当て、引腰の先の縫い代を4cmはさみ込み、また小腰はその裏側へ紐先の縫い代を2cmほど差し込んで裳布にとじつけておく。
- 腰の上刺しは、白色のZ撚りとS撚りの二本の紐で、腰幅のところを図の寸法どおり襷山で小針を出し、二目おとしにして大腰をつける。
- 大腰の両端はくけ合わせておく。

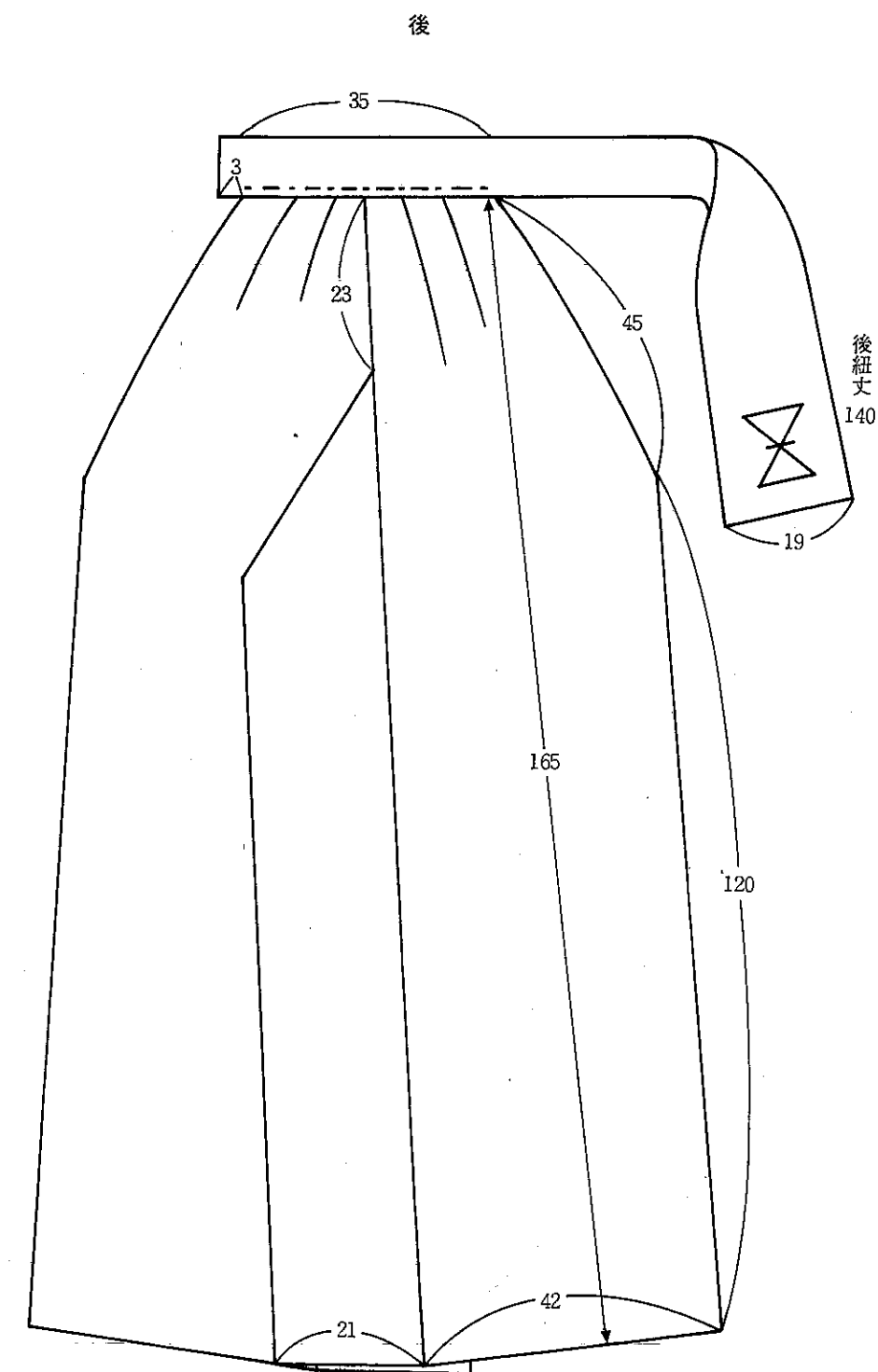
なが
長 袴

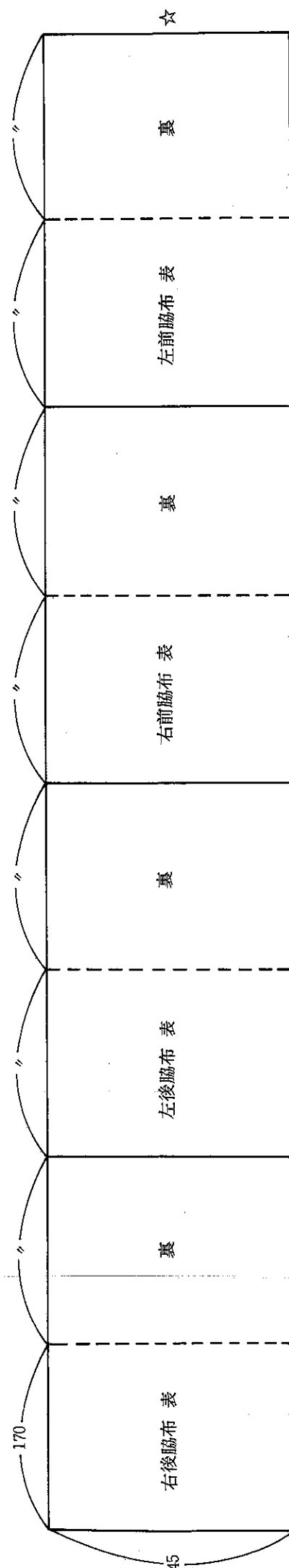
生地は表裏とも緋の精好を使用する。



出来上り寸法

出来上り図の寸法のとおりである。





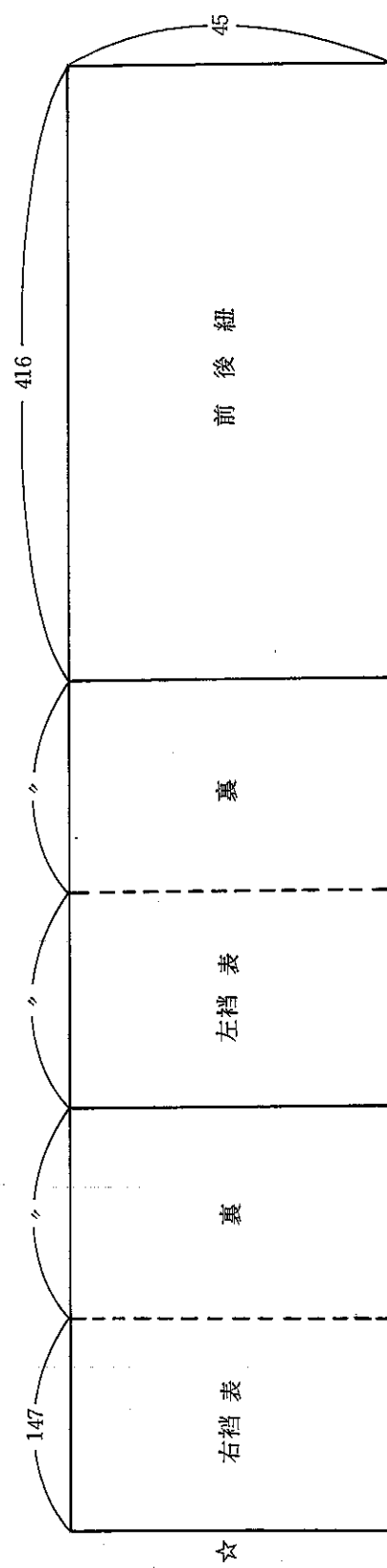
裁ち方

●図のように脇布および袴の表裏を続けて裁つ。

標つけ方

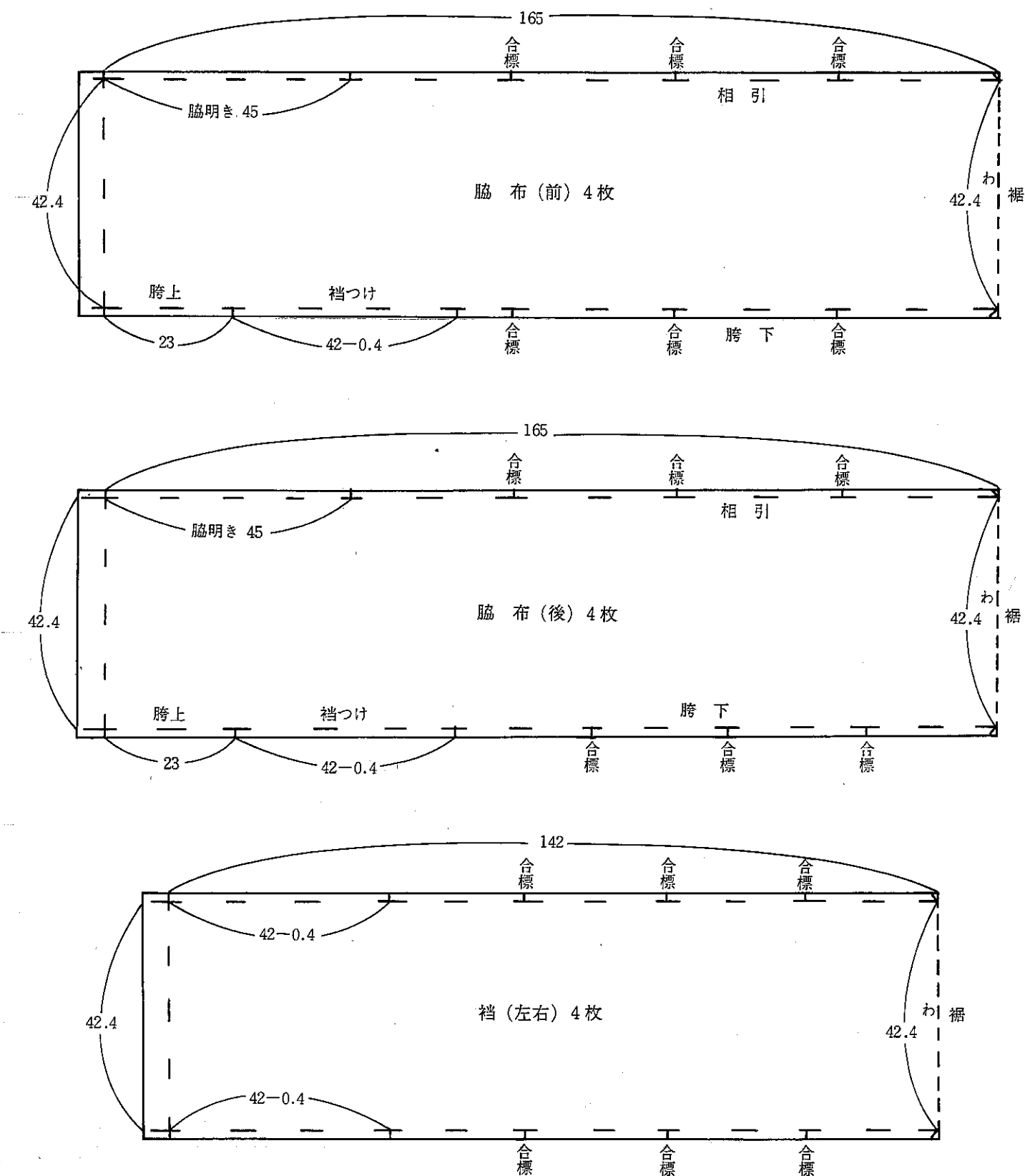
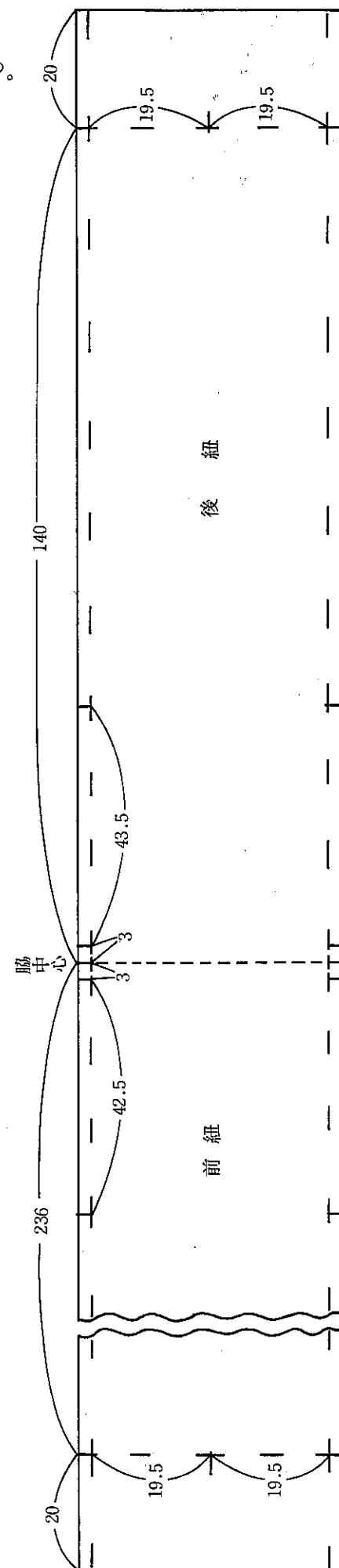
●図のように前脇布、後脇布および左右袴の標をつける。

●紐は幅、丈を図のように標をつける。



脇布丈×8+袴布丈×4+前後紐丈=総丈

170×8+147×4+416=2,364cm



縫い方

●縫い糸は赤色Z捻り絹糸を使用する。

●縫い目は0.5~0.8cmとして、縫い目には0.2cmのきせをかける。

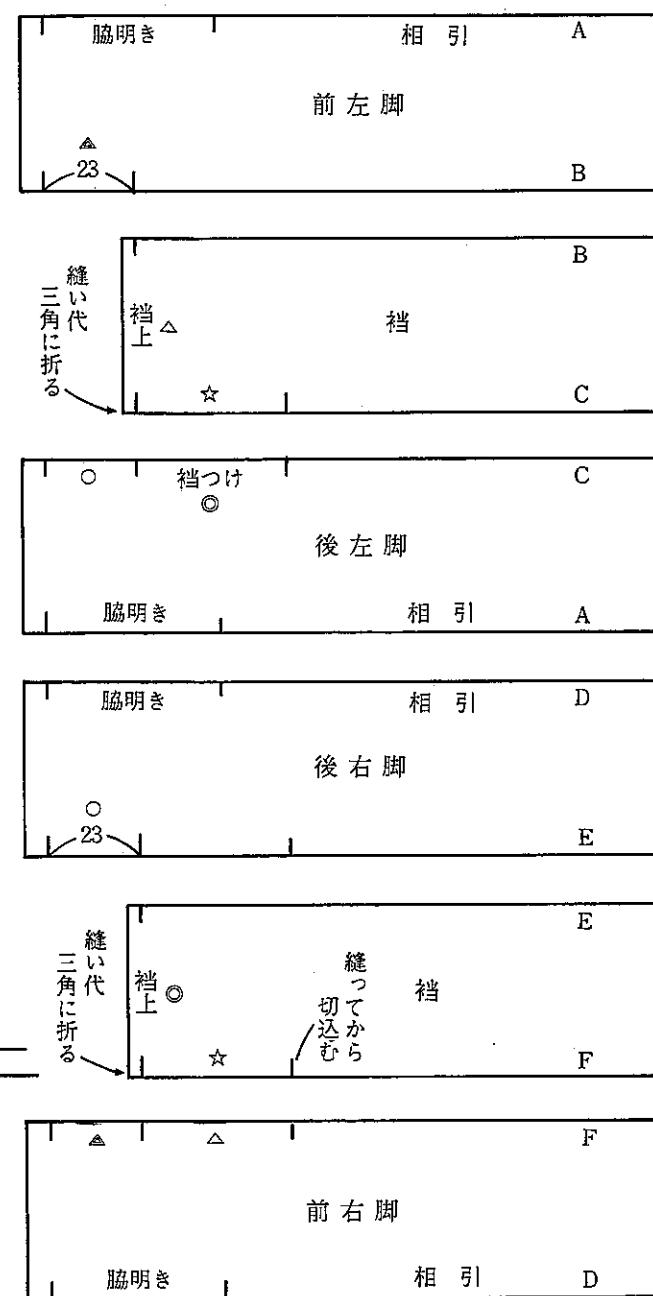
●脇明きは左脚の後を、表布は標より0.2cm先を、また裏

布は標より0.2cm奥を合わせて縫い 0.2cmのきせをかけて縫い代は裏へ折り、表へ返して裏布を0.2cm控えてしつけをかける。

●右脚前の脇明きも同様に縫う。

縫い方順序

裆つけおよび相引の縫い方



四つ縫い
前左脚Aで後左脚Aをはさむ

四つ縫い
裆のBで前左脚Bをはさむ

三つ縫い
裆のC表裏2枚と後左脚C裏1枚
とで縫う

四つ縫い
後右脚Dで前右脚Dをはさむ

四つ縫い
裆のEで後右脚Eをはさむ

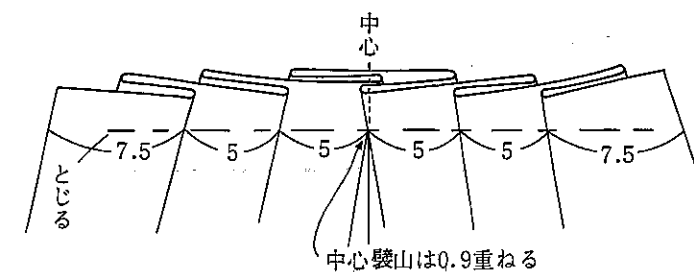
三つ縫い
裆のF表裏2枚と前右脚F裏1枚
とで縫う

- 後布の相引のところを、表側から表裏の標を合わせてしつけをかけておく。
- 左脚の相引は、前布で後布をはさみ四つ縫いをする。このとき、裾口5cmの間は二枚で縫う。
- 右脚相引は、後布で前布をはさんで四つ縫いをする。
- 相引の四つ留めをして、脇明きを前述と同様に縫う。
- 四つ留めは、左脚は前表布から針を出し、後表裏を通し、前裏布を縦にすくい、逆の順に戻って前表布に出して結ぶ。
- 右脚は後表布から針を出し、前表裏、後裏布の順にして後表布に戻って結ぶ。
- 左脚の前布、右脚の後布の裆つけのところを、表側よ

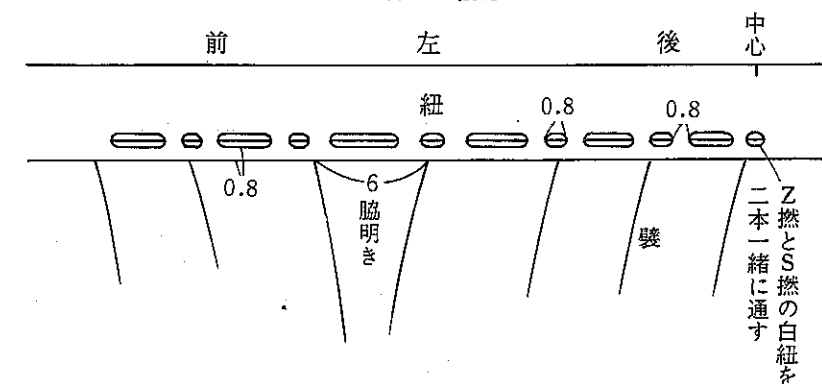
り表裏の布を標どおり合わせ、しつけでとじる。

- 裆つけは、左脚の前布を裆の表裏ではさみ、裆つけの上部の標まで四つ縫いをする。
- 右脚の後布を裆の表裏ではさみ、左脚と同様に標まで四つ縫いをする。
- つぎに、左脚、右脚裆の一方および上部を、表裏合わせて表側よりしつけでとじる。このとき裆の上部の一方を図のように三角に折っておく。
- 一方の裆つけは、後左脚の裏布と裆の表裏の三枚を合わせ、裆つけの標まで三つ縫いをする。
- 前右脚も同様に三つ縫いで裆つけをする。
- つぎに、図のように後左脚の裆つけの◎印と右脚裆上

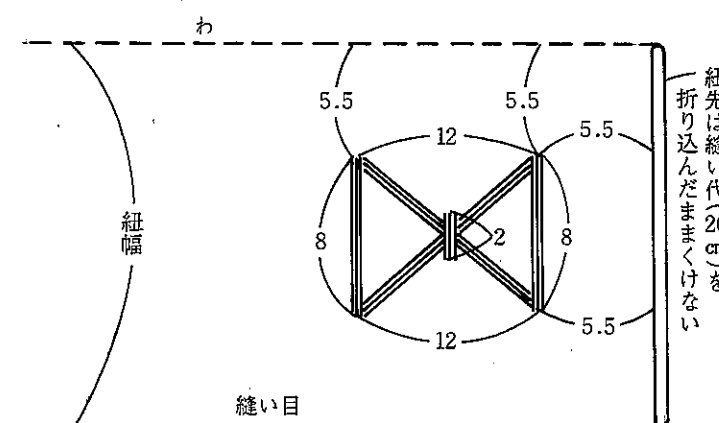
襷の取り方



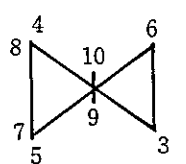
上刺しの仕方



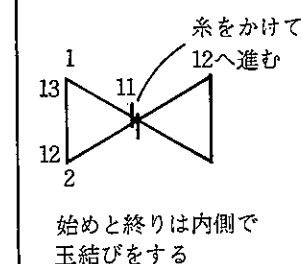
立鼓のつけ方



後紐表



後紐裏



- の◎印とを合わせ、後左脚上部○印と後右脚上部の○印を合わせ、続けて三つ縫いをする。
- 前右脚△印と左脚裆上の△印を合わせ、前右脚上部△印と前左脚上部△印を合わせ、続けて三つ縫いをする。
- つぎに、左脚裆の☆印の表裏と、右脚裆の☆印の裏を合わせて三つ縫いをする。このとき図の位置に裆に切り込みを入れる。この部分は縫い残した裆を標どおり折って、三つ縫いの縫い目にのせてくける。
- 胯下、裆つけ、上部の三つ縫いの部分は、後左脚表および前右脚表の縫い代を標どおり折って縫い目の上にのせて、表側からくけつける。
- 前後の襷を図の寸法に寄せて、縫い糸で押さえておく。
- 紐は標どおり折り合わせてくける。このとき紐先は縫

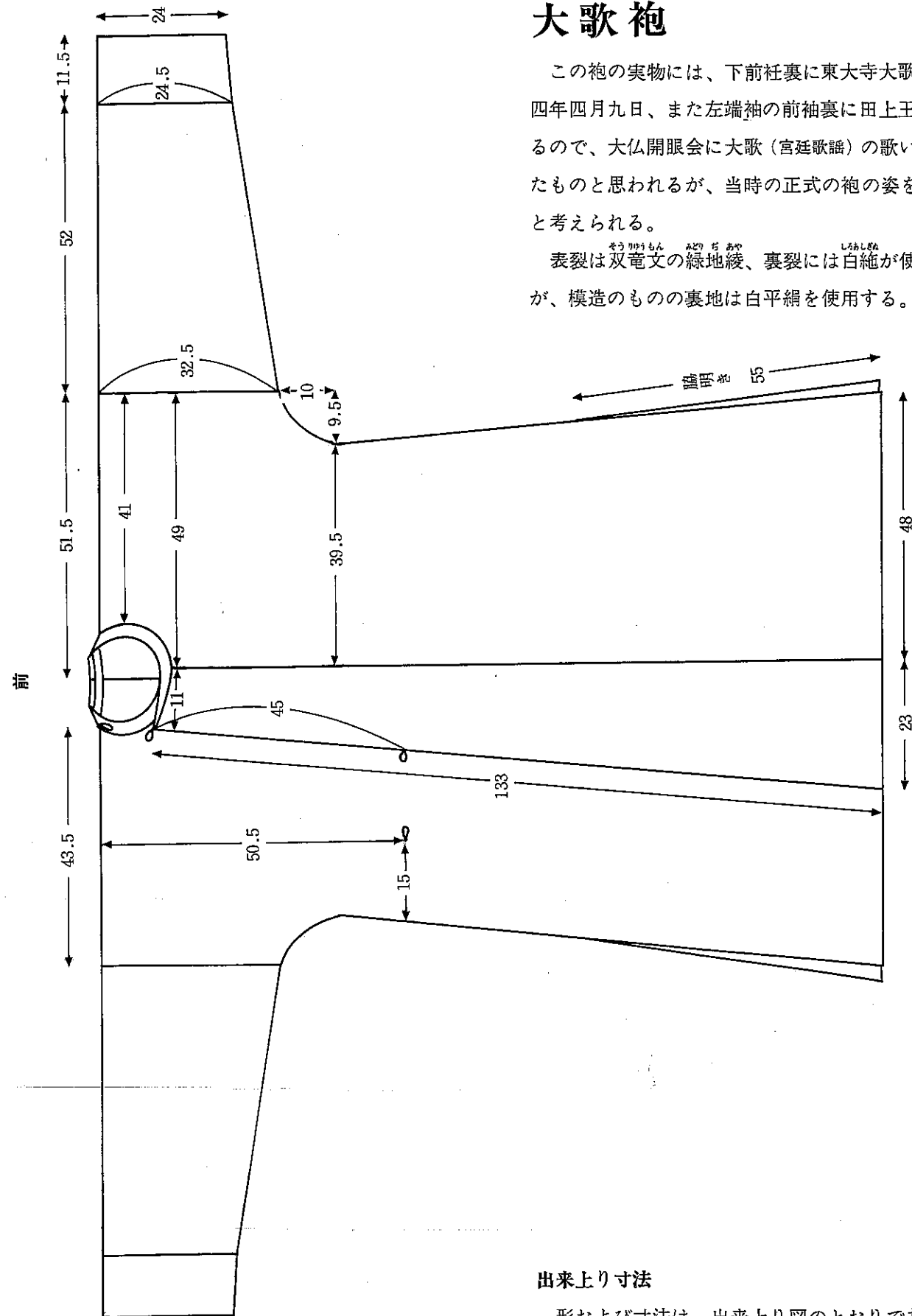
- い代20cmを折り込んでおく。なお、後紐で140cmを計り、前後の紐つけ寸法76cmをくけ残しておく。
- 後紐140cmが後の袴になるようにして、左脇の前後の間を6cm明け、紐の表裏で袴をはさみ、上刺しはS捻りおよびZ捻りの打紐二本で、図の位置に襷山には小針を出し、また脇明きのところは針目を長くとはして紐つけをする。
- 前紐は紐つけのところから125cm、後紐は3.5cmまで、紐幅を三等分して屏風だたみに出来上り図のように折り、くけておく。
- つぎに、紐先の飾り「立鼓」をS捻りおよびZ捻りの打紐90cmを二本で、図の位置へ番号の順に刺す。始め、終りとも紐の内側で玉結びで留める。

正倉院宝物の模造

おゝ うた のほう
大歌袍

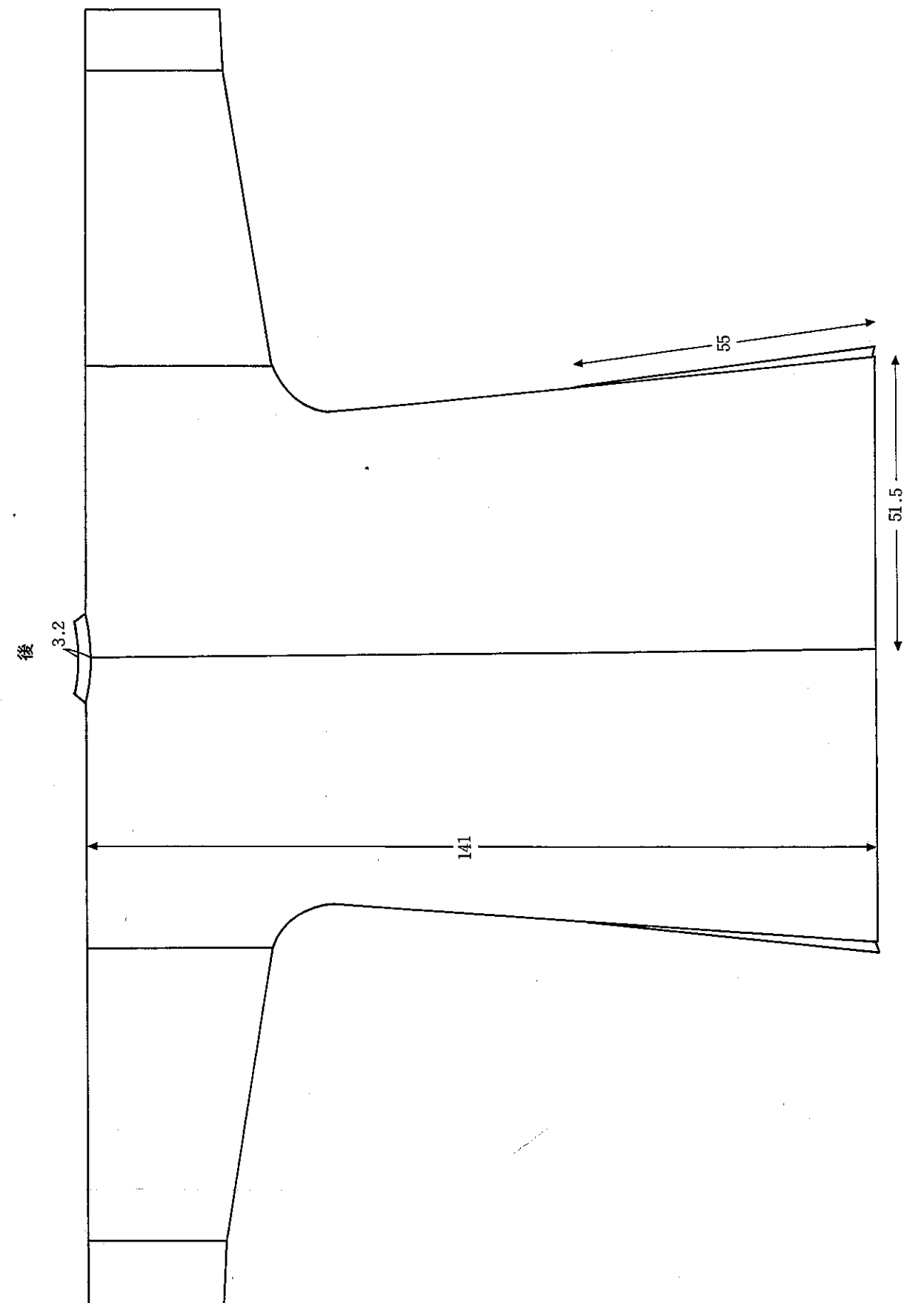
この袍の実物には、下前衽裏に東大寺大歌袍天平勝宝四年四月九日、また左端袖の前袖裏に田上王の墨書があるので、大仏開眼会に大歌（宮廷歌謡）の歌い手が着用したものと思われるが、当時の正式の袍の姿を伝えたものと考えられる。

表裂は双竜文の緑地綾、裏裂には白紵が使用してあるが、模造のものの裏地は白平絹を使用する。



出来上り寸法

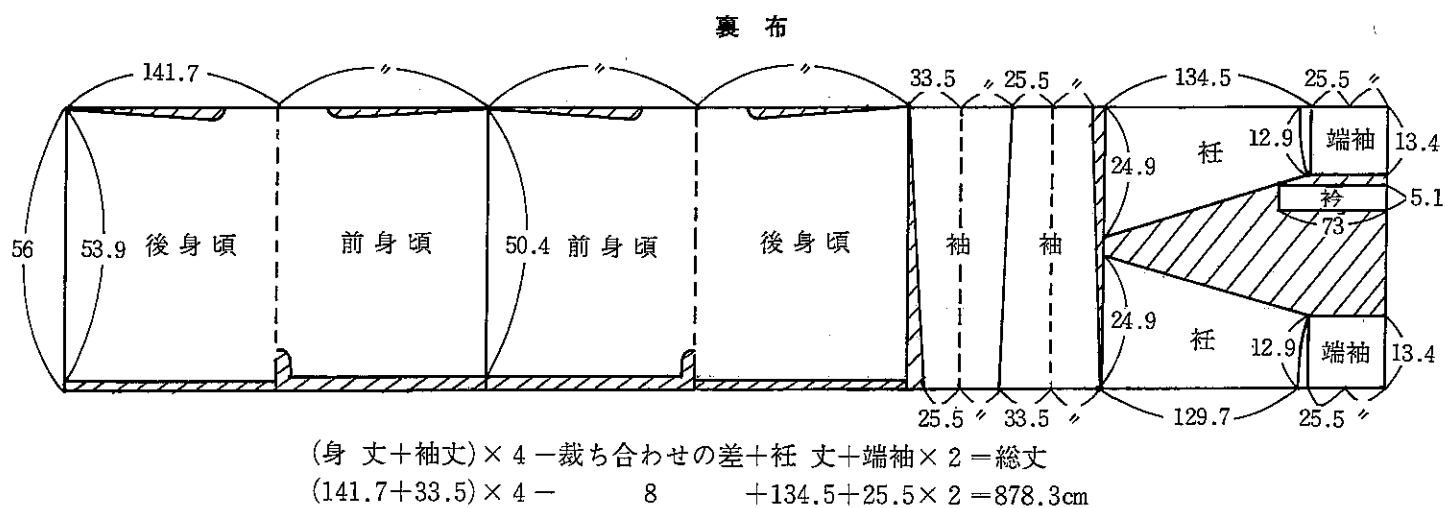
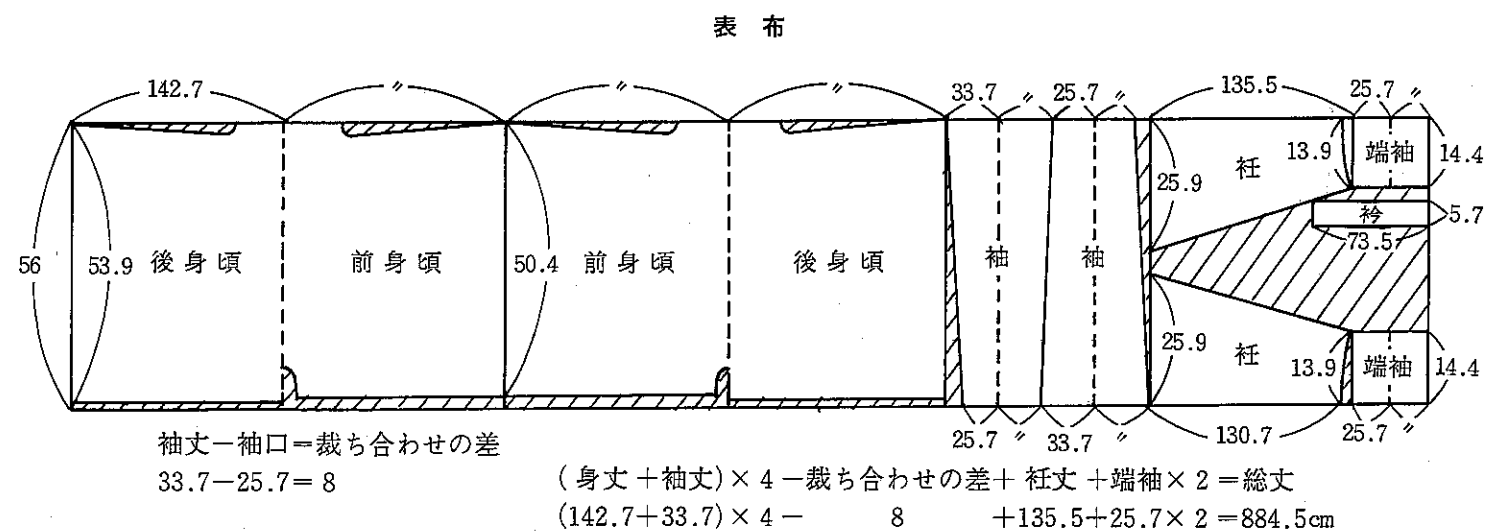
形および寸法は、出来上り図のとおりである。



裁ち方

●表裏とも布幅56cmで、表は長さ884.5cm、裏は878.3cm

使用し、裁ち方図のように裁つ。

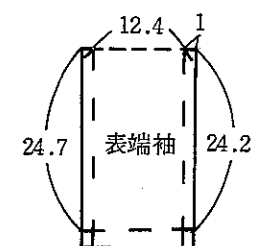
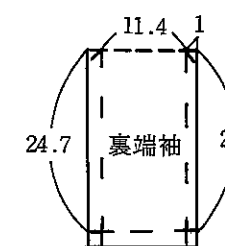
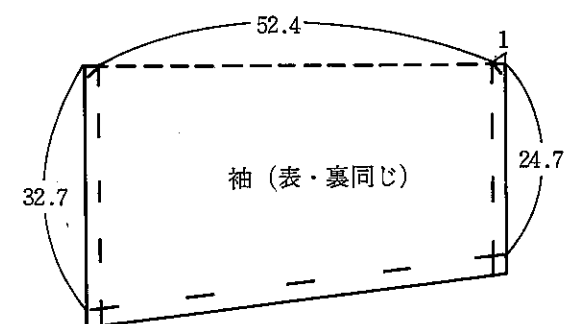
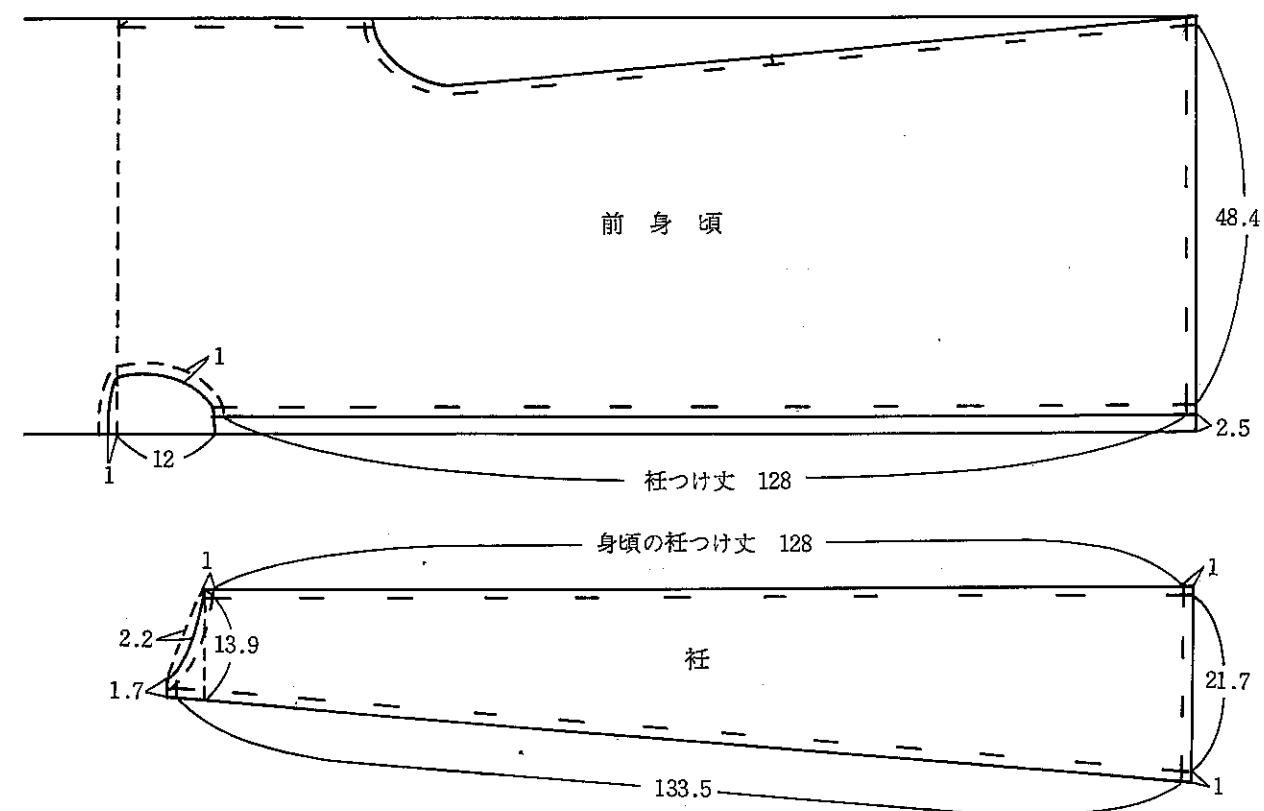
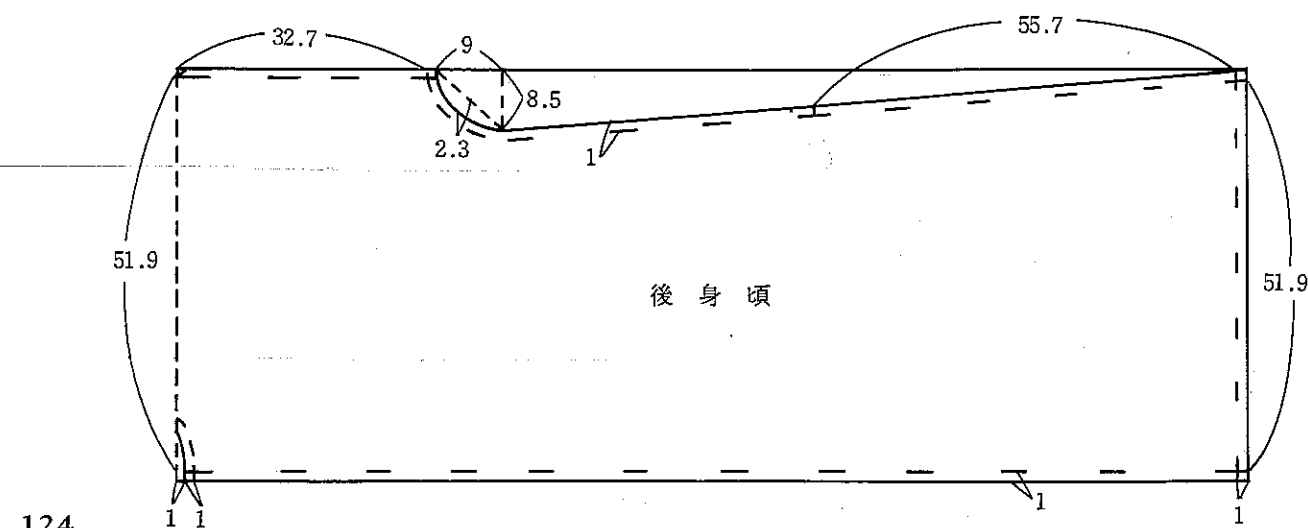


細部の裁ち方・標つけ方

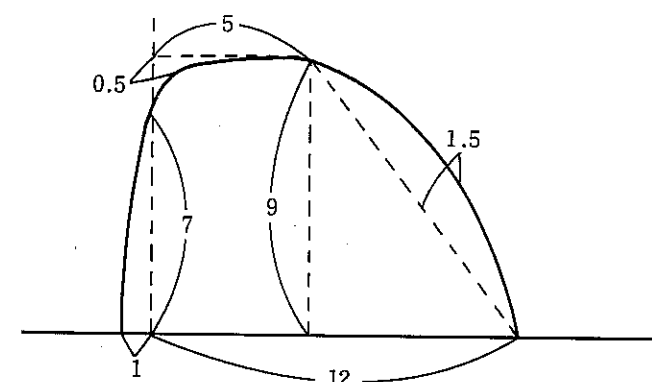
●端袖の表裏、袖の表裏を図のように標をする。

●表の後身頃は脇の割り方を図のように標し、背、袖つ

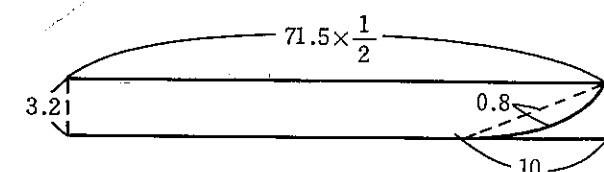
け、脇、裾の縫い代を1cmに標をつける。



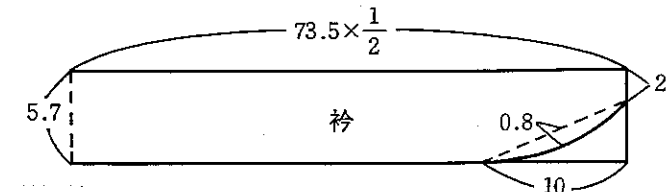
衿割りの裁ち方



衿型の裁ち方



衿の裁ち方



●前身頃は衿割りを図のように標し、前の方を2.5cm裁ち切る。

●衿割りと前に1cmの縫い代を標をする。

●裏身頃も表と同様に標をする。ただし、身丈は1cm短かく標をする。

●衿は表を上、裏を下にして、上部と衿つけの方を表裏合わせて置き、図のように上部に衿割りを標する。

●衿割り、衿つけ、衿端、衿丈に縫い代を1cm標する。

●表衿を取り除いて、裏衿に衿端、衿丈を表衿より1cm短かく標をつける。

●衿は図のように型紙を作る。

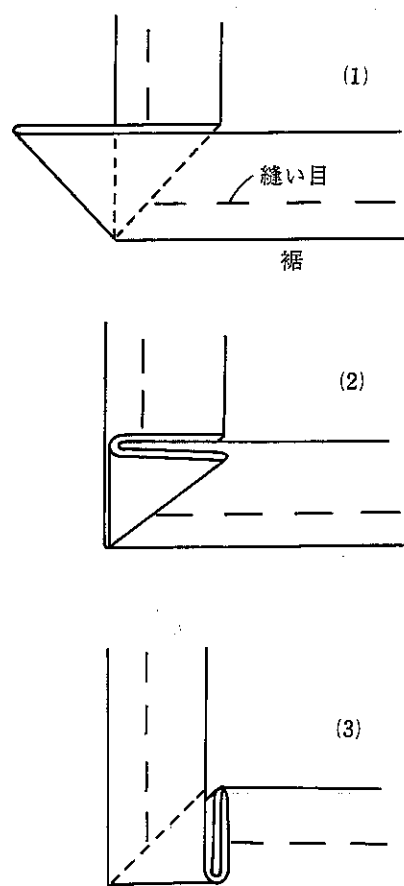
●表衿を上、裏衿を下にして、衿つけ側を表裏合わせて置き、その上に型紙を当て、衿つけ側は型紙どおりに標し、縫い代1cmとする。外側は型紙より0.5cm外に標し、縫い代1cmとする。

●表衿を除き、裏衿の外側の方を表の標より0.6cmせまく標をつける。

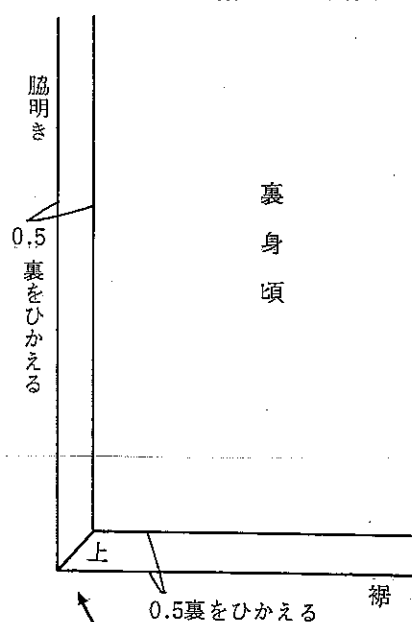
縫い方

- 縫い糸は表地と同色のS撚り絹糸を使用する。
- 針目は0.5cmとする。
- 端袖の袖口を表裏縫い合わせて、きせをかけて裏へ折り、表へ返して裏端袖を0.5cmひかえる。
- 身頃の裾、脇明きを縫い合わせ、きせをかけて裏へ折り、表へ返して裏布を0.5cmひかえる。
- 裾の角の縫い方、折り方は図のようにする。
- 背縫いは左身頃の表裏で右身頃をはさみ、四つ縫いをして、折りは左身頃に返す。
- 端袖の表裏で袖の表裏をはさみ、四つ縫いをして、折りは端袖に返す。この際、図のように前の方で三分のほど表裏別々に縫う。
- 袖つけは、袖の表裏で身頃の表裏をはさんで四つ縫いをし、折りは袖に返す。このときも、端袖つけと同様に前袖つけを三分の一表裏別々に縫う。
- 脇明きから袖口までを、前身頃の表裏で後身頃の表裏をはさみ、脇明き止まりに留めをして、四つ縫いをし、折りは前身頃に返す。

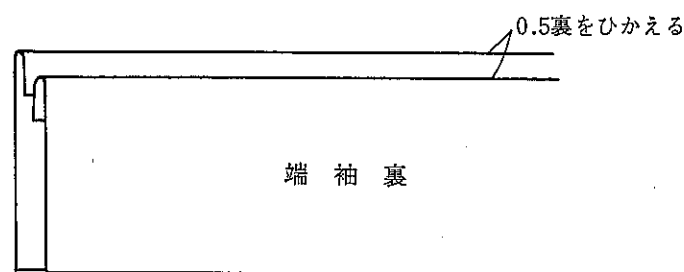
裾角の縫い方・折り方



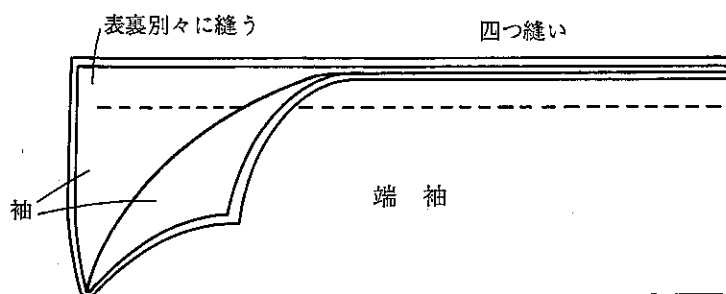
裾および脇明き



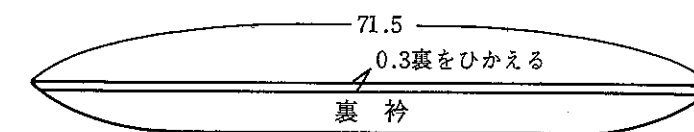
袖口合わせ



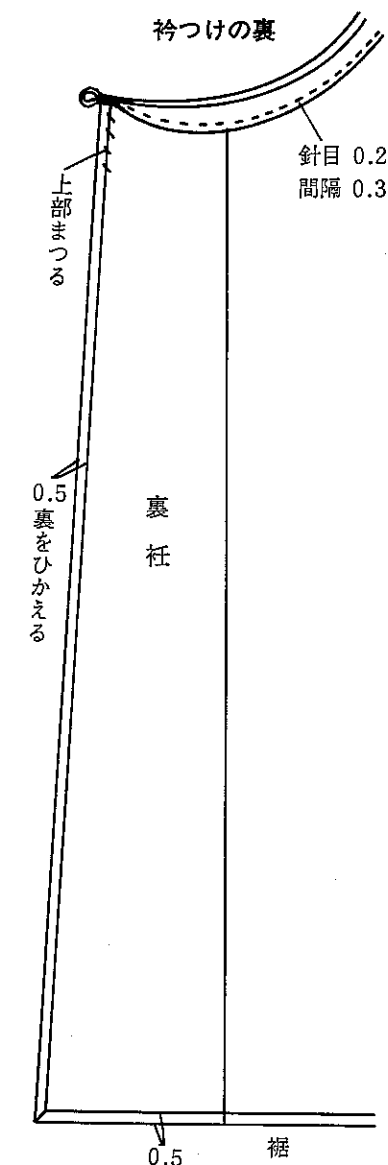
端袖つけ



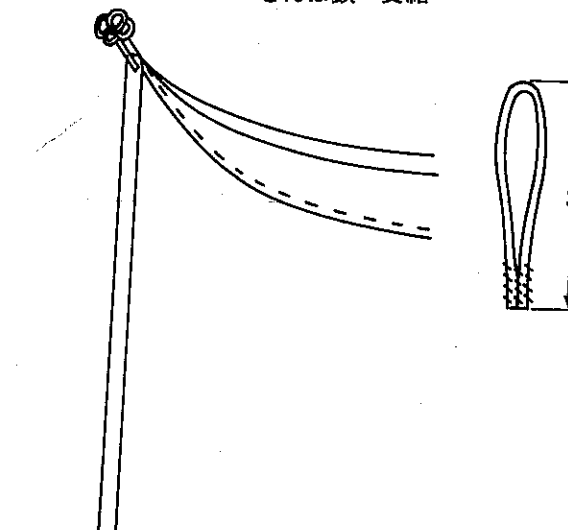
- 留めの仕方は表前身頃から針を出し、後身頃の表裏をすくい、裏前身頃を縦にすくって、逆の順に表前身頃へ戻って結ぶ。
- 袖口のところは3cmの間、表裏別々に縫う。
- 衿を表裏合わせ、裾および衿端を続けて上まで縫い合わせ、上部は約3cm縫い残す。
- きせをかけて裏へ折り、表へ返して裏布を0.5cmひかえる。
- 衿裾の角は身頃の角の始末と同様にする。
- 衿つけは表裏の衿で身頃の表裏をはさみ、四つ縫いにし、折りは衿に返す。
- 表衿に裏衿を縫い合わせ、きせをかけて裏衿に折り、表へ返して、図のように裏衿を0.3cmひかえる。
- 衿つけは表衿と身頃の表裏とを合わせて、三つ縫いにしてつける。
- 裏衿は図のように裏衿のみに針目を出し、針目0.2cm、間隔0.3cmにして押さえ縫いにする。このときとんぼ頭と受緒を、出来上り図の位置につける。
- とんぼ頭は表へ針目を5〜6針出してつけ、受緒は元のところを5〜6針ほどまつりつける。
- 衿の上部縫い残したところを、まつておく。
- とんぼ頭は表布で幅3cm、丈20cmの斜め布を裁ち、撚ってまつり、しゃか結びにする。
- (東帯袍の項参照)
- 受緒は幅3cm、丈7cmに裁ち、同様に撚ってまつる。



衿つけの裏



とんぼ頭・受緒

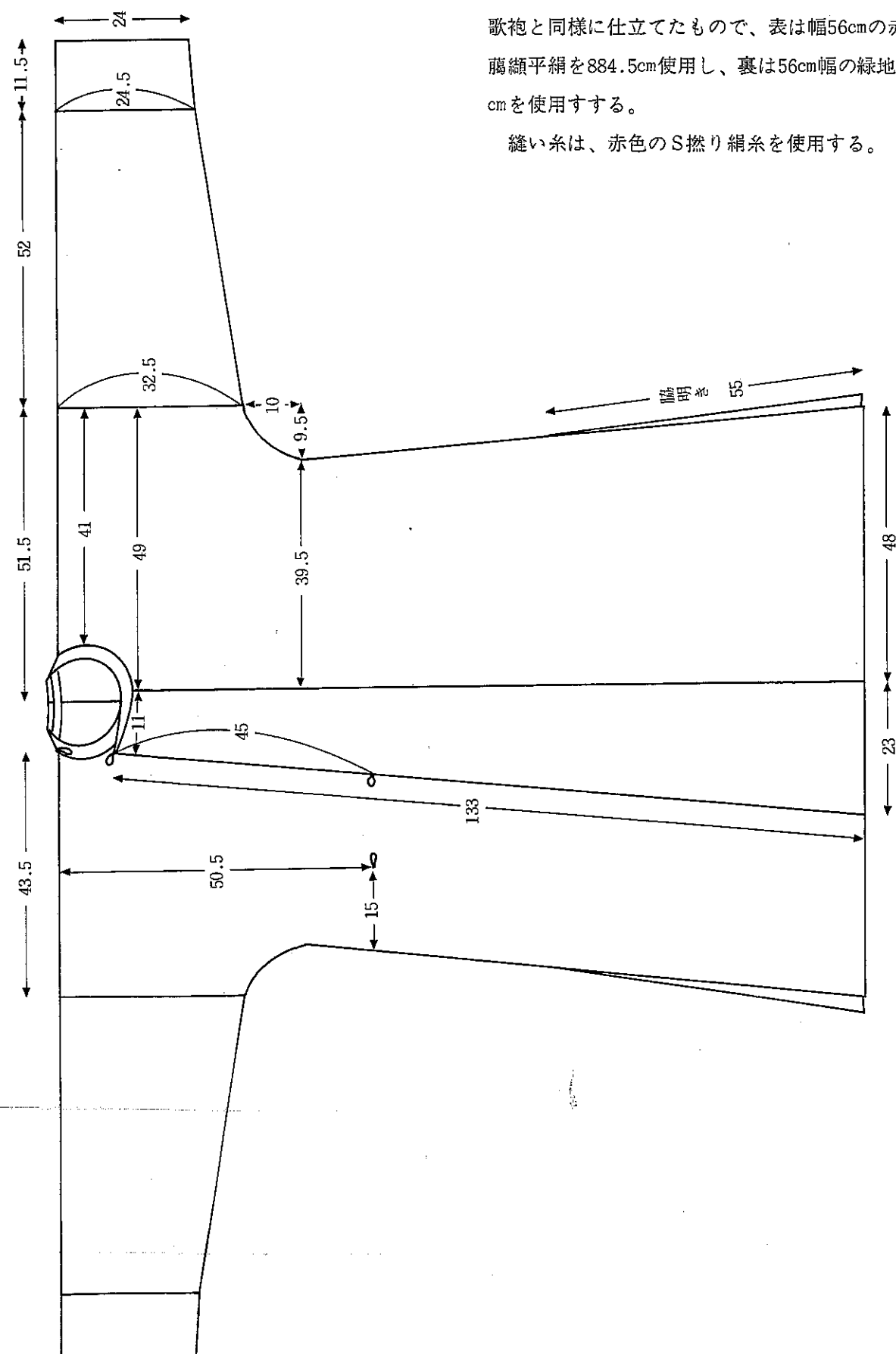


あか ぢ ろう けち あしぎぬのほう

赤地藤縹絶袍 函第参拾壹号

この袍の実物は破損が著しく、形および寸法は不明であるため、かりにその形、寸法および縫い方を前述の大歌袍と同様に仕立てたもので、表は幅56cmの赤地花卉文藤縹平絹を884.5cm使用し、裏は56cm幅の緑地平絹878.3cmを使用する。

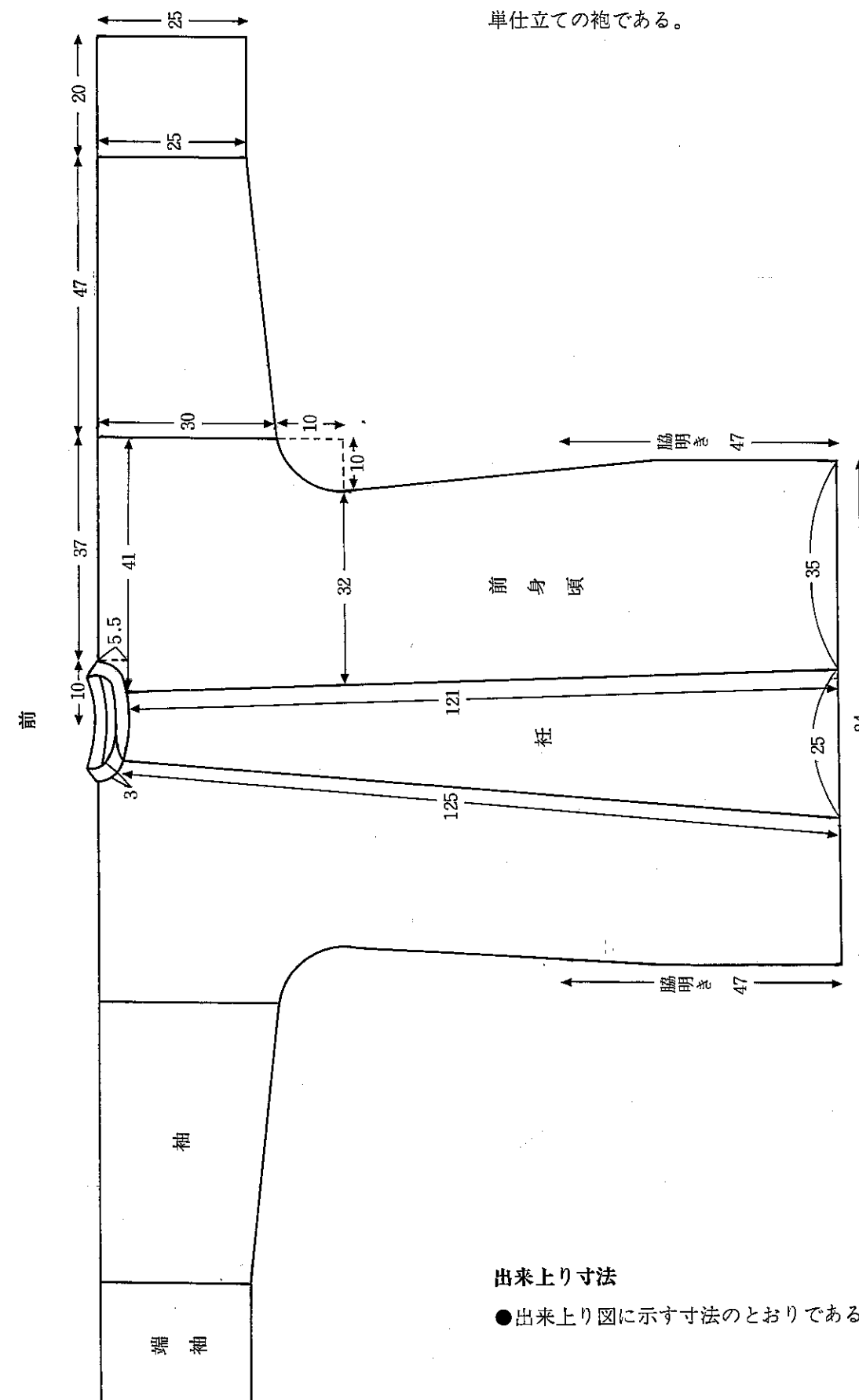
縫い糸は、赤色のS撚り絹糸を使用する。



べにはなだこうけちのふほう

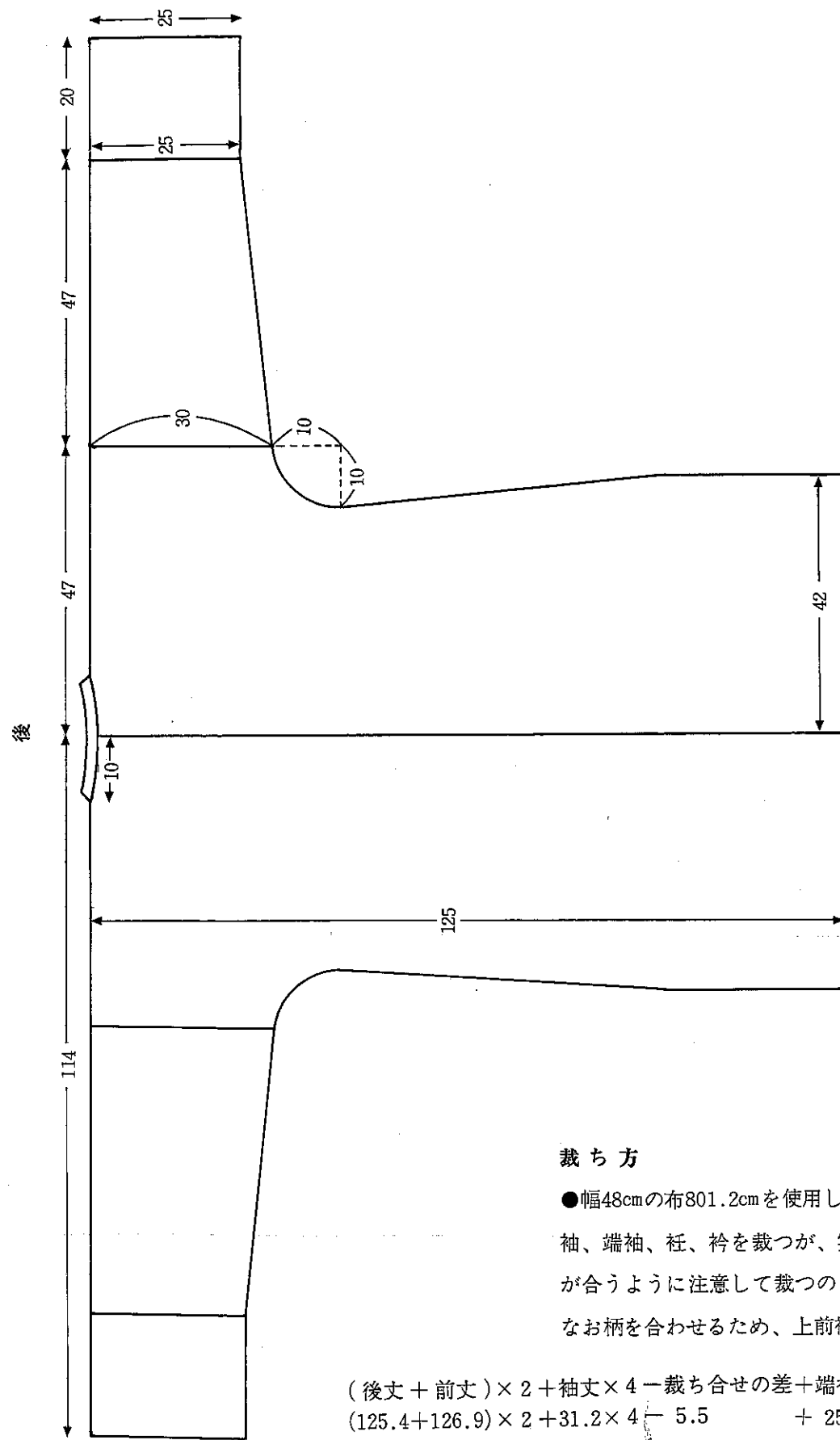
紅縹縹布袍

細麻布に紅色および緑色斜め格子の縹縹を使用した、単仕立ての袍である。



出来上り寸法

●出来上り図に示す寸法のとおりである。

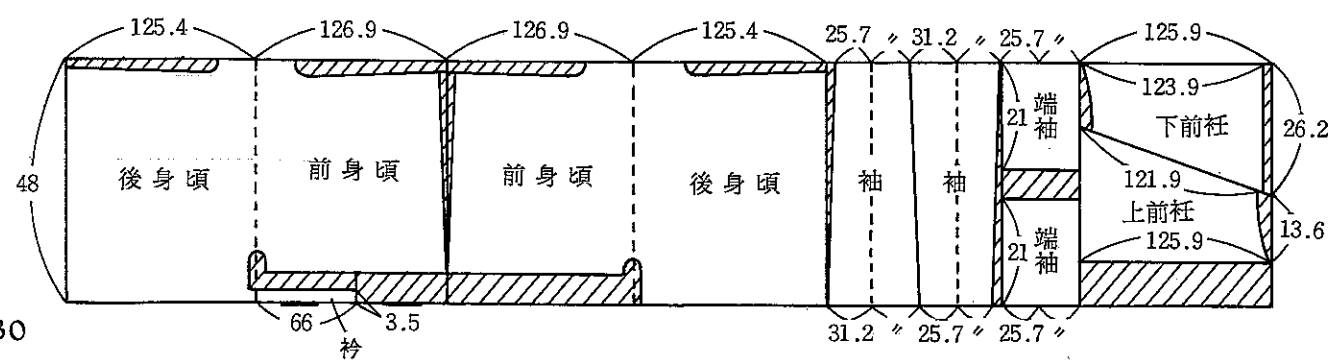


裁ち方

●幅48cmの布801.2cmを使用して、図に示すように身頃、袖、端袖、衿、衿を裁つが、実際には斜め格子縹縹の柄が合うように注意して裁つので、布は多めに必要となる。
なお柄を合わせるため、上前衿は裏返して使用する。

$$(\text{後丈} + \text{前丈}) \times 2 + \text{袖丈} \times 4 - \text{裁ち合せの差} + \text{端袖丈} \times 2 + \text{衿丈} = \text{総丈}$$

$$(125.4 + 126.9) \times 2 + 31.2 \times 4 - 5.5 + 25.7 \times 2 + 125.9 = 801.2\text{cm}$$



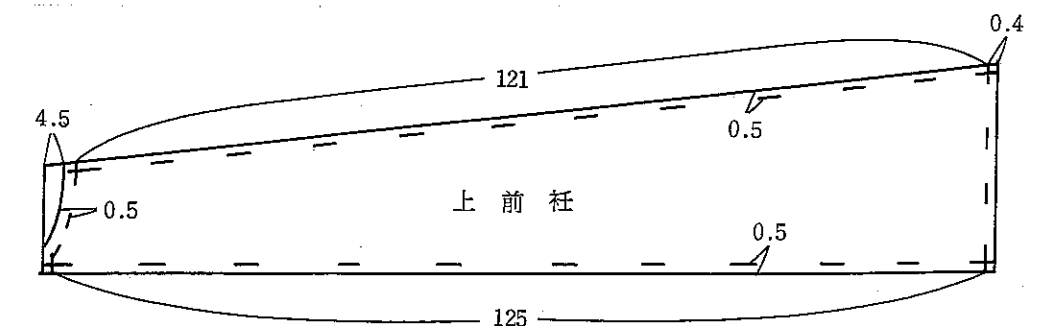
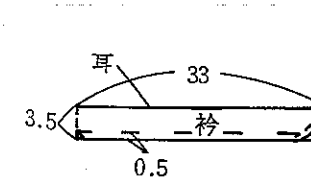
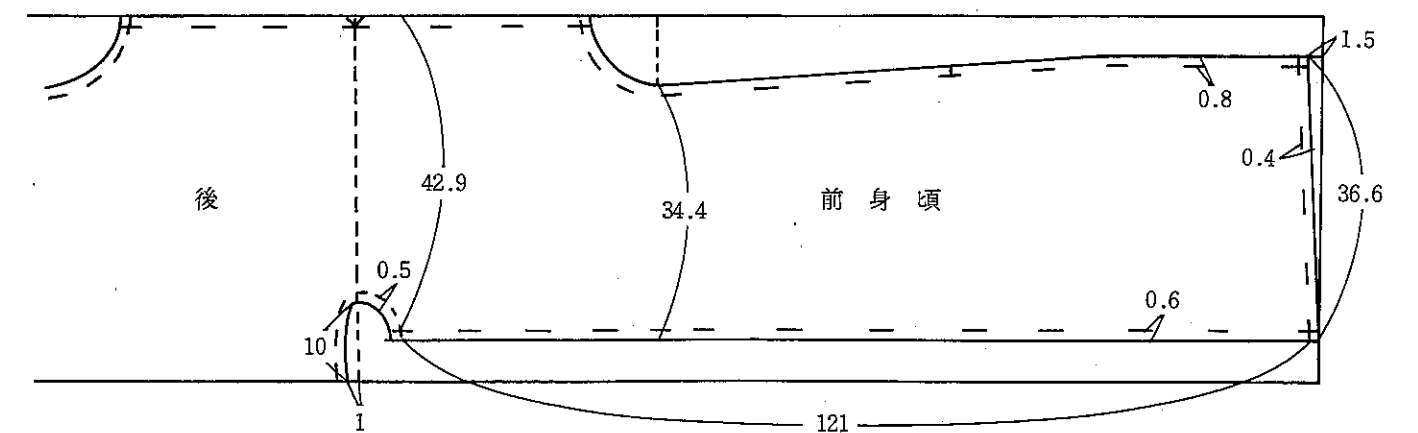
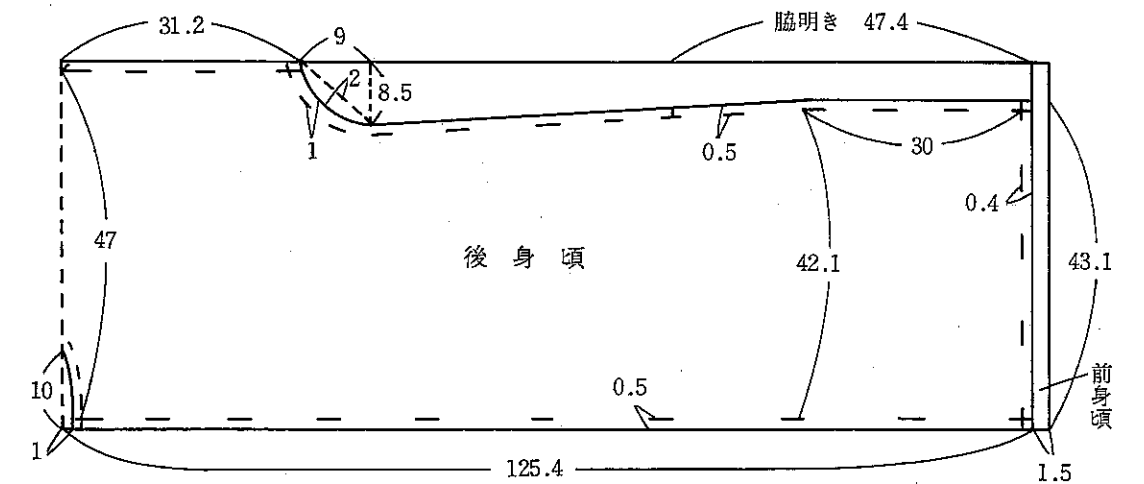
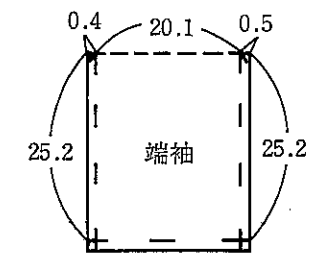
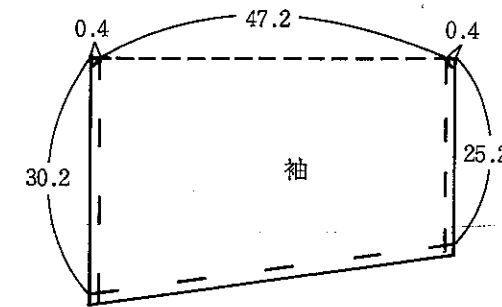
細部の裁ち方・標つけ方

- 端袖と袖を図のように標をつける。
- 身頃は脇割りおよび衿明きを図のように裁ち、裾、袖つけ、脇の標をつける。
- 衿は上前衿は裏返して、裏を表とし、その上へ下前衿

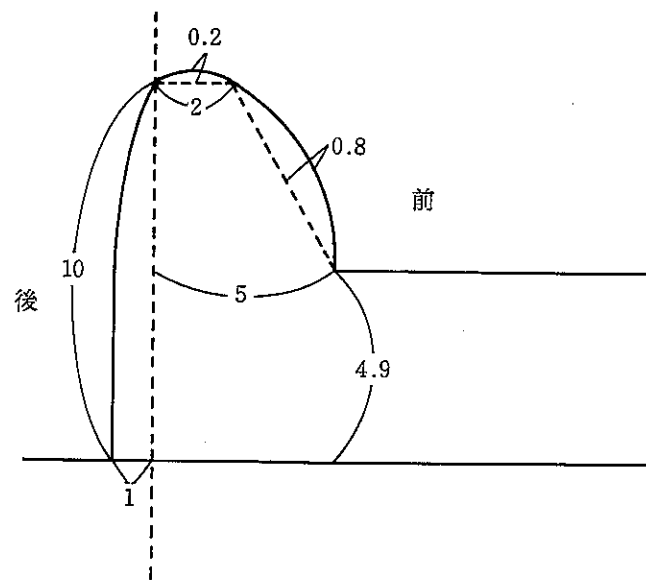
の端が耳になるように合わせる。

●図のように上部を割り、衿つけ縫い代、裾、衿つけ、上前衿端縫い代の標をする。

●衿は図のように裁ち、衿つけ縫い代の標をする。



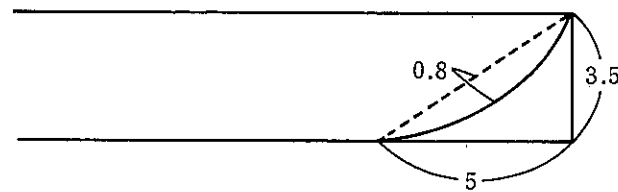
衿割りの裁ち方



縫い方

- 縫い糸は紅色のS撚り絹糸を使用する。
- ぐし縫いの針目は0.3~0.5cm、まつりぐけの針目は0.2cmで間隔は0.3~0.4cmとする。縫い目は0.2cmのきせをかける。
- 背を中表に合わせ、標どおりぐし縫いをする。縫い代は右身頃に折る。
- 端袖の耳の方と袖とを縫い合わせ、縫い代は端袖の方へ折る。
- 袖と身頃を合わせ、袖つけをする。縫い代は袖の方へ折る。
- 脇は脇明き止まりより袖下に続けて縫い、縫い代は前身頃へ折る。
- 袖口は幅0.2cmの三つ折りにして、まつりぐけをする。
- 衿つけは衿と前身頃を合わせて縫い、縫い代は衿の方

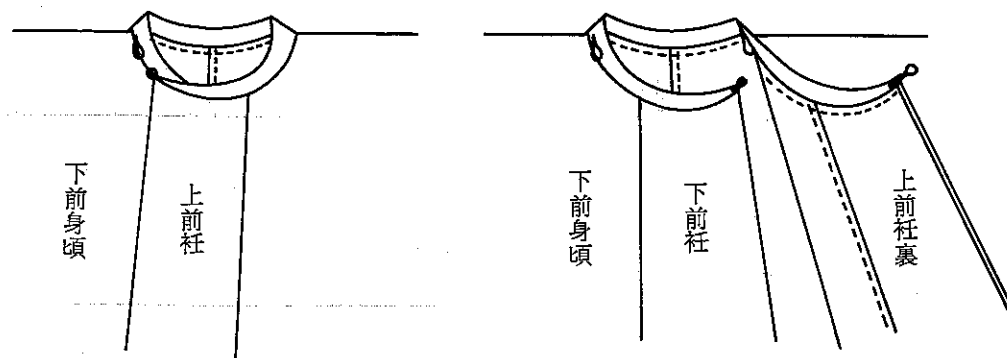
衿の裁ち方



へ折る。

- 脇明き、裾、上前衿端は、袖口と同様に三つ折りにしてまつりぐけをする。
- 衿つけは、衿を身頃の衿割りにつける。縫い代は衿の方へ折る。
- 袖下と脇、衿つけと衿つけの縫い代は、裁ち目のままにして、下前衿端、衿端は耳のままにする。
- とんぼ頭は共布で幅3cm、丈20cmの斜め布に裁ち、撚ってまつりぐけにしたものを、しゃか結びにする。
- 受緒は幅3cm、丈6cmの斜め布を撚って、まつりぐけにする。
- とんぼ頭、受緒とも二組作る。
- つけ方は図の位置に上前と下前につける。(つけ方は大歌袍を参照)

とんぼ頭と受緒の位置



ちやろうけちあしぎぬのはんび

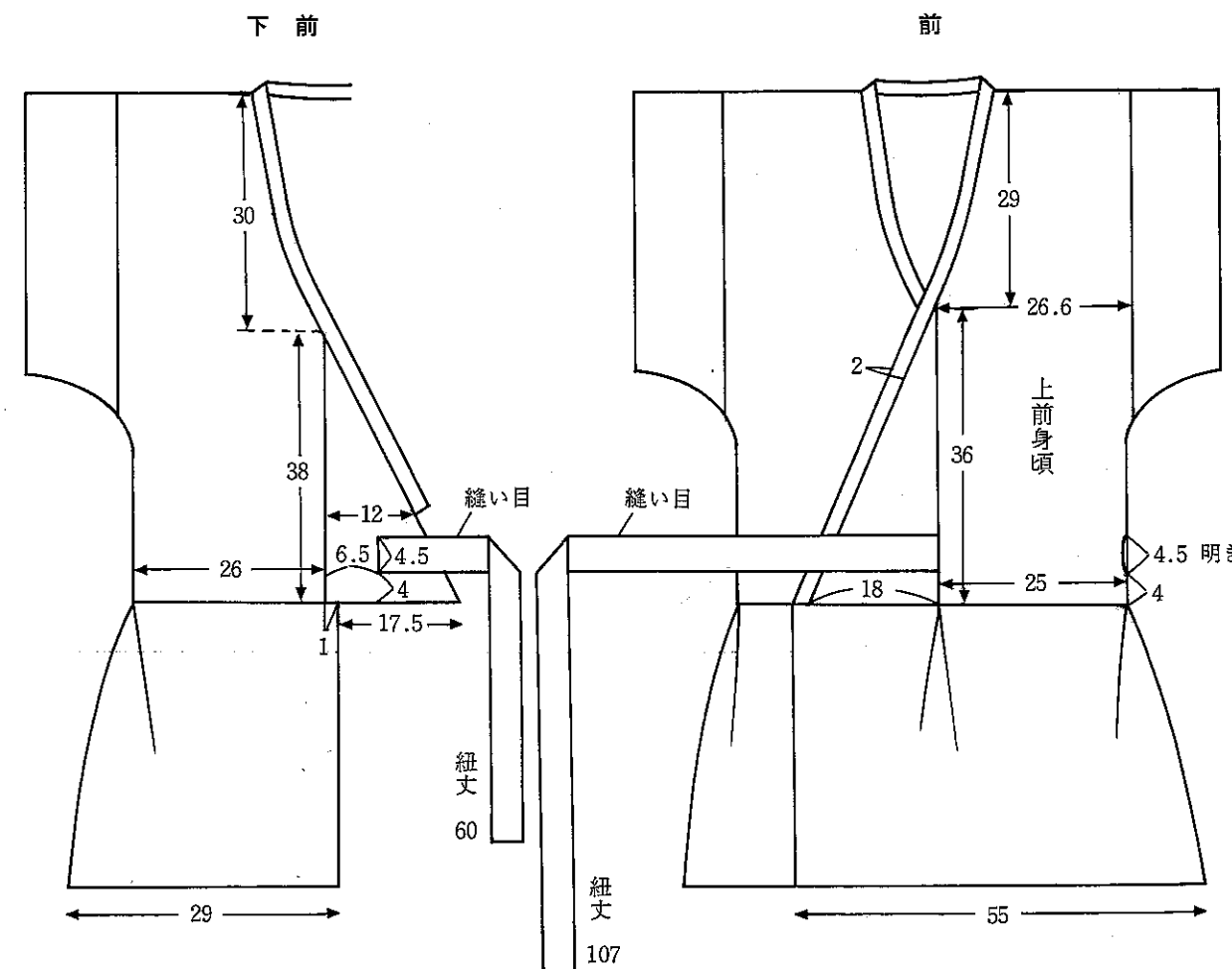
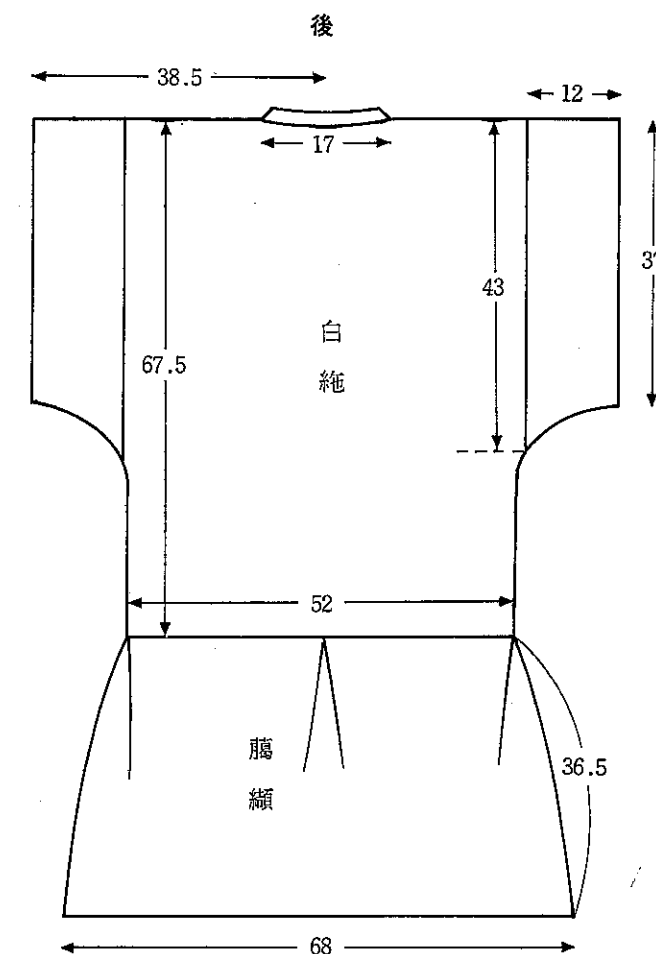
茶縹緞半臂 大歌四物之袴

この半臂の実物には、下前の衿裏に、東大寺大歌半臂天平勝宝四年四月九日、また上前紐裏には、公久真絵の墨書がある。これも楽服に使用されたものと思われる。

袖、衿および衿は白縹を、欄および紐には茶地花卉文縹緞を使用した単仕立てである。

出来上り寸法

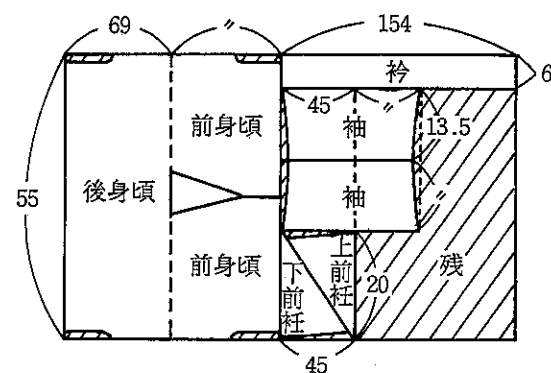
出来上り図に示すとおりである。



裁ち方

●模造品は幅55cm長さ292cmの白平絹で、図のように身頃、袖、衿および衿を裁つ。

●幅55cm長さ171cmの茶藁織平絹で襦および紐を図のように裁つ。



$$\text{身丈} \times 2 + \text{衿丈} = \text{総丈}$$

$$69 \times 2 + 154 = 292\text{cm}$$

$$\text{後幅} + \text{上前幅} + \text{下前幅} + \text{上前衿幅} + \text{衿幅} + \text{下前衿の1部} + \text{両端縫い代} + \text{襷寸} = \text{襦の総丈}$$

$$52 + 25 + 26 + 18 + 2.5 + 1 + 0.8 + 36 = 161.3\text{cm}$$

$$(\text{背襷} + \text{衿襷}) \times 4 + \text{脇襷} \times 8 = \text{襷寸}$$

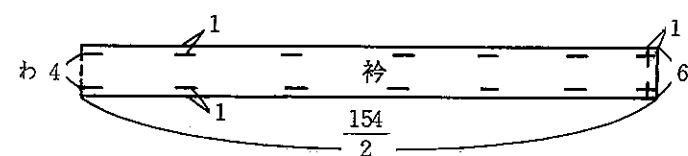
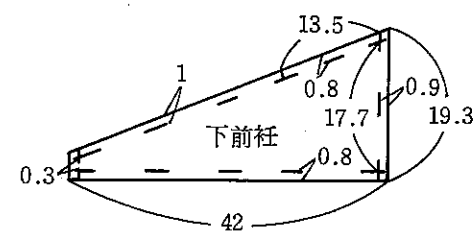
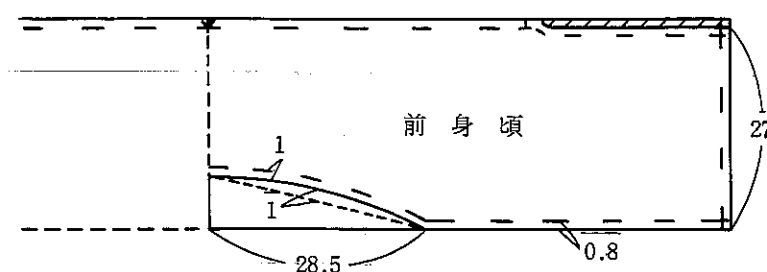
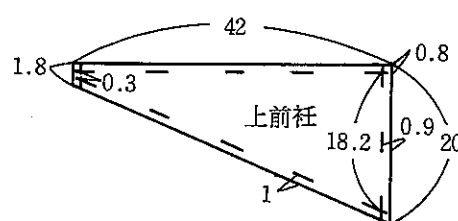
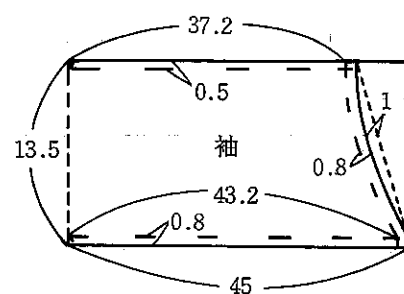
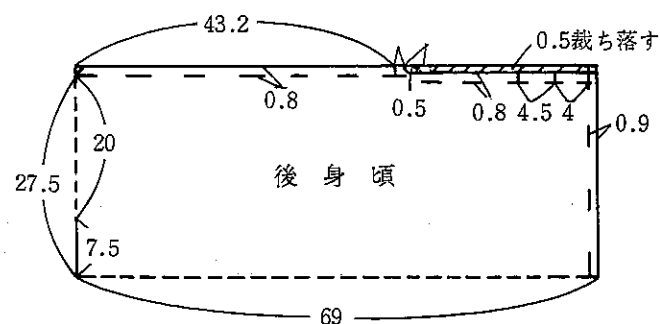
$$(2.7 + 2.3) \times 4 + 2 \times 8 = 36\text{cm}$$

標つけ方

●標つけ方図のように、身頃、衿、袖および衿に標をつける。

●襦は耳の方を縫い代0.6cmに標し、他の三方は0.4cmの標をつける。

●紐は幅を二つ折りにし、紐先の一方を除き、他の三方に1cmの縫い代を標する。



裁い方

●縫い糸は白色および茶色のS撚り絹糸を使用する。

●縫い方は三つ折り縫い、くるみぐし縫い、はさみまつり縫いで、針目は0.1~0.15cm、間隔0.25~0.3cmほどとする。

●袖口は幅0.25cmの三つ折り縫いをする。

●左脇縫いには、図の位置(出来上り図)へ紐通しをつけ、袖口と同様に三つ折り縫いをする。

●袖つけは身頃で袖をくるみ、幅0.25cmのくるみぐし縫いをする。縫い代の折りは袖の方へ返す。

●脇縫いは前身頃で後身頃をくるみ、衿つけは身頃で衿をくるみ、袖つけと同様にくるみぐし縫いをする。脇縫いの折りは前身頃へ、衿つけの折りは衿の方へ折り返す。

●下前の衿下および衿の裾は、幅0.4cmの三つ折り縫いをし、その他の裾の部分は幅0.45cmの三つ折りに折っておく。

●衿つけは上前は裾から、下前は衿下の標までつける。

●つけ方は表裏の衿で身頃をはさみ、図のように針目0.2cm、間隔は表で0.3cm、裏で0.25cmにして、はさみまつり縫いをする。

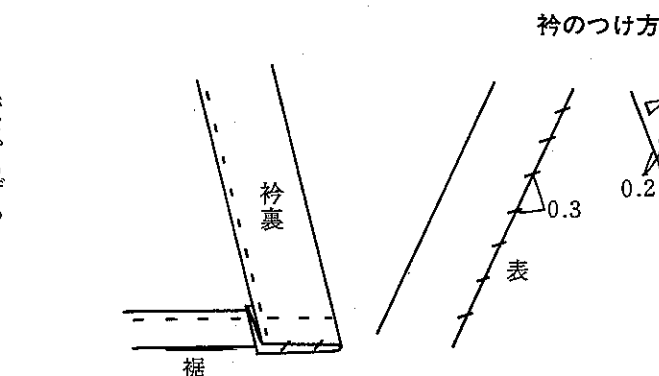
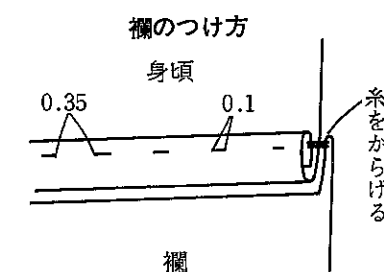
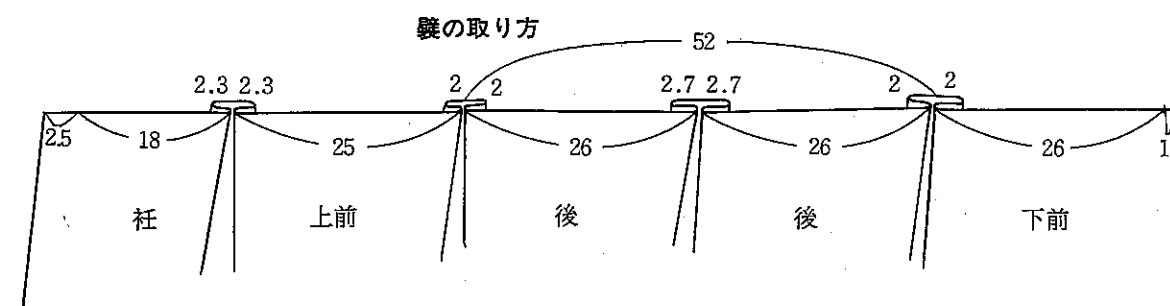
●衿先も図のようにまつる。

●襦は耳を除いた三方を幅0.2cmの三つ折りとし、ごく小針の針目でぐし縫いをする。

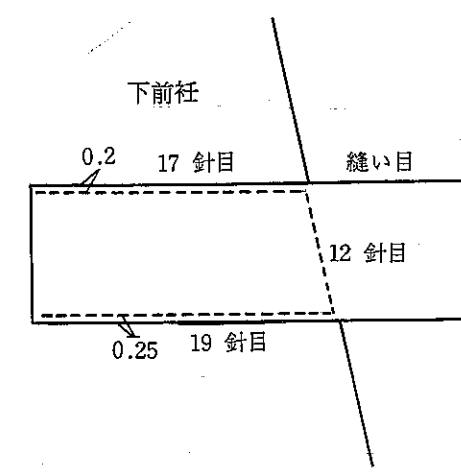
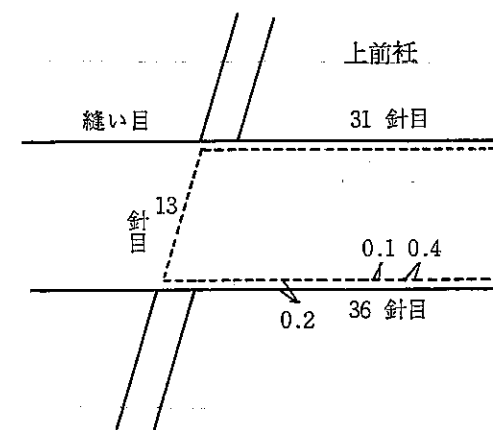
●襦のつけ方は図の位置に襷を取り、これを身頃の裾へ中表に当て、針目0.1cm、間隔0.35cmで身頃の裾の方へ小針を出してとじつける。

●紐は紐先の一方を除き、他の三方を針目0.3~0.4cmで、裏からぐし縫いをして表へ返す。

●つけ方は出来上り図の位置へ、縫い目を上にして紐の一方を内側からとじつけ、紐のつけ方図のように針目0.1cm、間隔0.4cmで表裏へ針目を出してとじる。

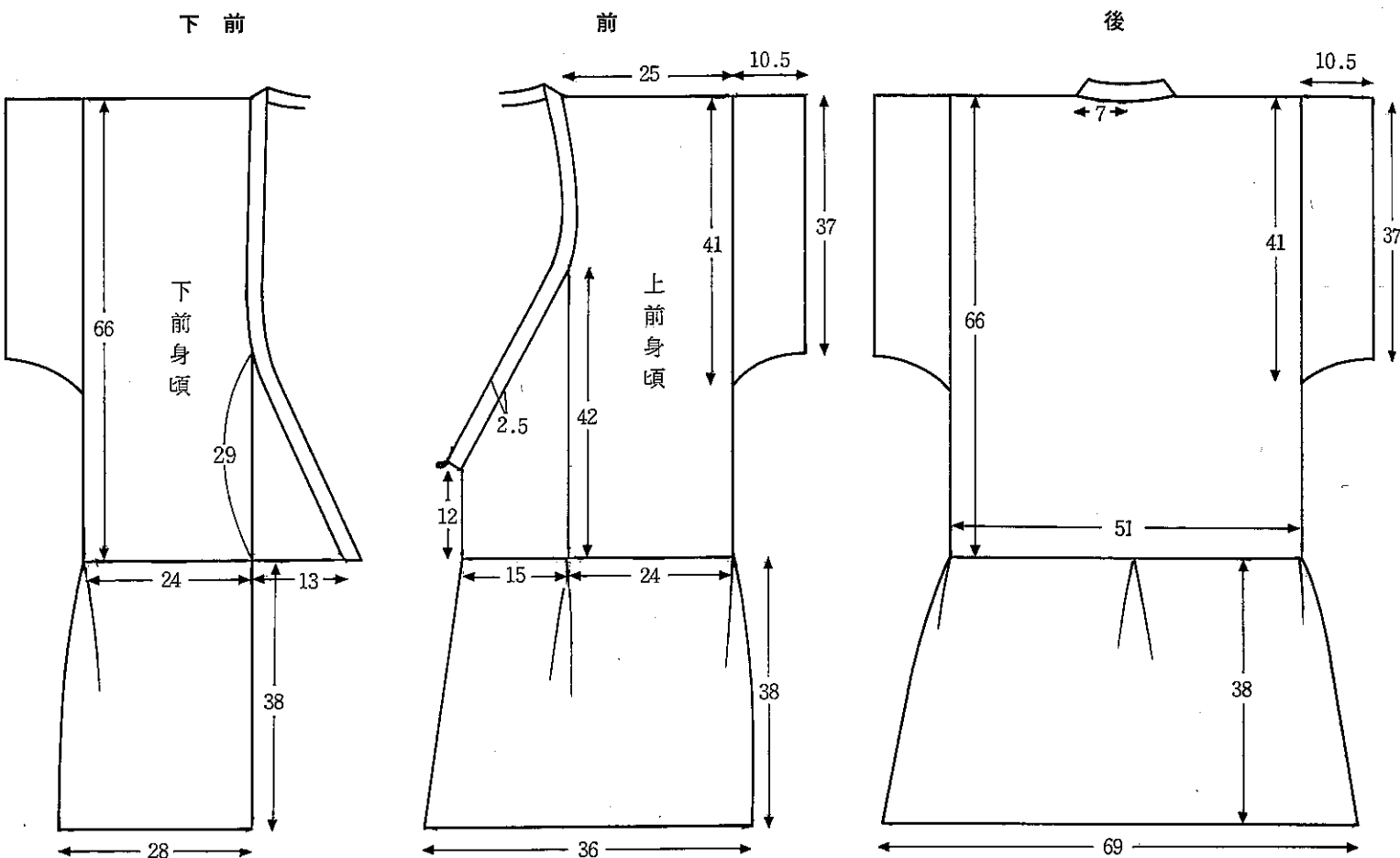


紐のつけ方



安君子半臂 唐古楽拾九物之壺

この半臂は、下前衿裏に古楽安君子の墨書がある。楽
服に用いられたもので、袖と身頃は袷で、表裂には錦を、
裏布には緋紬を使用し、欄は単で緑地薄絹を使用した派
手やかなものである。

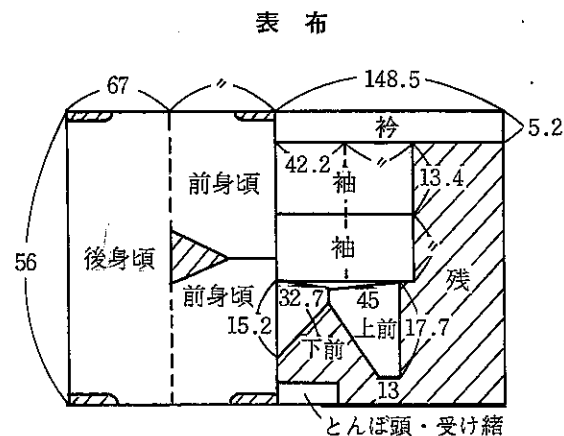


出来上り寸法

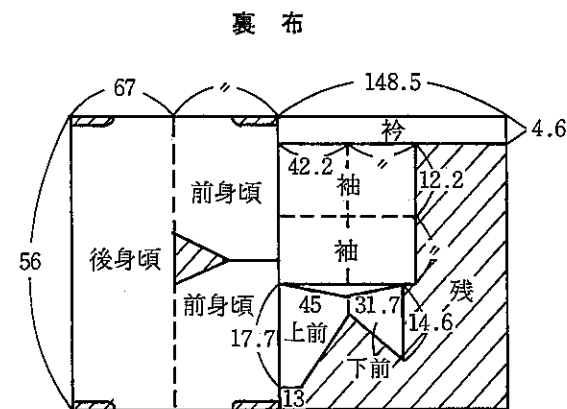
この半臂の実物は、後身頃および紐が失われているので、出来上り図のように前身頃の寸法によって全形の寸法を推測した。

裁ち方

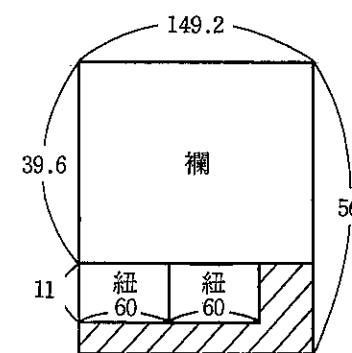
- 表布と裏布は、幅56cm長さ282.5cmをそれぞれ使用し、図のように身頃、袖、衿および衿を裁つ。
- 欄は幅56cm長さ149.2cmの布を使用して、図のように欄と紐を裁つ。



$$\begin{aligned} \text{身丈} \times 2 + \text{衿 丈} &= \text{総丈} \\ 67 \times 2 + 148.5 &= 282.5\text{cm} \end{aligned}$$



表総丈と同寸

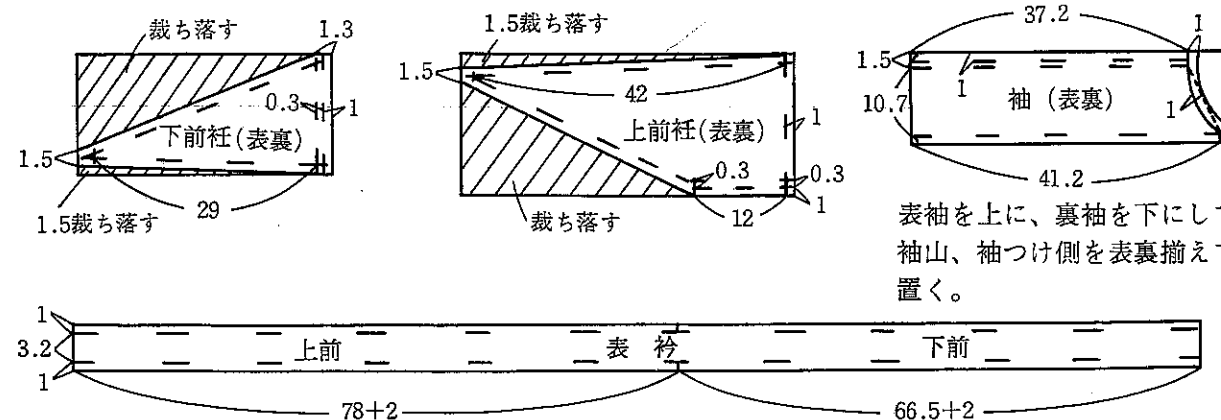
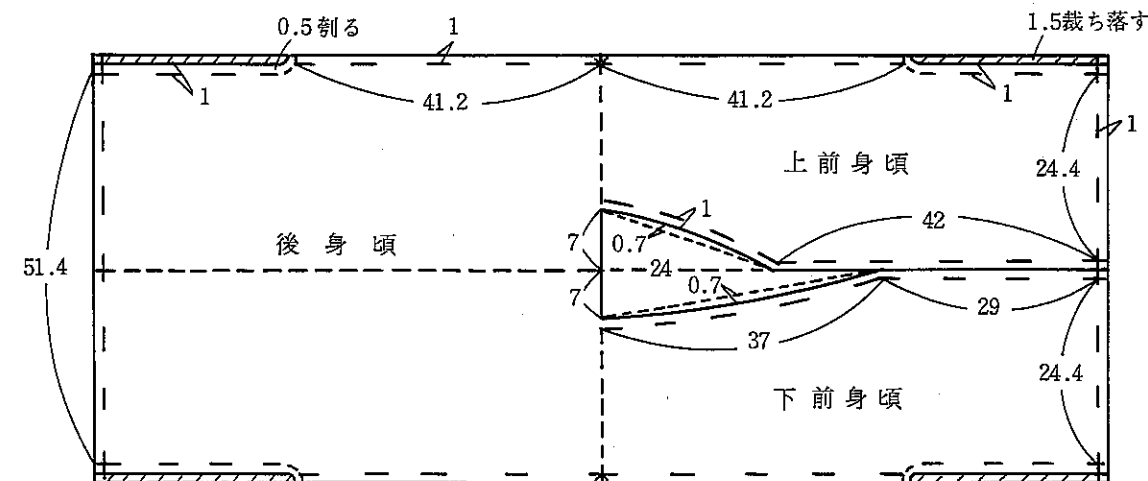


$$\begin{aligned} \text{後幅} + \text{前幅} \times 2 + \text{上前衿幅} + \text{両端縫い代} + \text{襷寸法} &= \text{総丈} \\ 51 + 24 \times 2 + 15 + 1.2 + 34 &= 149.2\text{cm} \\ \text{襷の寸法} &= \text{背襷} \times 4 + (\text{衿つけの襷} + \text{脇襷} \times 2) \times 4 \\ 34 &= 2.5 \times 4 + (2 + 2 \times 2) \times 4 \end{aligned}$$

標つけ方

- 図のように表裏の袖、身頃、衿および衿の標をつける。
- 欄は裾および両端に0.4cmの標をつける。欄つけの方は1cmの標をつける。
- 紐は幅を二つ折りにして、幅標をする。

表・裏同じ



表袖を上、裏袖を下にして袖山、袖つけ側を表裏揃えて置く。

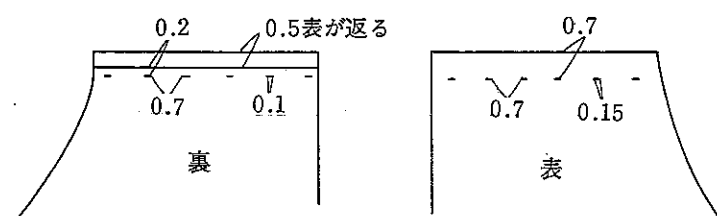
縫い方

- 縫い糸は緋色、緑色のS捻り絹糸を使用する。
- 縫い方は主として四つ縫い、押さえ縫い、およびまつりぐけである。
- 四つ縫いでは針目0.5cm、押さえ縫いは針目0.1cm、間隔0.5~0.7cm。まつりぐけは針目0.1cm、間隔0.25cmとする。縫い目には0.2cmのきせをかける。
- 袖つけは、袖の表裏で身頃の表裏をはさみ、四つ縫いをする。ただし、袖つけの前裏は15cmほど縫い残しておく。
- 脇縫いは、裾口を3cmほど表裏別々に縫ってから、前身頃の表裏で後身頃の表裏をはさんで四つ縫いをする。
- 衽つけは、衽の表裏で身頃の表裏をはさんで四つ縫いをする。ただし、裾口の裏は3cmほど縫い残す。
- 上前衽下および下前衽の裾は、表より0.3cm裏を控えて合わせ、針目0.1cm、間隔0.5cmで押さえ縫いをする。
- 袖口は、表より0.5cm裏を控えて合わせ、針目0.1cm、間隔0.7cmで表裏へ針目を出して、図のように押さえ縫いをする。
- 衿は、表裏の衿を中表に合わせて裏からぐし縫いをして、縫い代は裏へ折り、表へ返して裏を0.3cm控える。
- 衽つけは衿の表裏で身頃の表裏をはさみ、表のまつりは間隔0.3cm、裏では折り山から0.15cm内側で、針目

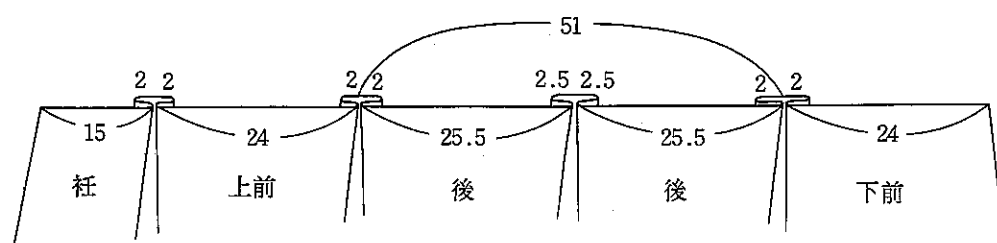
0.26cm、間隔0.1cmのまつり縫いをする。

- 欄は、両端および裾を幅0.2cmの三つ折りにして、針目0.1cm、間隔0.3cmのまつりぐけをする。
- つけ方は図のように、背、脇縫いおよび上前衽つけのところへ襷をとって、しつけで押さえる。つけ方は表裏の裾で欄をはさみ、緑色の糸で針目0.1cm、間隔0.25cmでぐし縫いをする。
- とんぼ頭は、錦の布でしゃか結びをして、衿にはさんでつける。
- 受緒は、下前の図の位置へとじつける。
(とんぼ頭の結び方は、東帯の袍を参照)
- 紐は、紐先の一方を除いて、裏からぐし縫いをし表へ引き返す。
- つけ方は、図の位置へ小針にぐし縫いで、両面に針目を出してとじつける。

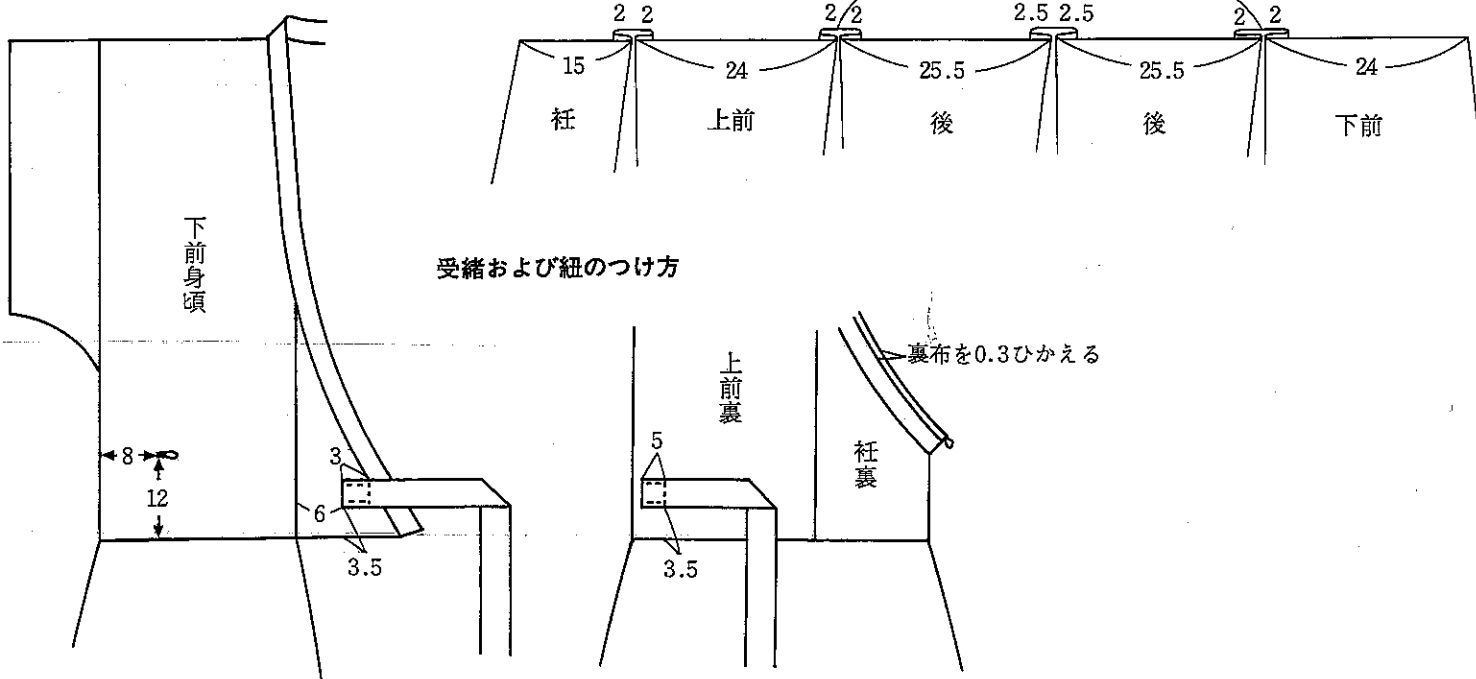
袖口の縫い方



欄襷の取り方

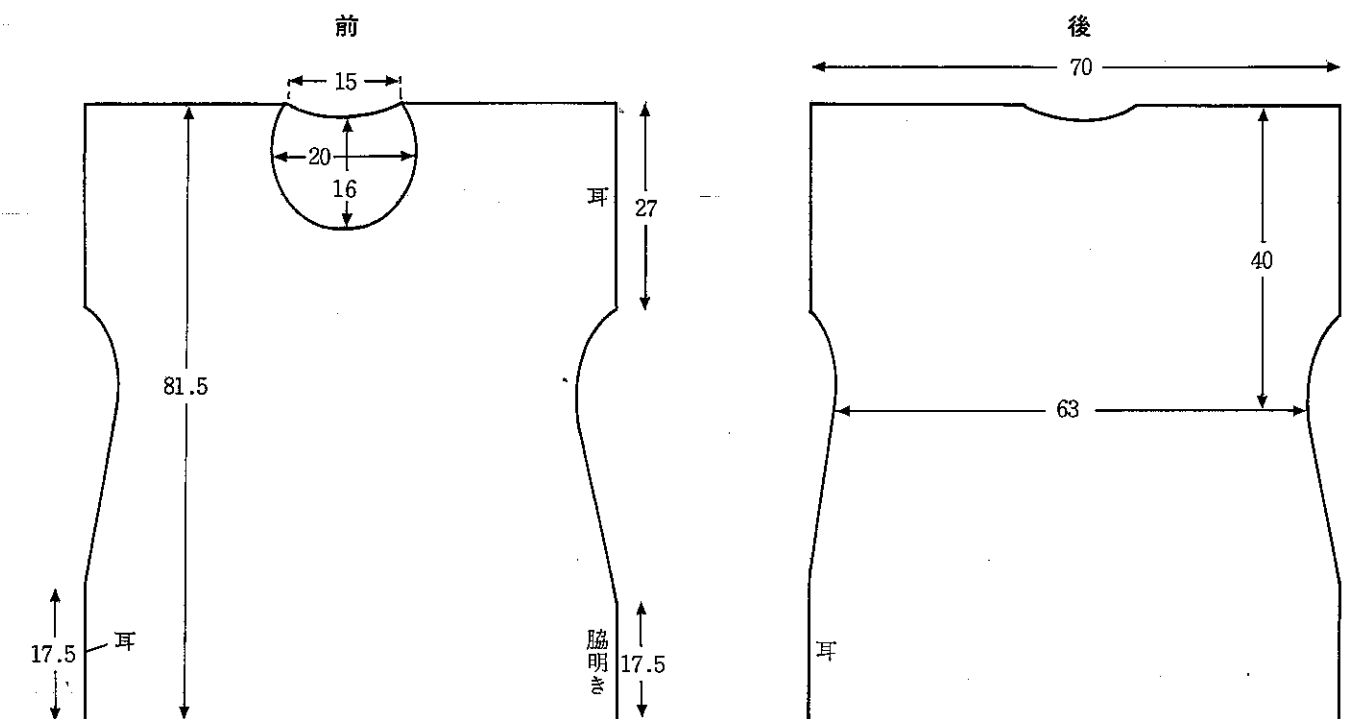


受緒および紐のつけ方

ふさん
布 衫 衣第参拾貳号

この布衫の実物には、表右脇に東寺度羅楽久太衫天平勝宝四年四月九日の墨書があるので、大仏開眼会に着用したと思われるが、布とは絹以外の繊維で織ったものを

云い、衫はひとえという意味である。模造のものは麻の単位立てである。

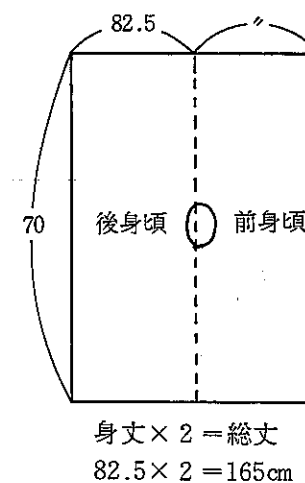


出来上り寸法

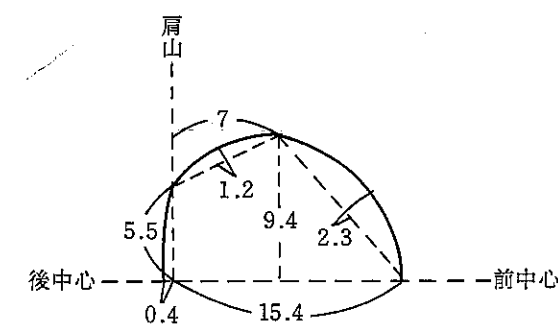
出来上り図の寸法のとおりである。

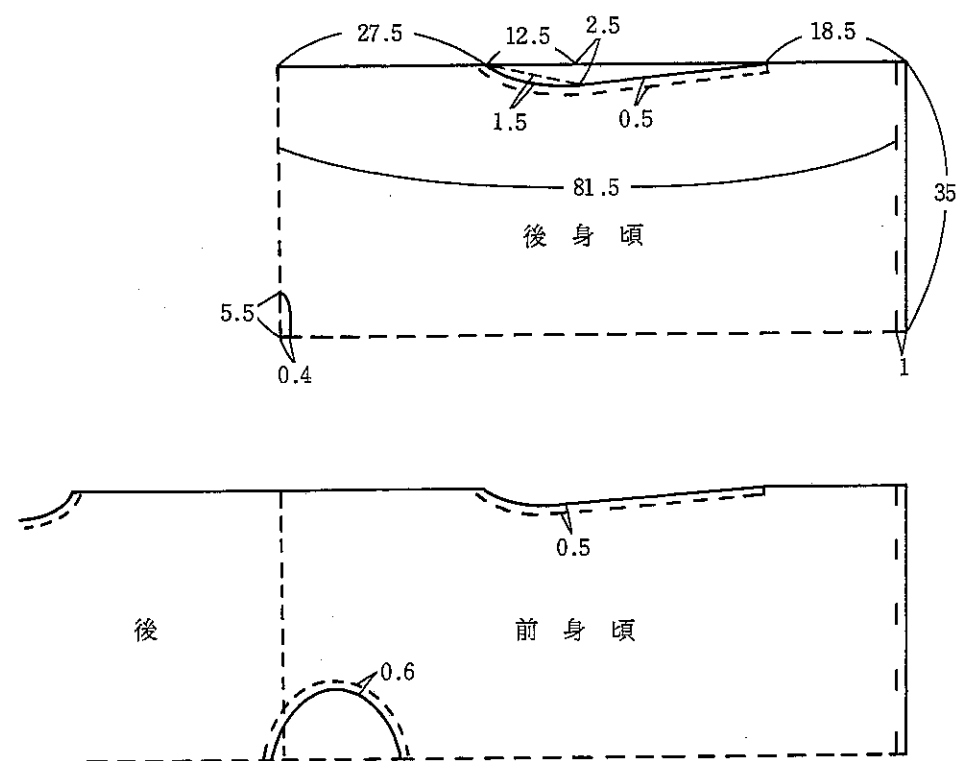
裁ち方・標つけ方

- 70cm幅の麻布165cmを使用し、図のように衿割りおよび脇割りをして、標をつける。



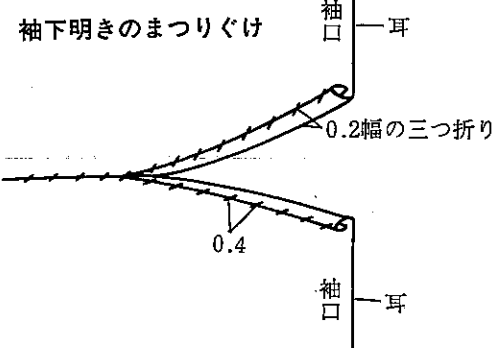
衿割りの裁ち方



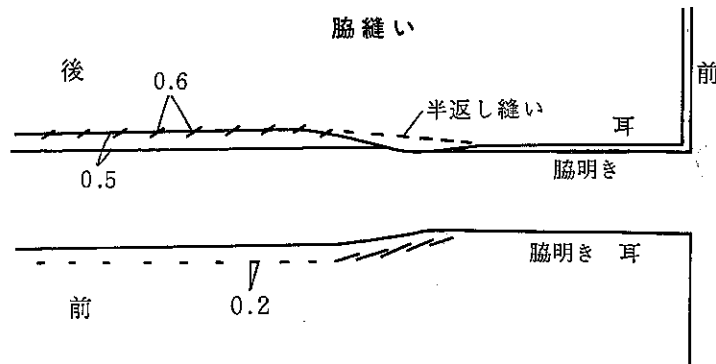


縫い方

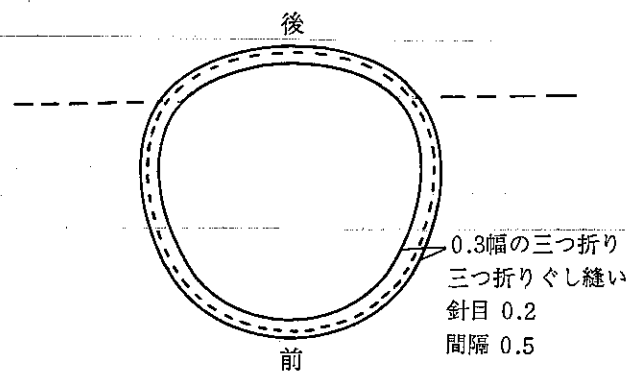
- 縫い糸は白色のS撚り絹糸を使用する。
- 袖下明きを幅0.2cmの三つ折りにし、図のように針目0.2cm、間隔0.4cmのまつりぐけをする。
- 脇は、前身頃の縫い代で後身頃をくるみ、図のように間隔0.6cm、裏の針目0.2cmのまつり縫いをする。この際、脇明きの上部は半返し縫いをする。縫い代は後身頃に返す。
- 裾は、幅0.5cmの三つ折りにして針目0.2cm、間隔0.7cmのぐし縫いをする。
- 衿割りは、幅0.3cmの三つ折りで、針目0.2cm、間隔0.5cmのぐし縫いにする。
- 袖口と脇明きは、布の耳をそのままにする。



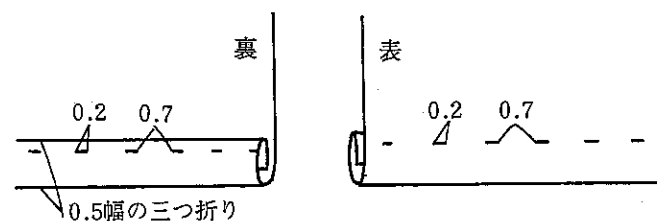
脇縫い



衿割り

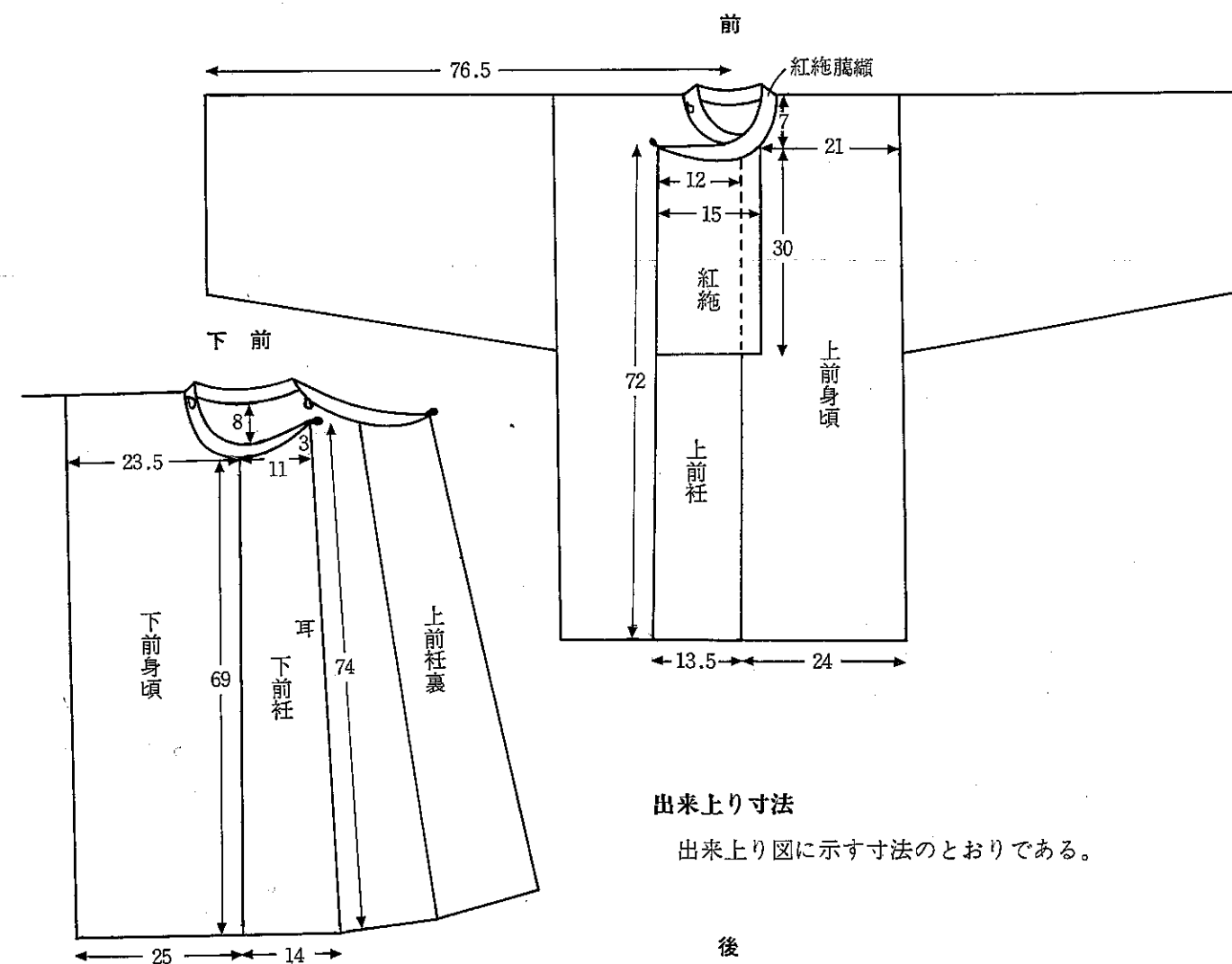


裾



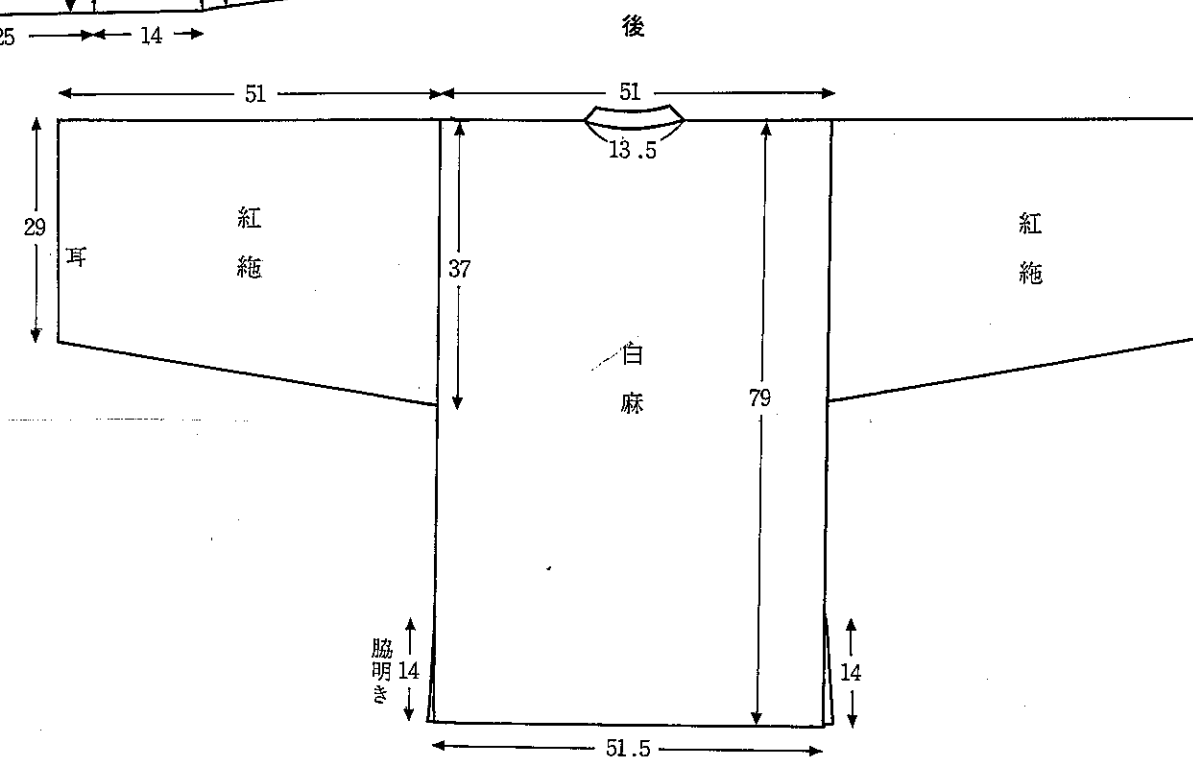
ふ さん 杉 百参拾参之参

この布杉は袍の形をしていて、身頃および衿に麻を使用 ところには絹糸を使用してある。なお袖は袷で、表は紅糸、裏は白糸である。



出来上り寸法

出来上り図に示す寸法のとおりである。

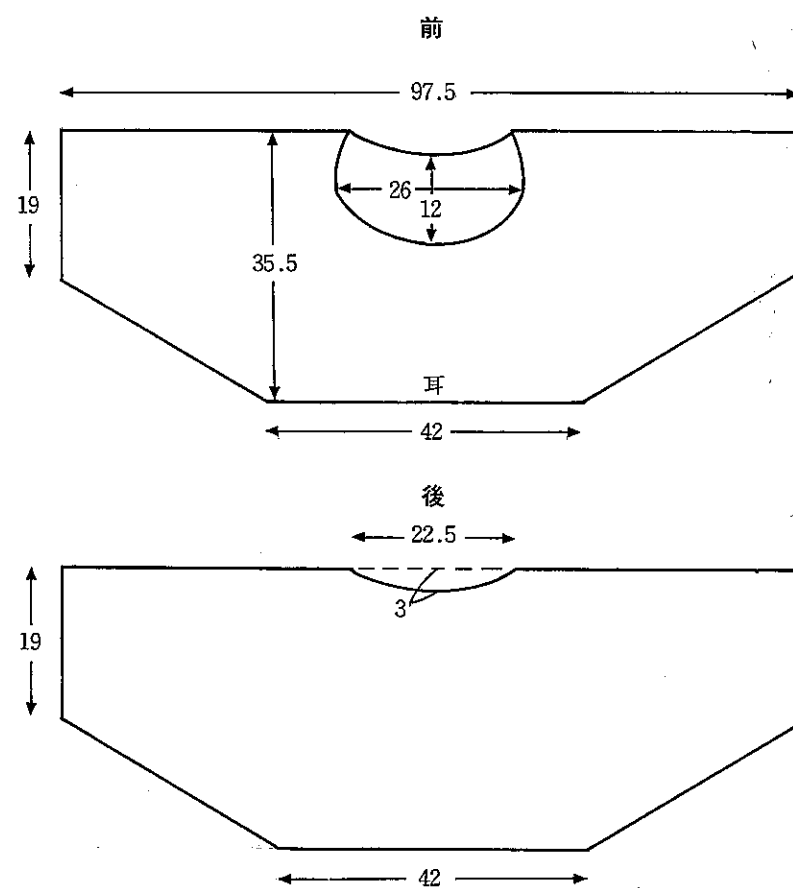


汗 衫 衣第参拾六号之式

貫頭衣風に一幅の布を二つ折りにして、首を通す穴をあけたこの汗衫は、衣服の一番下に着た肌着と考えられる。麻の単仕立てである。

出来上り寸法

出来上り図の寸法のとおりである。

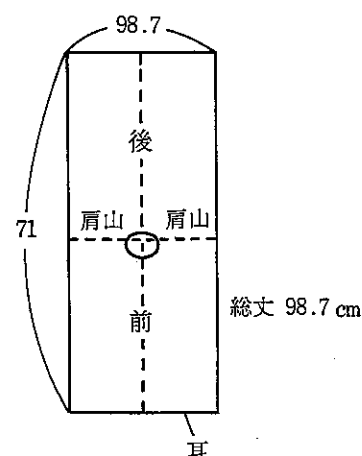


裁ち方・標つけ方

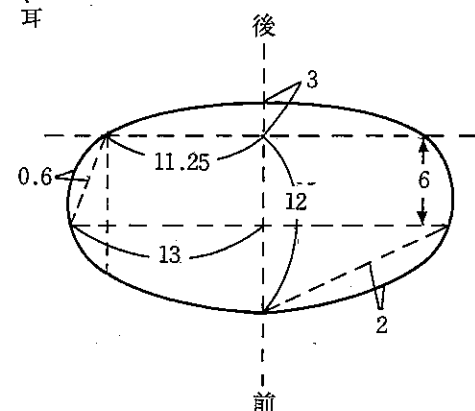
- 71cm幅の麻布98.7cmを使用し、布幅を前後の胴丈として、丈は両袖口間の寸法である。
- 図のように衿割りを裁ち、衿割りおよび袖口の三つ折り代の標をつける。

縫い方

- 縫い糸は白色のS撚り絹糸を使用する。
- 袖は袖口下から裾まで、針目0.5~0.6cmのぐし縫いにする。縫い込みはそのままにして、縫い代は前の方へ返す。
- 袖口は幅0.3cmの三つ折りにして、針目0.2cm、間隔1cmの三つ折りぐし縫いをする。
- 衿割りは幅0.3cm、針目0.2cm、間隔0.4cmの三つ折りにしてぐし縫いをする。



衿割り裁ち方



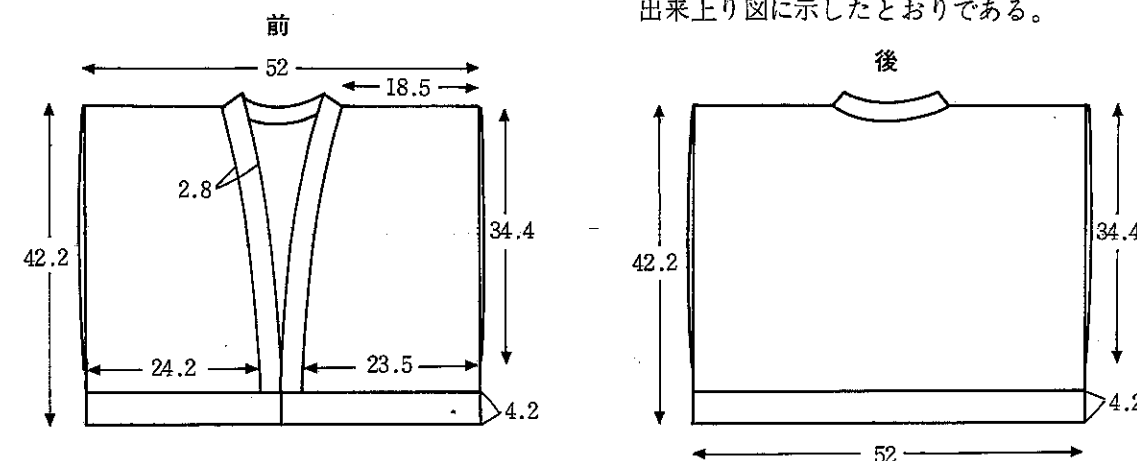
呉女背子 呉楽八拾五物之一

この背子には、右前裏に東大寺呉女六年の墨書がある。実物の表裂は赤地唐花文錦、裏裂は黄緋、欄は紫地花唐草文錦、衿は身頃とは異なる赤地唐花文錦である。

模造は、表に赤地鳥唐花文錦、裏は黄平絹、欄は茶地葡萄唐草文錦、衿には鳥唐花文暈縹錦を使用する。

出来上り寸法

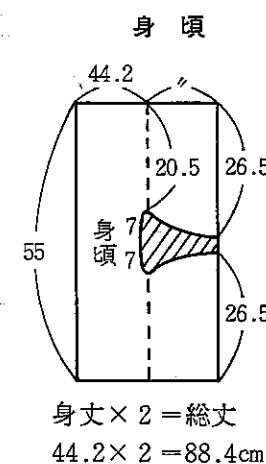
出来上り図に示したとおりである。



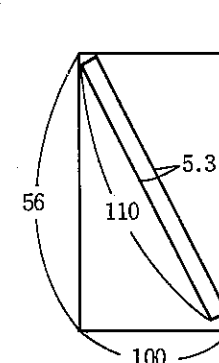
裁ち方 ●裁ち方図のように、表身頃、衿、欄を裁つ。

●裏は身頃、衿、欄、紐を裁つ。

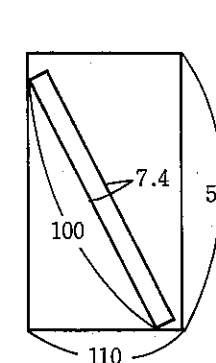
表 布



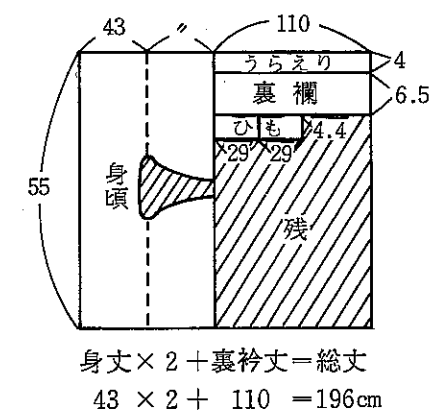
衿



欄



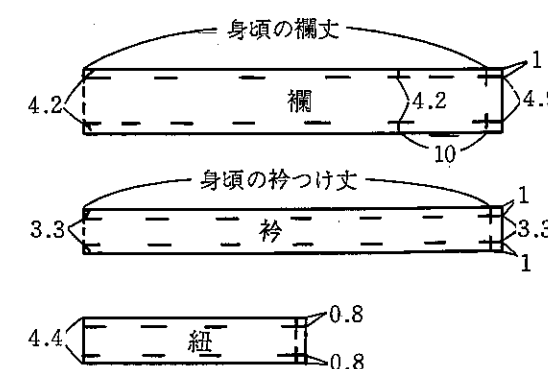
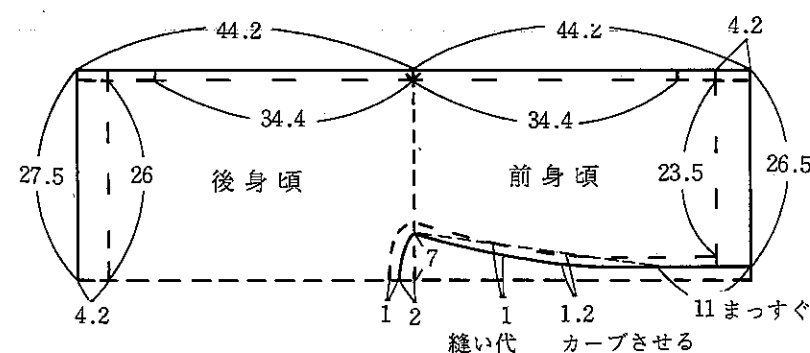
裏 布



標つけ方

- 身頃の衿肩明き、および前身頃は図のように裁ち、表裏身頃の幅をそれぞれ二つ折りにして、表身頃の上に裏身頃をのせ、図のように丈、幅、脇明きの標をつける。

- 前身頃に衿つけ標をつける。
- 衿、欄の表裏、紐を図のように標をする。



縫い方

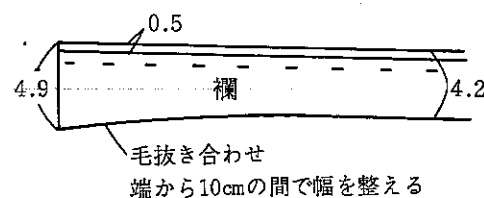
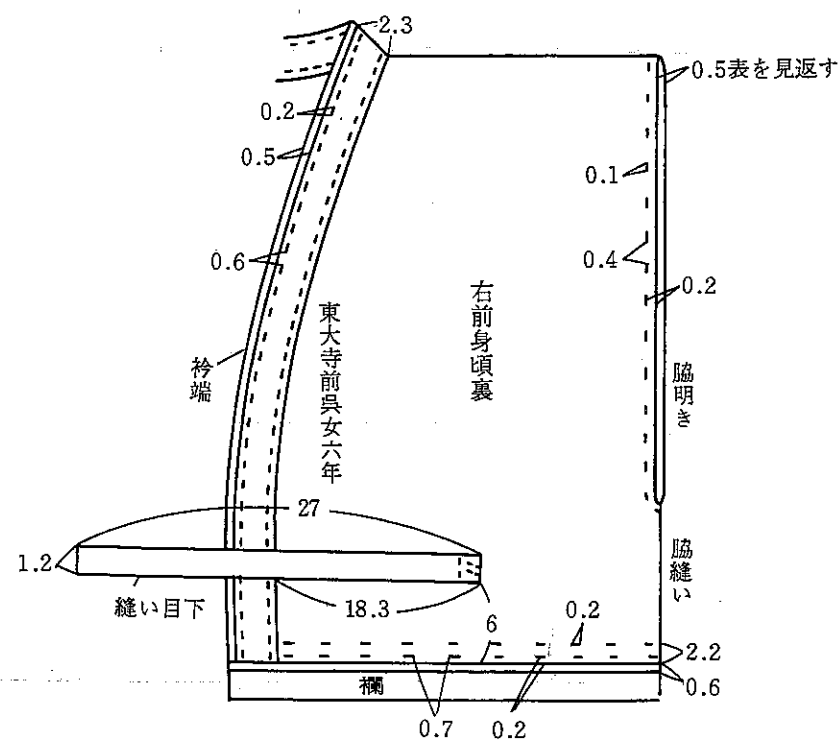
- 縫い糸は表と同色のS捻り絹糸を使用する。
- ぐし縫いの針目は0.5cmで、縫い目には0.2cmのきせをかけ、押さえ縫いは山から0.2cm内側を、針目0.1~0.2cm、間隔0.6~0.7cmにする。
- 脇縫いの上下を3cmほど表裏別々に縫い、その他は、前身頃で後身頃の表裏をはさんで、四つ縫いをする。折りは前身頃に返す。
- 脇明きは、表布を0.5cm見返して裏布をのせ、図のように押さえ縫いをする。
- 裾は、表布を0.6cm見返して押さえ縫いをする。
- 衿つけは、表裏の衿で身頃をはさみ、表裏に針目を出して押さえ縫いをする。
- 衿端、衿先は、表布を0.5cm見返して衿つけと同様に押さえ縫いをする。
- 襷は、裾および両端を表裏の布を中表に合わせ、ぐし縫いにし、表へ返して毛抜き合わせにする。
- つけの方は、表布を0.5cm見返して図のように押さえ縫

いをする。

●襷のつけ方は、身頃の裾から2.4cm上げて重ね合わせ、表裏へ同じように針目を出して、図のように押さえ縫いをする。

●紐は、標どおりに縫い合わせて表へ返す。

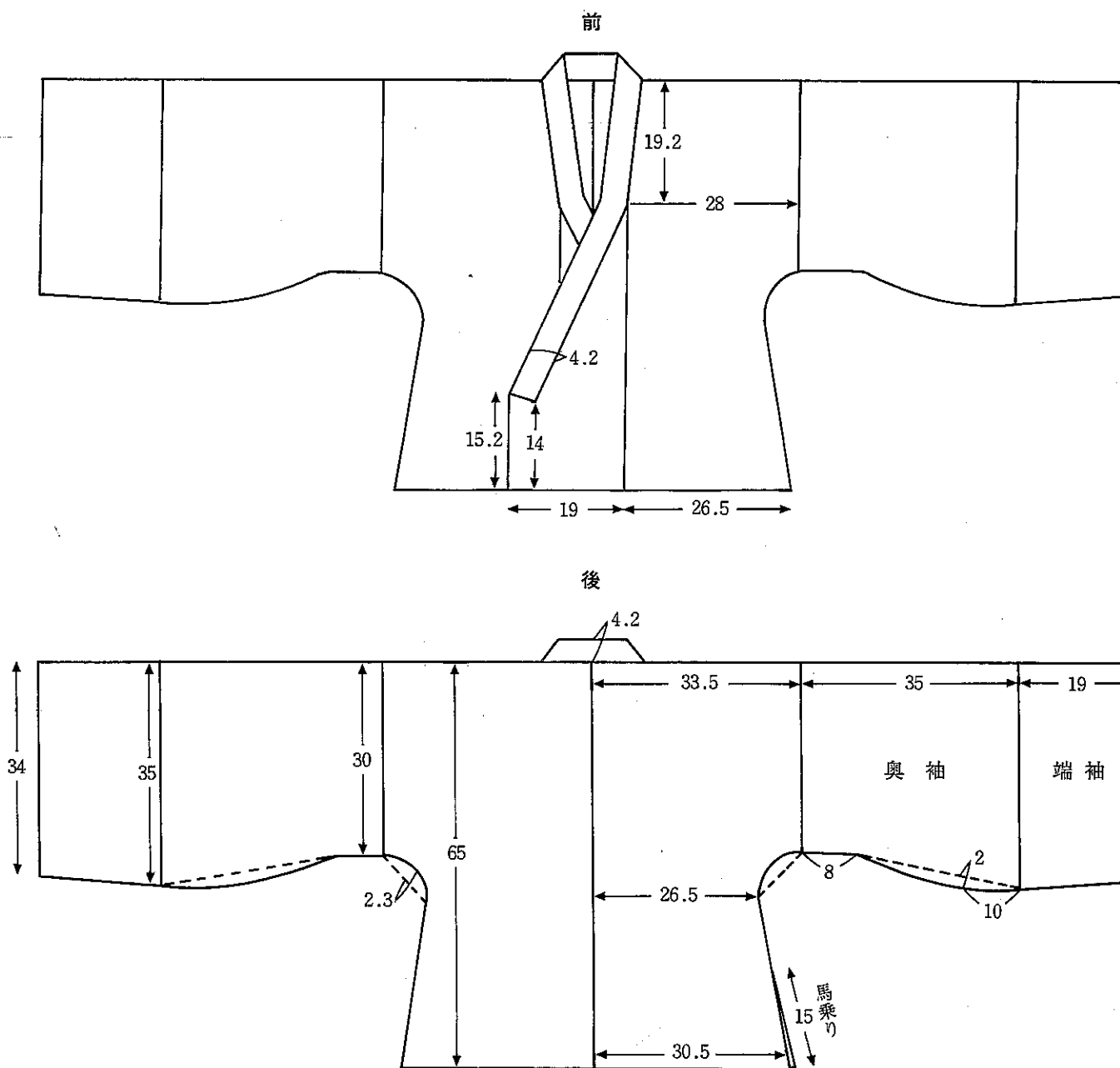
●つけ方は、図の位置に紐先を当て縫いつけてのち、針目を表へ出して三方をとじつける。



呉女背子の下に着用の上衣

これは正倉院御物の模造ではなく、背子、裳姿に組み合わせるために、上衣として仮りに製作したものである。

表裂には緑地藤縷唐花文羽二重を、裏裂には白羽二重を使用する。



出来上り寸法

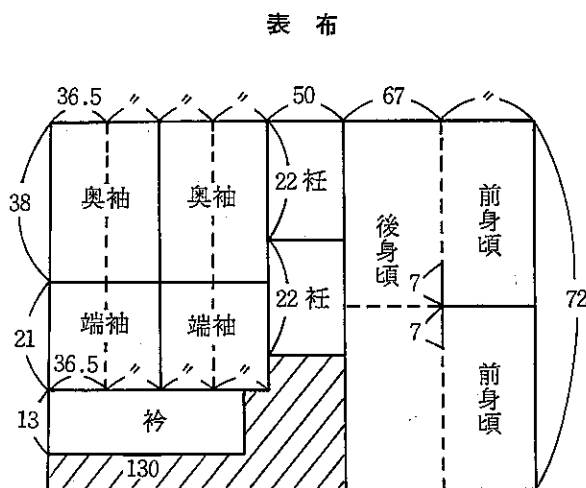
出来上り図に示す寸法のとおりである。

裁ち方

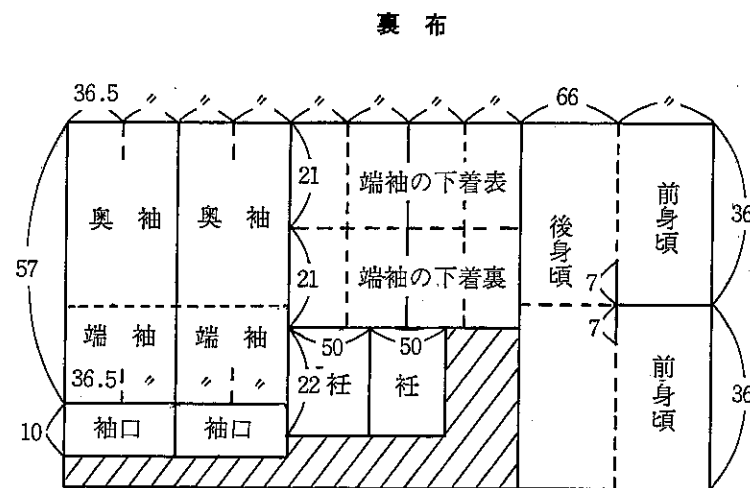
●表布は幅72cmの羽二重を330cm使用し、奥袖、端袖、身頃、衿および衿を図のように裁つ。

●裏布は幅72cmの羽二重424cmを使用し、図のように奥袖

と端袖は続けて裁ち、さらに袖口布と端袖の部分の下着および身頃を図のように裁つ。



奥袖丈×4+身丈×2+衿丈=表総丈
 $36.5 \times 4 + 67 \times 2 + 50 = 330\text{cm}$



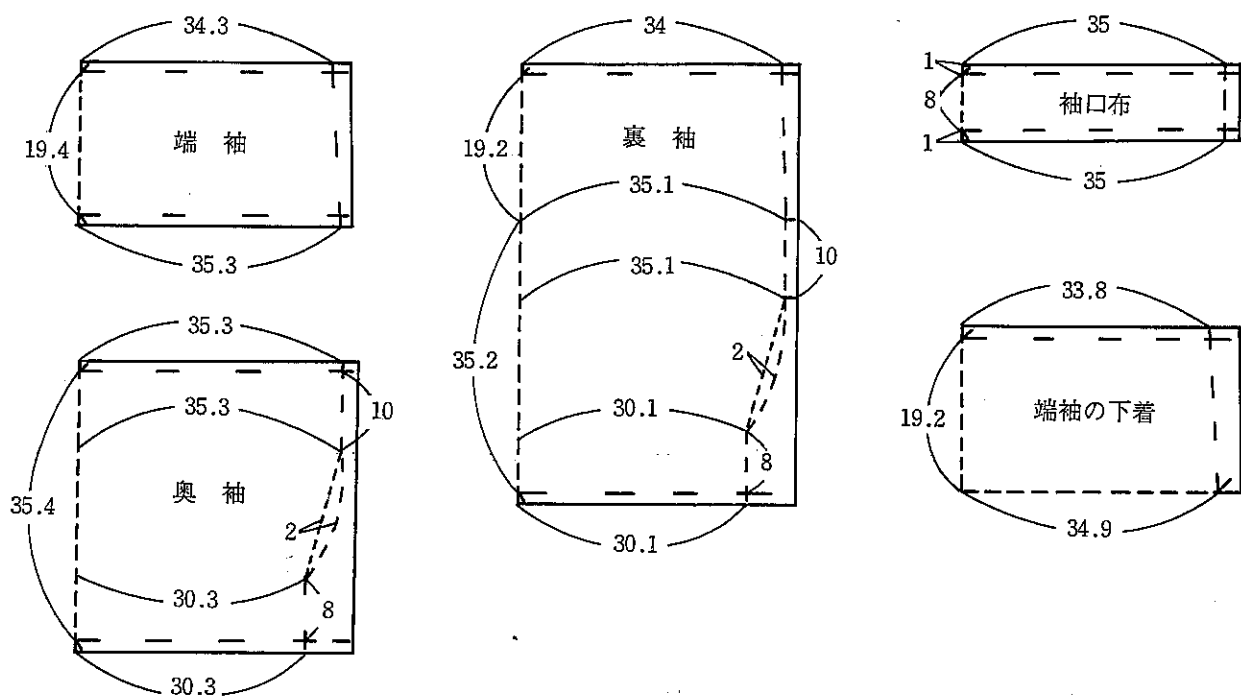
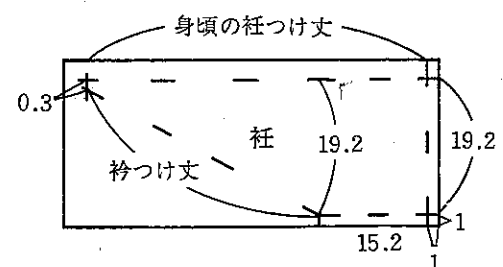
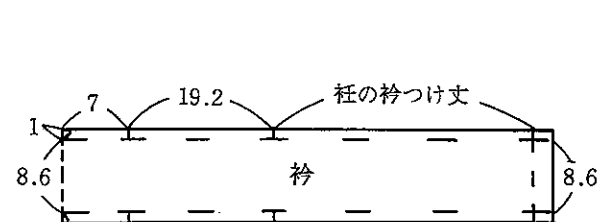
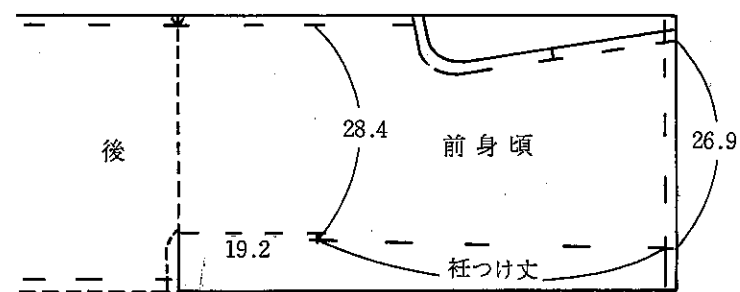
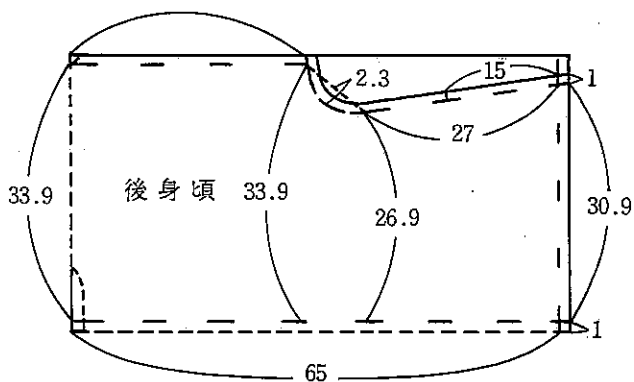
袖丈×8+身丈×2=裏総丈
 $36.5 \times 8 + 66 \times 2 = 424\text{cm}$

標つけ方

●奥袖、端袖、身頃、衿および衿を図のように標をつける。

●端袖の下着を図のように標をする。

●身頃と衿は裏も同様に標をつける。



縫い方

●縫い糸は表と同色および白色のS撚り絹糸を使用する。

●針目は0.5~0.6cmとする、縫い目にはすべて0.2cmのきせをかける。

●裏袖に袖口布をつける。

●表の奥袖と端袖を縫い合わせ、縫い代は端袖の方へ折り返す。

●端袖の袖口を表裏縫い合わせ、縫い代は裏へ折り、表へ返して毛抜き合わせにする。

●身頃の裾を表裏合わせる。このとき、表は標より0.7cm外を、裏は標より0.3cm内を縫う。縫い代の折りは裏へ折り、表に返して裏を0.5cm控える。衿の裾も同様に縫う。

●背縫いは、左身頃の表裏で右身頃の表裏をはさみ、四つ縫いをする。このとき、裾口は5cmほど表裏別々に縫う。折りは左身頃へ返す。

●袖つけは、表裏の袖で表裏の身頃をはさみ、四つ縫いをする。なお、前袖つけは13cmほど表裏別々に縫う。

●後身頃の馬乗りを表裏縫い合わせ、縫い代は裏へ折り、表へ返して毛抜き合わせにする。

●前身頃は、馬乗りを後と同様に縫い、馬乗りに留めをする。

●留め方は、表前身頃から針を出し、後身頃の表裏をすく、裏前身頃を縦に一針すく、逆の順に表前身頃に返して結ぶ。

●この留めに引き続き、脇は前身頃の表裏で後身頃の表裏をはさみ、脇割りから袖底に続けて四つ縫いをする。このとき、袖口は5cm表裏別々に縫う。

●脇割りに切り込みを入れ、縫い代がつかないように注意して、縫い代は表前身頃に折り返す。

●衿つけは、表裏の衿で表裏の前身頃をはさんで四つ縫いをする。縫い代は衿へ返す。

●衿下を表裏縫い合わせて表へ返し、毛抜き合わせにする。

●衿つけの仮とじをしてから、表身頃と衿を縫い合わせ、縫い代は衿の方へ折り、衿巾4.2cmに折り、裏でくける。

●衿先は衿にくけつめる。

●端袖の下着は、袖口を縫い合わせて表に返し、毛抜き合わせにする。

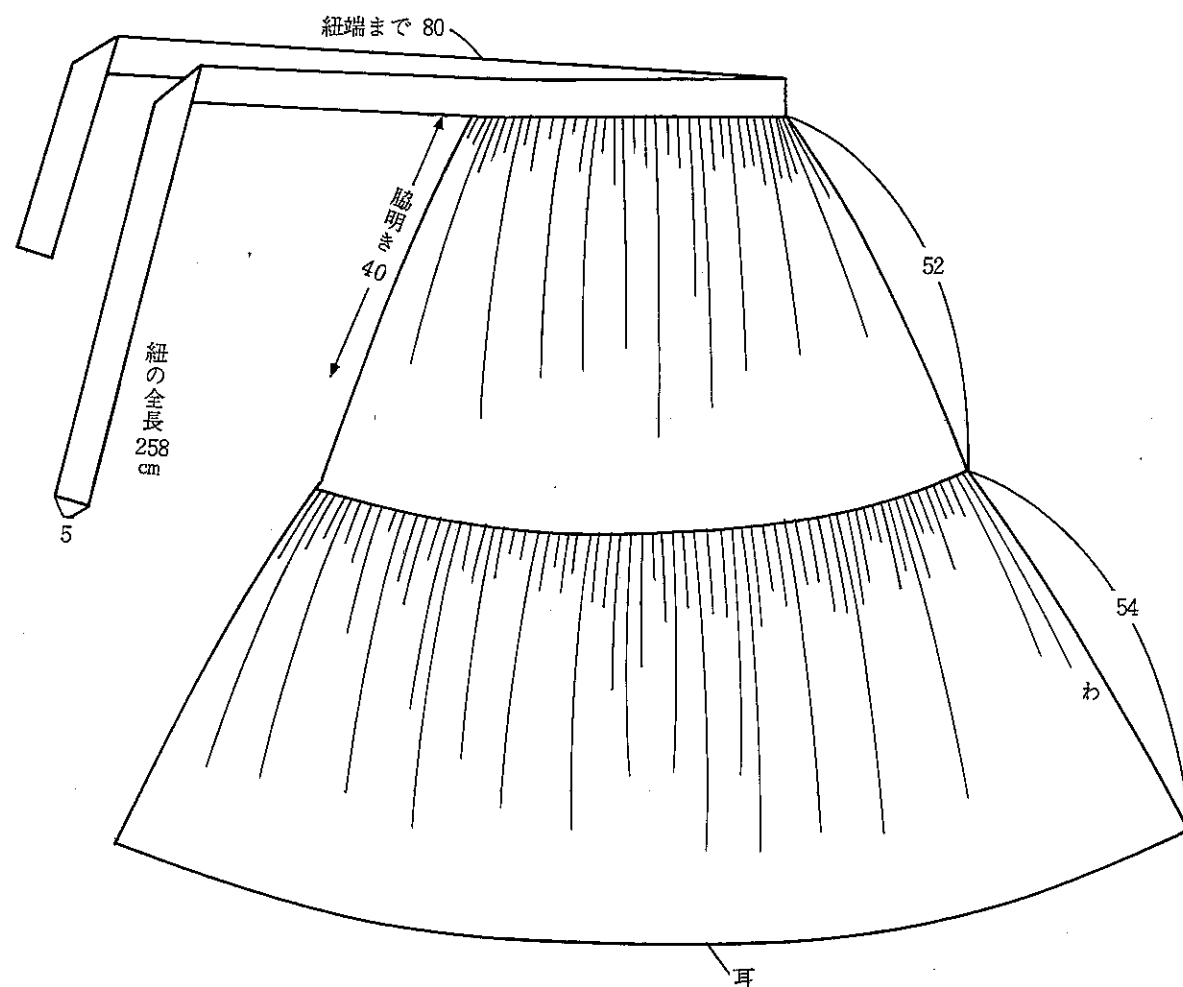
●袖底は四つ縫いにする。ただし、返し口として巾の中央で6cmほど裏袖を除いて三つ縫いにする。表に返して、縫い残しておいた裏袖をくける。

●端袖の下着を、裏袖の端袖寸法の位置にくけつめる。

白椽施衿裳 九拾七之参

表裏とも白椽糸を使用して、上下二段に細かい襷を折って、表裏別々に同じ仕立てをしてから二枚重ね合わせたこの衿の裳は、ボリューム感があり、動作によって美しい陰影の現われるものである。

なお、実物は上部の紐が失われているが、^{ざんけつ}残闕部分から襷幅、縫い代等を考察し、それをもとに紐をつけたものである。

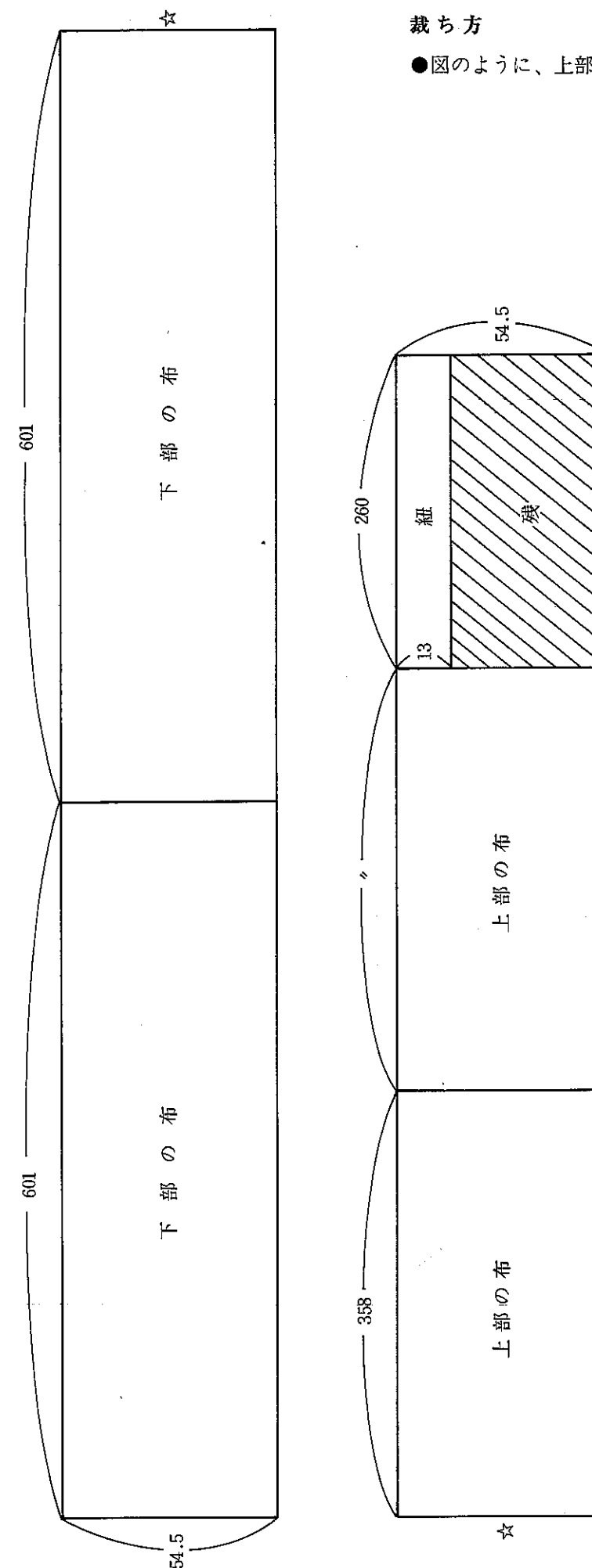


出来上がり寸法

図に示すと通りの寸法である。

裁ち方

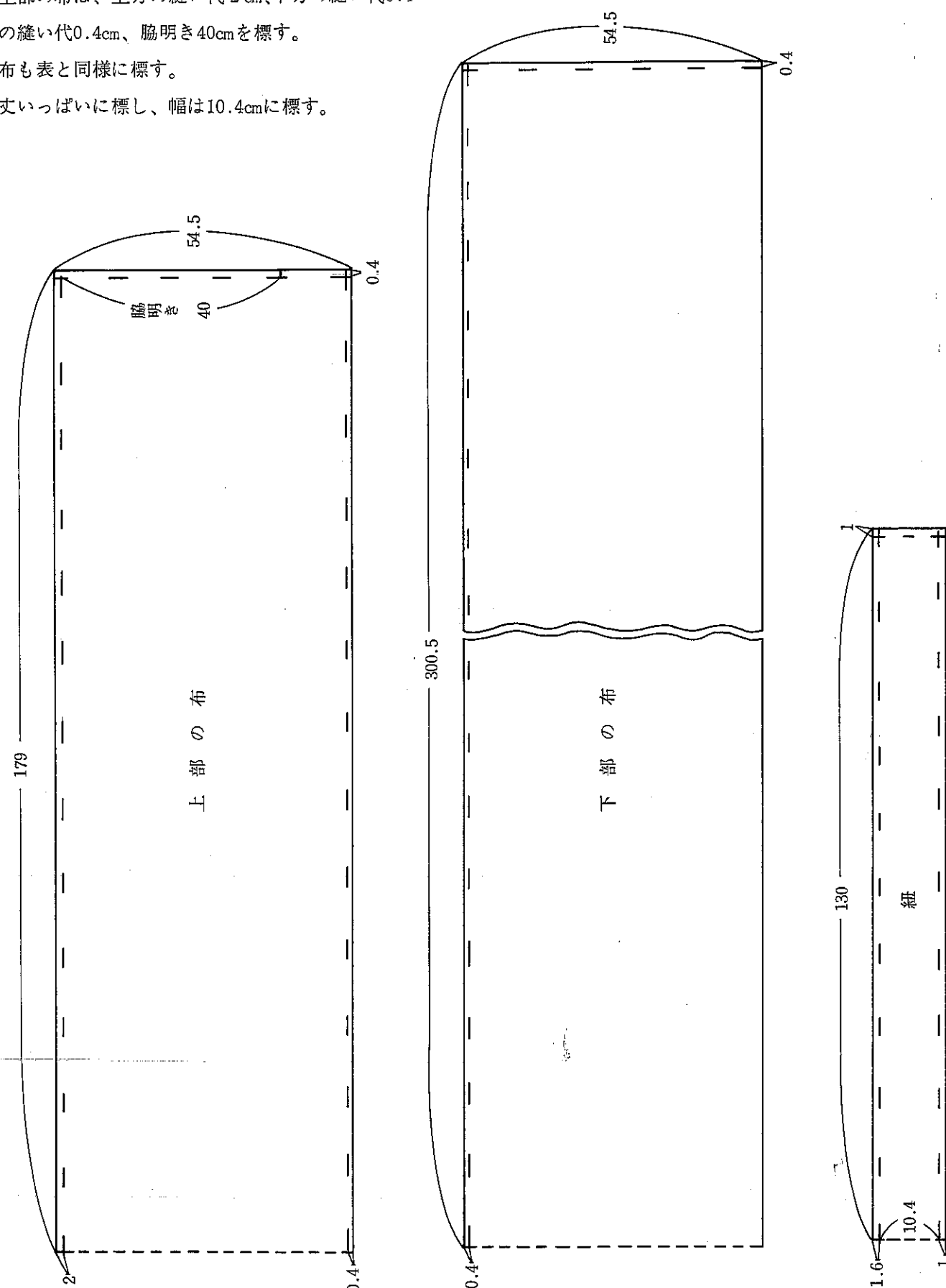
●図のように、上部の布、下部の布および紐を裁つ。



(上部の布丈 + 下部の布丈) × 2 + 紐丈 = 総丈
(358 + 601) × 2 + 260 = 2,178cm

標つけ方

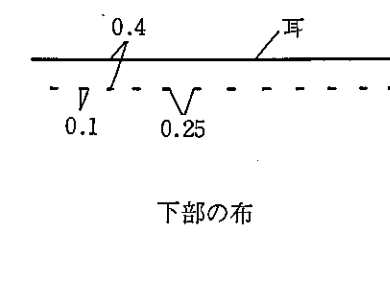
- 表の下部の布は、上方の縫い代0.4cm、脇の縫い代0.4cmを標す。
- 表の上部の布は、上方の縫い代2cm、下方の縫い代0.4cm、脇の縫い代0.4cm、脇明き40cmを標す。
- 裏の布も表と同様に標す。
- 紐は丈いっばいに標し、幅は10.4cmに標す。



縫い方

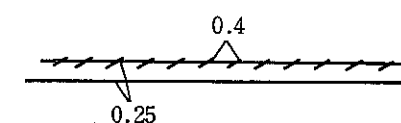
- 縫い糸は白色のS撚り絹糸を使用する。
- 表の下部の布の上方に、間隔3cm、深さ1cmとして同じ方向に襷取りをする。
- つぎに、これと上部の布を合わせ、針目1cm、間隔0.25cmで、図のように下部の布を見て返し針で縫い合わせる。縫い代は上部へ返す。
- 脇明きは図のように幅0.2cm、針目0.1cm、間隔0.2cmの三つ折り縫いをする。
- 脇縫いは幅0.25cm、針目0.2cm、間隔0.4cmのくるみまつり縫いをする。裾は耳のままにしておく。
- 裏の布はすべて表布と同様に縫い、これを表布の内側に重ね合わせ、上方をとじ合わせる。
- 上部は下部の襷と同じ方向に、間隔0.5cm、深さ1cmで襷取りをする。
- 紐つけ寸法は、およそ78cmくらいになる。
- 紐は、かりに幅5cm、丈258cmとする。標どおりに縫い合わせ、表に返し幅を整えておく。このとき一方の紐端から80cm入ったところから紐つけ寸法だけ縫い残しておく。
- 紐つけは、紐で裳をはさみ、折り山から0.25cm内側を針目0.1cm、間隔0.5~0.6cmで押さえ縫いをする。このとき紐はつけ始めを出来上り図のように80cm出してつける。
- 紐つけの部分は、紐つけの折り山から2cm上を、紐つけの針目と同様に押さえ縫いをする。

縫い合わせ方



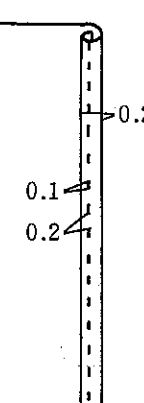
上部の布

脇の縫い方

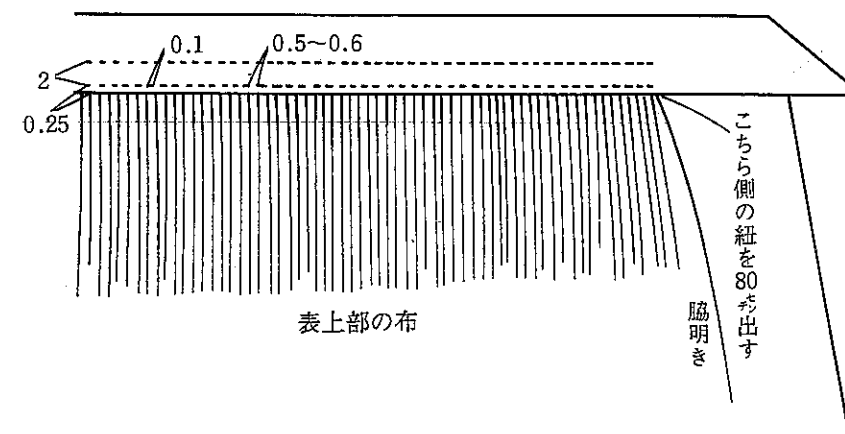


脇明き

脇明き



紐のつけ方

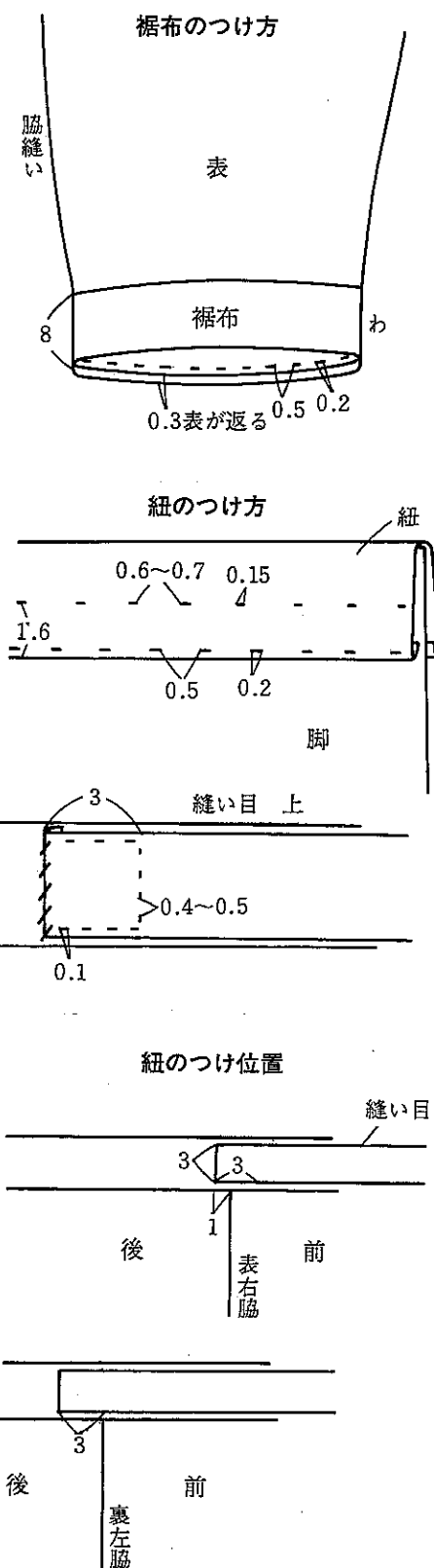


表上部の布

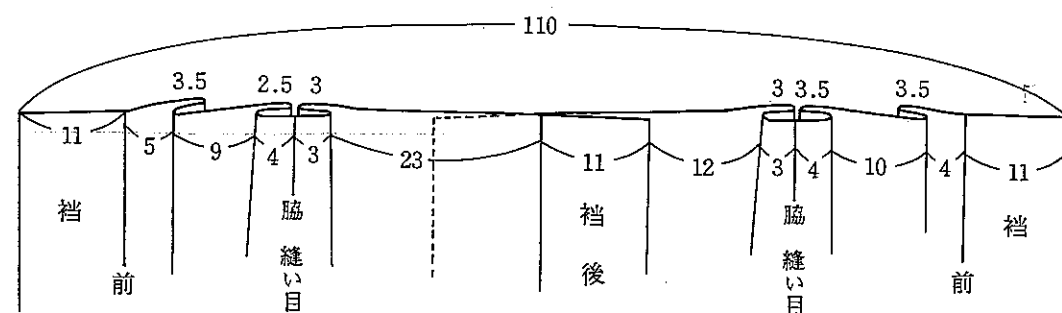
脇明き

縫い方

- 縫い糸は白色のS撚り絹糸を使用する。
- 主として四つ縫いで、針目は0.4~0.5cmとする。縫い目にはすべて0.2cmのきせをかける。
- 左脚の脇縫いは、前の表裏で後の表裏をはさみ、四つ縫いをする。折りは前へ返す。
- 胯下は脇縫いと同様に、前の表裏で後の表裏をはさんで四つ縫いをする。折りは前へ返す。
- 裾口布は脇を表裏別々に縫い、折りは脇と同様に前へ返す。
- 裾口は表を0.3cm見返して、裏を合わせ、図のように針目0.15cm、間隔0.5cmで押さえ縫いをする。
- 裆つけは裆の表裏で身の表裏をはさみ、前後続けて四つ縫いをする。折りは前へ返す。
- 裆の端は裏からぐし縫いをして表に返し毛抜き合わせにする。
- 右脚は、左脚とすべて同様に仕立てる。
- 後裆の左右を重ねて、図のように襷を取る。
- 紐は、中央紐つけ寸法112cmを残して、左右の紐幅および紐先は、中表に標どおり縫い合わせ、表に返して幅を整える。
- 紐のつけ方は紐で身をはさんで、図のように折り山から0.2cm内側を針目0.15cm、間隔0.5cmで表裏へ針目を出して、押さえ縫いをする。
- さらに、折り山から1.6cm上ったところへもう一度、針目0.15cm、間隔0.6~0.7cmの押さえ縫いをする。
- 脇の紐は三方を標どおり縫い合わせ、表に返して幅を整える。
- つけ方は右脇では表側へ、左脇では裏側へ、図の位置に当て、裁ち目の方の紐先を0.5cm折ってまつりぐけをして、他の三方は針目0.1cm、間隔0.3~0.4cmで両面へ針目を出してとじつける。



襷の取り方

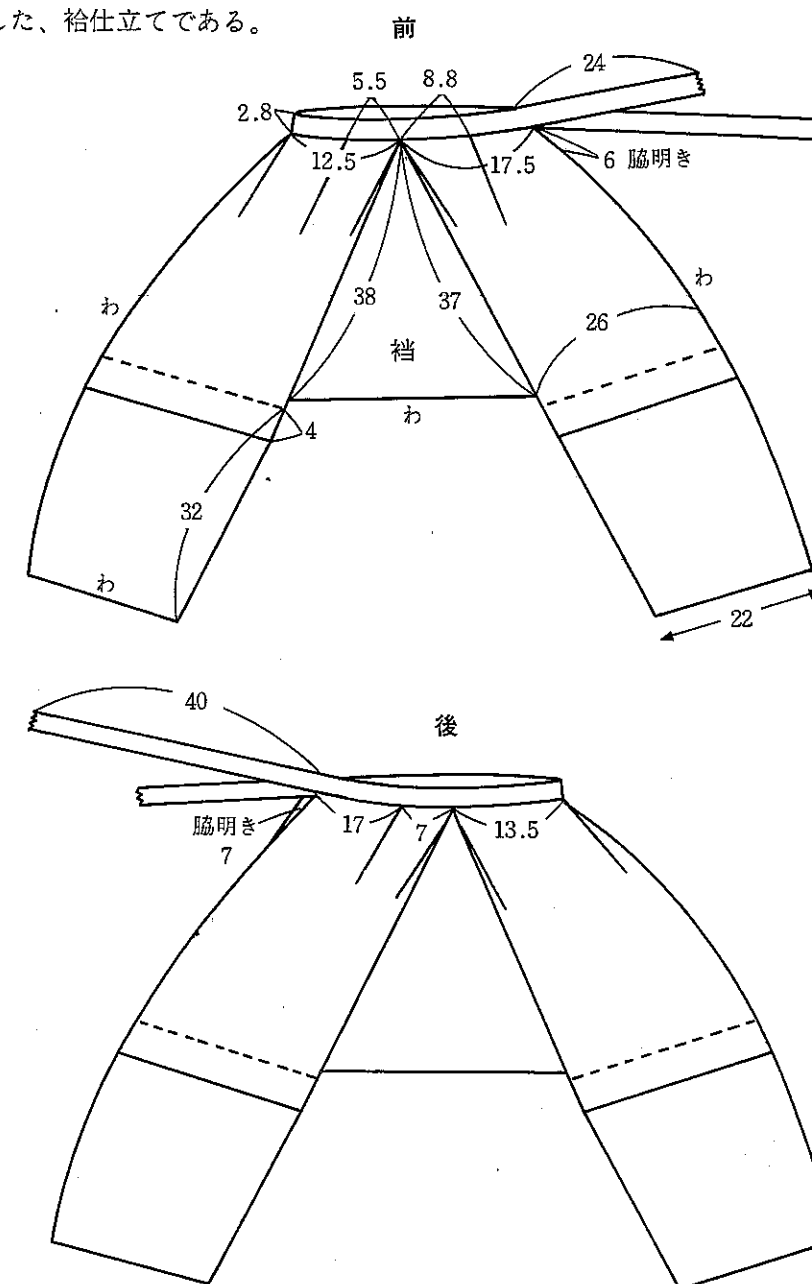
きゅう たの はかま
久太袴 度羅楽八物之袴

実物の袴の後紐表端に、東寺度羅楽久太袴天平勝宝四年四月九日の墨書がある。

表裏とも白絶を使用した、袷仕立てである。

出来上り寸法

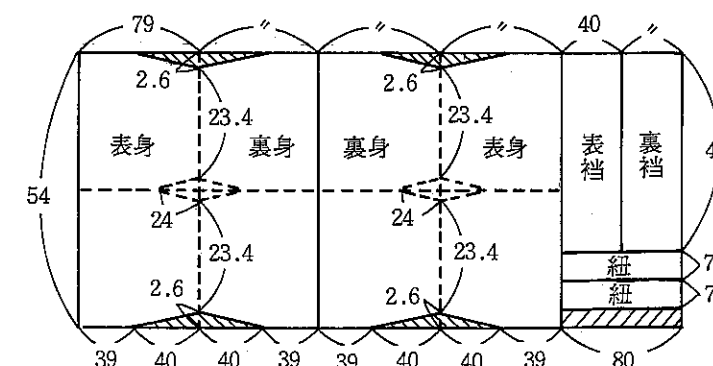
寸法は出来上り図に示すとおりで、形は閉袴式である。



裁ち方

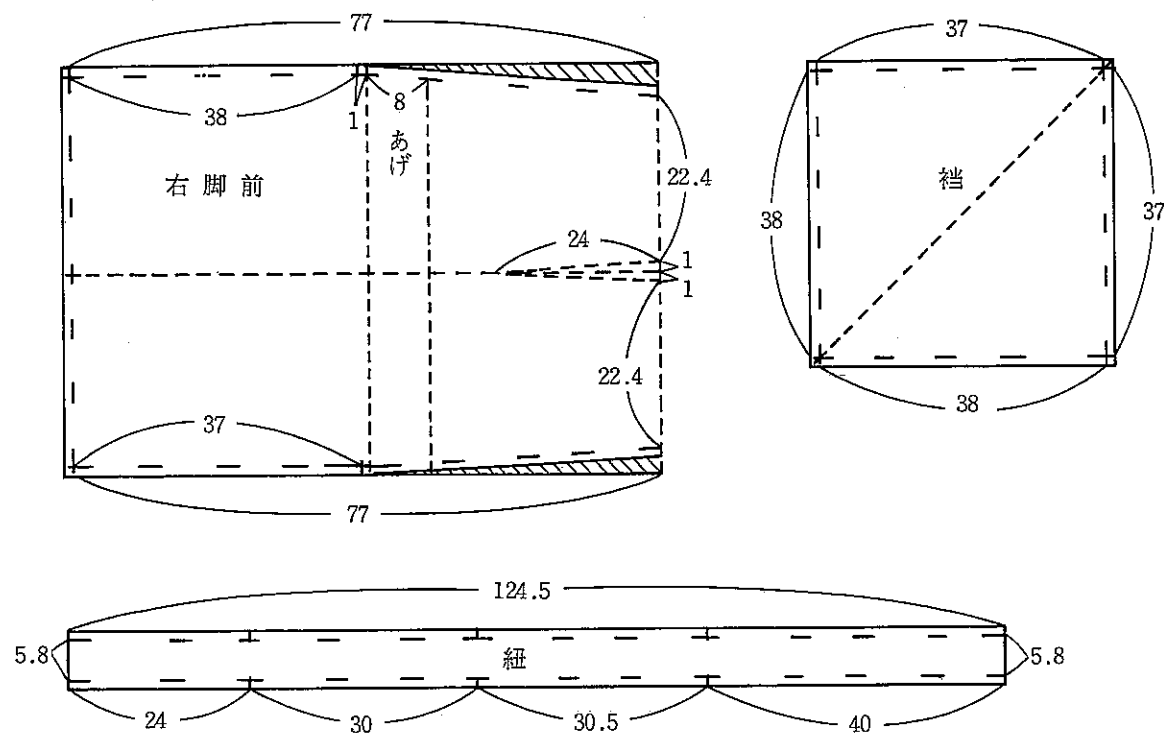
- 模造は幅54cmの白平絹を396cm使用して、身、裆、紐を図のように裁つ。

$$\begin{aligned} \text{袴丈} \times 4 + \text{裆丈} \times 2 &= \text{総丈} \\ 79 \times 4 + 40 \times 2 &= 396\text{cm} \end{aligned}$$



標つけ方

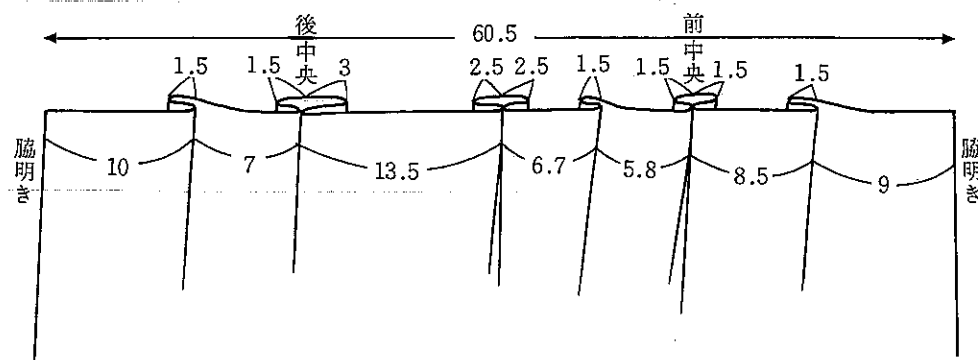
- 図のように、身、裆、紐の標をつける。



縫い方

- 縫い糸は白色のS撚り絹糸を使用する。
- 針目は0.3~0.4cmにする。縫い目は0.2cmのきせをかける。
- 脇裾は後の表裏で前の表裏をはさみ、標どおりに四つ縫いにするが、裾口から上部へ24cmの間で自然に縫い消す。縫い代は後へ返す。
- 胯下は脇裾と同様に、後の表裏で前の表裏をはさんで四つ縫いにして、折りは後へ返す。
- 裆つけは、右脚の前後は裆の表裏で身の表裏をはさんで四つ縫いをし、折りは裆に返す。
- 左脚の前裆も同様にする。ただし、その上部は約5cm縫い残す。縫い残した部分は表から針目0.1cm~間隔0.6~0.7cmで、六針表裏へ針目を出して押さえ縫いをする。
- 左脚の後裆は、身の表裏で裆の表裏をはさみ四つ縫いをする。折りは身の方へ返す。
- 胴囲りは図のように襷を取る。
- 左脇明きは8cm切り込みを入れて、裁ち目のままにする。
- 紐は二本の紐を接ぎ合わせ、中央64cmを残して、両端および紐先を縫って表へ返す。
- 紐つけは表裏の紐で身をはさみ、表は針目0.1cm、間隔0.8cm、裏は針目0.25cm、間隔0.7cmで押さえ縫いをする。

襷の取り方

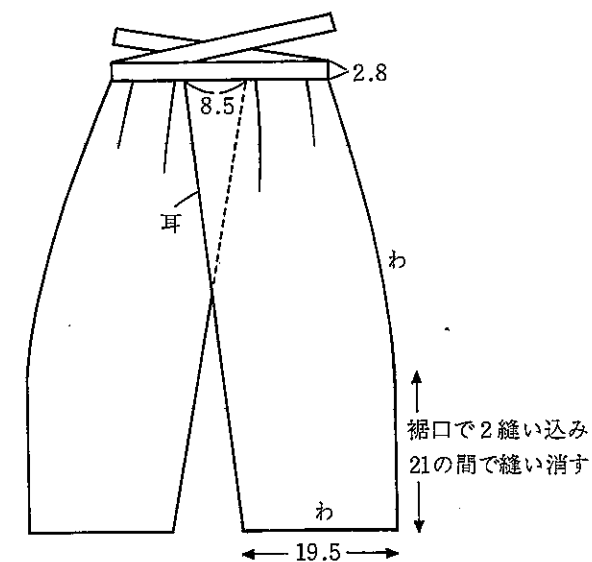


しろあしぎぬあわせのしたばかま

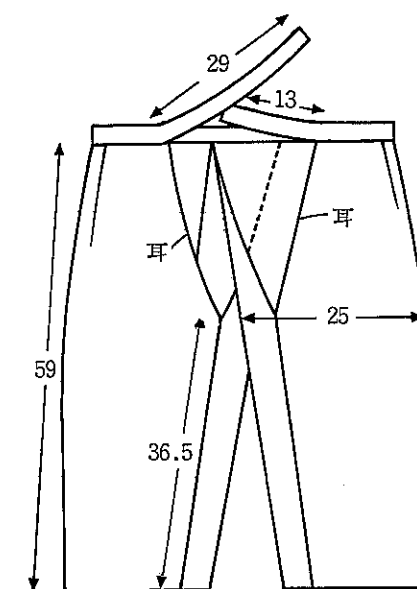
白絶袴下袴

この袴は、紐つけ位置まで左右の脚が別々になった開袴式のもので、実物は表裏とも白絶を使用しているが、模造のものは白平絹を使用する。

前

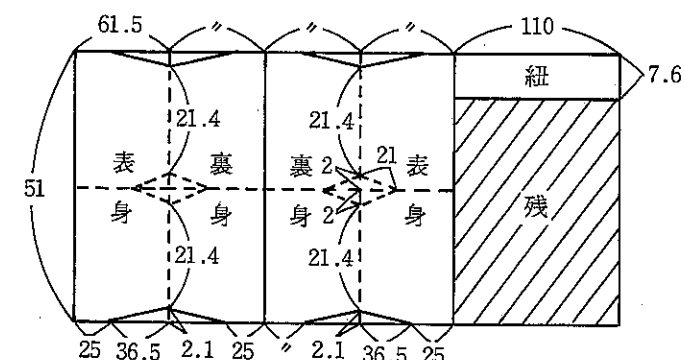
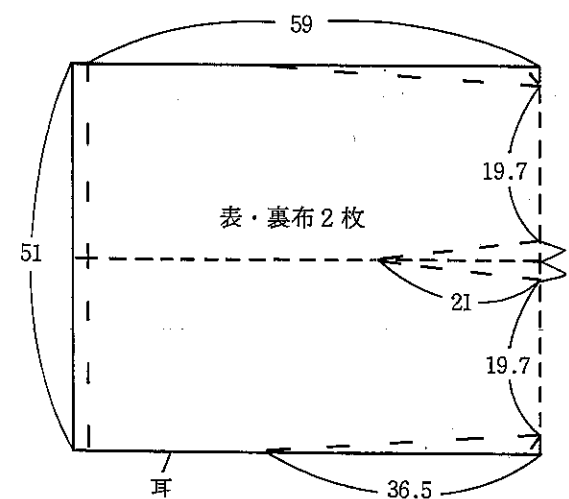


後



裁ち方

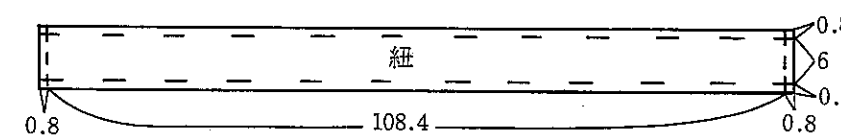
- 51cm幅の白平絹を356cm使用し、出来上りの裾をわにするため、表裏を続けて図のように裁つ。



身丈×4+紐丈=総丈
61.5×4+110=356cm

標つけ方

- 丈を二つに折る。
- 図のように裾はわで、丈、脇、胯上、胯下の標をする。
- 紐を図のように標をする。



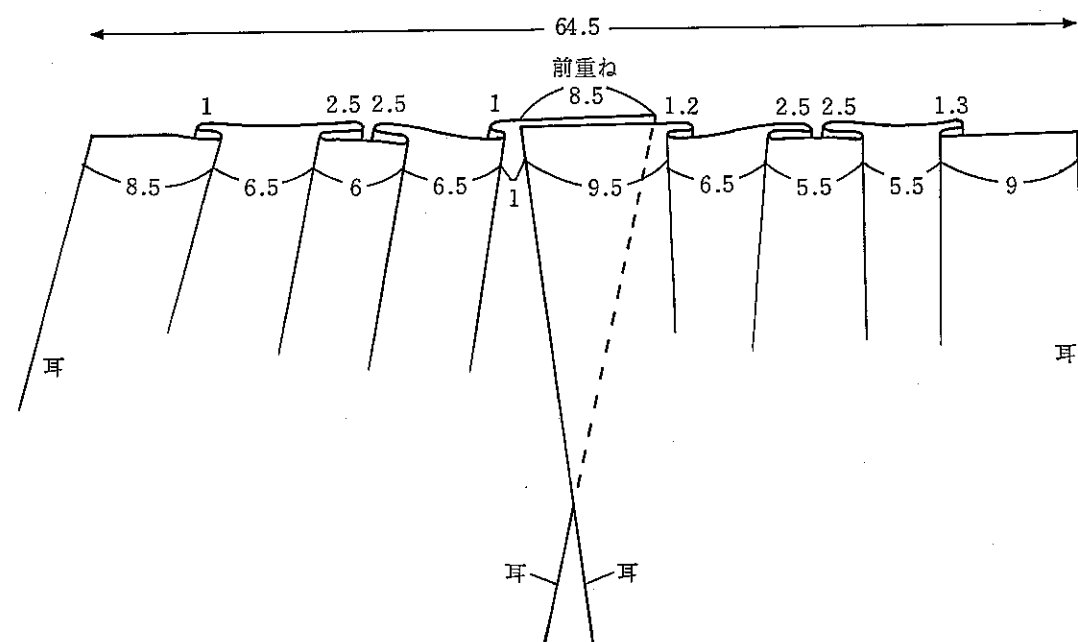
縫い方

- 縫い糸は白色のS撚り絹糸を使用する。
- 針目は0.3~0.4cmで、縫い目には0.2cmのきせをかける。
- 脇裾は幅を折ってから、丈は裾から二つ折りにし、脇裾を標どおり四つ縫いにする。
- 右脚および左脚の別なく、同じに四つ縫いをする。縫い目の折りは右脚では後へ、左脚では前へ返す。
- 胯下は、脇裾と同様に四つ縫いをする。
- 右脚は、後の表裏で前の表裏をはさみ、また左脚は、前の表裏で後の表裏をはさんで、四つ縫いをする。折り

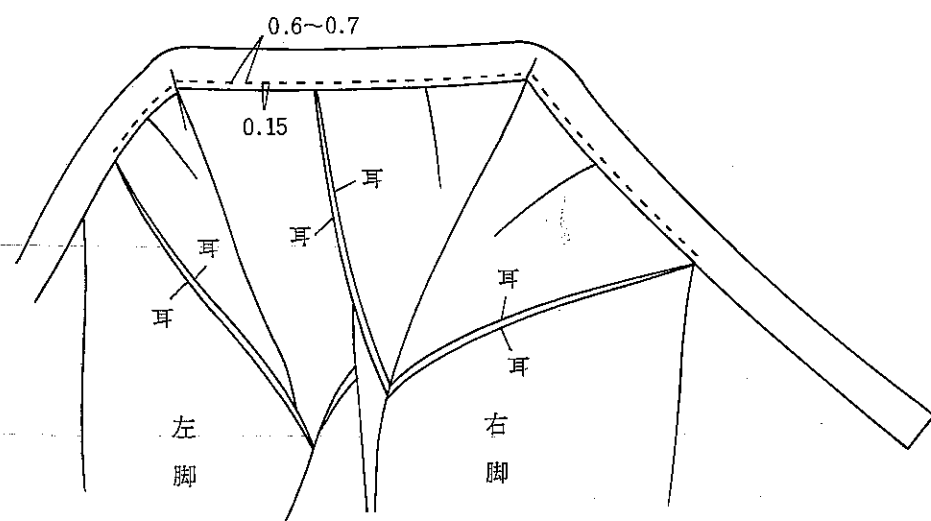
は右脚では後へ、左脚では前へ返す。

- 胯上は耳のままで縫わない。
- 胴廻りは64.5cmになるように、前は左脚を上、右脚を下にして8.5cm重ね、図の位置に襷を取る。
- 紐は中心から胴廻り寸法の74.5cmを残して、左右を裏から標どおり縫い合わせ、表へ返して幅を整える。
- 紐つけは紐の縫い残した部分を出来上り幅に折り、この表と裏で身をはさみ、針目0.15cm、間隔0.6~0.7cmで押さえ縫いをする。

襷の取り方

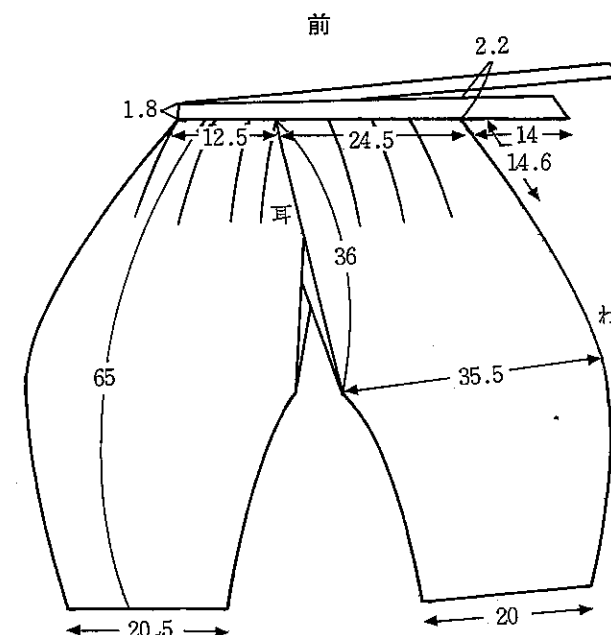


紐のつけ方



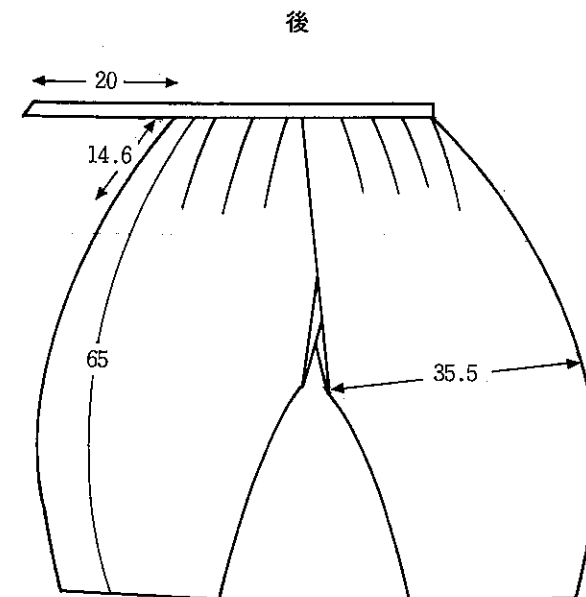
布袴 四号

実物の袴には、後左脇明きの上部に信濃国印の朱印および天平宝字八年十月の墨書があり、麻の単仕立てで形は開袴式である。



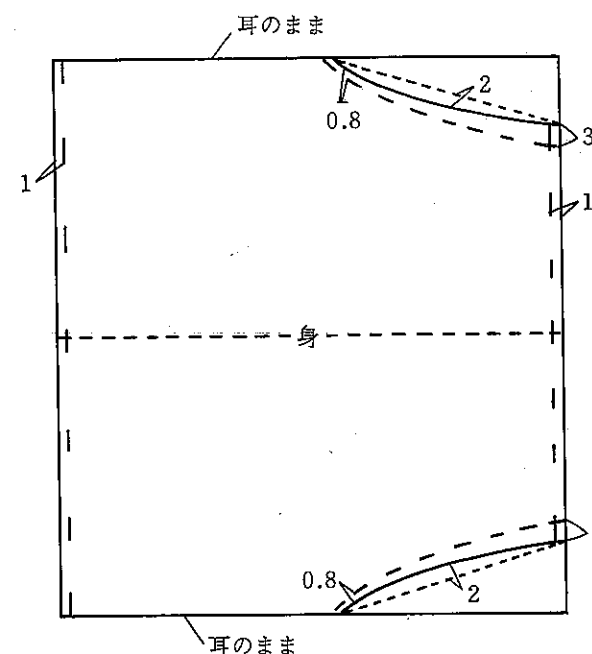
出来上り寸法

寸法は図に示すとおりである。



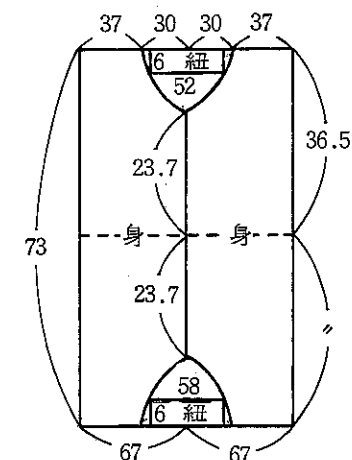
裁ち方

- 73cm幅の麻布134cmを使用して、身頃および紐は図のように裁つ。

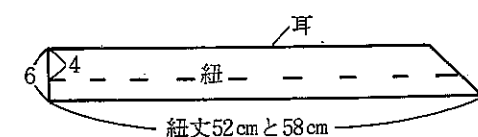


標つけ方

- 図のように身頃、紐の標をつける。



身丈×2=総丈
67×2=134cm

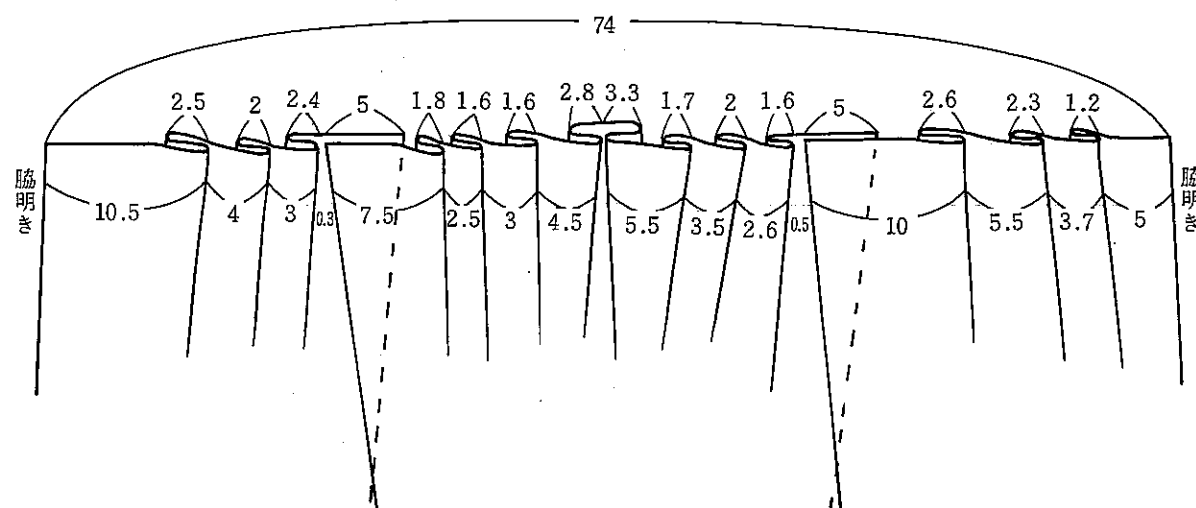


縫い方

- 縫い糸は白色のS撚り絹糸を使用する。
- 針目は0.5~0.7cmとする。
- 胯下は裾口3cm、上部0.8cmの縫い代を標どおり合わせて、ぐし縫いをする。
- 縫い代は右脚では前の方へ、左脚では後の方へそれぞれ0.2cmのきせをかけて返す。
- 裾は幅0.5cmの三つ折りにして、表では針目0.3cm、間隔0.7cm、裏では針目0.5~0.6cm、間隔0.5~0.7cmの三つ折りぐし縫いをする。ただし胯下の縫い代の部分は、まつりぐし縫いをする。
- 左脚の脇に16.6cm切り込みを入れ、裁ち目のまま脇明きとする。

- 胯上は耳のままとし、前は左脚を上、後は右脚を上にして、いずれも5cm重ねる。
- 胴廻りは74cmにして、図のように襷をとる。
- 二本の紐は0.3cmのぐし縫いで接ぎ合わせ、折りは後の方へ返す。
- 表裏の紐で身頃をはさみ、表は針目0.25cm、間隔1cm、裏は針目0.3cm、間隔0.8~1cmで、押さえ縫いをする。
- 紐は紐つけに続けて、針目0.2cm、間隔1cmの押さえ縫いをする。
- 紐端は裁ち目のままにする。
- 両脚の前方、裾口より0.6cm上に、縫糸で針目1cm、間隔1.5cmにして五針縫う。玉の結びは裏側とする。これは、裾口を括るための糸と考えられる。

襷の取り方

うでぬき
腕貫 第一号

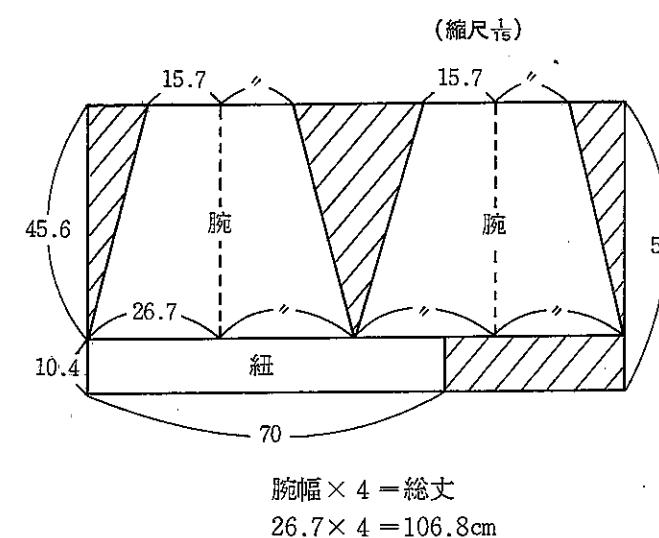
腕貫は、写経生が袍の袖口の汚れを防ぐために使用した腕カバーで、実物は白絹を使用し、紐裏には高市老人の墨書があるが、模造のものは白平絹を使用する。

出来上り寸法

出来上り図に示す寸法のとおりである。

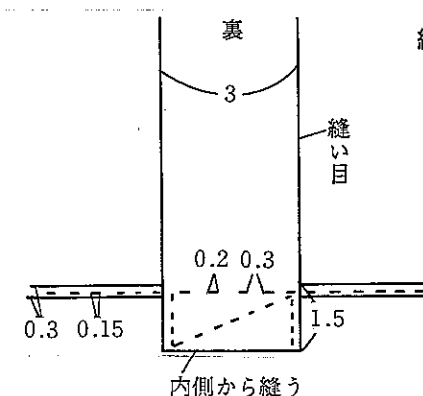
裁ち方

- 56cm幅の白平絹106.8cmを使用して、図のように腕布および紐を裁つ。

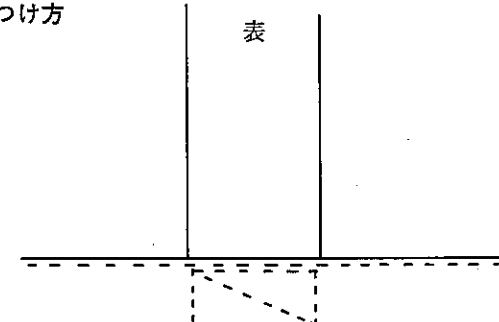


縫い方

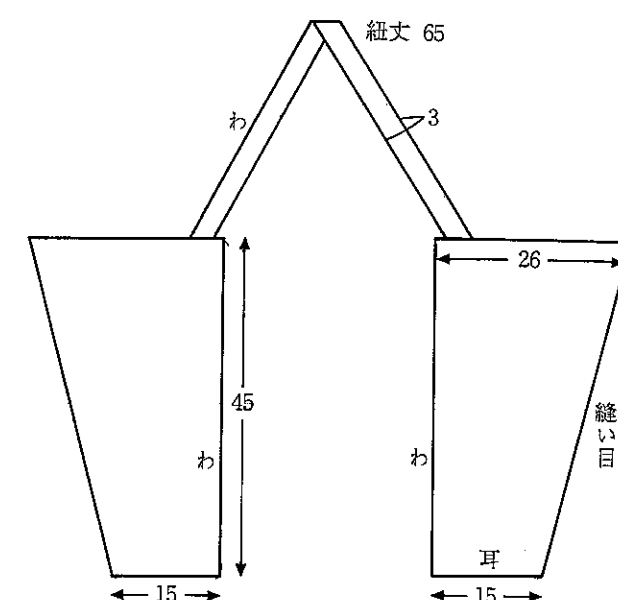
- 縫い糸は白色のS撚り絹糸を使用する。
- 袖下は袋縫いで、最初の縫いは表から縫い代0.2cm、針目0.2cmでぐし縫いをする。二度目の縫いは、裏から縫い代0.3cmで最初の縫い方と同様に縫って、折りは片方へ折る。
- 袖の奥は幅0.3cm、針目0.15cmで三つ折り縫いをする。
- 袖口は耳のままとする。
- 他方も同様に仕立て、紐をつける。



紐のつけ方

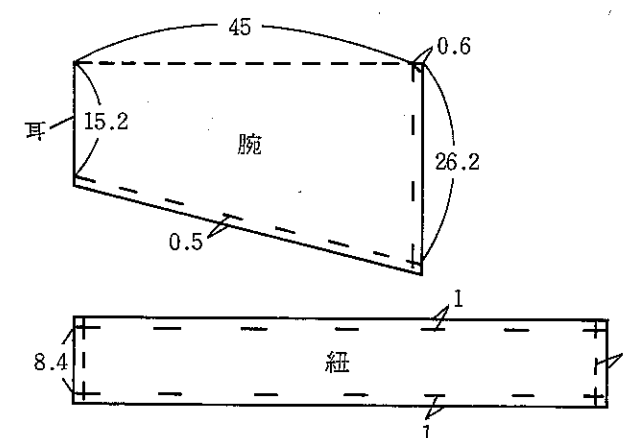


出来上り図



標つけ方

- 図のように腕布と紐に標をつける。



- 紐は内側から針目0.3cmでぐし縫いをして、縫い代は0.2cmのきせをかけて表へ返す。
- つけ方は図の位置に当て、一方は内側から縫いつけ、他の三方は図のように針目0.2cm、間隔0.3cmで表裏へ針目を出してつける。

は じんがくせつよう

破陣楽接腰 二隻四 唐古楽拾九物之壱

接腰は本来旅行や乗馬のとき、袴の上から脚につけるものであるが、この接腰は裏の上部に東寺唐古楽破陣楽接腰天平勝宝四年四月九日の墨書があるので、大仏開眼会の唐古楽破陣楽用のものと思われる。

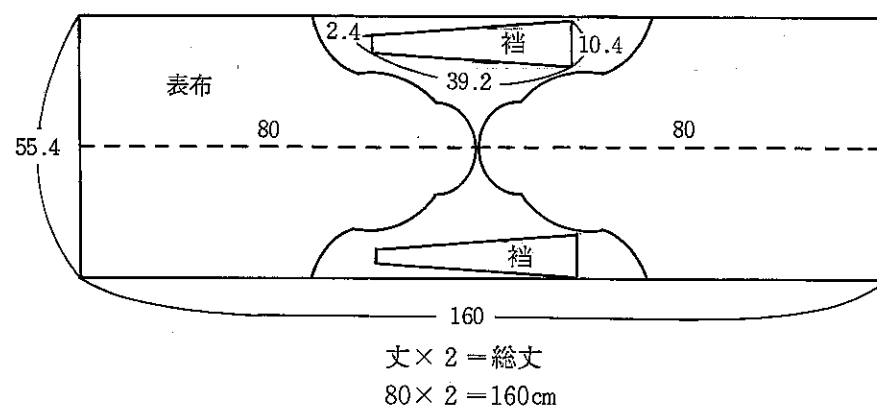
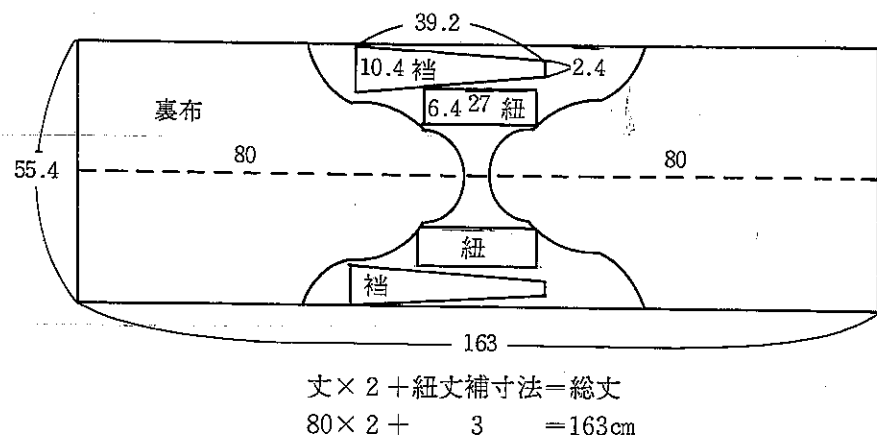
実物の表裂は緑地葡萄唐草文錦、裏裂は紅緋である。
模造は表裂に縹地狩獵文錦を、裏裂には紅絹を使用する。

出来上り寸法

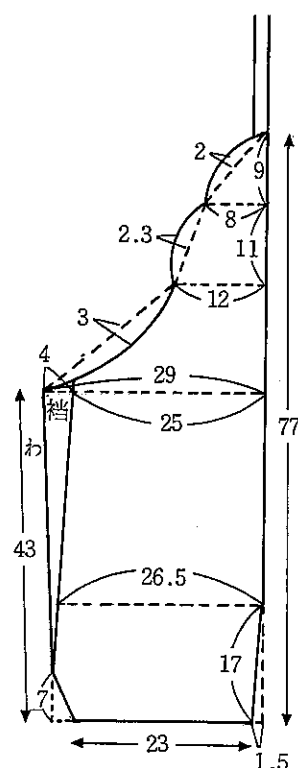
出来上り図に示す寸法である。

裁ち方

- 出来上り図の寸法で型紙を裁つ。
- 表布に型紙を当て、図のように縫い代を標し、裆は寸法どおりに裁つ。
- 裏布は表布と同様に標をつけ、裆および紐を裁つ。

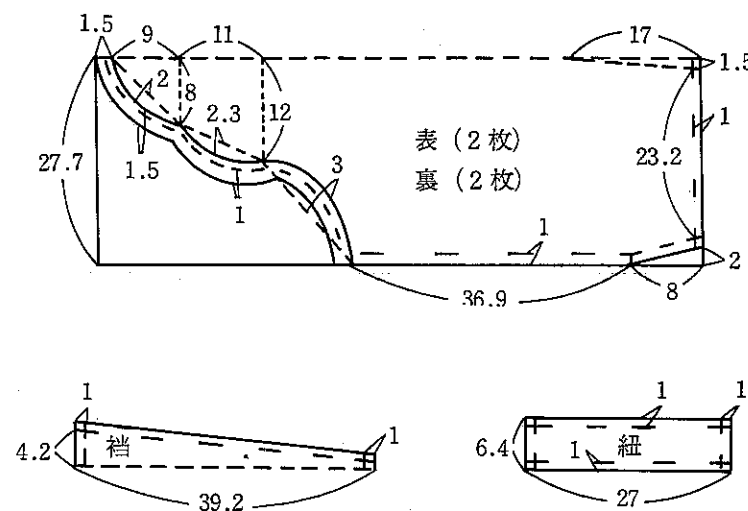
表 布 (縮尺 $\frac{1}{16}$)裏 布 (縮尺 $\frac{1}{16}$)

出来上り図



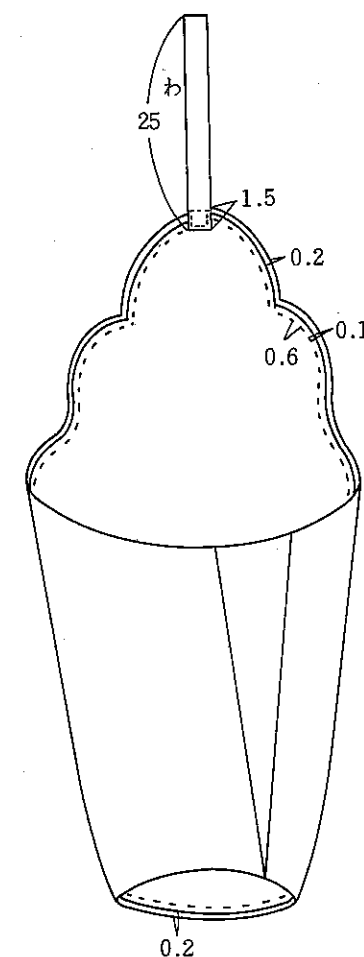
標つけ方

- 表布および裏布を幅二つ折りにして重ね、図のように縫い代の標をつける。
- 裆および紐は、図のように標をつける。



縫い方

- 縫い糸は表と同色のS撚り絹糸を使用する。
- 裆つけは、裆の一方の表裏の裆で身をはさみ、針目0.5cmで四つ縫いをして、折りは裆に返す。
- 他方は身で裆をはさんで四つ縫いをし、折りは身へ返す。この際、上部および裾口は3cmほど表裏別々に縫う。
- 裾口の中央を表布および裏布を別々に中表に折り、表裏の折り山を合わせて、針目0.5cmで四つ縫いをして、17cmのところで縫い消す。このときも、裾口は3cmほどは表裏別々に縫う。
- 上部は表を0.2cm見返して裏布を合わせ、針目0.1cm、間隔0.6cmで表裏へ針目を出して押さえ縫いをする。
- 裾口は、上部と同様に押さえ縫いをする。
- 紐は裏から針目0.5cmでぐし縫いをし、表へ返す。
- つけ方は前の上部裏に紐を当て、3cm内側を縫って折り返し、三方を小針に両面に出してつける。
- もう一方の脚も同様に仕立てる。



縫い方

●縫い糸はS撚り、白色の絹糸、錦と同色の絹糸を使用する。

●芯の一枚は縫い代つきのものを外側とし、他の二枚をこれに重ね、外側の芯は周囲1cm折り返して中の二枚の芯を包み、針目1cmでとじる。

●芯の表側へは表布を当て、裏側へは裏布を当てる。

●表布は裾口では折り代0.6cm、両側では0.8cmとして、裏布の上へ折り返し、針目0.1cm、間隔0.5cmで表へ針目を出してまつりぐけをする。上部は裁ち目のまま、縫い代を折り返す。

● 錦の縁は縫い代を1cm裏へ折り、錦の縁の幅の寸法下部に当て、間隔0.8cmでまつりぐけをする。

●両端を幅1～1.2cm、上部を1～2.2cm裏へ折り返し、

間隔0.8cmとして、いずれも表へ針目を出してまつりぐけする。

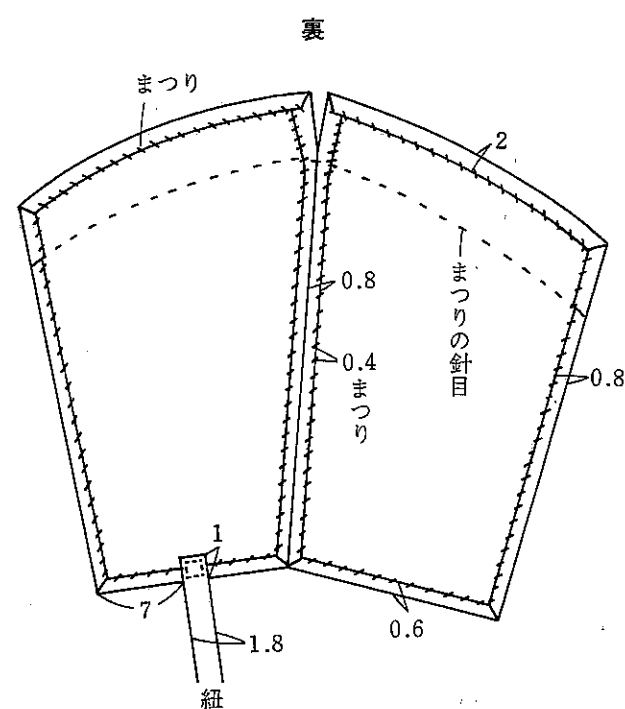
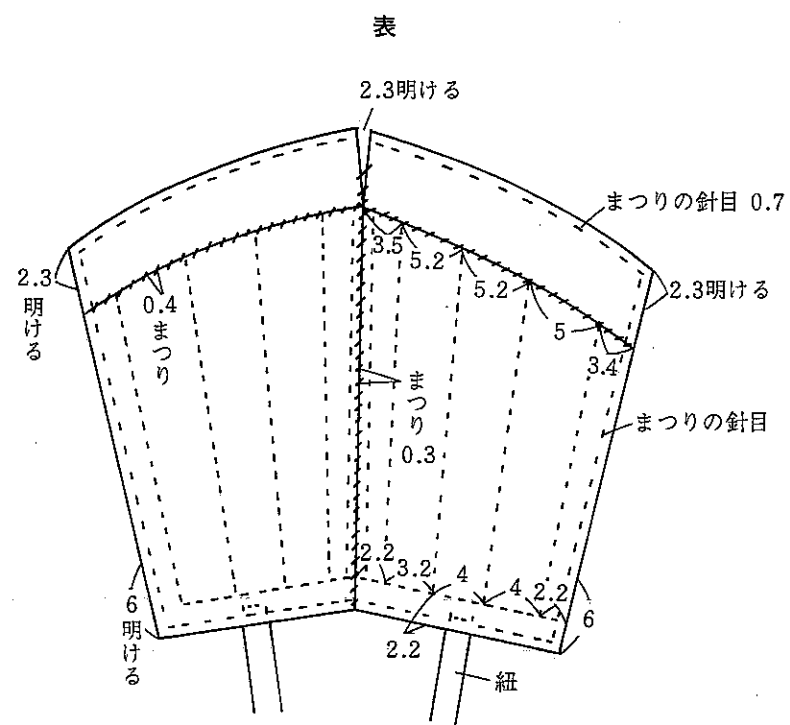
●縦および横のとは表は針目0.1~0.5cm、間隔0.6cm、裏は針目0.3~0.5cm、間隔0.4cmとし、表を見て返し針でとじる。

●反対側も同様に縫い、外表に二枚合わせ前部では上部2.3cm、後部では上部6cm、下部7cmだけ明け、表側から間隔0.4cmでかがり合わせる。

●錦の縁のつけのかがり糸は錦と同色の糸を使い、その他は白色の糸を使用する。

●裾口の紐は幅を四つ折りにし、折り山から0.5cm内側を針目0.15cm、間隔1.2cmとして、押さえ縫いをする。

●図の位置に表裏へ針目を出してつける。



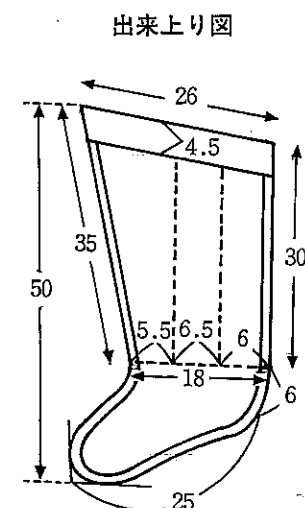
したうず
襪 函第六拾四号之拾貳

したうずとは、底がなく二枚の同形の足形の裂を中央で縫い合わせた靴下のようなものである。

この襪の実物は、表に六人部石嶋の墨書があり、表および芯には麻、裏には白紵、上部の縁には紫地錦の斜め布を使用したもので、長さが膝下まである深形である。

出来上り寸法

出来上り図の寸法どおりである。



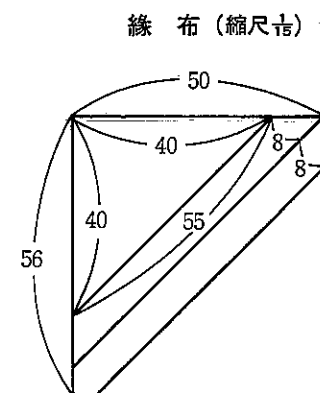
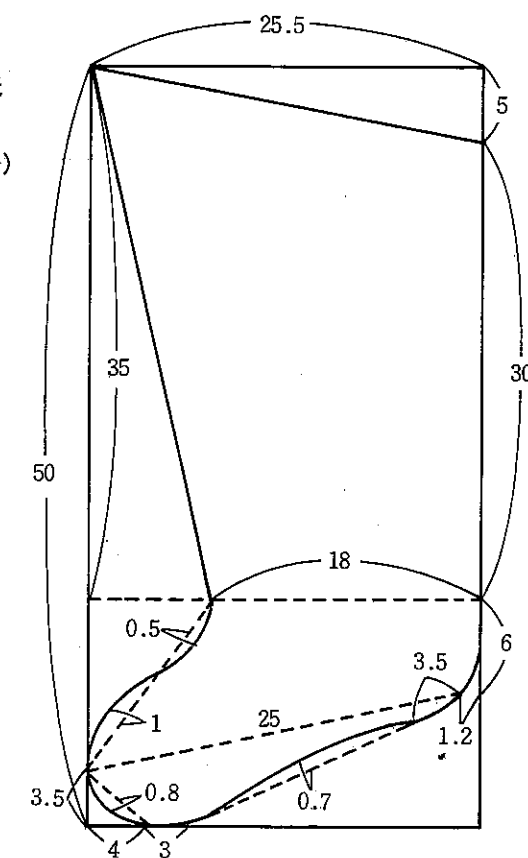
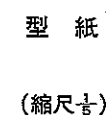
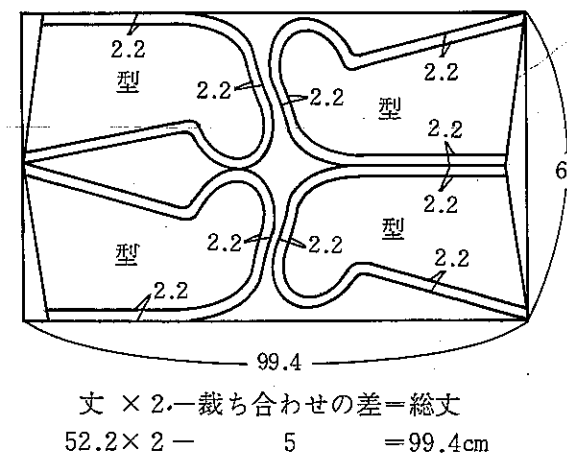
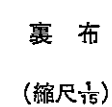
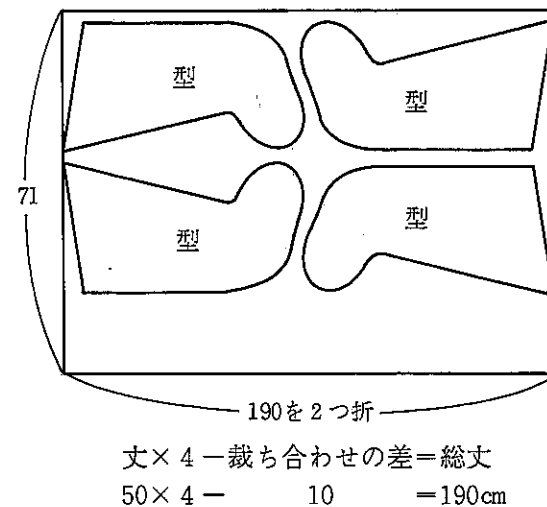
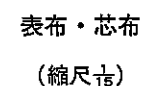
裁ち方・標つけ方

●型紙を図のように裁つ。

●表布および芯は二枚重ねて、図のように型紙どおり裁ち切る。

●裏布は型紙を当て、型どおりに標をつけ、口明きの他は縫い代2.2cmを標して、裁ち切る。

●縁布は図の寸法に斜め布を裁つ。

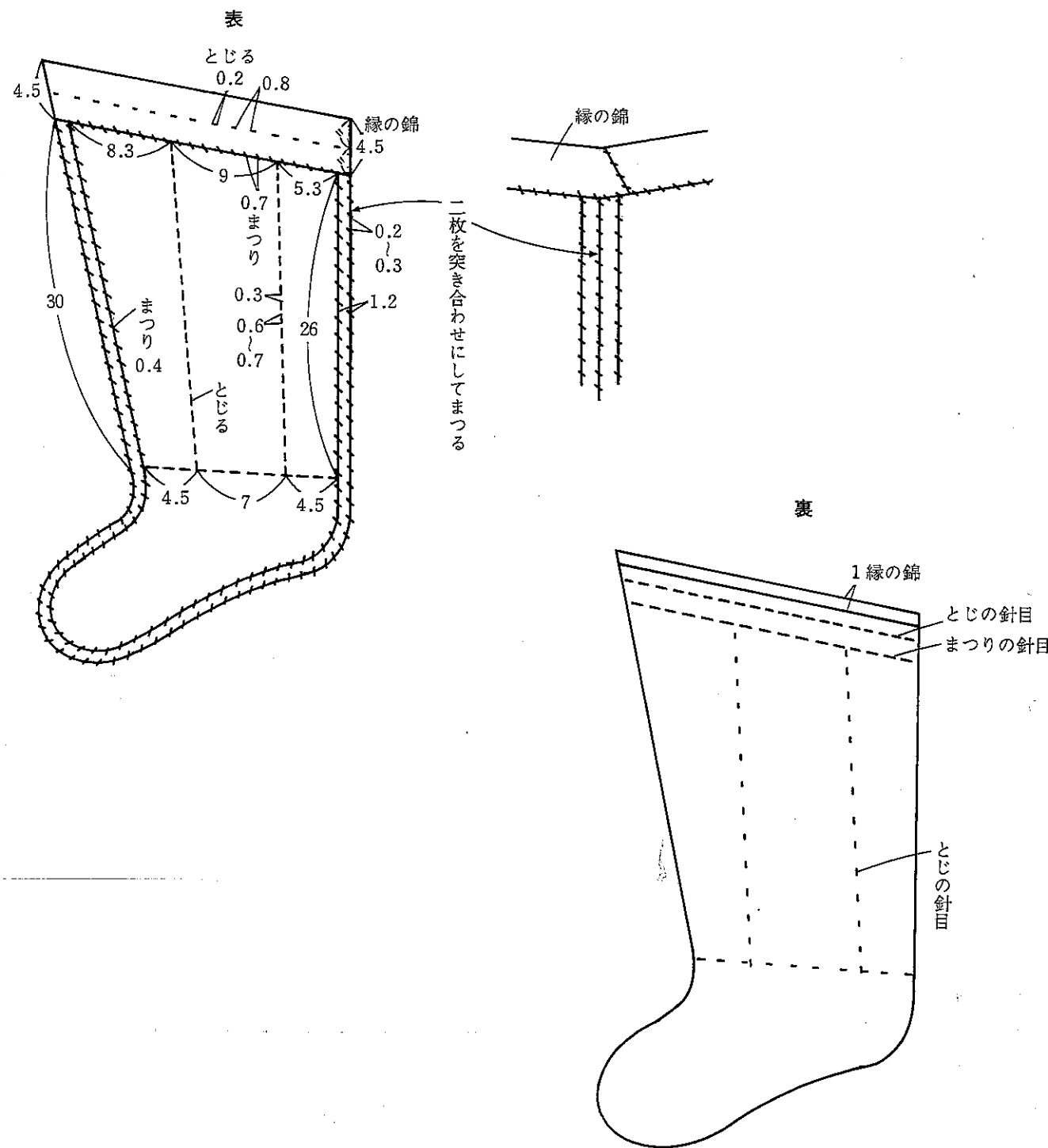


縫い方

- 縫い糸は白色のS撚り絹糸を使用する。
- 表布と芯布を重ね、裏側へは裏布を合わせる。
- 上部は表裏および芯の裁ち目をそろえる。その他は裏布を表布の上へ幅1.2cmに折り返し、間隔0.6cmのまつりぐけをする。
- たてとよこのとじは、図の位置に針目0.8cm、間隔0.2cmでとじる。
- 同一のものの二枚を作り、その両側を外表に合わせ、前後、甲および底に続けて表側から間隔0.3cmで、かがり縫

いできとじ合わせる。

- 錦の縁布を裏側へ当て、中表にして縫い代1cm、針目0.5cmで縫い合わせ、折りは縁布の方へ返す。
- 縁布を1.2cm裏へ見返し、表側では寸法どおりに下部を折って、間隔0.8cmでまつりぐけをする。
- 縁布の接ぎ合わせは後部で、図のように斜めに突き合わせにまつる。
- 縁布の幅のほぼ中央を、表は0.2cmの針目を出し、裏は0.8cmの針目の押さえ縫いをする。

ふえ ふきの したうず
笛吹襪 呉樂八拾五物之壱

この襪の実物は裏に後二笛吹襪天平勝宝四年四月九日東大寺の墨書がある。

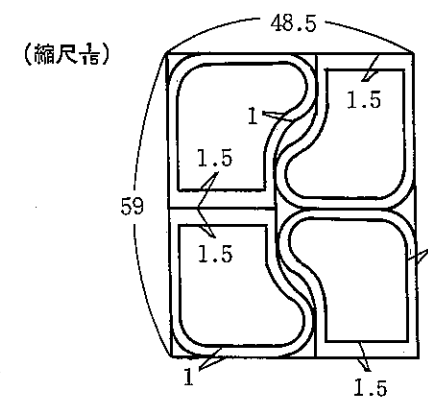
表裂は紫地花文錦を、裏には白緋、紐には緋糸を使用しているが、模造は純のかわりに平絹を使用する。

出来上り寸法

出来上り図に示すような寸法で、足袋の文数でいえばおよそ十文(24cm)ぐらいに相当する。

裁ち方・標つけ方

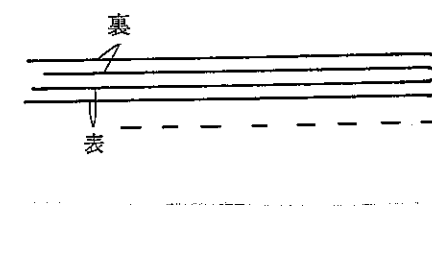
- 幅59cm長さ48.5cmの錦と白平絹、および幅14cm長さ45cmの緋平絹を使用して裁つ。
- 図のように型紙を作る。
- 表布に型紙を当て、図のように型どおり標をつける。
- 口明きには1.5cmの縫い代、その他は1cmの縫い代を標して裁ち切る。
- 紐は図の寸法に裁つ。



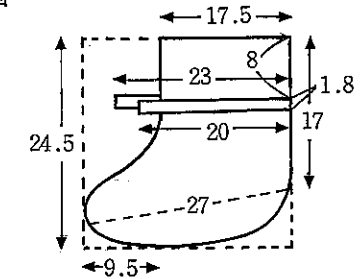
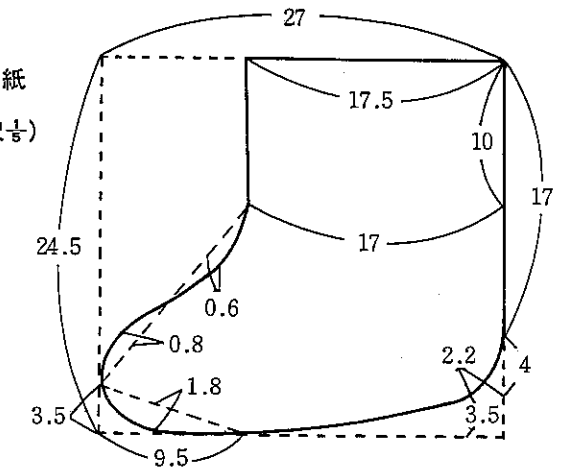
縫い方

- 縫い糸は白および赤色のS撚り絹糸を使用する。
- 針目は0.5~0.6cmで、縫い目には0.2cmのきせをかける。
- 足首部分の明きの表裏を中表に合わせ、標どおりに縫って、縫い代は裏布の方へ折り、表へ返して、表布を0.5cm、裏へ見返す。
- 前、甲、底、踵および後の部分を続けて一方の表裏を別の一方の表裏ではさみ、図のように四つ縫いをする。
- ただし甲の前6cmの間は、表布一枚を除き、他の三枚は合わせて縫う。
- 折りは表布の方へ折る。

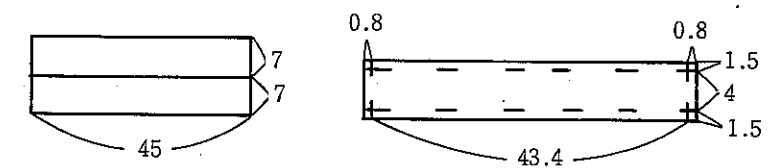
四つ縫いの方法



出来上り図

型紙
(縮尺寸)

紐裁ち方・標つけ方



- この縫い残した6cmの部分から表へ引き返し、出来上り幅に折って、三枚の縫い代に間隔0.5cmでまつりぐけをする。

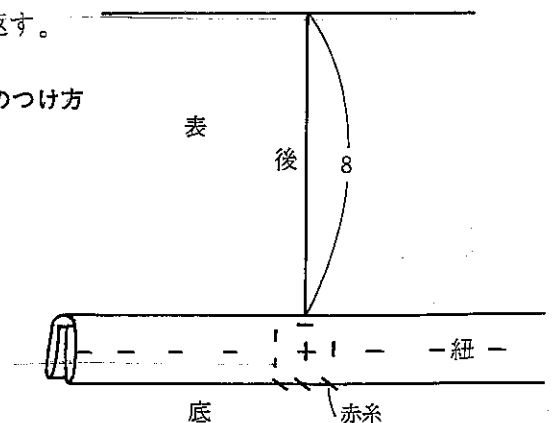
- 紐は赤色絹糸を使用して、紐先は紐幅を中表に二つ折りにして縫い、表へ返す。

- 幅は四つ折りにして、紐幅のほぼ中央を針目0.15cm、間隔1cmで両面に針目を出して、押さえ縫いをする。

- 後の縫い目の上へ紐幅の中心を当て、針目0.3cmの十字で留める。その周囲を図のように、七針針目を出してつける。

- この仕立ては左右の別なく、縫い代の折りを同じ方向へ返す。

紐のつけ方



厳島神社所蔵御神服の模造

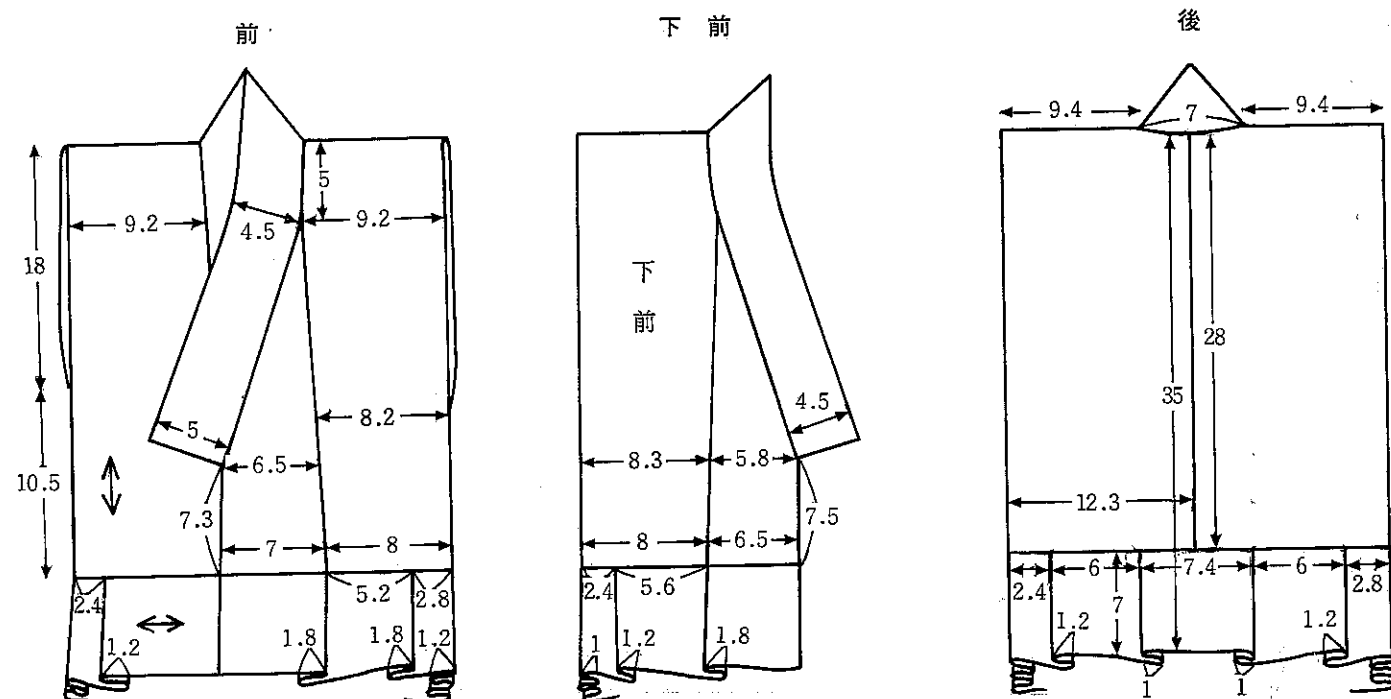
あか ぢ むかい つる もんに しきはん び
赤地向鶴文錦半臂

られ、平安時代後期のものと云われている。

表は赤地向鶴文の錦、裏は黄色綾の裂を使用した袷

仕立の半臂で、身丈35cmの小型のものである。

紅色麻地単と同じ厳島神社所蔵の御神服で、雛型と考



出来上り寸法

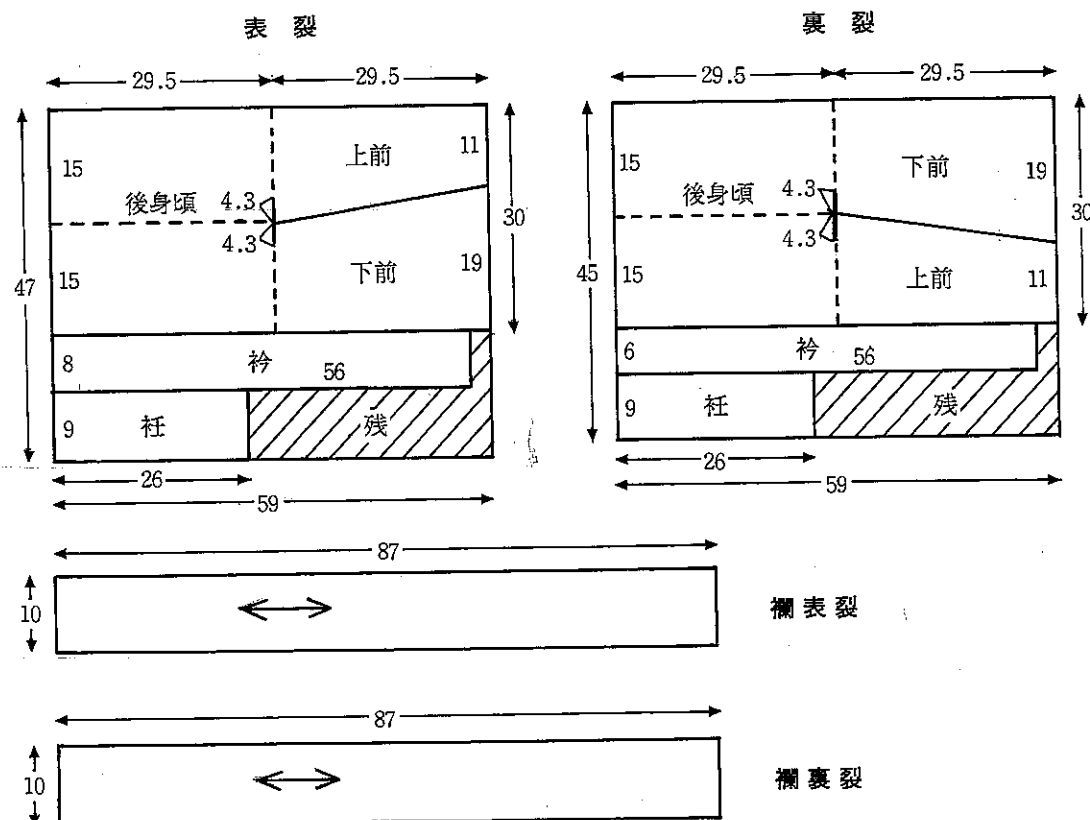
出来上り図のとおりである。

裁ち方

●表は裂幅47cmの錦を
59cm、裏は裂幅45cmの
黄色綾を59cm使用して、
図のように裁つ。

身丈×2＝表総丈
29.5×2＝59cm

身丈×2＝裏総丈
29.5×2＝59cm

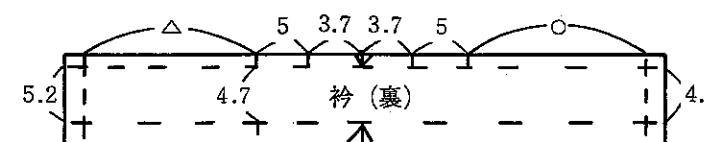
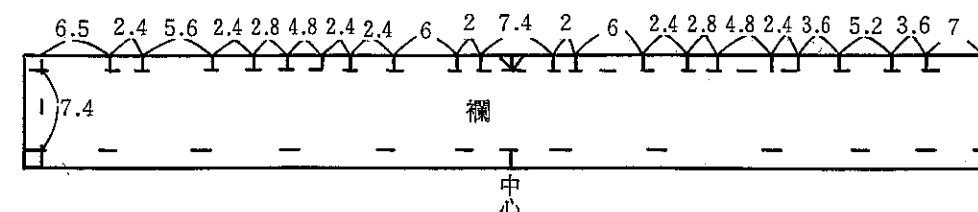
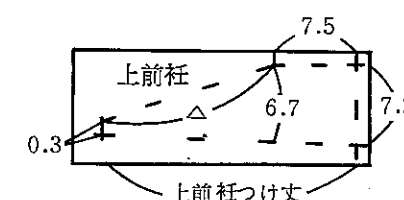
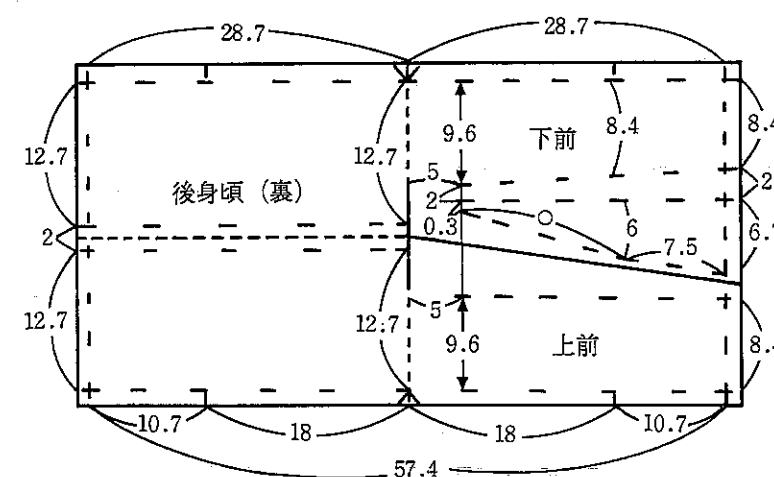


標つけ方

●身頃は幅30cm、丈59cmの表裂および裏裂を
中表に合わせ、上前衽は幅9cm、丈26cmの表
裂および裏裂を中表に合わせ、図のように標
をつける。

●衿は表裂は幅8cm丈56cm、裏裂は幅6cm丈
56cmのものを中表に合せて標をつける。

●欄は表・裏裂とも幅10cm丈87cmのものを中
表に合わせ、幅および丈の標をつけ、さらに
襷の標をつける。



縫い方

- 縫い糸は紅絹糸を使用する。
- 針目は0.3cm、縫い目には0.2cmのきせをかける。
- 背縫いは表裏別々に縫い、縫い代は左身頃に折る。
- 脇縫いは表裏別々に縫い、縫い代は前身頃に折り、脇明きの部分がつかないように、後身頃の縫い代を斜めに開く。
- 脇明き(袖ぐり)は、表裏を毛抜き合わせにして、折り山から0.2cm内側を0.6cmの間隔、0.1cmの針目で表裏へ針目を出して、押さえ縫いをする。
- 衽つけは、上前は身頃と衽を合わせ、下前は身頃の衽つけの標をつまんで、表裏別々に縫い、縫い代は衽の方

へ折る。

- 衿下は表裏を毛抜き合わせに折り、0.8cmの間隔、針目0.1cmで裏にだけ針目を出して、押さえ縫いをする。
- 衽つけは表裏の衽で身頃をはさんで四つ縫いをする。衿先は毛抜き合わせにする。衿幅は表を出来上り幅に折り、裏を表より0.5cm控えて折り、0.7cmの間隔、0.1cmの針目で押さえ縫いをする。
- 欄は衿下の部分は毛抜き合わせに折り、裾の部分は裏を0.2cm控えて折り、0.1cmの針目、間隔0.7cmで押さえ縫いをして、標どおりに襷をとってから表身頃と縫い合わせ、縫い代は身頃に折り、その上に裏身頃を出来上り丈に折ってのせ、0.1cmの針目、間隔0.8cmで押さえ縫いをする。

べにいろあさぢひとえ 紅色麻地単

実物は広島県安芸郡厳島神社に遺る御神服で、社伝では、安徳天皇の御産衣と伝えられていたものであるが、

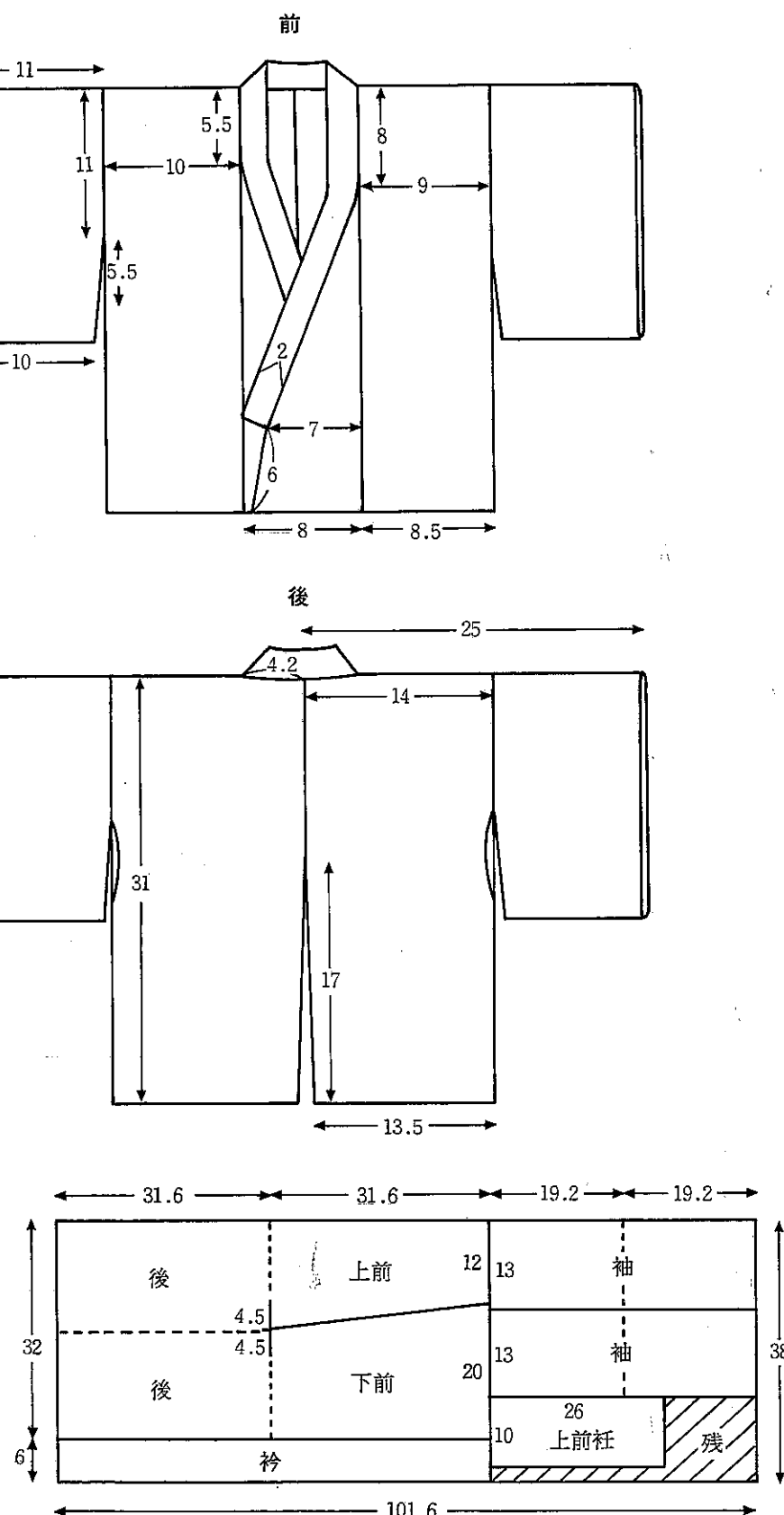
これは実際に使用されたものではなく、雛型として奉納されたものと考えられ、平安時代後期のものといわれる。身丈31cm、衿25cmの紅色の麻布を使用した小型の単である。

出来上り寸法

出来上り図の寸法通りである。

裁ち方

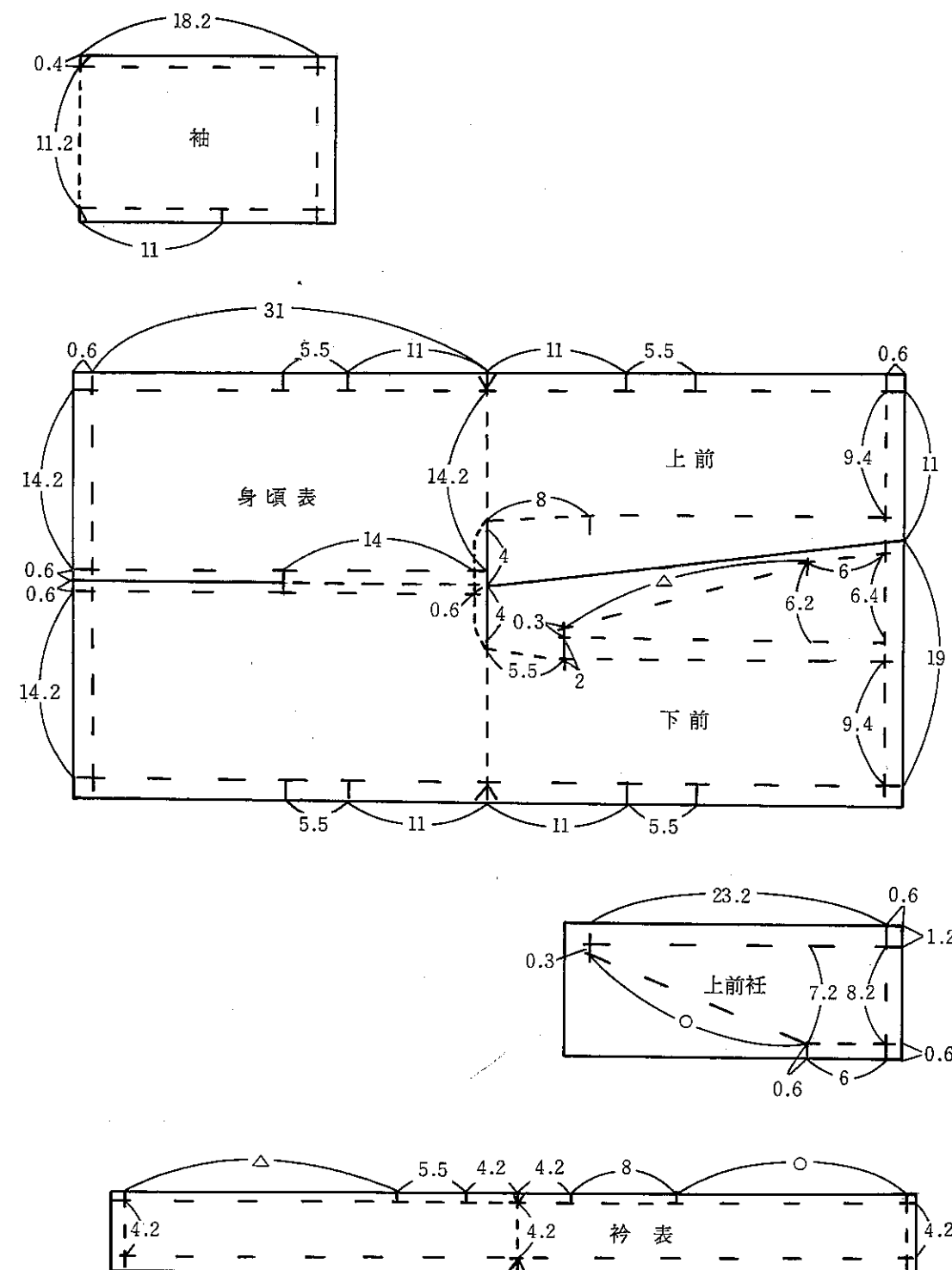
●布幅38cmの紅色の麻地を、101.6cm使用して、図のように裁つ。



$$\begin{aligned} \text{袖丈} \times 2 + \text{身丈} \times 2 &= \text{総丈} \\ 19.2 \times 2 + 31.6 \times 2 &= 101.6\text{cm} \end{aligned}$$

標つけ方

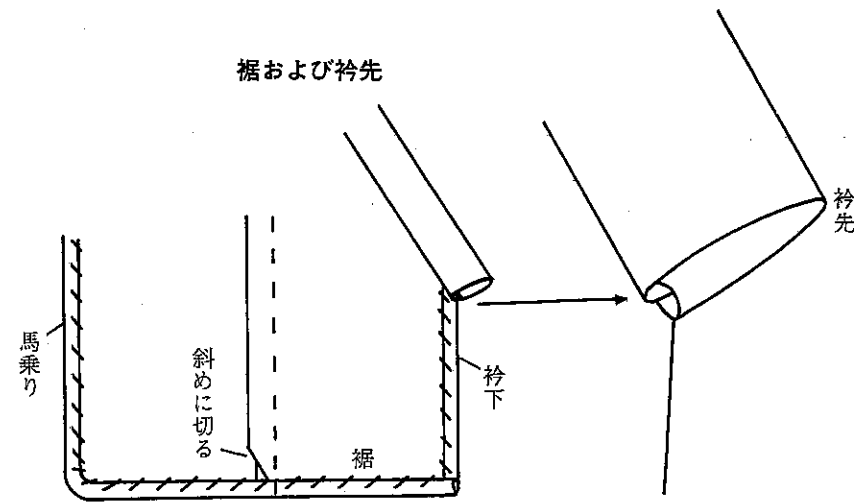
- 袖は幅13cm、長さ38.4cmの布をそれぞれ中表にして、丈を二つ折りにし、裁ち目が袖口側になるように置き、図のように標つけをする。
- 身頃は幅32cm長さ63.2cmの布、上前衿は幅10cm長さ26cmの布、衿は幅6cm長さ63.2cmの布をそれぞれ広げて、図のように標つけをする。



縫い方

- 縫い糸は紅絹糸を使用する。
- ぐし縫いの針目は、袖底以外はすべて0.2cmで、縫い目はすべて0.2cmのきせをかける。
- 袖口は出来上り幅0.2cmの三つ折りにして、針目0.1cm間隔0.3cmのまつりぐけをする。
- 袖口をくけてから、袖底を0.3cmの針目で縫い合わせ、縫い代は外袖に折る。
- 振りは標より0.2cm深く折り目をつけたままにしておく（縫い代の始末はしない）。
- 背縫いはわのままで縫い代をつまんで、馬乗りの明き止まりまでぐし縫いをして、縫い代は左身頃へ折る。
- 脇はぐし縫いをして、縫い代は前身頃に折る。
- 身八つ口は折ったままにしておく。
- 下前衽は標を合わせてつまみ、ぐし縫いをして、縫い代は衽の方へ折る。

- 前身頃の縫い代を1.5cmに裁ち切り、上前衽と合わせ、ぐし縫いをして、縫い代は衽の方へ折る。
- なお裾の部分で、身頃の縫い代は斜めに裁ち切っておく。
- 衿下は0.2cm幅の三つ折りにして、袖口と同様にまつりぐけをする。
- 裾は袖口と同様に出来上り幅0.2cmの三つ折りにして、まつりぐけをする。
- 馬乗り部分も続けて図のようにまつる。
- 衿つけは、ぐし縫いをして、縫い代は衿の方へ折り、衿幅2cmの出来上りに折り、衿先も出来上り丈に折って、0.2cmの針目0.8cmの間隔でくける。
- 袖つけは、身頃の縫い代が脇でつれないように、袖つけから4～5cmの間は斜めに折り、袖は開いたままぐし縫いをして、縫い代は袖の方へ折る。

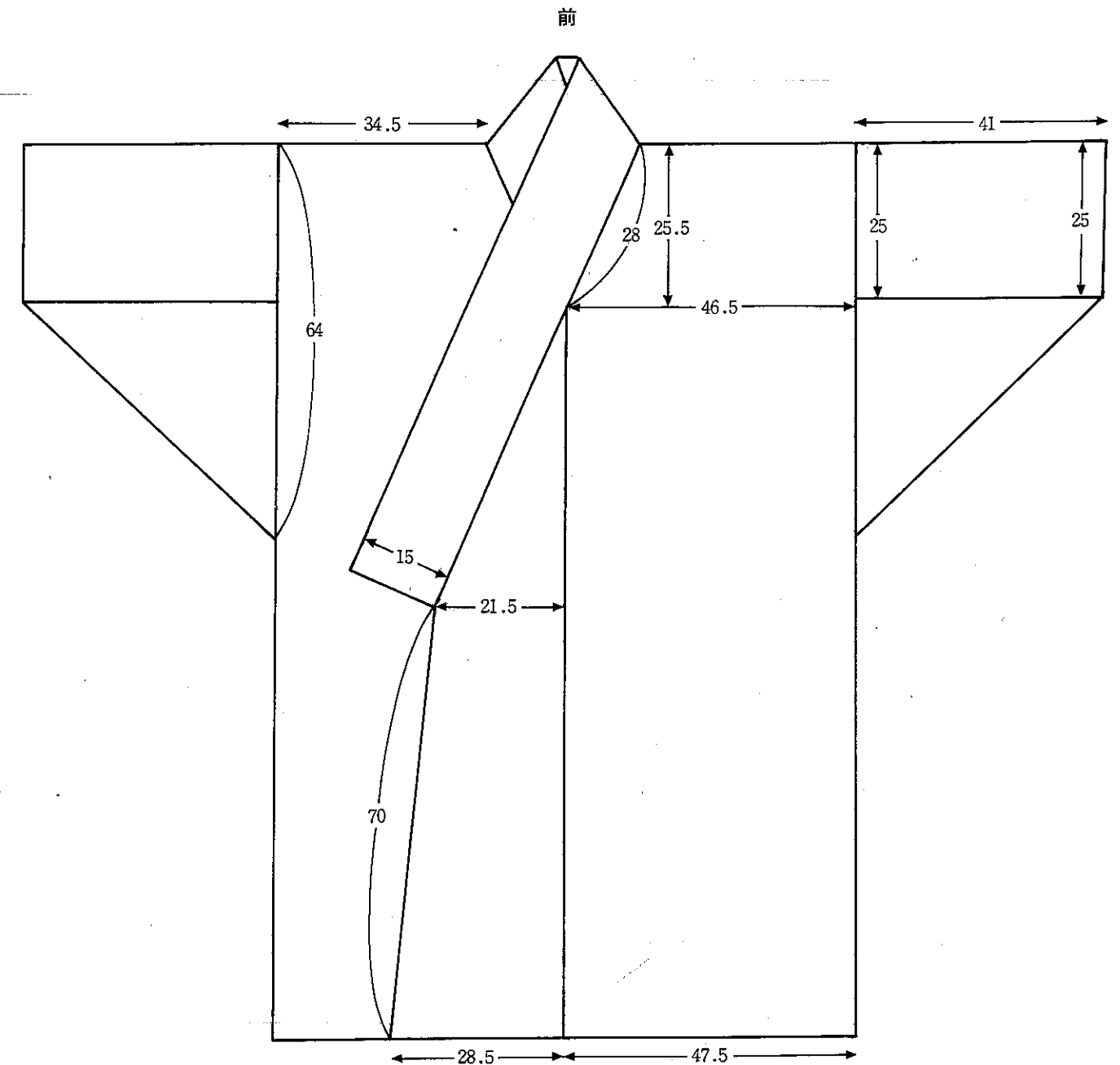


中尊寺遺品の模造

もとひらこうしろへいけん こそで
藤原基衡公白平絹小袖

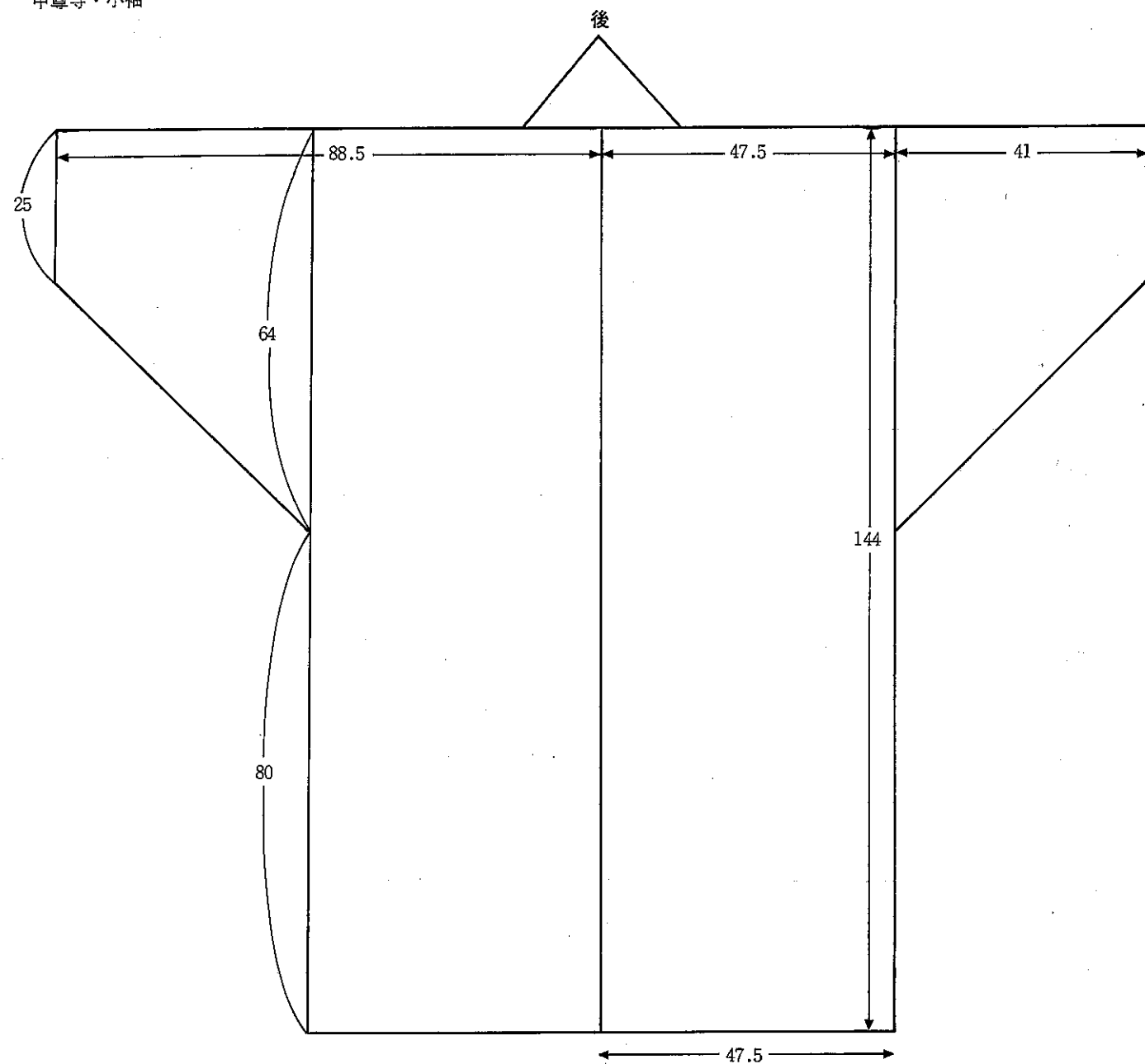
この小袖は、表裏ともに白平絹を使用した袷仕立てで、袖形はもじり袖である。

左肩、左袖、左前身頃は破損しているため、残存部分から考察して寸法を定め、模造したものである。



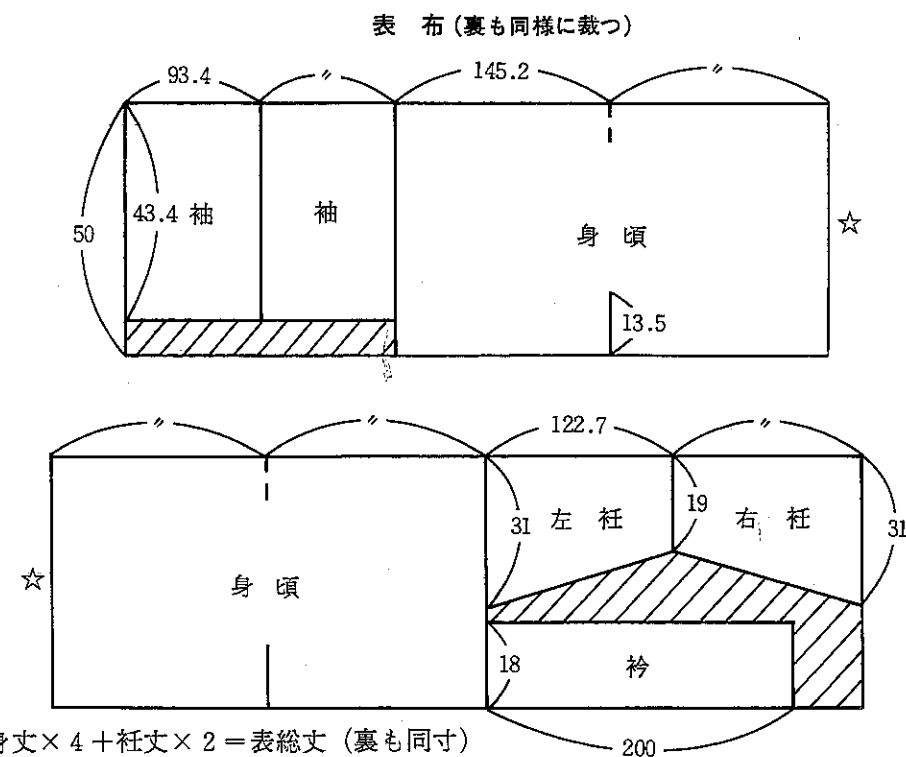
出来上り寸法

出来上がり図の寸法のとおりである。



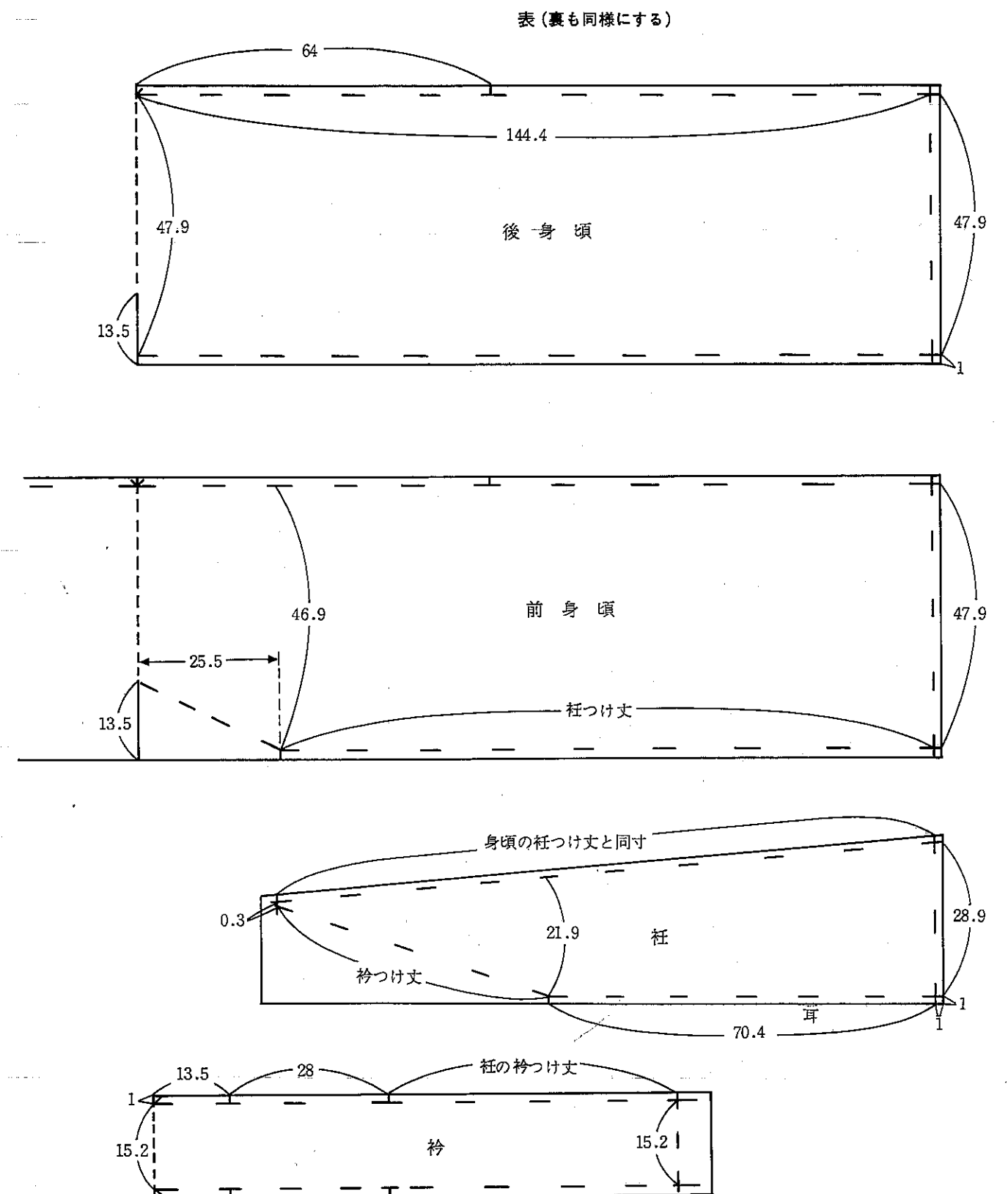
裁ち方

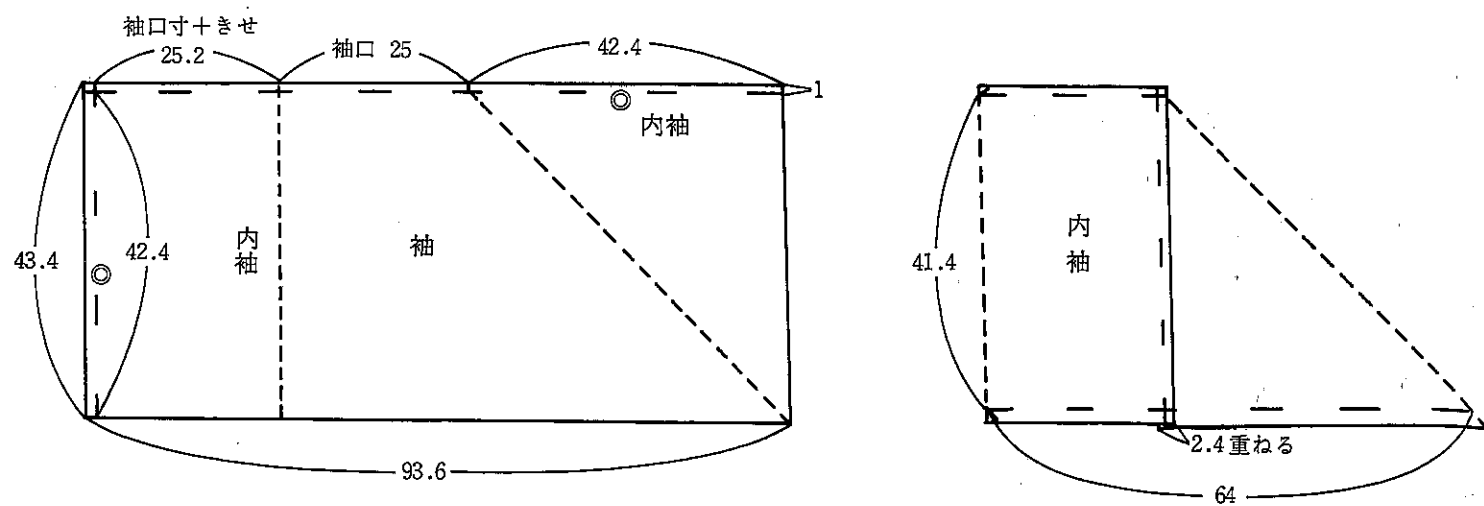
●表布、裏布それぞれ50cm幅、総丈10
13cmを使用し、裁ち方図のように裁つ。



標つけ方

- 袖は表裏を合わせて、図のように標をつける。
- 身頃、衽および衿は寸法が異なるほかは、現在の小袖の標つけと同様に、図のように標をつける。





縫い方

- 縫い糸は白色のS撚り絹糸を使用する。

袖

- 表裏の袖口を合わせて針目0.3cmで縫い、0.2cmのきせをかけて裏へ折り、表へ返して毛抜き合わせにする。
- 袖口の四つ留めをする。留め方は表内袖から針を出し、表外袖、裏外袖、裏内袖、表内袖の順に戻して結ぶ。
- 表内袖の図の◎印を合わせて、針目0.2cmでぐし縫いをして縫い代は上部へ折り返す。
- 裏袖も同様に縫う。

身頃

- 背縫いは0.2cmの針目で表裏をそれぞれ縫い、縫い代は0.2cmのきせをかけて、いずれも右身頃へ折り返す。
- 脇縫いおよび衽つけは0.3cmの針目で表裏をそれぞれ縫い、縫い代は0.2cmのきせをかけて脇縫いは前身頃へ、衽つけは衽の方へ折る。
- 前後の身頃および衽の裾の表裏を縫い合わせ、0.4cmのきせをかけて、縫い代は裏身頃へ折り返し、表へ返して毛抜き合わせに整える。
- 衽下も表裏を縫い合わせ、0.2cmのきせをかけて縫い代は裏へ折り、表へ返して毛抜き合わせにする。

袖つけ

- 袖つけの四つ留めをする。留め方は表内袖から針を出

- し、表前身頃、表後身頃をすくい、表外袖へ出して結ぶ。

- 裏も同様に留める。

- 表袖と表身頃を合わせ、0.4cmの針目で袖をつける。0.2cmのきせをかけて、縫い代は袖の方へ折り返す。

- 裏袖つけも表と同様に縫い合わせ、縫い代は袖に折り返す。

- 身頃の衽つけ部分の表裏を合わせて、仮りとじをする。

衽

- 表衽と裏衽の幅の方を標どおり縫い合わせ、0.2cmのきせをかけ、縫い代は裏衽の方へ折り、表へ返して毛抜き合わせにする。

衽つけ

- 表衽と、表裏をとじ合わせた身頃とを合わせて、針目0.2cmの三つ縫いで衽をつける。

- 衽先の留めは、表衽から針を出し、表裏の衽下および裏衽をすくい、表衽に戻って結ぶ。

- 衽先の留めから0.4cm先を縫い、0.4cmのきせをかけて、縫い代は裏へ折り返してから表に返し、毛抜き合わせにする。

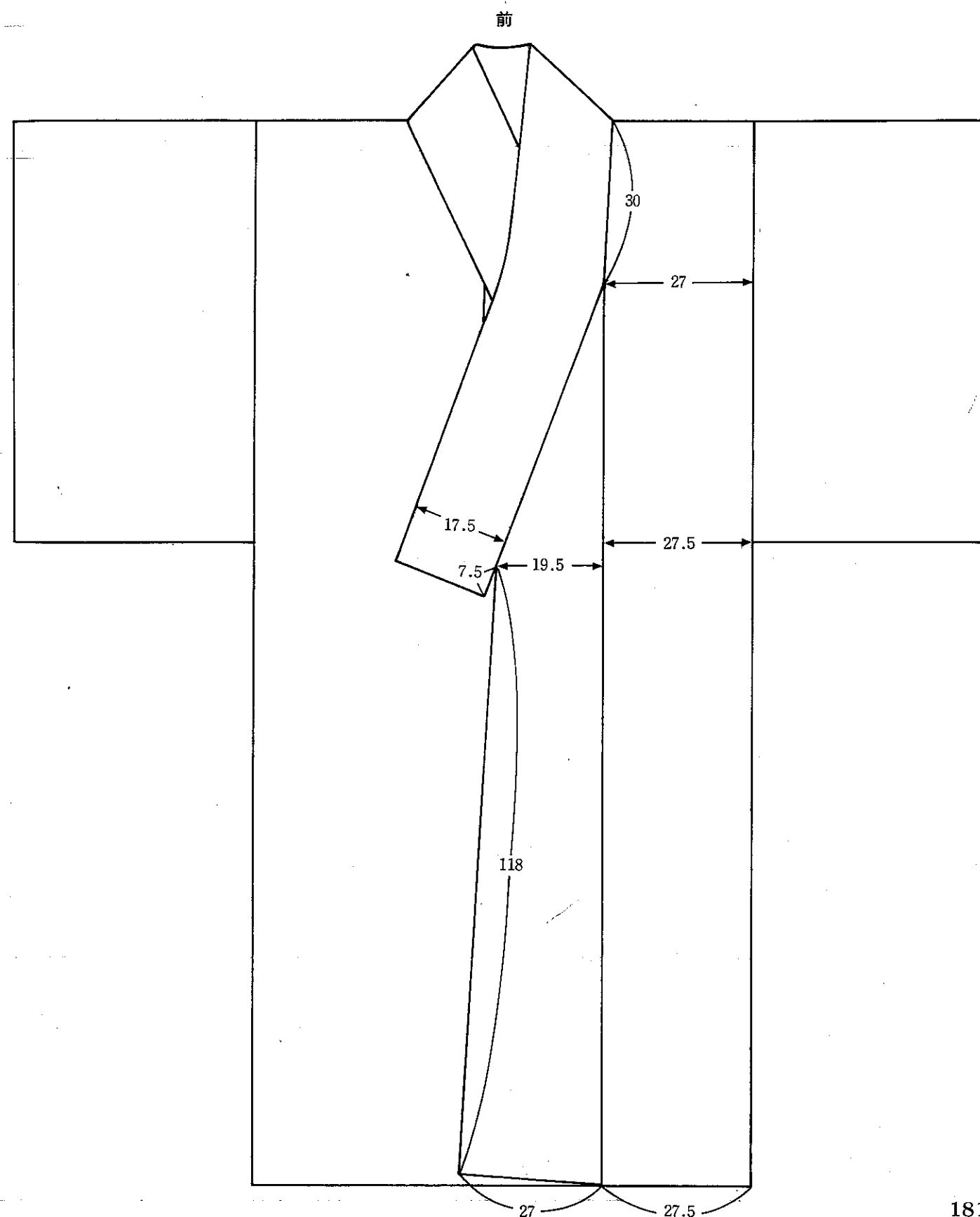
- 裏衽つけは1cmほどの針目で、身頃とくけ合わせる。

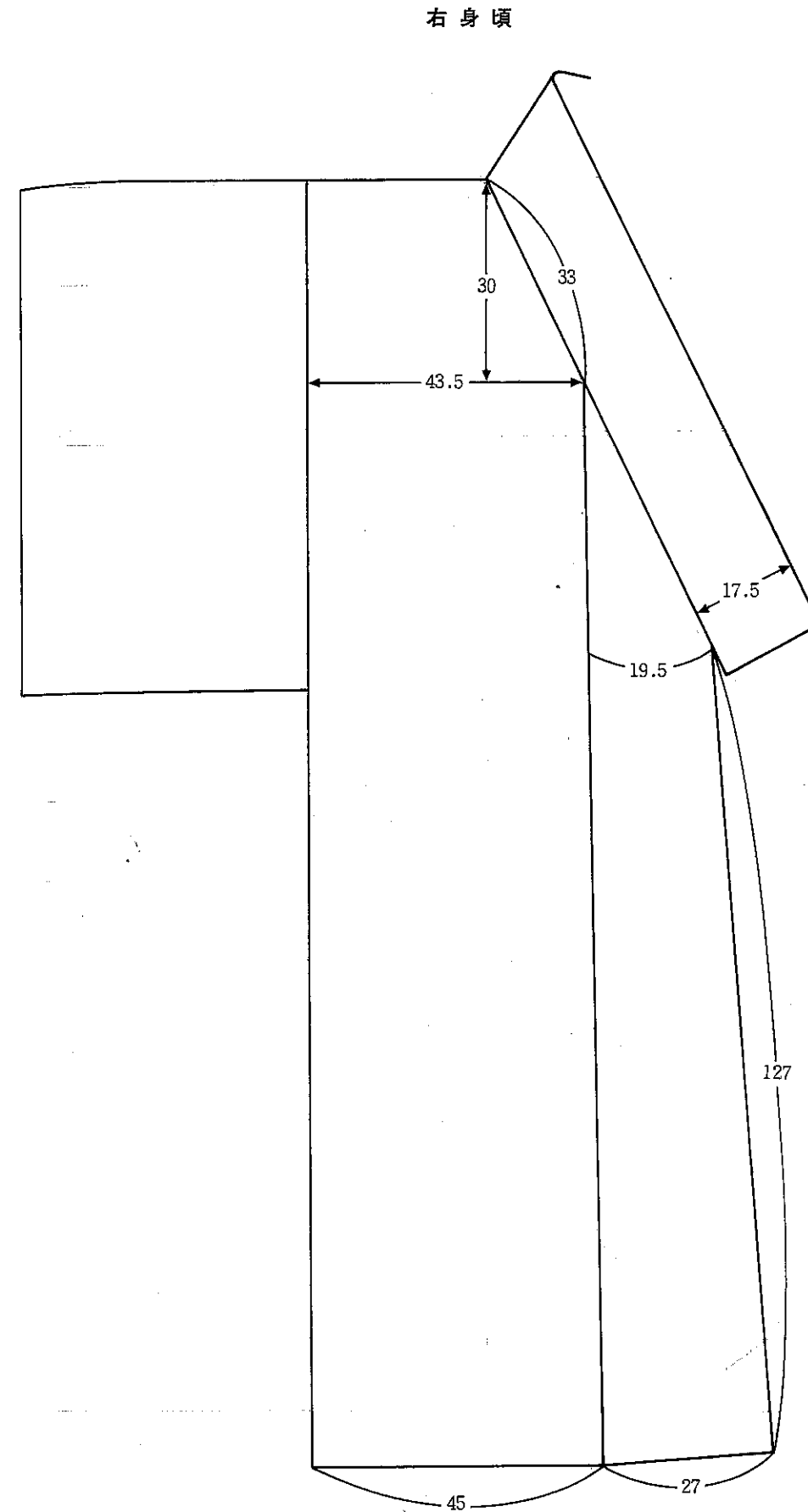
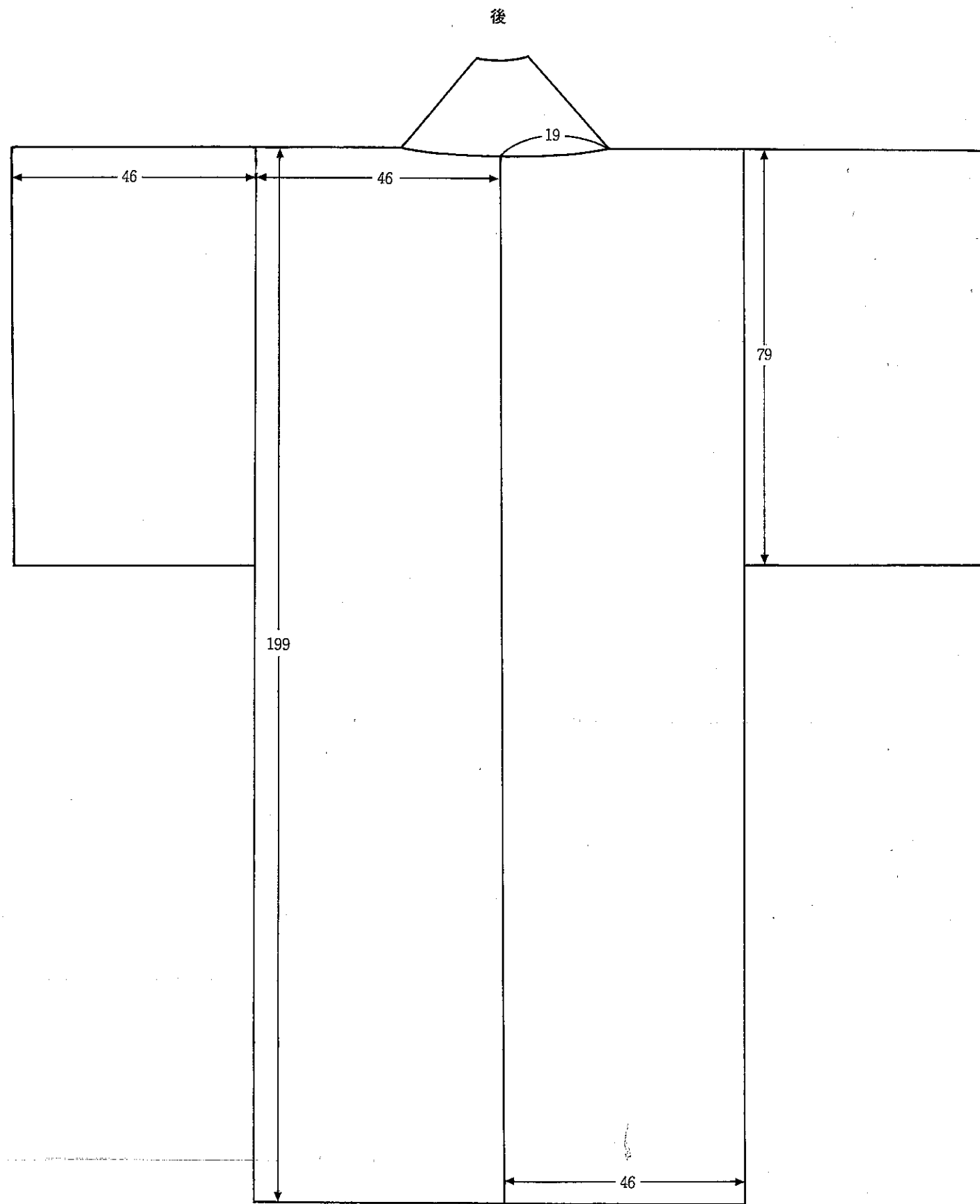
藤原基衡公白平絹単

もとひらこうしろへいけんひとえ
これは白平絹を使用した単仕立てである。形は左前身頃の下部と、右前身頃の上部の一部がわずかに残っている。これらの残存部分を考察して寸法を定め、模造したものである。

出来上り寸法

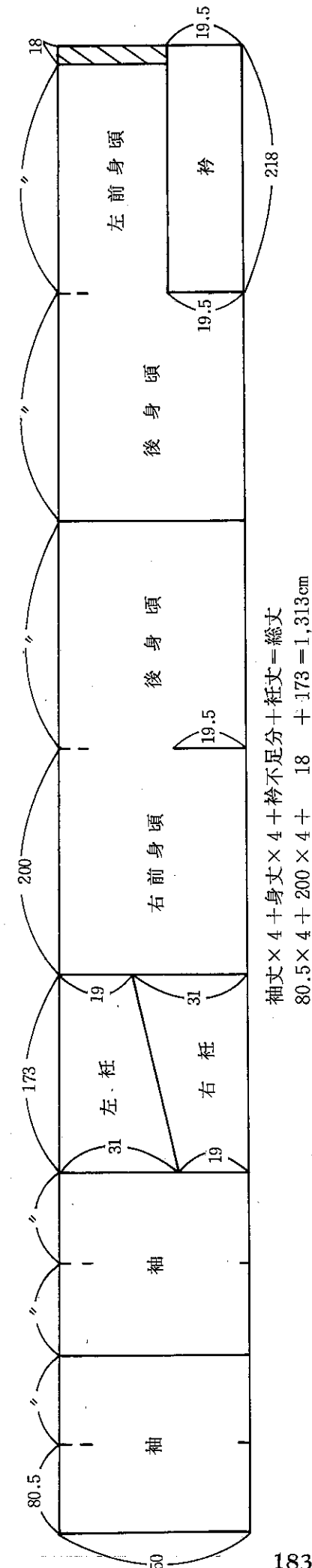
出来上り図の寸法のとおりである。





裁ち方

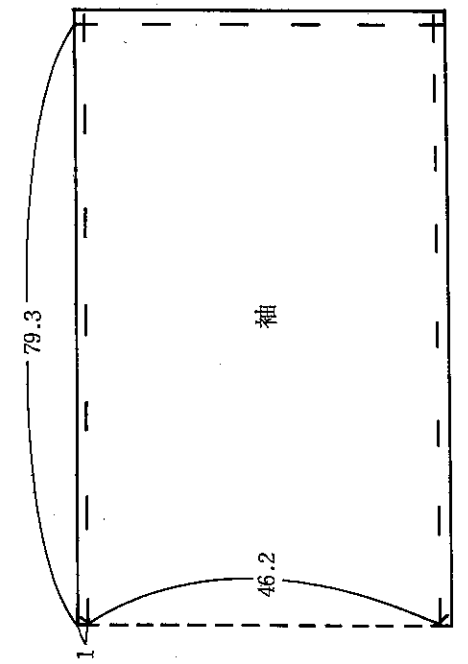
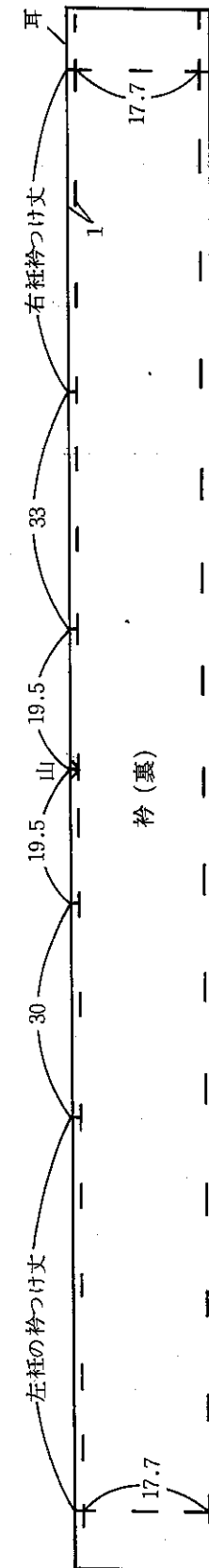
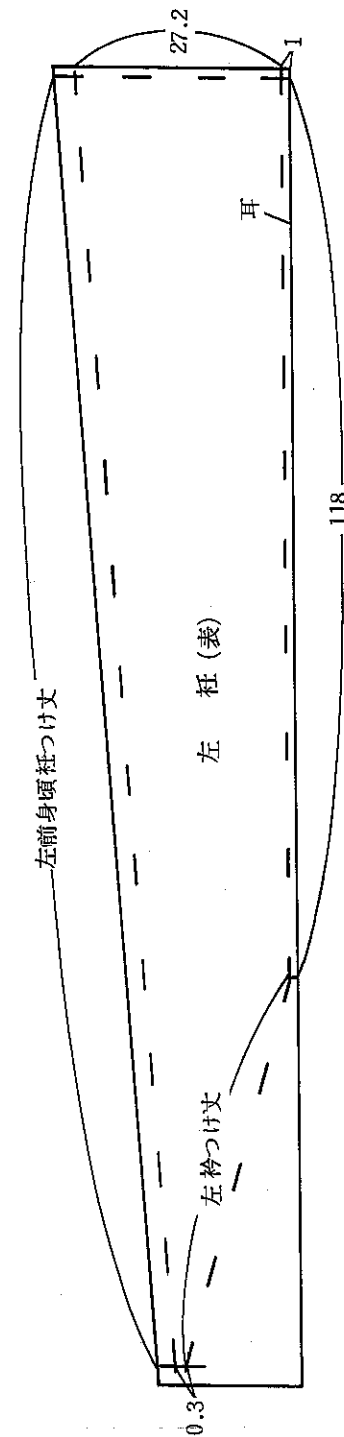
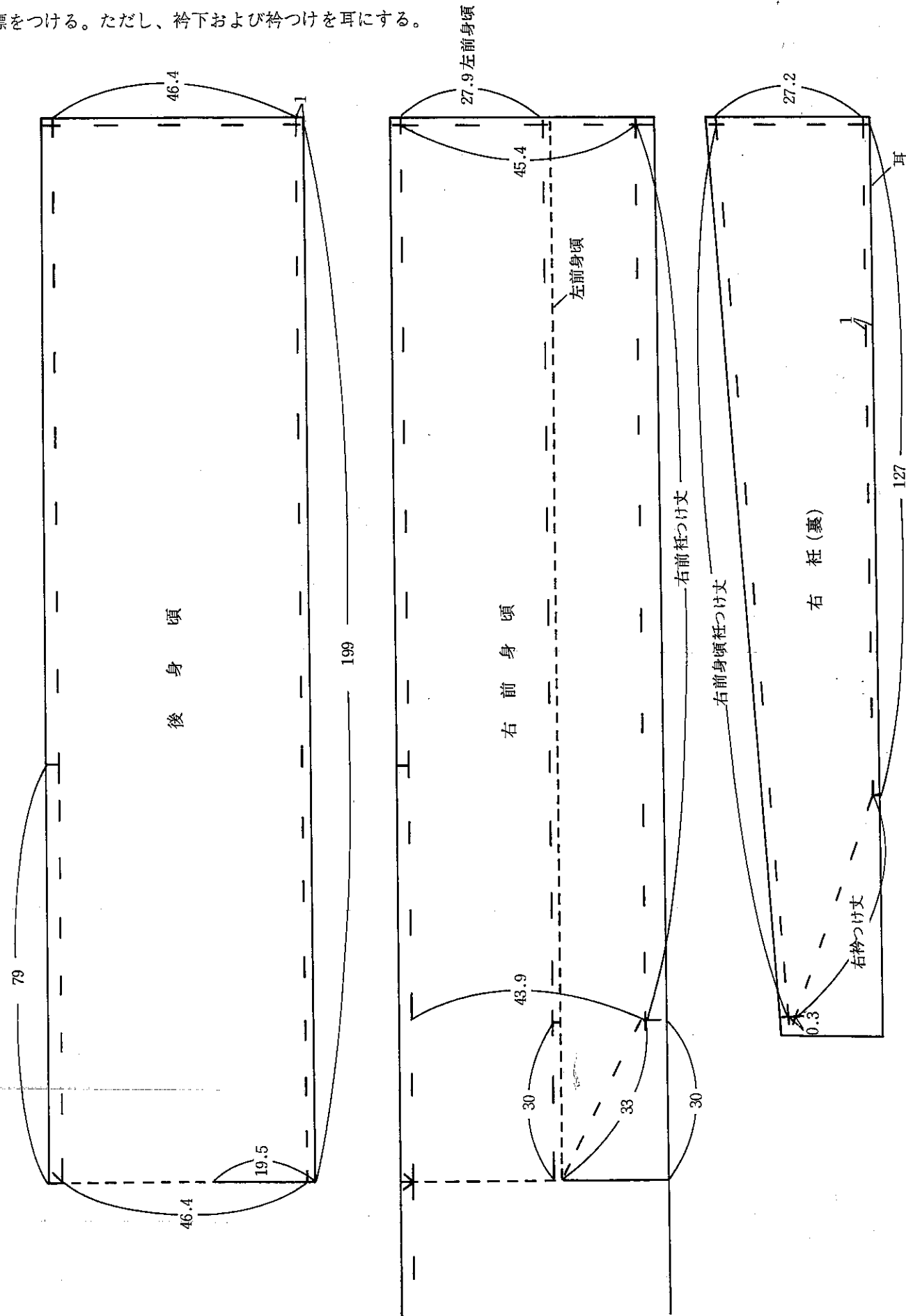
- 50cm幅の白平絹を総丈1313cm使用する。
- 裁ち方図のように袖、衿、身頃、衿を裁つ。



袖丈×4+身丈×4+衿不足分+衿丈=総丈
80.5×4+200×4+18+173=1,313cm

標つけ方

●寸法が異なるほかは、各部とも現在の単衣と同じ扱いで標をつける。ただし、衿下および衿つけを耳にする。



縫い方

- 縫い糸は白色のS撚り絹糸を使用する。
- ぐし縫いの針目は0.3cmで、縫い目には0.2cmのきせをかける。

袖

- 袖底を針目0.3cmで一度縫いをして、縫い代は0.3cmのきせで内袖へ返す。
- 袖口は1cm裏へ折り返し、間隔1.2cmで0.2cmの針目を表へ一針ずつ出してかくしびつけをする。

身頃

- 背縫いは一度縫いをし、縫い代は右身頃へ折る。
- 脇を縫い合わせ、縫い代は前身頃へ折る。

衿つけ

- 脇縫いと同様に縫って、縫い代は衿の方へ折る。
- 衿下の縫い代1.5cmを裏へ折り返し、また裾は裁ち目を1cm折って、袖口と同様の針目でおさえる。

衿

- 衿幅の端の縫い代(裁ち目)を1cm裏へ折り返し、袖口と同様に押さえる。
- 衿つけをして、縫い代は衿の方へ折る。
- 衿先は裁ち目のままにする。

袖つけ

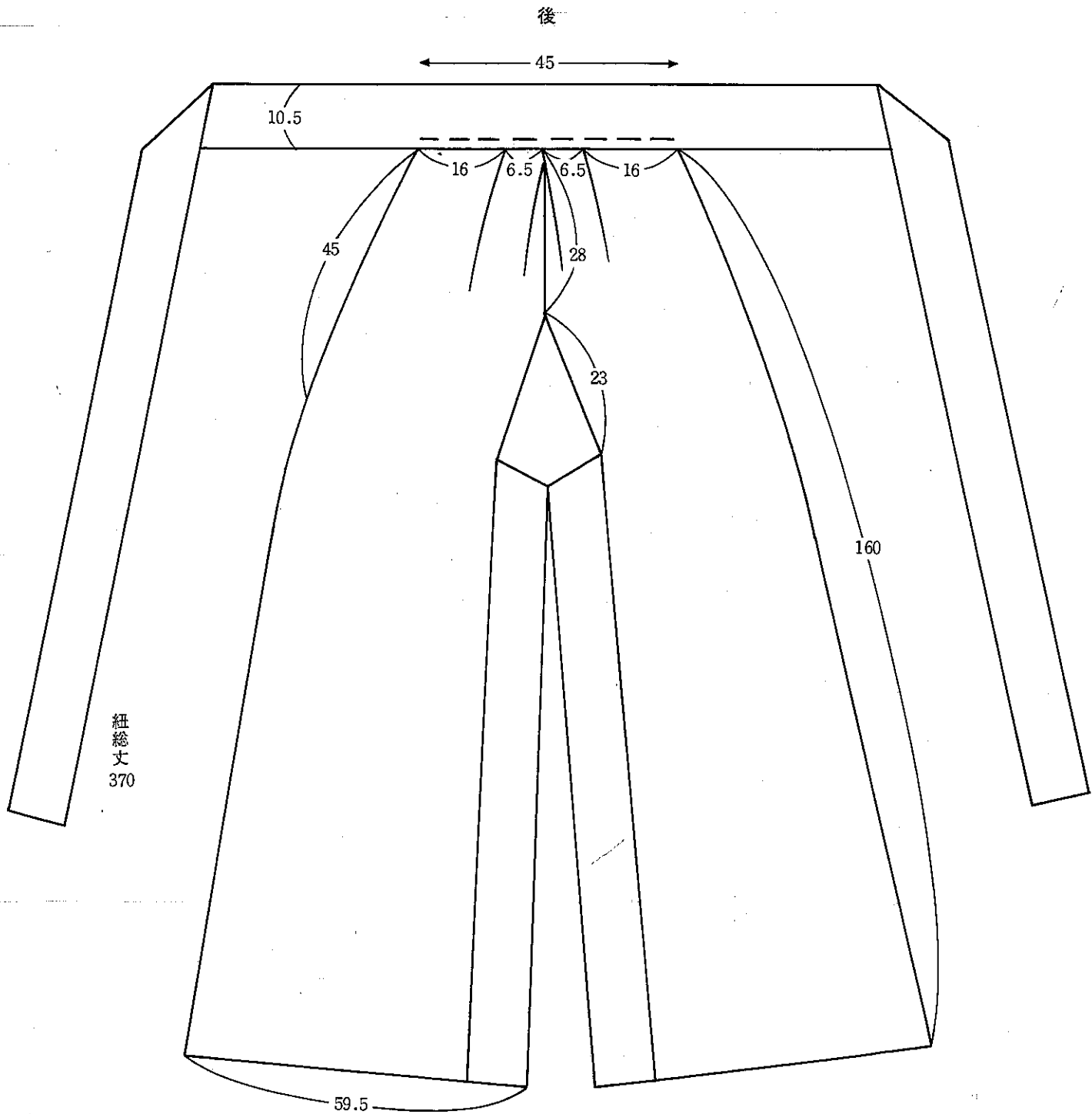
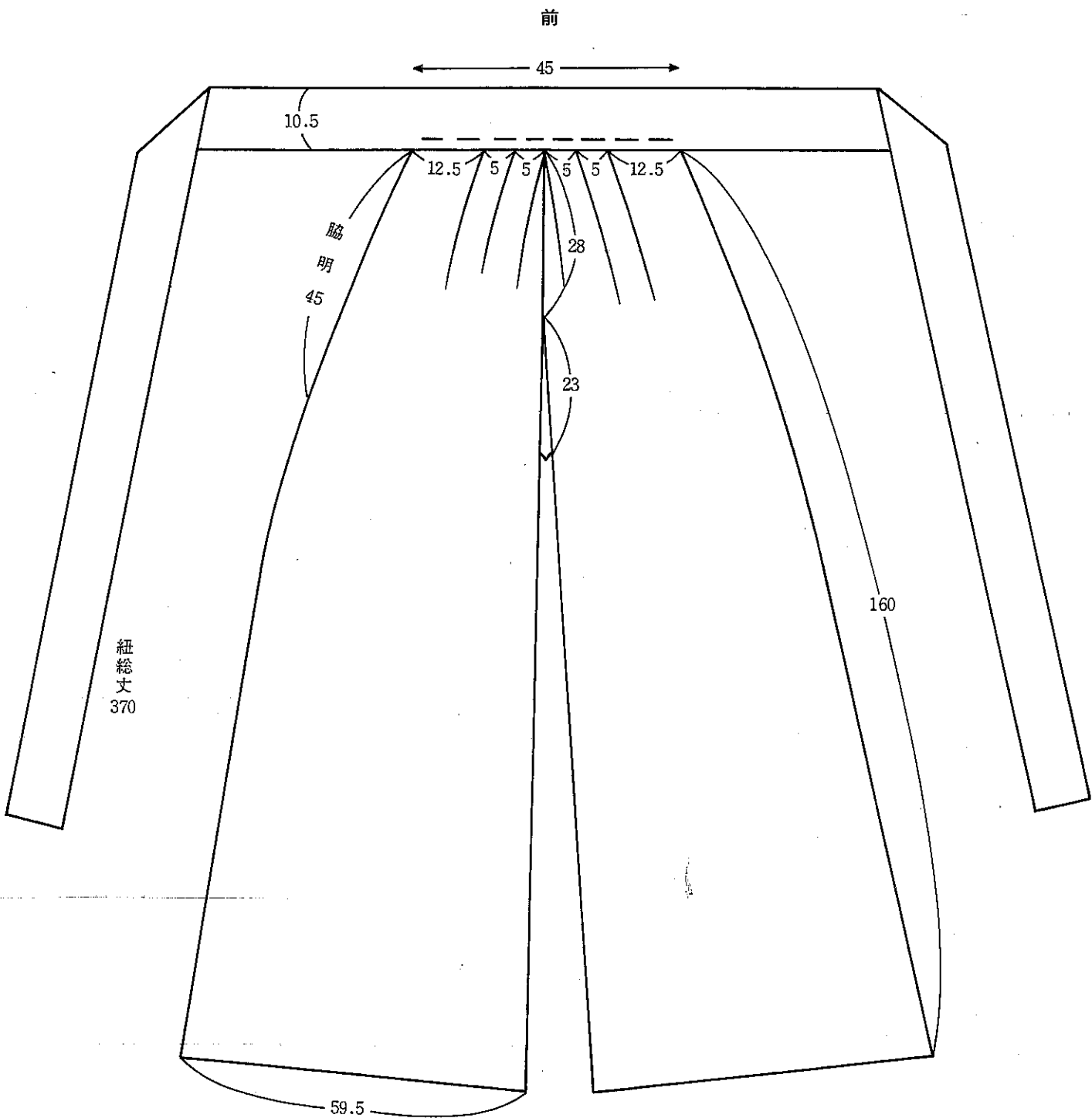
- 留めをする。留め方は内袖から針を出し、前身頃、後身頃、外袖の順に出して結ぶ。
- 袖つけをして、縫い代は袖へ折る。

きよひらこうしろへいけんあわせはかま
藤原清衡公白平絹袴

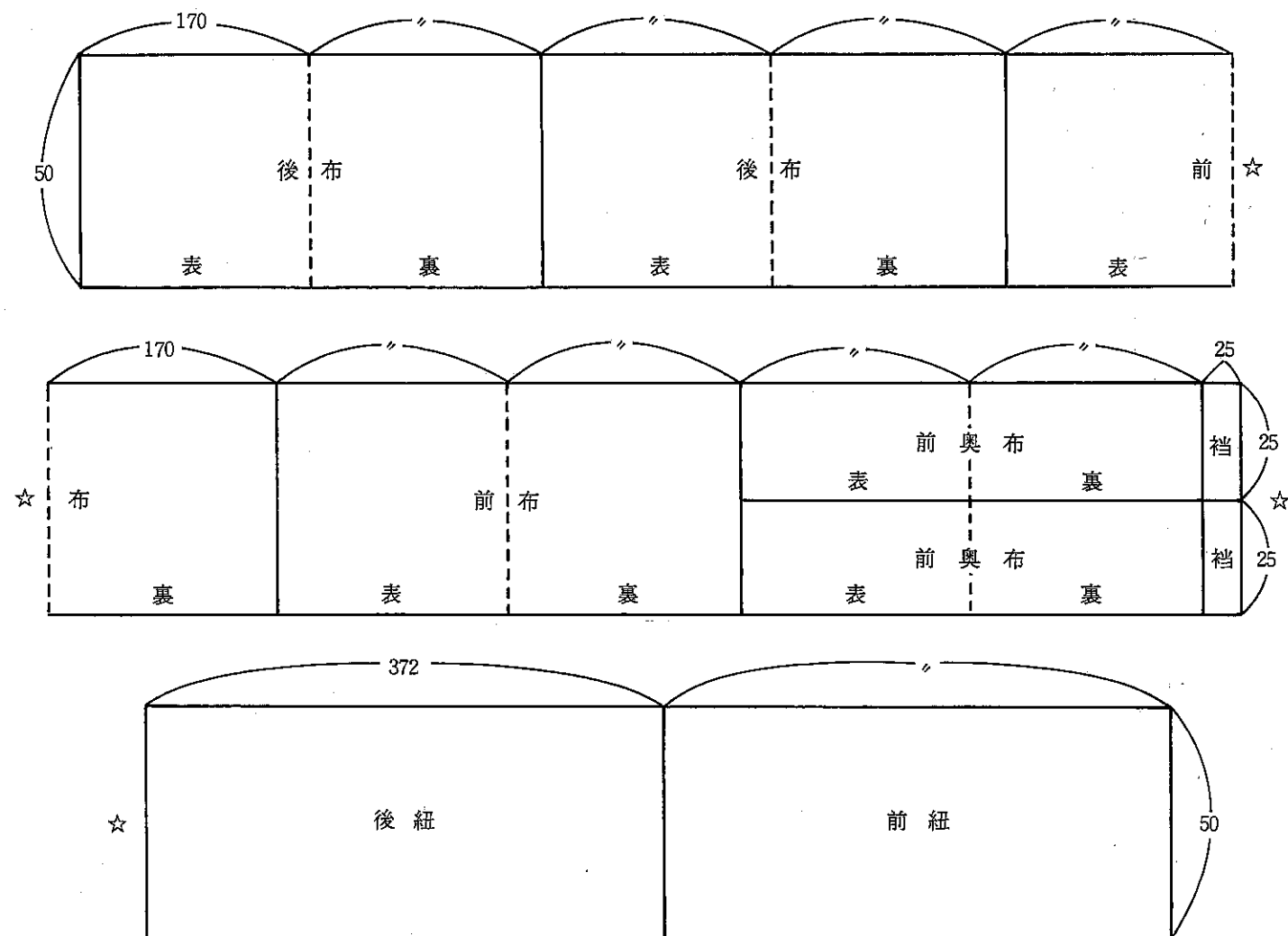
この袴の原品は、表裏いずれも白平絹を使用した袴仕立てであるが、腰の一部が残っているのみで、全体の形は不明である。

したがって形および寸法は、襷のとり方、紐幅などから考察して、和歌山県の熊野速玉神社の御神服、海賦裳かいふのもと同様と考え、模造したものである。

出来上り寸法
出来上がり図の寸法のとおりである。



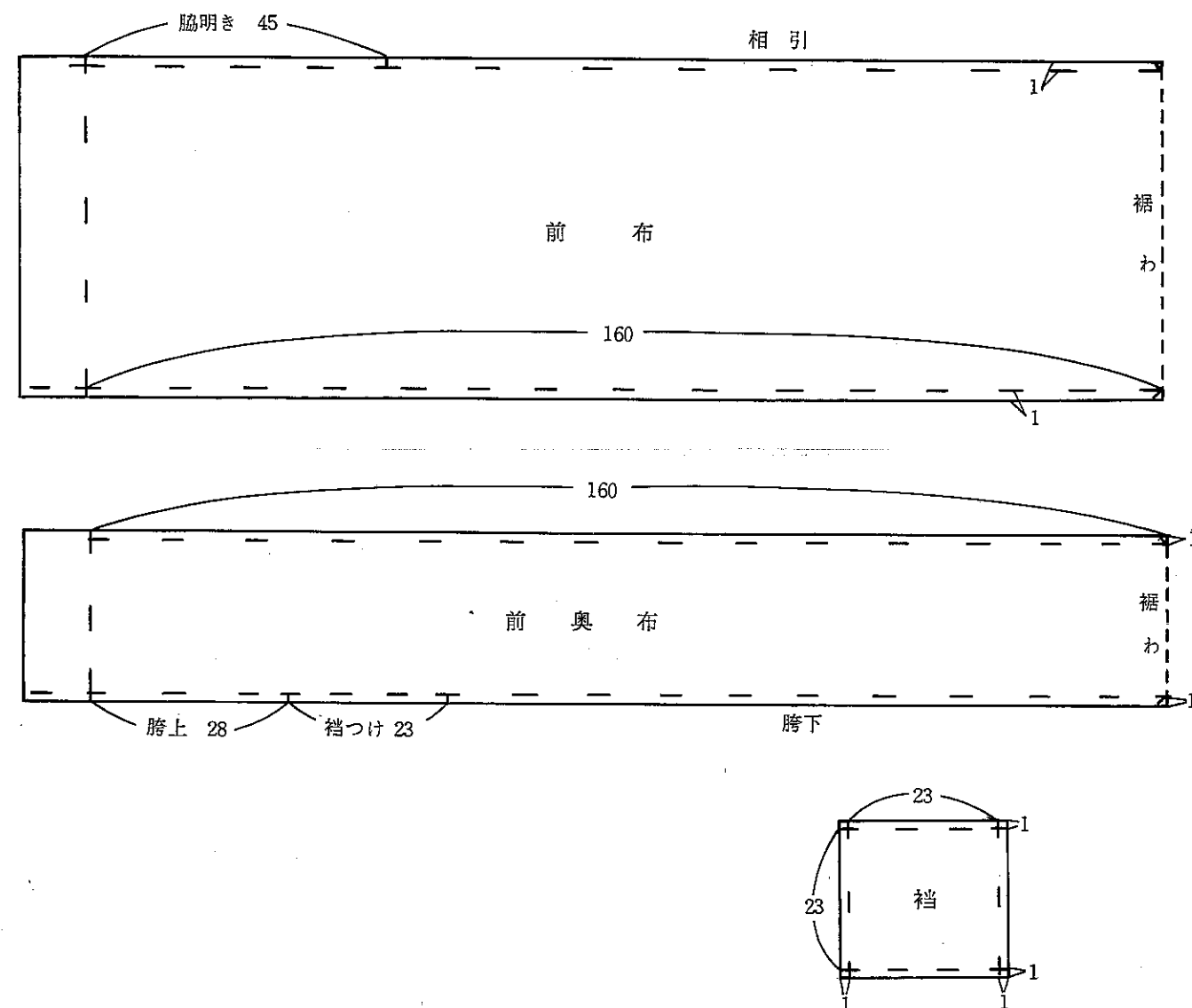
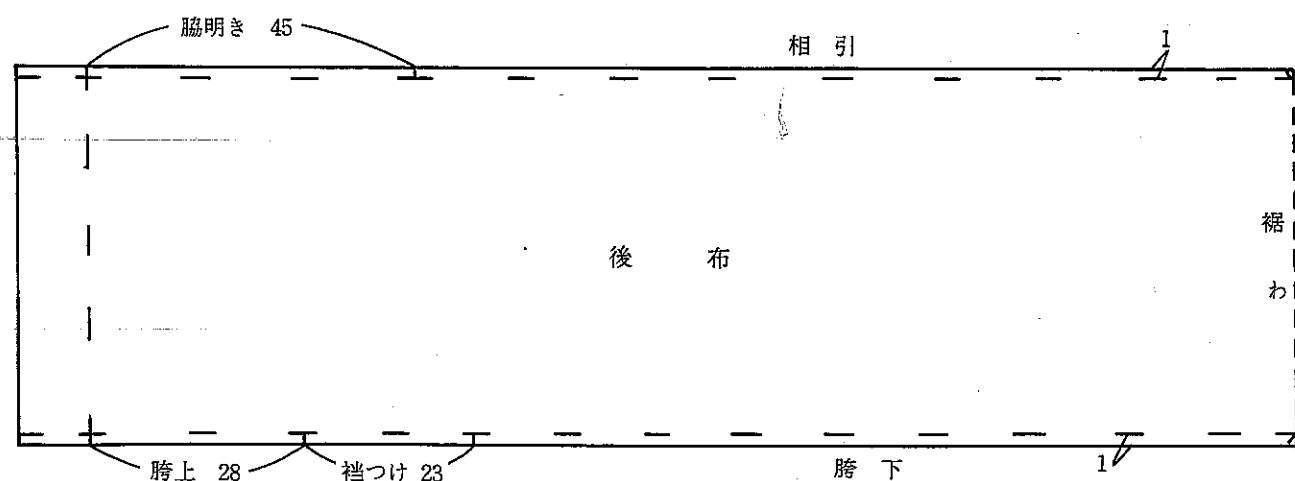
裁ち方 ●50cm幅の白平絹を総丈2469cm使用して、裁ち方図のよう
に表裏を続けて裁つ。


$$\text{丈} \times 10 + \text{襠丈} + \text{紐丈} \times 2 = \text{総丈}$$

$$170 \times 10 + 25 + 372 \times 2 = 2,469 \text{cm}$$

標つけ方 ●図のように、後布、前布、前奥布はいずれも裾はわで、表裏一緒に標をつける。

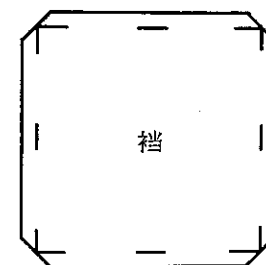
●裆も表裏一緒に標をする。



縫い方

- 前の襜つけは、前奥布の表裏で襜の表裏をはさみ、針目0.3~0.4cmで四つ縫いをする。このとき襜の四隅は図のように折って、四方をしつけでとじておく。
 - 襜の上部に留めをする。留め方は左前表、右前表、襜の表裏、右前裏、左前裏の順にすくい、左前表へもどして結ぶ。
 - 右脚の前胯上の表裏をしつけ糸でとじる。
 - 前胯上は、左脚の表裏で右脚の表裏をはさみ、四つ縫いをする。
 - 奥布の前布つけ側の表裏をしつけ糸でとじておく。
 - 前布の表裏で奥布の表裏をはさんで四つ縫いをする。
 - 後の襜つけを、前と同様に四つ縫いをする。
 - 後左脚の胯上の表裏をしつけ糸でとじる。
 - 後の胯上は、右脚の表裏で左脚をはさみ、前と同様に襜の上部に留めをして、四つ縫いをする。
 - 前胯下の表裏をしつけ糸でとじる。
 - 胯下は後の表裏で前の表裏をはさみ、留めをして四つ縫いをする。
 - 胯下留め方は、後の表から針を出し、前表、襜の表裏、前裏、後裏の順にすくい、後の表へ戻して結ぶ。
 - 前の脇明きを縫い合わせ、毛抜き合わせにする。
 - 後の脇明きも同様に縫う。
 - 相引は、前の相引の表裏をとじて、後の相引の表裏でこれをはさみ、留めをして四つ縫いをする。
 - 相引の留め方は、後布の表から針を出し、前の表裏、後の裏をすくい、後布の表へ戻って結ぶ。

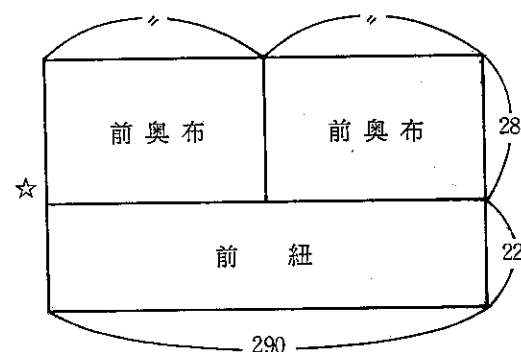
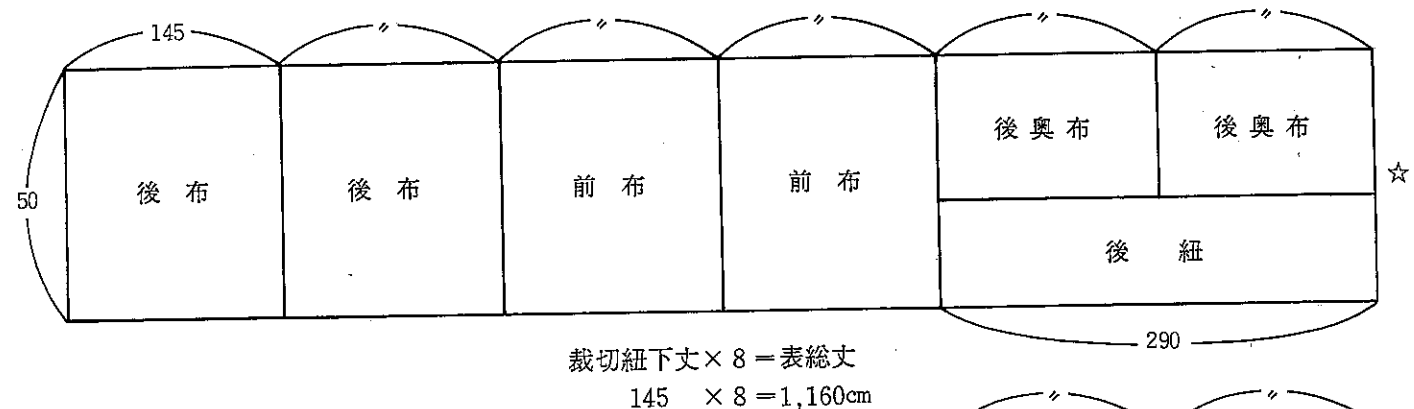
档隅の折り方



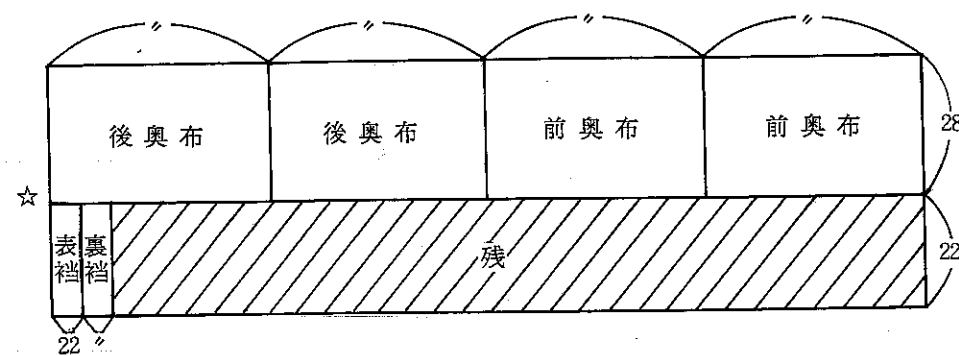
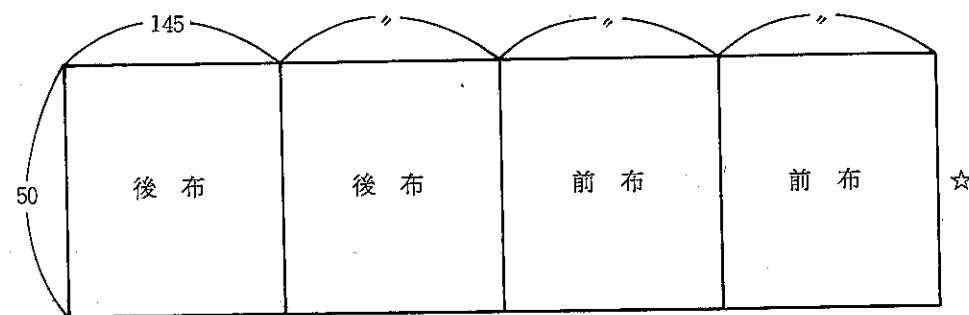
裁ち方

- 表布裏布ともそれぞれ50cm幅、総丈1160cmで裁ち方図のように表裏を裁つ。

表 布



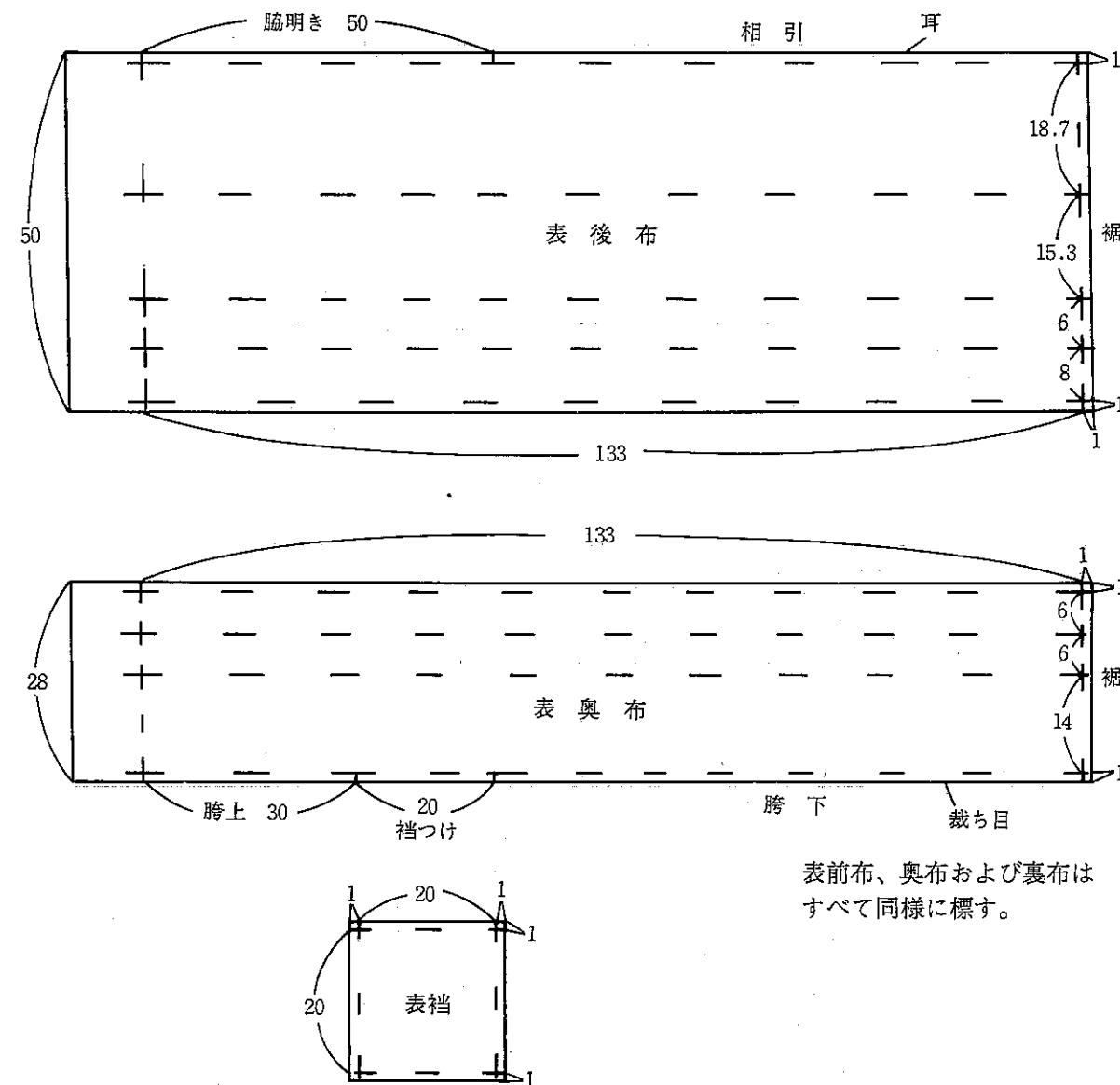
裏 布



裁切紐下丈×8＝裏総丈
145 × 8＝1,160cm

標つけ方

- 標つけ方図のように後布、奥布、裆の標をつける。

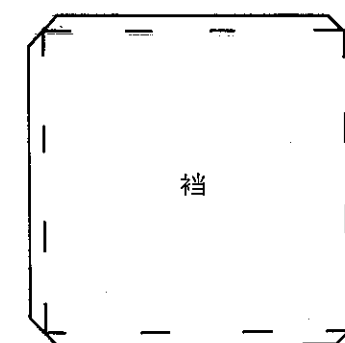


表前布、奥布および裏布はすべて同様に標す。

縫い方

- 縫い糸は白色の絹糸を使用する。
- 針目は0.4cmで、各縫い目には0.2cmのきせをかける。
- 後布の表裏の裾を中表に合わせ、縫い代は裏布へ折り、表に返して毛抜き合わせにして、しつけをかける。
- 奥布の裾も同様にする。
- 前裆つけは、奥布の表裏で裆をはさみ、四つ縫いをする。このとき、裆の四隅は図のように折って、周囲をしつけでとじてつける。

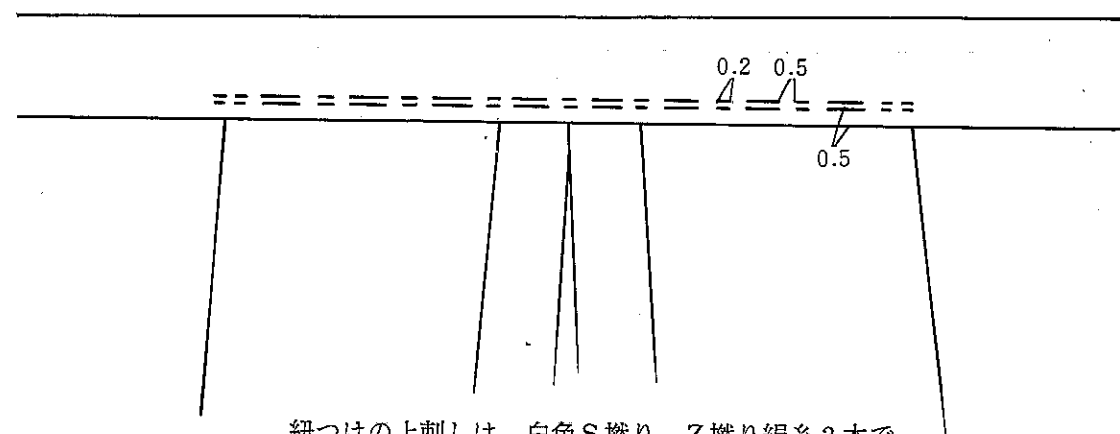
裆隅の折り方



- 袴の上部に留めをする。留め方は、左前表から針を出し、右前表、袴の表裏、右前裏、左前裏をすくい、左前表へ出して結ぶ。
- 前の胯上は、右脚胯上の表裏の縫い代をしつけでとじて、左脚の表裏で右脚の表裏をはさみ、四つ縫いをする。
- 前奥布の前つけ布のところを、表裏しつけでとじる。
- 前布の表裏で奥布の表裏をはさみ、四つ縫いをする。このとき、裾口5cmほどは表裏別々に縫う。
- 後の袴つけ、袴の上部の留め、胯上および後布と奥布の縫い合わせは、前と同様にする。ただし、胯上は右脚で左脚をはさんで、四つ縫いにする。
- 前の脇明きを縫って、毛抜き合わせにする。
- 後の脇明きも前と同様に縫う。
- 胯下は前布の表裏で後布の表裏をはさみ、留めをして四つ縫いをする。
- 胯下の留め方は、前の表から針を出し、後表、袴の表

- 裏、後裏、前裏の順にすくって、前の表に戻って結ぶ。
- 相引は、前布の表裏で後布の表裏をはさみ、留めをして四つ縫いをする。
- 相引の留め方は、前布の表から針を出し、後布の表裏、前布の裏をすくい、前布の表に戻って結ぶ。
- 胯下および相引の裾口は、5cmほど表裏別々に縫う。
- 紐つけの位置へ、出来上り図のように襷を取り、襷山をしつけでとじておく。このとき、中央の重なりは0.5cmとして、前は左脚を上、後は右脚を上にする。
- 紐は丈の中央およそ65cmを縫い残し、紐先および幅を針目0.3~0.5cmで縫って表へ返す。
- 紐つけは、紐で身をはさみ、腰幅のところを絹白色のS撚り、Z撚り飾紐二本で、紐端から0.5cm内を、小針0.2~0.5cmの二目落しで図のように上刺しをする。
- 前後とも同様にする。

紐のつけ方



紐つけの上刺しは、白色S撚り、Z撚り絹糸2本で各襷山へ小針を出してつける。

鶴岡八幡宮御神服の模造

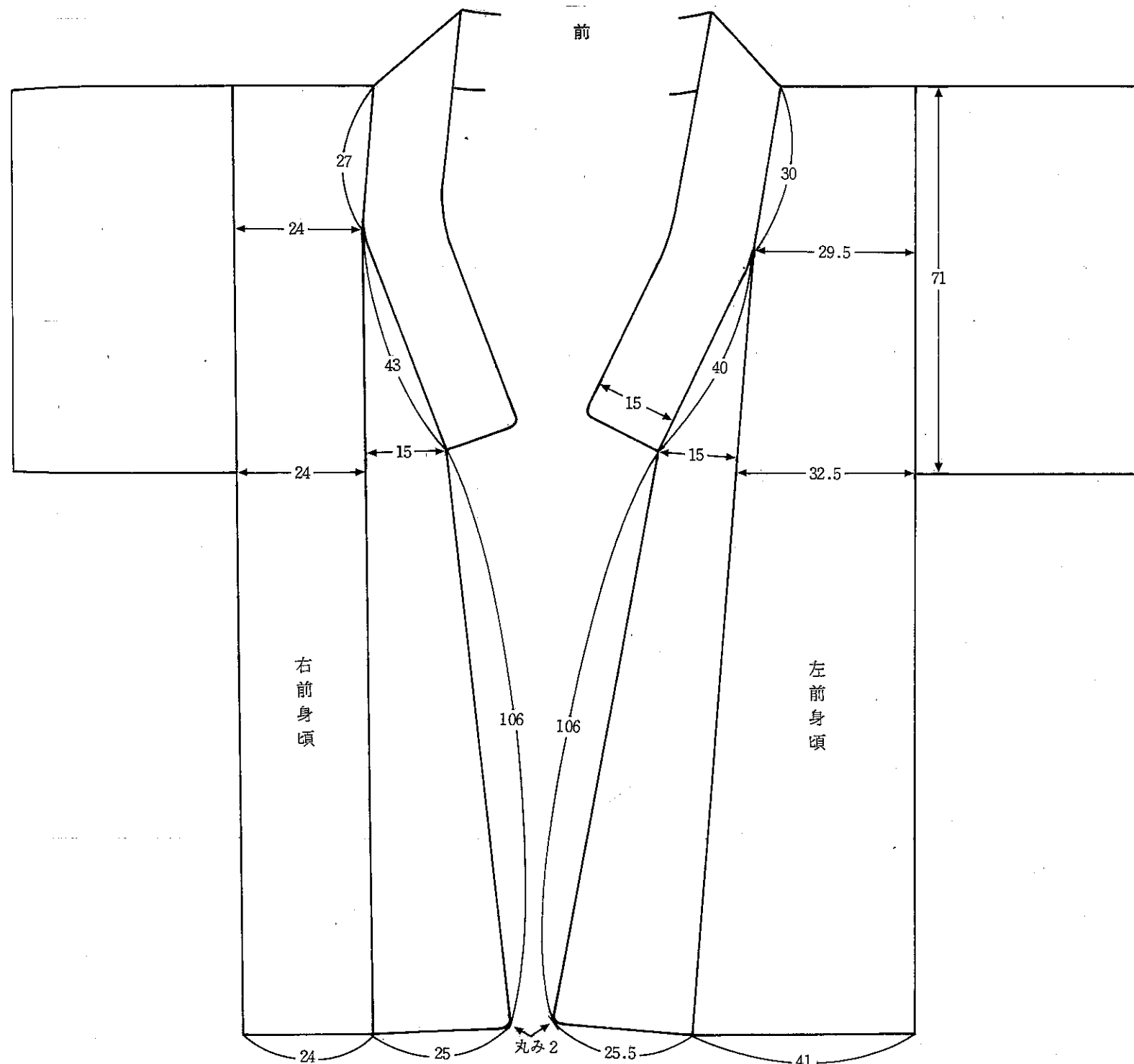
実物は鶴岡八幡宮に伝えられたもので、単と三枚重ね、その上に重ねる小桂を加えて「五襲の御衣」として、亀山天皇より寄進されたものと伝えられ、現存装束の最古のものと云われる貴重なものである。

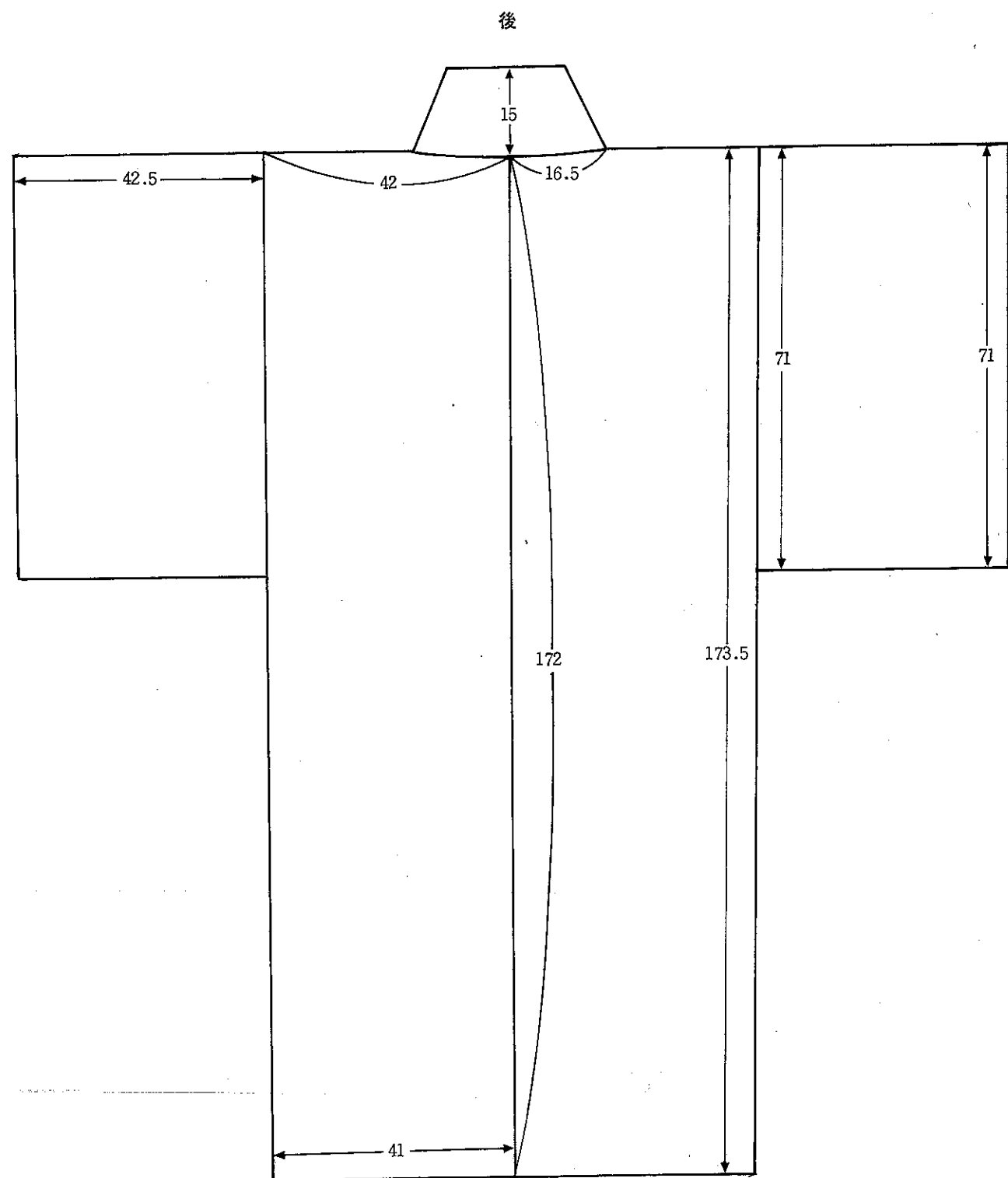
第一御衣 (桂: 表着)

表裂は白小麥地鳳凰文二倍織物、中倍には黄平絹、裏裂には萌黄向蝶菱文綾(綾地綾)を使用する。

出来上り寸法

出来上り図の寸法のとおりである。





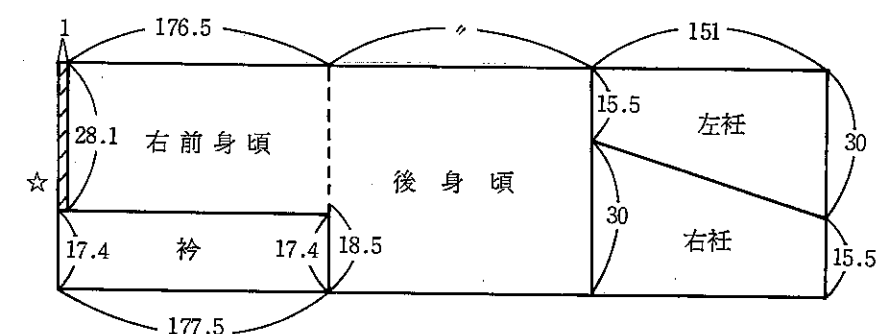
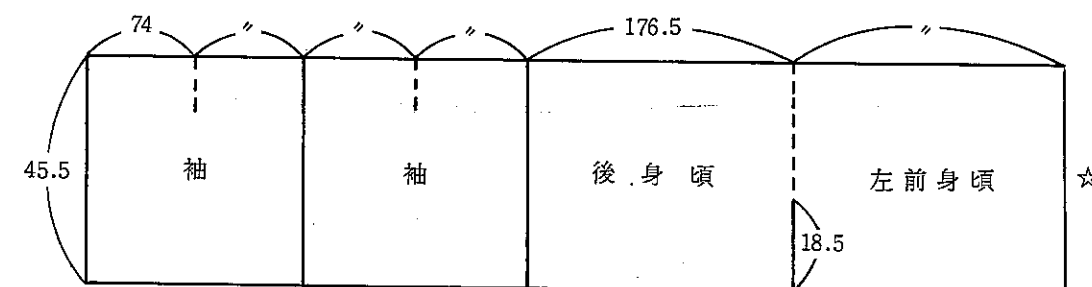
裁ち方

●表裂、中倍裂、裏裂は、それぞれ幅45.5cmの裂を絵丈1154cm使用する。

●表裂は裁ち方図のように裁ち、中倍の裂もすべて表裂と同様に裁つ。

●裏裂は、右前身頃および衿の裁ち方に注意して、裁ち方図のように裁つ。

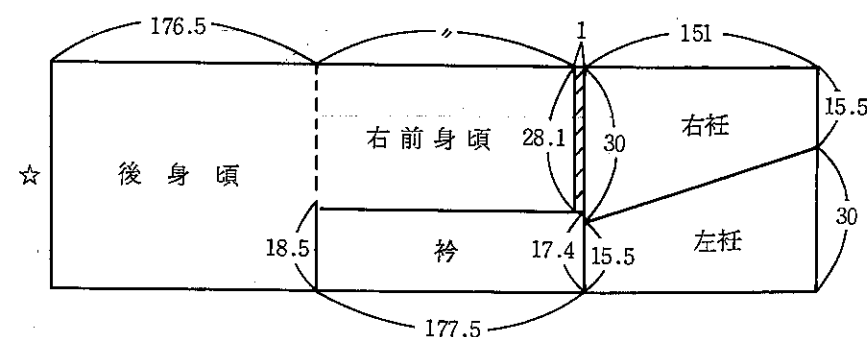
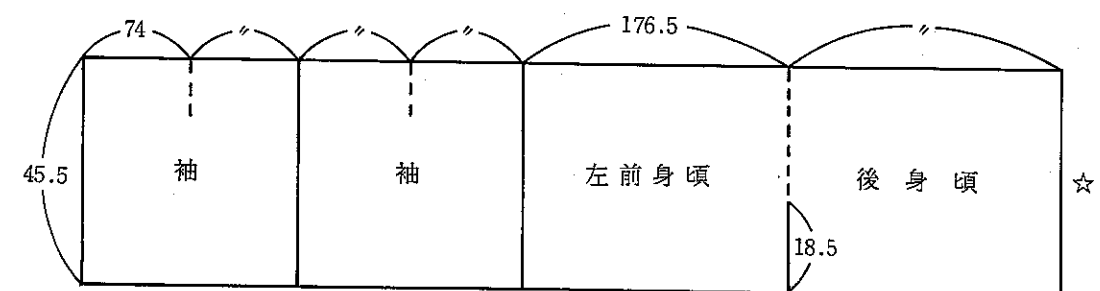
表 裂



$$\text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 4 + \text{衿丈不足分} + \text{衿丈} = \text{表総丈}$$

$$74 \times 4 + 176.5 \times 4 + 1 + 151 = 1,154\text{cm}$$

裏 裂

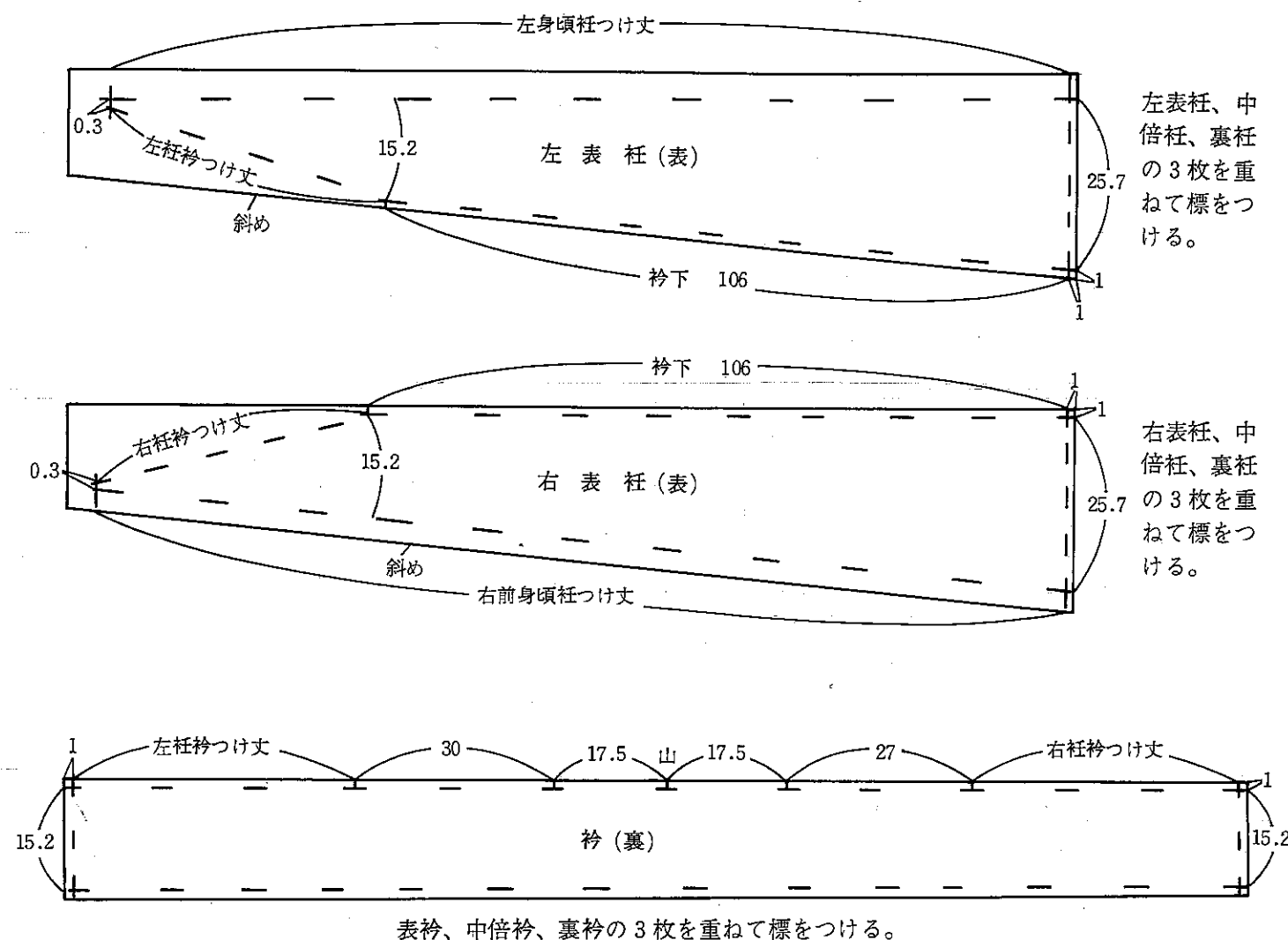
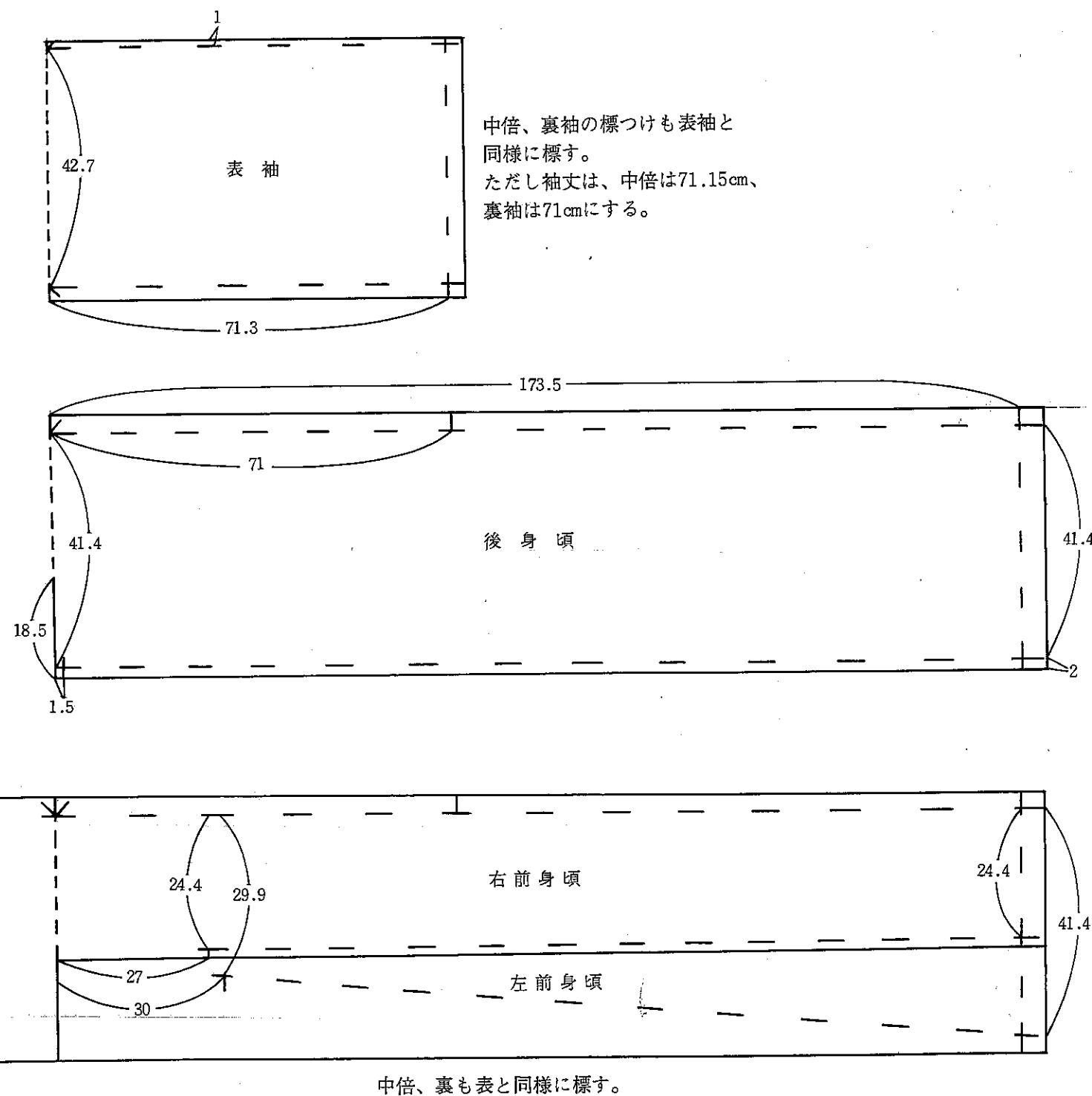


$$\text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 4 + \text{衿丈不足分} + \text{衿丈} = \text{裏総丈}$$

$$74 \times 4 + 176.5 \times 4 + 1 + 151 = 1,154\text{cm}$$

標つけ方

- 袖の表、中倍、裏を図のように標をつける。
- 身頃の表、中倍、裏はすべて図のように標をつける。
- 衿は左の表衿、中倍の衿、裏衿の三枚を重ねて、図のように標つけをする。
- 右衿も左衿と同様に、三枚重ねて図のように標つけをする。
- 衿は表、中倍、裏三枚重ねて、図のように標をつける。



縫い方

- 縫い糸は各裂と同色のS撚りとZ撚り絹糸を使用する。S撚りは糸びねりの部分に使用する。

袖

- 袖口は表裂、中倍裂、裏裂を別々に糸びねりをする。
- 糸びねりの仕方は、縫い代を出来上り幅0.25cmほどにひねり、針目0.1~0.15cm、間隔1.3cmにくける。
- 袖口の重ね方は、表裂および中倍の裂は裏側へ、裏裂は反対に重ね合わせる。
- 袖口端から2.8cm入ったところを針目0.1cm、間隔2.2cm、とし、表裏に針目を出して、三枚一緒にとじる。間隔2.2cmの糸は、表裂と中倍の間にわたす。とじ糸は表糸を使用する。
- 丈、幅を平らにして、袖底および袖つけ側を三枚一緒に、しつけでとじておく。

に、しつけでとじておく。

- 袖底を六枚一緒に、針目0.7~1cmで縫い合わせ、縫い代は0.3cmのきせを掛けて内袖に折る。

- 袖口端の縫い代は、三角に折ってとじる。

身頃

- 表裂、中倍裂、裏裂の裾をそれぞれ標どおり裏側へ折り、表裂、中倍裂は同じに重ね、裏裂は袖口と同様反対に折って、三枚の裾を平らに重ね合わせる。
- 裾口より1.8~2cm上を針目0.1cm、間隔1.8~2cmで、袖口と同様にとじる。
- 前後身頃の幅の両端を、三枚一緒にしつけでとじておく。
- 背は六枚一緒に、針目1cmで縫い合わせ、0.2cmのきせを

かけて左身頃へ折り返す。

●裾口の背縫い代は、三角に折ってとじる。

衽

●衽下に続けて、裾を袖口と同様に、表裂、中倍裂、裏裂をそれぞれ糸びねりする。

●このとき襟先は出来上り図の寸法の丸みをつける。

●表、中倍、裏の三枚を重ね合わせ、衽下端から2.6cm内側を、また裾は2.2cm上のところを、針目0.1cm、間隔2cmくらいでとじる。

●衽つけおよび衽つけの縫い代のところを、三枚一緒にしつけでとじておく。

●前身頃と衽を合わせて、針目1cmで衽つけをして、0.2cmのきせをかけ、縫い代は衽の方へ折り返す。

●裾口は三角に折ってとじる。

衿

●表裂、中倍裂、裏裂の衽つけを除いた部分、衽先および衽幅のところを、それぞれ袖口と同様に糸びねりする。

●衽先の角は、丸みをつける。

●三枚重ね合わせて、衽先および衽幅の2cm内側を針目0.1cm、間隔2cmでとじる。

●衽つけのところを三枚一緒にしつけでとじておく。

●針目1cmで衽つけして、0.2cmのきせをかけて、縫い代は衽の方へ折る。

●衽つけの衽先のところは、三角に折らない。

●衽の上部の縫い代はそのままにしておく。

脇縫い

●前後身頃の脇を合わせて、針目1cmで縫い、0.2cmのきせをかけて、縫い代は前身頃へ折り返す。

●裾口の縫い代は三角に折ってとじる。

袖つけ

●身頃と袖を合わせて、袖つけの留めをし、針目1cmで袖をつけ、0.2cmのきせをかけて縫い代は袖の方へ折る。

●袖つけの留めは、内袖から針を出し、前身頃、後身頃をすくい、外袖に出してしっかりと結ぶ。

●いずれも表裂、中倍裂、裏裂を三枚一緒にすくって留める。

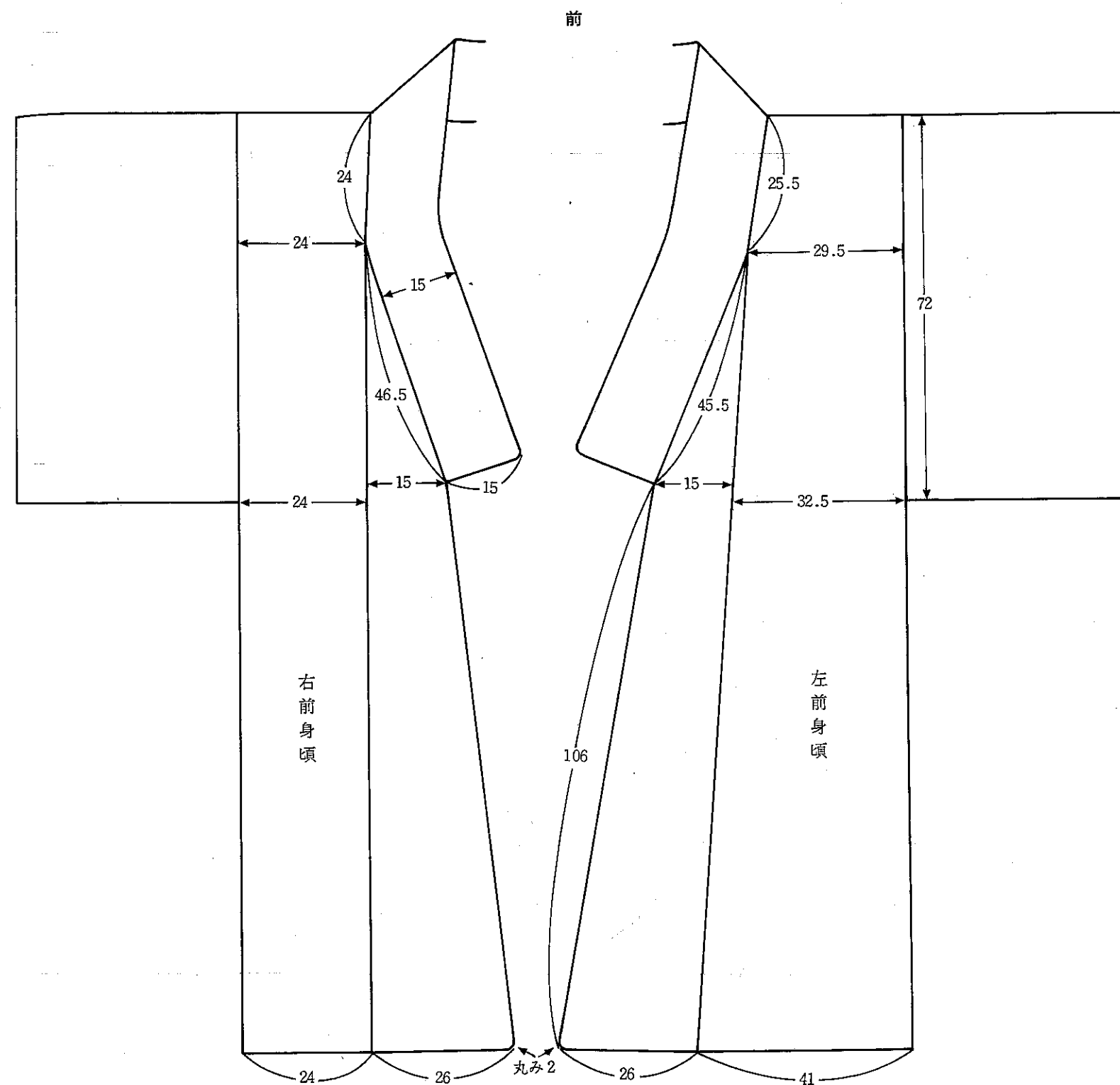
●身頃の縫い代を、留めからつれないように斜めに折ってとじる。

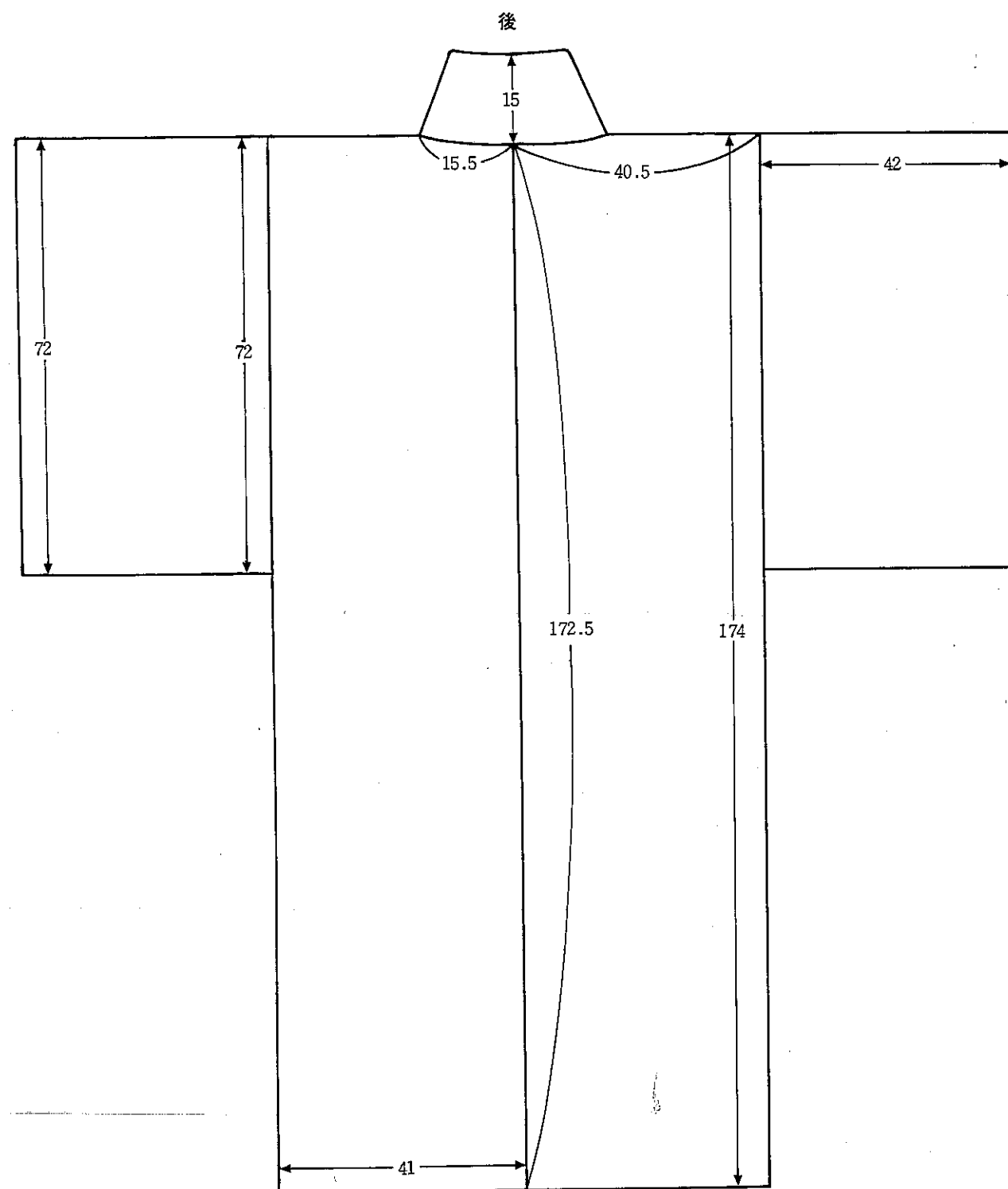
第二御衣 (桂)

表裂に紫地鶴の丸三つ盛文浮織、中倍裂に白平絹、裏裂に紫松葉襷鶴菱文綾(固地綾)を使用する。

出来上り寸法

出来上り図の寸法のとおりである。

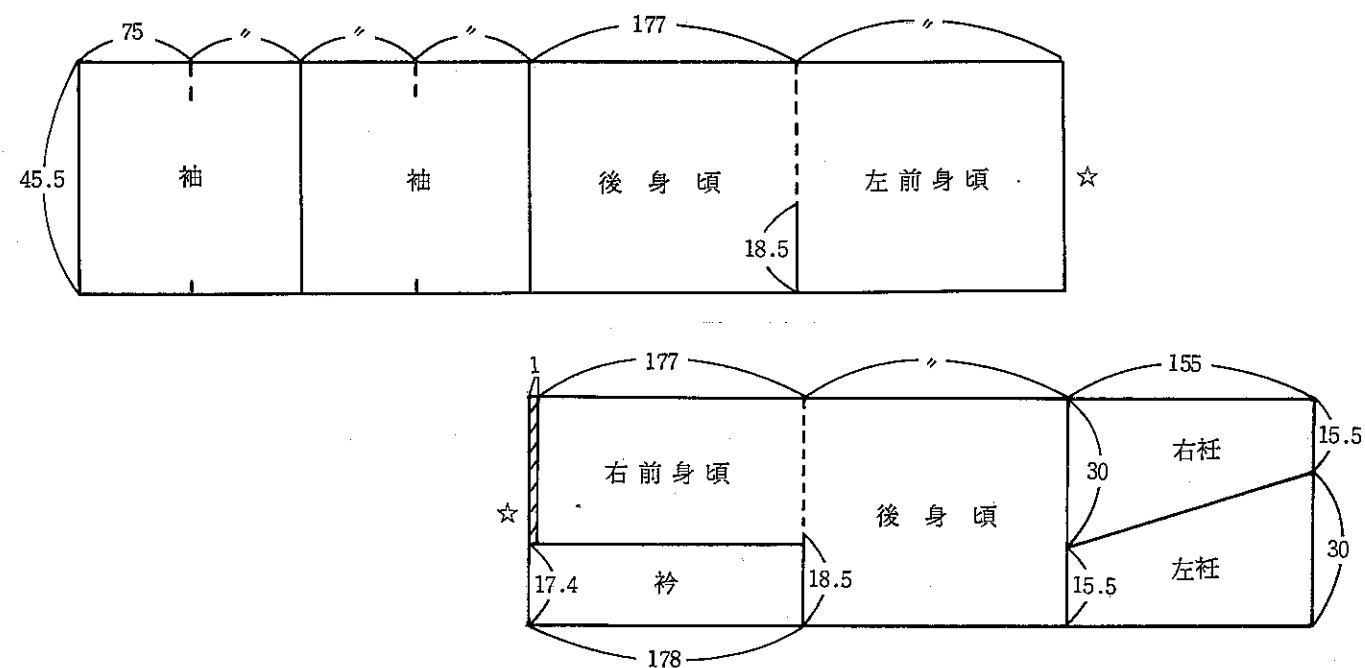




裁ち方

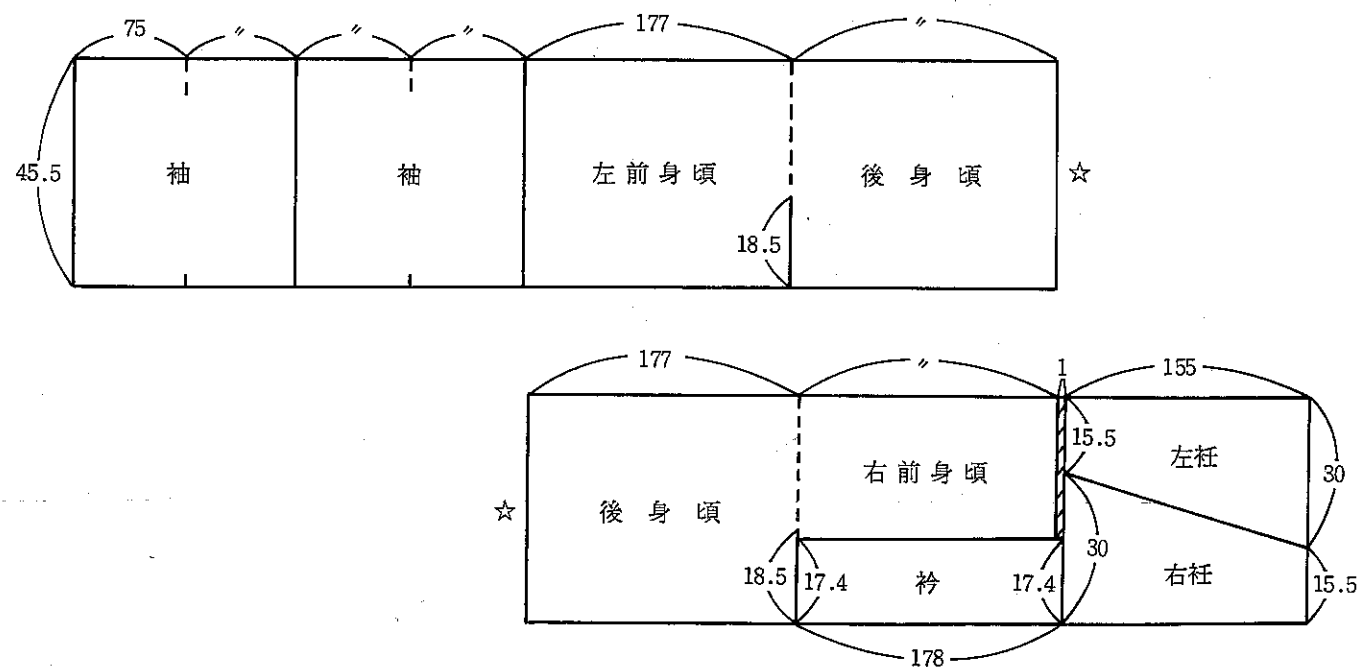
●裁ち方図のとおりに裁つ。

表 布 (中倍の裁ち方も同様)



$$\begin{aligned} & \text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 4 + \text{衿不足分} + \text{衿丈} = \text{表総丈} \\ & 75 \times 4 + 177 \times 4 + 1 + 155 = 1,164\text{cm} \end{aligned}$$

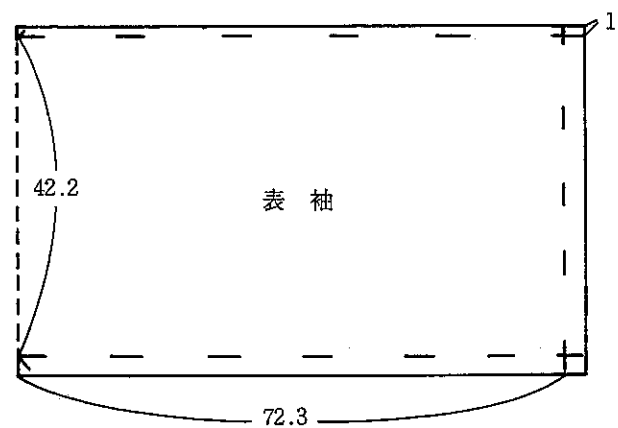
裏 布



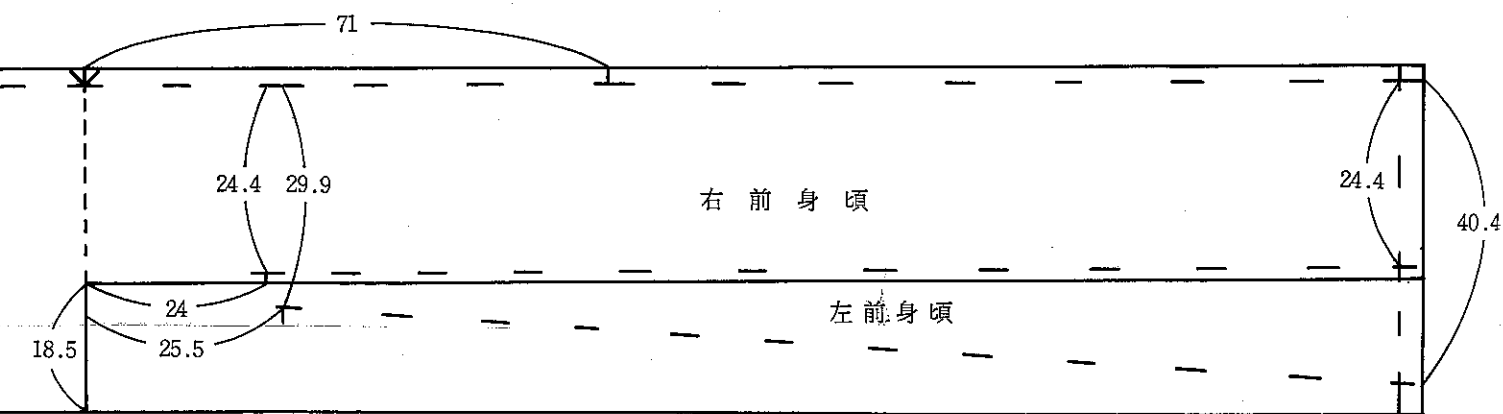
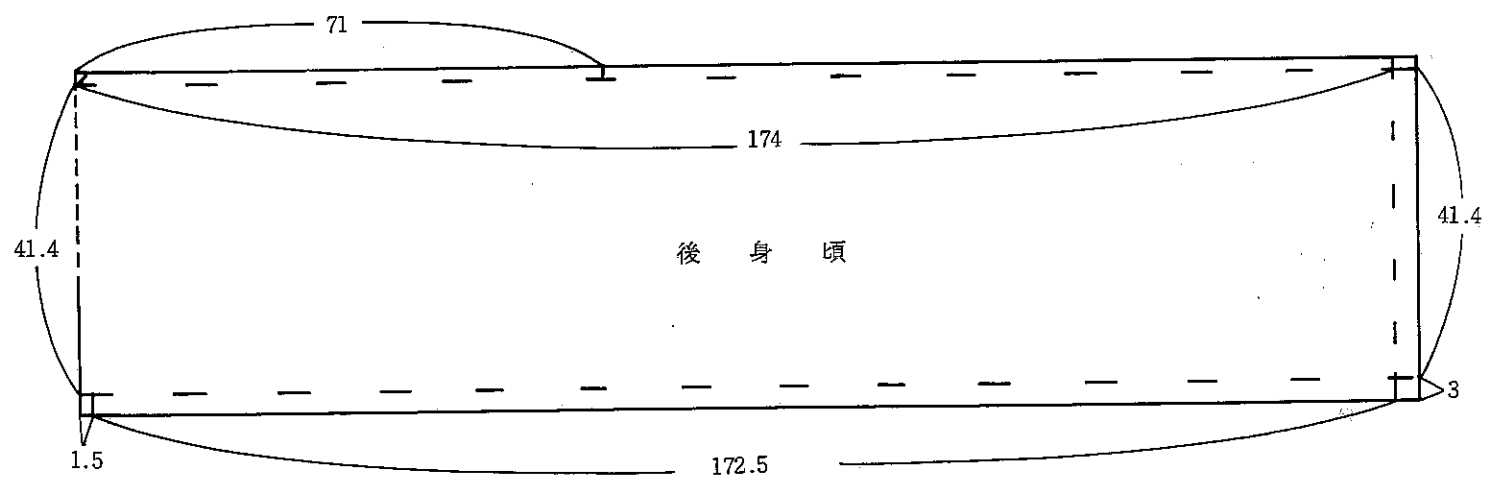
$$\begin{aligned} & \text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 4 + \text{衿不足分} + \text{衿丈} = \text{裏総丈} \\ & 75 \times 4 + 177 \times 4 + 1 + 155 = 1,164\text{cm} \end{aligned}$$

標つけ方

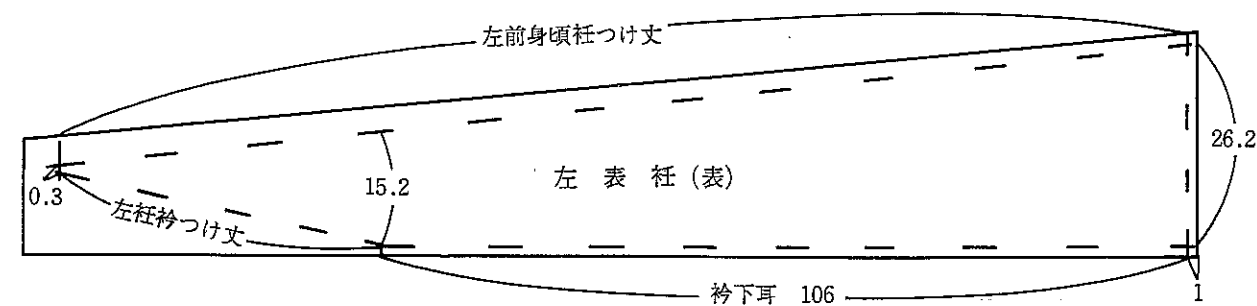
●標つけ方図のとおりにつける。



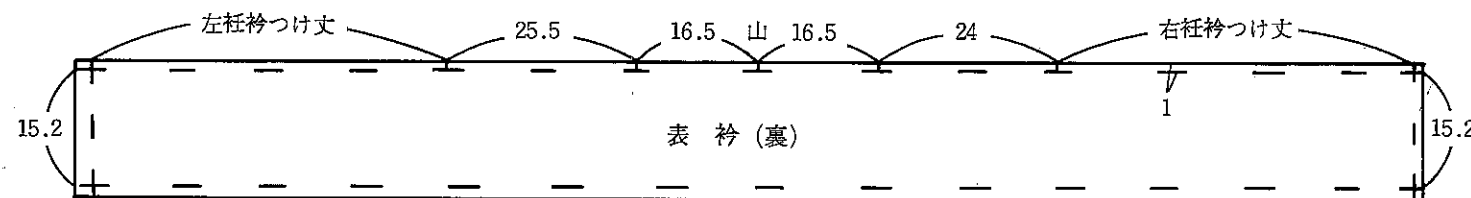
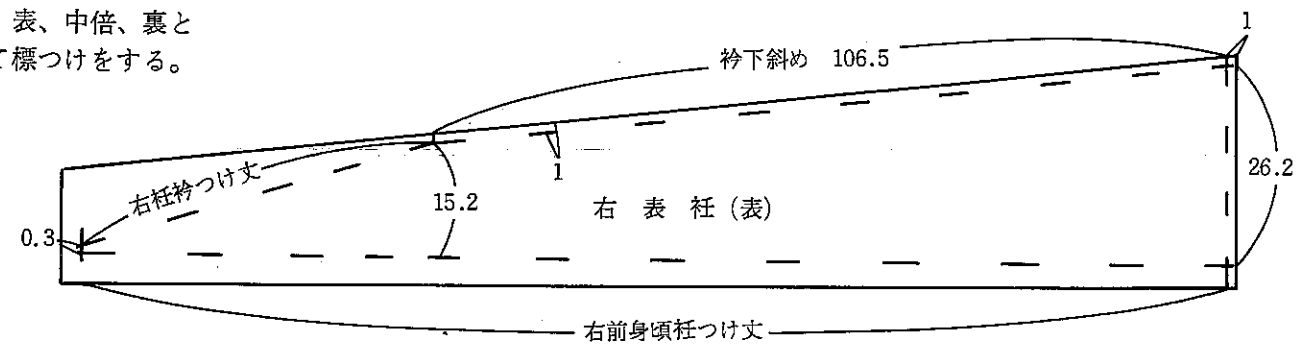
中倍、裏袖の標つけも表袖と同様に標す。
ただし、袖丈は中倍72.15cm
裏袖は72cmにつける。



中倍、裏身頃も表布と同様に標をつける。



衿と衿は、表、中倍、裏と
3枚重ねて標つけをする。



縫い方

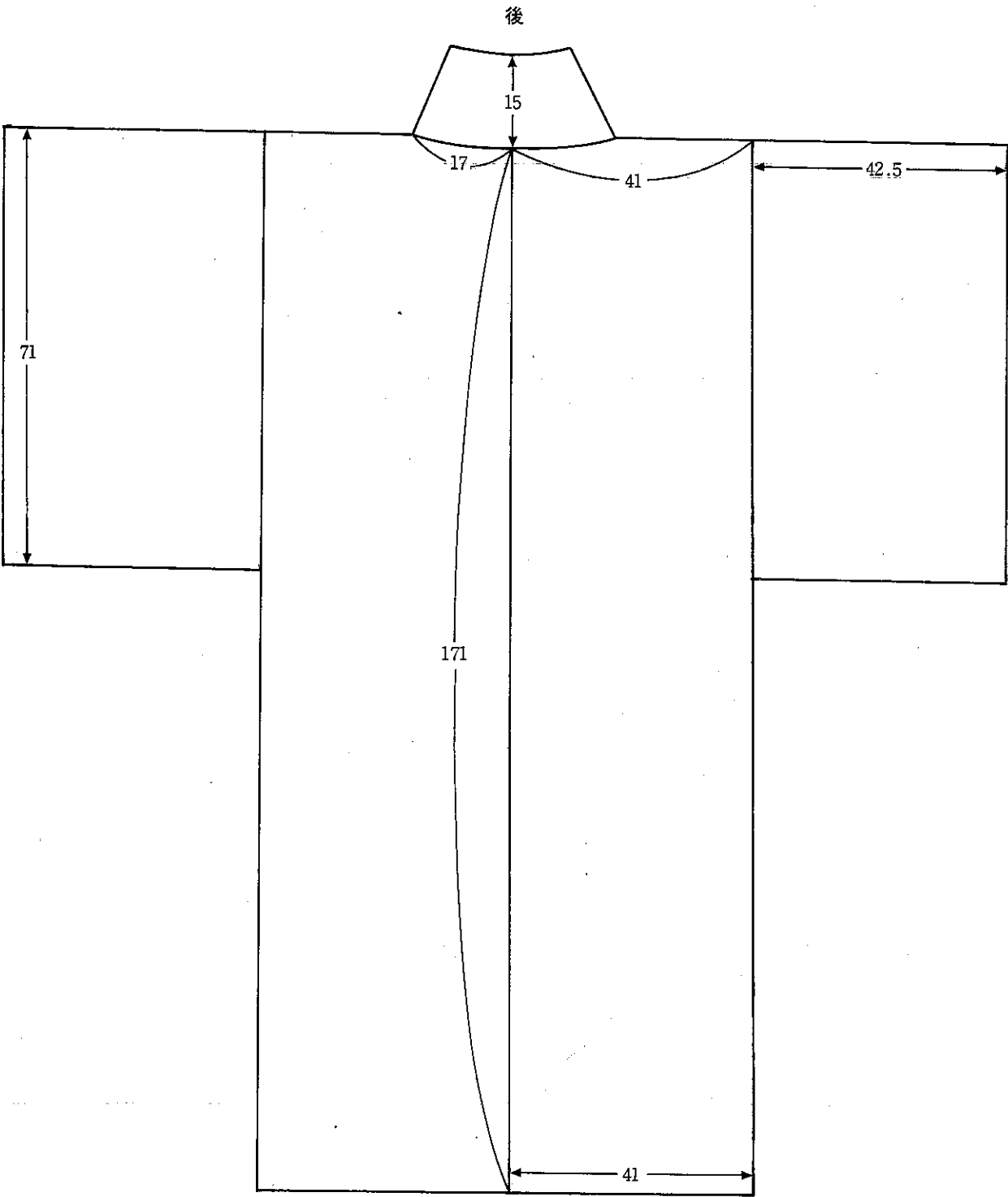
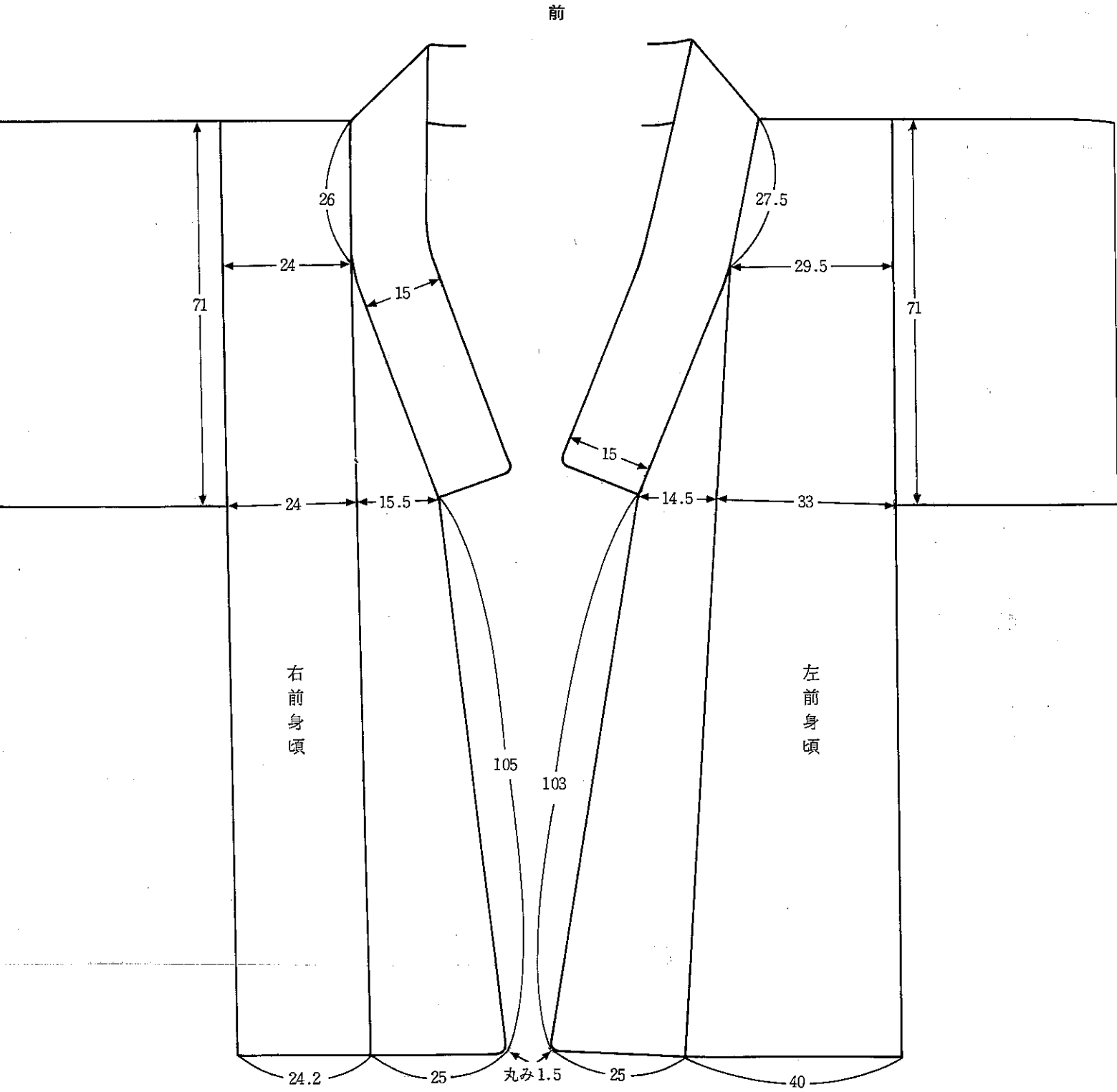
●第一御衣とすべて同じ縫い方で仕立てる。

第三御衣 (桂)

表裂は紫地鶴の丸三つ盛文浮織、中倍裂は白平絹、裏裂は紫遠菱文綾（固地綾）を使用する。

出来上り寸法

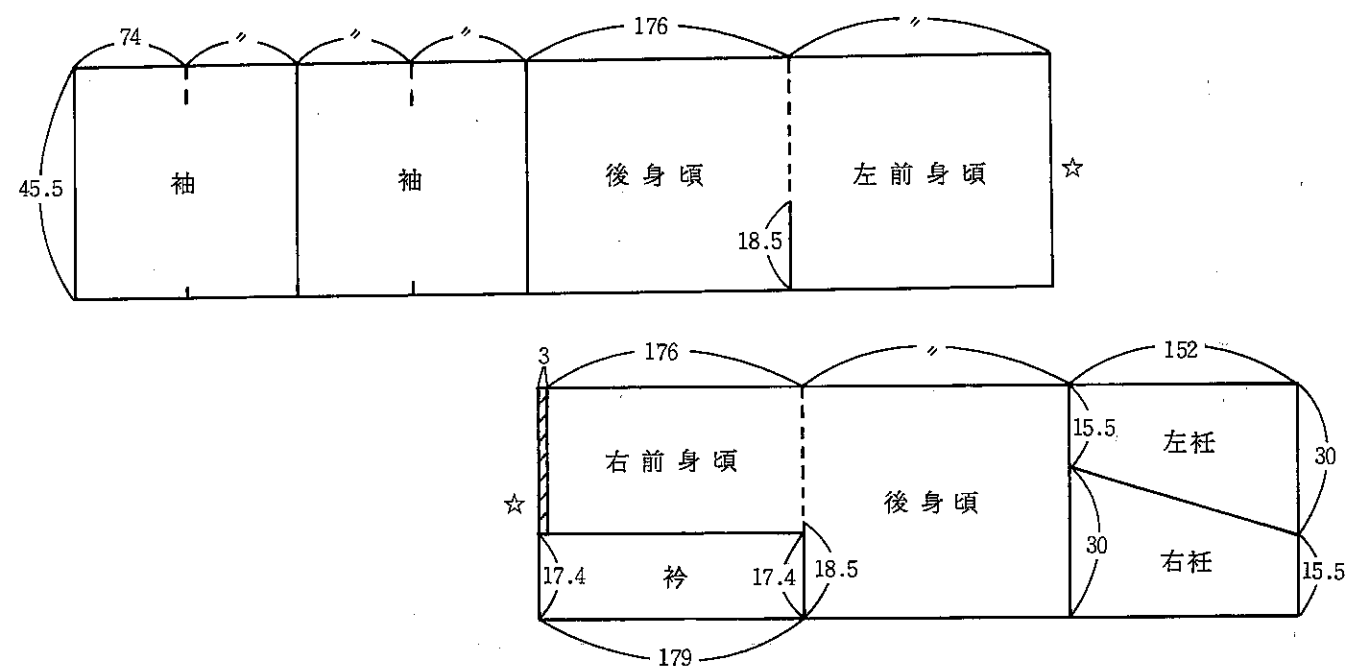
出来上り図の寸法のとおりである。



裁ち方

●裁ち方図のとおり裁つ。

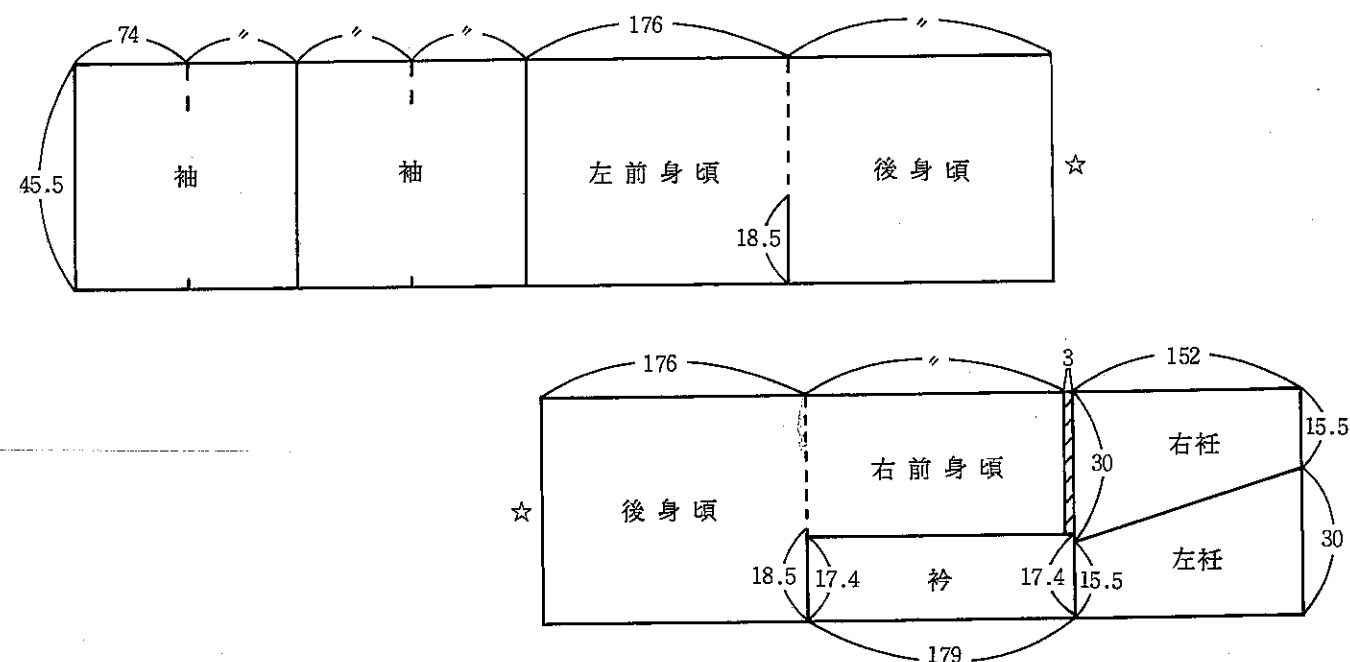
表 裂 (中倍の裁ち方も同様)



$$\text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 4 + \text{衿不足分} + \text{衽丈} = \text{表総丈}$$

$$74 \times 4 + 176 \times 4 + 3 + 152 = 1,155\text{cm}$$

裏 裂

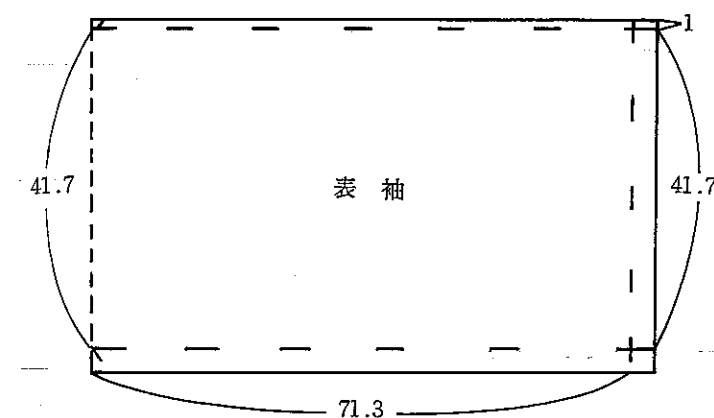


$$\text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 4 + \text{衿不足分} + \text{衽丈} = \text{裏総丈}$$

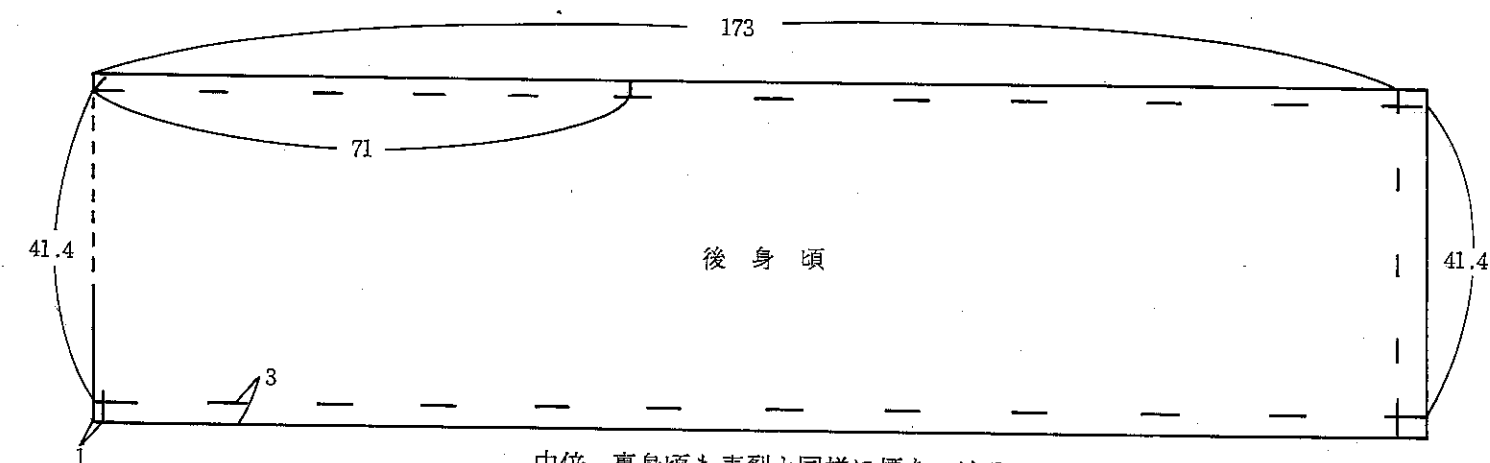
$$74 \times 4 + 176 \times 4 + 3 + 152 = 1,155\text{cm}$$

標つけ方

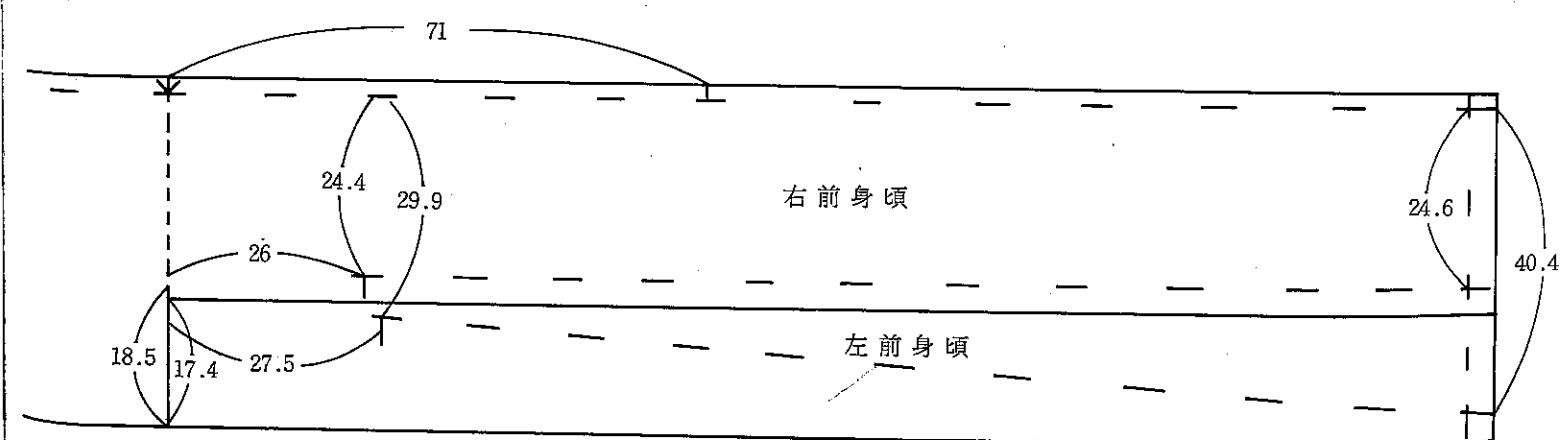
●標つけ方図のとおりにする。



中倍、裏袖の標つけも表と同様に標す。
ただし、袖丈は中倍71.15cm
裏71cmにつける。



中倍、裏身頃も表裂と同様に標をつける。

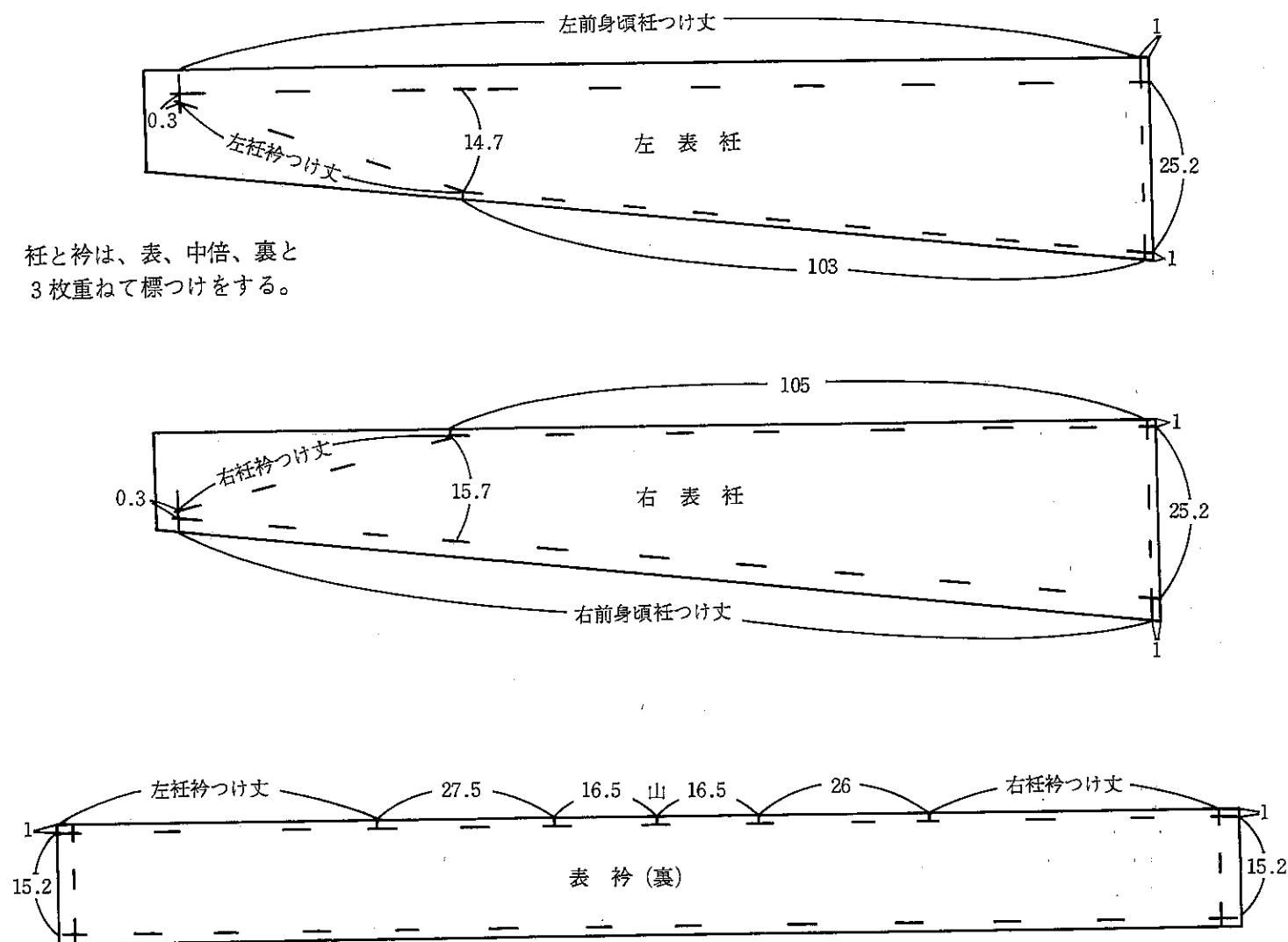


第四御衣 (単)

しろいしんあや
白幸菱文綾 (綾地綾) を使用する。

出来上り寸法

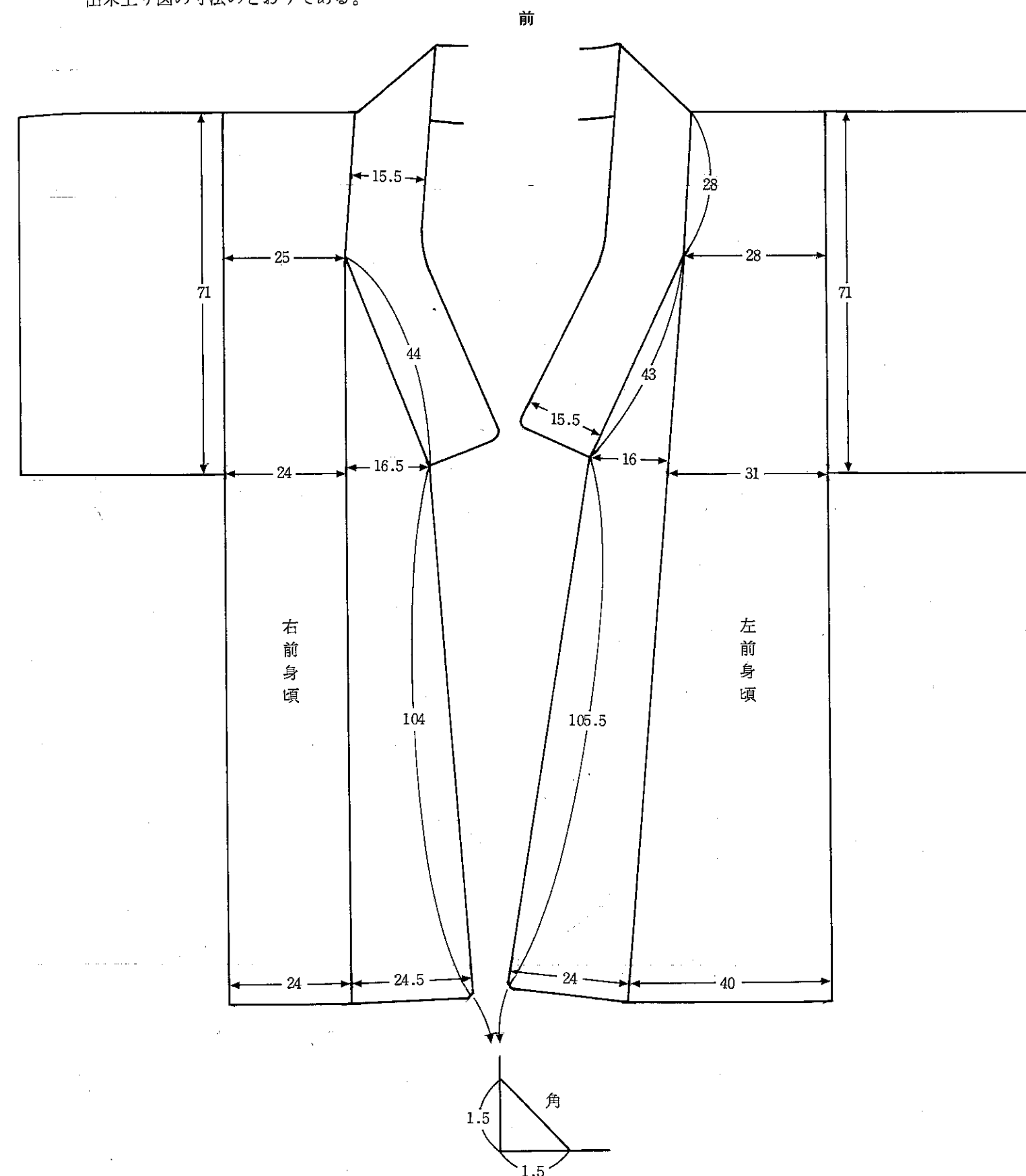
出来上り図の寸法のとおりである。

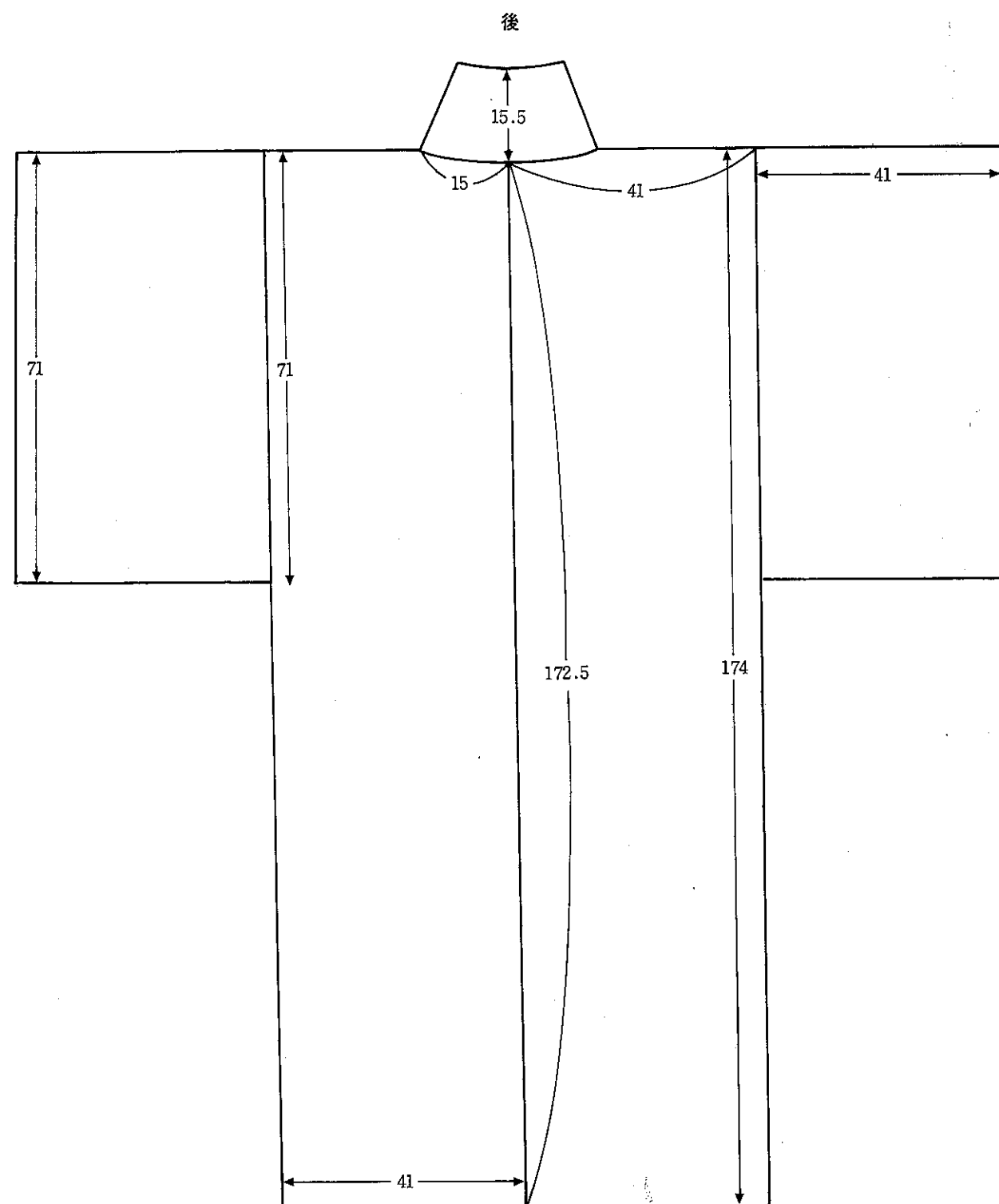


衿と衿は、表、中倍、裏と
3枚重ねて標つけをする。

縫い方

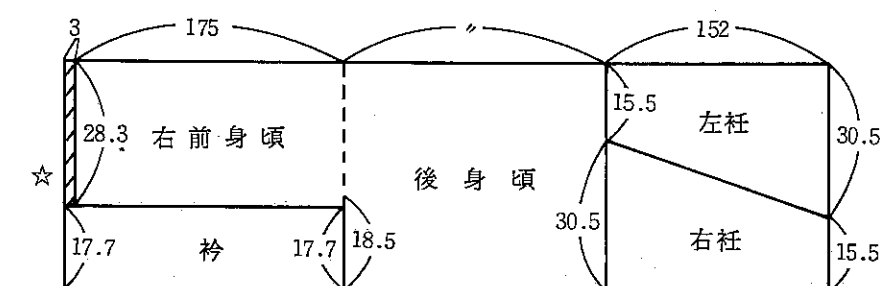
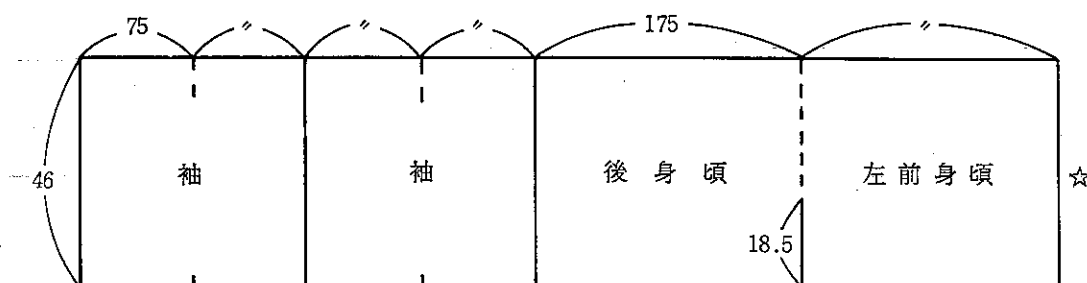
●糸は各裂と同色のS撚り糸とZ撚り糸を使用し、第一
御衣とすべて同じ縫い方で仕立てる。





裁ち方

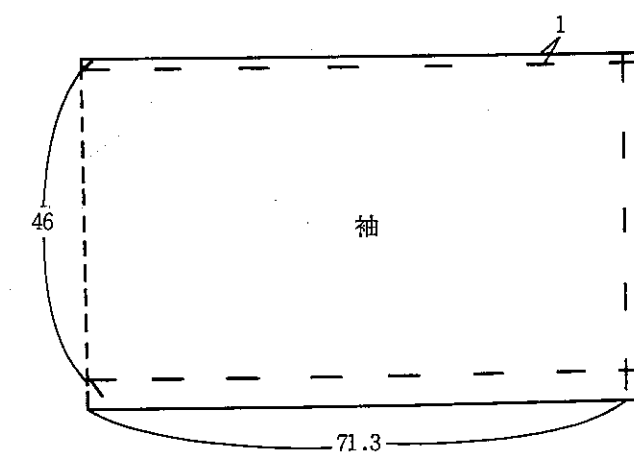
●幅46cmの裂1,155cmを使用して、裁ち方図のように裁つ。

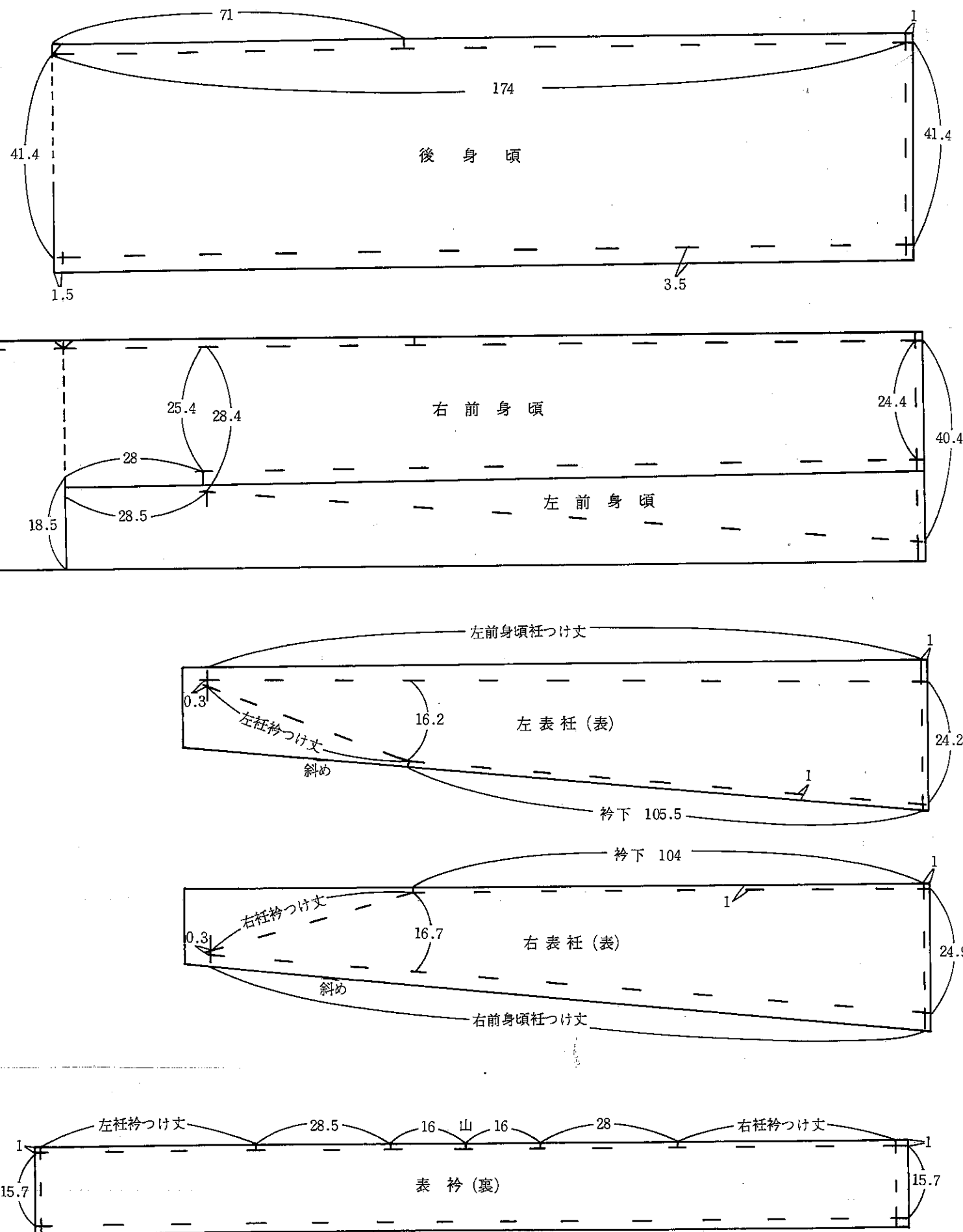


$$\begin{aligned} & \text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 4 + \text{衿不足分} + \text{衿} = \text{総丈} \\ & 75 \times 4 + 175 \times 4 + 3 + 152 = 1,155\text{cm} \end{aligned}$$

標つけ方

●標つけ方図のように、袖、身頃、衿、衿の標をつける。





縫い方

- 縫い糸は裂と同色のS撚り絹糸を使用する。

袖

- 袖口は糸ひねりをする。幅0.3cmにひねり、針目0.15cm、間隔1.3cmでくける。
- 袖底を針目0.7cmで縫い合わせ、縫い代は0.3cmのきせをかけて内袖に折る。袖口側の縫い代の端を三角に折ってとじる。

身頃

- 前後の裾を、袖口と同様に糸ひねりをする。
- 背縫いは針目0.8cmで縫い、縫い代は0.2cmのきせをかけて左身頃へ折り返す。裾の方の縫い代は、三角に折ってとじる。

衿

- 衿下および裾を、襟先は出来上り図の形に糸ひねりをする。
- 衿つけは針目0.8cmで縫い、縫い代は0.2cmのきせをかけて衿の方へ折り返す。裾の方の縫い代は三角に折ってとじる。

衿

- 衿つけ側を除いて、衿幅および衿先を袖口と同様に糸ひねりをする。
- 衿つけは針目0.7cmで身頃と縫い合わせ、縫い代は0.2cmのきせをかけて衿の方へ折る。

脇縫い

- 背と同様に縫い合わせ、縫い代は前身頃へ折り返す。裾の方の縫い代を三角に折ってとじる。

袖つけ

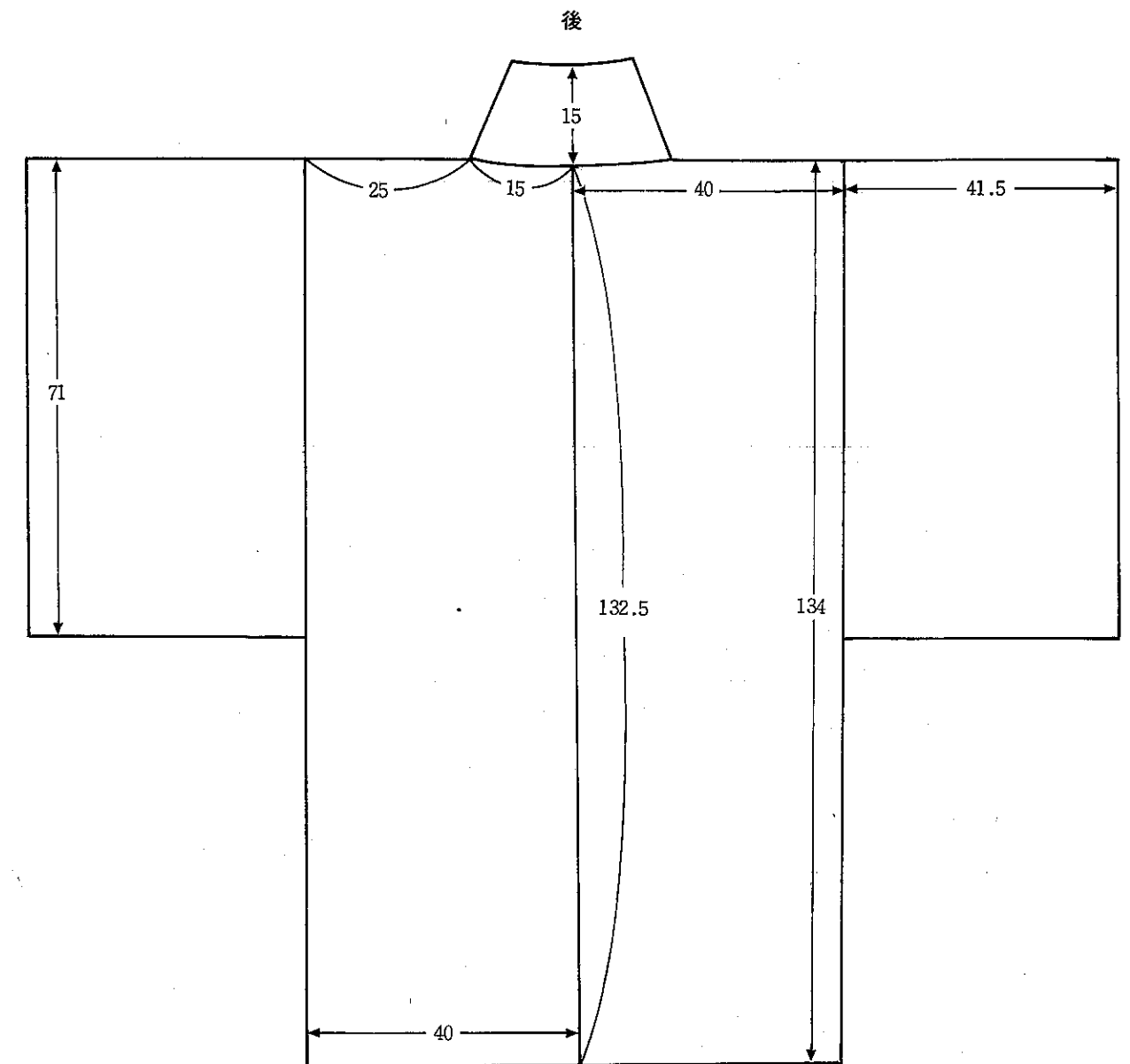
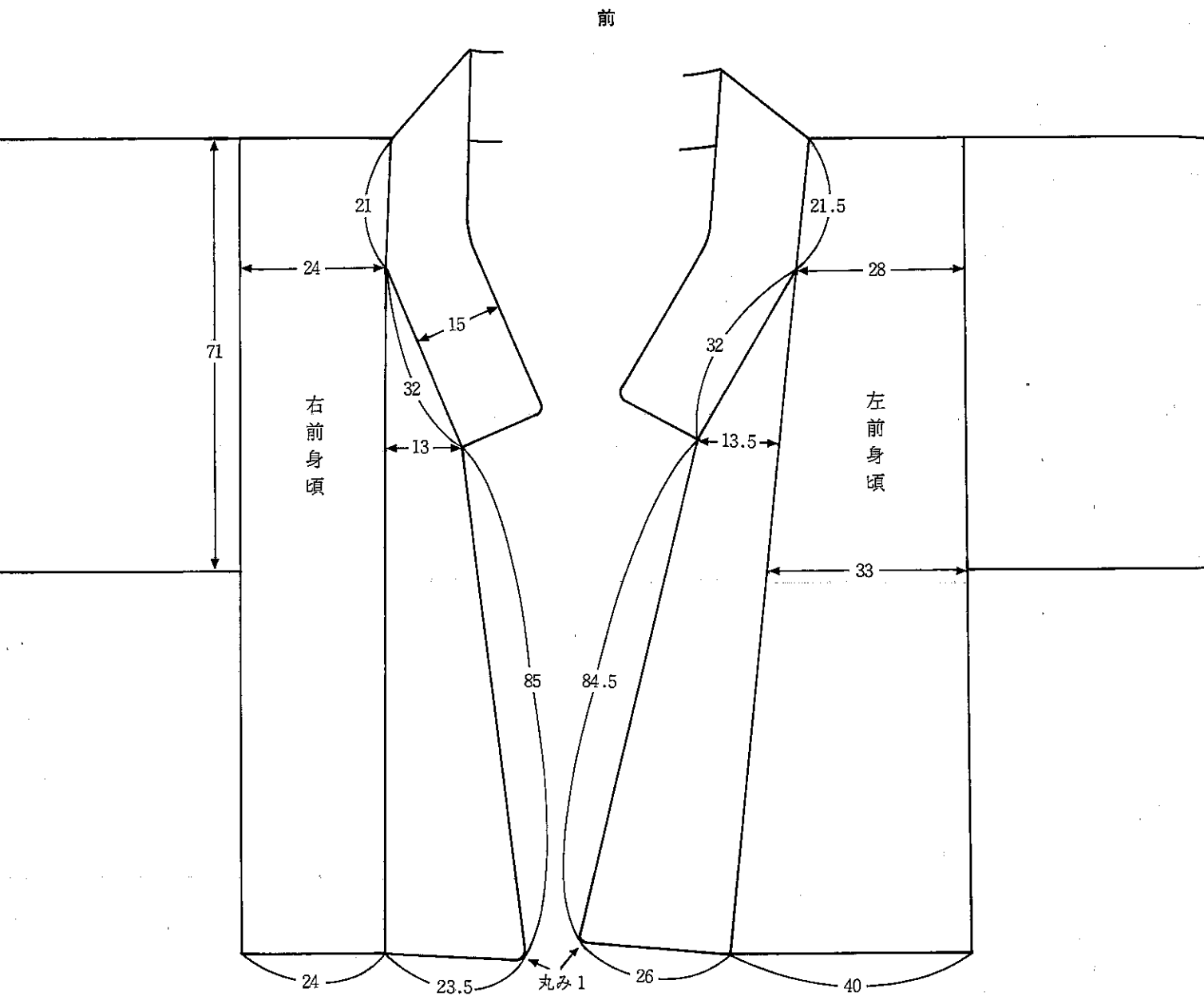
- 袖つけは留めをしてから、0.7cmの針目で袖と身頃を縫い合わせ、縫い代は0.2cmのきせをかけて袖の方へ折り返す。
- 袖つけの留めは内袖から針を出し、前身頃、後身頃の順にすくい、外袖に出して結ぶ。
- 袖つけ留めから上方へ、身頃の縫い代がつれないように斜めに折ってとじる。

第五御衣（小桂）

表裂に黄霞地窠文二倍織物、中倍裂は黄平絹(第一御衣と同じもの)、裏裂には黄繁菱文穀紗を使用する。

出来上り寸法

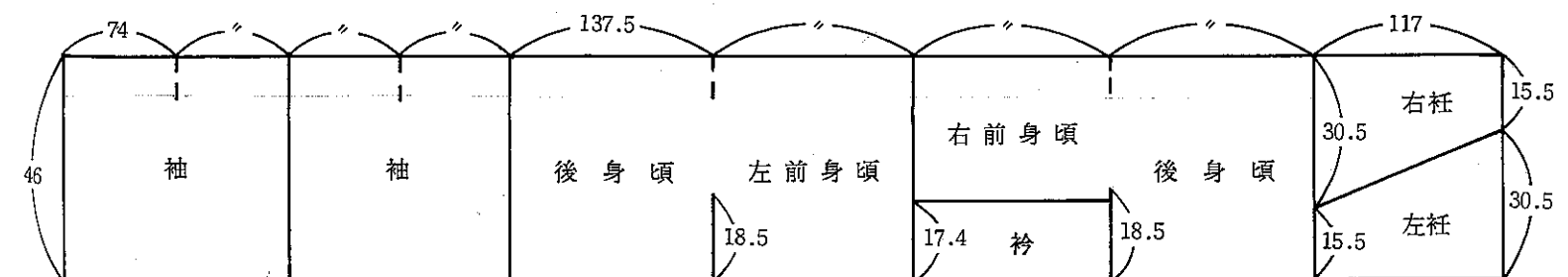
出来上り図の寸法のとおりである。



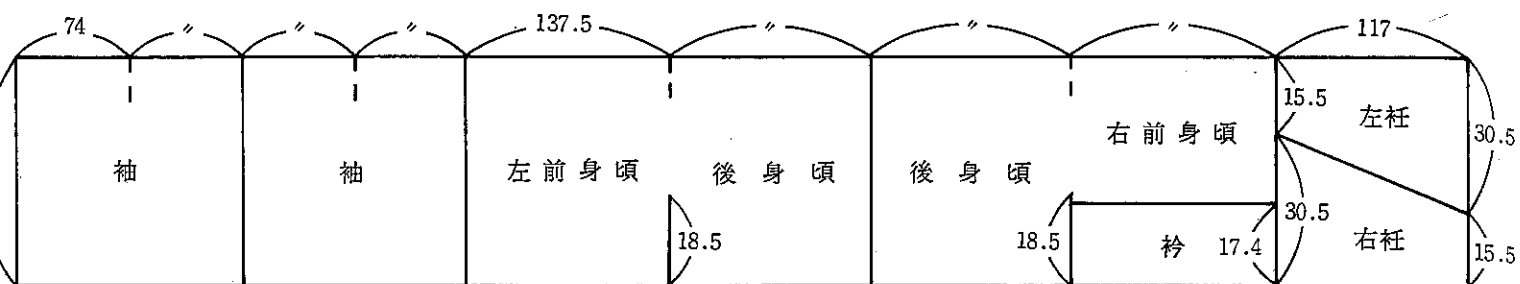
裁ち方

- 表裂は、幅46cm、総丈963cmを使用して裁ち方図のように裁つ。
- 中倍裂は表裂と同様に裁つ。
- 裏裂は表裂と寸法は同じであるが、右前身頃、および衿の位置を注意して裁つ。

表 裂 (中倍も同様)


$$74 \times 4 + 137.5 \times 4 + 117 = 963\text{cm}$$

裏裂の裁ち方

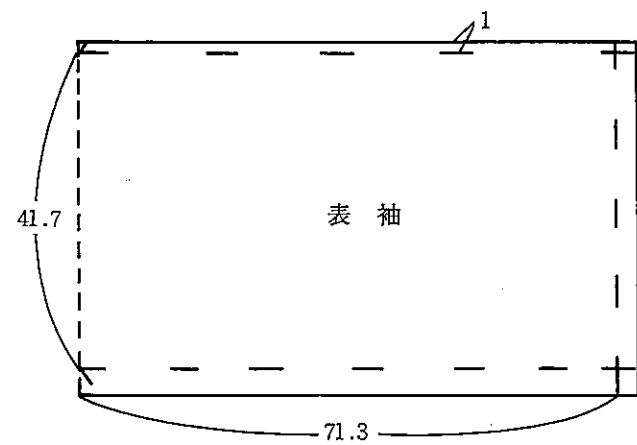


$$\text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 4 + \text{衿丈} = \text{裏総丈}$$

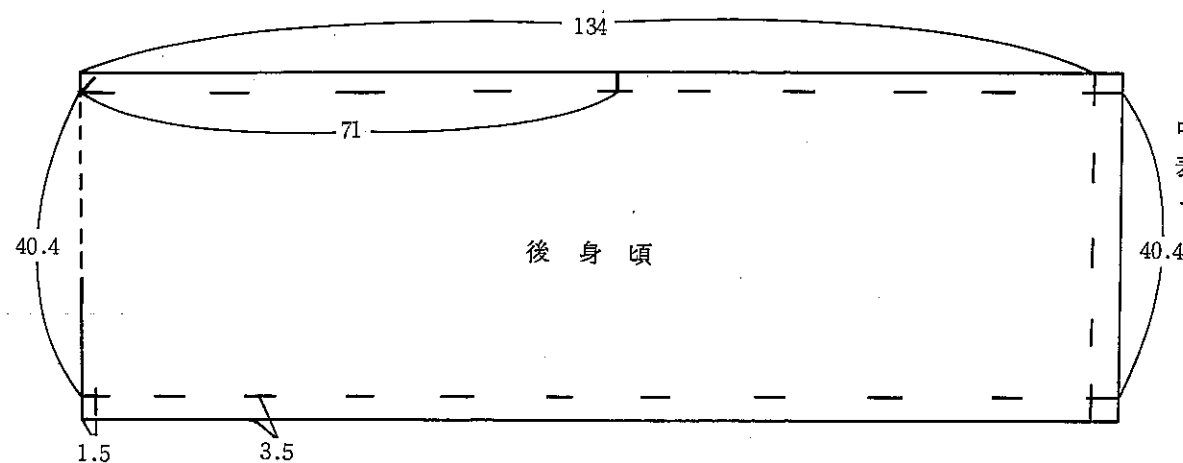
$$74 \times 4 + 137.5 \times 4 + 117 = 963 \text{cm}$$

標つけ方

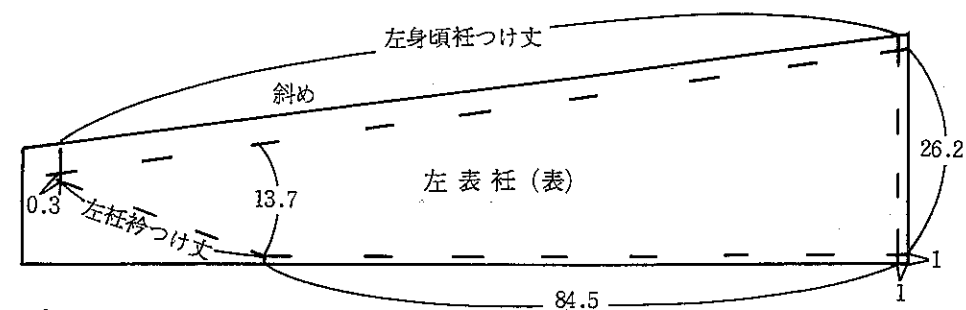
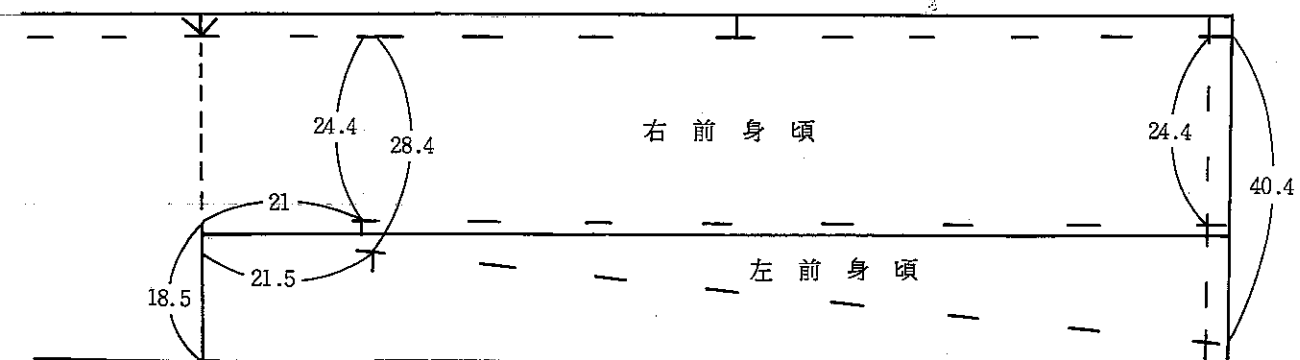
●標つけ方図のとおり標をつける。



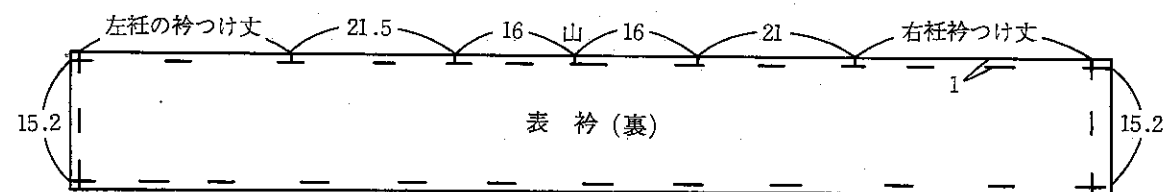
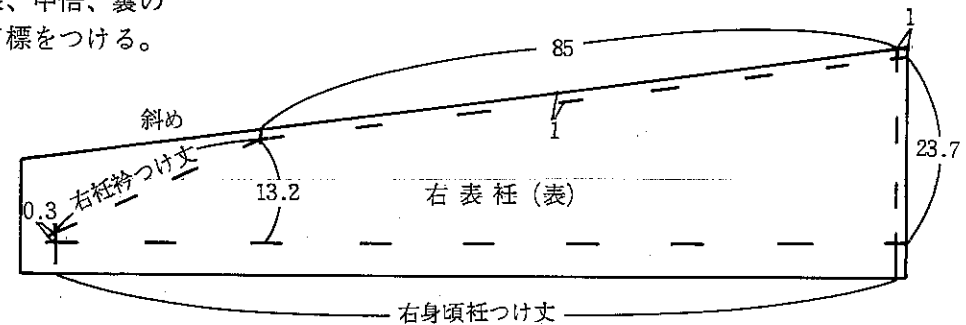
中倍、裏袖も表袖と同様に標をつける。
ただし、袖丈は中倍71.15cm
裏袖71cmに標す。



中倍、裏身頃も表と同様に標をつける。



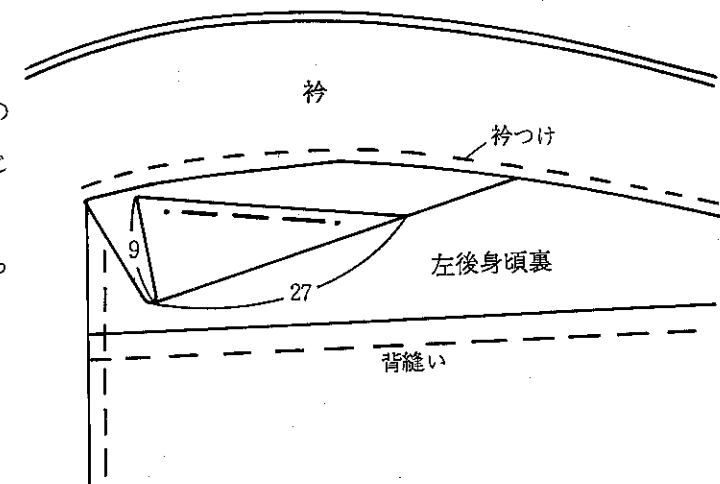
衿と衿は、表、中倍、裏の
3枚を重ねて標をつける。



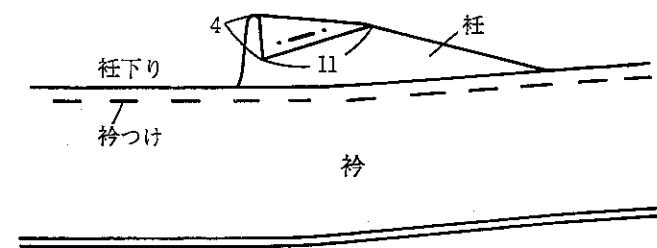
左身頃縫い代のとじ方

縫い方

- 縫い糸は裂と同色のS撚り絹糸を使用する。
- 第一御衣とすべて同様に仕立てるが、左身頃の上部の縫い代を図のように、衿幅より出ないように折ってとじる。
- また右身頃は、衿先の上部の縫い代を図のように折ってとじる。



右衿先縫い代のとじ方

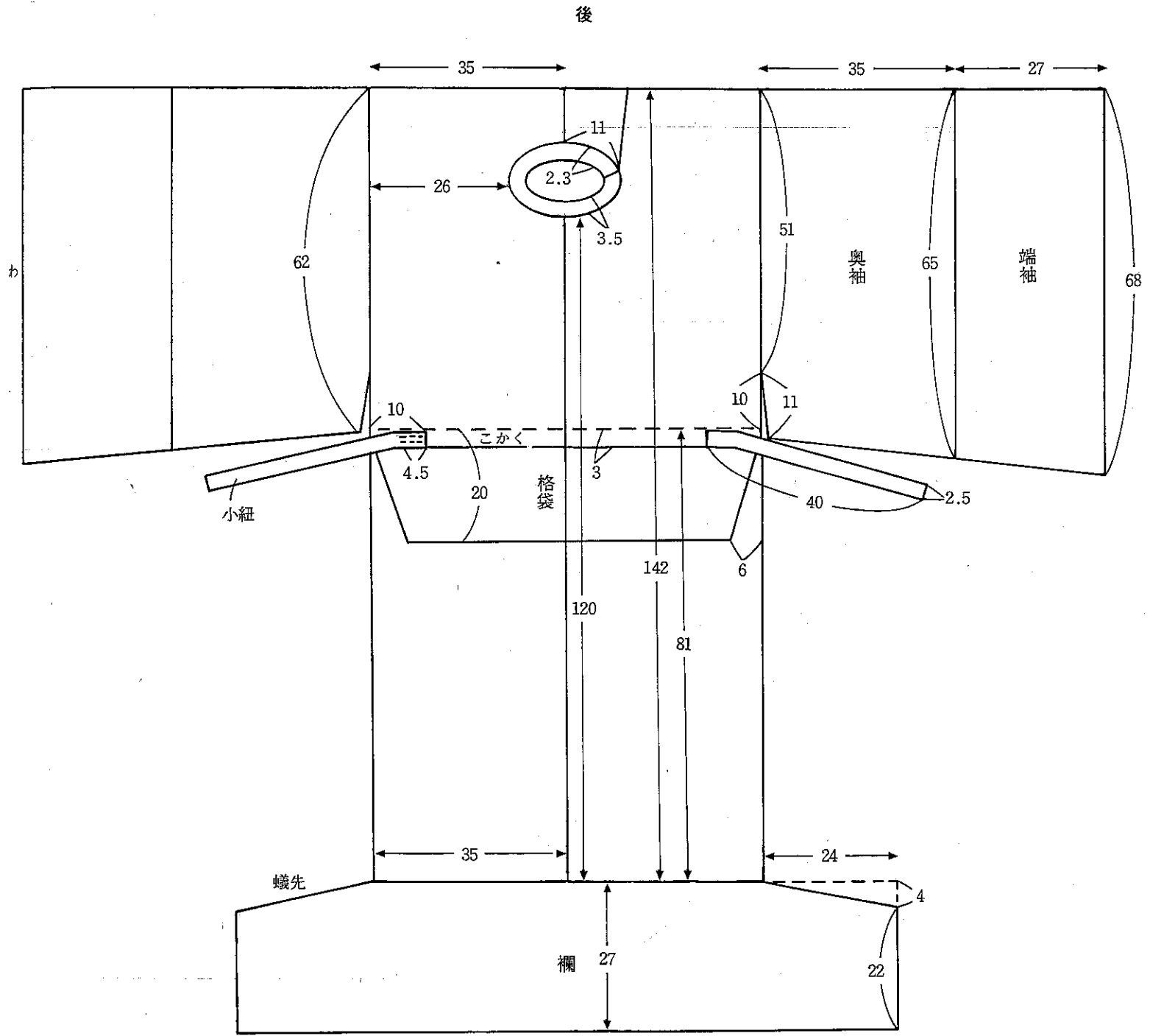
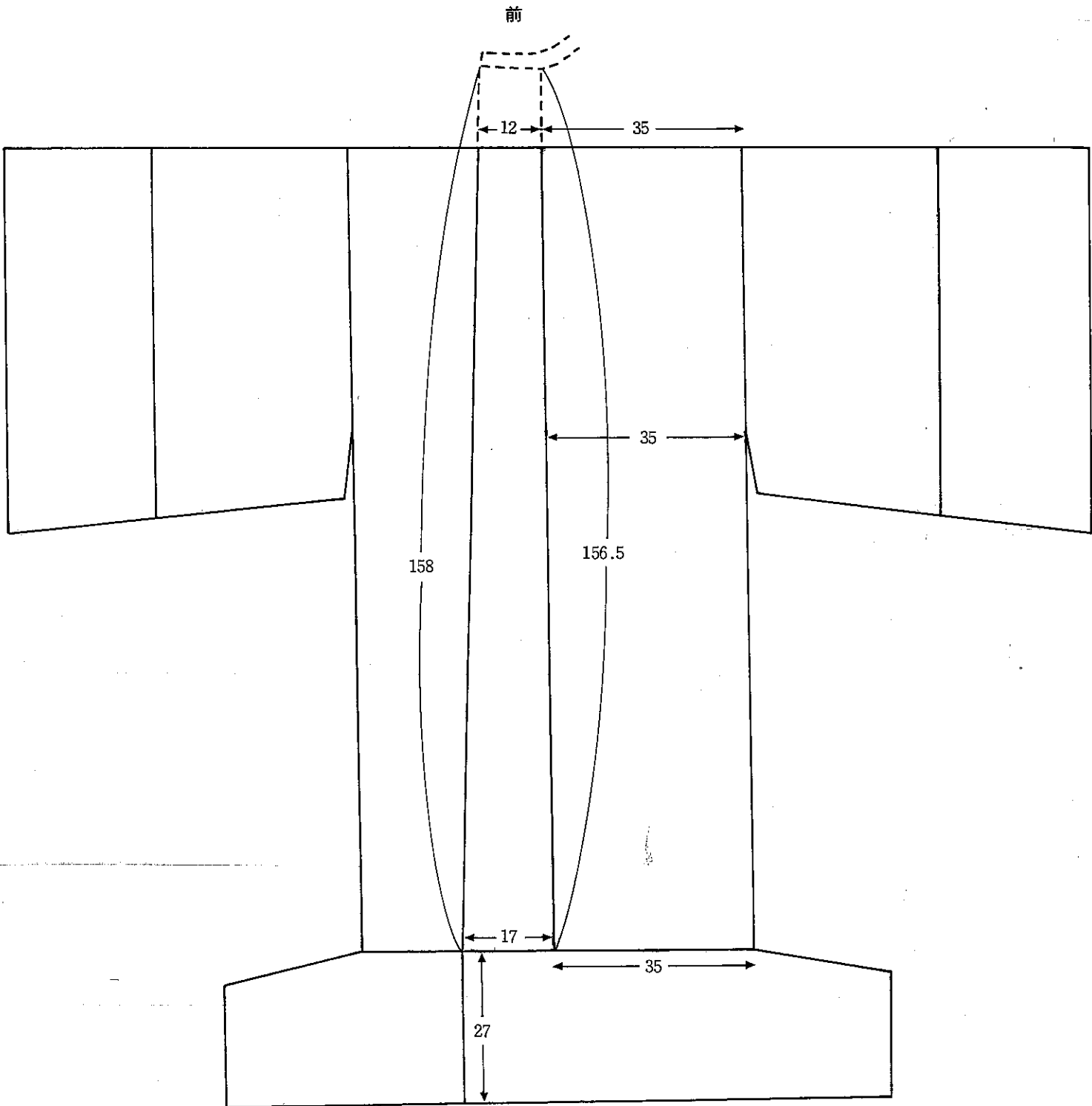


のうし
直衣

直衣は公家男子の社交服でもあり、また平常着でもあった。
形は束帯の袍と同じであるが、束帯の袍のように定まった色や文様はない。

この直衣は表裂には又木文白綾を、裏裂には袖および身頃の裏に萌黄平絹を、端袖、衿、欄には白平絹を使用する。

出来上り寸法
出来上り図に示す寸法のとおりである。

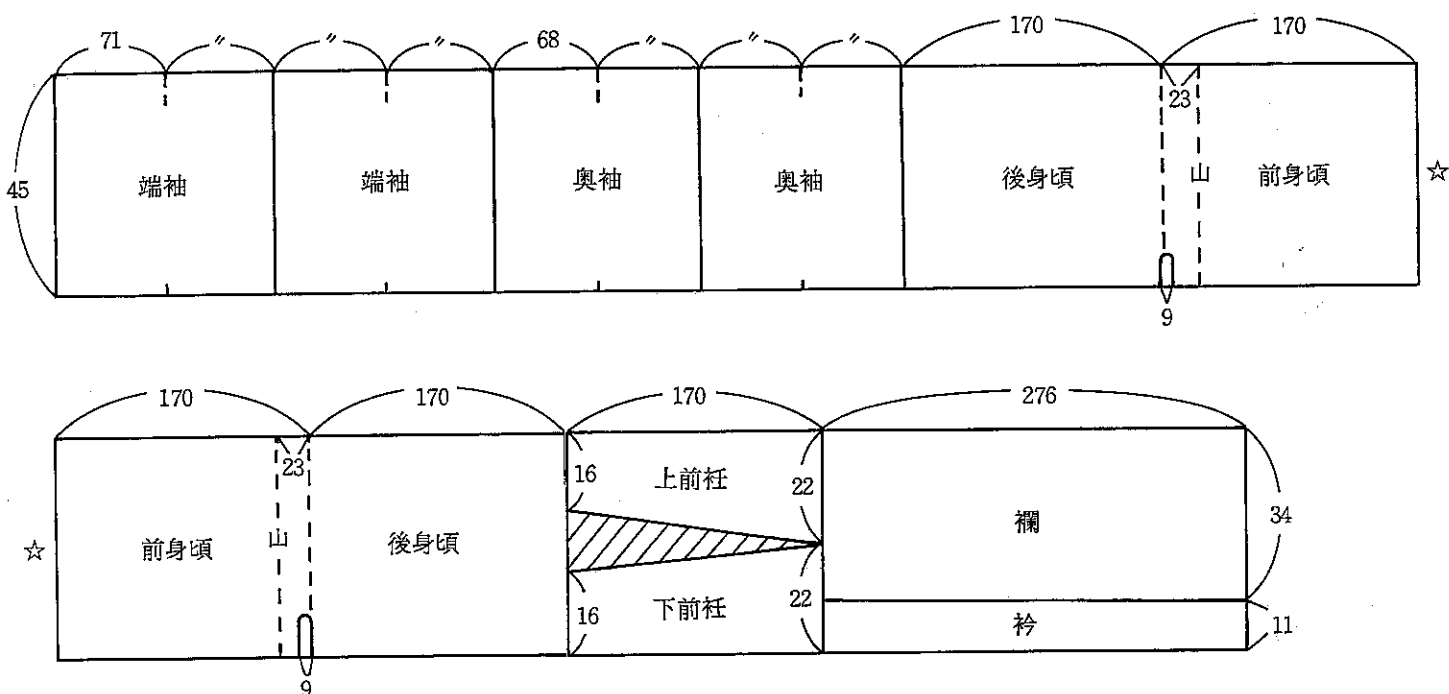


裁ち方

●表は幅45cm、総丈1,682cmを使用して、袖、端袖、身頃、頃を図のように裁ち、白平絹で端袖、衽、襷を図のように裁つ。

●裏は萌黄平絹で幅76cm、総丈822cmを使用して、袖、身

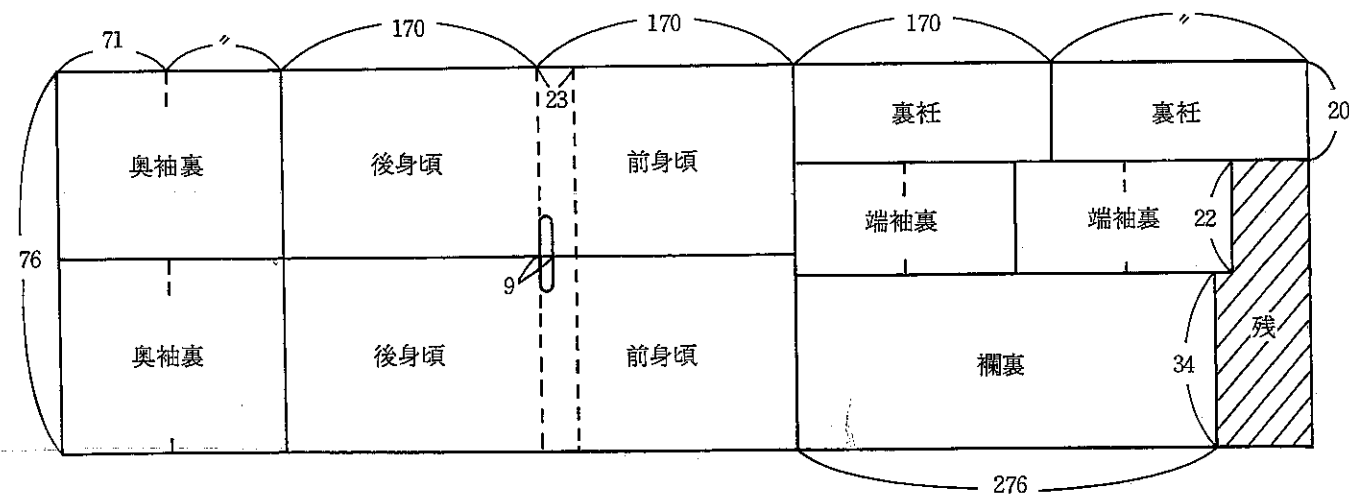
表布



$$\text{端袖丈} \times 4 + \text{奥袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 4 + \text{衽丈} + \text{襷丈} = \text{表総丈}$$

$$71 \times 4 + 68 \times 4 + 170 \times 4 + 170 + 276 = 1,682\text{cm}$$

裏布



$$(\text{奥袖丈} + \text{身丈} + \text{衽丈}) \times 2 = \text{裏総丈}$$

$$(71 + 170 + 170) \times 2 = 822\text{cm}$$

標つけ方

●表奥袖および裏奥袖を、図のように標をつける。

●表端袖、裏端袖を図のように標をつける。

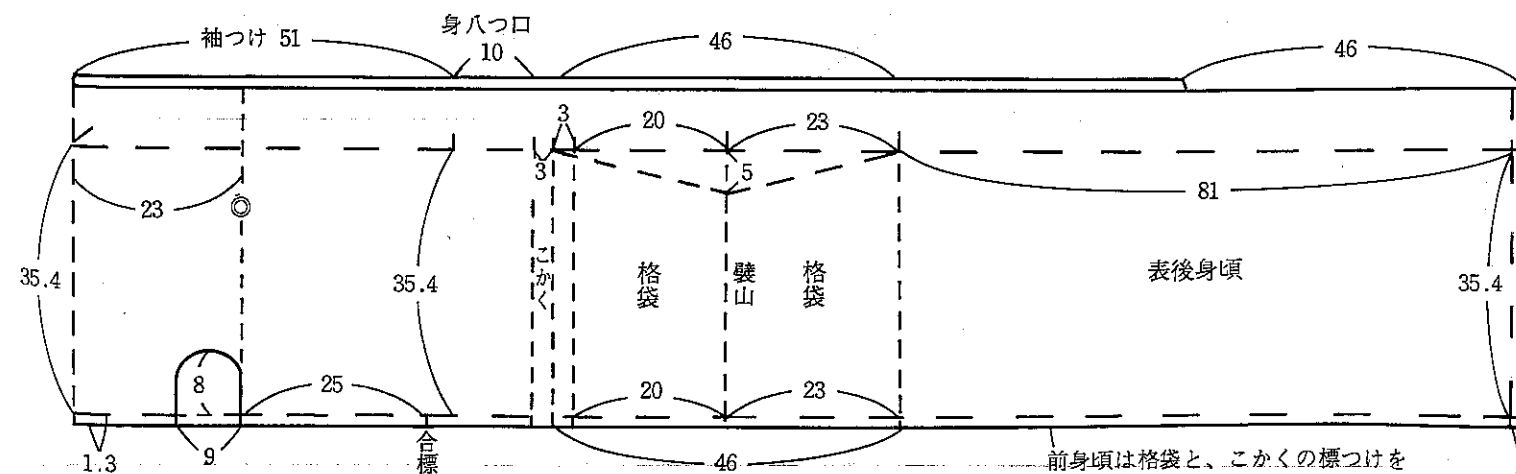
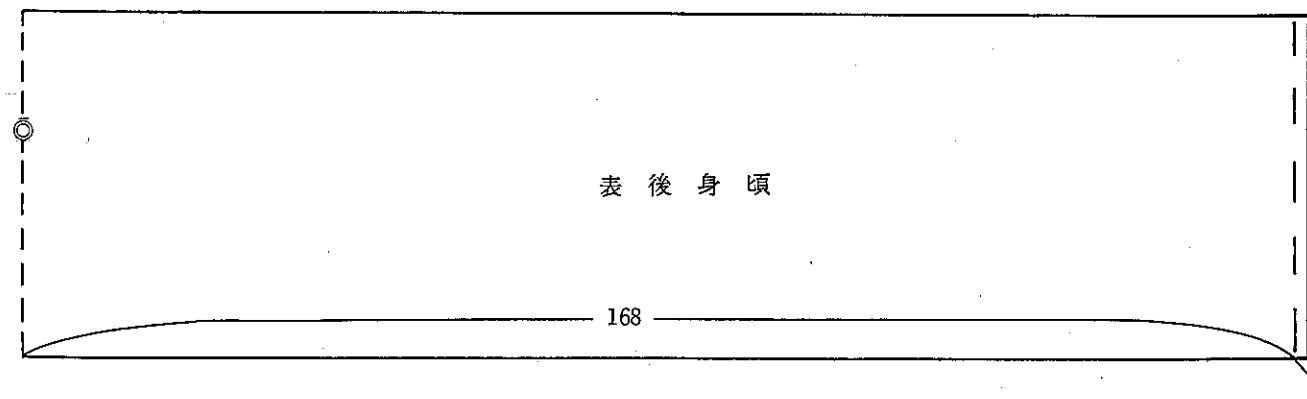
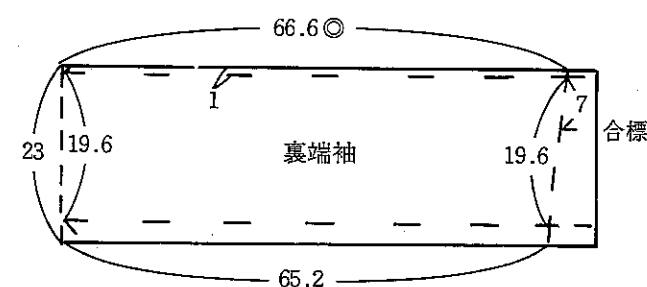
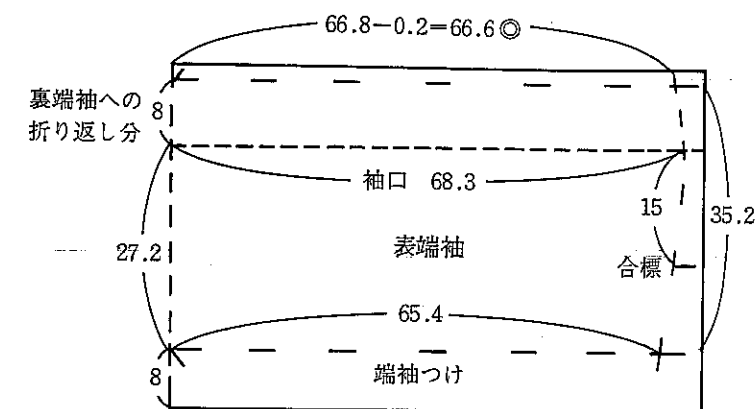
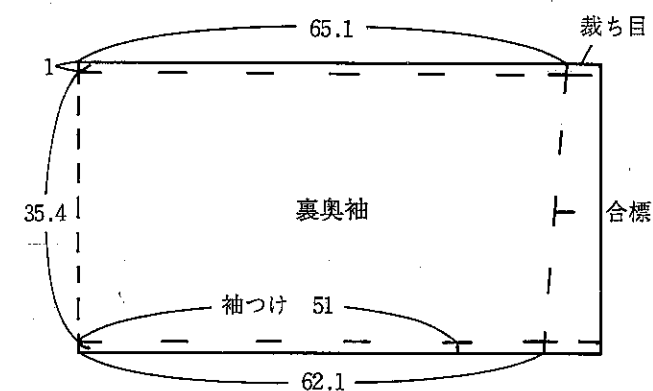
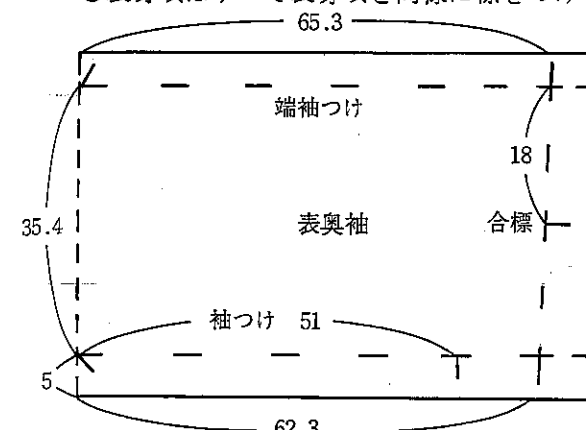
●身頃は表身頃を図のように標をつける。

●裏身頃はすべて表身頃と同様に標をつける。

●衽は表裏四枚一緒に重ねて標す。

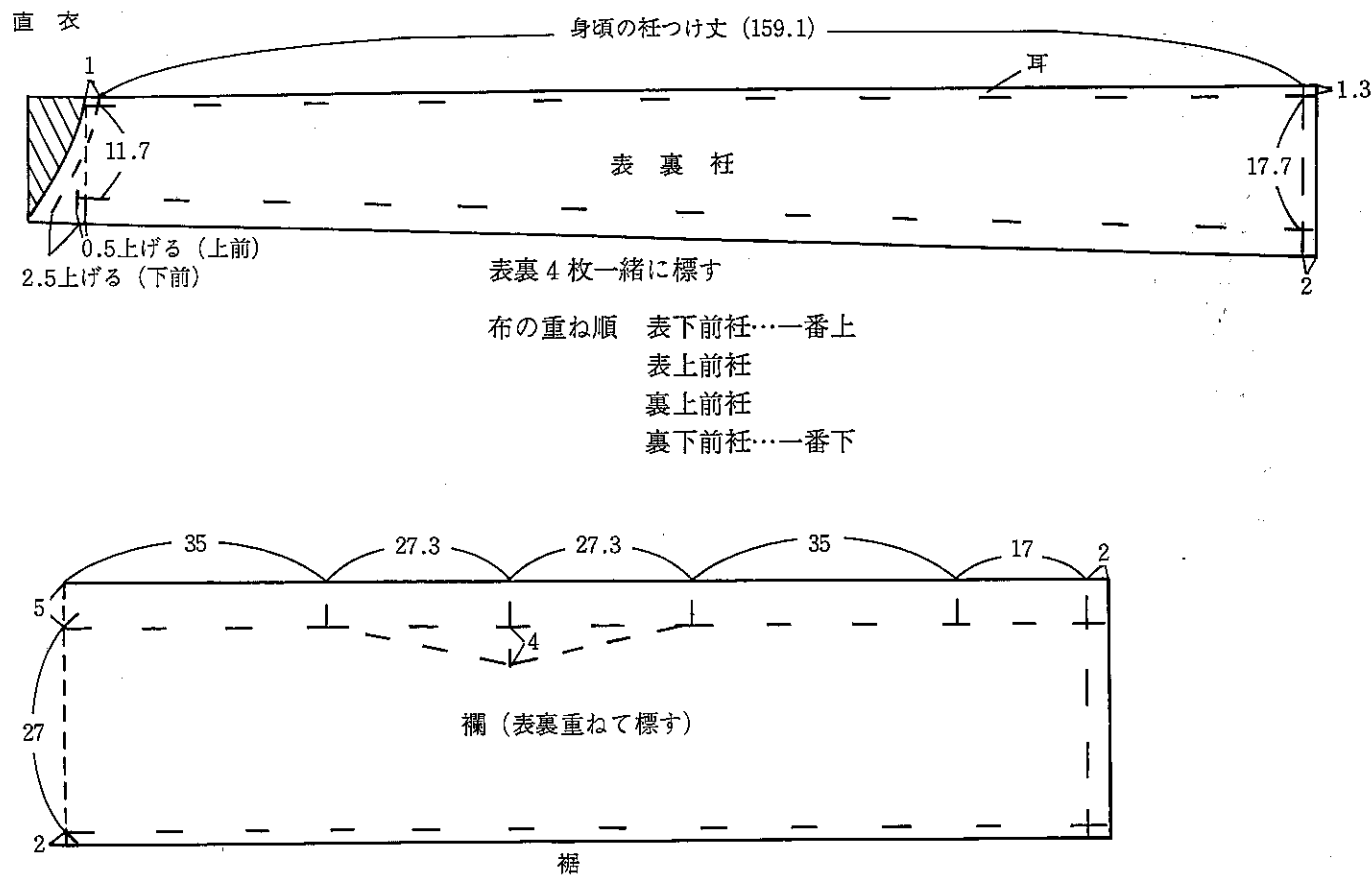
●重ね方は、下側より裏下前衽、裏上前衽、表上前衽、表下前衽の順に重ねる。

●襷は表裏重ねて、図のように標をつける。



裏身頃の標つけは、表身頃と同様にする。

前身頃は格袋と、こかくの標つけを除く他はすべて後身頃と同様に標す



縫い方

- 縫い糸は白色Z撚り絹糸を使用する。
- 針目は、四つ縫いは0.7~0.8cm、その他は0.5~0.6cmで縫う。

袖

- 表端袖と裏端袖を縫い合わせ、きせをかけて縫い代は表端袖の袖口の方へ折る。
- その他、袖の縫い方は東帯の袍と同様である。

身頃

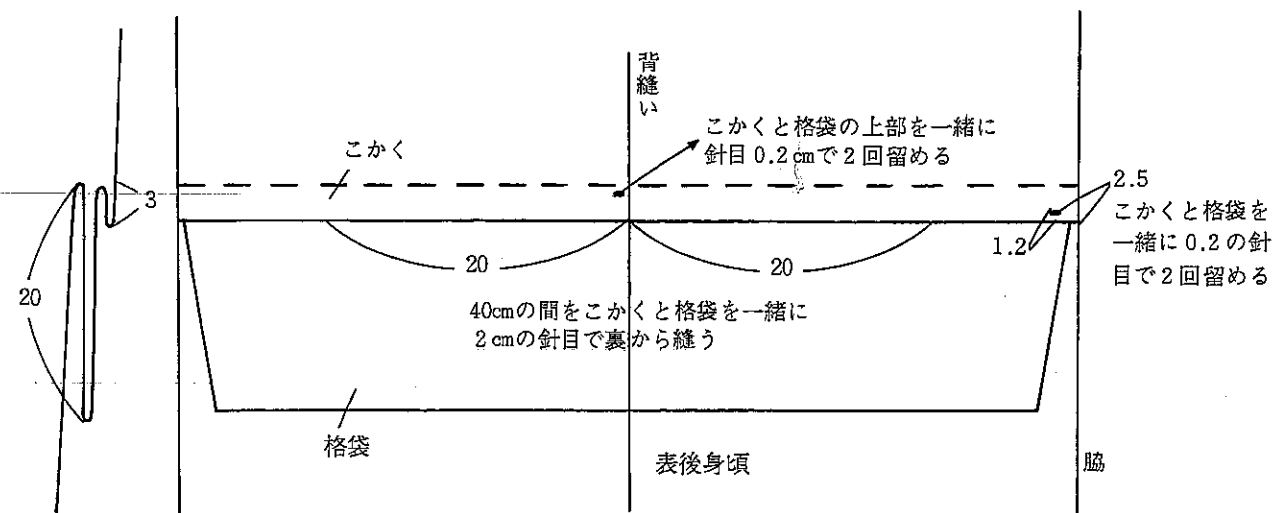
- 背縫い、脇縫い、衤つけ、欄の縫い方およびつけ方、

蟻先、袖つけ、衤の作り方およびつけ方、とんぼ頭、受緒の作り方およびつけ方は、すべて東帯の袍の縫い方と同様にする。

こかく、格袋、小紐は次のようにする。

- 格袋を標どおりに裏から縫い、格袋を表に出して、折りは下方へ折り返す。
- 脇縫いを東帯の袍と同様四つ縫いにする。
- こかくは、表側から3cmの深さにつまんでおく。
- 格袋とこかくの留め方は、図のようにこかくの折り山のところを、裏側より格袋と一緒に針目2cmで、背から左右

格袋とこかくの留め方



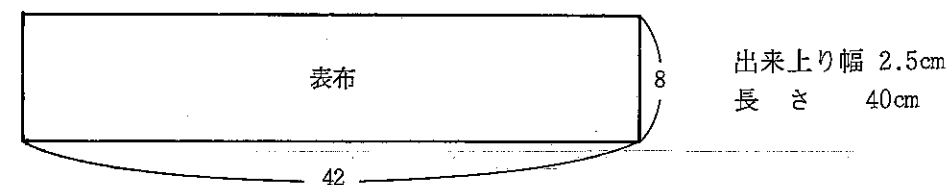
20cmずつ縫う。

- 背および両端を、図のようにこかくと格袋の上部と一緒に、針目0.2cmで二回留める。

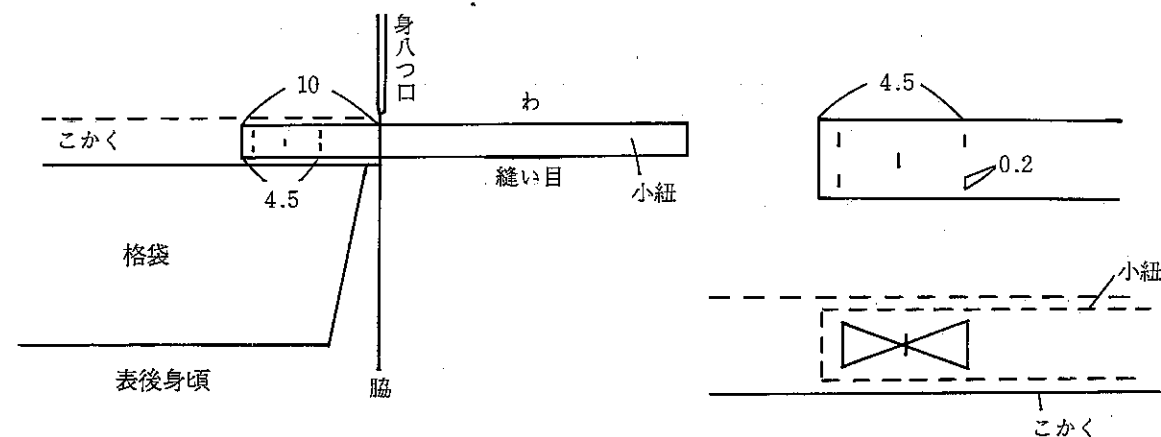
- 小紐は、表布で、上り幅2.5cm、丈40cmに作る。

- つけ方は、図の位置に当て、図のような針目で、こかくと小紐をすくってとじつける。

小紐布



小紐のつけ方



童水干

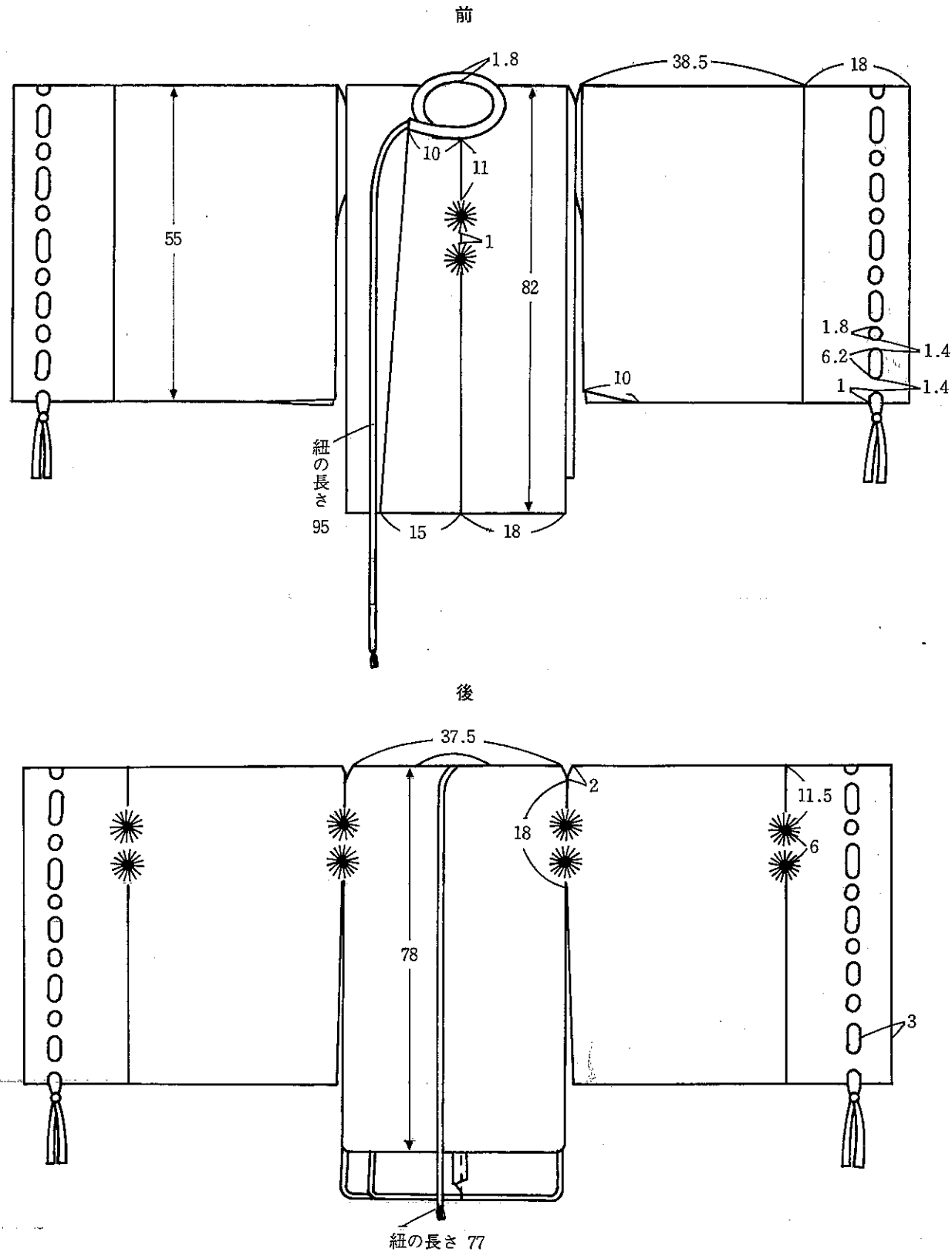
水干は狩衣の一種であるが、狩衣よりさらに略式の実用着で、鎌倉時代の武家が一般に着用したものである。

形の特長は、袖つけ等に菊織がつき、衿を留める紐の

一つが後身頃の中央についていることである。

袴は指貫の短い葛袴をつけた。

童水干は、供をする子供の着用する水干である。

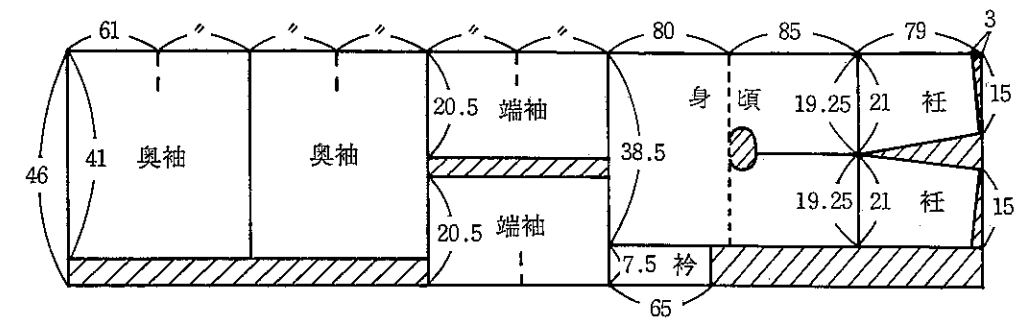


出来上り寸法

出来上り図の寸法通りである。

裁ち方

●総丈604cm幅46cmにて、裁ち方図のように裁ち切る。



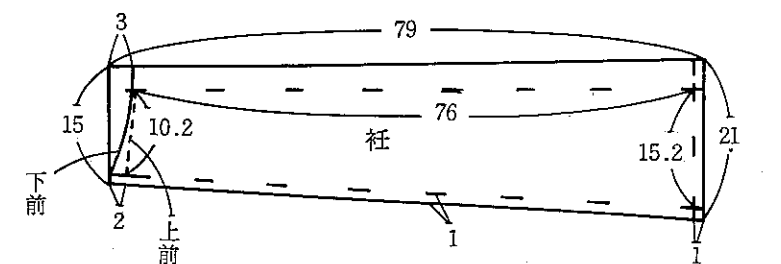
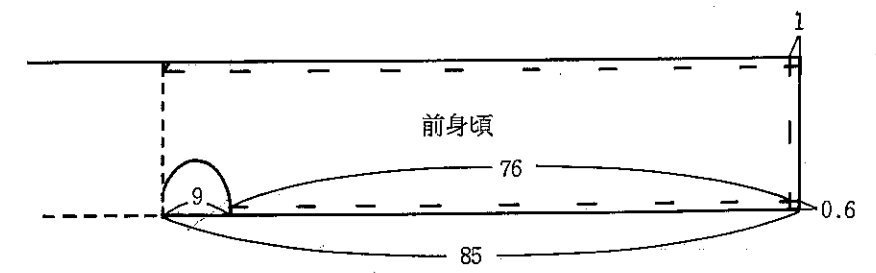
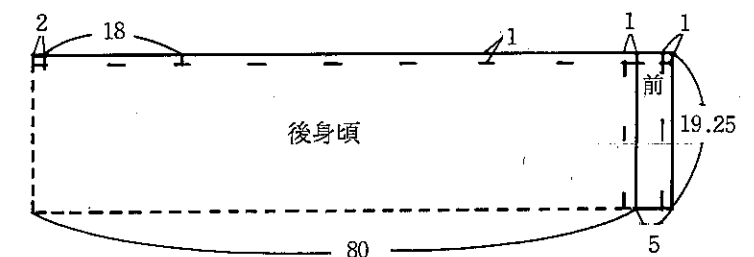
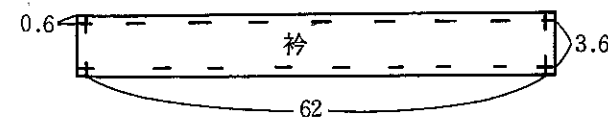
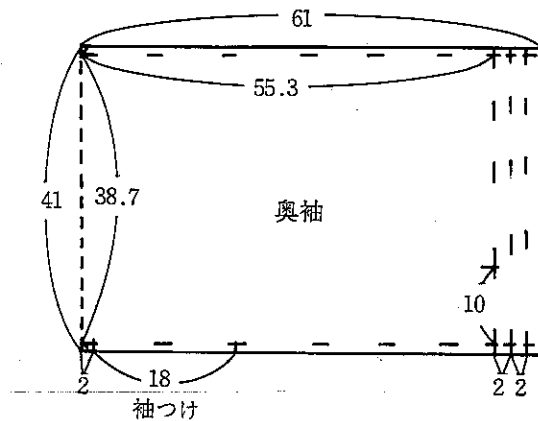
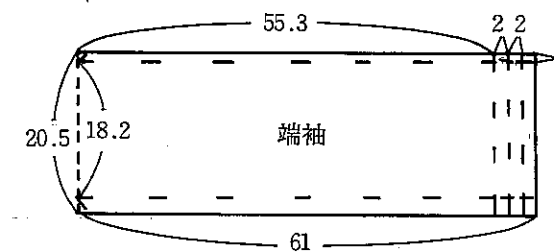
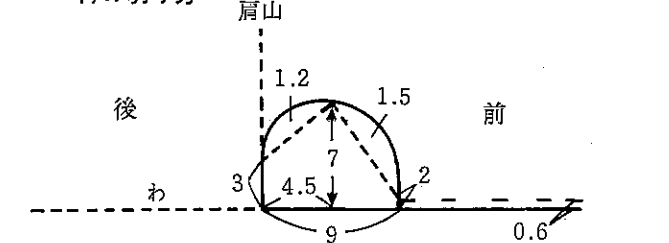
$$\begin{aligned} & \text{袖丈} \times 6 + \text{後丈} + \text{前丈} + \text{袴丈} = \text{総丈} \\ & 60 \times 6 + 80 + 85 + 79 = 604\text{cm} \end{aligned}$$

標つけ方

●衿割りの型紙を図のように裁つ。

●端袖、奥袖、身頃、袴、衿の順に図のように標つけをする。

衿の割り方



縫い方

- 縫い糸は紅色S撚り絹糸を使う。
- 袖口、振り、脇、裾、衤裾は0.2cmの出来上り幅にのりをつけてひねる。なお、ひねり方は右から左へと進む。

袖

- 端袖と奥袖を標どおり0.5cmの針目で縫い合わせ、縫い代は0.2cmのきせをかけて端袖の方へ折る。

- 袖底は丈標どおり待針を打ち、縫い込みの部分は、外袖と内袖の縫い代を別々に折る。

- 端を三角に折ってから図のように折り、袖底縫い是一緒に縫う。

- 折山から0.1cm入ったところを0.8cmの針目で、袖底の明き止まりまで縫う。

- 明き止まりから振りまでのところは、表と裏へ一針ずつ小針に出し、間隔は2cm位とする。

身頃

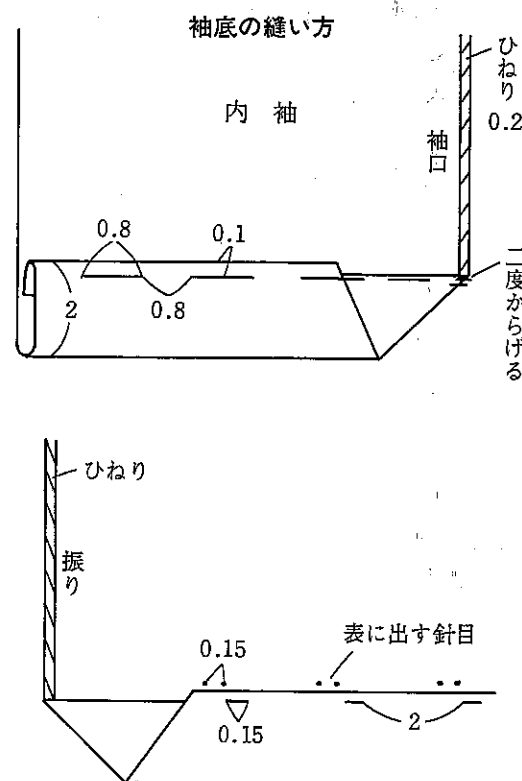
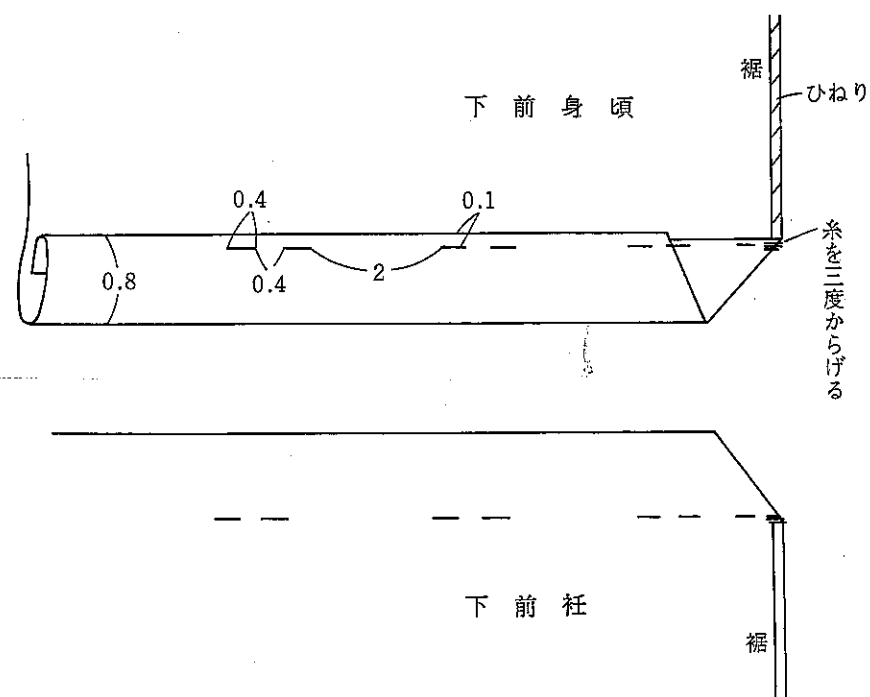
- 衤つけは身頃と衤の標を合わせて、衤の縫い代で身頃の縫い代を0.8cmの出来上り幅にくるみ、裾を三角に折って、針目0.4cm、間隔2cmで図のような針目で衤つけをする。

衤つけ

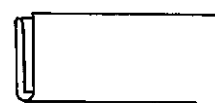
- 和紙を幅9cm長さ62cmに裁ち、これを3cmの幅に三つ折りにし、衤布でこれを包み、図のように縫い代はのりで芯に貼りつける。

- 衤先は内側へ折っておく。

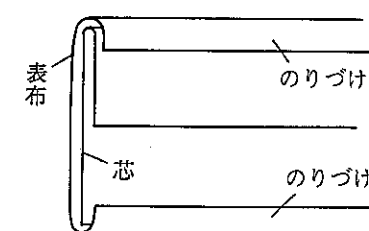
衤のつけ方



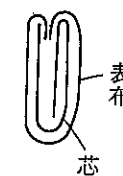
衤芯の折り方



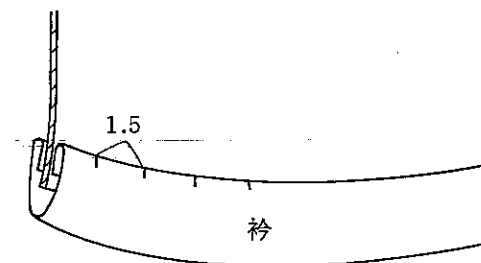
衤の折り方



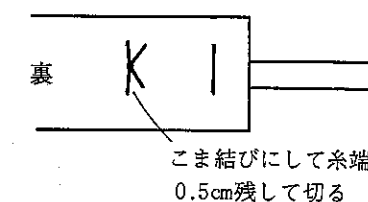
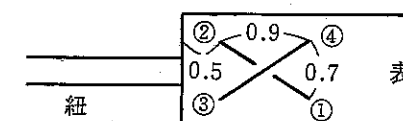
断面



衤のつけ方



紐のつけ方



- つぎに衤で身頃をはさんで、1.5cmの間隔で表衤をすくってまつりながら、表裏の衤を図のようにつける。このとき背の中央に朱色の打紐(80cm)を衤に3cmはさんでつける。

- 上前衤先の紐のつけ方は、朱色の打紐(100cm)を衤先に5cmさし込んで、白絹糸を三本撚り合わせて図のようにつける。

袖つけ

- 身頃と袖を標どおり合わせ、針目0.5cmで縫う。
- 縫い始め縫い終りとも二回からげて留める。
- 0.2cmのきせをかけて、縫い代は袖の方へ返す。

菊綴のつけ方

- 赤色太撚り絹糸二本で、きせ山を0.5cmの針目で縦にすくって菊綴をつけ、表布と菊綴の間でこま結びをして、糸端を0.8cm残して切る。

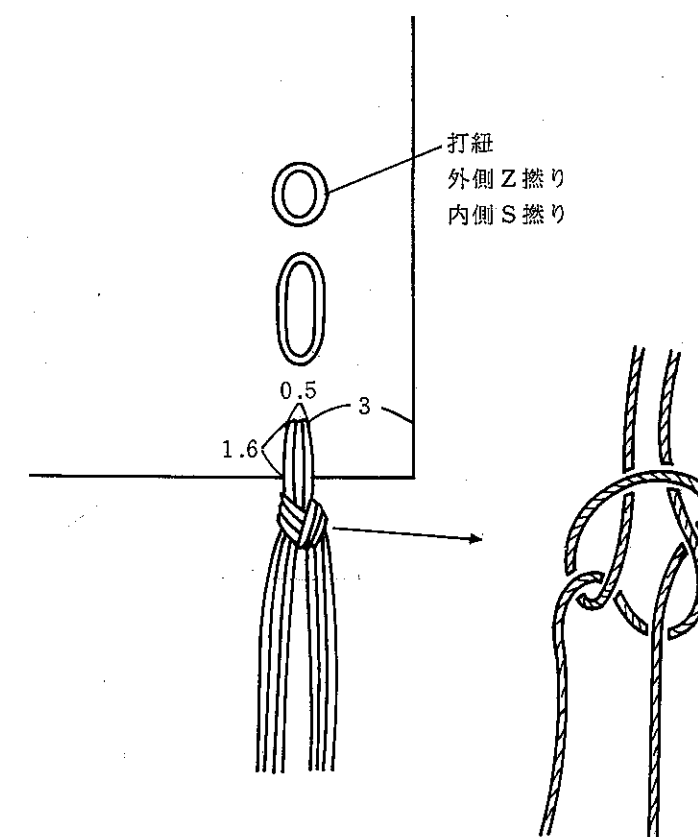
- 袖つけ、端袖つけ、衤つけのところに出来上り図の寸法の位置にとじつける。

袖露のつけ方

- 打紐は白色Z撚り160cm、S撚り160cmを使用して、Z撚りを外側に、S撚りを内側にして二本を平らに、図の位置に並べてつける。

- 紐端は両面同じになるように、図のように結ぶ。

袖露のつけ方

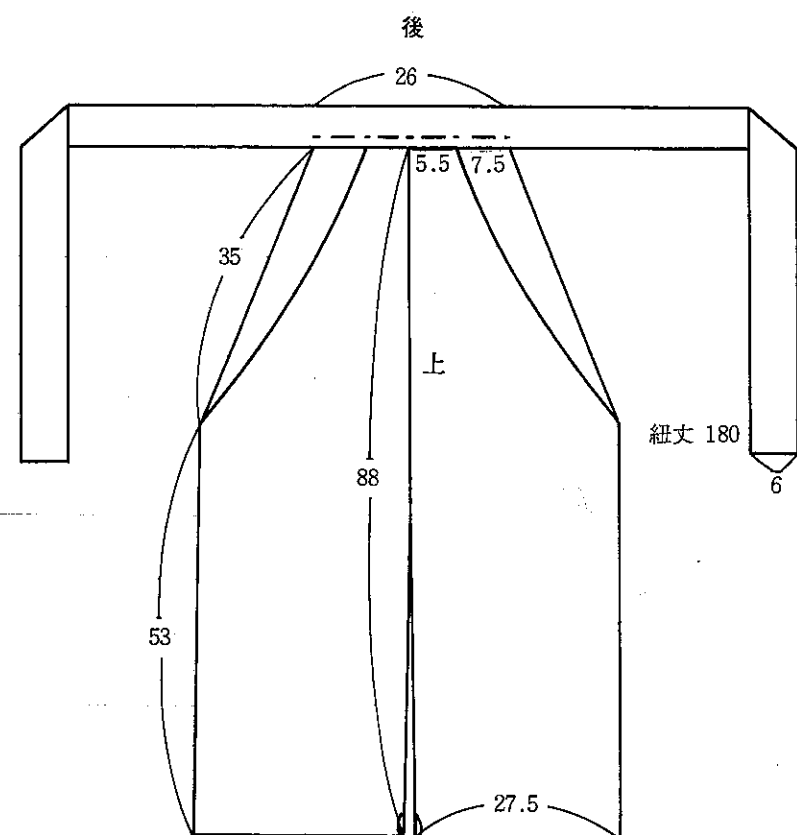
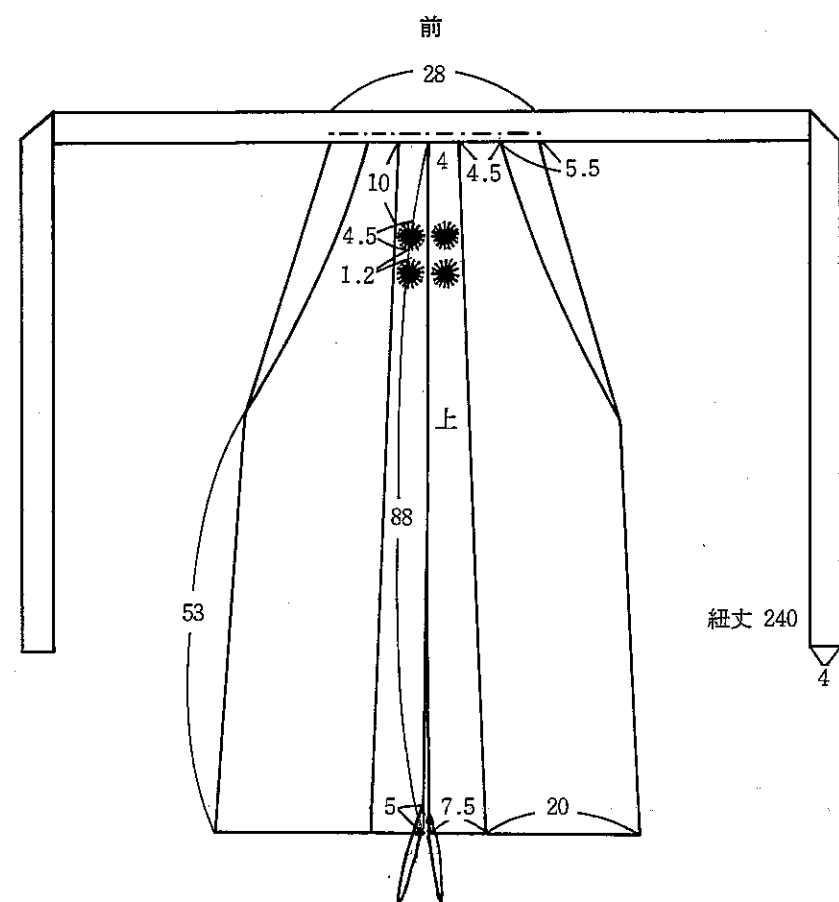


さしぬき
童水干用の指貫

表はぼかし染の平絹を、裏には白生絹を使用し、袷仕立てにする。鬚襷、裾は括り緒を用いる。

出来上がり寸法

紐下88cm、紐つけ前28cm、後26cm、その他は出来上り
図の寸法通りである。

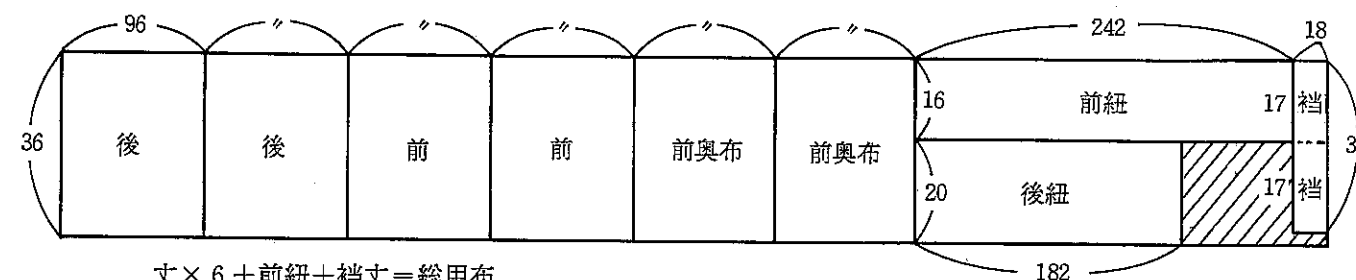


裁ち方

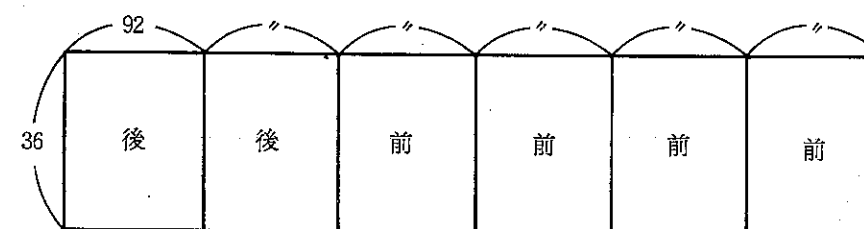
●表は幅36cmの平絹を836cm使用して、裁ち方図のように裁つ。

●裏は幅36cmの白生絹を552cm使用して、裁ち方図のように裁ち切る。

表 布

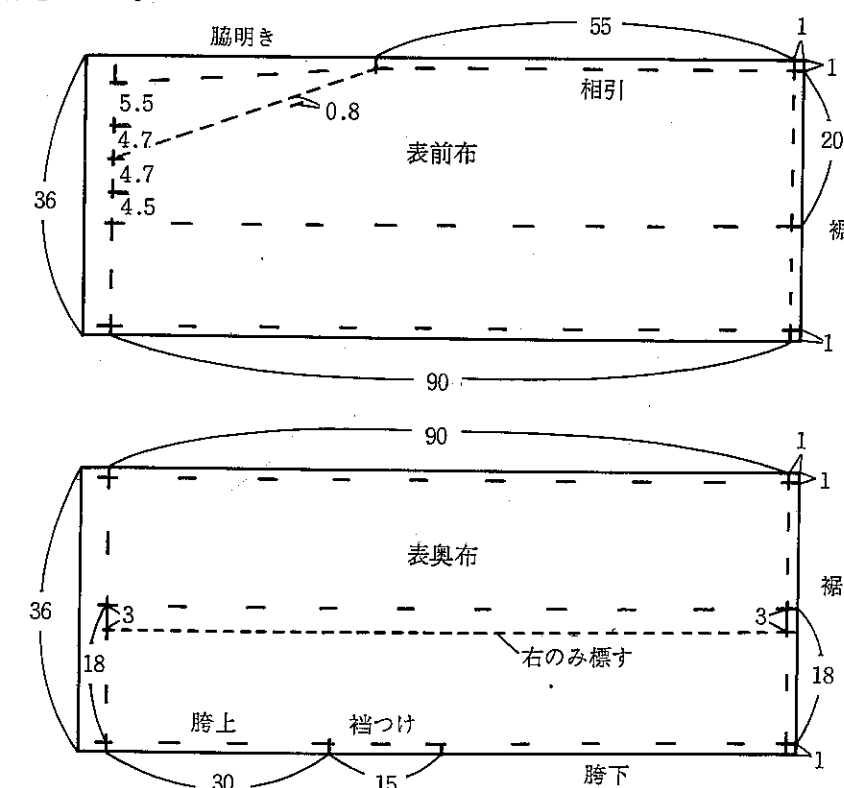
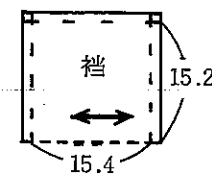

$$96 \times 6 + 242 + 18 = 836 \text{cm}$$

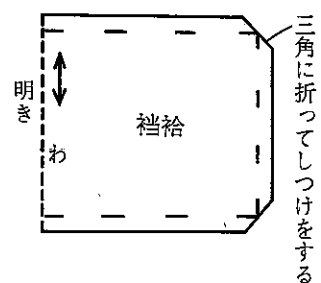
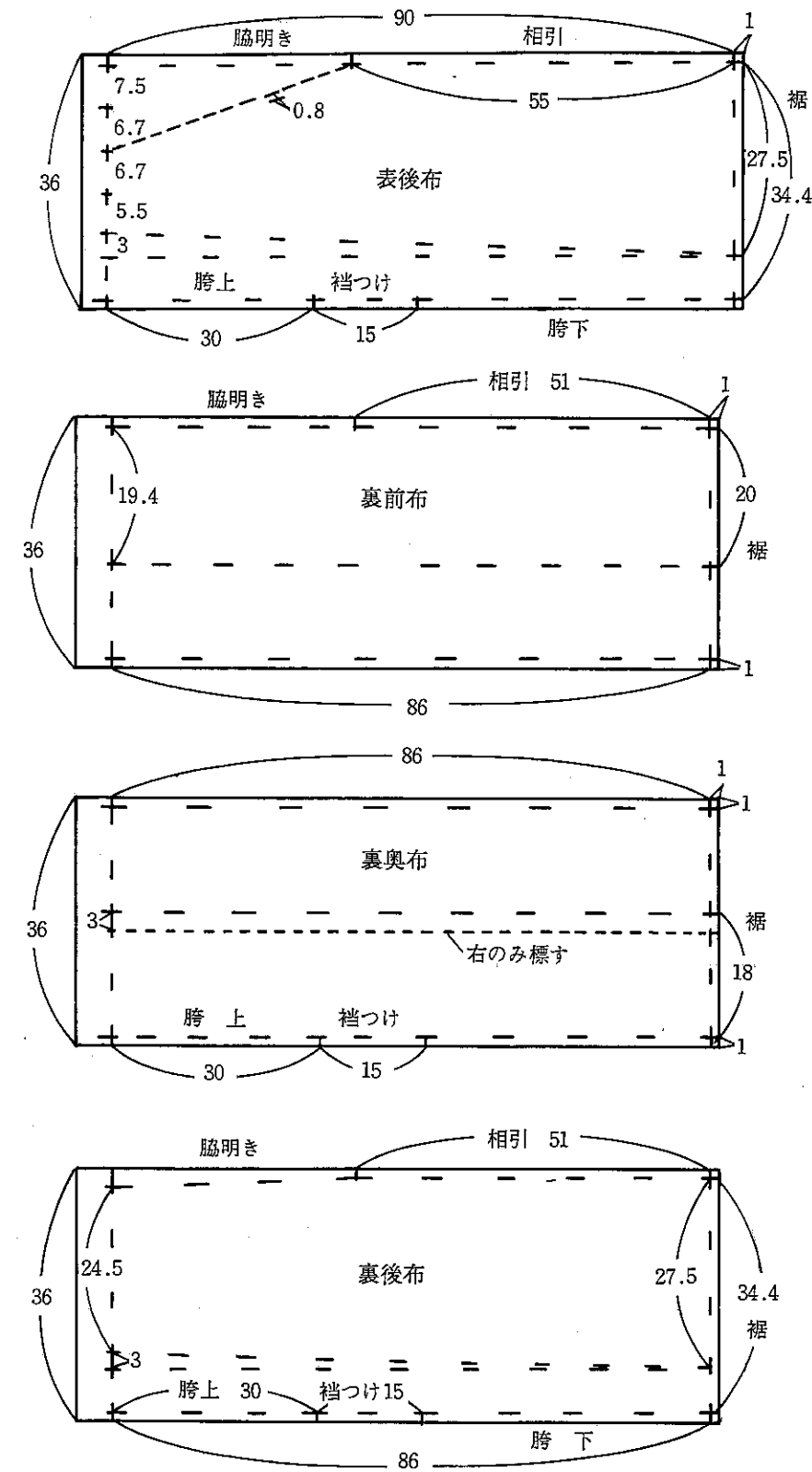
裏 布


$$92 \times 6 = 552 \text{ cm}$$

標つけ方

●表布および裏布を、それぞれ図のように標をつける。





縫い方

●縫い糸は白色S撚り絹糸を使用し、針目は0.5cm、縫い目には0.2cmのせきをかける。

脇明き

●後脇明きは、表布は標より0.2cm出し、裏布は0.2cmつめて待針を打ち、縫い合わせ、縫い代は裏布の方へ折る。

●表へ返して表布が0.2cm見返しになるようにする。

裾口

●表裏の布を標どおりに縫い合わせ、縫い代は裏の方へ折り返し、表へ返して針目0.2cm、間隔2cmでかくしじつけをかける。表が2cm見返るようにする。

●脇下の部分は、図のように前後の裾口から4cm上まで標どおりに裏側へ折って、針目0.2cm、間隔0.5cmで伏せ縫いをする。

脇

●脇布の幅を二つ折りにして、図のように2ヶ所の角を三角に折って三方をしつけでとじておく。

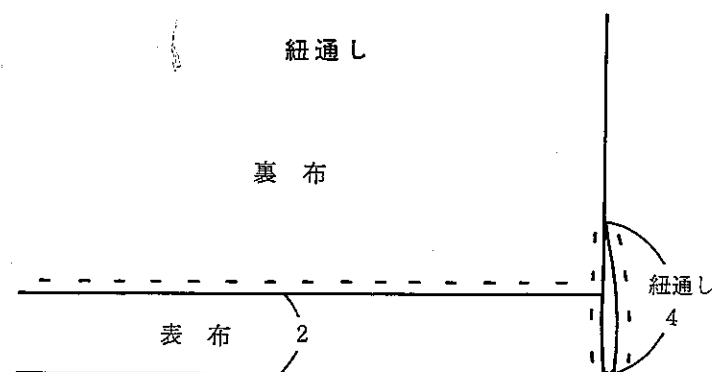
●わのところが明きの部分になる。

前後の布の縫い合わせ

●右脚になる方の後布の表裏で、脇をはさんで、四つ縫いで脇付けをする。

●後の脇上は左脚の表裏で右脚の表裏をはさみ、続けて脇もはさんで、脇付けのところま

紐通し



で四つ縫いをする。

●縫い代は左脚へ折り返す。

●左脚になる方の奥布の表裏で脇をはさみ、さらに左脚の脇下の表裏で後左脚の表裏をはさんで、脇付けに続けて紐通しのところまで四つ縫いをする。

●縫い代は奥布に返す。

●前奥布の前明き部分を表裏縫い合わせておく。

●前の脇上は、右脚の表裏で左脚の脇上の表裏をはさんで四つ縫いをする。

●脇下は、前右脚奥布の表裏で後右脚の表裏をはさんで四つ縫いをする。

●縫い代はいずれも奥布の方へ折る。

●左脚の奥布で前布をはさみ四つ縫いをする。このとき、裾口4cmの間は表裏別々に縫う。

●右脚も同様にする。

●相引は、前左脚の表裏で後左脚の表裏をはさみ四つ縫いをする。

●裾口より4cmの間は表裏別々に縫い、縫い代は前布に折る。

●脇明きの留めは前布の表、後布の表裏、前布の裏をすくって元に戻り結ぶ。

●前脇明きも後脇明きと同様に縫う。

●縫い合わせ順序は、縫い合わせ図のようにする。

前後脇のとり方

●前後の脇を標どおりに図のように折りたたみ、それぞれしつけで押さえておく。

笹襷のとり方

●笹襷を形良く折り、大針5cm、小針0.4cmとして表に二針出して留める。

紐

●後紐は幅6cm、丈180cmの出来上りに折り、0.5cmの針目でくける。なお紐の中心から左右それぞれ18cmの間はくけ残しておく。

●前紐は幅4cm、丈240cmの出来上りに折り、0.5cmの針目でくけ、後紐と同様に中心をくけ残す。

●薄手の張子紙を後紐分として幅12cm、丈30cm、前紐分として8cm、丈37cmに裁ち、表側に西の内を張る。

●紐幅の縫い代はこの張子紙に貼っておく。

上刺し

●紐の張子紙のところへ、白の打紐S撚りとZ撚りを二本一緒に、紐の表側に図のように上刺しを先にしておく。

●小針を表に五針出す。このとき、中央の針目は中心の襷山に出すようにする。前後とも同様にする。

紐つけ

●紐で差貫の身をはさみ、表紐裏紐一緒につける。

●針目は先にしておいた上刺しの表側の小針のところへ、0.3cmほどの針目を出して返し針にして紐つけをする。

●裏紐のところは糸が長くわたる。

●前後とも同様にする。

菊綴

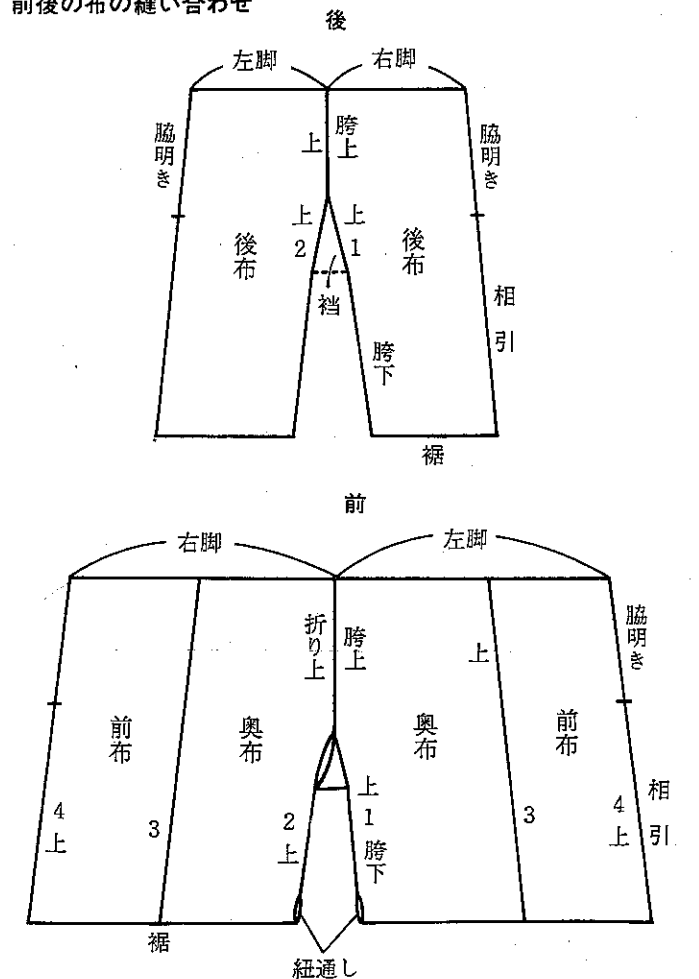
●赤の生糸を5.5cm幅の厚紙に巻きつけて後、厚紙をはずし、その糸の中心を二回からげて結び、両端の糸を切つて、丸く開く。

●つけ方は、出来上り図の位置に、太口白絹糸で縦に一針とじ、菊綴と表布との間で糸を結ぶ。

裾の括り緒

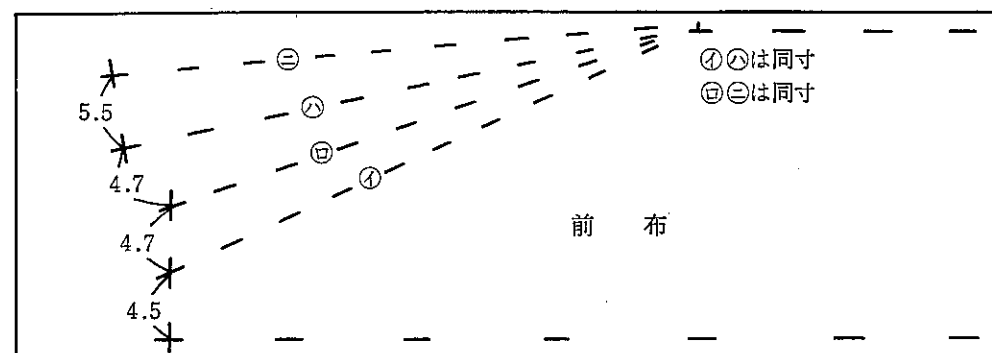
●緒は白色の打紐(丈110cm)を通して、先を結んでおく。

前後の布の縫い合わせ



笹襷の標つけ方

相 引

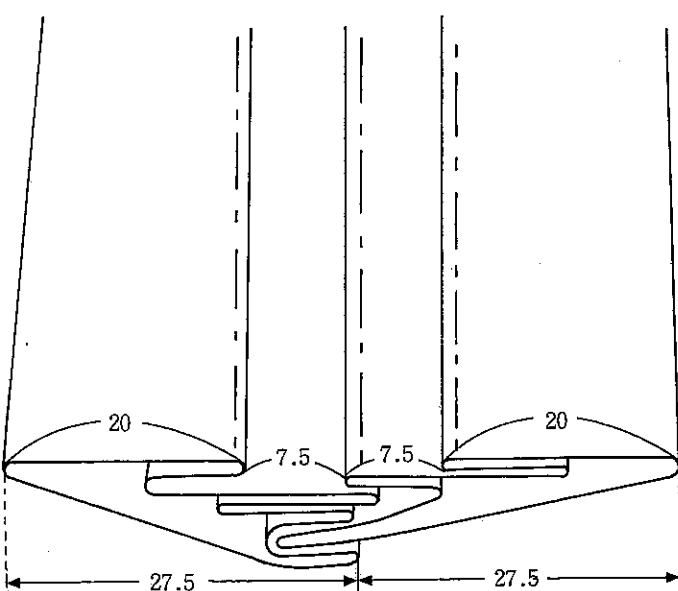


前 布

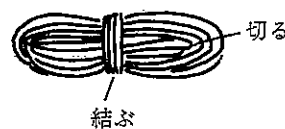
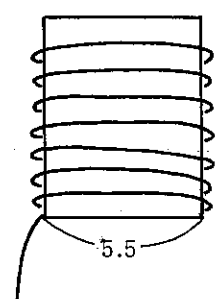
笹襷の折り方



襷取り



菊 織

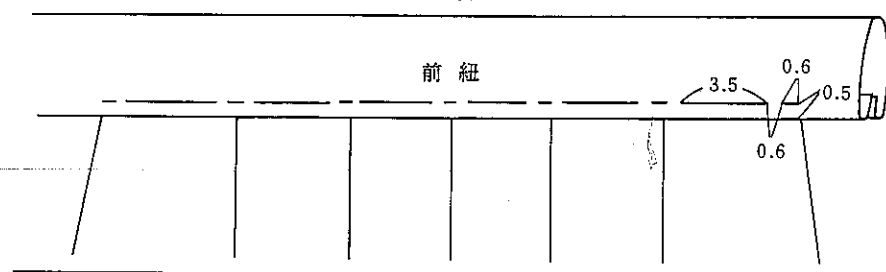


丸く開く

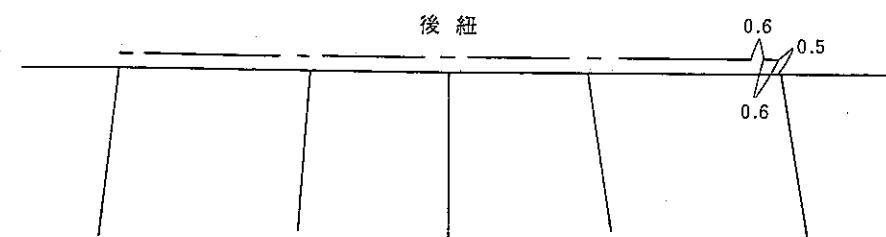


上 刺 し

前 紐

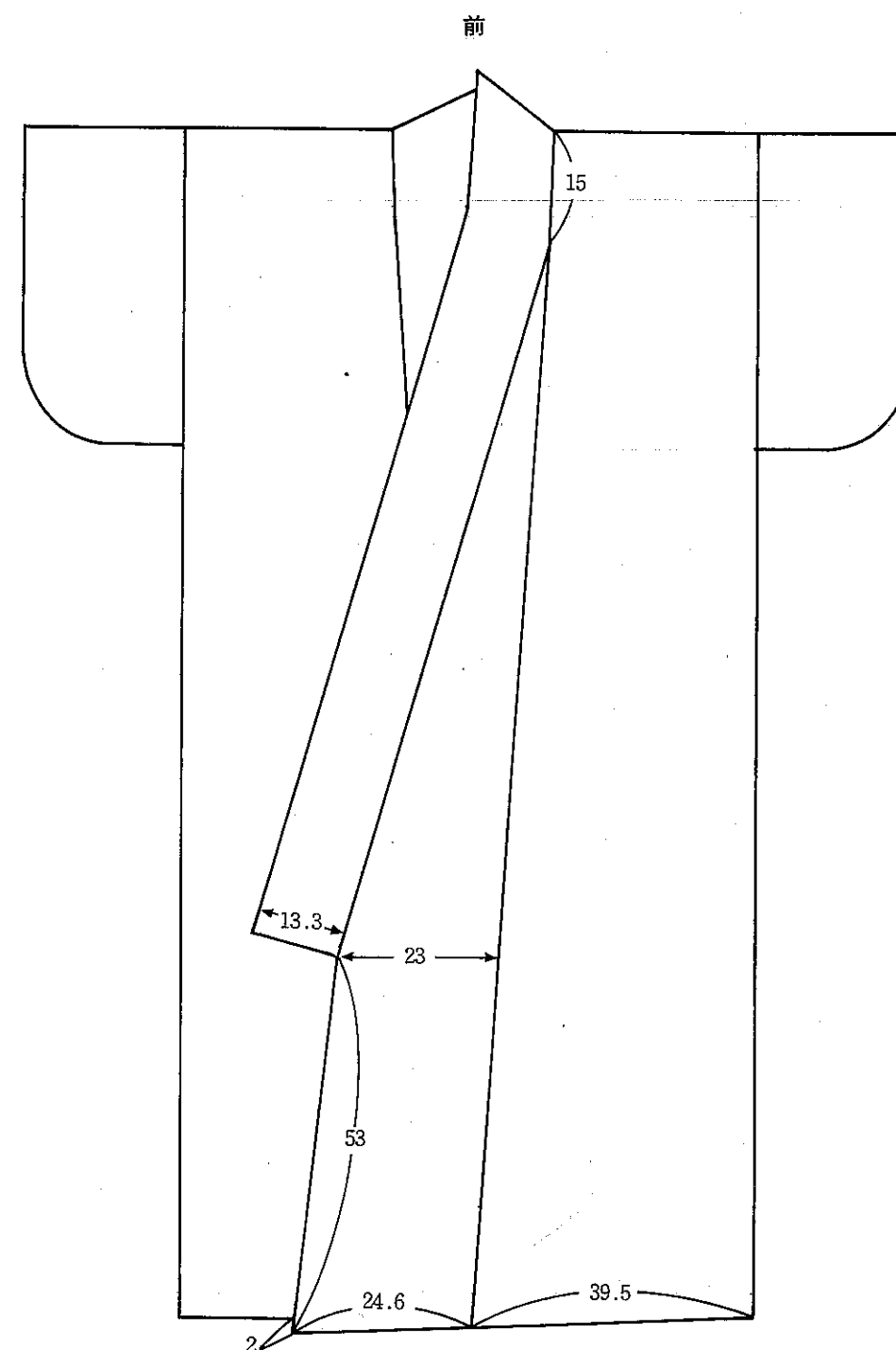


後 紐



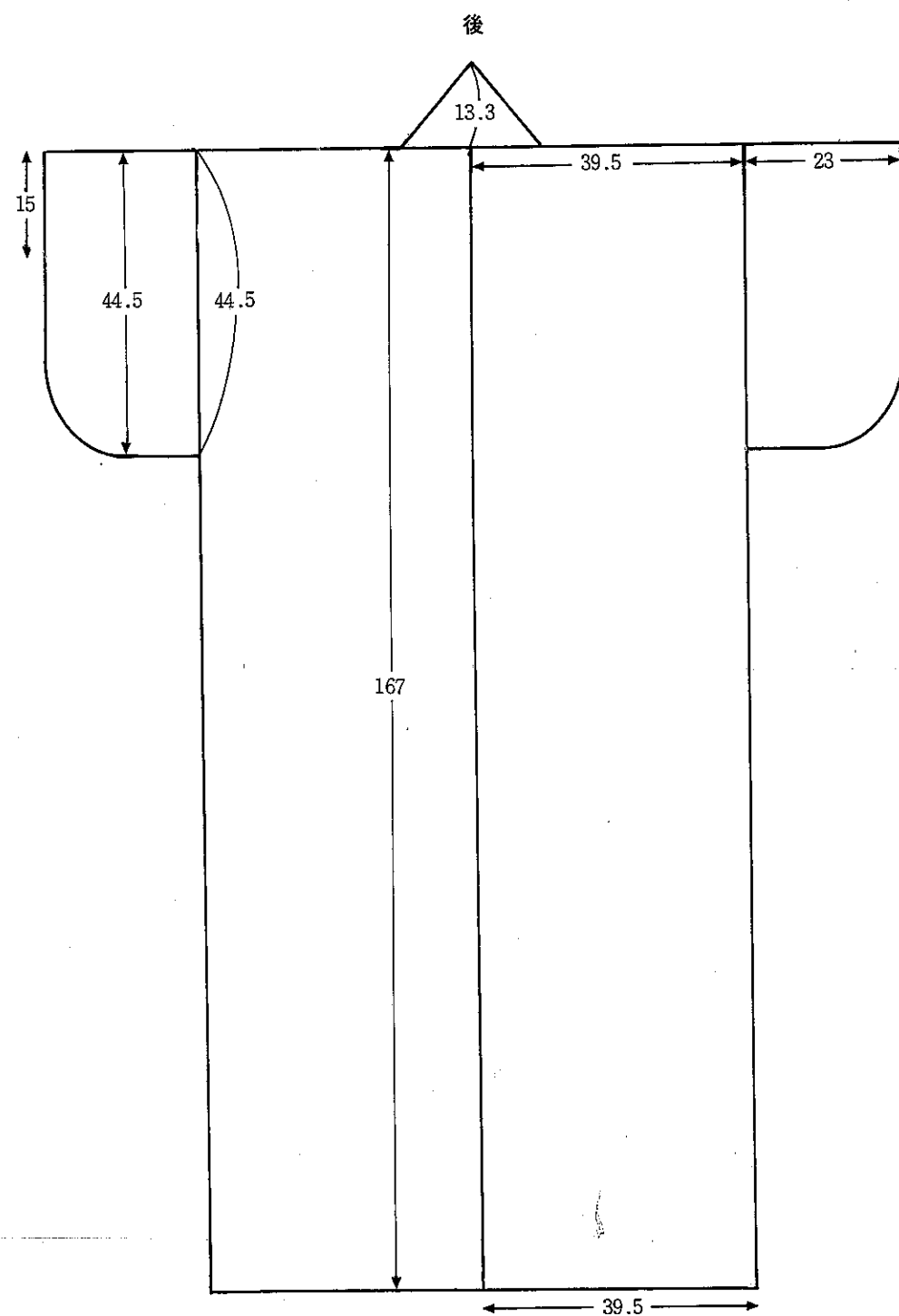
こうはくだん ぼたんからくさもんよううちかけ 紅白段牡丹唐草文様打掛

表地には紅白段牡丹唐草文様唐織を使用し、裏地には紅平絹を使用して、桃山時代の遺品の寸法と縫い代を参考にして仕立てたものである。



出来上り寸法

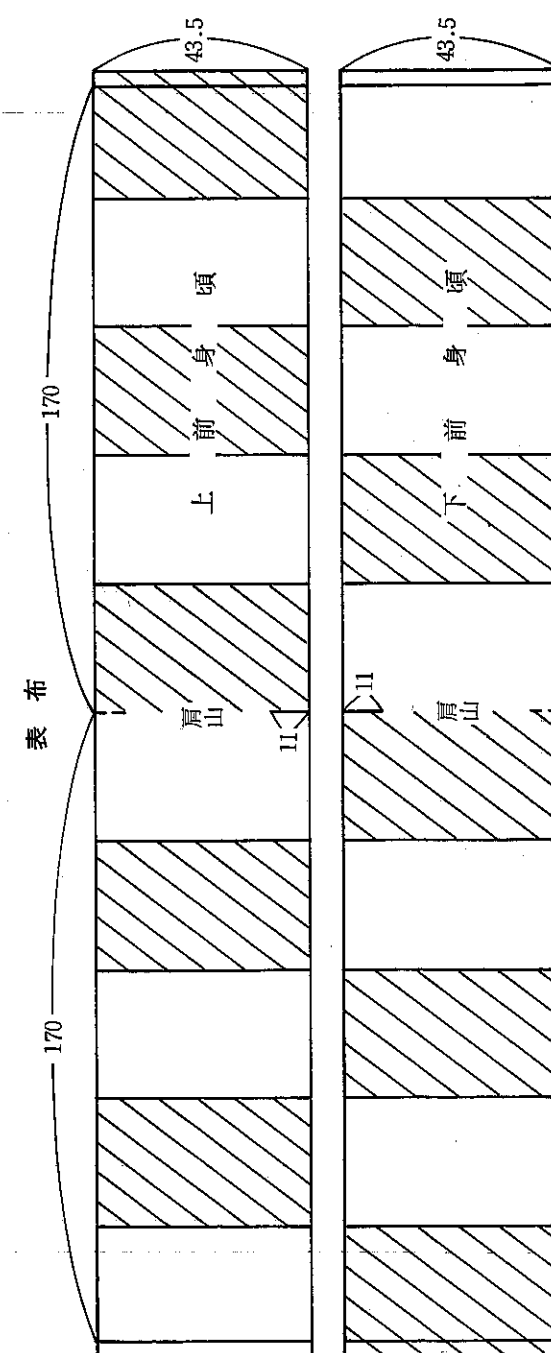
袖丈44.5cm、身丈167cm、裾62.5cm、その他は出来上り
図の寸法どおりである。



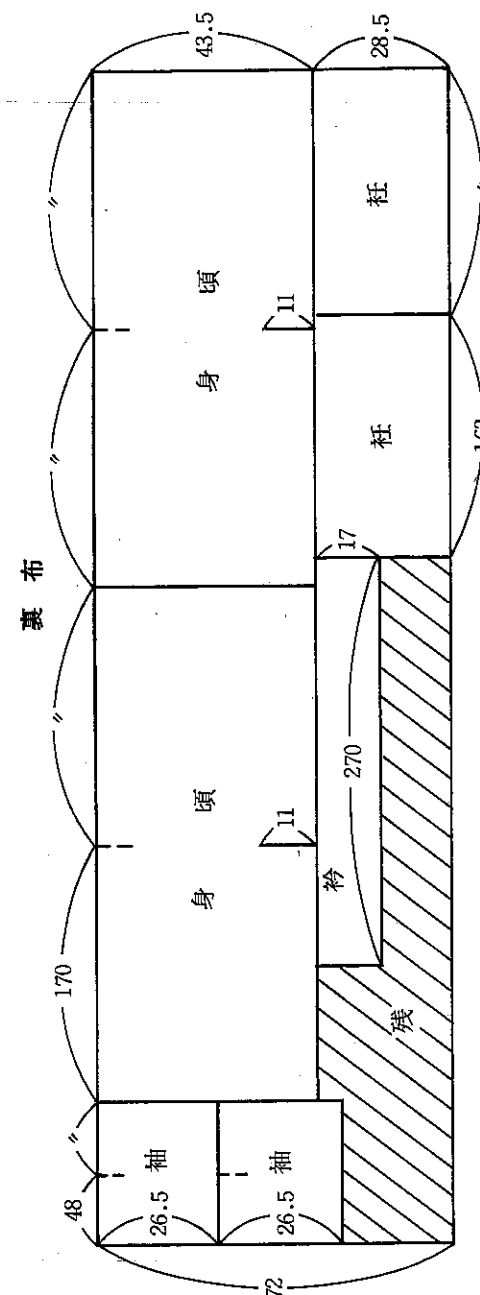
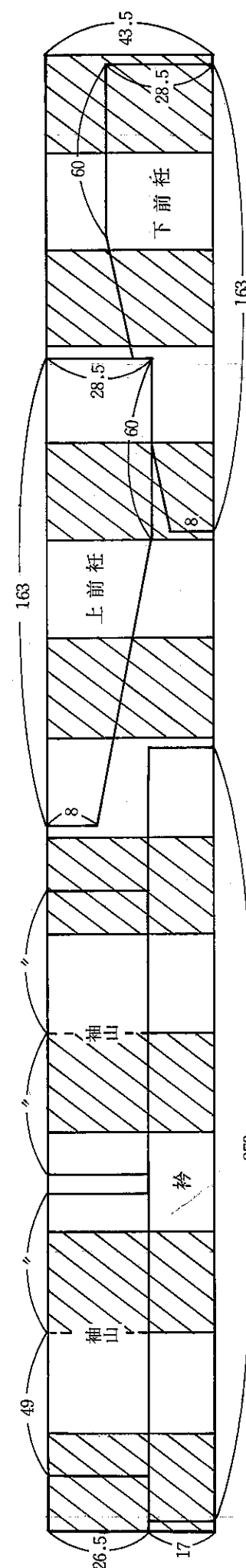
裁ち方

●表地は紅白の段模様なので、背縫い、袖つけ、衿つけ、衿つけは紅白の段を交互に配置するために、図のように身頃二枚および袖、衿、衿を裁ち合わせる。

●裏地は72cm幅の裂を776cm使用して、図のように裁つ。



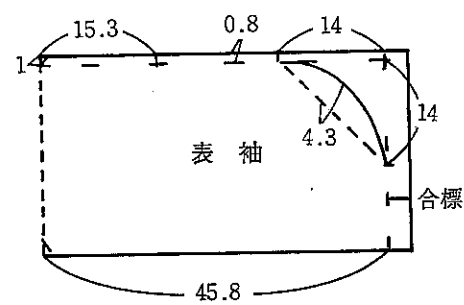
(縮尺寸法)



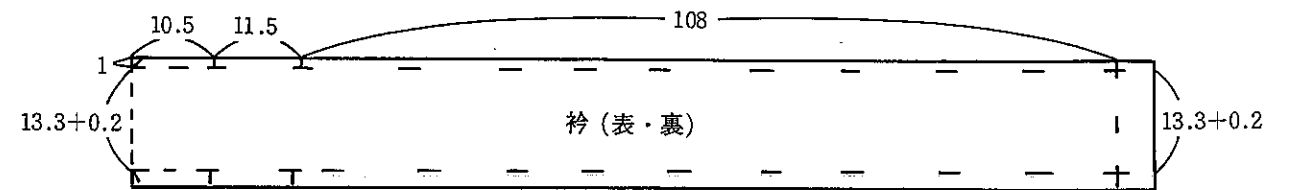
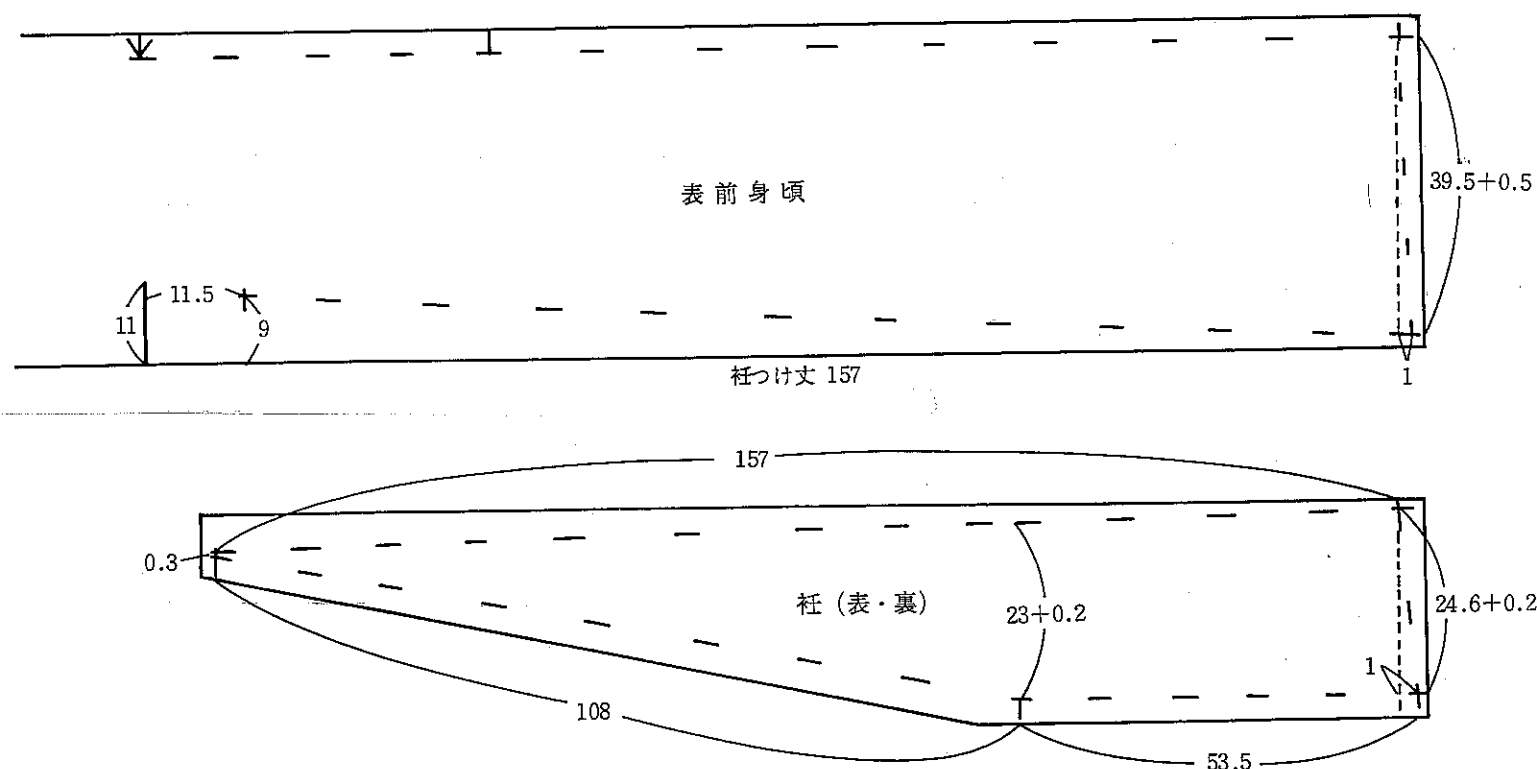
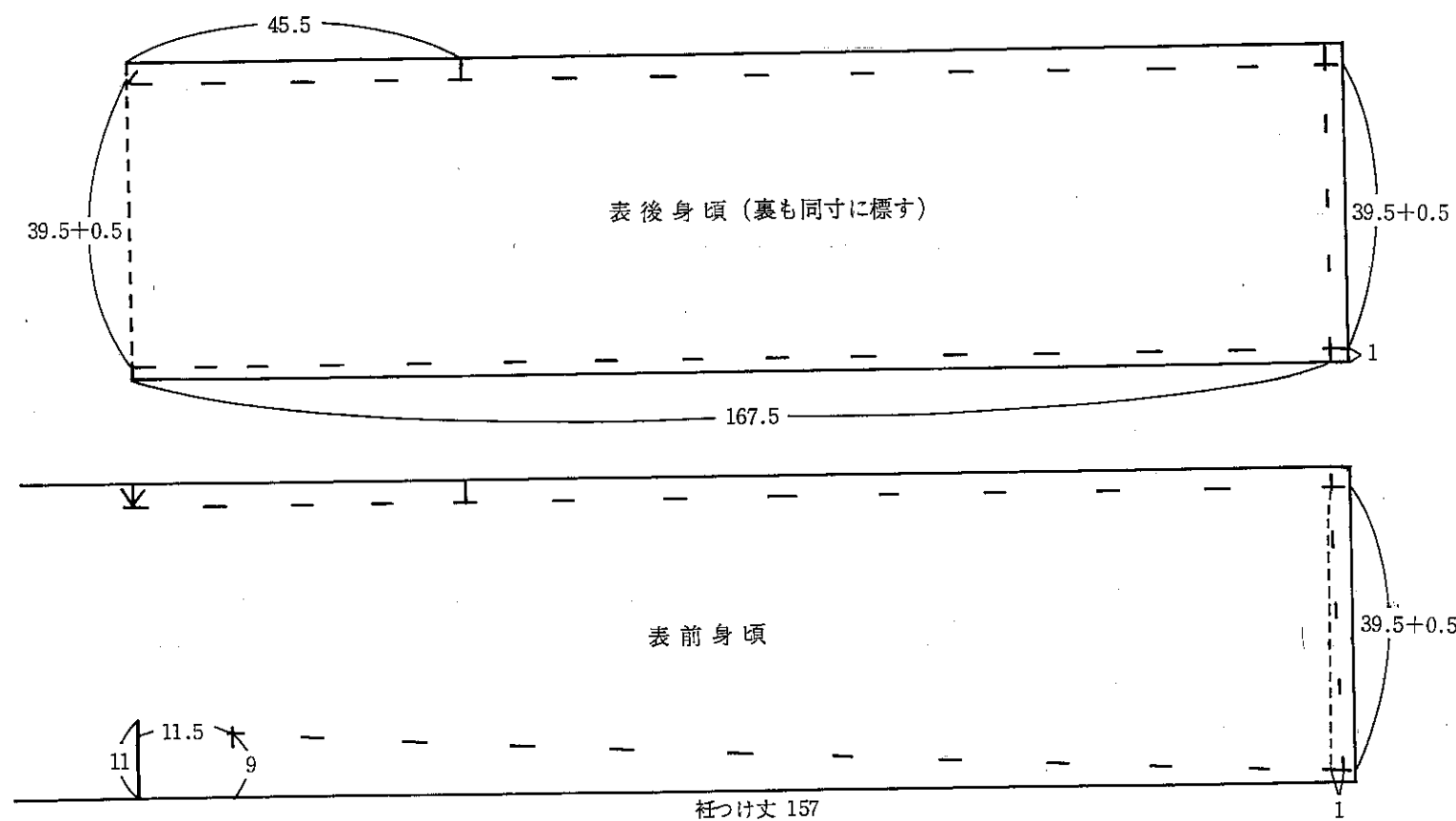
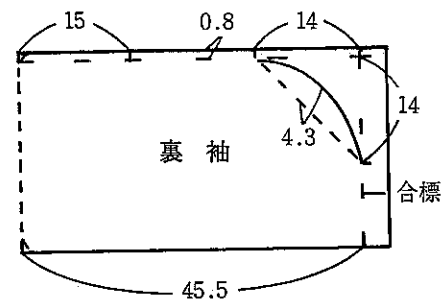
袖丈 $\times 2 + \text{身丈} \times 4 = \text{裏総丈}$
 $48 \times 2 + 170 \times 4 = 776\text{cm}$

標つけ方

- 表袖は身頃の袖つけのところで、肩山と段合わせをして、袖の左右の山をきめてから標をつける。袖幅は袖が縫い上ってから標をつける。
- 表後身頃の背の部分は、紅白の段を交互に合わせて、模様がずれないように仮とじをしてから標つけをする。
- 後身頃、前身頃の順に、図のように標をつける。前身頃に前下りを1cmつける。



- 裏身頃も表の身頃と同寸に標をつける。
- 表衿は前身頃の衿つけの位置で段を合わせ、裾の縫い代をきめてから、表衿を上、裏衿を下にして四枚重ねて図のように標をつける。前下りを1cmつける。
- 表衿は、背縫いのところで段を合せて衿の中心をきめ、裏衿を下に置き、その上に表衿を重ねて図のように標をつける。



縫い方

- 縫い糸は赤色S撚りの絹糸を使用し、針目0.7cmで縫う。

袖

- 表袖、裏袖の袖口を縫い合わせ、裏袖の方へ0.2cmのきせをかけて折り、表へ返して袖口は毛抜き合わせにして、しつけをかけておく。
- 袖口の明き止まりに袖口留めをする。留め方は、表内袖から針を出し、裏内袖、裏外袖の山をすくい、表外袖を縦に小さくすくって表内袖に戻して二重結びにする。
- 袖口下7cmほどは、表裏別々に縫って、この部分の表裏の外袖縫い代を、それぞれ斜めに折り、とじ合わせ、それより下は丸みから袖底に続けて合標まで四つ縫いをし、合標から先は表裏別々に縫う。
- きせをかけて表袖の方へ折り、袂の丸みを縫いちぢめて始末をし、表に返してしつけをかける。
- 上り袖幅に0.2cmのきせ分を加えて、袖幅の標をつける。

身頃

- 表後身頃の裾と裏後身頃の裾を中表に合わせ、標どおりに縫う。
- 縫い代は0.4cmのきせをかけて、裏身頃の方へ折り、表へ返して毛抜き合わせにしてしつけをかける。
- 前身頃および衿の裾も同様にする。
- 右後身頃の表裏を外表に合わせ、背縫いと脇縫いの部分をしつけでとじておく。このしつけは幅標より少し外側にする。
- 背縫いは、右後身頃を左後身頃の表裏ではさみ四つ縫いにする。このとき裾口の部分5cmほどの間は四つ縫いしないで、表裏別々に縫う。
- 背縫い代は、0.2cmのきせで表身頃の方へ折ると、自然に左身頃の方へ折れる。

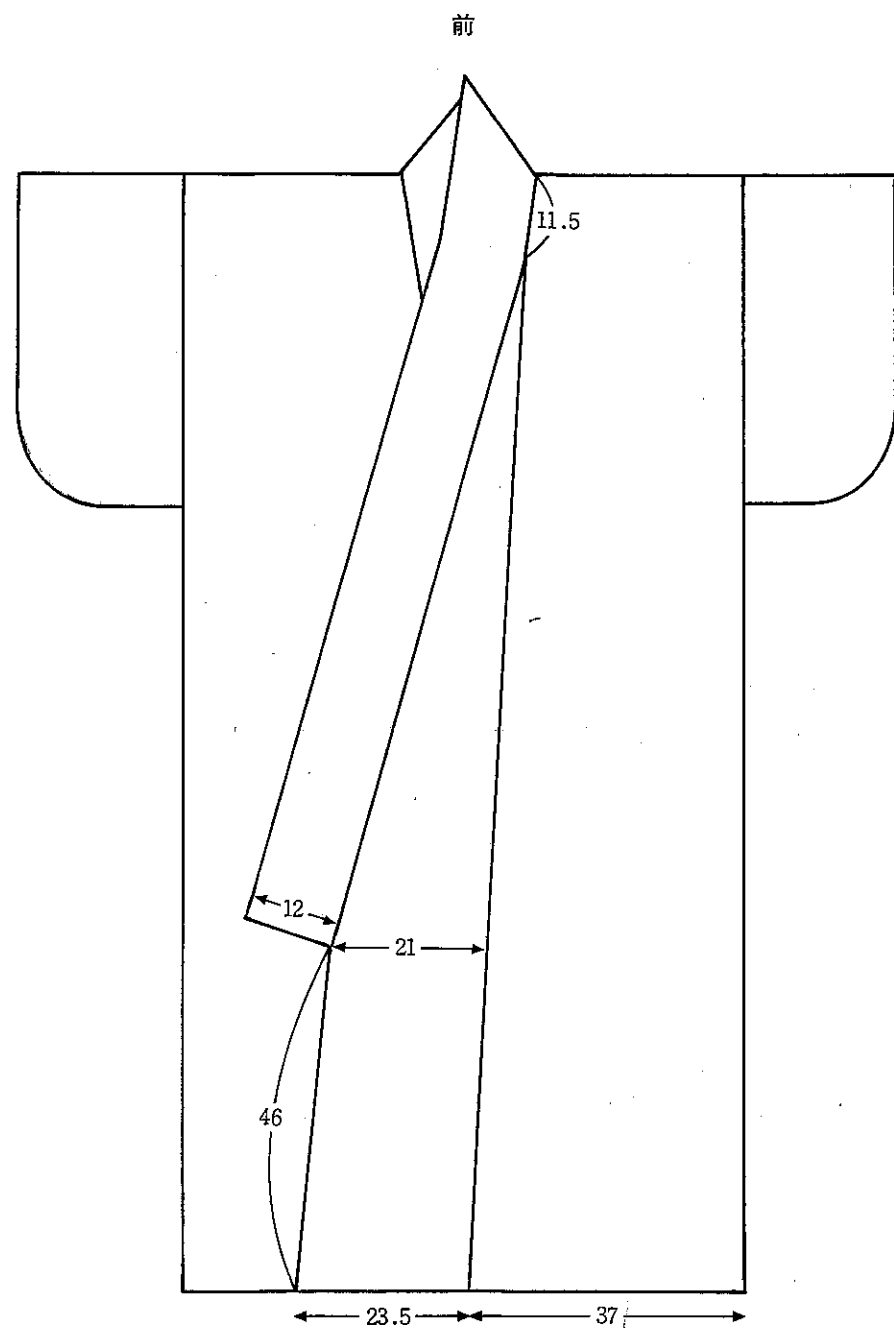
- 左後身頃の脇縫い部分を右身頃と同様にとじる。
- 脇縫いは、表と裏の前身頃で後身頃をはさんで四つ縫いをする。
- 裾口は背縫いと同様に表裏別々に縫う。縫い代は0.2cmのきせで前身頃の方へ折る。
- 表袖つけは袖の方を見て縫う。縫い代は0.2cmのきせをかけて袖の方へ折る。
- 裏袖つけの留めは、裏内袖、裏前身頃、裏後身頃、裏外袖の順にすくって結び、ひき続きに袖と身頃を縫い合わせ、縫い代は表と同様に折る。
- 前身頃の衿つけ、衿下り、衿肩明きの部分を表裏とじ合わせる。

衿つけ

- 表衿と裏衿で前身頃をはさみ、四つ縫いにする。
- 裾口は背縫いと同様に表裏別々に縫う。0.2cmのきせをかけて縫い代は衿の方へ折る。
- 衿つけ
- 表裏の衿で身頃をはさみ、四つ縫いで衿つけをして、0.2cmのきせをかけて縫い代は表衿に折る。
- 衿先の留めをする。留めの順序は表衿から針を出し、衿下の表裏、裏衿の順にすくい、表衿にもどって二重結びにする。
- 衿先は留めより0.4cm先を縫い合わせ、0.4cmのきせをかけて縫い代は裏衿の方へ折る。
- 表裏の衿幅を標どおりに折って、毛抜き合わせにしてくける。

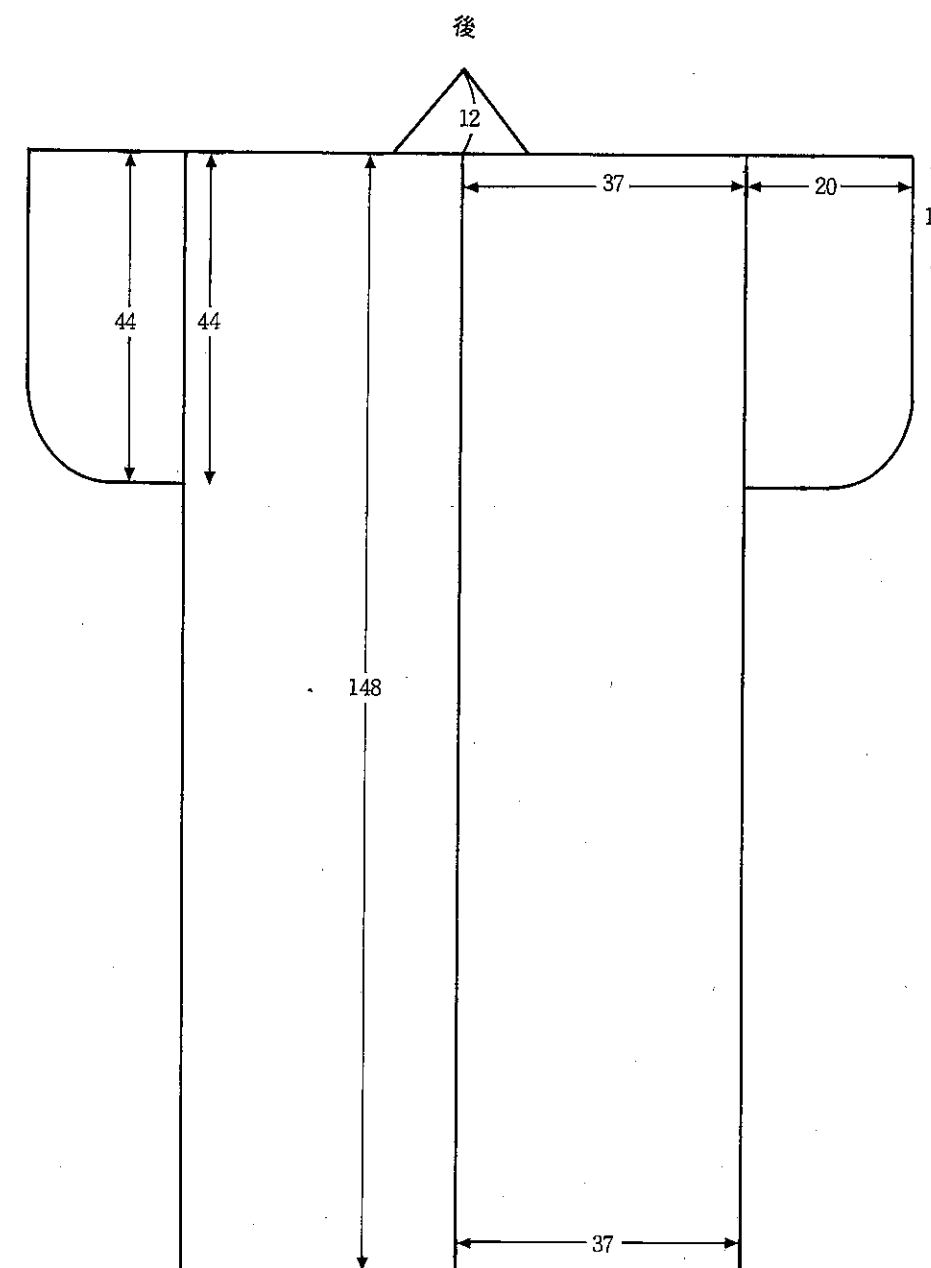
しろこそで
白小袖 (打掛の下に着用)

表地は**しほしほ**の白綾を使用し、裏地には白平絹を使用する。



出来上り寸法

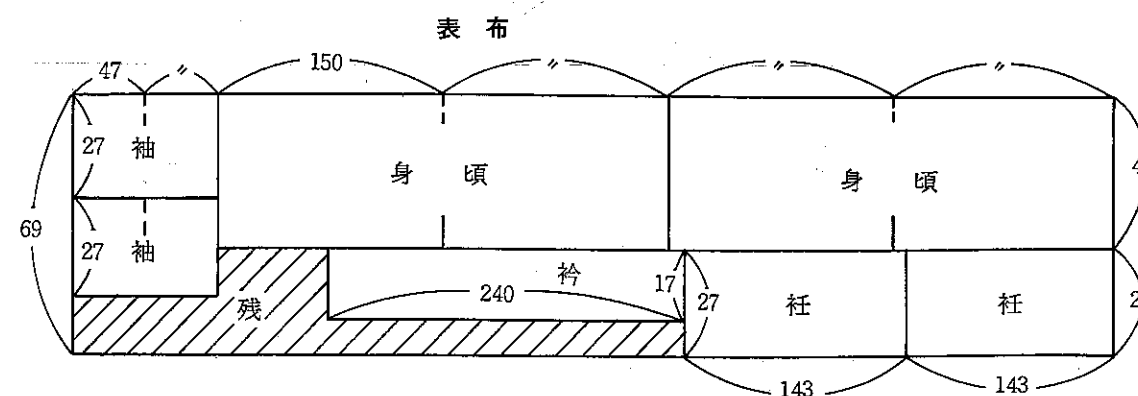
袖丈44cm、身丈148cm、衿59cm、その他は出来上り図の寸法とおりである。



裁ち方

- 表地は幅69cmの白綾を総丈694cm使用する。裏地は幅76cmの平絹を表地と同寸694cm使用する。
- 裁ち方図のように表裏同様に裁つ。

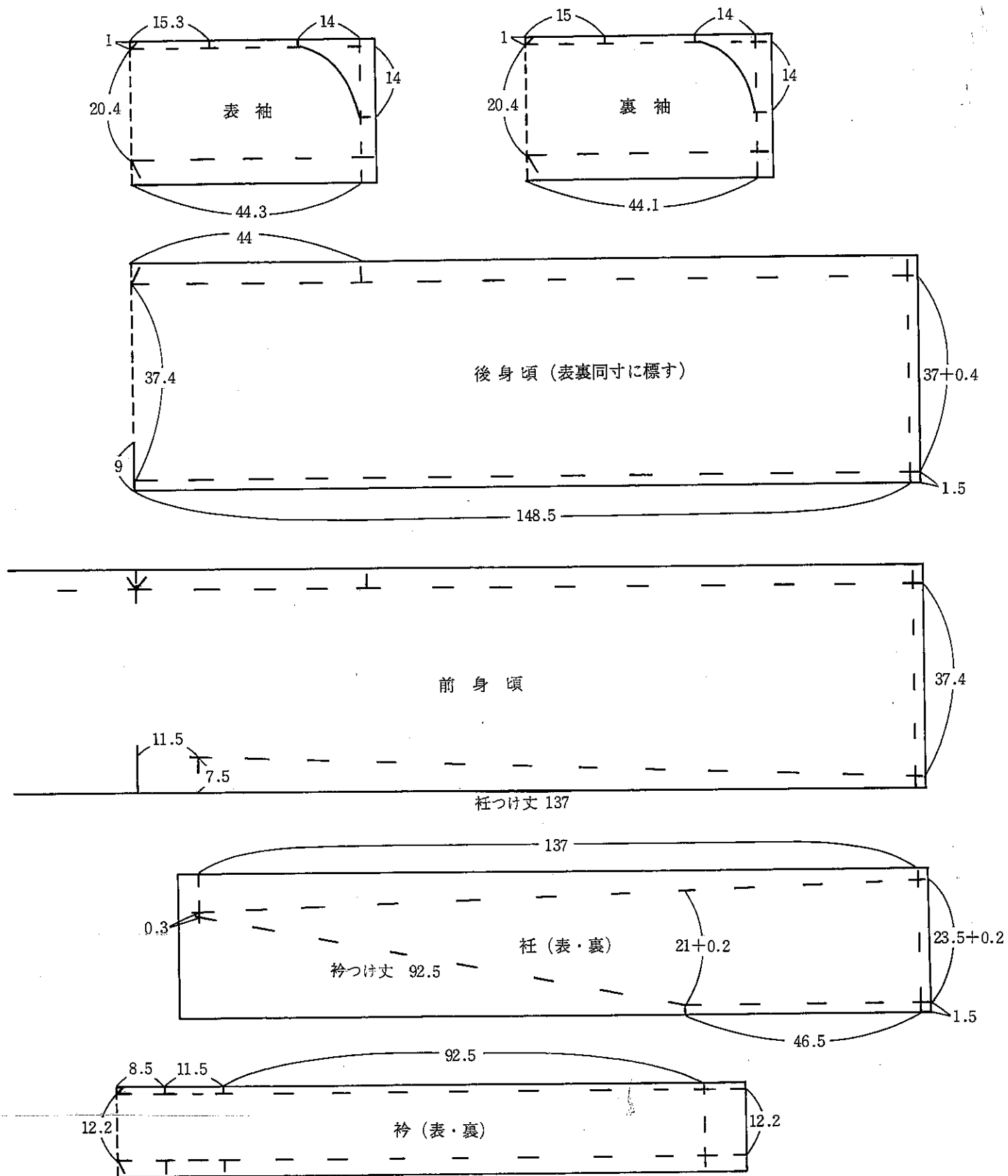
$$\begin{aligned} &\text{袖丈} \times 2 + \text{身丈} \times 4 = \text{表総丈} \\ &47 \times 2 + 150 \times 4 = 694\text{cm} \\ &(\text{裏総丈も表と同寸}) \end{aligned}$$



うすあい ぢ はなかさね も ようあおいもんつじ が はなぞめ こ そで
淡藍地花重模様葵紋辻ヶ花染小袖の模造

実物は徳川黎明会の所蔵で、淡藍色の練緯地に花が藍色の紋りで表わされているもので、徳川家康の所用品と云われ、身幅が広く袖幅の狭いその形は、桃山時代の小袖の特長をよく表わしている。

模造には、表は淡藍地に花重模様を藍の紋りで表わした羽二重を、裏はこげ茶色羽二重を使用し、綿は吹留真綿と青梅綿を使用する。

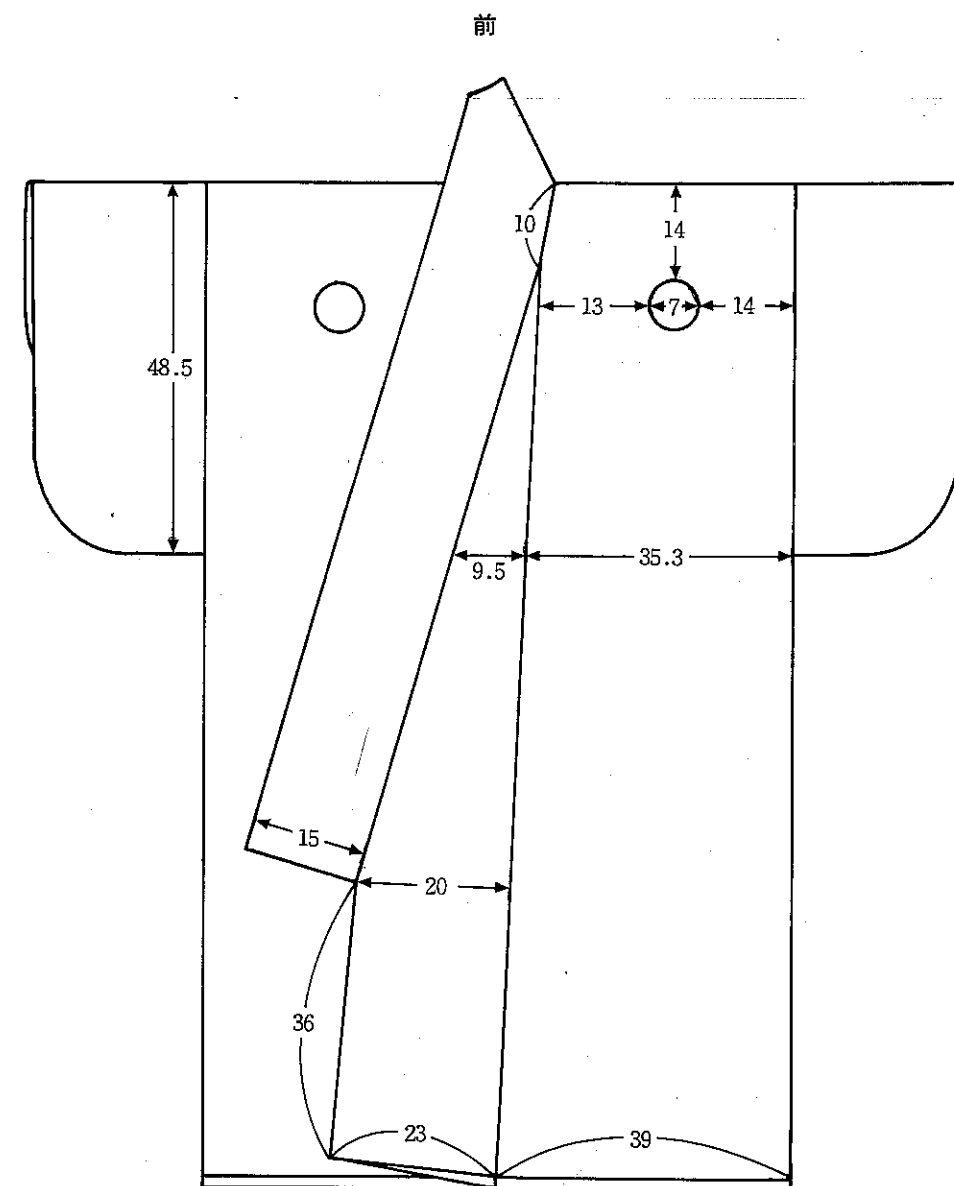


標つけ方

●標つけは、寸法に違いがある以外すべて唐織打掛と同様に、袖、身頃、衿、衿の順に標をつける。

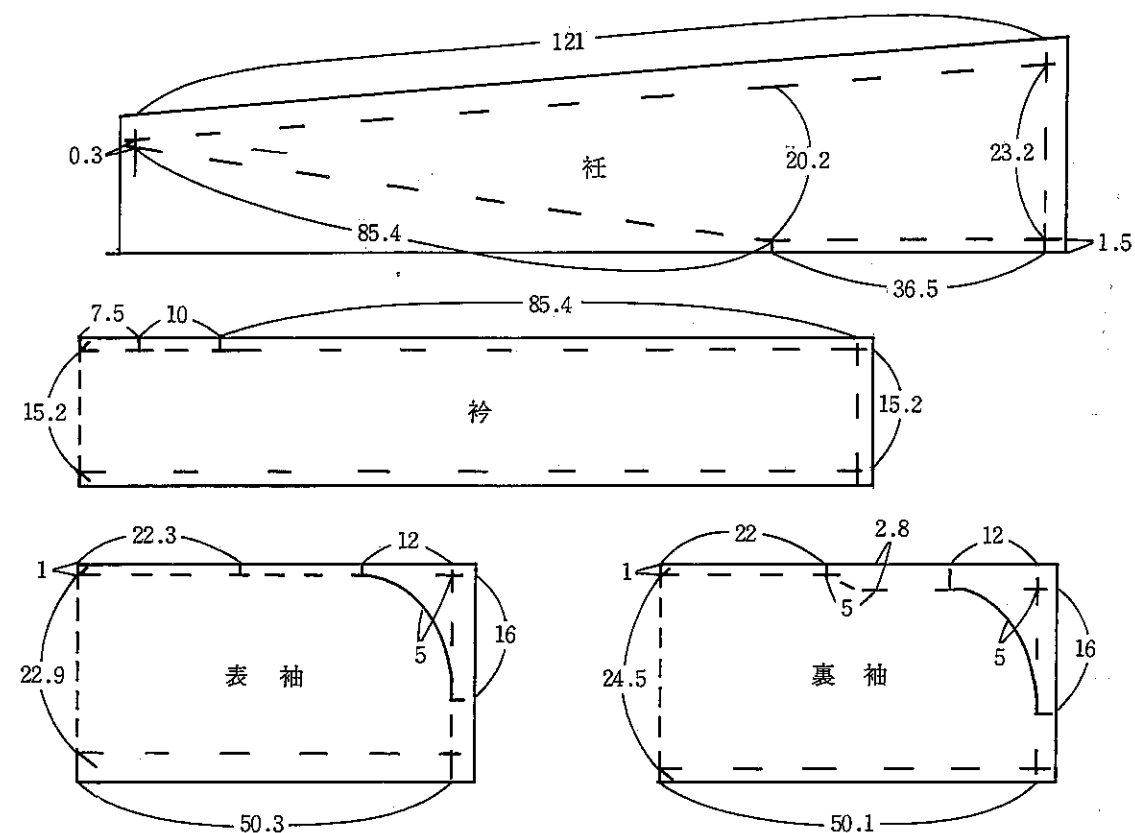
縫い方

- 縫い糸は白色S撚り絹糸を使用し、針目は0.5cmで縫う。
- すべて唐織打掛と同じ順序で四つ縫いにして、袖口、裾、衿下、衿先、衿幅は毛抜き合わせに仕上げる。



出来上り寸法

出来上り図の寸法どおりである。



縫い方

●縫い糸は表は白色のS撚り絹糸、裏は茶色のS撚り絹糸を使用する。

●針目は0.3cmで縫い、きせは0.2cmにする。

袖

●表袖は袖口下から袖底へ続けて縫い、丸みを縫いぢりめ、きせをかけて縫い代は内袖へ折り返す。

●表に返し、袖口は出来上り標どおりに折って、しつけをかけておく。

身頃

●表身頃の背縫いをして、きせをかけて縫い代は左身頃に折る。

●脇縫いをしてきせをかけ、縫い代は前身頃に折り返す。

●脇の縫い代がつれないように、袖つけの位置で後身頃の縫い代を図のように斜めに後身頃へ折り返し、しつけで留める。

●表衿つけをしてきせをかけ、縫い代は衿に折り返す。

●表衿と身頃を縫い合わせ、きせをかけ縫い代は衿の方へ折る。

袖つけ

●表袖と表身頃を合わせ、袖つけの留めをして袖つけを

する。きせをかけて縫い代は袖の方へ折る。(袖つけの留めは桃山時代の打掛を参照)

●裏は袖口を除くほかはすべて表と同様に縫い合わせる。

裾合わせ

●表と裏の裾を合わせて襷を作り、0.4cmの針目で縫い、0.4cmのきせをかけ、縫い代は表身頃の方へ折る。(襷は自然に斜めにする)

綿入れ

●吹留真綿80gを二枚重ねて全体に入れる。

●裏袖口に青梅綿を幅4cm、長さ48cm(袖口寸法の二倍に4cm長くしたもの)をしつけでとじつけておく。

●表後身頃の裏を出して、図のように置き、吹留真綿をのばして入れる。

●なお、裾綿は、青梅綿を幅5cm、長さ200cmくらいのもを五枚重ねて裾口にのせ、身頃の吹留真綿で包む。

●裏身頃を綿の上に折り返して重ね合わせ、前身頃にも真綿をしき、後裾から続けて裾綿を包み、表に返して裾の出ぶきを整える。

仕上げとじ

●裏袖口は、ふきが0.8cm出るように、袖口綿を含ませてしつけで押さえ、とじをする。

●袖口のとじは、裏から袖口ふき山より2cm内側を裏糸で間隔4cm、針目0.2cmで図のようにとじる。

●裏袖口と表袖口を合わせ、表の折り山より0.2cm内側を、0.5cmの針目で本ぐけをする。

●衿下は裏布で真綿を包み、表は出来上り幅に折って、しつけをかけ、表裏を毛抜き合わせにして、0.5cmの針目

で本ぐけをする。

●衿のとじは、衿つけの表裏の縫い目を合わせて、白の絹糸で3cmの間隔でとじる。

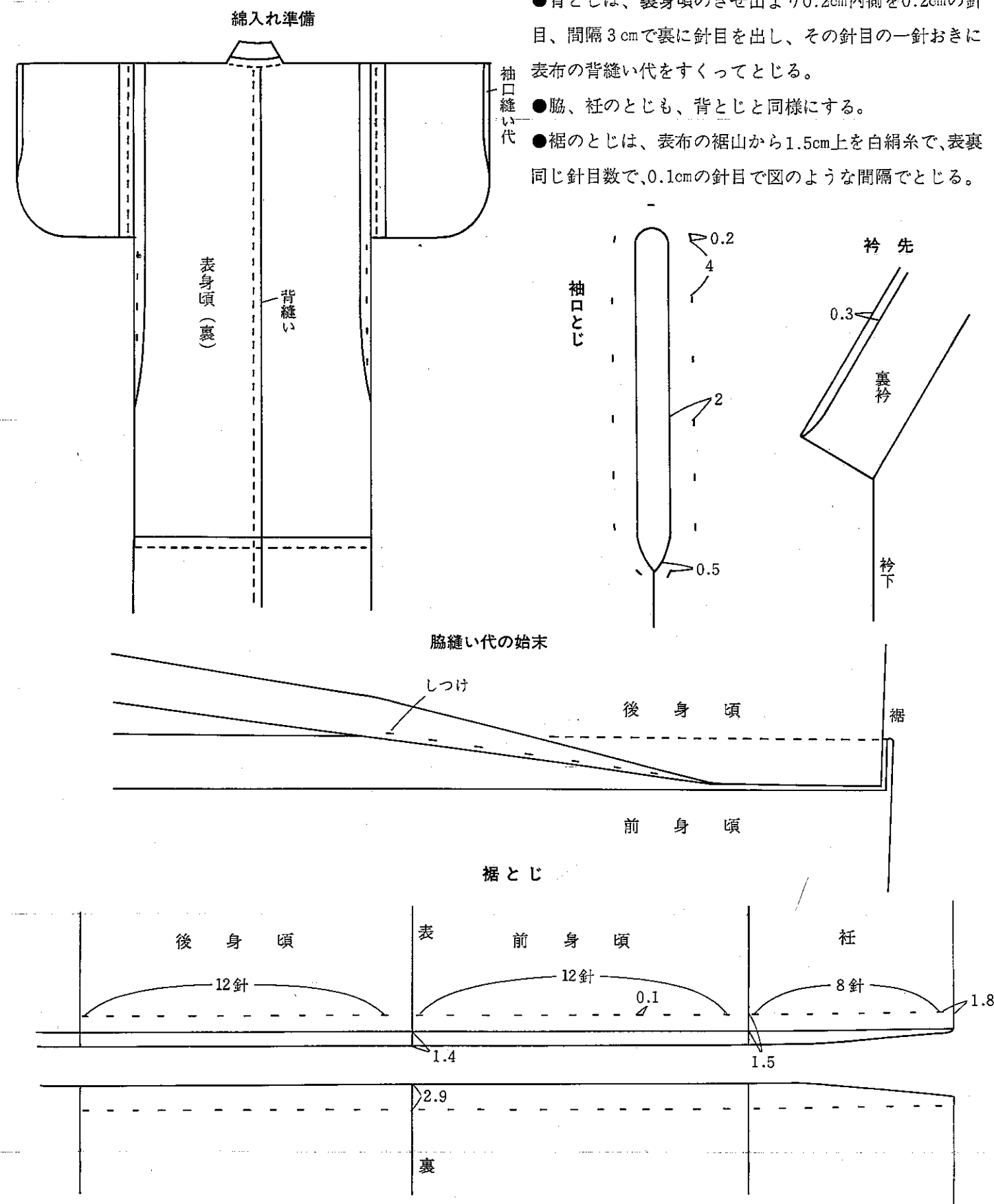
●衿先は、衿先留めをして衿先を縫う。

●表衿で真綿を包んで、出来上り幅に折り、裏衿は表衿幅より0.3cm控えて折り、0.5cmの針目で本ぐけをする。

●背とじは、裏身頃のきせ山より0.2cm内側を0.2cmの針目、間隔3cmで裏に針目を出し、その針目の一針おきに表布の背縫い代をすくってとじる。

●脇、衿のとじも、背とじと同様にする。

●裾のとじは、表布の裾山から1.5cm上を白絹糸で、表裏同じ針目数で、0.1cmの針目で図のような間隔でとじる。



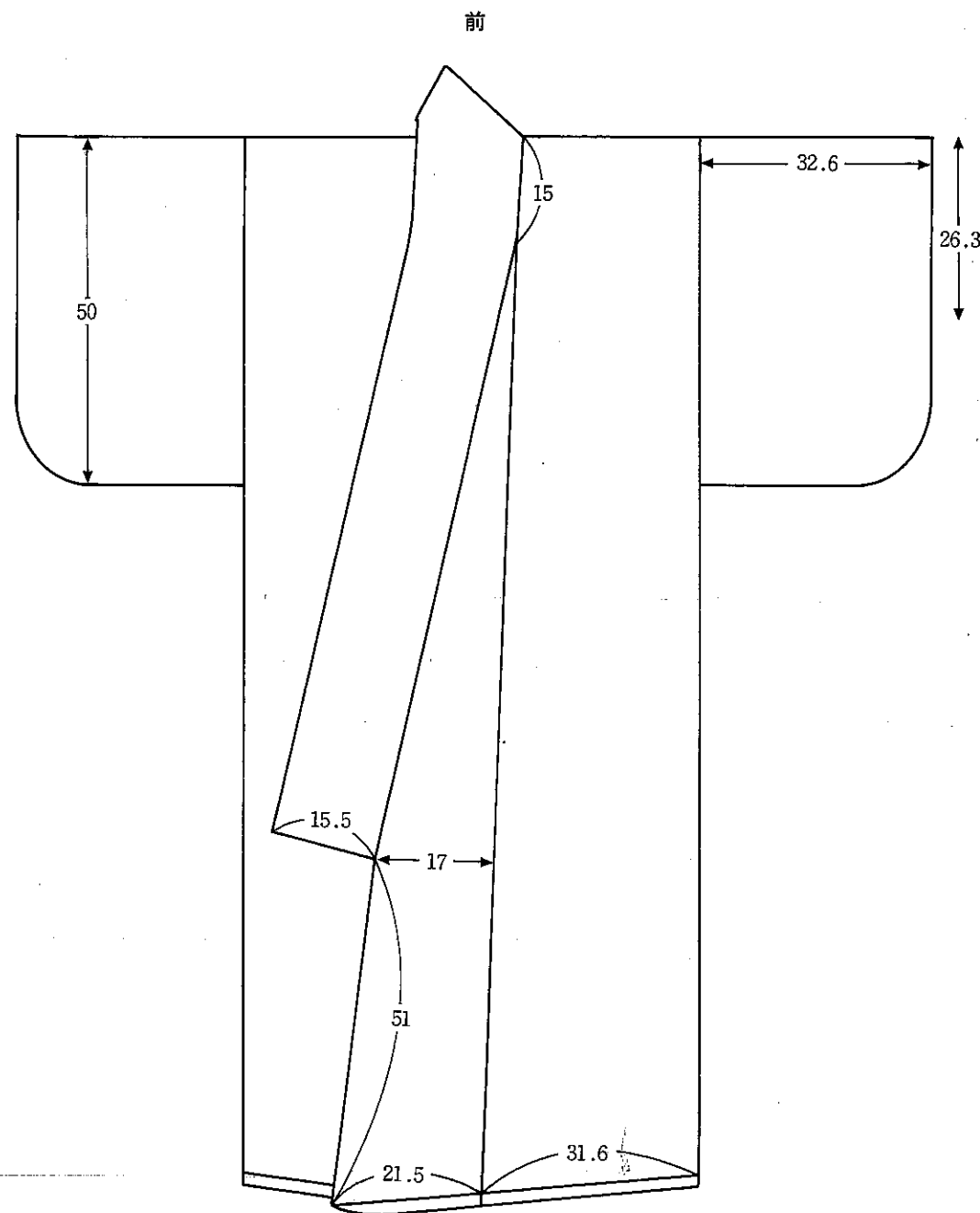
うすべに ぢ かん ぜ みずきり も ようすりはく

淡紅地観世水桐模様摺箔の模造

能装束で摺箔と云えば、無地の裂の上に金箔または銀箔で模様を箔押ししたものを云う。主として女役が着けるものである。

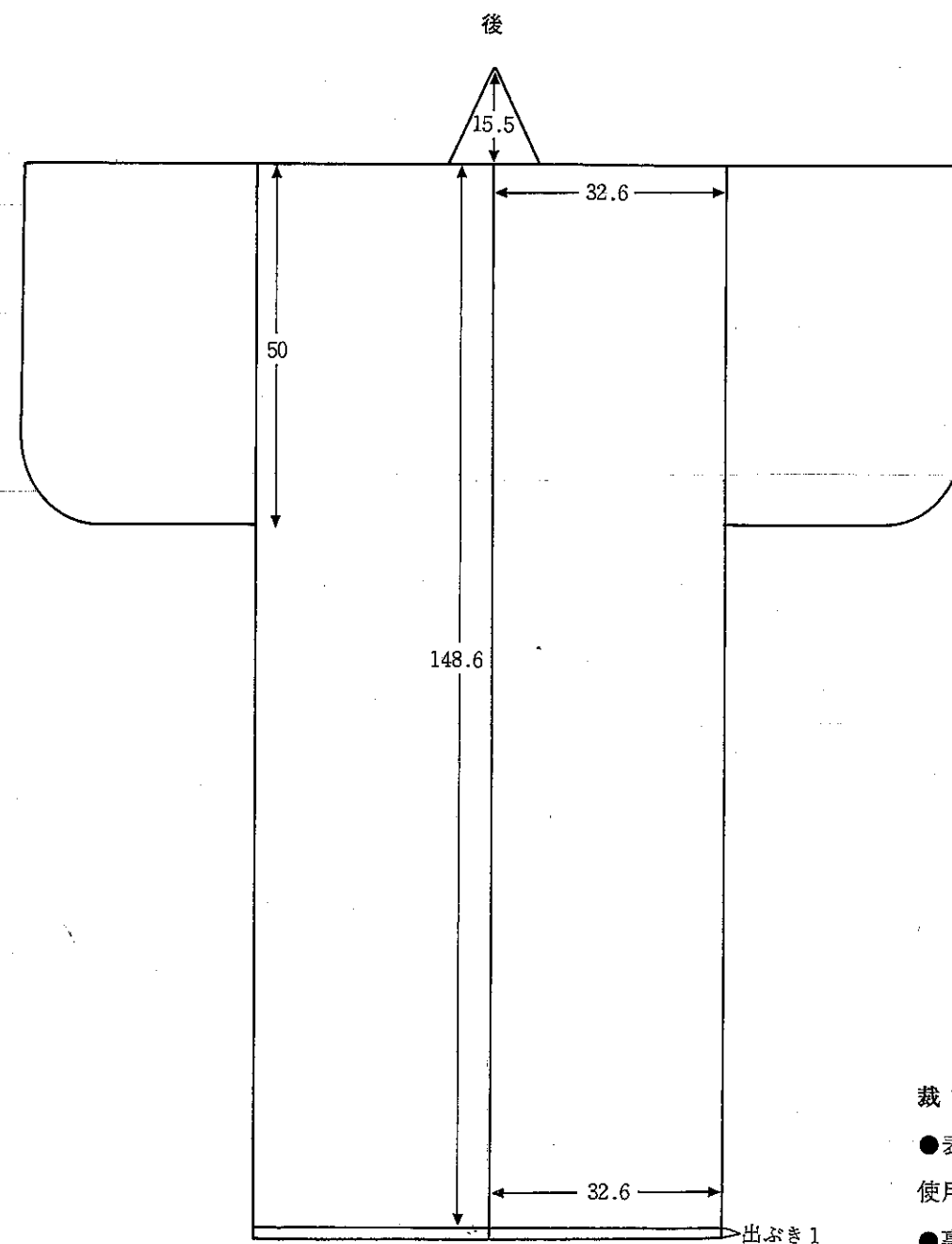
この淡紅地観世水桐模様摺箔の実物は、東京国立博物館

の所蔵品であるが、元来は能楽の金春流の家元に所蔵されていたもので、淡紅の練緯の地に、銀の摺箔で桐と観世水の模様が袖、身頃、衿、衤と続けてつけてあり、桃山から江戸時代初期のものではないかと云われている。



出来上り寸法

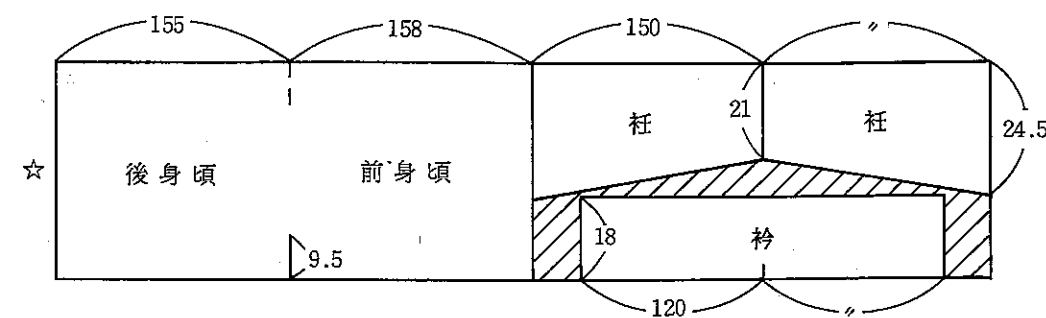
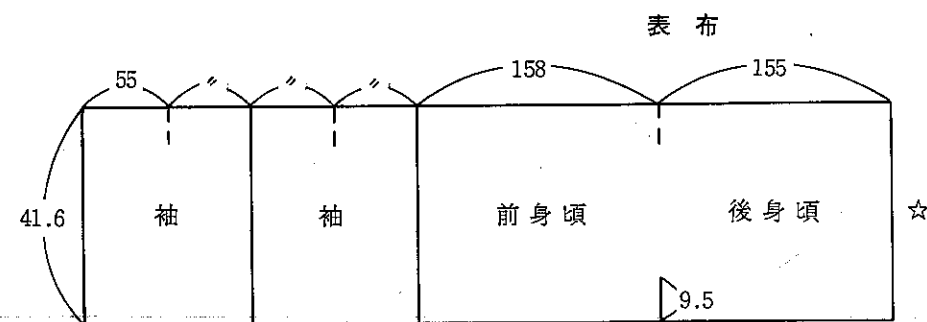
出来上り図の寸法のとおりである。



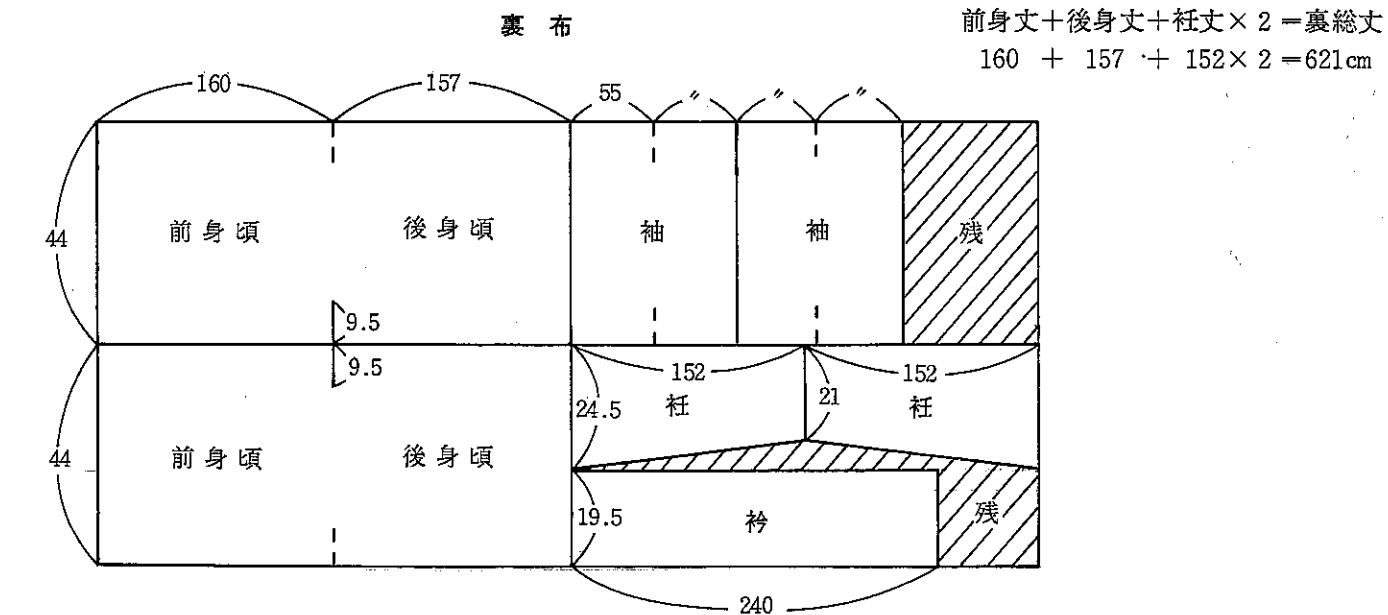
裁ち方

●表地は41.6cm幅の布を総丈1146cm使用し、裁ち方図のように裁つ。

●裏地は88cm幅の布を総丈621cm使用して、図のように裁ち合わせて切る。



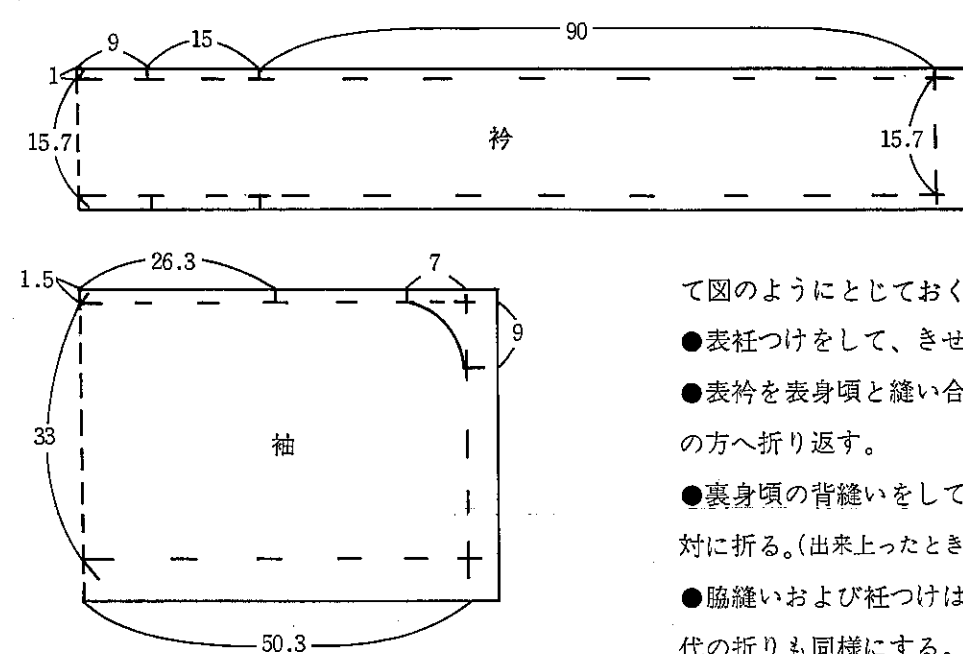
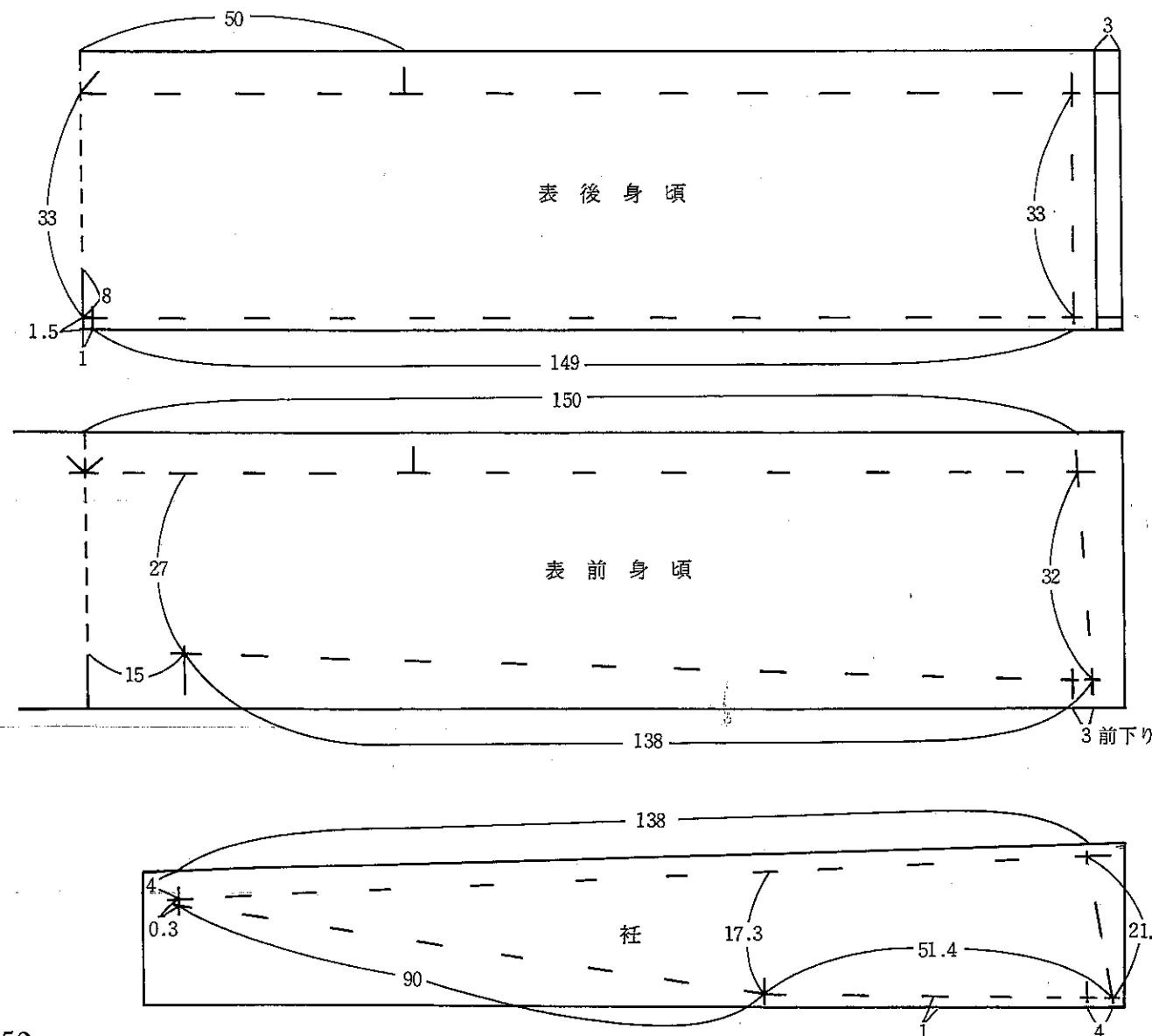
$$\begin{aligned} & \text{袖丈} \times 4 + \text{前身丈} \times 2 + \text{後身丈} \times 2 + \text{衤丈} \times 2 = \text{表総丈} \\ & 55 \times 4 + 158 \times 2 + 155 \times 2 + 150 \times 2 = 1,146\text{cm} \end{aligned}$$



標つけ方

- 表袖、表身頃を標つけ方図のように標をつける。
- 衿および衿は、表裏を重ねて標つけをする。

- 裏の標つけは、身頃および衿の丈を、表丈より出ぶきの二倍(2cm)長くする以外は、すべて表と同様に標をつける。



縫い方

- 縫い糸は表・裏ともに淡紅色S撚り絹手縫い糸を使用する。
- 針目は0.3~0.4cmで縫い、きせは0.2cmにする。

袖

- 袖口は表裏を標どおり縫い合わせ、きせをかけて縫い代は表袖口の方へ折り返す。
- 口綿として真綿を幅3cm、長さ60cmくらいのものを袖口の裏に当て、縫い目にとじつけ、表に返して毛抜き合わせにして、袖口の留めをする。
- 袖口下から袖底に続けて、表裏別々に縫い合わせる。丸みを縫いちぢめてきせをかけ、縫い代は内袖に折っておく。

身頃

- 表身頃の背を縫い、きせをかけて正身頃に折る。
- 脇は、袖つけから裾までを縫い合わせ、縫い代はきせをかけて前身頃に折り返す。
- 袖つけのための身頃の縫い代は、肩山で標より0.6cm、袖つけ止まりで0.2cm出して斜めに折り、袖つけから下方は、後身頃の縫い代がつかないように、斜めに折り返し

て図のようにとしておく。

- 表衿つけをして、きせをかけて縫い代は衿に折り返す。
- 表衿を表身頃と縫い合わせ、きせをかけて縫い代は衿の方へ折り返す。
- 裏身頃の背縫いをして、縫い代はきせをかけて表と反対に折る。(出来上ったとき左身頃が上になるように)
- 脇縫いおよび衿つけは、表と同様に縫い合わせ、縫い代の折りも同様にする。

裾合わせ

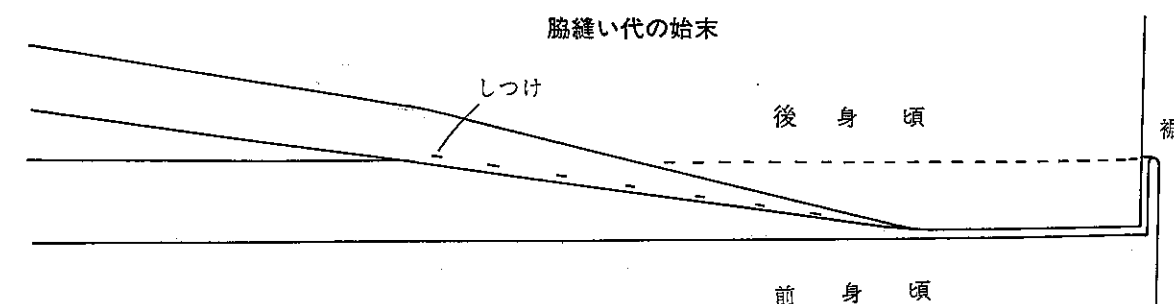
- 表と裏の裾を標どおり縫い合わせ、裾を作る。0.4cmのきせをかけて縫い代は表の方に折り返す。

袖つけ

- 表袖と表身頃を合わせ、袖つけの留めをして袖をつける。きせをかけて縫い代は袖の方に折り返す。(袖つけの留めは唐織参照)
- 裏袖と裏身頃を合わせ、袖つけ留めをして袖をつけ、きせをかけて縫い代は袖の方へ折り返す。

綿入れ

- 身頃および袖全体を裏返し、前身頃が内側に、裏後身頃を上側に平らに置き、その上に吹留真綿一枚(80g)を全体にのばす。
- 裾の方は10cmほど長く、肩山はおおよそ袖丈分だけ長く出す。
- 幅は、袖の部分は袖口のところまでとして、身幅は前身幅および衿幅の寸法として切る。
- 肩の方は、前の中央から切って衿肩をあけておく。
- 裾には幅6cm、長さ180cmくらいの真綿を裾綿としてのせ、裾に長く出ている綿でそれを包む。



- 両脇の綿を表裏の前身頃間に折り返し、肩の部分も表裏の間に入れる。
 - 袖の部分も同じように折り返す。
 - 肩の山で表裏の間から両手を入れ、裾を持って引き返し、裏前身頃を上側に置く。
 - 肩および脇から出ている綿を、前身頃および袖、衿に平らに引き伸ばす。
 - 綿の不足の部分には足し綿をする。
 - 前表身頃を表へ返す。
 - 一方の前の綿入れがすんでから、また片方の前身頃の綿を入れ、表に返す。
 - 裾および袖口の出ぶきを整えて、しつけをしておく。
- 衿 下**
- 表は出来上り幅に折って、しつけをしておく。
 - 裏衿で真綿を包み、しつけで押さえておく。

- 襟先を整えて、表裏の衿下を毛抜き合わせにして、0.7cmの針目で本ぐけにする。

衿

- 表裏の衿つけ縫い目を合わせ、1.5～2cmの針目でとじ合わせる。
- 衿先の留めをして、その糸で留めより0.4cm先を、衿幅標より一針先まで縫い、縫い代は裏衿の方に返し、衿つけ縫い代にとじつけて表に返す。
- 表衿で真綿を包んで出来上り幅に折り、裏衿は表衿幅より0.2cm控えて折り、0.8cmの針目で本ぐけをする。

袖口とじ

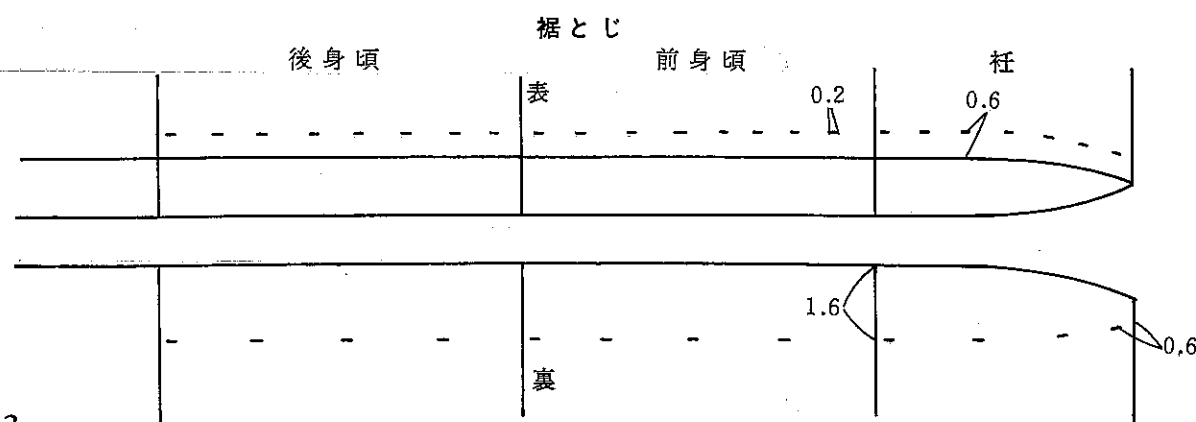
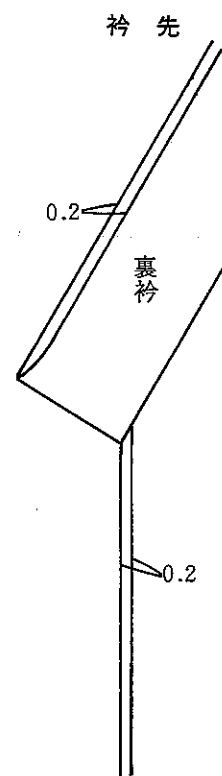
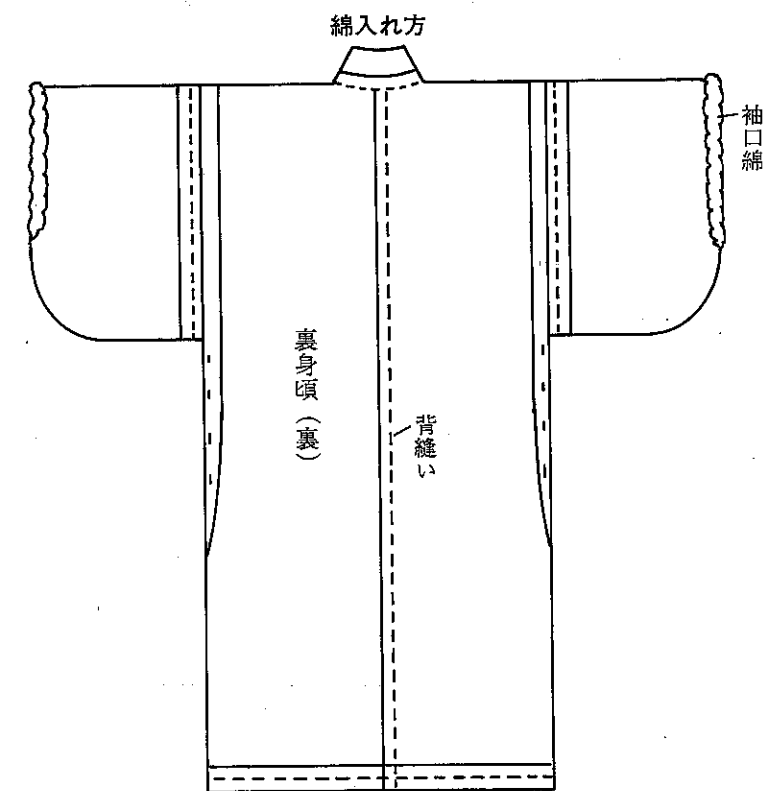
- 裏袖口の山から1cm内側に、山から0.5cm下、袖口止まり、その他を七等分して針を打ち、縫い糸でとじをする。

縦とじ

- 縦とじの仕方は、裏から表と同色の絹糸で（この場合は表裏同色系）2cmの間隔で、表裏の縫い目のところをとじ合わせる。

- とじの寸法は、背とじは裾から背丈の三分の二まで、脇とじは裾から袖つけまで、衿とじは裾から衿つけ丈の三分の二までとじる。

- 裾とじは、表裾の折り山から0.6cm上を図のようにとじる。

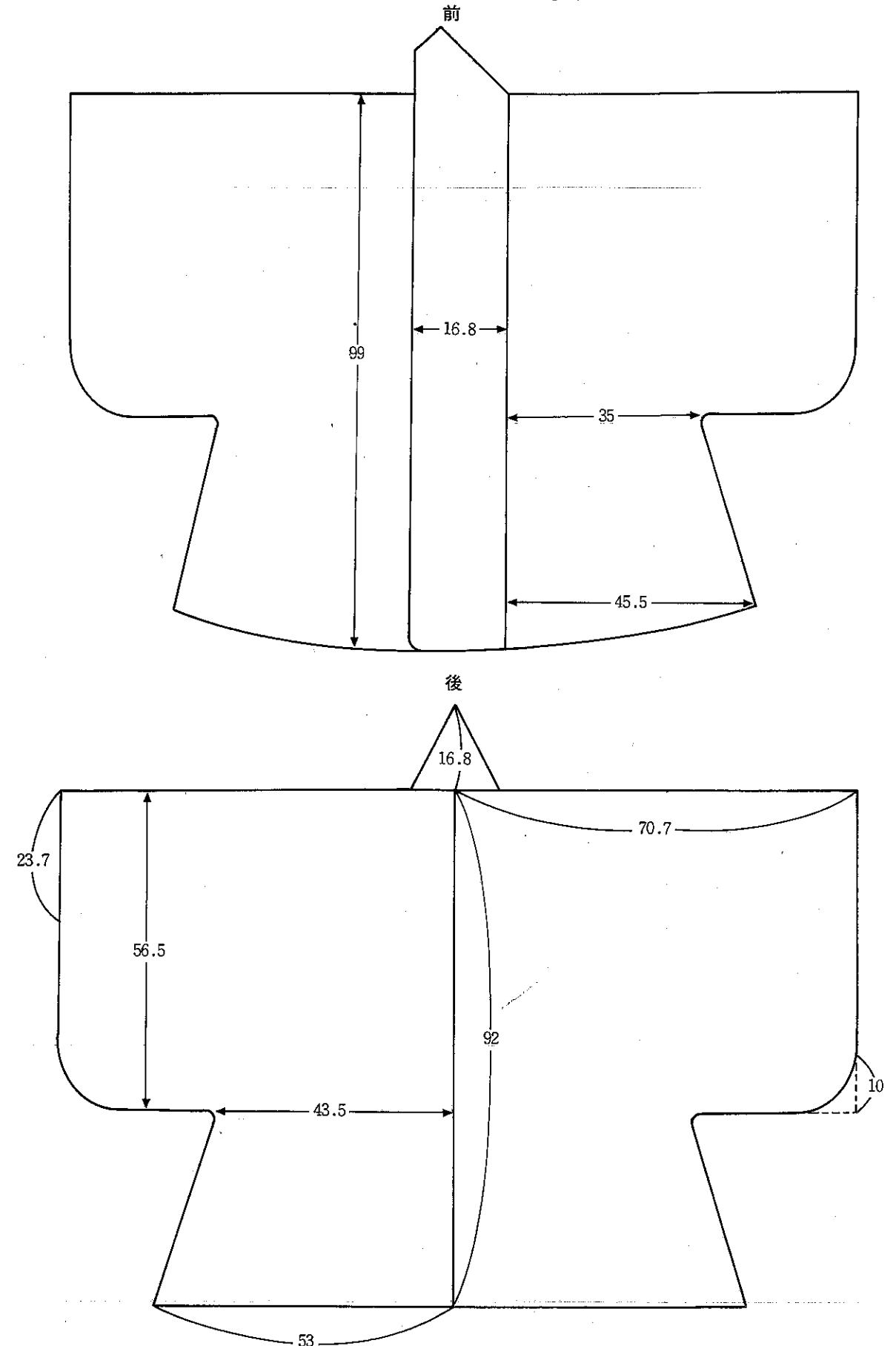


かたくら け でんらい こ もんぞめ どうぶく
片倉家伝来小紋染胴服の模造

この小紋染胴服の実物は、宮城県白石市の旧白石城主片倉家に伝わるもので、伊達政宗の家臣である二代目片倉小十郎重長が、慶長の初め頃、太閤秀吉から拝領した

との家伝があり、現在の羽織の原型といわれる胴服の中でも、その特異な形は日光東照宮伝来の小花模様紋付胴服とともに、注目されているものである。

表地には藍色地小紋染平絹を、裏地には濃茶地平絹を使用する。中入れ綿には真綿310gを使用する。

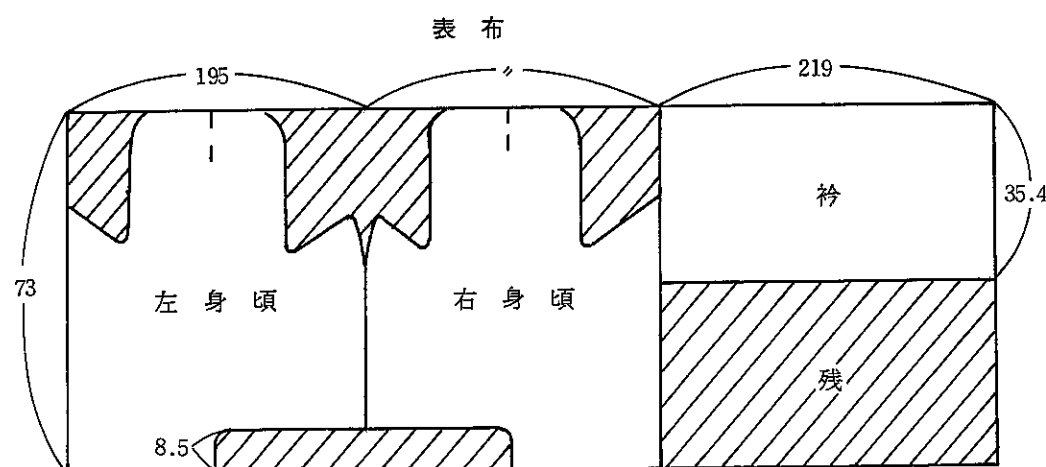


出来上り寸法

出来上り図の寸法どおりである。

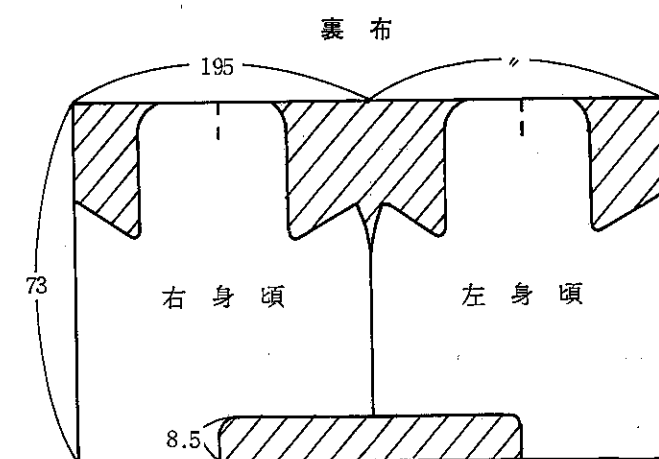
裁ち方

●表地は73cm幅の藍地平絹を609cm、裏地は73cm幅の茶地平絹を390cm使用して、裁ち方図のように裁つ。



$$\text{前後身丈} \times 2 + \text{衿丈} = \text{表総丈}$$

$$195 \times 2 + 219 = 609\text{cm}$$

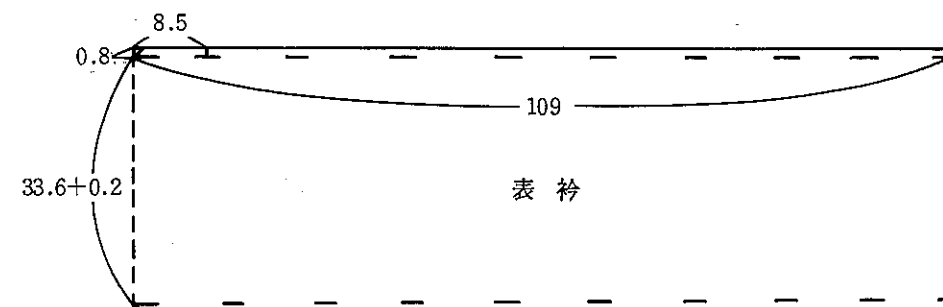
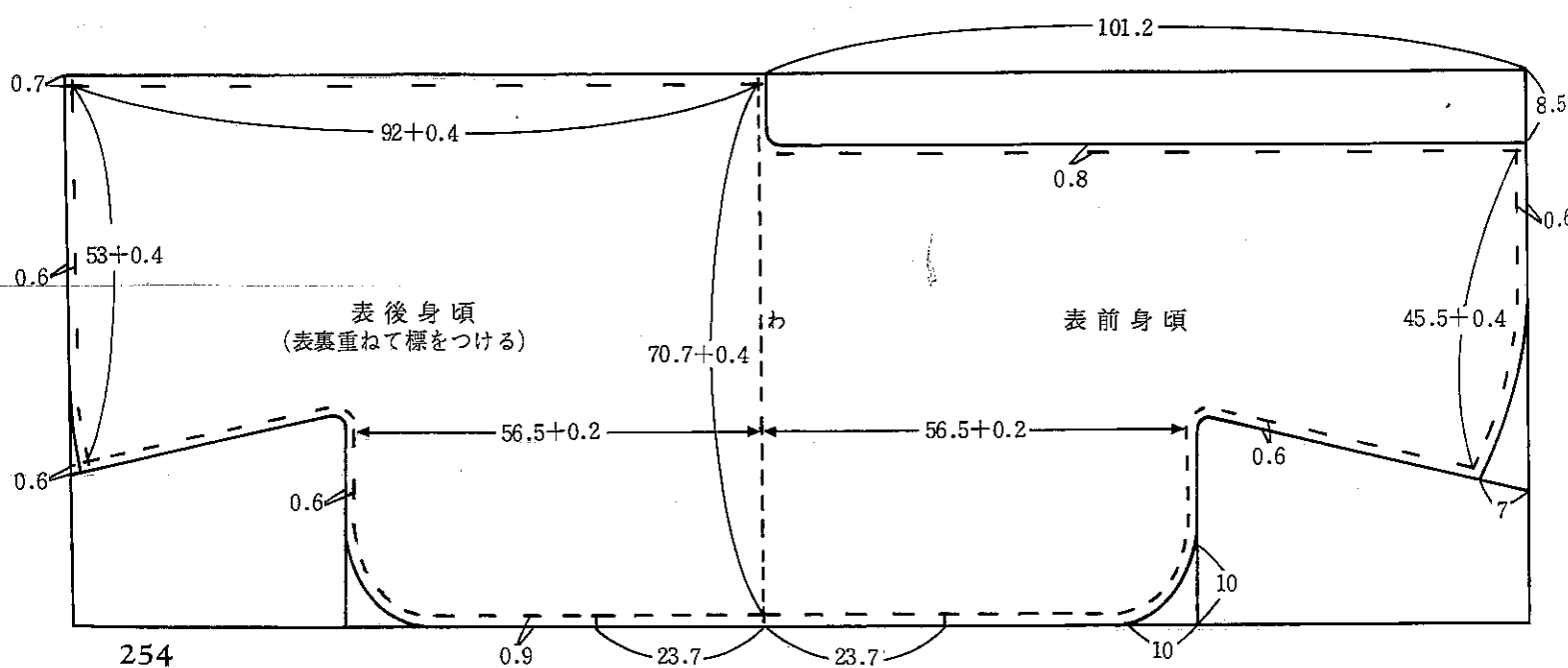


$$\text{前後身丈} \times 2 = \text{裏総丈}$$

$$195 \times 2 = 390\text{cm}$$

標つけ方

- 寸法どおりに裁った表、裏の布を、それぞれ中表に四枚合わせて、図のように標をつける。
- 衿は中心から中表に二つ折りにして、図のように標をつける。

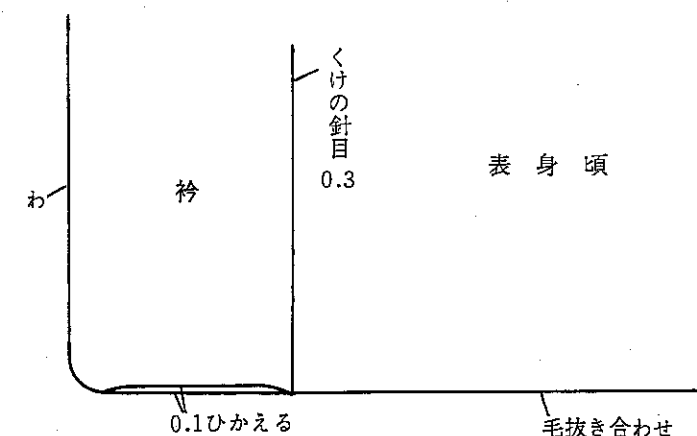


縫い方

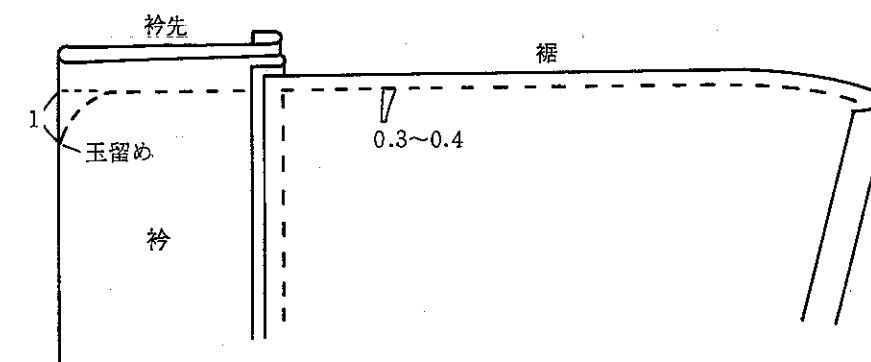
- 縫い糸は表はS捻り薄藍色絹手縫糸、裏はS捻り黒色絹手縫糸を使用する。
- 針目はすべて0.3~0.4cmで、縫い目の部分にはすべて0.1cmのきせをかける。
- 背の部分を表裏別々に縫って、縫い代は左身頃の方へ折る。
- 袖口下から袖底、脇と続けて表裏別々に縫い合わせ、縫い代は前身頃の方へ折る。
- 裏の前身頃と衿を縫い合わせ、縫い代は衿の方へ折る。
- 表身頃と裏身頃の裾を縫い合わせ、縫い代は裏身頃の方へ折る。

- 衿を出来上り幅に折り、衿先は表身頃につく方を0.1cm控える。
- 衿先部分は1cmの丸みで図のように縫い合わせ、縫い代は表の方へ折る。
- 綿入れ
 - 裏後身頃の裏を出して、真綿を引く。袖口と裾の部分は少し厚くする。
 - 前身頃の裏から衿へ続けて真綿を引く。
 - 表に返して、裾は毛抜き合わせに整える。
 - 袖口は表、裏ともに出来上り幅に折って、毛抜き合わせにして折り山から0.2cm内側を、0.5cmの針目でくけ合わせる。
 - 衿つけ縫い代をとじ合わせ、衿先の丸みを整え、表身頃に0.3cmの針目でくけつける。
 - 背とじはしない。

衿先の縫い方(1)

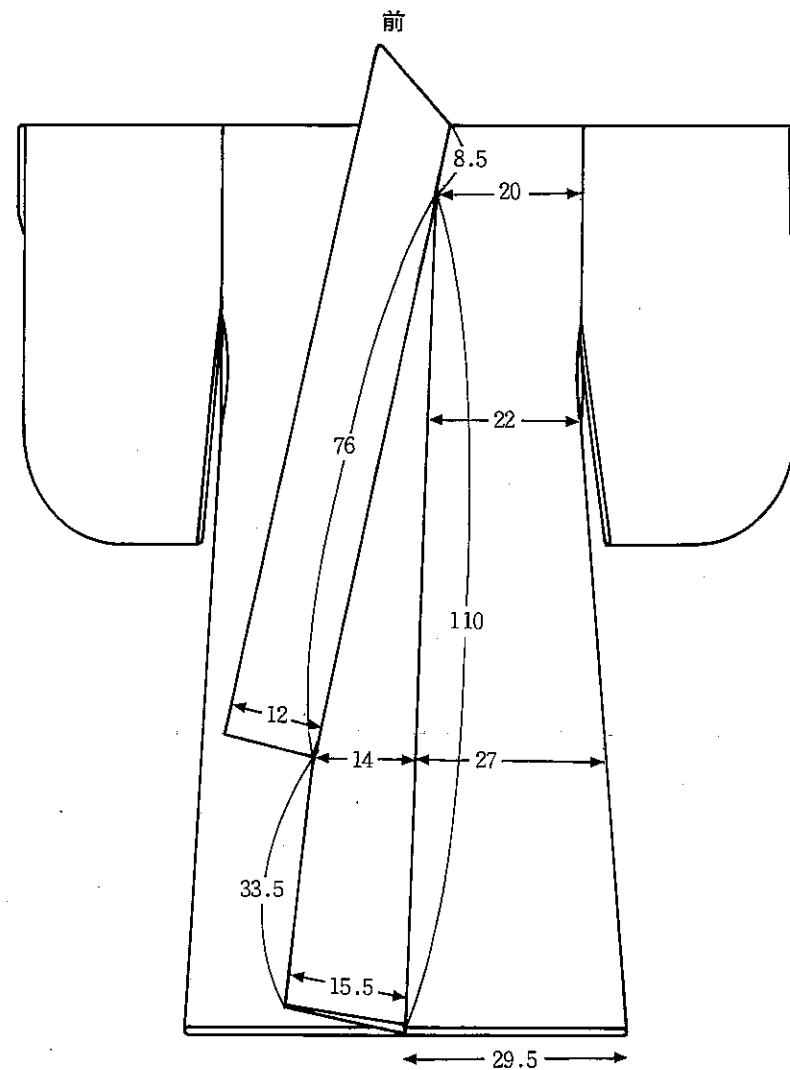


衿先の縫い方(2)



しろ ち じゃかごしらしぬの も ようぬいはくふりそで
白地蛇籠晒布模様縫箔振袖の模造

実物は東京国立博物館の所蔵で、江戸時代前期のもの たものを、裏は赤色平絹を使用する。
 といわれる子供用の振袖である。 仕立て方は、綿入れの縫い仕立てで、綿は吹留真綿一
 表は、白^{しろ}統地に蛇籠晒布模様の刺繍に金箔をほどこし 枚（長着用）を使用する。

**出来上り寸法**

寸法は出来上り図の通りである。

裁ち方

●表布は幅37cm、丈938.2cm、裏布は幅37cm、丈950.2cmを使用して図のように裁つ。

●ただし表布は模様を合わせるため、各部の丈を長く裁ち、出来上り寸法に仮縫いをして模様をつける。

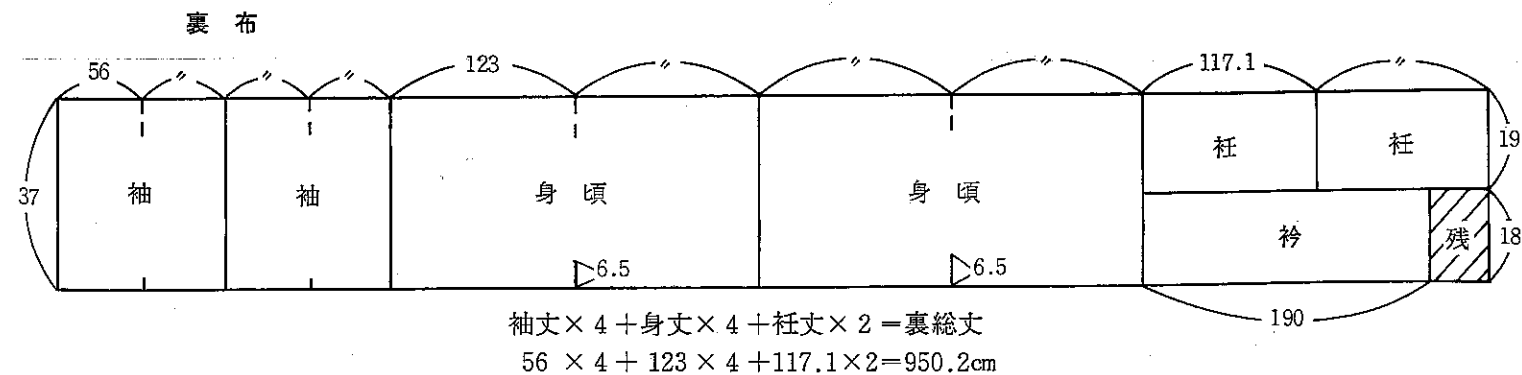
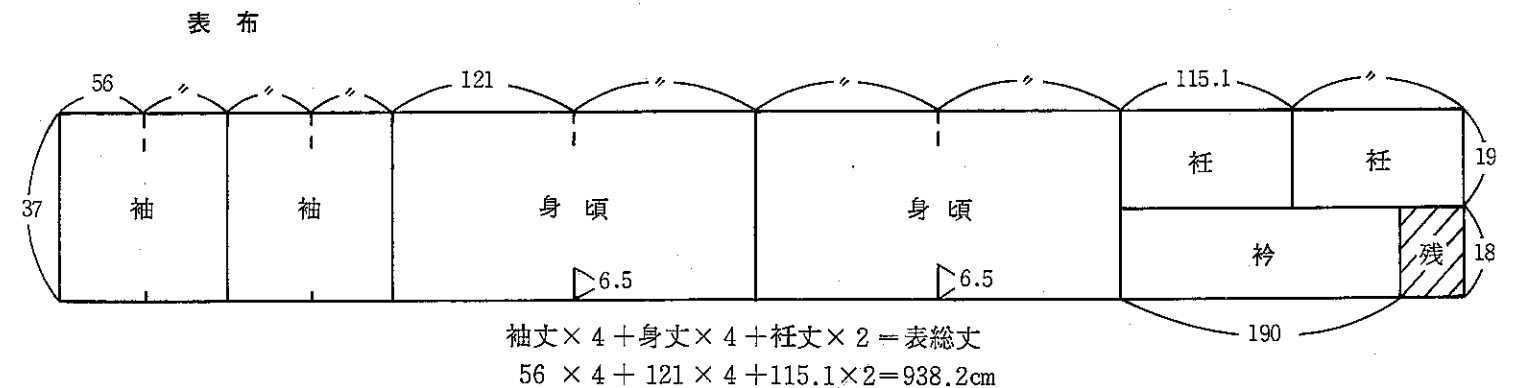
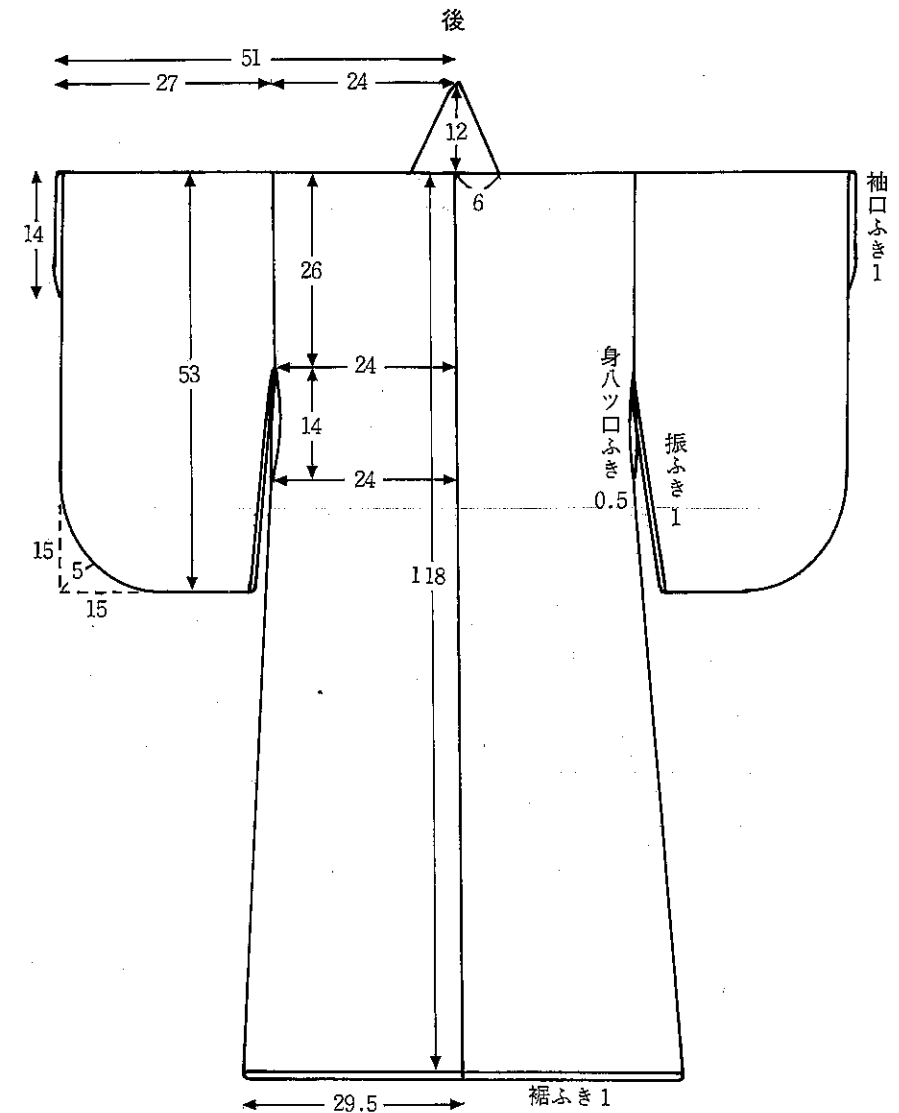
標つけ方

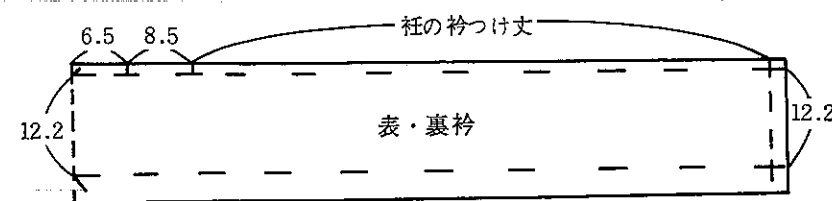
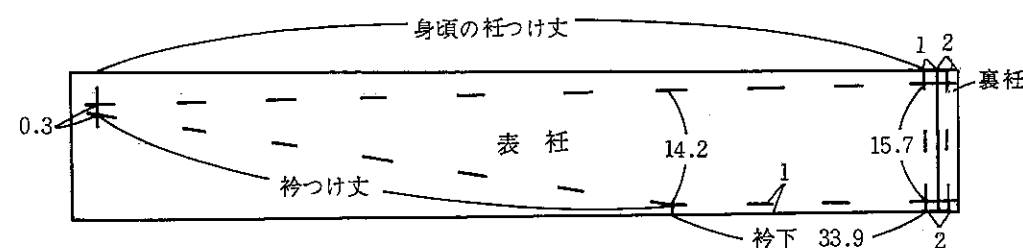
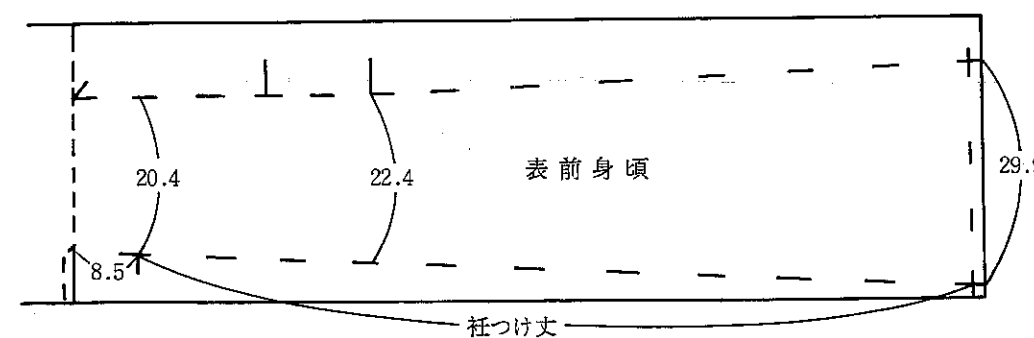
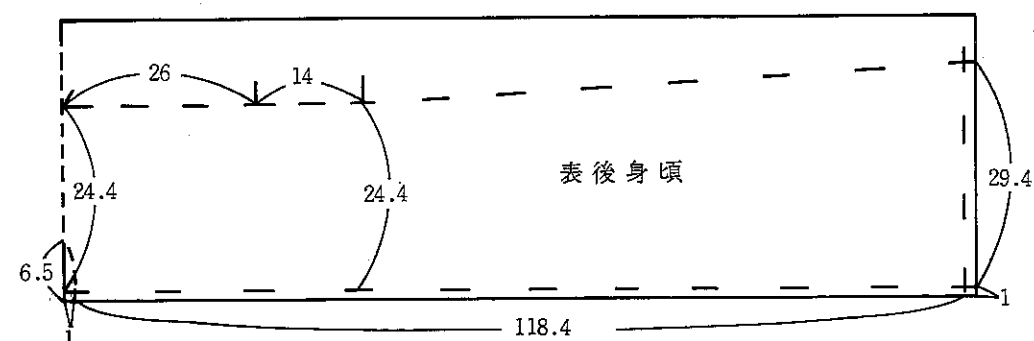
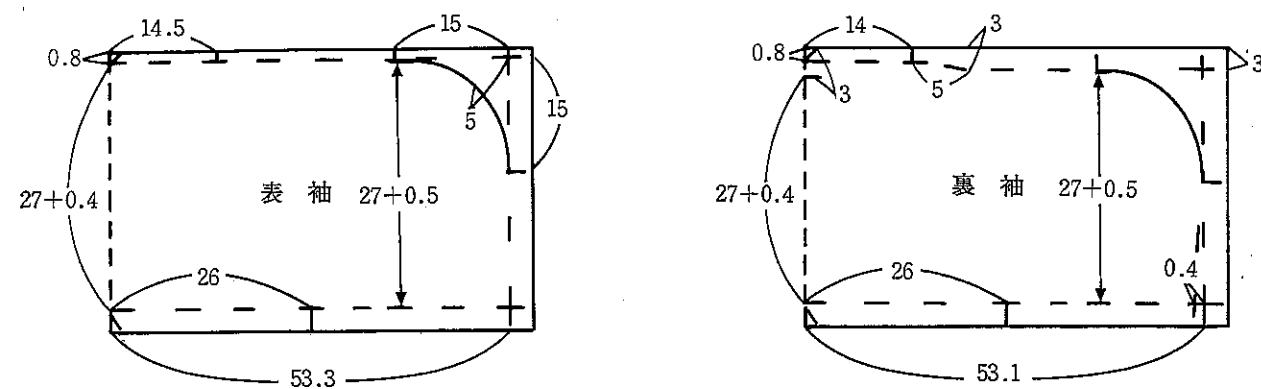
●身頃の背縫い、脇縫い、衤つけ、袖つけ、衤つけをそれぞれ模様合わせをして、糸標をする。

●袖には袖山、身頃には肩山標をつける。

●表袖、裏袖、表身頃、裏身頃、衤の表裏、衤の表裏の順に図のように標をつける。

●裏身頃の標つけは、丈を出ぶきの2倍（2cm）長くする以外は、表と同様にする。





縫い方

- 縫い糸は白色、赤色のS撚り絹糸を使用する。
- ぐし縫いの針目はすべて0.4cmとし、きせは0.2cmとする。

袖

- 表裏の袖口を縫い合わせ、きせをかけて表袖に折る。
- 袖口に含め綿を入れる。裏袖の縫い代の方に綿を当てて、とじつける。
- 含め綿は丹前綿を使用する。寸法は幅6cm、丈は袖口寸法の二倍に4cmを加えた寸法32cmを1枚、幅5cm丈同寸のものを1枚合わせる。

- 表へ返して、袖口ふき1cmを出して、しつけでおさえる。
- 袖口の四つ留めをする。留めは表内袖から針を出し、裏内袖のふき山、裏外袖のふき山、表外袖を縦にすくって、表内袖に戻って結ぶ。
- 袖口下から袖底を、表裏別々に縫う。縫い代はきせをかけ、内袖に折る。

- 袂の丸みを縫いしめて形を整え、表へ返してしつけをかける。

- 振りを表裏縫い合わせ、振りに含め綿として丹前綿を幅6cm、丈は振り丈の二倍に4cmを加えた約58cmに切ったものを、裏袖の縫い代に当てとじる。

身頃

表身頃の背縫い、脇縫い、衿つけをする。縫い代の折りは、背縫いは左身頃へ、脇縫いは前身頃へ、衿つけは衿の方へそれぞれきせをかけて折る。

衿をつけ、縫い代の折りは衿に返す。

裏身頃は表身頃と同様に、背縫い、脇縫い、衿つけ、衿つけをする。縫い代の折りは、背縫いは表身頃と反対にして、その他はすべて表と同様に折る。

裾合わせ

表身頃、裏身頃の裾を縫い合わせる。

襷先は襷形にせず、衿幅のところから自然に斜めにする。

縫い代は0.4cmのきせをかけ、表身頃へ折り返す。

裾にかくしびつけをする。針目は表身頃のきせ山から、0.5cm上ったところへ、衿幅は五等分、前幅と後幅は九等分して、背、脇、衿つけの各折り山へ0.2cmの針目を出す。衿下は、襷先5cmほど表裏合わせて縫い、表衿の衿下は標どおりに裏へ折って、しつけをかけておく。

身八つ口

- 留めをして、表裏の身八つ口を縫い合わせる。
- 留めは、表前身頃から針を出し、表後身頃、裏後身頃、裏前身頃を縦にすくい、逆の順に表前身頃へ戻して結ぶ。
- 身八つ口に、振りと同じように含め綿をとじつけ、表へ返してしつけをする。

袖つけ

- 四つ留めをして、表袖と表身頃を合わせて袖をつけ、きせをかけて、縫い代は袖の方へ折り返す。

- 裏袖つけも同様にする。

- 袖つけの四つ留めは、表袖から針を出し、表身頃、裏身頃、裏袖を縦にすくい、逆の順に表袖へ戻して結ぶ。

綿入れ

- 身頃と袖を裏返して、前身頃を内側に、後身頃を外側に、折りたたみ、裏後身頃を上にしておく。

- 吹止め真綿の中心と背を合わせ、裾の方は真綿を8cmほど出してのせ、肩の方は長く出しておく。

- 裾には袖口と同じように、丹前綿二枚を重ねた裾綿を入れ、ふきの山から1cm長く、裾綿を真綿で包むようにして折り返す。

- 余分な真綿は、袖口では袖口の含め綿に少し重ねてはさみで切り取る。

袖口より下は、幅と丈を3~4cm広く、袖の形にならって切り取る。

- 振りと身八つ口は、幅のところで切る。

- 肩の長く出したところは、幅の中央をまっすぐに、衿肩明きから10cm手前まで切り、左右の衿肩明きのところへ斜めに切り込みを入れる。

- 肩と脇に出ている真綿を、表身頃と裏身頃の間に差し込んでおく。

- 袖も、形にならって表袖、裏袖の間へ入れる。

- 肩の表裏の身頃の間から両手を入れて、左右の脇縫いの裾口を持ち、引き返して、裏前身頃を上に出しておく。

- 一方の前身頃に綿を入れる。

- 先に肩と脇から差し込んでおいた真綿を平らにのばし、長いところは4cmほど重ねて切り取り、不足のところは4cm重ねて足し綿をする。

- 袖も同様にする。

- 衿の部分は、衿の布と同じ寸法にして綿を切る。

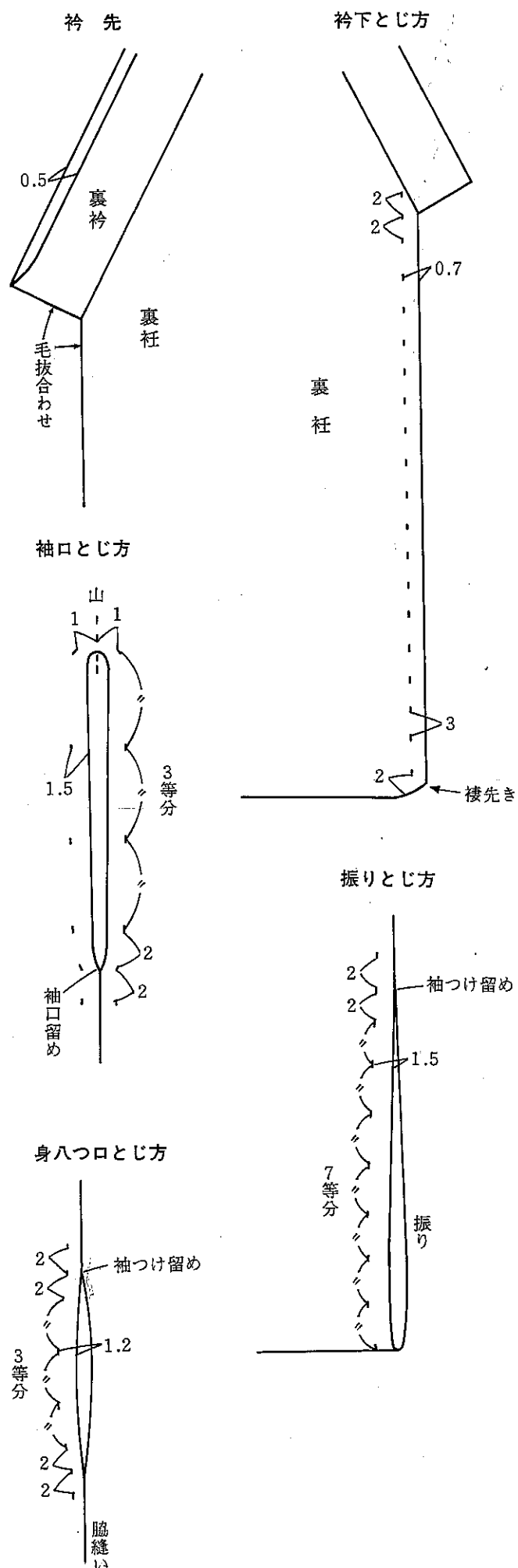
- 表前身頃を、綿の上にかぶせるようにして表に返す。
- もう一方の前身頃も同様に綿を入れる。
- 綿を入れた後、ふきを整えて上下をよく引き合わせる。
- 裾ふきを1cm出し、しつけをかける。
- 裏衿下で真綿を包み、図のように折り山から0.7cm内側を、針目0.2cm、間隔3cmでとじる。
- 表裏の衿下を、毛抜き合わせにしておく。

衿とじ

- 表裏の衿肩明き、衿下りを合わせ、衿つけの縫い目のきれをとじる。
- 衿先の留めをして、衿先は丈標より0.4cm先を縫う。
- 留めは表衿から針を出し、衿下の表裏、裏衿をすくって、表衿に戻して結ぶ。
- 表衿で真綿を包んで衿幅を整え、裏衿を0.5cm控えてしつけをかけてくれる。このとき衿先を襷形にする。

縦とじ

- 背縫い、脇縫い、衿つけの縦とじは、裾から上方へそれぞれ丈の三分の二までとじる。
 - とじ方は、表の糸で裏身頃の方からとじる。
- 表の縫い目のきわを、針目1.5cmで縫い代をすくい、裏の縫い目のきわに針を出し(裏の表から針目は見えない)次に裏を針目1.5cmにして縫い代の中をとおし、表の縫い代をすくう。これを繰り返して、表裏の縫い目をそろえてとじ合わせる。
- 袖口、振り、身八つ口の裏とじ方は、裏の縫い糸で図に示す寸法の位置へ、裏のみ針を出して、綿をすくうようにしてとじる。
 - 袖は、袖口留めから袂の丸みの手前までの間を、縦とじと同様に裏袖の方から表裏をとじ合わせる。
 - 裾とじは、先に裾合わせでかくしびつけがしてあるのではない。



なが かみしも
長 袴

かた ぎぬ
肩 衣

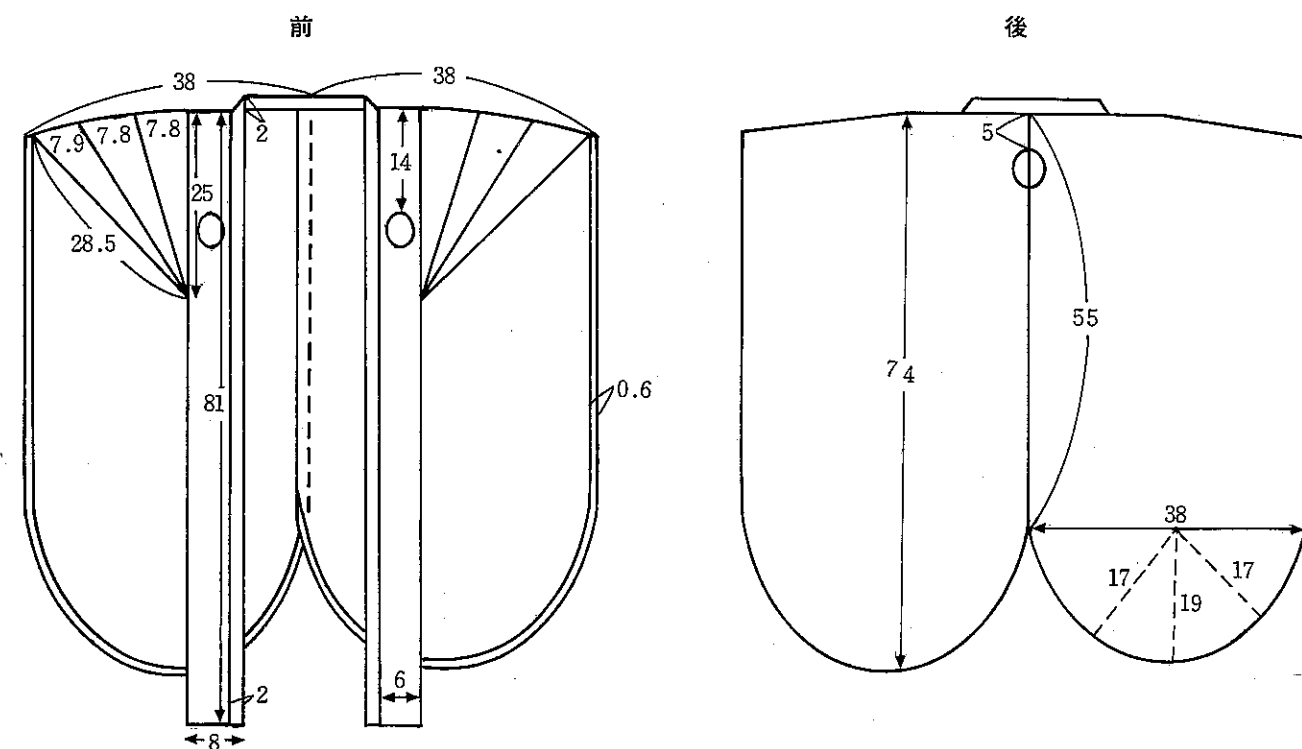
袴は室町時代の中頃から、主として武家の略装として着用された^{かたぎぬ}肩衣袴が発展し、桃山時代を経て江戸時代に公服化したものである。

麻の生地に^{かみしも}藍鼠、鼠等の地色に小紋を染め、背、左右の前衿、袴の腰板に家紋をつけた長袴のものが正式である。

鼠地鯨小紋に紋付の裂を使用する。

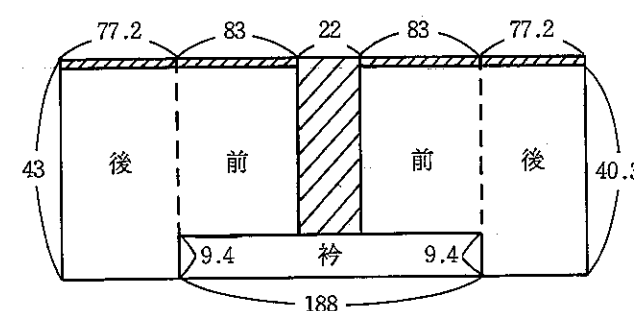
出来上り寸法

出来上り図の寸法のとおりである。



裁ち方

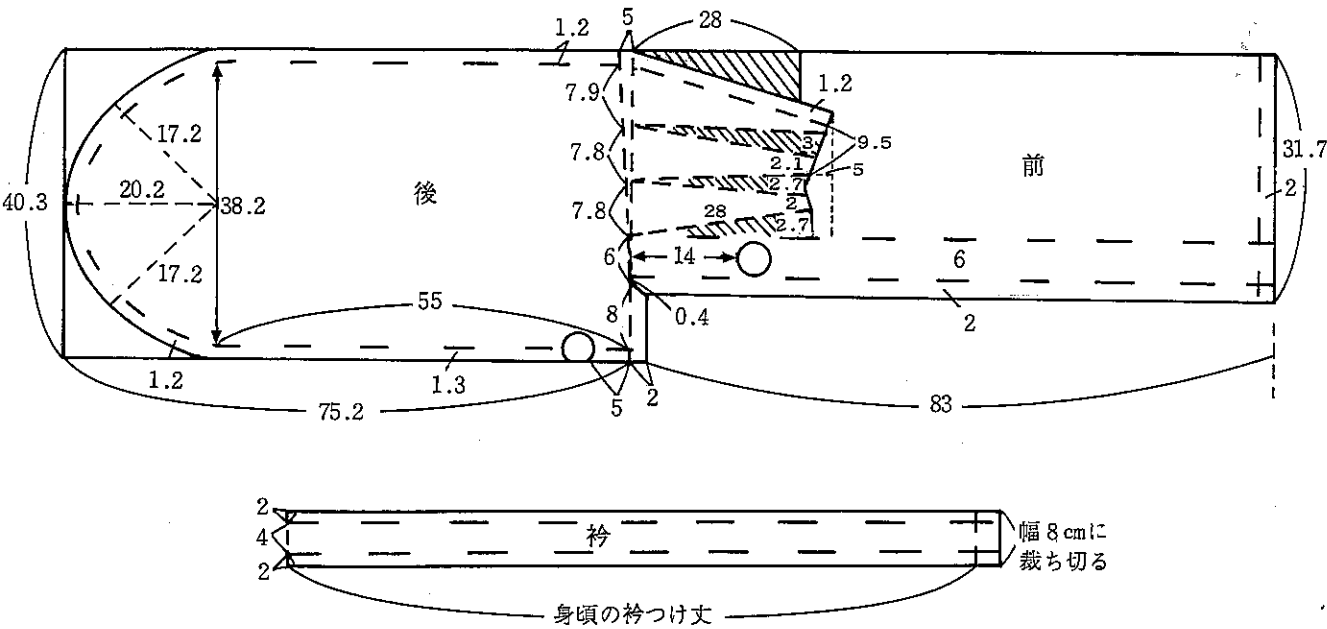
幅43cm丈342.4cmを使用し、裁ち図のように裁つ。



$$\begin{aligned} &(\text{後丈} + \text{前丈}) \times 2 + \text{補充寸} = \text{総丈} \\ &(77.2 + 83) \times 2 + 22 = 342.4\text{cm} \end{aligned}$$

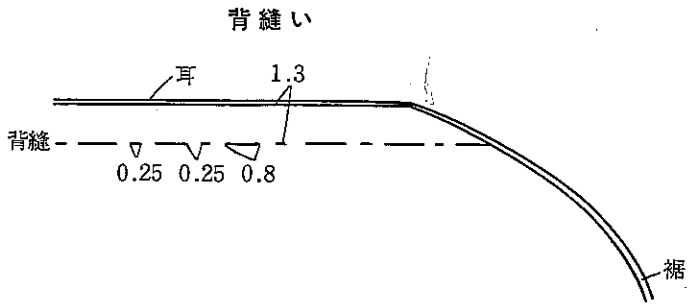
標つけ方

●標つけ方図のように標し、裾の丸みおよび脇を裁ちおとす。



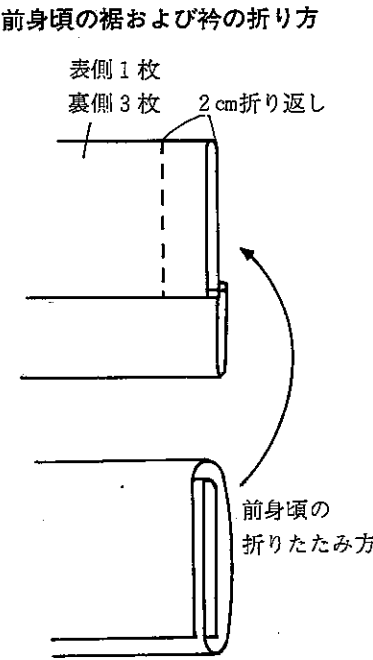
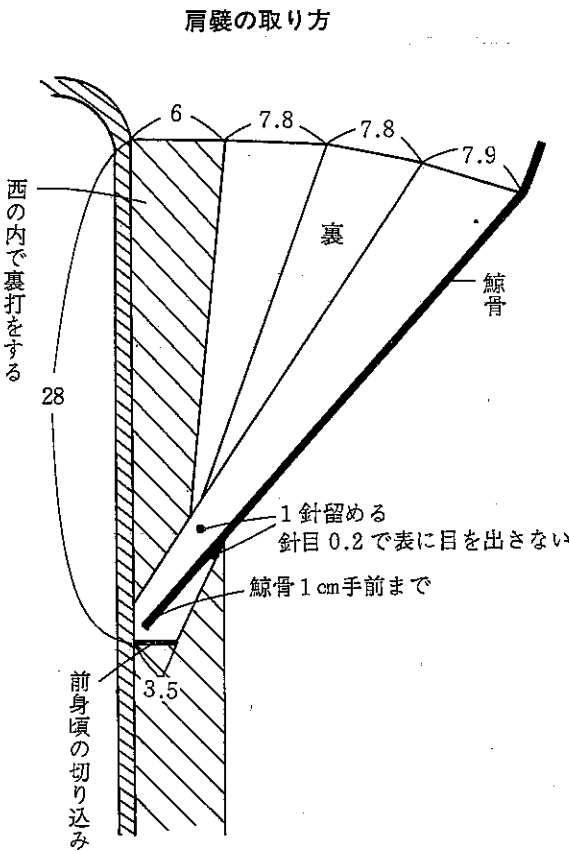
縫い方

- 縫い糸は同色S撚り絹糸を使用する。
- 背縫いは、右身頃を見て大針0.8cm、小針0.25cmで二目落として縫う。
- 縫い代は、0.2cmのきせを掛けて右身頃に返す。
- 前脇、後脇および裾を続けて、幅0.6cmの三つ折りにし、間隔1cm、針目0.1cmでくける。
- 鯨骨（代用品としてカラー用セルロイドを使用）を、幅0.4cmで丈80cmのものと60cmのものを二枚、丈の一方の端をそろえて貼り合わせる。
- そろえた方を前肩に入れる。
- 前裏布は幅8cm、丈42cmに裁ち（長袴の裁ち方で裁ち合わせる）、裏側へ西の内二枚を裏打ちする。



- 前幅を6cmに折りたたみ、表の裏へ幅8cm、丈81cmのシンモス芯を入れる。
- 裏側へは、肩山より裏布（裏打ちした布）を合わせる。
- 前身頃の裾は、標どおり図のように裏側へ折り合わせて、くけない。
- 前の肩の襷取りをする。
- 内側の襷は、裏打ちした布のところへのりで貼る。

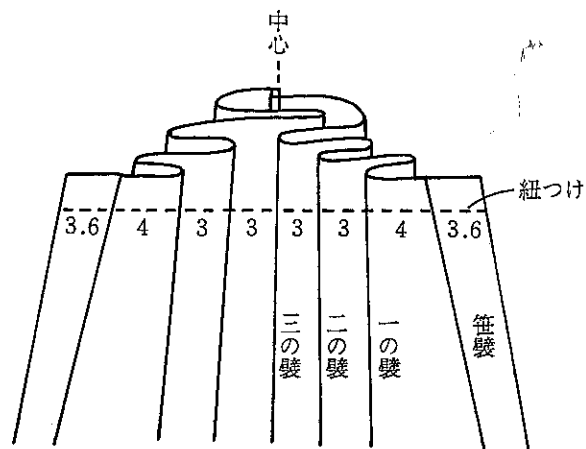
- 襷の先をはさむため、図のように前身頃へ切り込みを入れて、さし込む。
- 襷を平らに整えて、襷の元のところを図のように、針目0.2cmで裏に針目を出して一針で留める。
- 衿を幅標どおりに折り、衿で身頃をはさんで、針目1cmで表裏別々にくけて、衿つけをする。



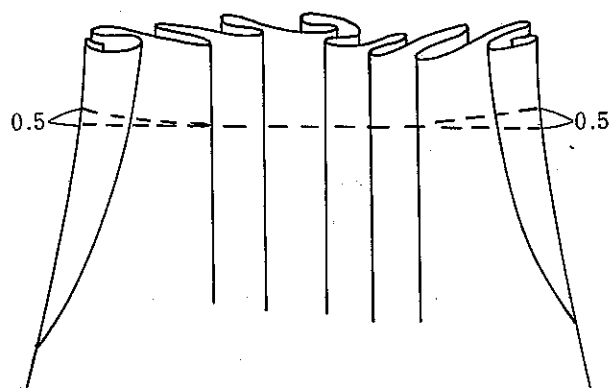


- 後布の裾、脇布および前布の裾を、幅1cmの三つ折りにして、針目0.1cm、間隔1.8cmで三つ折りぐけをする。
- ただし、相引側は前後とも4cmくけ残しておく。
- 脇布および前布を、袋縫いで接ぎ合わせる。
- 袋縫いの一度縫いの針目は0.5cmにして、二度縫いの針目は前布側は0.3cm、脇布の方は0.8cmにする。
- 縫い代は脇布の方へ折る。
- 前の両脚の胯上を外表にして、針目0.5cmで縫い合わせ、縫い代は右脚側へ折る。
- 後も同様に胯上を縫う。
- 前裆つけおよび後裆つけは、中表に合わせ針目0.5cmで裆つけをして、角に留めをする。
- 留め方は、裆から針を入れ、身二枚をすくって裆に戻して結ぶ。
- 前明きは、図のように表側より針目0.2cm、間隔2cmで耳ぐけをする。
- 胯下は、前後の右脚および前後の左脚を中表に合わせ、針目0.5cmで縫い合わせる。
- 襷取りは、まず後の右脚の襷山を折り、左脚の襷山標に重ねる。
- ふところ襷を、図のように中心の襷山に合わせ、裾は胯下の縫い目に合わせてまっすぐに折り、しつけをかける。
- 裆は左脚に入れる。
- 前はまず右脚の重ね幅の山を折り、しつけで押さえる。
- 三の襷(中心)の標を胯上の縫い目に合わせ、胯下も同様縫い目に合わせて中心を定める。
- 左脚の三の襷山を定めた中心に合わせて、しつけで押さえる。二の襷、一の襷の寄せ襷の幅を紐下で3cm、裾で4.5cmとして襷取りをして、しつけで押さえる。
- 相引を針目0.5cmで縫い合わせ、縫い代は後に折り、くけ残しの裾をくける。
- 後襷には表襷山より0.5cm内側に、裏からふところ襷を除いて、図のように腰立てから30cmの間を大針3.5cm、小針0.5cmの二目落としでとじる。
- 前紐つけは、紐布をかけ接ぎで接ぎ合わせ、木綿の芯を紐幅の二倍に裁ち、紐布に入れ、縫い代でくるみ、両端を縫ってから針目1cmでくける。紐の中心は32cmくけ残しておく。

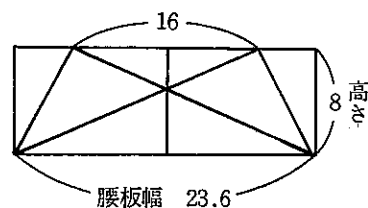
前の襷の取り方



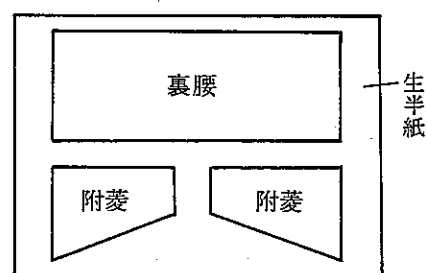
前紐つけ標



腰板紙の裁ち方

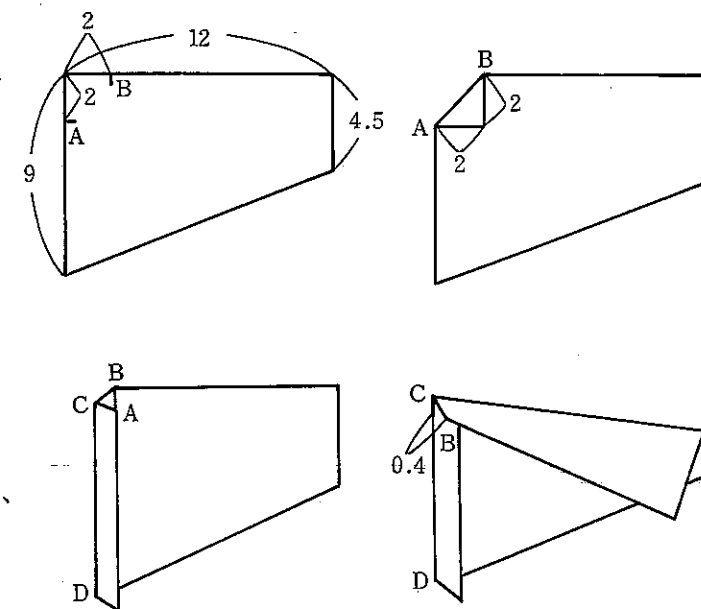


裏腰布・附菱布の裏打ちの仕方

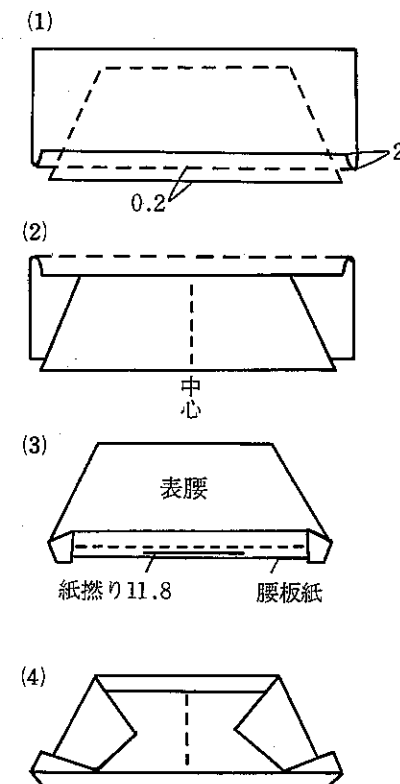


- 紐下標のところを、図のように脇で0.5cm上にし、脇幅と結び、縫い糸で仮りとじをする。
- 紐の中心を表の前中心に合わせ、針目0.5cmで紐つけをして、裏側をくける。
- 腰立ては、腰板紙(板目紙)を図のように腰幅23.6cm、高さ8cm、上部16cmに裁つ。
- 生半紙を幅3cmに切り、かたく撚って紙撚りを作り、腰幅の二分の一の長さに切る。
- 附菱の裁ち方は、幅12cm、高さ9cmとし、一方の高さをその二分の一の4.5cmとして、図のように裁ち切る。
- 附菱および裏腰の裏打ちの仕方は、まず生半紙をもみ、これを手で伸ばしておく。
- 裏腰は、腰布の丈を二分の一の12.5cm、幅を28cmに裁ち切る。
- 裏腰布および附菱布の裏の廻りに、浅く薄のりをつけ、もんでおいた半紙に図のように貼る。
- 乾いたらこてをかけて、布の形どおりに裁ち切る。
- 表腰の貼り方は、表腰布を裏腰布と同寸に裁ち、表腰布の中央と腰板紙の中央に標をつける。
- 表腰布の下方を2cmほど表に折り返し、こてで押さえる。
- 腰板紙の下方に1cm幅のにりを引き、表腰布の中央を腰板紙の中央に合わせ、このとき表腰布の折り山を腰板紙の下端より0.2cm上に図のように貼る。
- 腰板の裏の上部に1cmほどのりを引き、中央の標を合わせて、図のように布目を正しく貼る。
- 図のように左右を貼りつける。
- 用意しておいた紙撚りにのりをつけ、腰板紙の下端0.2cmのところに貼る。
- 腰板紙の裏の下端に1cmほどのりを引き、表腰布の折りを開いて、図のように形を正して裏に貼りつける。
- 裏腰および附菱の折り方は、まず裏腰に中央を標し、

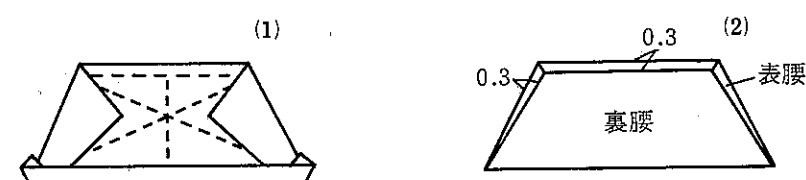
附菱の裁ち方・折り方



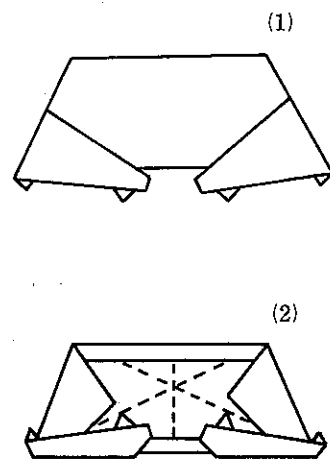
表腰の張り方



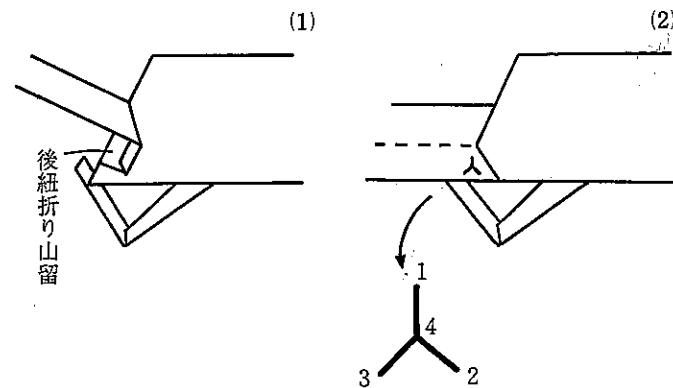
裏腰の折り方



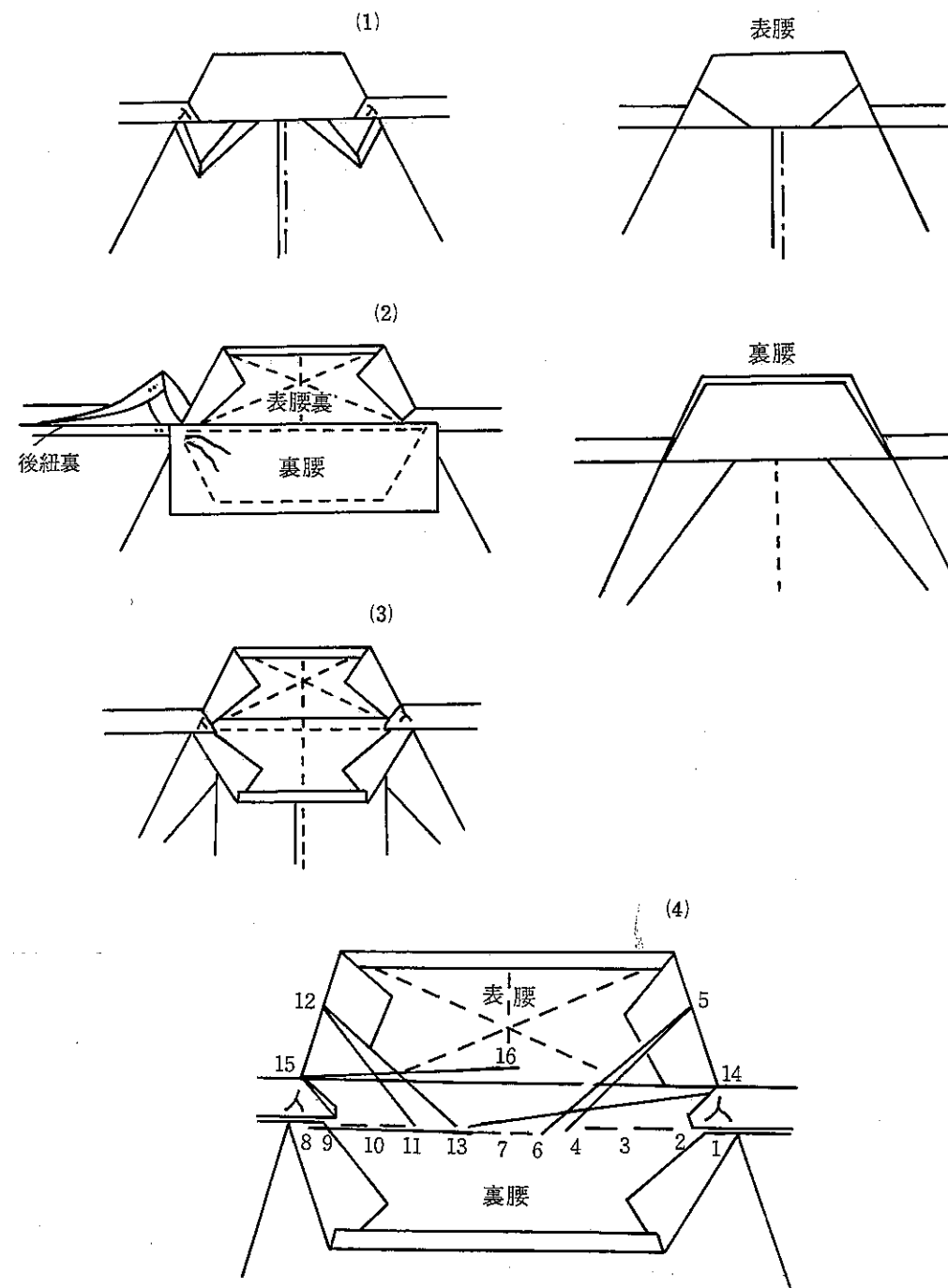
附菱のつけ方



後紐のつけ方



腰板のつけ方



上部の折り代を1cmとする。

●高さは表腰より0.3cmつめて標し、下幅を表腰と同寸に、上幅を両端で0.3cmずつつめて標をつけ、図のように折る。

●附菱は角から2cmをA・Bと標し、これを三角に折り、さらにBを1cmまっすぐ折り返し、図のようにAの角を0.4cmずらして、斜めに折る。

●出来上り図の附菱の寸法を表腰に標し、さきに折った附菱をその標に当てて、折り返りの分を腰板の裏に図のように貼りつける。

●後紐を前紐と同様に芯を入れてくける。

●二本の紐は、いずれも紐端の一方のみを縫い、他の一方は5cmくけ残す。

●腰板の下方から紐幅だけ上に標し、それより0.2cm下に紐幅の折り山を当てて、二本の撚り合わせ糸で、紐から腰板をとおして二度すくい、図のように留めをする。

●紐を下方に折り返し、紐で表腰の下方を包み、図のように表側のみとじつけ、裏側を離しておく。

●後布の腰つけ標より少し上をとじておく。

●腰つけ標に表腰を当て、位置と寸法を正し、中央と両端に標をつける。

●腰つけ標に、裏腰布の下幅の折り山を裏から当てて、0.2cm内側を1cmの針目でとじつける。

●腰板を腰つけ標に当て、表を見て待針を打ち、腰つけの留めをする。

●留めは、裏腰の折り山を開き、その角に針を出し、投および附菱の折り山をすくい、つぎに紐の表側を布目にそって小針に縦にすくい、裏側も同様に縦にすくって、最初の裏腰に戻って結ぶ。

●留めの針を紐に出し、くけ残しをくける。

●裏腰の折り込みを紐の中に入れ、表側と同様に図のように留めをする。

●二本の撚り合わせ糸で、裏腰の右端から図に示す順序で表には小針に、1から4の針目を附菱の中に入れるようにする。

●5の針は、附菱の高さのところで腰板の裏側から斜めに針を出し、附菱の角を裏から小針にすくい、再び腰布をすくって6、7と針を出す。

●左の端から図のように8から13まで、前の順序にならって針を出す。

●14の針は、最初紐山を通して表腰に針を出し、小針に附菱を縦にすくって裏に出し、裏腰を横にすくい、腰板を斜めに通して針を抜き、15の針を14と同様に留める。

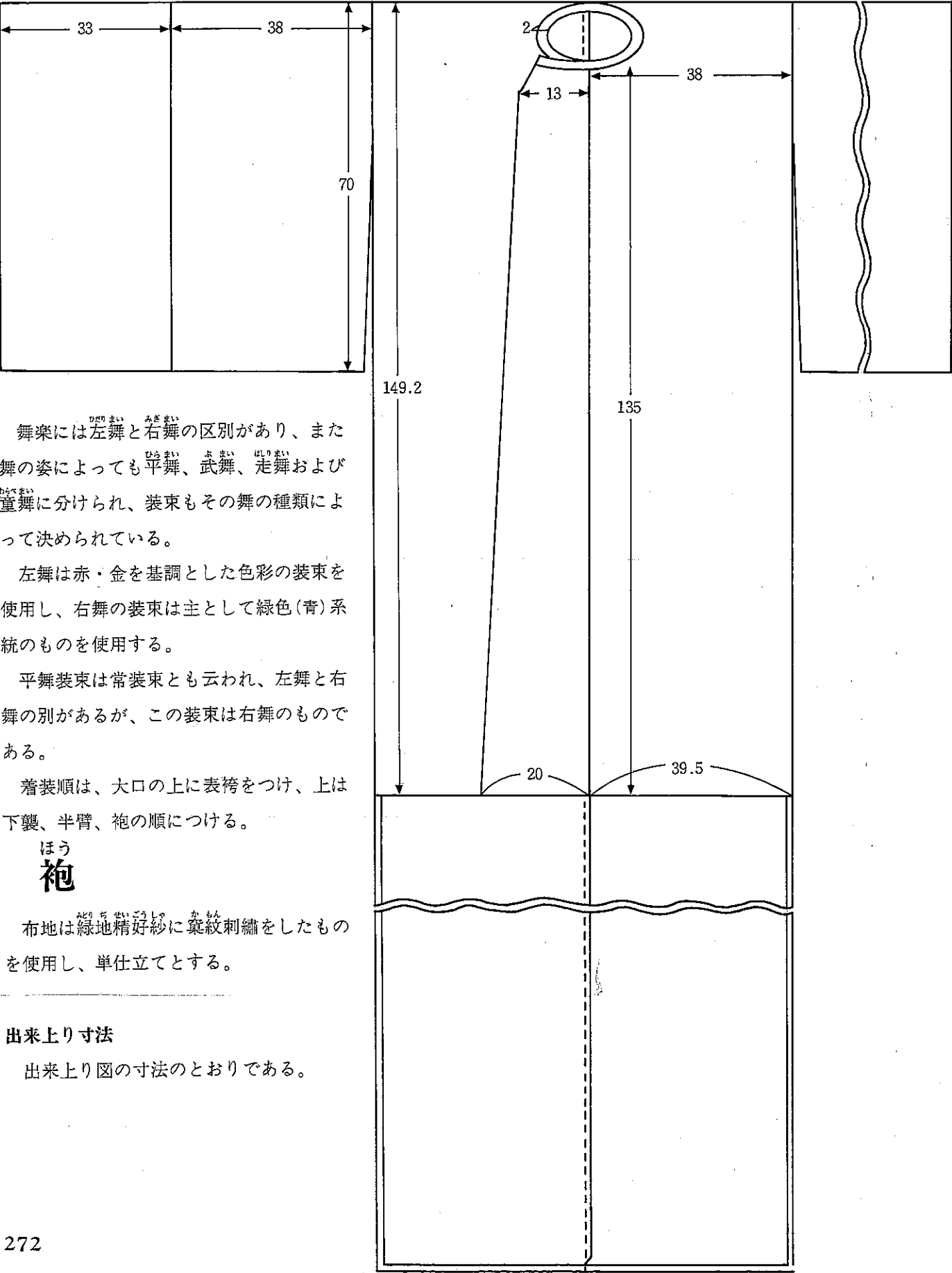
●16の針は、14より15にわたした糸をからめ、縫い込みをすくって留めておく。

●ただし、7の針目は腰板の中央に出し、6と13は附菱の端と7の針の中央で紙撚りのきわに正しく小針に出す。

●裏腰の周囲に、0.5cmほどのりを引き、角をよく整え、表裏を正しく貼り合わせる。

ひら まい しょう ぞく
平舞装束

前



舞楽には左舞と右舞の区別があり、また舞の姿によっても平舞、武舞、走舞および童舞に分けられ、装束もその舞の種類によって決められている。

左舞は赤・金を基調とした色彩の装束を使用し、右舞の装束は主として緑色(青)系統のものを使用する。

平舞装束は常装束とも云われ、左舞と右舞の別があるが、この装束は右舞のものである。

着装順は、大口の上に表袴をつけ、上は下襲、半臂、袍の順につける。

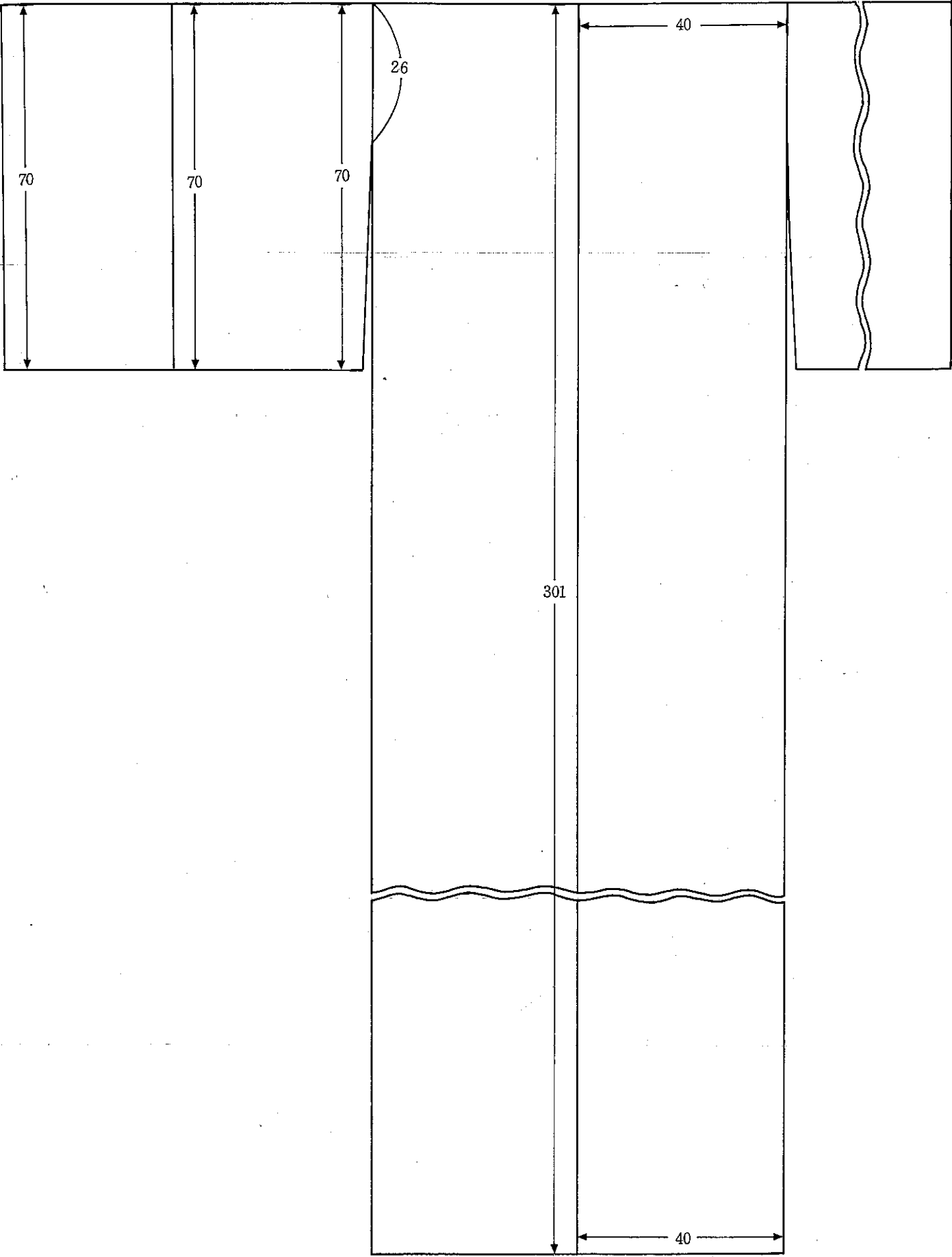
ほう
袍

布地は緑地精好紗に窠紋刺繍をしたものを使用し、単仕立てとする。

出来上り寸法

出来上り図の寸法のとおりである。

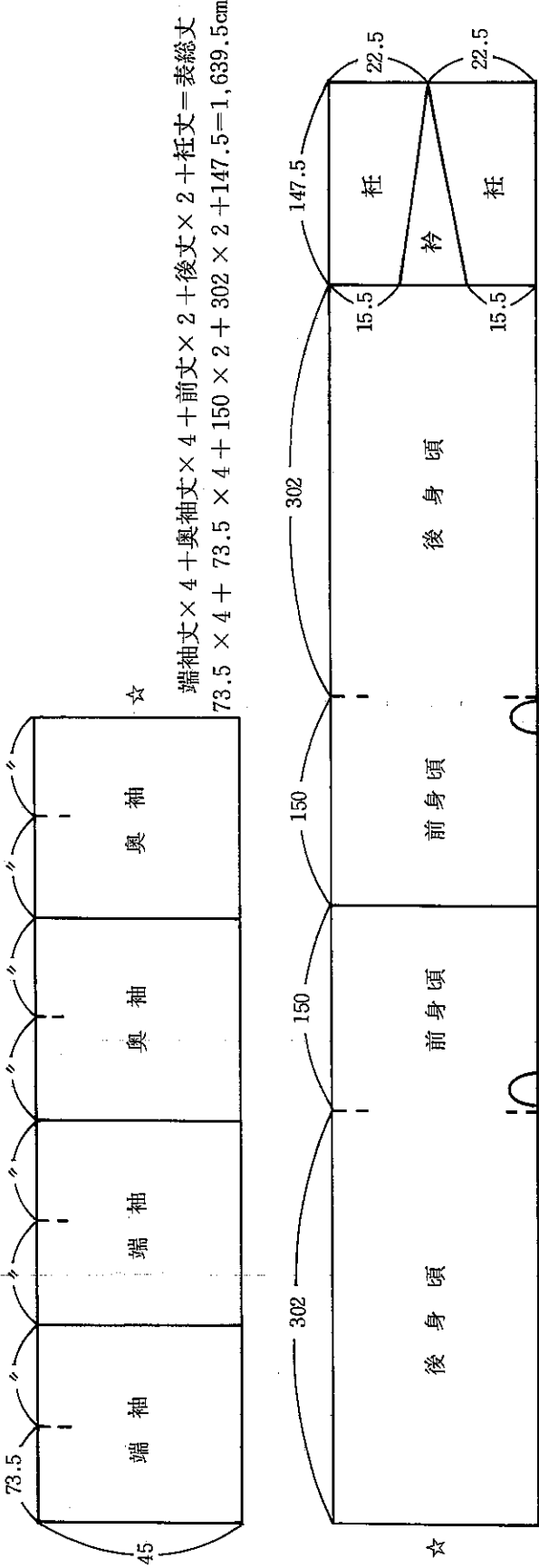
後



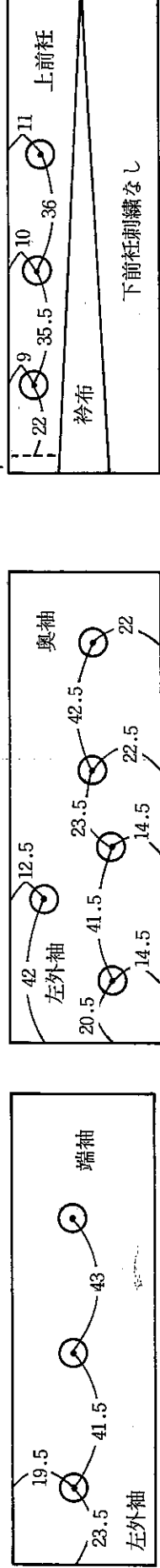
裁ち方

●窠紋刺繍配置のため、あらかじめ窠紋配置図のように袖四枚、身頃二枚、衿二枚をそれぞれの寸法に裁ち切っておく。

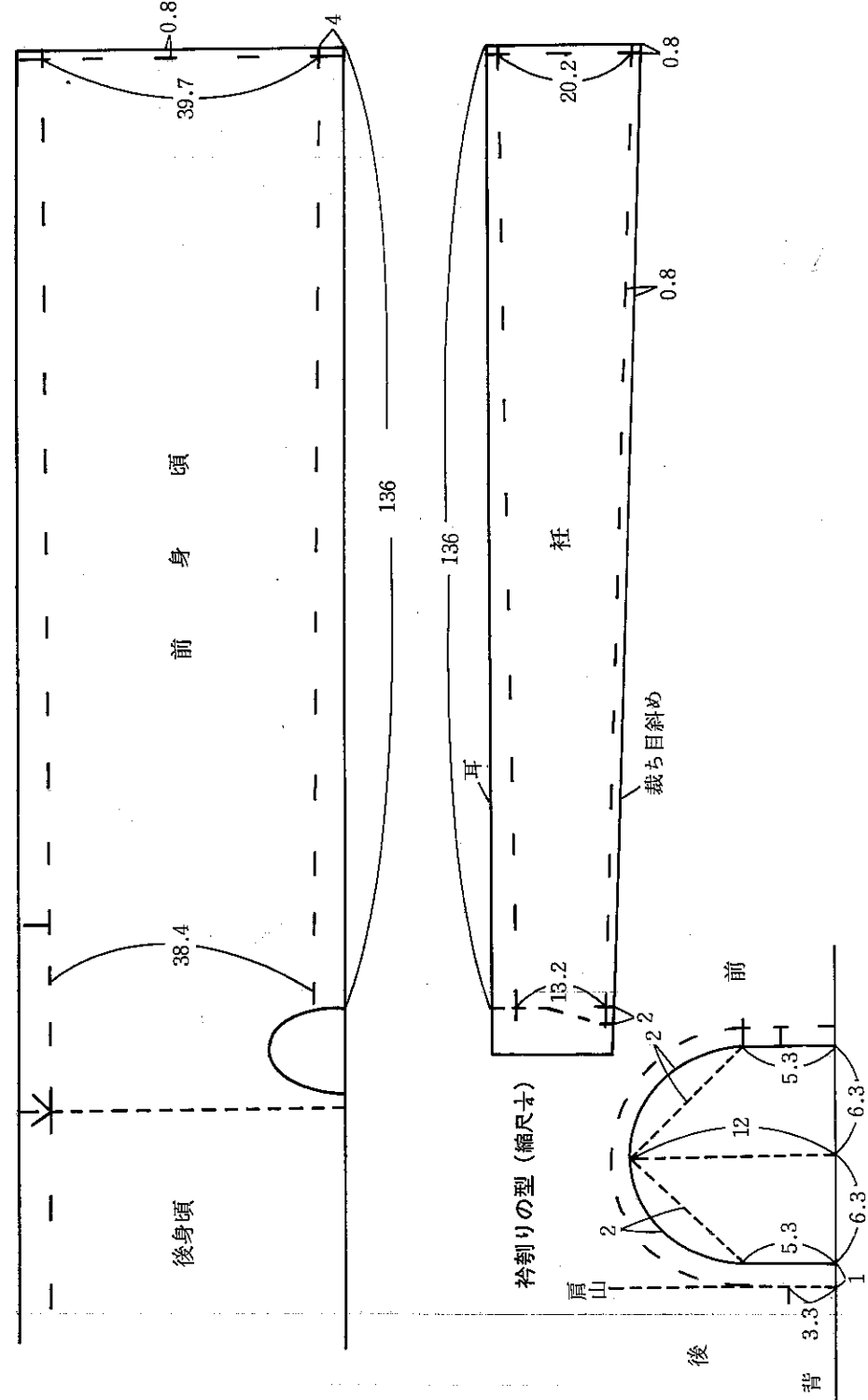
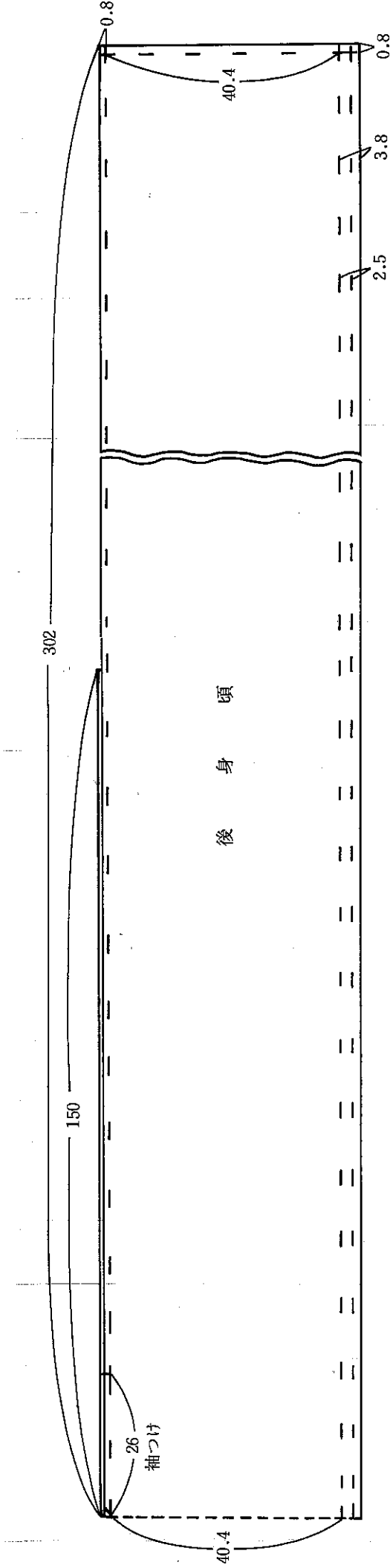
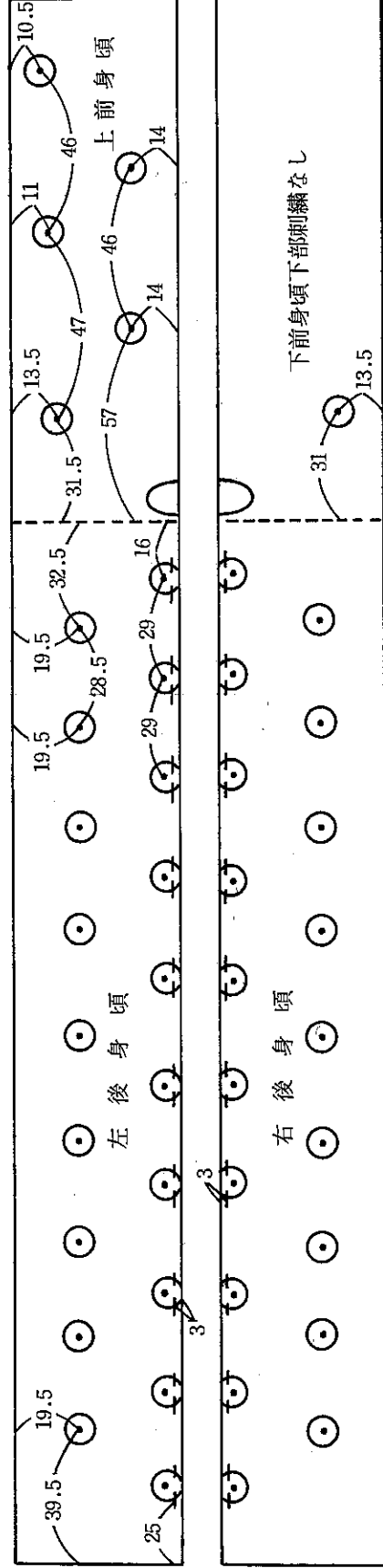
●用布の総丈は幅45cm、丈1639.5cmを使用する。



模様配置



右の端袖および奥袖の模様配置は左と反対になる。



標つけ方

- 端袖、奥袖を図のように標をつける。
- 衿割りの型紙を図のようにつくる。
- 身頃は背縫いの窠紋をよく合わせておく。
- 後身丈302cm、前身丈150cmとして布を置き、図のように標つけをする。
- 後身頃を開いて、前身頃に衿割りの標をつけて裁ち落とし、裾の標と衿つけの標をする。
- 衿は図のように標をつける。

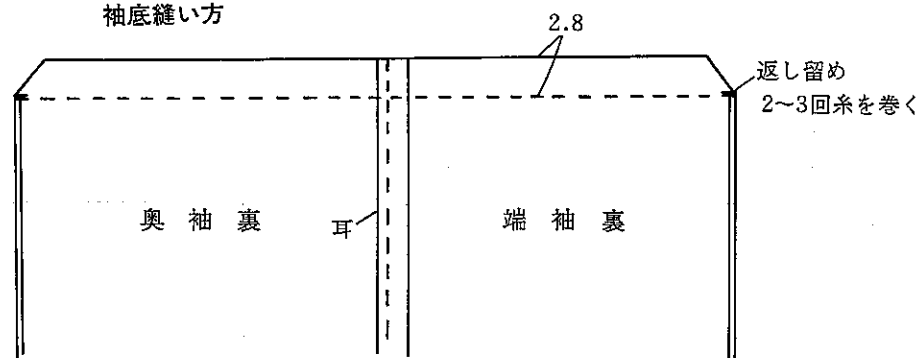
縫い方

- 針目は0.5cm～0.7cmくらいで縫う。
- 袖口、振り、後身頃および前身頃の裾、脇、衿の端と裾は糸ひねりをする。糸ひねりはひねり代0.8cm、0.5cm幅にのりをつけ、出来上り幅0.2cmにひねり、針目0.1cm、間隔0.5cmでくける。

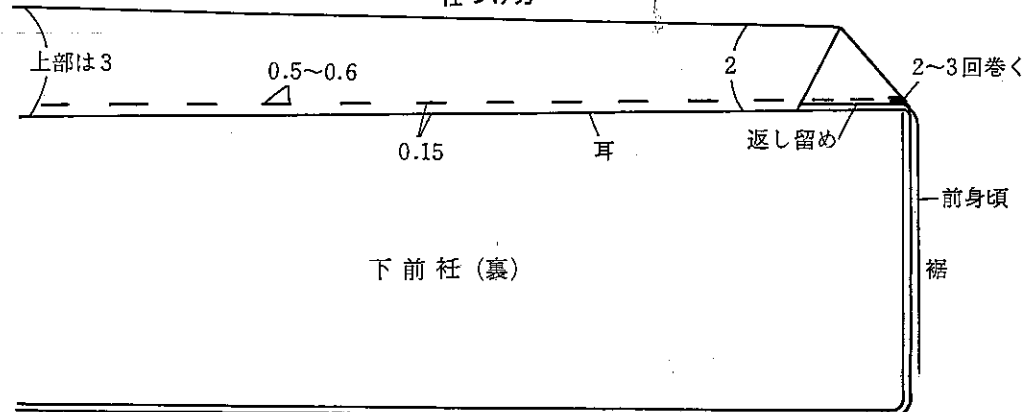
袖

- 端袖と奥袖を標どおりに合わせ、端袖の縫い代で奥袖の縫い代をくるみ、図のように縫い合わせる。0.2cmのきせをかけ、縫い代を端袖の方へ折る。
- 袖底は袋縫いで、一度縫いは表より縫い代1cmで縫う。このとき、両端を斜めに折っておく。
- 裏へ返して標どおりに縫って、縫い代は0.3cmのきせを

袖底縫い方



衿つけ方



かけ内袖へ折る。

身頃

- 背縫いは袋縫いにする。
- 一度縫いは表を出して縫い代1cmで縫う。裏へ返して窠紋を合わせ、裾は袖底と同様三角に折って、標どおりに二度縫いをする。0.2cmのきせをかけて、縫い代は左身頃に折る。

衿つけ

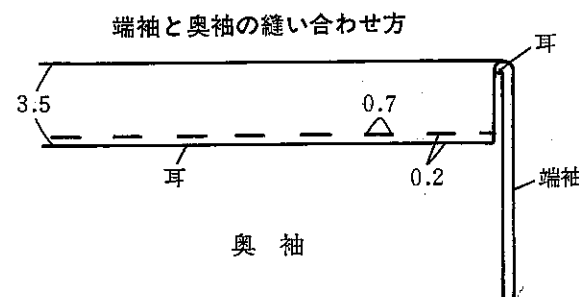
- まず身頃と衿の標を合わせ、つぎに身頃の縫い代の耳を衿つけの標から0.15cm出して合わせる。
- 身頃の縫い代で衿の縫い代をはさんだようになる。
- 裾を図のように三角に折って、衿つけをする。縫い代は0.2cmのきせをかけて衿に折り返す。

袖つけ

- 袖と身頃の標を合わせて袖つけをする。0.2cmのきせをかけて、縫い代は身頃へ折り返す。

衿の作り方

- 西の内六枚を使う。



- 衿布を幅8cm、丈80cmに裁ち、西の内を二枚ずつ貼り合わせて80cmの長さにして、三枚作る。

- 三枚を薄のりのべたのりで貼る。乾いてから幅を二つ折りにして、7.7cmの幅に裁ち切る。

- 図のように2cmの衿幅に折りあげる。

衿つけ

- 上前衿、下前衿の上部を図の寸法に裏へ折ってしつけでとじておく。
- 衿つけは、表裏の衿で身頃をはさみ、裏衿の方から身頃と表衿をすくいながら、1.5cmの間隔でまつりぐけをしでつける。

受緒ととんぼ頭の作り方

- 西の内を幅4cmに切って、紙捻りを丈28cmくらいに作る。

- 布は幅3cm、丈50cmに裁って幅の一方を折って(出来上ったとき縫い目が出ないように)紙捻りにのりをつけながら巻きつける。

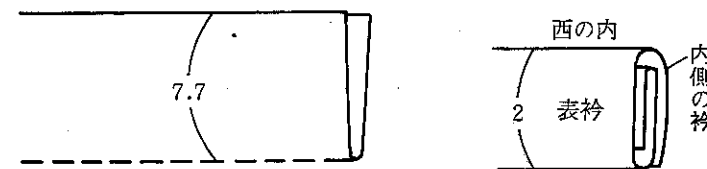
- 受緒は乾かないうちに、図のように捻り合わせる。

- とんぼ頭はしゃか結びにする。(東帯の袍参照)

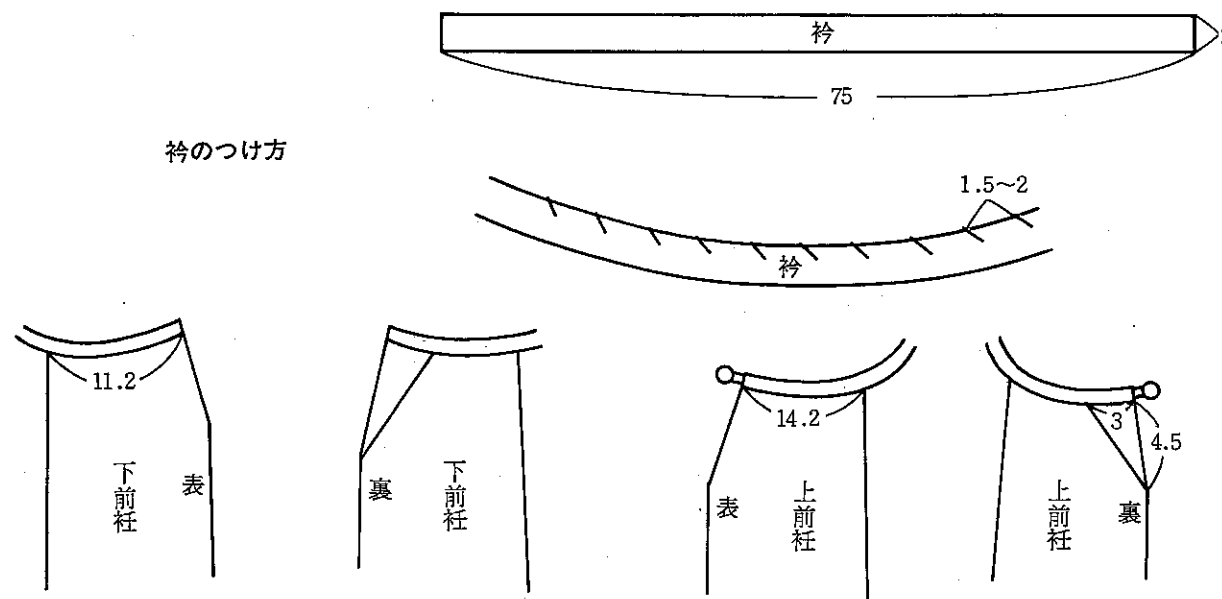
受緒ととんぼ頭のつけ方

- 図の寸法の位置に、白色S捻り太口の絹糸を一本どりでとじつける。

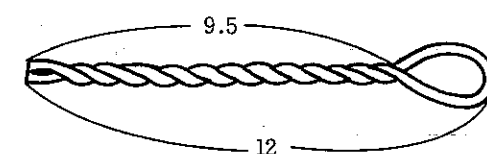
衿の折り方



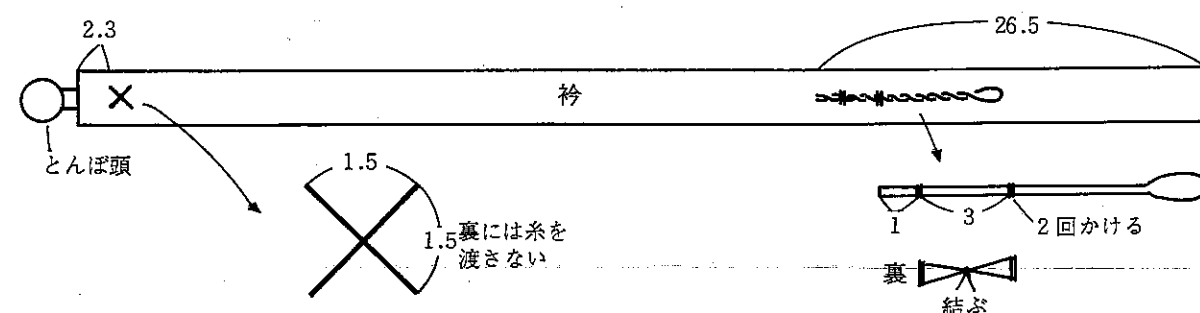
衿のつけ方



受緒

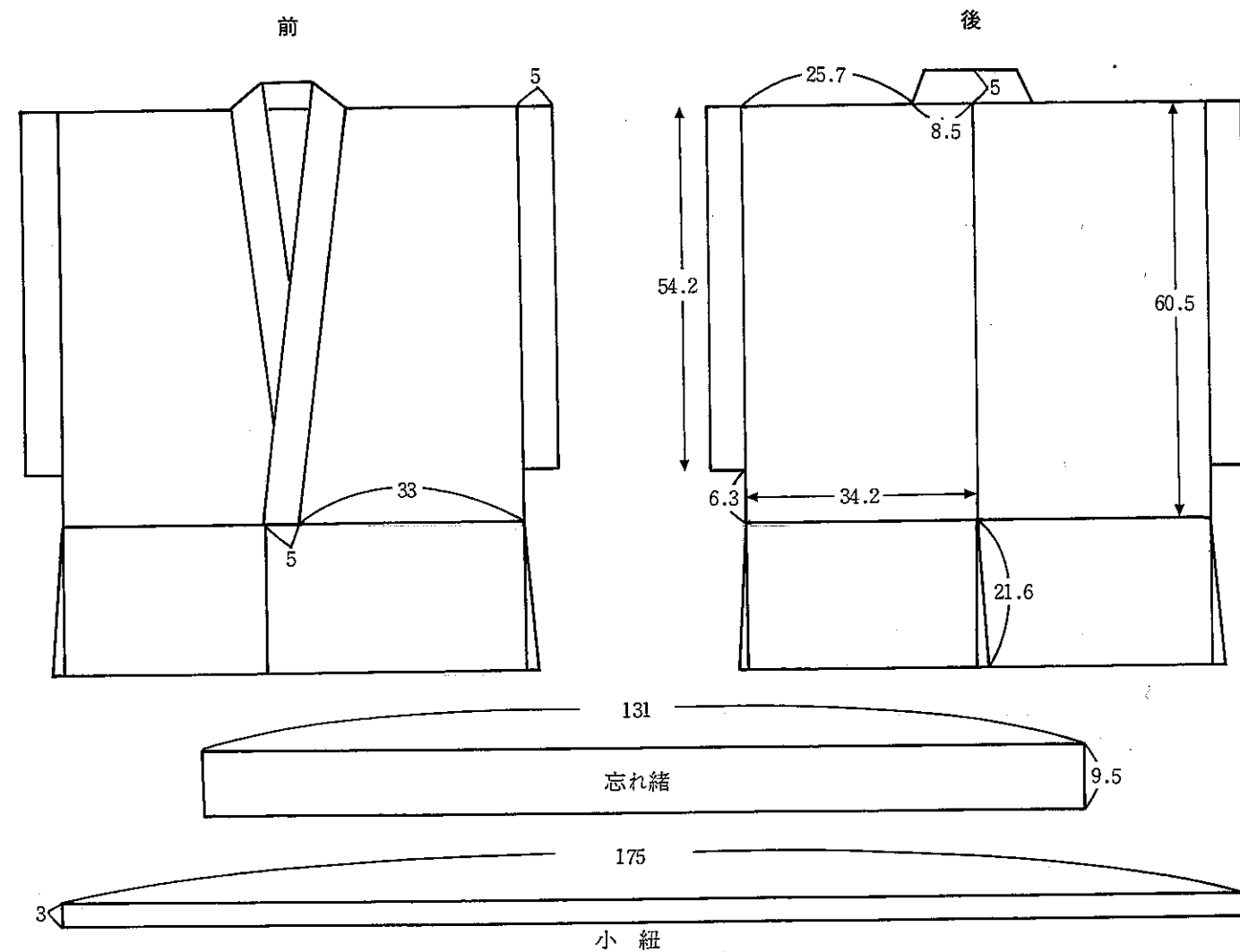


とんぼ頭と受緒のつけ方



はん び
半 臂

表地には三重襷に向鳳凰と桐の模様を刺繍した黒羽二重を使用し、裏は浅黄地羽二重を使用する。



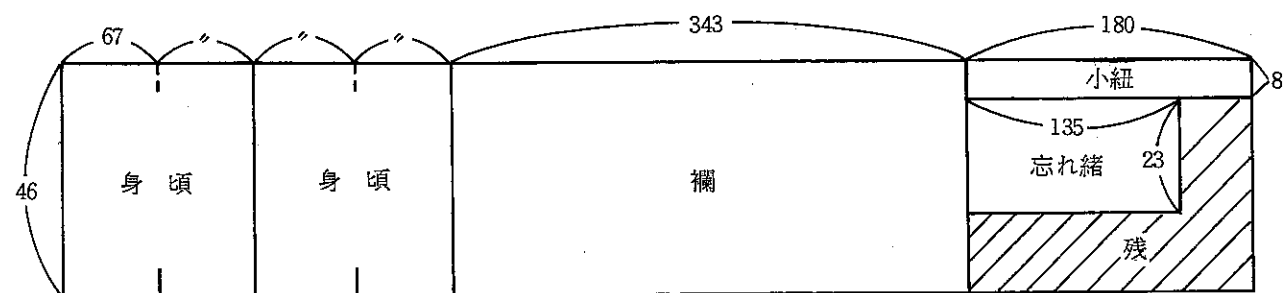
出来上り寸法

出来上り図の寸法のとおりである。

裁ち方

●表には46cm幅の黒羽二重を791cmと、40cm幅の緑地錦を155cm使用し、裏には46cm幅の浅黄地羽二重を268cm使用し、裁ち方図のように裁つ。

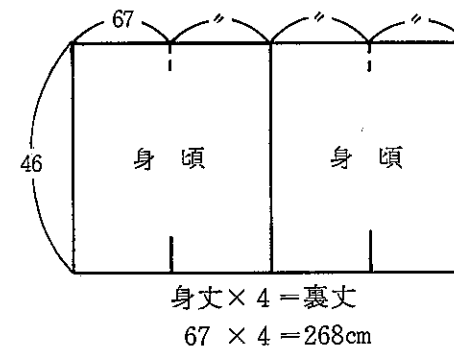
表 布



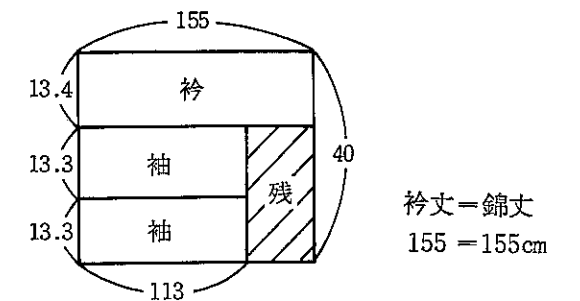
$$\text{袖丈} \times 4 + \text{襦丈} + \text{小紐丈} = \text{表総丈}$$

$$67 \times 4 + 343 + 180 = 791\text{cm}$$

裏 布



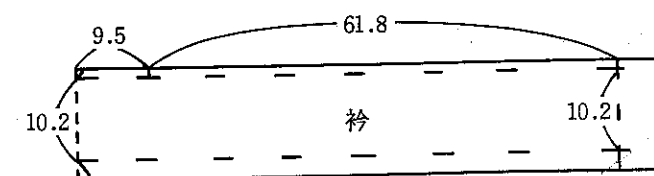
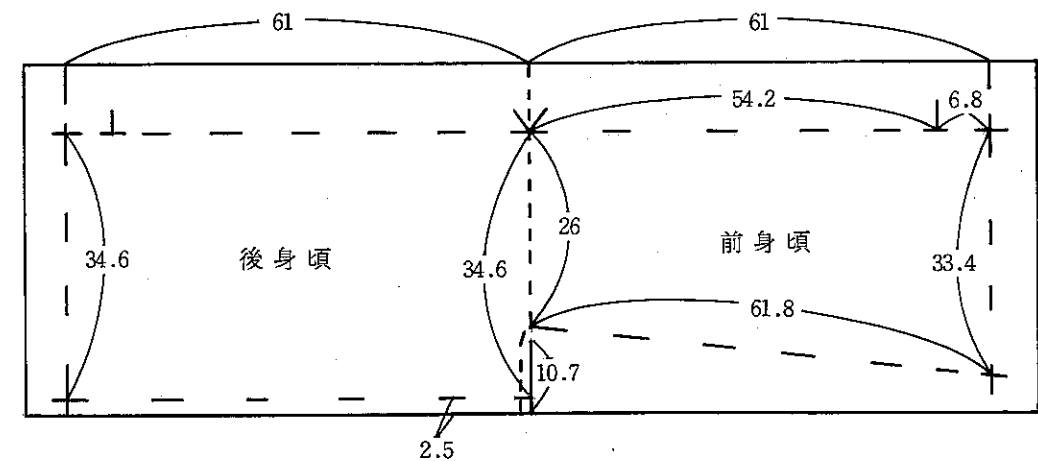
衿と袖



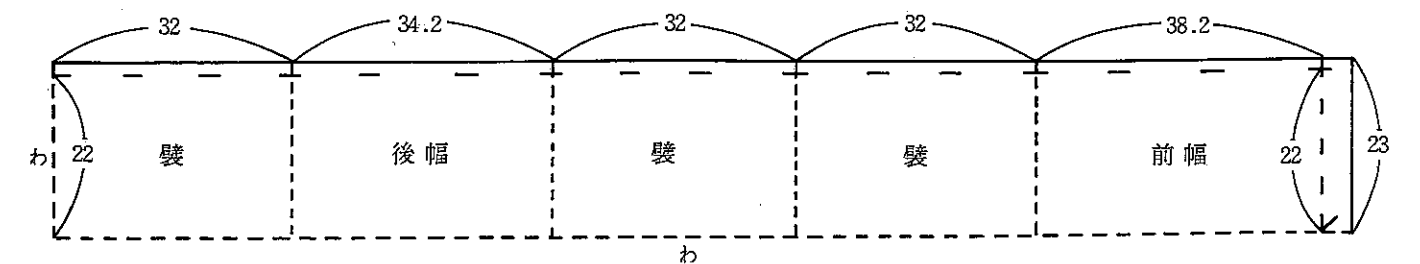
標つけ方

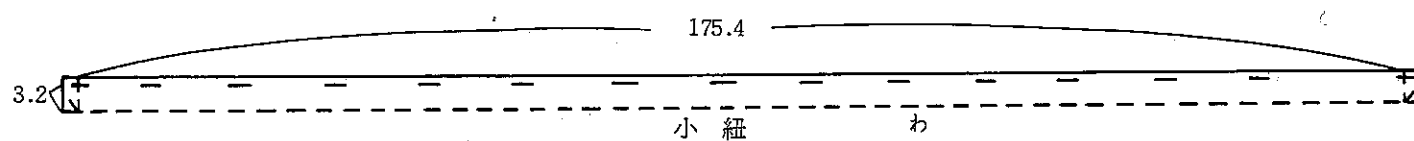
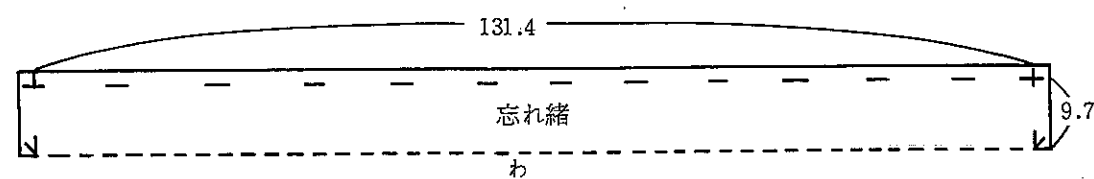
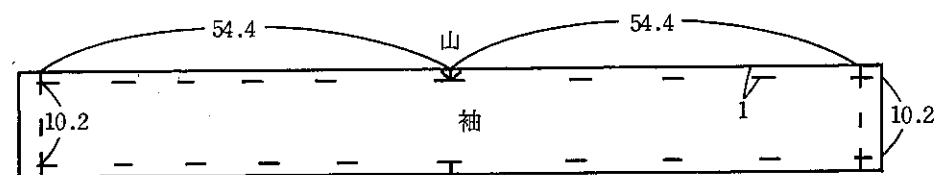
- 身頃の標つけは、背の部分で刺繍の模様がずれないように注意して、肩山および背縫い代を決める。
- 身頃の標つけは表と裏同じにつける。
- その他は図のように標をつける。
- なお、襦は布幅を二つ折りにして、幅および丈の標をつける。後中心と脇に襦の標をつける。

身頃 (表裏同じ)



襦



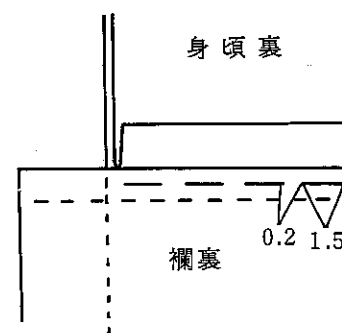


縫い方

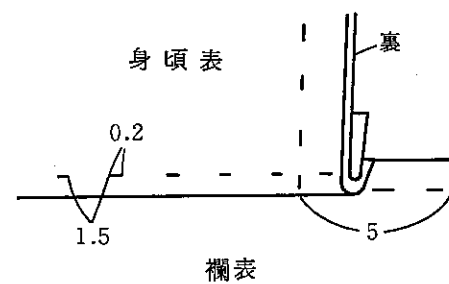
- 縫い糸は黒色絹手縫糸を、二本燃り合わせて使用する。
- 背縫いは、右身頃の裏表を標どおりに合わせてしつけで押さえ、それを左身頃の表裏ではさんで、0.6cmの針目で四つ縫いにする。0.2cmのきせをかけて表に返す。
- 脇は表裏別々に縫って、縫い代は0.2cmのきせをかけて前身頃へ折り、さらに袖つけ位置で後身頃の縫い代を0.2cm出して、縫い代がつれないように斜めに折りをつけ、表と裏を1.5cmの針目でとじ合わせる。
- 襦の両端を、標どおりに縫い合わせ、0.2cmのきせをかけて表に返し、毛抜き合わせに端を整えてから、図のように後中心と脇に襷をたたむ。
- 襦の両端を、前身頃の出来上り幅標より衿つけ分5cm出して、0.5cmの針目で身頃と縫い合わせる。縫い代は、0.4cmのきせをかけて身頃の方に折り、折り山から0.6cm

襦のつけ方

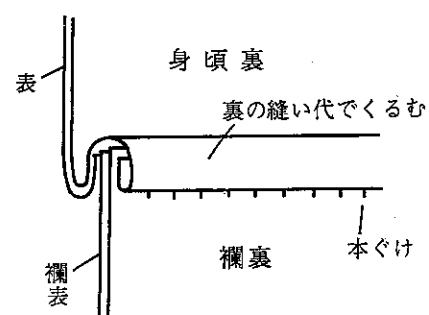
(1)



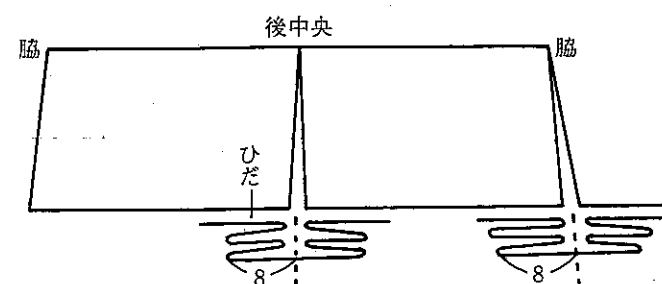
(2)



(3)



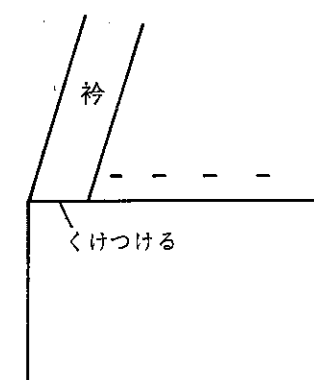
襦の襷たたみ方

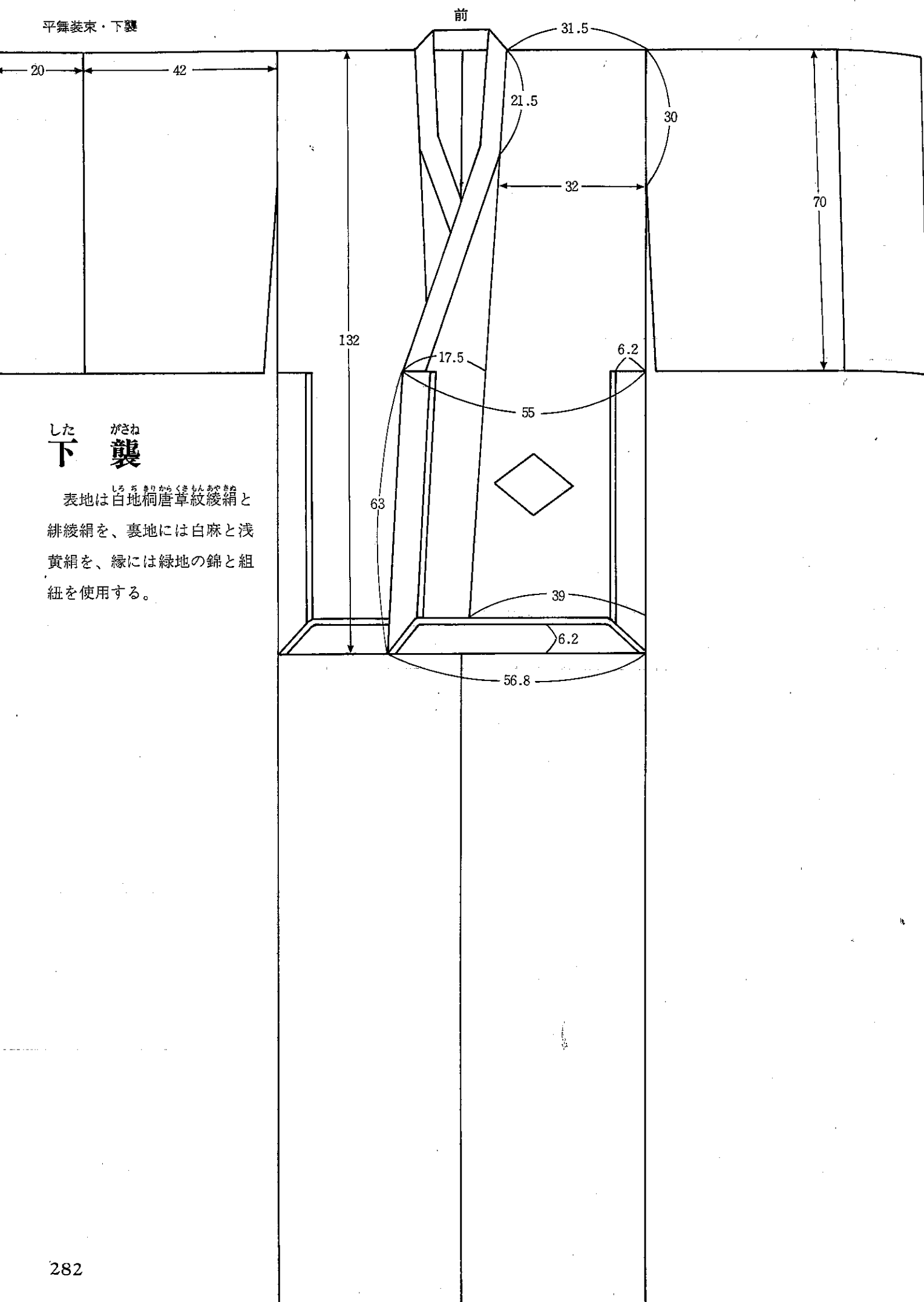


上を、0.2cmの針目1.5cmの間隔で伏せ縫いをする。身頃表布と襦の縫い代を身頃裏布の縫い代でくるみ、0.6cmの針目で本ぐけをする。

- 表、裏の身頃の衿肩廻りと、前幅の標をよく合わせ、しつけで押さえて衿つけをする。
- 衿つけは0.5cmの針目で縫い、0.2cmのきせをかけて、縫い代は衿の方に折って本ぐけをする。
- 出来上り幅に裏衿を折り、本ぐけをする。
- 衿先は出来上り幅に折って、図のようにくけつける。
- 袖は袖底を標どおりに縫い合わせ、0.2cmのきせをかけ、縫い代は内袖の方へ折る。
- 表裏をしつけ糸でとじ合わせた身頃と袖を縫い合わせ、縫い代は0.2cmのきせをかけて袖の方に折り、袖幅5cmに幅を整えて、裏身頃へ本ぐけでくけつける。
- 忘れ緒、小紐とも丈の中心で5cmの返し口を残して、標どおり縫い合わせ、縫い代は丈を先に、幅は後にそれぞれ0.2cmのきせをかけて折り表に返し、形を整える。
- 縫い残した返し口は、出来上り幅に折り本ぐけをする。

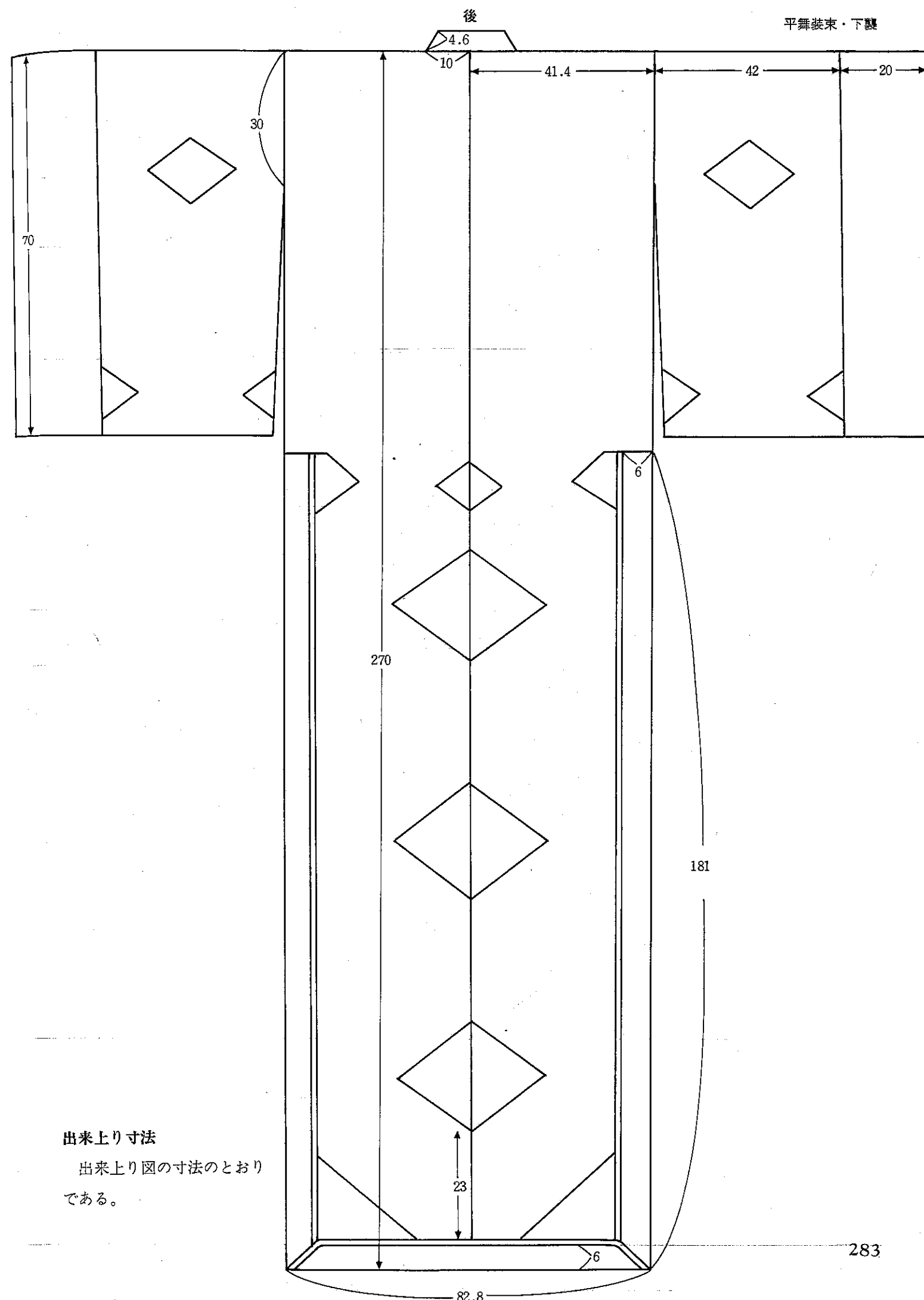
衿先の始末





した 下襲

表地は白地桐唐草紋綾絹と
緋綾絹を、裏地には白麻と浅
黄絹を、縁には緑地の錦と組
紐を使用する。

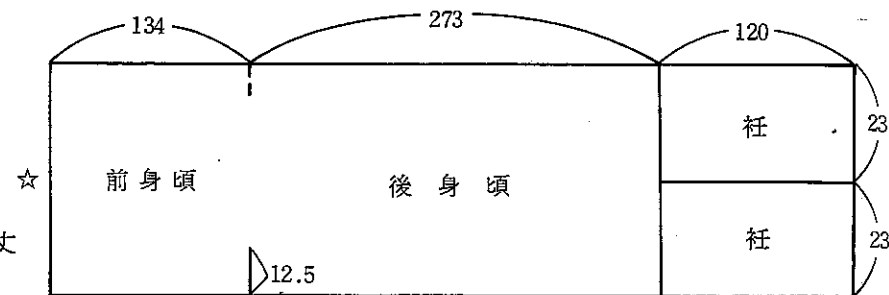
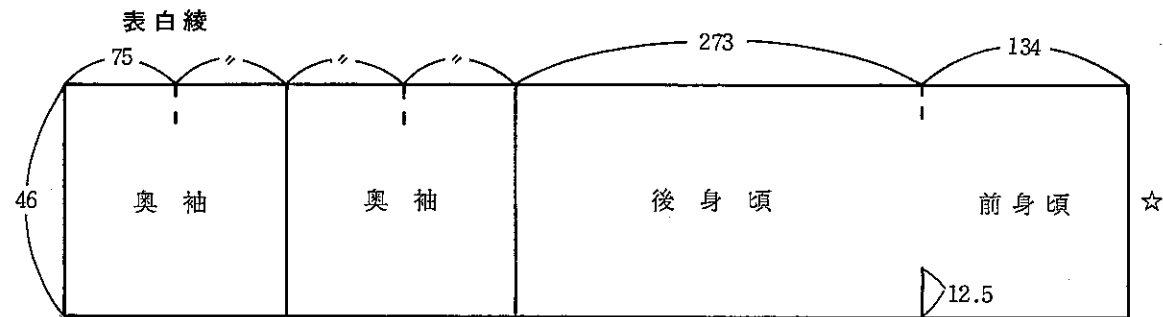


出来上り寸法

出来上り図の寸法のとおり
である。

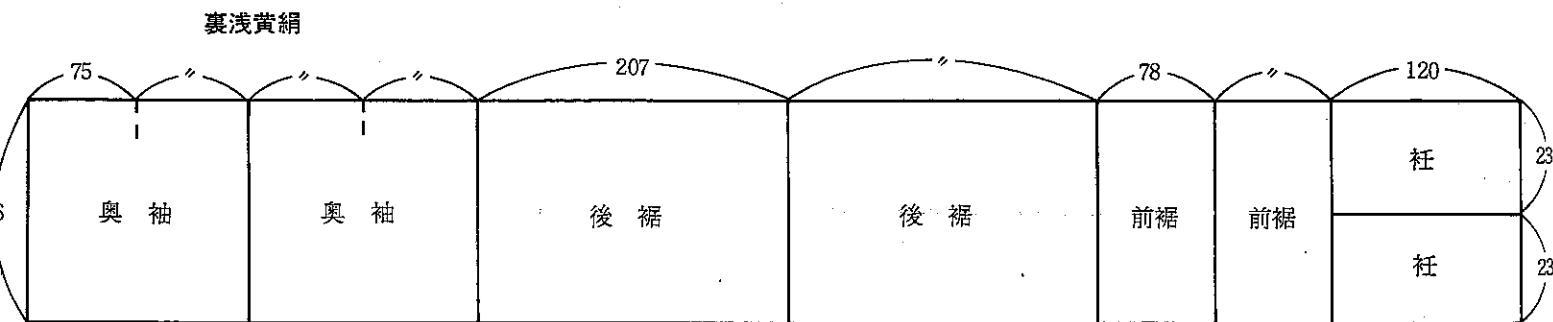
裁ち方

●表裂は46cm幅の白地綾を1234cm、36cm幅の緋綾を300cmを390cm、縁用として幅40cmの錦を190cm、1cm幅の組紐を使用し、裏裂は46cm幅の浅黄平絹を990cm、36cm幅の白麻を使用して、裁ち方図のように裁つ。



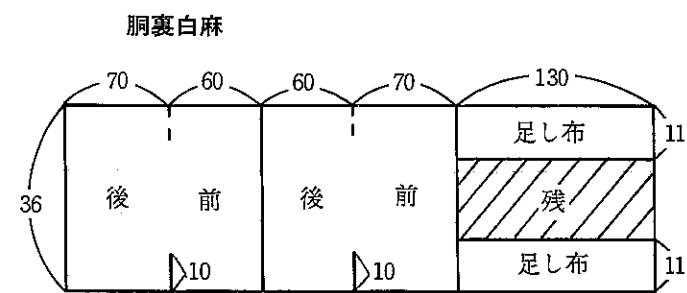
$$\text{袖丈} \times 4 + \text{前丈} \times 2 + \text{後丈} \times 2 + \text{衿丈} = \text{表白綾総丈}$$

$$75 \times 4 + 134 \times 2 + 273 \times 2 + 120 = 1,234\text{cm}$$



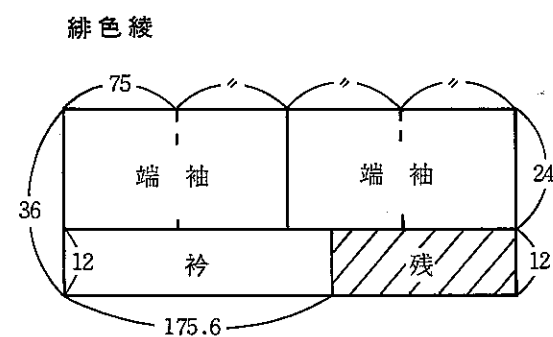
$$\text{袖丈} \times 4 + \text{後裾丈} \times 2 + \text{前裾丈} \times 2 + \text{衿丈} = \text{裏浅黄絹総丈}$$

$$75 \times 4 + 207 \times 2 + 78 \times 2 + 120 = 990\text{cm}$$



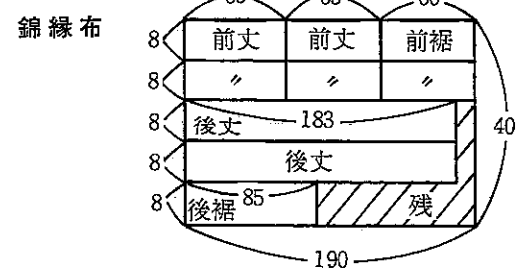
$$\text{前胴丈} \times 2 + \text{後胴丈} \times 2 + \text{足し布分} = \text{白麻総丈}$$

$$60 \times 2 + 70 \times 2 + 130 = 390\text{cm}$$



$$\text{袖丈} \times 4 = \text{表緋色綾総丈}$$

$$75 \times 4 = 300\text{cm}$$



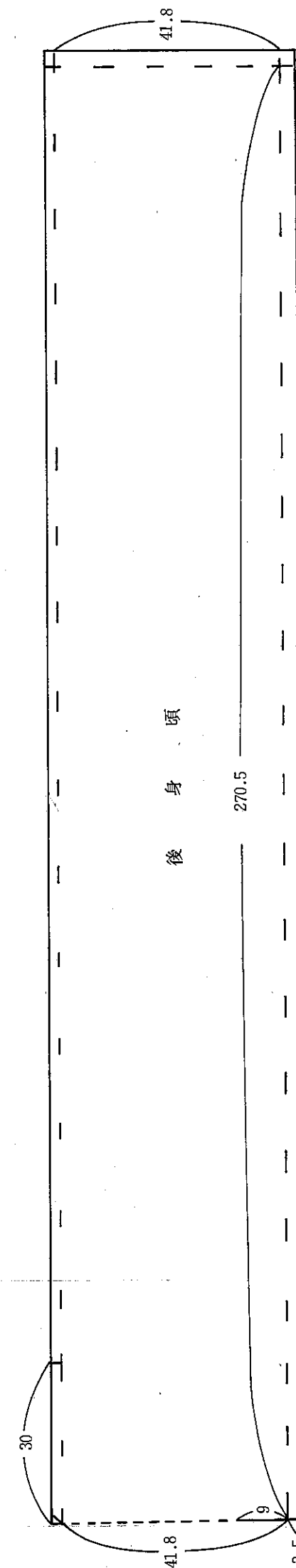
$$\text{前丈} \times 2 + \text{前裾丈} = \text{錦総丈}$$

$$65 \times 2 + 60 = 190\text{cm}$$

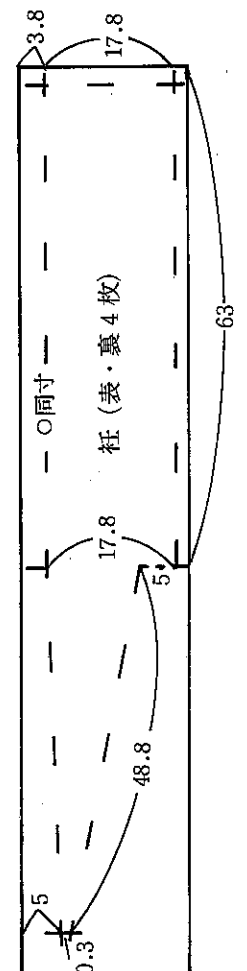
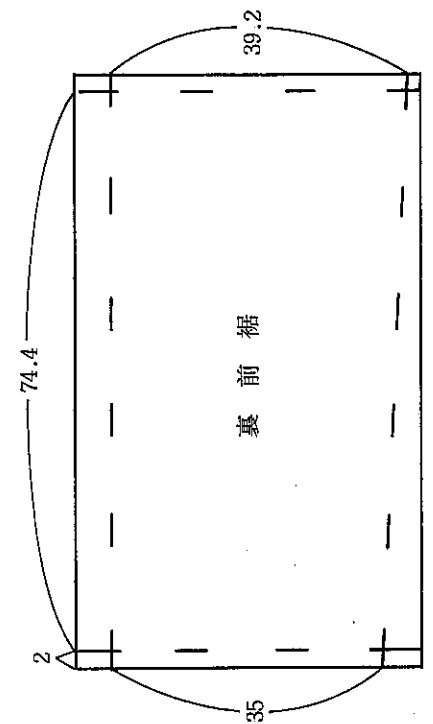
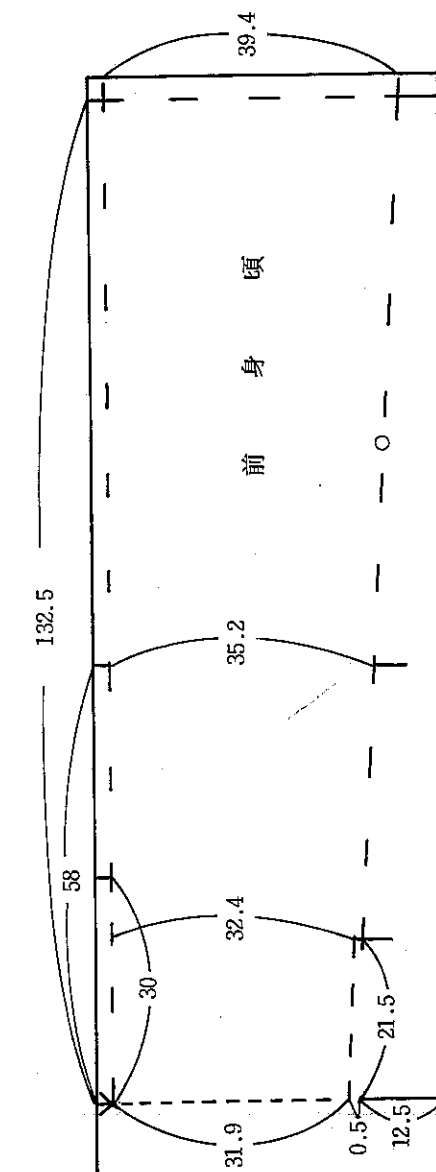
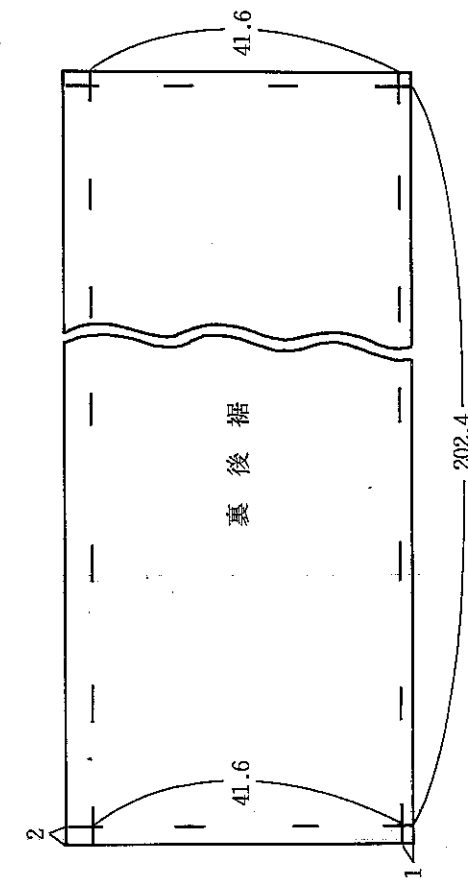
標つけ方

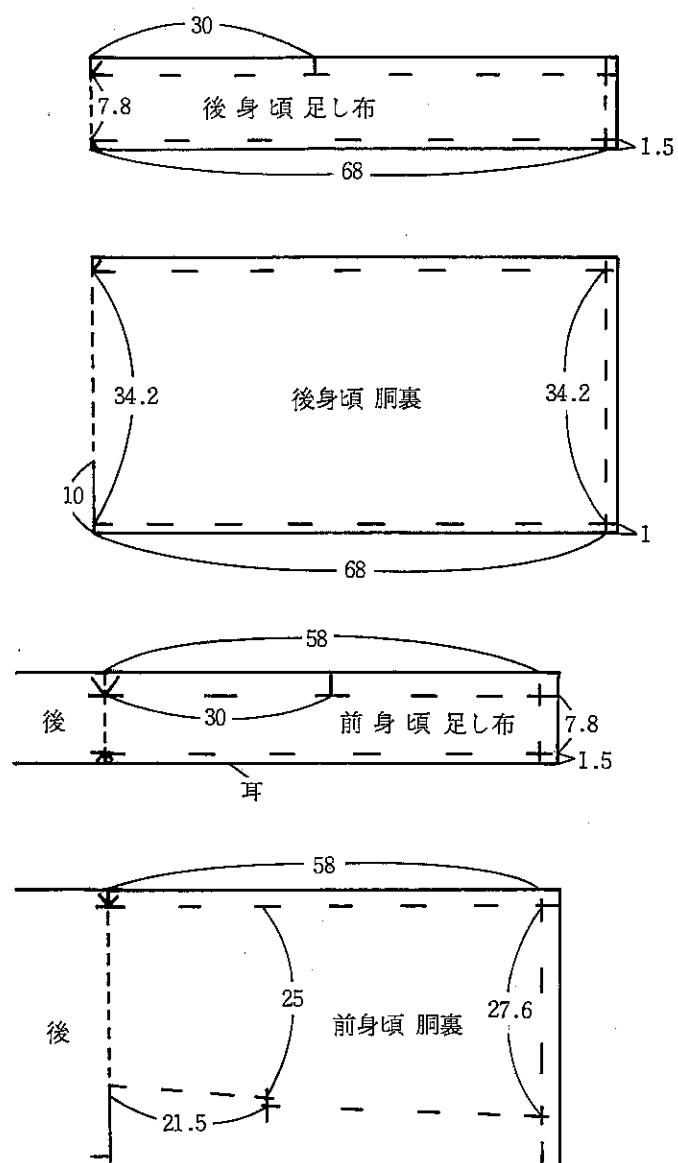
●表身頃は背の刺繍を合わせて背縫い代を決め、図のように標をつける。

●裏衿を中表に二枚重ねておき、表衿は前身頃と模様合わせをして、ずれないように中表に合わせて、裏衿の上に重ね、図のように標をつける。



刺繍を合わせて背縫い代をきめる。

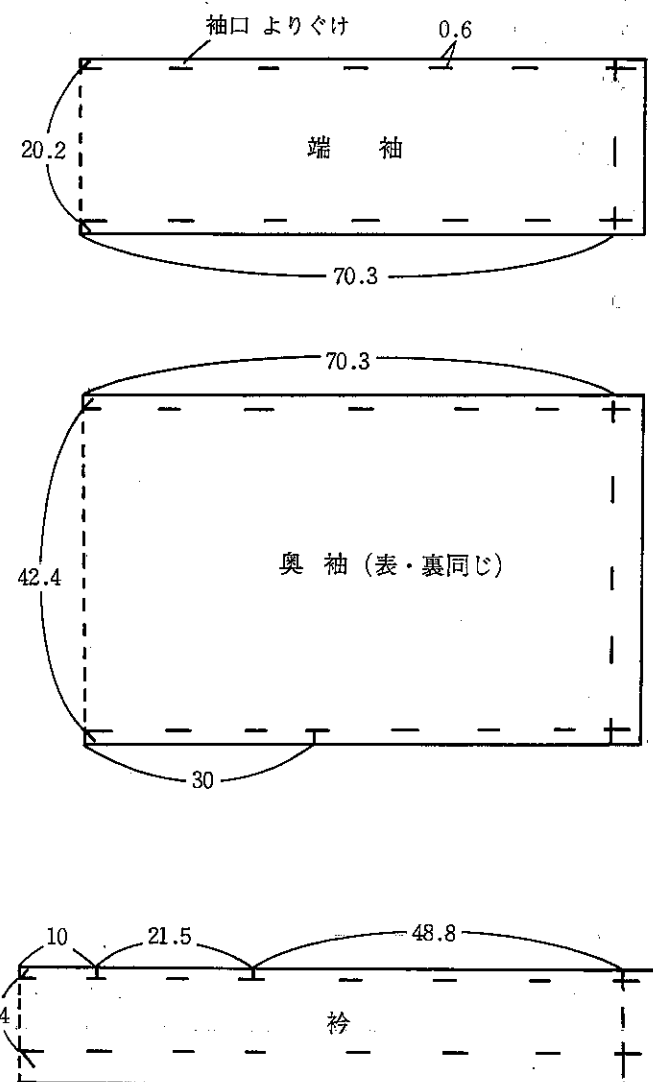




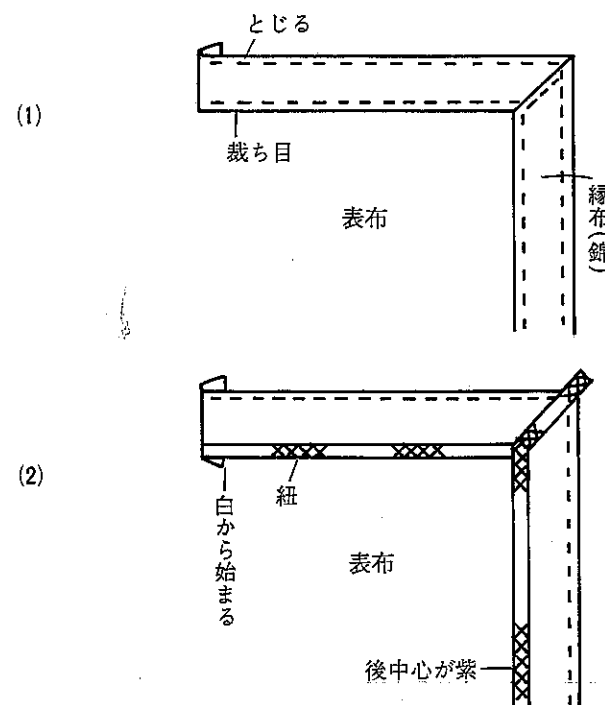
- 奥袖は刺繍の位置が左右ずれないように注意して、表袖、裏袖を同様に標つけをする。
- 端袖は緋色綾絹を使用して、図（前頁）のように標をつける。（裏はなし）。
- 胴裏は布幅に足し布をするが、このとき、接ぎ合わせる方を耳にして、図のように標をつける。
- 裾は浅黄絹を使用して図（前頁）のように標をつける。
- 衿は緋色綾絹を使用し、図のように標をつける。

縫い方

- 表身頃の背縫いは、白太口絹糸を使用する。0.5cmの針目で、刺繍の部分は半返し縫いに縫い合わせ、0.2cmのきせをかけて縫い代は左身頃へ折る。
- 衿つけは白太口絹糸を使い、刺繍の部分は半返しに縫



縁布および紐のつけ方



い合わせ、0.2cmのきせをかけ縫い代は衿の方へ折る。

縁取り

- 8cm幅に裁ち切った錦の布を、木綿のしつけ糸で、後身頃の脇の裾から181cm上った位置から下の部分と、裾および前布の脇、裾、衿下の部分に図のようにとじつける。
- 裁ち目の上に、絹組紐を、絹手縫い糸を使用して1cmの針目で、表に針目を出さずに、紐の厚みだけすくって紐がつかないように注意してとじつける。
- このとき、背縫いの中心に組紐の紫の部分がくるようにする。
- 後身頃の脇につける組紐は、白から始める。
- 錦の布と組紐の端は一緒に内側へ折り込み、1cmの針目の本ぐけで表布に留めつける。
- 麻の胴裏は、白の絹手縫い糸で、0.5cmの針目で縦接ぎをし、縫い代は脇の方へ折っておく。
- 麻胴裏と裾浅黄絹を、白糸絹で0.5cmの針目で接ぎ合わせ、縫い代は麻布の方へ折る。
- 麻の胴と浅黄絹の裾を接ぎ合わせた裏布の背縫いを、白絹糸0.5cmの針目で縫い合わせ、0.2cmのきせをかけ、縫い代は左身頃の方へ折る。
- 衿を前身頃に0.5cmの針目で縫い合わせ、0.2cmのきせをかけ、縫い代は衿の方へ折る。

脇・裾・衿下

- 前後の脇および衿下は、白太口絹糸で表は標より0.2cm外側を、裏は標どおりに、0.5cmの針目で縫い合わせ、0.2cmのきせをかけ、縫い代は裏の方へ折る。

- 裾は表は標より0.5cm外側を、裏は0.5cm内側を表裏合わせて縫う。角は紐があるので直角にはならない。

- 表に返して、脇と衿下は裏を0.2cm控えて幅を整え、裾は0.5cm裏を控えて丈を整える。

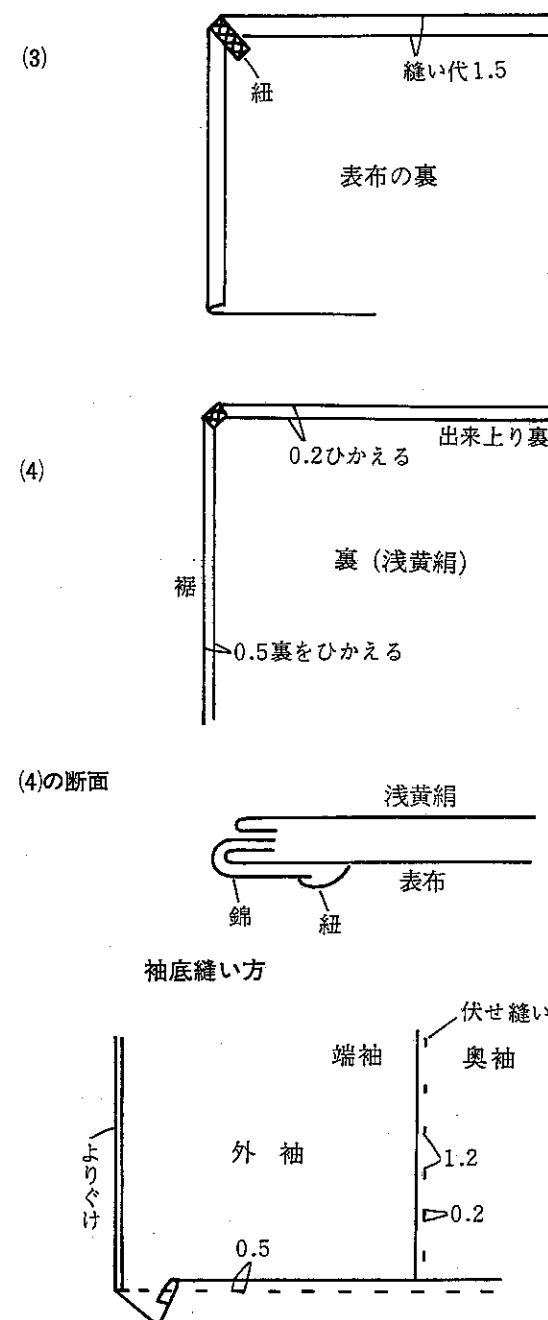
袖

- 端袖は、袖口部分は0.2cmのひねり幅になるように赤絹糸で糸びねりする。

- 表奥袖と端袖を、白太口糸を使用し0.4cmの針目で縫い合わせる。縫い代は0.2cmのきせをかけ、奥袖の方へ折る。

- 振りは表裏を標どおりに合わせて、1cmの針目で縫う。0.2cmのきせをかけて表に返し、毛抜き合わせに幅を整えておく。

- 表裏の奥袖で身頃の表裏をはさんで留めをし、続けて、



0.5cmの針目で四つ縫いをする。0.2cmのきせをかけ、縫い代は袖の方に折る。

- 奥袖裏を端袖の縫い目が0.2cmかくれるほどの幅に折り、間隔1.2cm、針目0.2cmの伏せ縫いで縫い代に留めつける。

- 袖底は角を三角に折り、出来上り2.2cm幅になるようにして、図のように0.5cmの針目で折り伏せ縫いをして、0.3cmのきせをかけ縫い代は内袖へ折る。

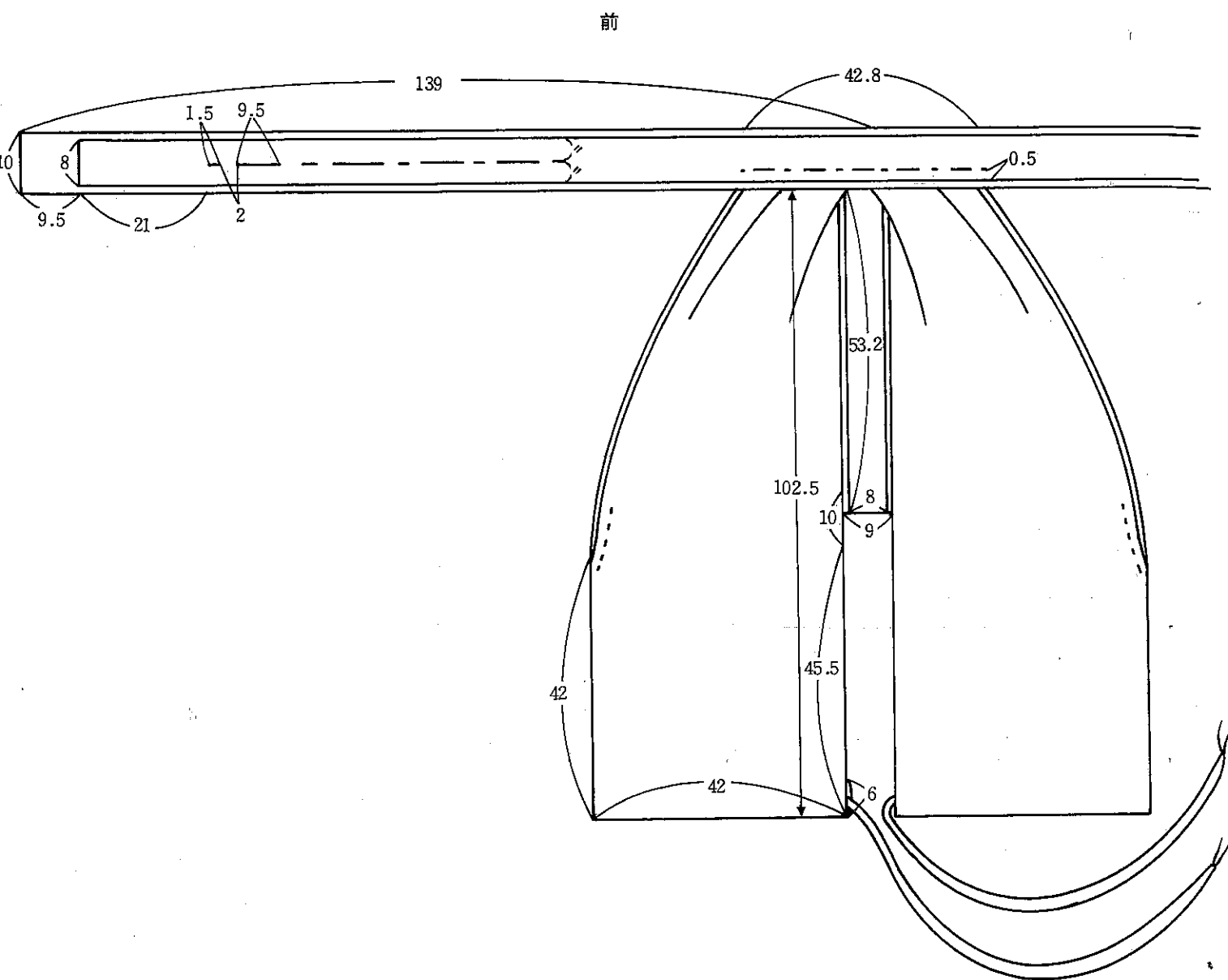
衿つけ

- 衿つけは赤太口糸を使用し、0.6cmの針目で、衿肩廻りは衿をゆるめ、その他は身頃と衿を同じつり合いにして縫い合わせる。0.2cmのきせをかけ、縫い代は衿の方へ折る。

- 衿端および裏衿は出来上り幅に折って、1cmの針目で本ぐけをする。

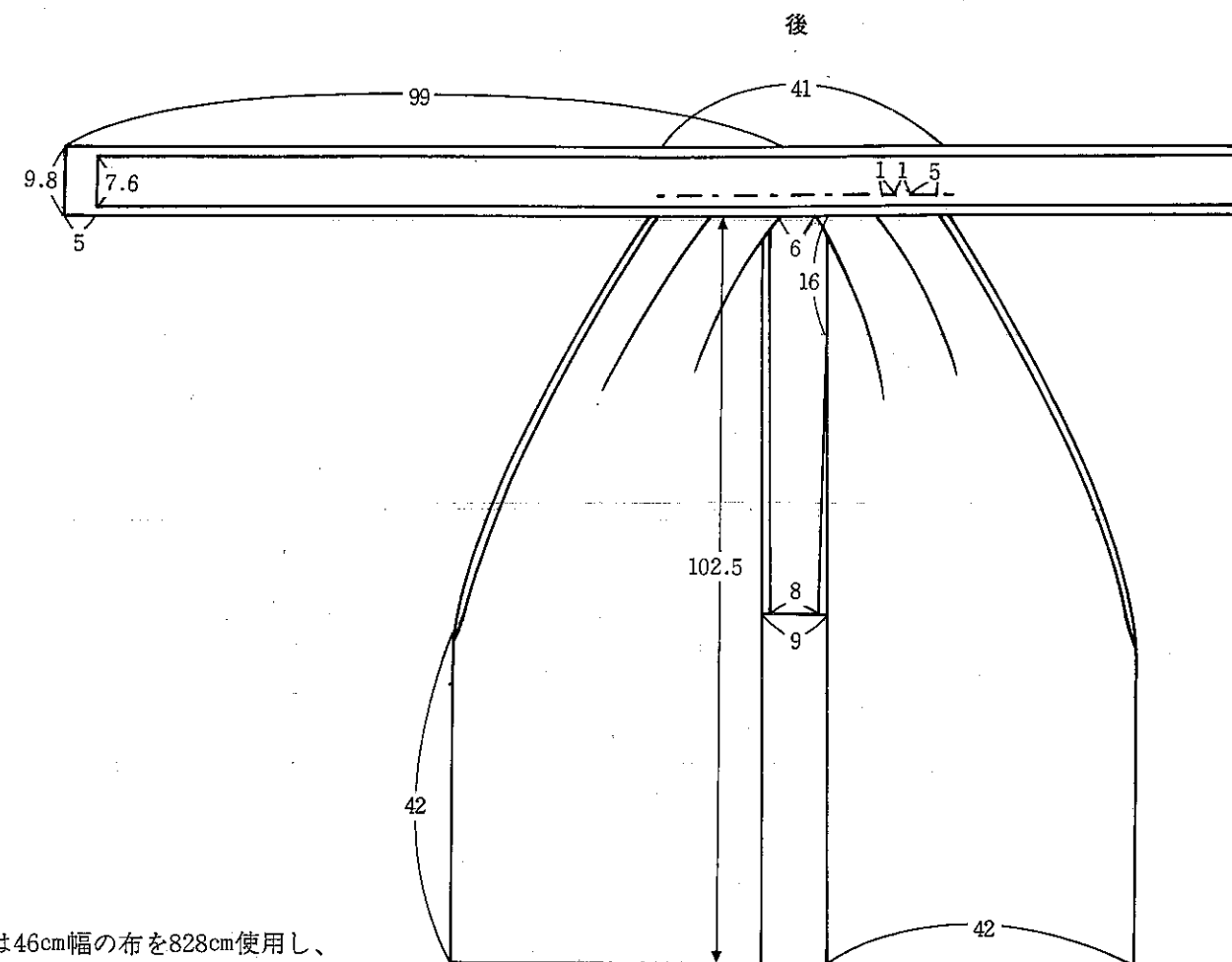
表袴

表地は白綾絹襦に霞文、裏地は紅平絹を使用する。



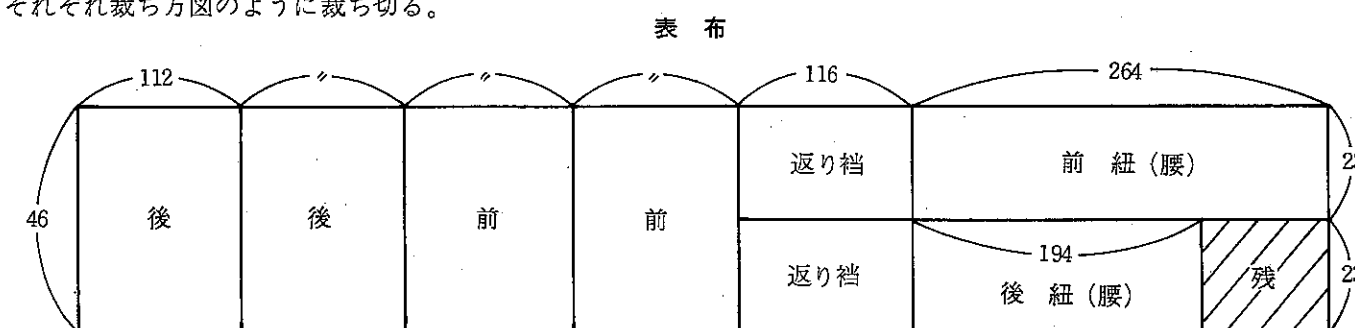
出来上り寸法

出来上り図の寸法のとおりである。

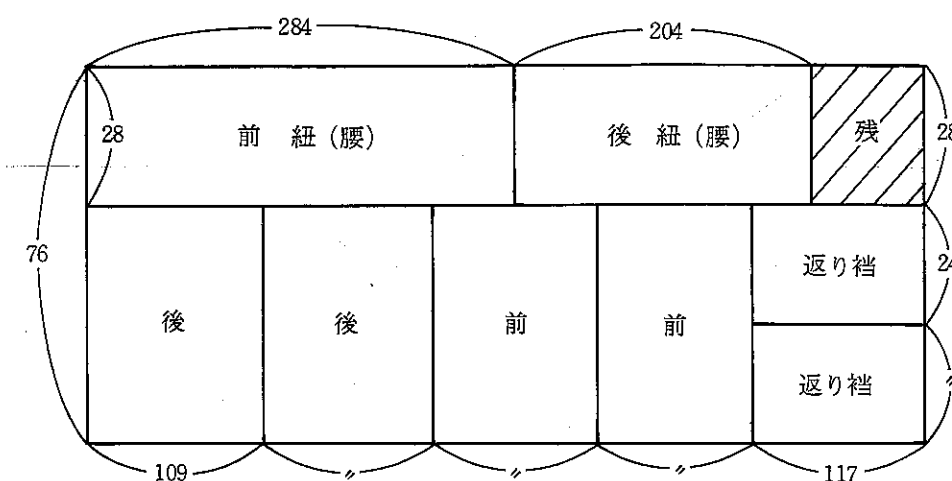


裁ち方

●表地は46cm幅の布を828cm使用し、
裏地は76cm幅の布を553cm使用して、
それぞれ裁ち方図のように裁ち切る。



裏布



$$\begin{aligned} & \text{紐下丈} \times 4 + \text{返り襠丈} + \text{前紐丈} = \text{表総丈} \\ & 112 \times 4 + 116 + 264 = 828\text{cm} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} & \text{紐下丈} \times 4 + \text{返り襠丈} = \text{裏総丈} \\ & 109 \times 4 + 117 = 553\text{cm} \end{aligned}$$

21cmはくけ残し、西の内を四つ折りにして入れ、紐の縫い代をのりで貼っておく。

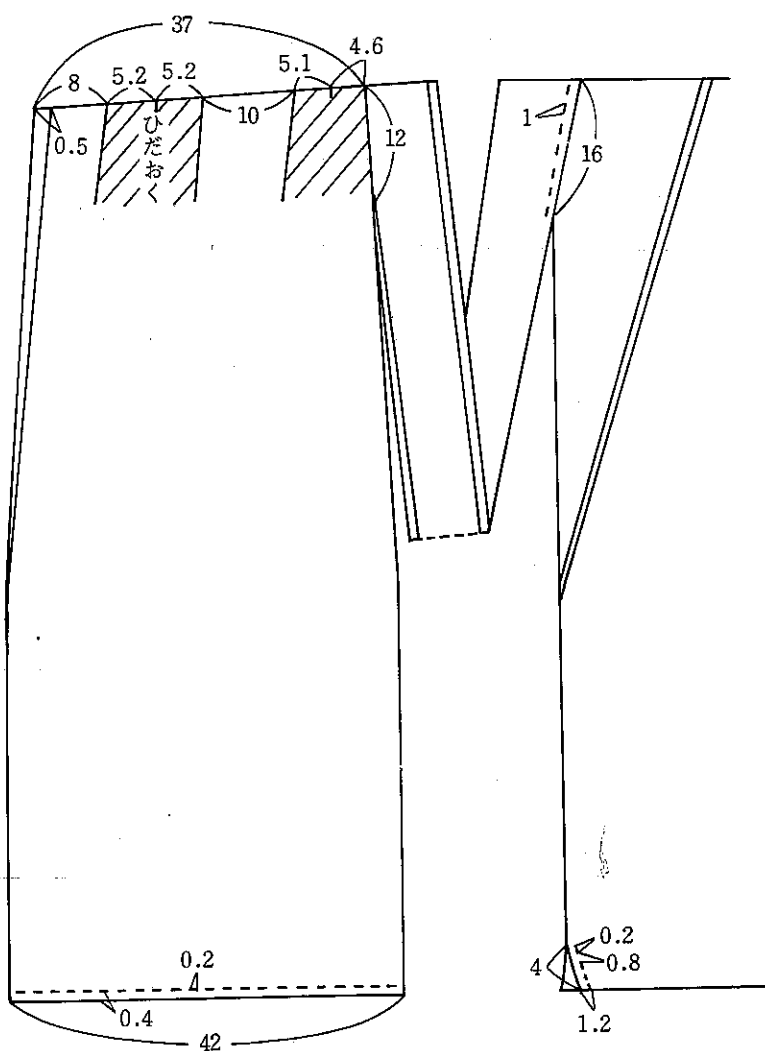
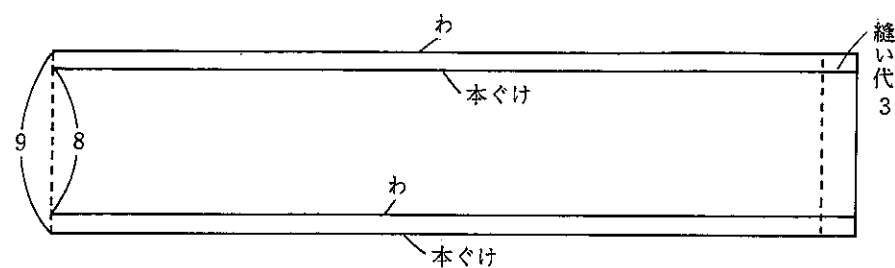
●返り襠は、赤白ともに出来上り幅に折って、2.4cmの針目で本ぐけをする。赤の返り襠のくけ目の方の上に、図のように白のわの方を当て、平らに置いてしついで押さえておく。胯上の上部、返り襠つけ寸法のところへ、1

cmの針目で縫い合わせる。このとき、右脚の前は12cm縫い合わせる。

●返り襠のつけ方は、右脚の前につけた返り襠は左脚の後へ、また左脚の前につけた襠は右脚の後につける。

●前後とも出来上り図のように、前後の返り襠を重ね、襷を整えて、しついで押さえておく。

返り襠



腰紐つけ

●赤、白の紐の幅および丈の中心を合わせ、赤紐のわの方へ、白紐のわを置き、平らにしてしついでとじておく。

●腰の上刺しは白色S撚り、Z撚り絹の打紐を使い、二本一緒に腰幅の図の位置に、赤紐の裏を除いて、上刺しをする。

●次に赤紐の表裏で身頃をはさみ、腰幅を十等分して、先の上刺しの二本糸の間に、表に0.3cmの針目を出して、返し針にして裏で小針を結びながらつける。糸は白色S

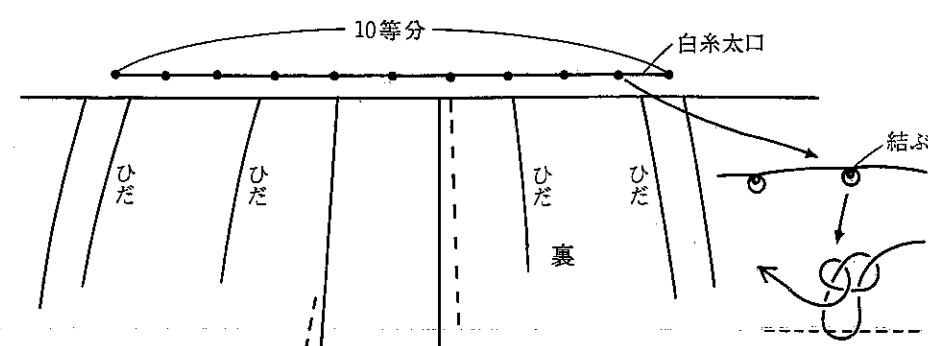
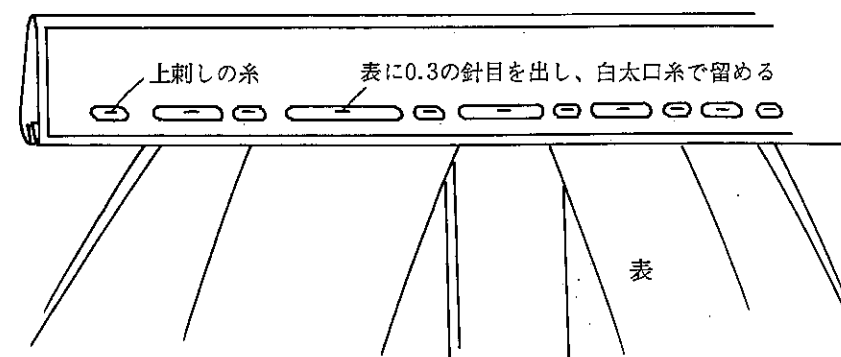
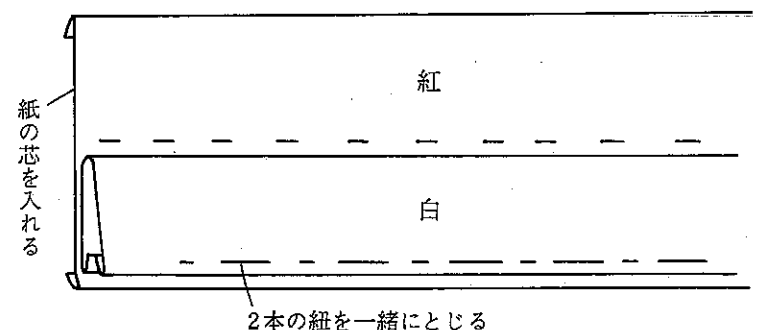
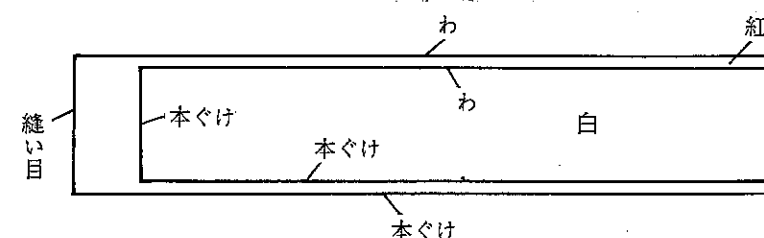
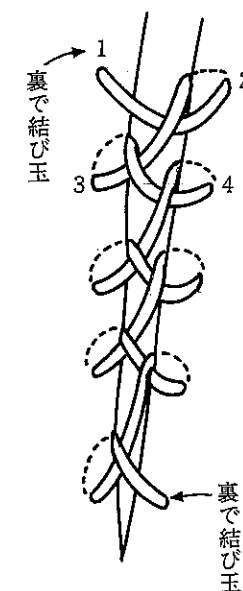
撚り絹太口を使用する。

●紐先の部分に、白打紐二本で図のように赤紐と白紐と一緒にとじる。腰紐の前後左右同じにする。

●脇明きの相引止まりから上部へ11.5cmの間、また胯上の下方胯下止まりより上部へ10cmの間を、白色S撚りZ撚りの打紐二本で、図のようにえびすがけをする。

●裾口に打紐の括り緒を通す。長さは左右それぞれ260cmのものを使用する。

腰紐の仕方

脇明きのえびすがけ
(S撚り、Z撚りの2本とり)

りょう とう しょう ぞく
柄襦装束

この装束は、中国の蘭陵王長恭の故事に基く「陵王」を舞う時の、左方の走舞用のものである。

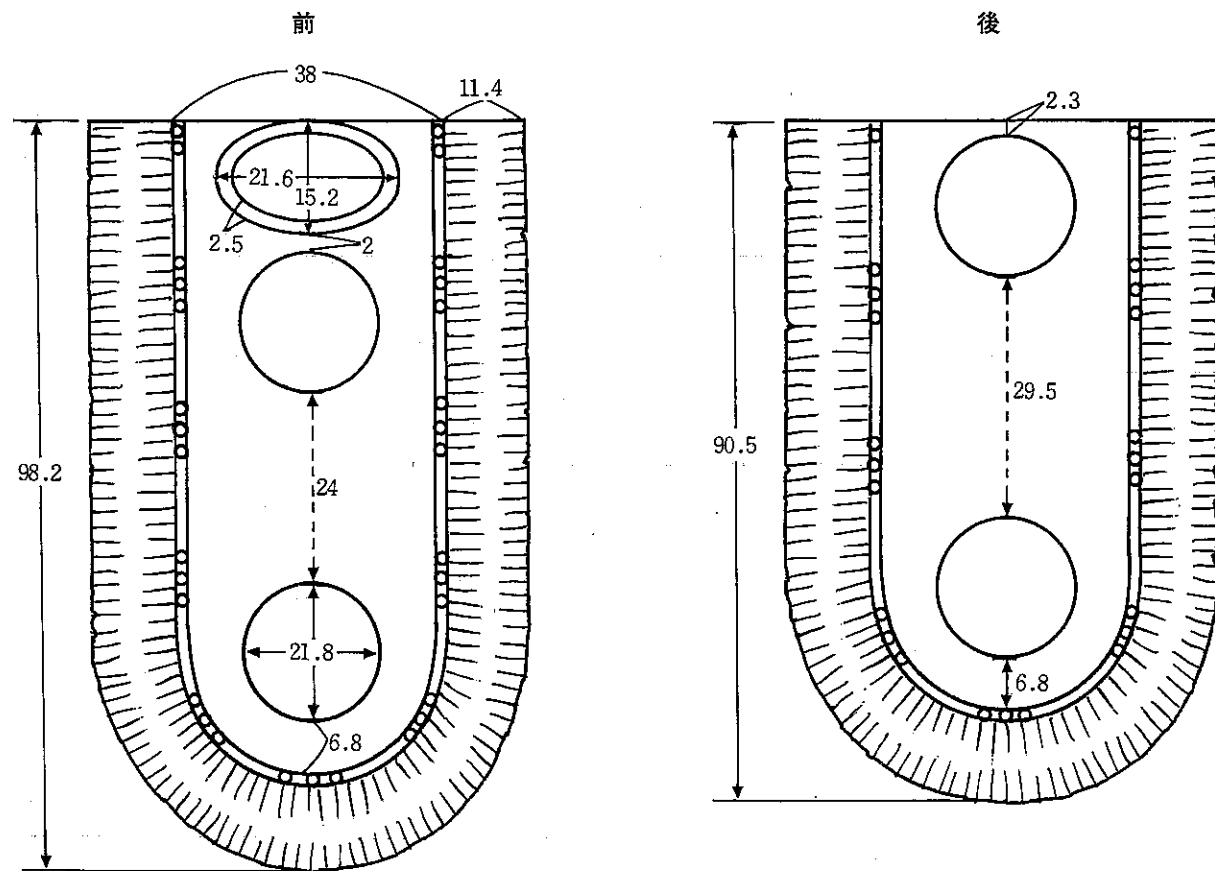
着装順は、大口の上に指貫をつけ、上は単、袍、柄襦の順につける。

け べりりょうとう
毛縁柄襦

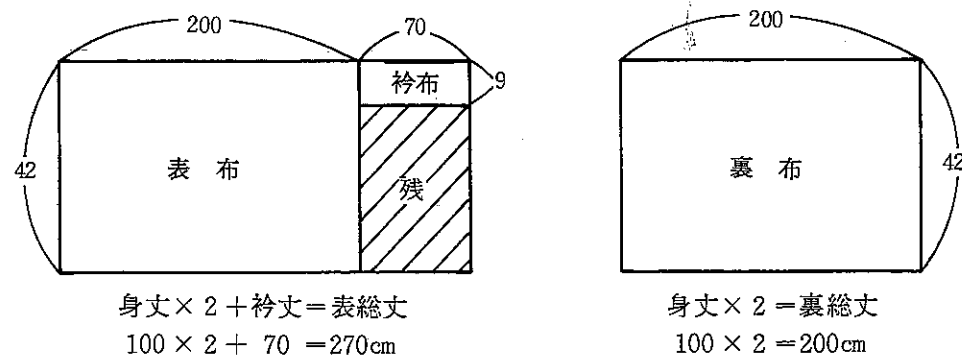
表は紅地雲龍紋唐織を使用し、裏は紅平絹を使用する。その他、伏せ紐として啄木打ちの組紐を480cm、鉾60個を使用する。なお、縁には菅糸で作った毛縁を使用する。

出来上り寸法

出来上り図の寸法のとおりである。

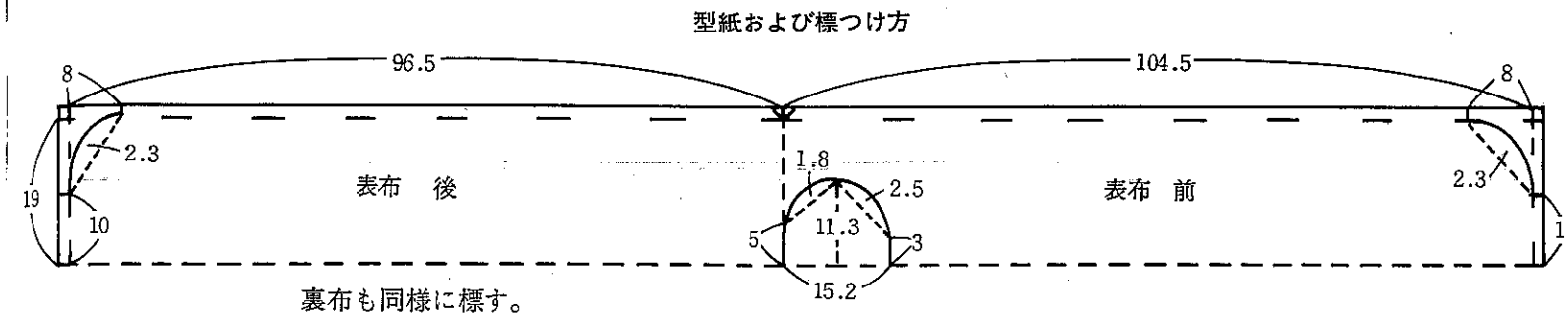


裁ち方図



裁ち方・標つけ方

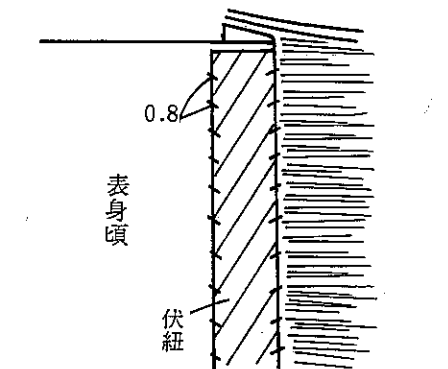
- 表は42cm幅の裂270cmを使用し、裏は42cm幅の紅平絹を200cm使用する。
- 図のように、出来上り寸法に型紙を作る。
- 型紙を表地にのせ、周囲および衿割りを、縫い代1.2cmつけて裁ち切る。
- 標は、周囲のところを、型紙より0.2cm外に標し、袴割りは型紙どおりに標をつける。
- 裏も表と同様に裁ち切り、標つけは全部型紙どおりにつける。
- 衿布を丈70cm、幅9cmに裁つ。



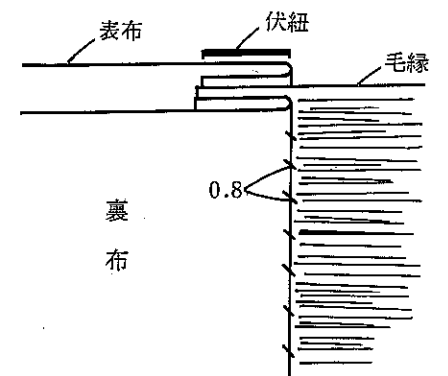
縫い方

- 縫い糸は紅色S撚り絹糸を使用する。
- 表布の裏側へ、シンモスを平らに当て、周囲をしつけでとじて裏打ちをする。
- 毛縁のつけ方は、表身頃へ房を当て、針目0.6cmの半返し縫いで周囲へ縫いつけ、縫い代は身頃の方へ折る。
- 表身の周囲へ伏せ紐を平らにのせて、紐の両端を図のように0.8cmの間隔で、組紐の組目にそって針目を出してまつる。
- 鉾つけは、伏せ紐の上に位置をきめて、目打ちで穴を開けて差し込む。
- 裏身の周囲を、標どおり裏へ折り返したものを表身の裏へ当て、周囲を0.8cmの間隔にまつりつける。
- 衿は、衿幅を2.5cmに折り、丈を68cmとする。
- 衿芯は、日本紙を幅39.5cm、丈69cmに切り、幅を中央から二つ折りにし、さらに二つに折ることを繰り返して、衿幅2.5cmまで折り、これを衿に入れる。
- 衿のつけ方は、表の衿割りに合わせ針目0.5cmで縫いつけ、裏は針目0.7cmで図のようにまつりつける。

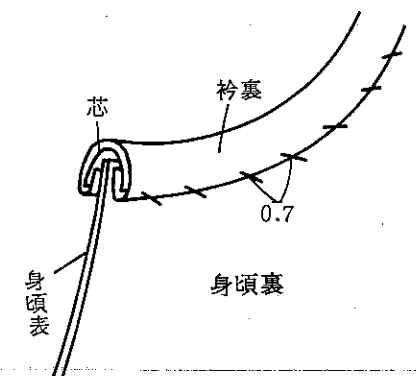
伏せ紐のつけ方

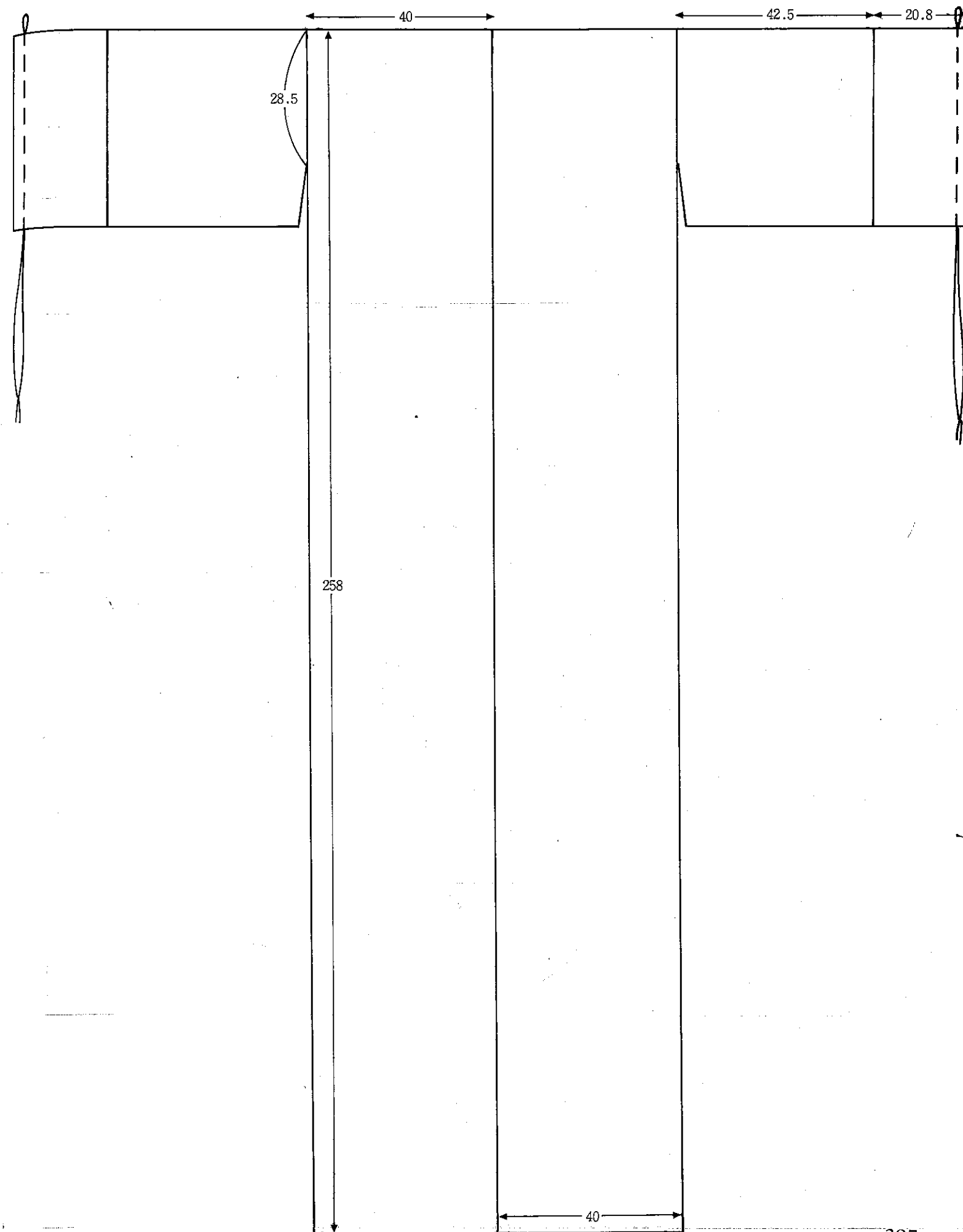
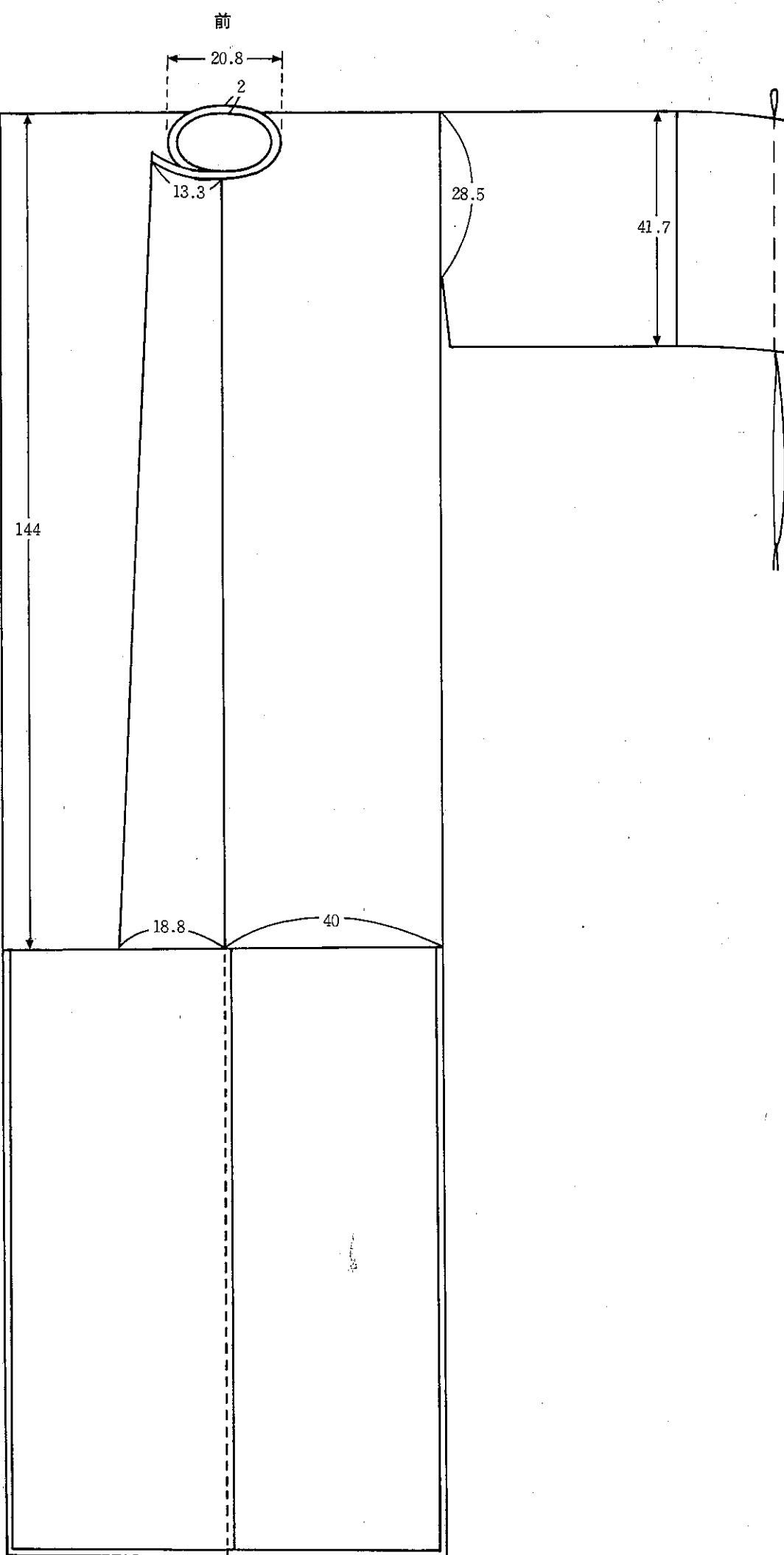


裏布のつけ方



衿つけの仕方



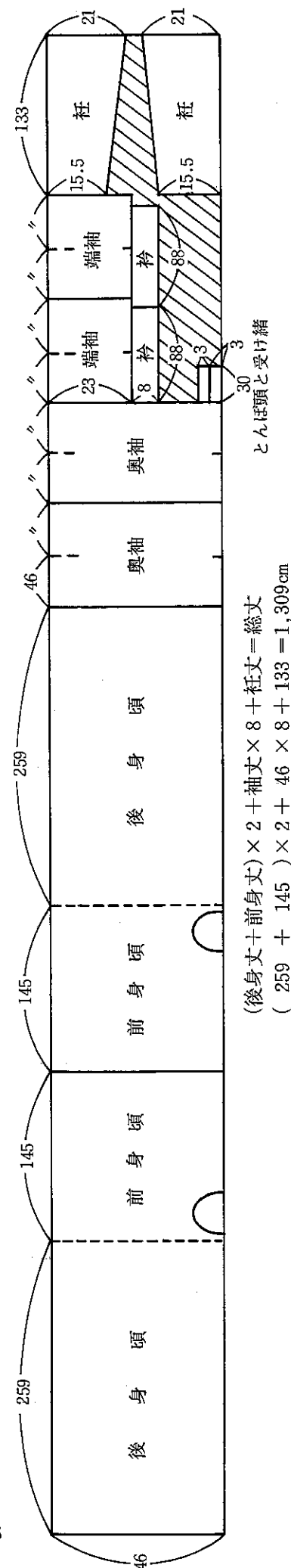


袍

地質は紅地雲紋顯文紗で、35個の窠紋を刺繡してある。単仕立てである。

出来上り寸法

出来上り図の寸法のとおりである。

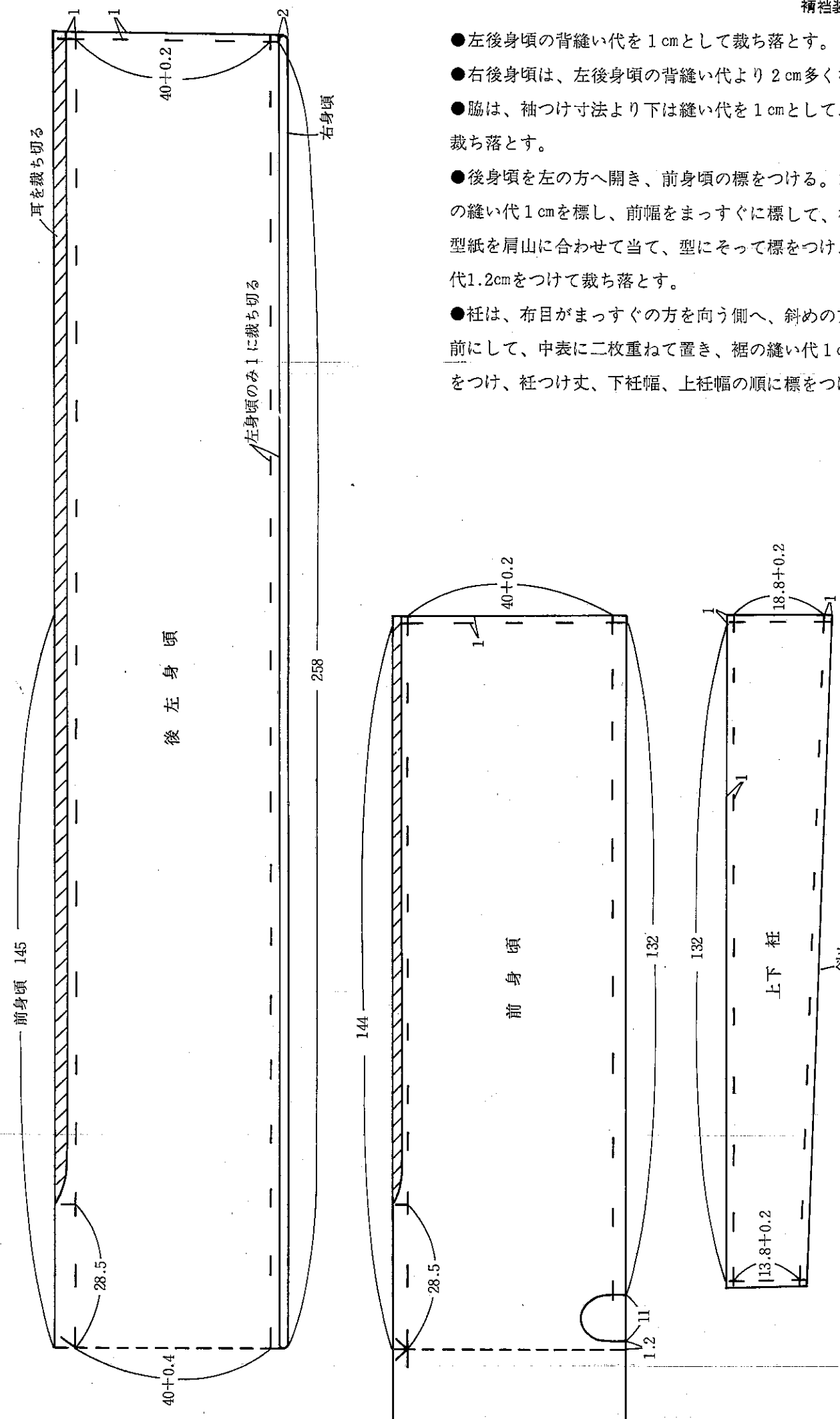
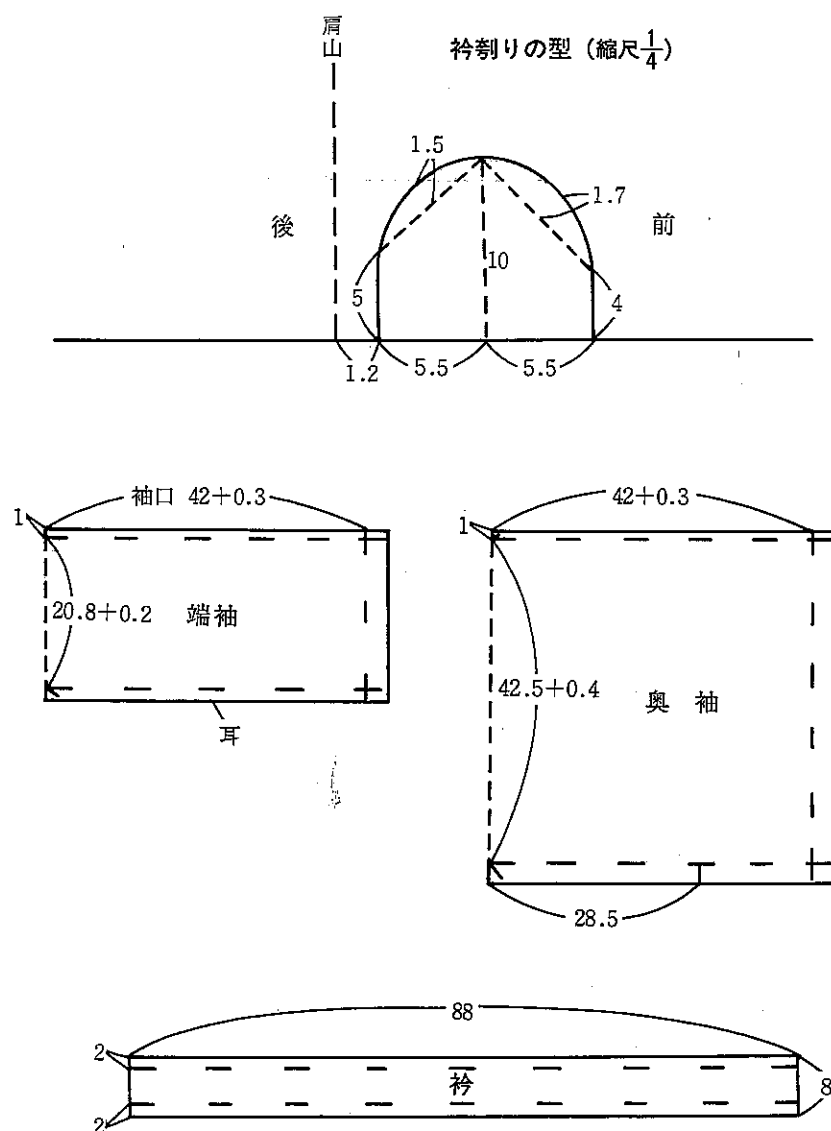


裁ち方

- 46cm、丈1309cmの裂を使用する。
- 窠紋を口絵写真のように、背、衿つけ、袖つけ、端袖つけの配置を合わせ、裁ち方図の寸法どおりに身頃、奥袖、端袖、衿、衿を裁つ。
- 身頃の衿割り型紙を作り、身頃の標をつける時に、型紙を当てて標をつけ、裁ち落とす。

標つけ方

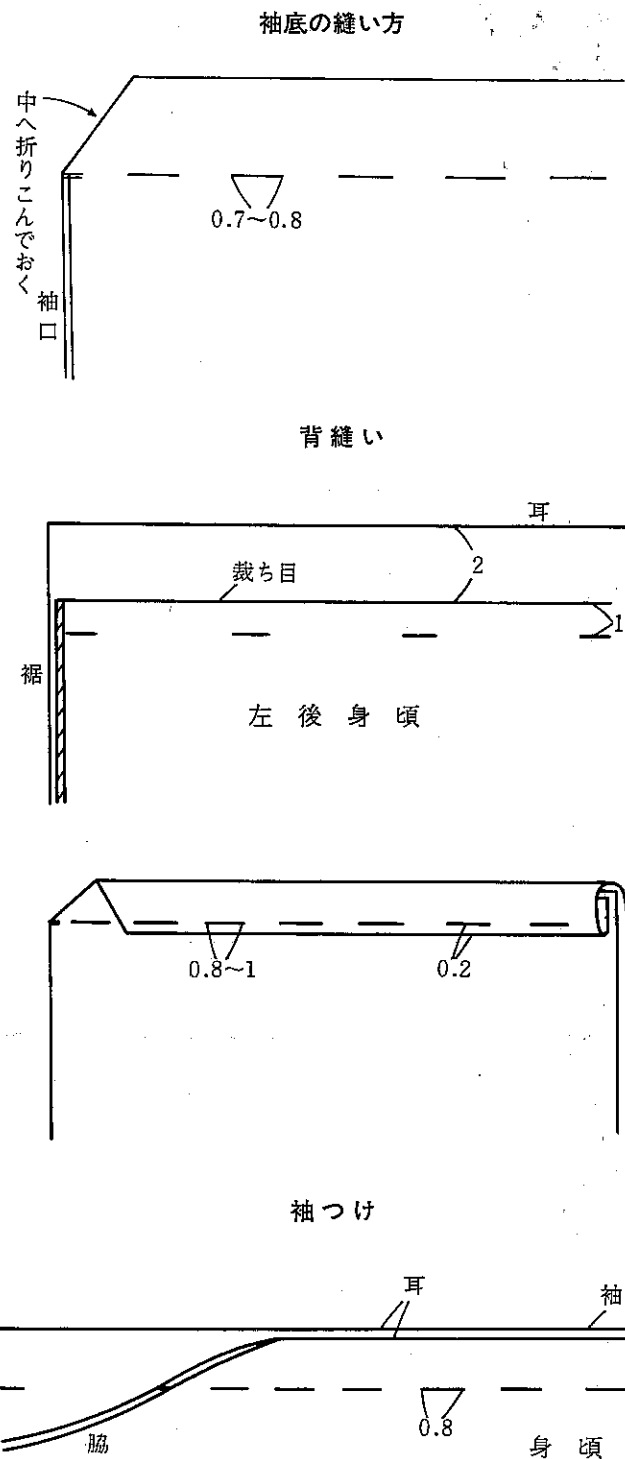
- 衿割りの型紙を図のように作る。
- 端袖および奥袖を、図のように標をつける。
- 身頃は背縫い部分の窠紋を合わせて仮縫いをして、後身丈259cm、前身丈145cmとして山を決める。
- 裾縫い代1cmを標し、肩山標、袖つけの標をつけ、窠紋の中央に背縫いの標をつけて、その標より肩幅および後幅の標をつける。



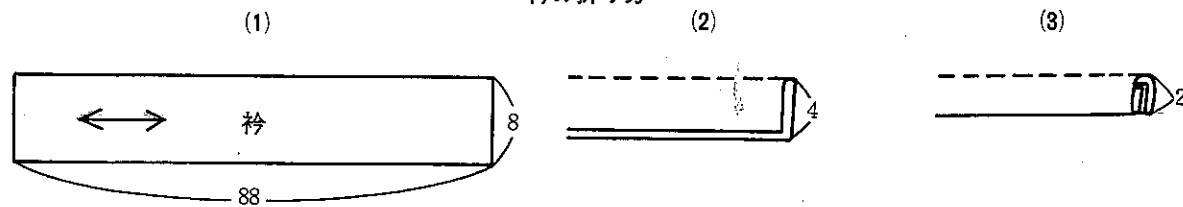
- 左後身頃の背縫い代を1cmとして裁ち落とす。
- 右後身頃は、左後身頃の背縫い代より2cm多くなる。
- 脇は、袖つけ寸法より下は縫い代を1cmとして、耳は裁ち落とす。
- 後身頃を左の方へ開き、前身頃の標をつける。まず裾の縫い代1cmを標し、前幅をまっすぐに標して、衿割り型紙を肩山に合わせて当て、型にそって標をつけ、縫い代1.2cmをつけて裁ち落とす。
- 衿は、布目がまっすぐの方を向う側へ、斜めの方を手前にして、中表に二枚重ねて置き、裾の縫い代1cmの標をつけ、衿つけ丈、下衿幅、上衿幅の順に標をつける。

縫い方

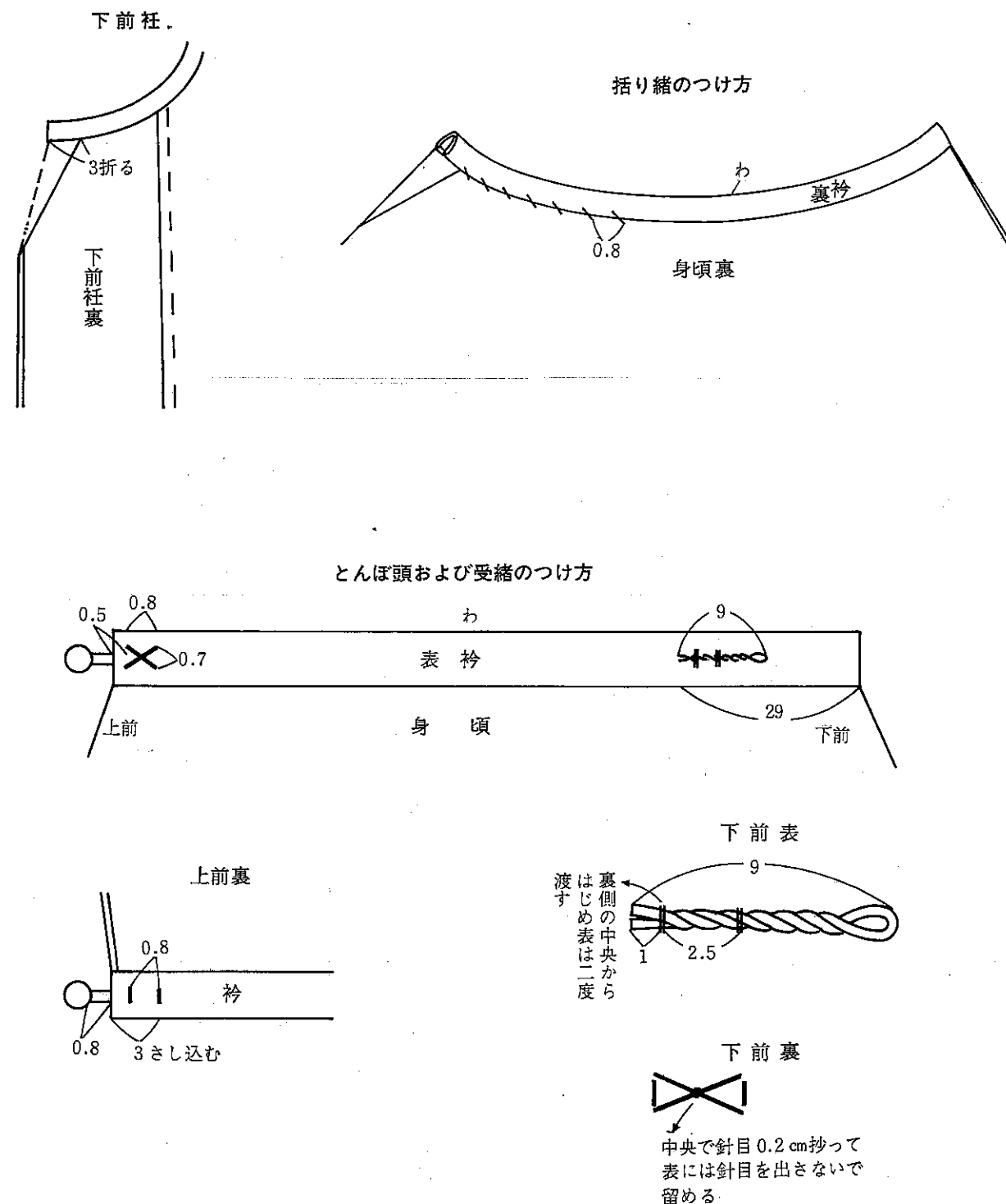
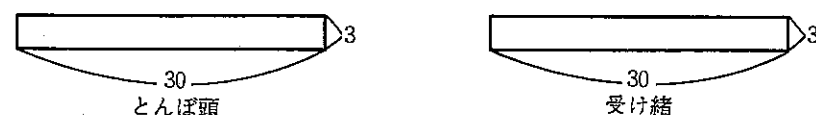
- 縫い糸は赤色のS撚り絹手縫い糸を使用する。
- 針目は0.7～1cmにする。
- 袖口、前後身頃の脇、裾、袴の幅、裾の端を糸びねりにする。
- 糸びねりの方法は、1cmの縫い代を0.2cmの出来上り幅に撚って、表の針目0.2cm、間隔1～1.2cmでまつりぐけにする。
- 袖は、端袖と奥袖を標どおり縫い合わせ、0.2cmのきせをかけ、縫い代は端袖の方へ折る。
- 袖底は袋縫いにする。
- 一度縫いは、布の表を出して布端から1cmのところを縫い、二度縫いは裏に返して標どおり縫う。このとき袖口の方は図のように、縫い代の中に三角に折り込んでおく。なお、縫いどまりは糸を二回からげて、玉留めをする。縫い代は0.3cmのきせをかけて内袖に折る。
- 背縫いは、標どおり図のように合わせ、右身頃の縫い代で左身頃の縫い代を包み、図のように縫う。0.2cmのきせをかけて左身頃へ折る。
- 袴つけは、前身頃と袴を標どおりに合わせて、前身頃の縫い代で袴の縫い代を包み、背縫いと同様に袴をつけ、0.2cmのきせをかけて縫い代は袴の方へ折る。
- 袖つけは、袖と身頃の標を合わせ0.8cmの針目で縫い、0.2cmのきせをかけて縫い代は袖の方へ折る。
- 振りは標どおりに折り目をつけたままにする。
- 袴は幅8cm、丈88cmの布を二枚裁ち、これを二枚重ねて、図のように袴幅2cmに折りあげる。
- 袴の芯には和紙(奉書または西の内)と、薄手の張子紙を使用する。



袴の折り方



とんぼ頭と受緒の裁ち方



- 和紙は幅15.5cm、上り袴丈83cmに裁ち切ったものの幅を二つ折りにして、さらにまた二つに折って、2cm幅に折りたたむ。
- 張子は袴幅の二倍の4cm、丈83cmに裁ち切り、表側へ袴布、その内側へ和紙、さらに芯に張子を入れ、袴幅、袴丈をしっかりと折る。
- とんぼ頭と受緒の布を、それぞれ図の寸法に裁つ。

- 紙撚りを芯にして、のりをつけながら、布をSの方向に撚って、直径0.5cmぐらいの紐を二本作る。
- とんぼ頭はしゃか結びにする。(東帯の袴参照)
- 受緒は紐の中心から二つに曲げ、とんぼ頭を入れる部分2cmほどは撚らずに、その他の部分はZ方向に撚り合わせ、出来上りの長さ9cmにして裁ち切る。
- 袴つけは下前袴の袴つけ部分の端を、図のように3cm

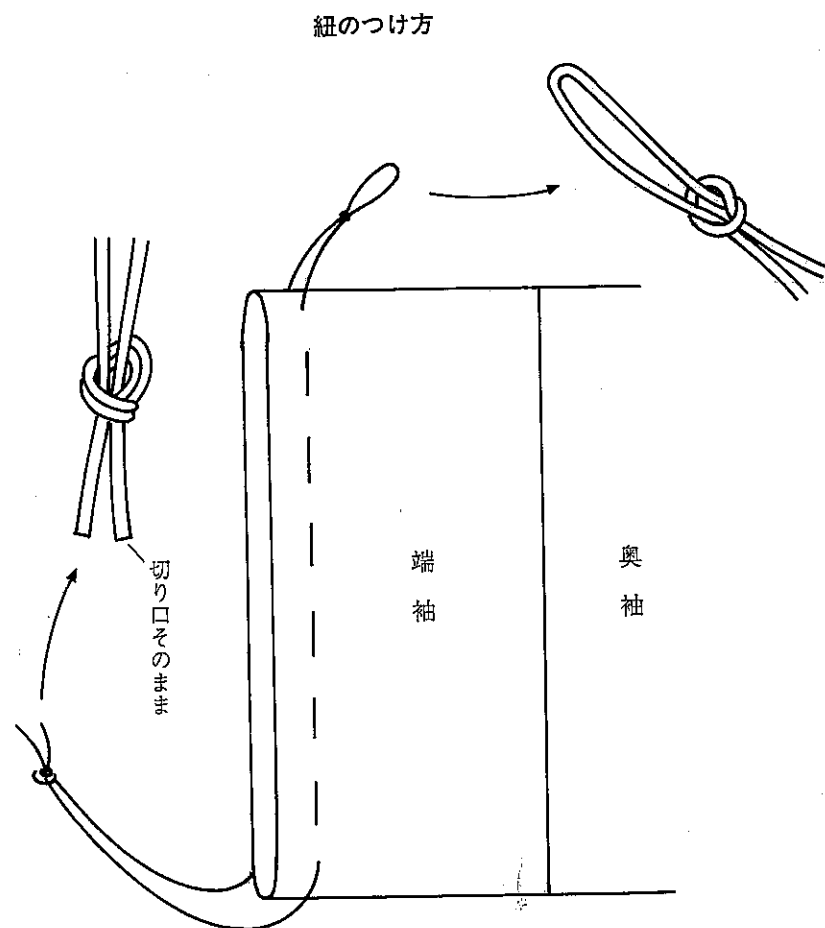
裏へ折ってとじる。

●表衿と裏衿で身頃の衿刳り縫い代をはさみ、裏衿の方をみて、まつり縫いで衿をつける。まつりの間隔は 0.8 cmで、身頃、表衿を縫うようにすくって、表裏一緒につける。

●受緒およびとんぼ頭は、白色S撚り絹糸で図のようにとじつける。

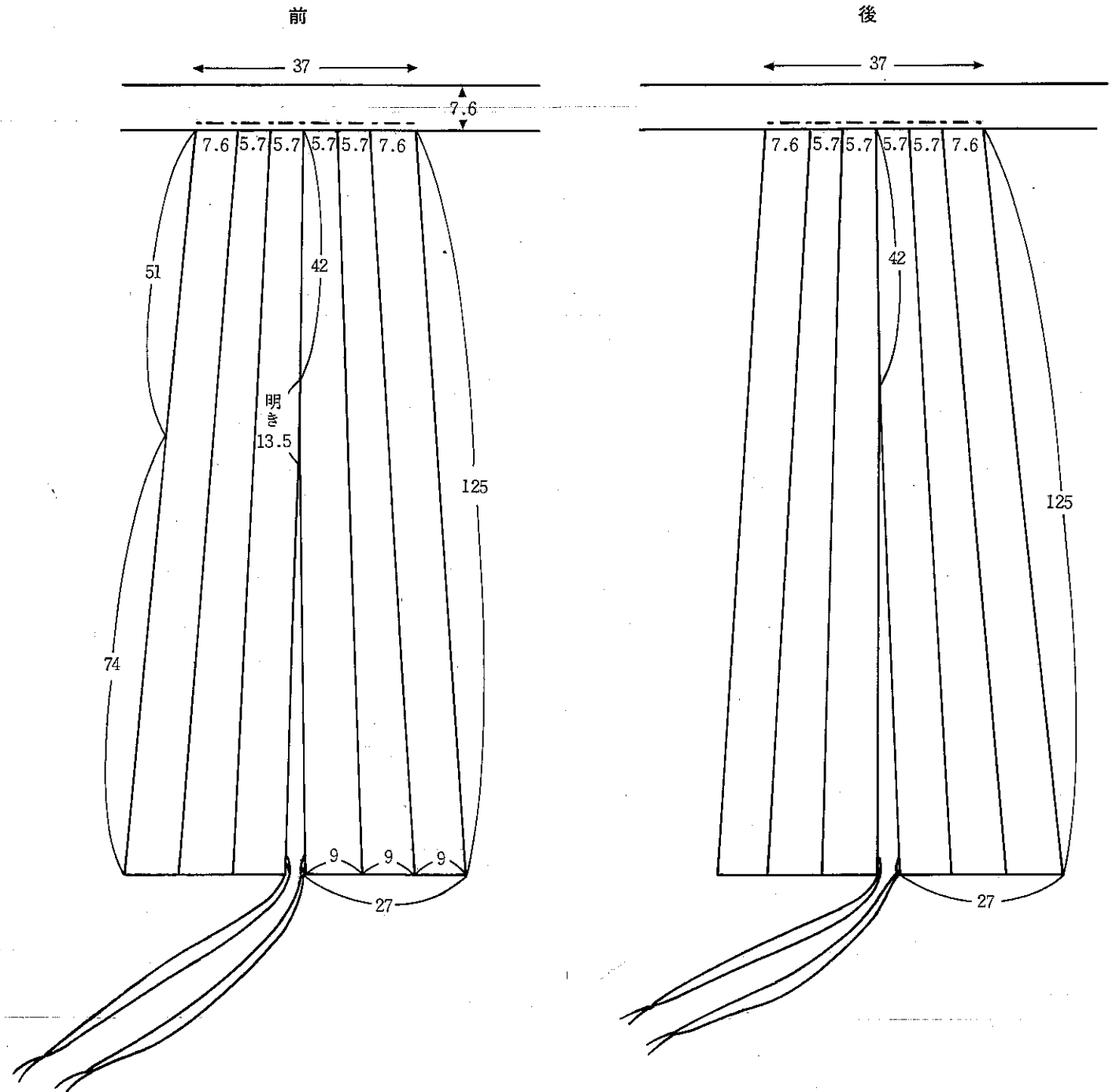
●袖口の括り紐は、紅色絹の打紐で長さ180cmのもの二本を使用する。

●袖口から2.5cm内側で、袖山から1.5cm下ったところと、袖底から3cm上ったところに紐通しの穴を開け、その間を13等分して(約3cm間隔)穴を開け、紐の中央を6cm出し、輪に結んだ紐を通して、紐先は切ったまま、二本一緒に結んでおく。



さしぬき 指貫

表は紅地唐織を、裏は紅平絹を使用し、紐には白綾を使用する。裾口には括り緒として、紅色の打紐を使用する。腰の上刺しには、白のZ撚り、S撚りの絹紐を使用する。



出来上り寸法

出来上り図の寸法のとおりである。

裁ち方

●表は幅45.5cmの布810cmを使用し、裏は幅92cmの紅平絹を424cm使用する。

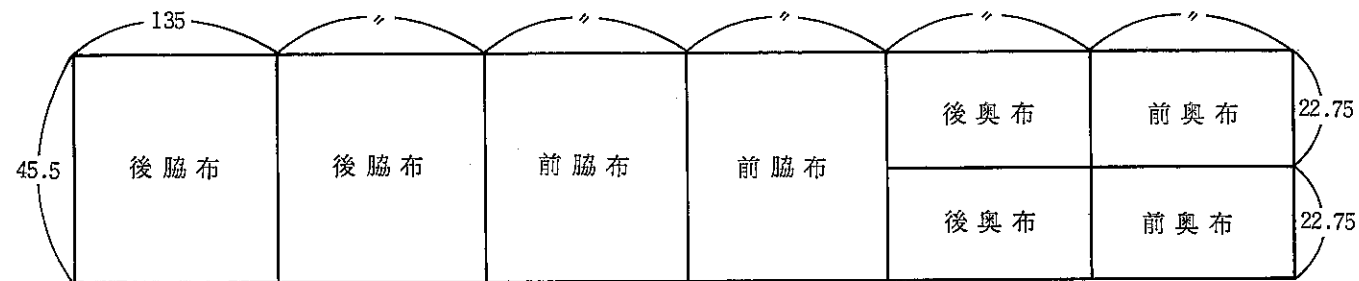
●表布を、前後の脇布四枚と前後の奥布四枚を図の寸法

に裁ち切る。

●裏布も表同様に、脇布四枚、奥布四枚を裁ち、裆布を裏布で図の寸法に裁ち切る。

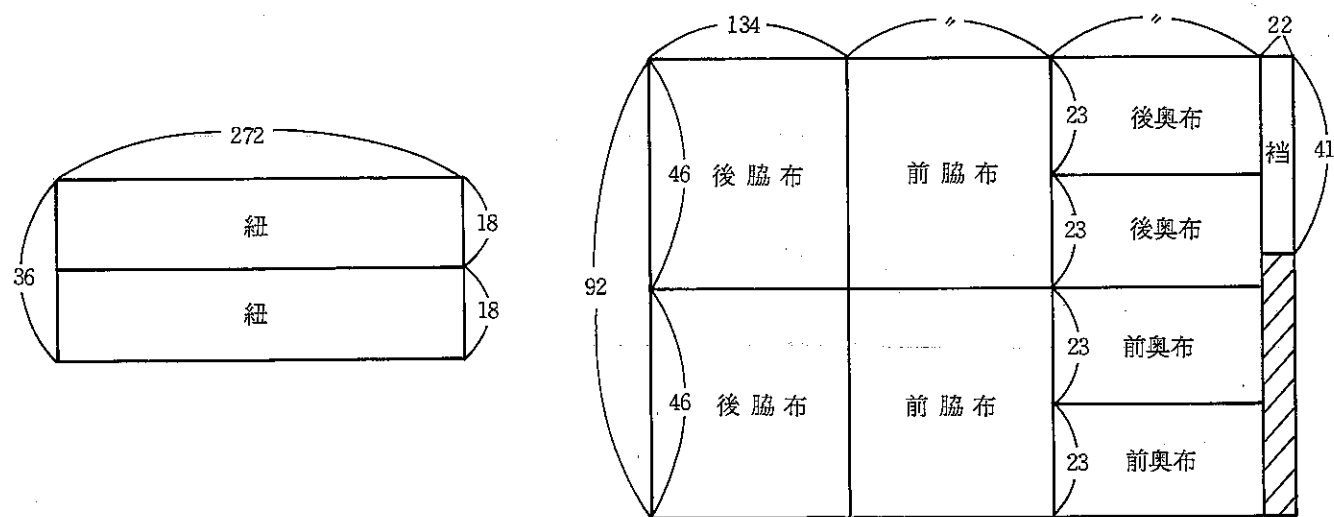
●紐は白綾の布を図の寸法どおりに裁つ。

表 布



丈 × 6 = 総丈
135 × 6 = 810cm

裏 布



丈 × 3 + 裆 = 総丈
134 × 3 + 22 = 424cm

標つけ方

●表後脇布二枚を中表にして、裾を右にして布を置く。

●図のように裾の縫い代1cmを標し、さらに0.5cmを標し、そこから紐下寸法125cm、相引70cmを標す。

●奥布つけ縫い代1cm、それより幅43cmを相引まで標をつける。

●襷の標つけ方は、一の襷、二の襷、三の襷の順に、寸法どおりに標をつける。

●表後奥布は耳を手前に置き、裾の縫い代1cm、0.5cm、紐下125cmに標をつける。

●脇布つけ縫い代1cmをはかり、それより幅20.5cmに標す。

●胯上42cm、裆つけ19cm、裾のところで紐通し5cmの標をする。

●裆布は幅を二つ折りにして、図のように標す。

●裏後脇布は裾の縫い代1cm、紐下寸法124.9cm、相引69.9cmを標し、奥布つけ縫い代1cm、幅43cmを相引まで標す。

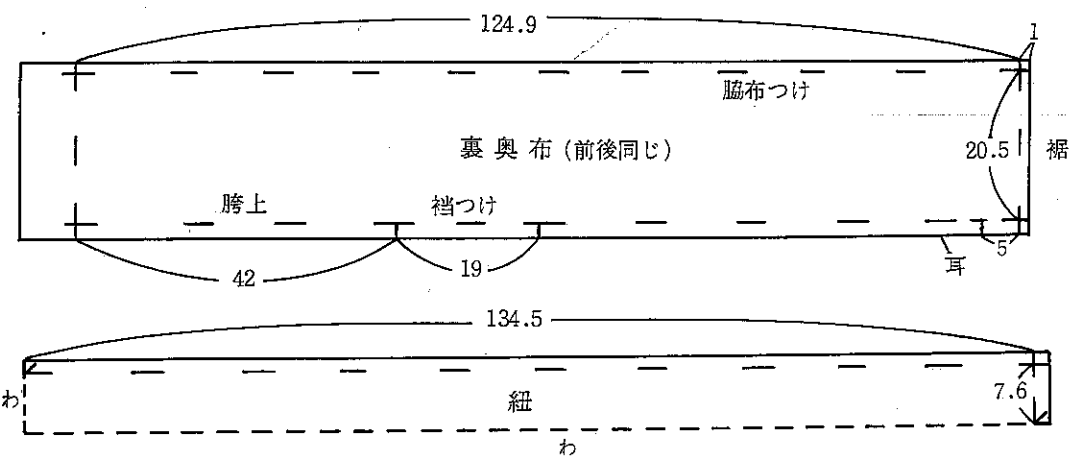
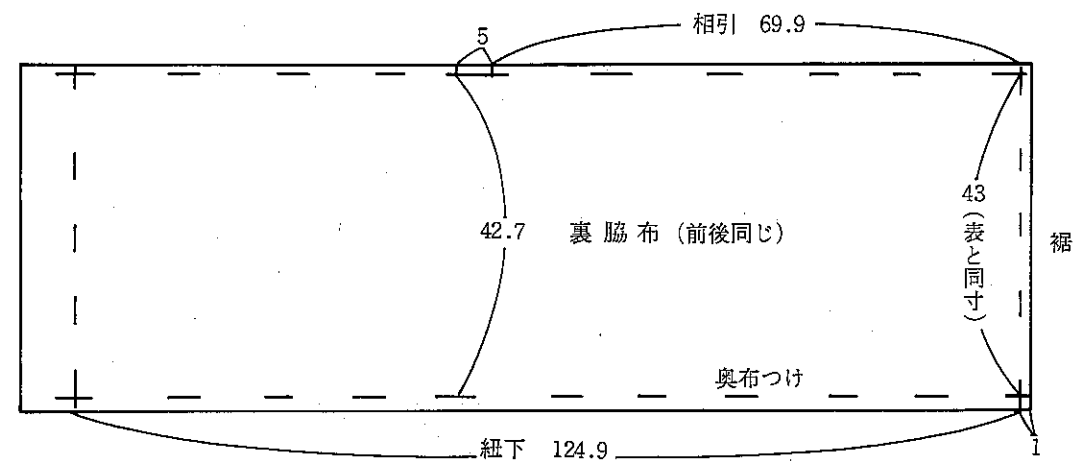
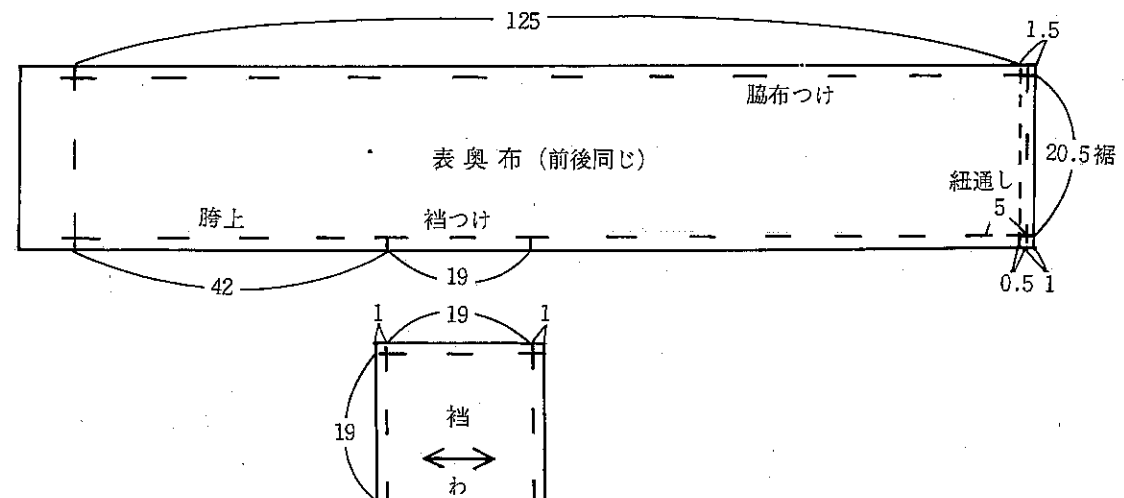
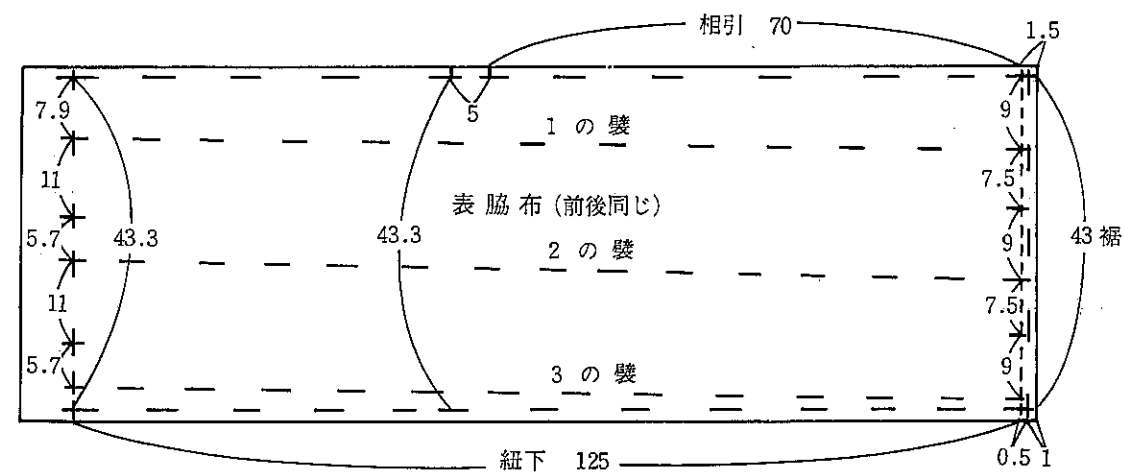
●相引から5cm上より上部の幅は、42.7cmに標す。

●裏後奥布は、裾の縫い代1cm、紐下寸法124.9cm、脇布つけ縫い代1cm、幅20.5cmに標し、胯上42cm、裆つけ19cm、裾より紐通し5cmを標す。

●裏前脇布および裏前奥布は、すべて表と同様に標す。

ただし、襷の標つけは除いてもよい。

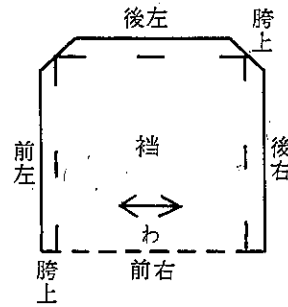
●紐幅を二つ折りにして、わから7.6cm、丈は269cmとし、丈の中心に標をつけておく。



縫い方

- 縫い糸は紅色および白色S撚りの絹糸を使用する。
- 針目は0.8cmにする。縫い目には0.2cmのきせをかける。
- 裾口の表裏を標どおりに合わせて縫い、縫い代は裏布の方へ折り、表へ返す。
- 表布を0.3cm見返して、しつけをかける。
- 脇明きを表裏を標どおり合わせ、裾口と同様に表布を0.3cm見返して、しつけをかける。
- 相引は、後の相引縫い代の表裏をしつけでとしておく。前の相引の表裏で後の相引をはさみ、四つ留めをしてから引続きに四つ縫いする。縫い代は前脇布へ折る。
- 留め方は、前の表から針を入れ、後の表裏をすくい、前の裏をすくい、前の表に戻して結ぶ。
- 裾口は紐通しのため、5cmほど表裏別々に縫う。
- 脇布の奥布つけの縫い代の表裏をしつけでとしておく。奥布の表裏で脇布をはさみ、四つ縫いをする。縫い代は奥布に折る。
- 裾口は5cmほど表裏別々に縫う。
- 一の襷、二の襷を図の寸法どおりにとる。
- 三の襷は、襷山をしつけで押さえておく。
- 胯上を縫ってから、三の襷を寄せる。
- 左脚、右脚の前後の襷取りも同様にする。
- 裆は図のように角を三角に、縫い代を内側に折り込み、三方をしつけでとしておく。
- 左脚後に後裆をつける。このとき表布と裆の表裏を三つ縫いにして、その縫い目にかぶせるように奥布の裏をのせて、くけつける。
- 後左脚の胯下の表裏をしつけでとじる。
- 紐通しのところは、縫い代を内側に折っておく。
- 前左脚胯下の裏と、後左脚胯下の表裏を合わせて三つ縫いをする。折りは前脚に返す。
- 紐通しと裆どまりには留めをする。
- 紐通しの留め方は、前の表から針を出し、後の表裏を通し、前の裏をすくって、前の表へ戻して結ぶ。
- 裆どまりは前の表から針を出し、後の表、裆の表裏、後の裏、前の裏を縦にすくって後の裏、裆の裏表、後の表をすくって、前の表に戻して結ぶ。
- 左脚前裆つけは、表布をはずして裆の表裏と、裏布を裆つけ寸法だけ三つ縫いにする。

裆隅の折り方



- 左脚胯下の前表布を、三つ縫いの縫い目をかぶせるようにのせて、裾より裆つけまでくける。
- 左脚前後の胯上は、表裏をしつけでとじ合わせておく。
- 右脚の後裆つけは、表布と裆の表裏で三つ縫いにし、続きに後の表胯上を、左脚の後胯上の表裏を合わせて三つ縫いにする。縫い代は右脚に折る。
- 裆の上部に留めをする。
- 右脚の表から針を出し、左脚の表布、裆をすくって右脚表布に戻して結ぶ。
- 裏胯上および裆に、裏布をのせてくけつける。
- 右脚の後胯下の表裏と、前胯下の裏を合わせて三つ縫いをする。
- 裾の紐通しおよび留めは、左脚と同様にする。
- 前右脚の前裆つけ寸法は、開き口にするため裆はわのままとする。身は表布と裏布を縫い合わせ、続きに前の表胯上を、左脚の前胯上の表裏と右脚の裏布とを合わせて三つ縫いにする。縫い代の折りは、右脚に返す。
- 後と同様に裆に留めをして、表胯上に表布をのせてくけつける。
- 中心の襷取りは、後襷は左脚の三の襷山を上部で1cm中心に寄せて、襷山を決める。
- 股上の縫い目で1cm重ね、裾口は股下の縫い目に合わせて襷を折る。
- 右脚の三の襷山を左脚の襷山から2cm重ね、裾は股下の縫い目に合わせて襷を折る。
- 前襷の中心は右脚を先に、後襷の中心と同じに三の襷山を折り、つぎに左脚の三の襷を後襷と同様に重ねて襷

を折る。

- 紐つけの位置の襷山をそれぞれ返し針でとしておく。

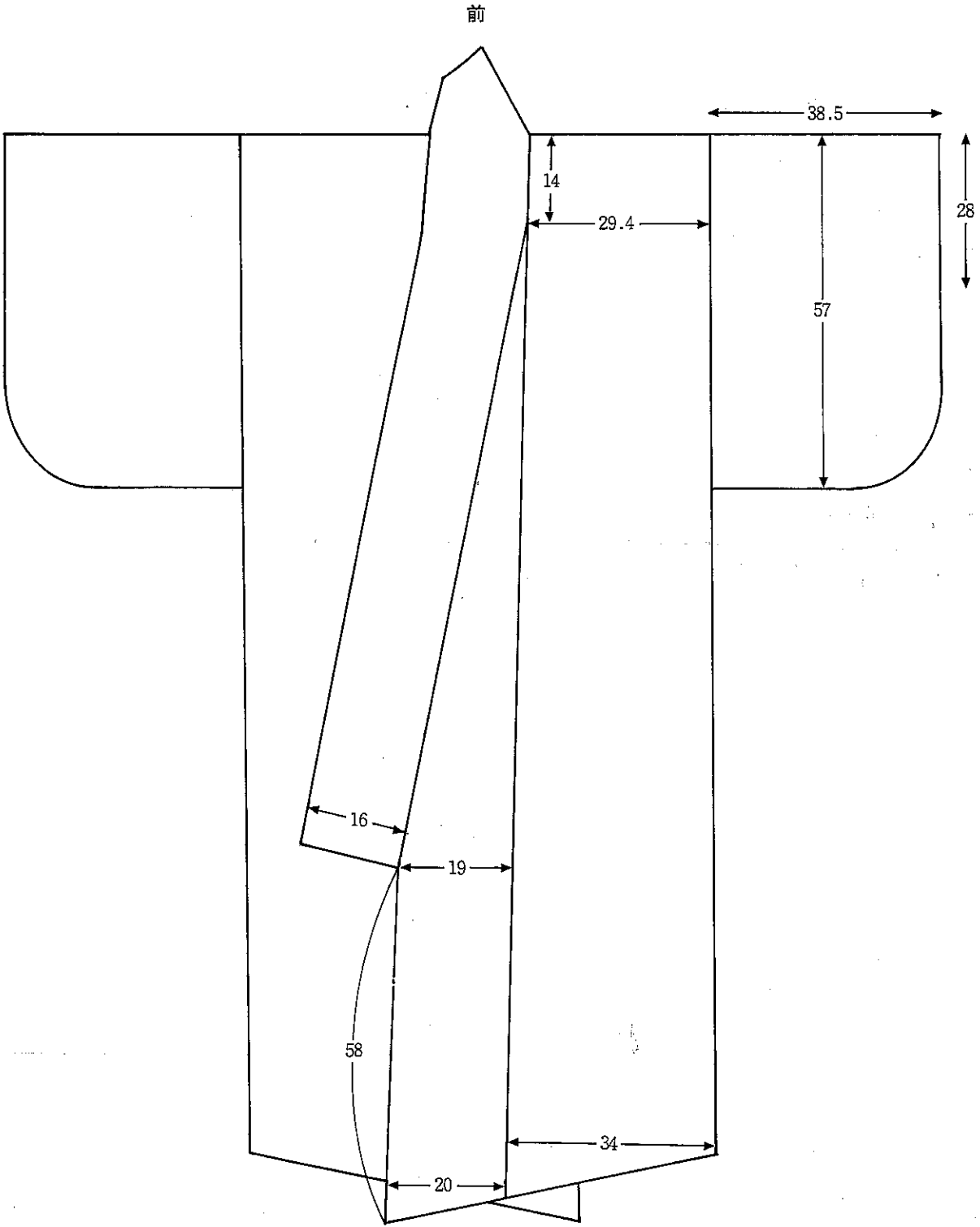
紐つけ

- 紐芯は晒木綿を使用し、幅は紐幅の二倍の15.2cm、丈は269cmに裁つ。
- 紐の裏に芯を入れ、紐先を縫って紐をくける。このとき紐の中央46cmほどは、紐つけのためにくけ残しておく。腰幅の部分、46cmの幅に和紙を入れる。
- 紐の中心と腰幅の中心を合わせ、腰幅およびそれぞれの襷山の位置を、紐に標をつけてから上刺しをする。
- 上刺しは、白色のS撚りおよびZ撚り絹紐二本で、紐の表側の方(紐の裏は除く)へ、出来上り図のようにする。
- 紐のつけ方は、紐の表裏で身をはさみ、上刺しの表針目の小針の間を、白色絹縫い糸を二本撚り合わせた糸で、表は返し針にして、裏は小針のところで、糸をからげるようにして紐つけをする。
- 紐のつけ方は前後同様につける。
- 裾の紐通しのところに、かんぬき留めをする。
- 裾口に打紐の括り緒を通す。長さは左右それぞれ218cmのものを使用する。

べに ぢ かご め ぼ たん もん よう から おり
紅地罽目牡丹文様唐織

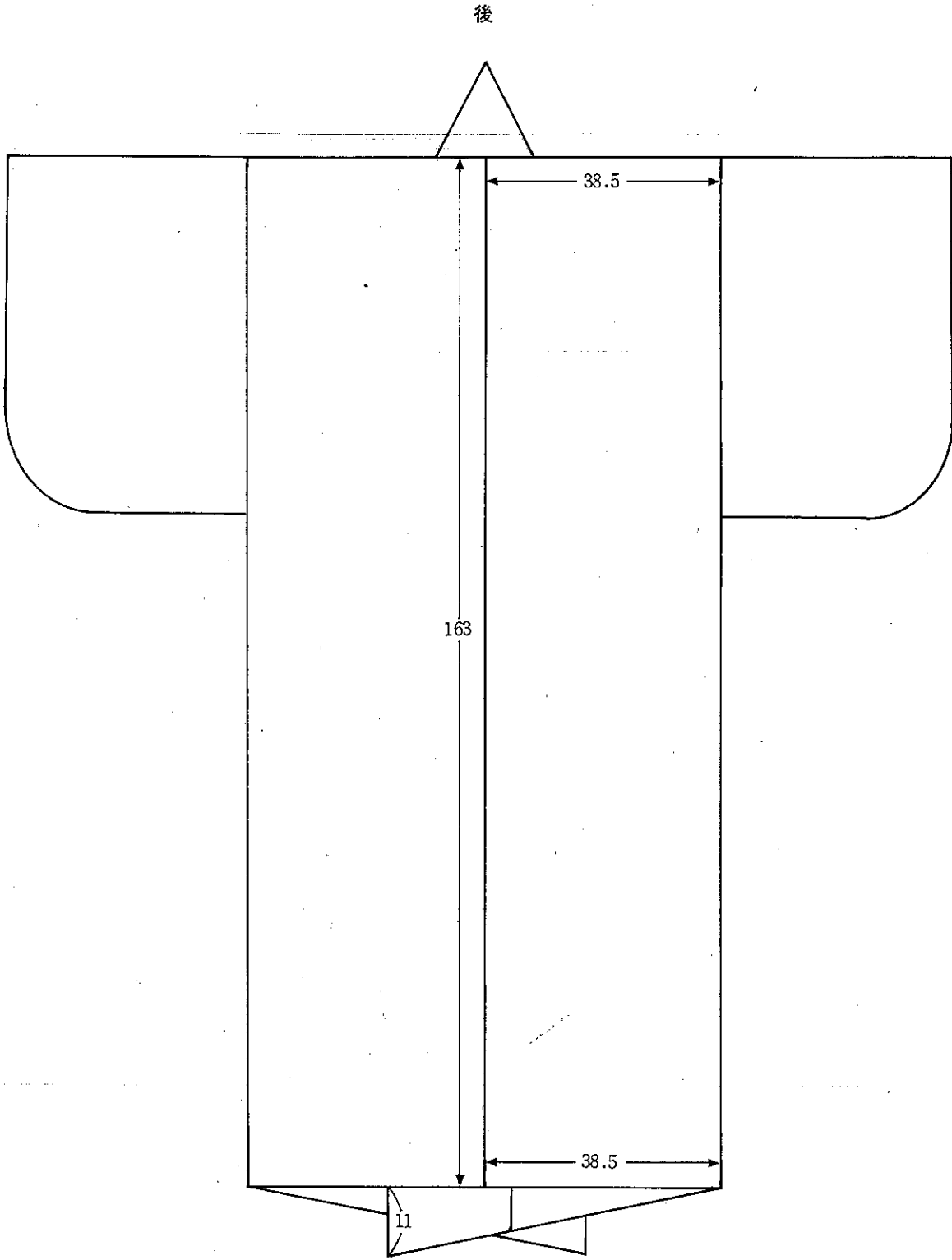
唐織は、能装束では主として女役が着つけの上に羽織
ったり被ったりして、その役の身分職業年令等を象徴す
る衣裳の名称で、織り方は色模様のところは緯糸が全部
浮織になっていて、一見刺繍のように見えるものである。

この紅地罽目牡丹文様唐織は、大倉集古館所蔵の江戸
時代の紅地罽目牡丹文様唐織に似せて織ったものを使用
し、裏地には紅地^{ねりみ}練緯を使用して、仕立てたものである。



出来上り寸法

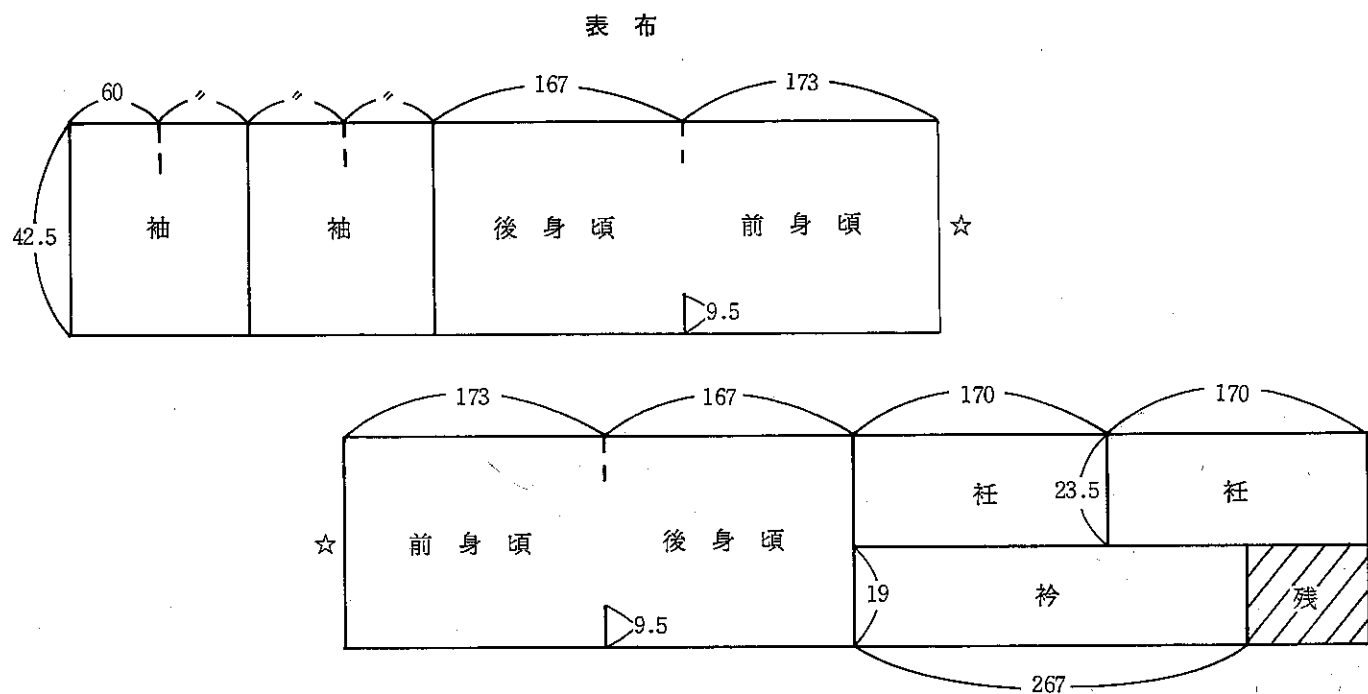
出来上り図の寸法どおりである。



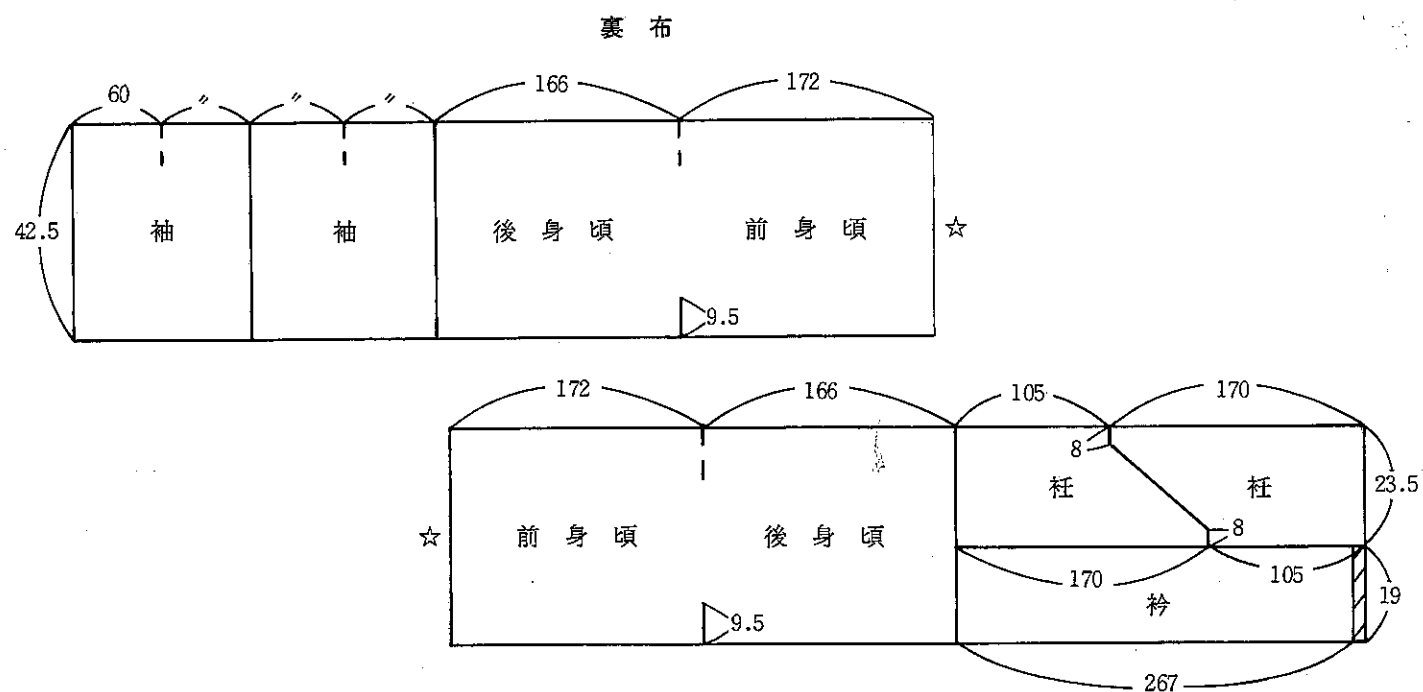
裁ち方

●表地はすでに模様を配置して織ってあるが、裁ち方としては図のようになる。

●裏地は袖二枚、身頃二枚を表と同寸に裁つ。衿、衿は図のように、裏衿を鉤衿裁ちにして、衿と裁ち合わせる。



$$\begin{aligned} & \text{袖丈} \times 4 + \text{後身丈} \times 2 + \text{前身丈} \times 2 + \text{衿丈} \times 2 = \text{表総丈} \\ & 60 \times 4 + 167 \times 2 + 173 \times 2 + 170 \times 2 = 1,260\text{cm} \end{aligned}$$

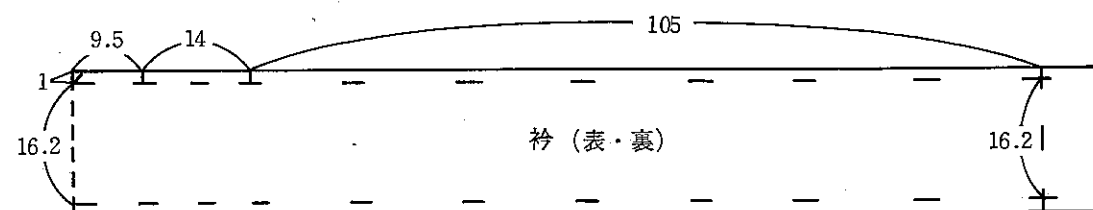
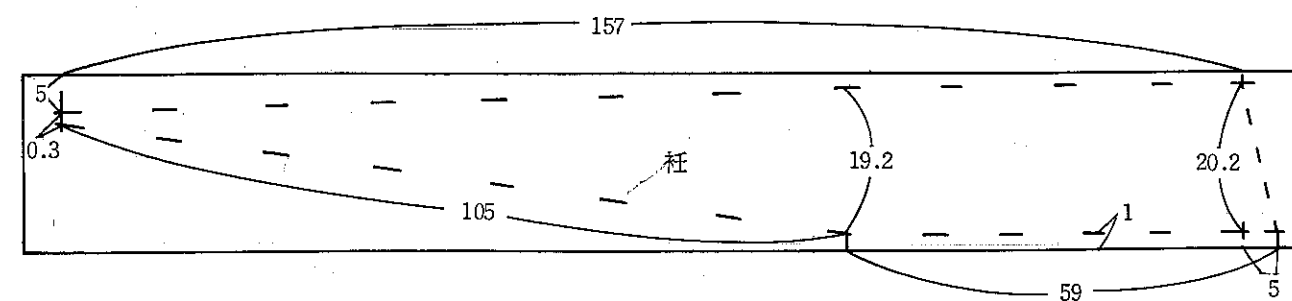
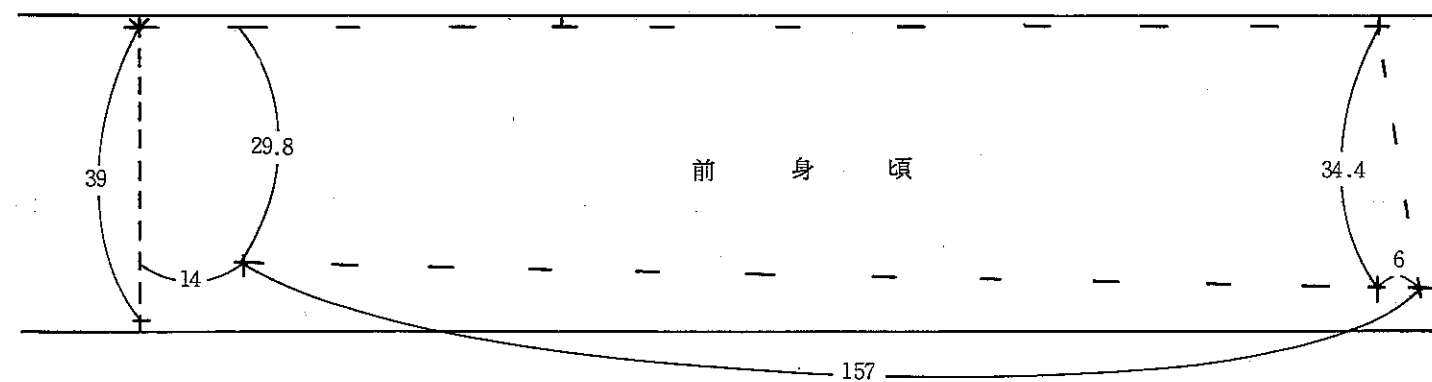
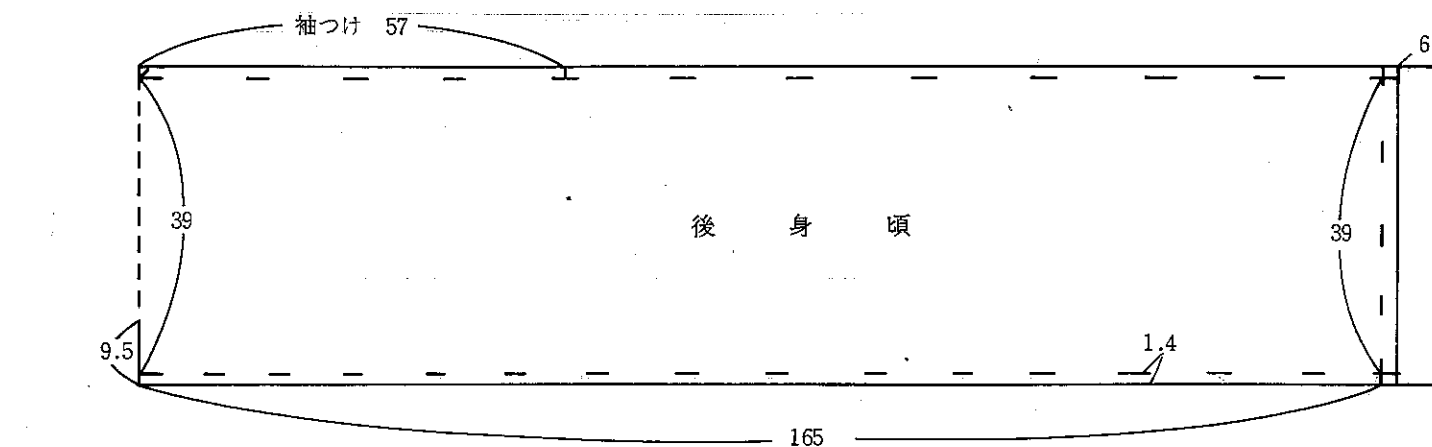
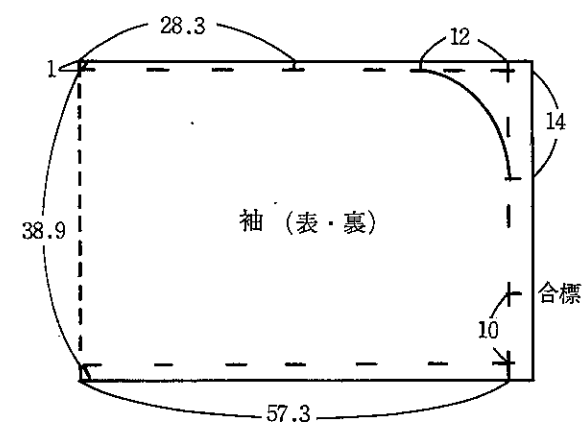


$$\begin{aligned} & \text{袖} \times 4 + \text{後身丈} \times 2 + \text{前身丈} \times 2 + \text{衿丈} + \text{かぎ下} = \text{裏総丈} \\ & 60 \times 4 + 166 \times 2 + 172 \times 2 + 170 + 105 = 1,191\text{cm} \end{aligned}$$

標つけ方

●表の袖、身頃、衿、衿を標つけ方図のようにそれぞれ標をつける。

●裏の標は袖で表袖口より0.3cm、また身丈および衿丈を1cm短く標すほかは、すべて表と同様に標つけをする。



縫い方

●縫い糸は赤色S捻り絹糸を使用し、針目はすべて0.5cmで縫う。

袖

●表と裏の袖口の標を合わせて縫い、0.2cmのきせをかけて縫い代を裏に折り、表に返して毛抜き合わせにして、袖口の留めをする。

●留めは表内袖から針を出し、裏内袖、裏外袖、表外袖を縦にすくって、表内袖に戻して結ぶ。

●その糸で引き続き袖口下から袖底の合標まで四つ縫いをする。

●袂の丸みを縫いちぢめ、袖口下は0.2cm、袖底は0.3cmのきせをかけ、表袖の方に折り、表に返してしつけをかける。

身 頃

●左右の前後身頃および衿の裾を別々に、表裏の裾を標どおり縫い合わせ、0.2cmのきせをかけて縫い代は裏に折り返し、表に返して図のように裏を0.5cm控えて裾を整えておく。

●背縫いは左身頃の表裏をよく合わせ、これを右身頃の表裏ではさんで、図のように四つ縫いをし、0.2cmのきせをかけて表に返す。背の縫い代の折りは右身頃に返る。

●脇縫いは、まず後身頃の表裏の脇の縫い代を袖つけの位置で0.2cm出して、縫い代がつかないように斜めに折っておく。

●前身頃の表裏で後身頃をはさんで四つ縫いをして、0.2cmのきせをかけて表へ返す。

衿 つけ

●衿つけは、前身頃の表裏を衿の表裏ではさんで、衿下りの位置まで四つ縫いをして、0.2cmのきせをかけて表に返す。

●衿下は、表は標どおり裏に折り、裏はそれより0.5cm控えて幅を整え、0.5cmの針目で本ぐけにする。

袖 つけ

●表身頃は肩山で縫い代を標より0.6cm出して折り、袖つ

け留めをして袖と縫い合わせ、0.2cmのきせをかけて縫い代は袖の方へ折る。

●袖つけ留めは表内袖、表前身頃、表後身頃、表外袖の順に通して、表内袖に戻して結ぶ。

●裏は袖の縫い代を標より0.6cm出して折り、留めをして身頃と縫い合わせ、0.2cmのきせをかけて縫い代は身頃の方に折り返す。

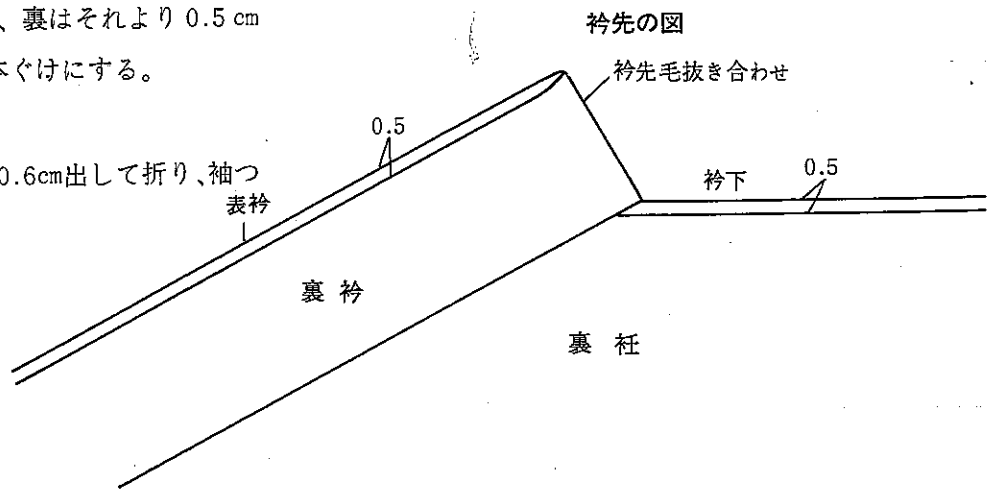
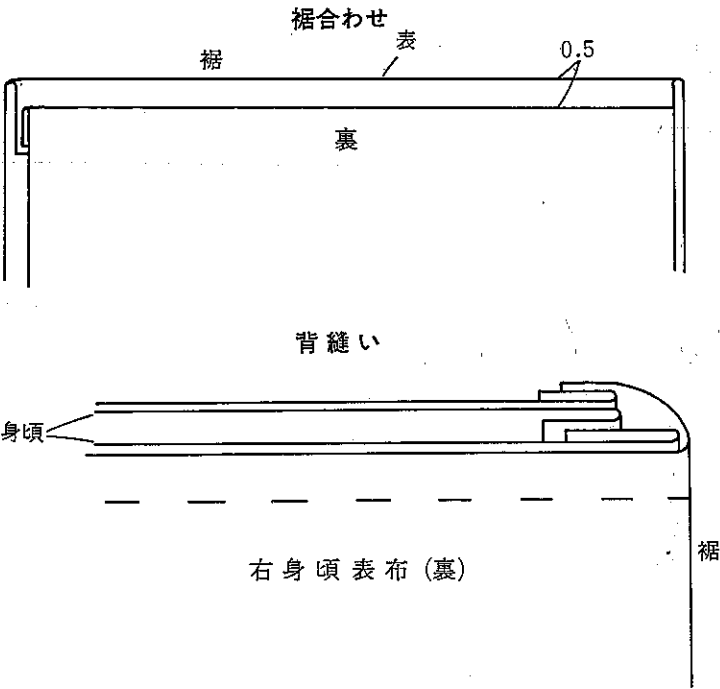
衿 つけ

●衿の表裏で身頃の表裏をはさんで四つ縫いにし、0.2cmのきせをかけて、衿先の留めをする。

●留めは表衿から針を出し、衿下、裏衿をすくって表衿に戻して結ぶ。

●衿先は留めより0.4cm先を縫い、表に返して毛抜き合わせにする。

●表衿は出来上り幅に折り、裏はそれより0.5cm控えて図のように折り合わせ、0.5cmの針目で本ぐけをする。



あ と が き

本書が出来上るまでには、故山本らく先生が研究に着手なさってから数えますと、凡そ30数年の年月を要したことになります。その調査研究頭初から、当時東京国立博物館染織室に奉職なさっておられた山辺知行先生には、この30数年の長きにわたって、私共の不勉強さにも関わらず、絶えず御叱正御指導をいただいてまいりました。

本書が陽の目をみることの出来たのはひとえに、山本らく先生の御慈愛と、山辺知行先生の御指導の賜にほかなりません。

北村哲郎先生はじめ、今永清二郎(東京国立博物館工芸課長)、神谷栄子(東京国立文化財研究所主任研究員)、熊沢五六(元・徳川美術館館長)、和田軍一(元・正倉院事務所長)、松島順正(元・正倉院事務所保存課長)、故野坂元定(元・巖島神社宮司)、故佐々木実高(元・中尊寺執事長)、片倉信光(白石・片倉家15代当主)諸先生のほか、多くの方々に研究調査の御便宜をお願いしお世話になりました。

また、高田義男・高田俊男(高田装束研究所)、松原福与・利男・八光・与七(松原染色工房)、青木美津枝・蓮見幸子(共立女子短期大学染色研究室)諸先生方には、模造復元に

あたり、一方ならぬ御苦勞をおかけしました。

復元模造の柱となる、復元の材料費に関しては、学校当局の絶大な御協力を得られたことも私共の大きな幸せだったと思います。

30数年にわたる研究のため、私共の研究室員も多くこの研究に参加していただきました。湯浅雅子、今村裕子、中川朋子、定浪浩子、鳥海モト、島啓子さんをはじめとする元研究室員の方々、現研究室員の松下茂子、直井百代子さんたちの協力を得ました。

この書の出版に際し、既に紀要で発表しております資料の使用をお許し下さった、らく先生の弟様の山本貞次郎先生に厚くお礼を申し上げます。

巻頭のカラー写真は、東京国立文化財研究所の野久保昌良技官にお手をわずらわせ、本書をまとめるに当っては、未整理の原稿を整理し、編集して下さった源流社の垣本武伯氏にお世話になりました。御好意に厚くお礼を申します。

この書が、多くの方々の御世話によって完成した事を深く感謝致します。

訂 正 と お 詫 び

「時代衣裳の縫い方」の

束帯の項の大口として掲載してあるものは、雅楽装束に用いられる大口です。束帯の大口は、紐は1本を前後に続けて、左脇^わが輪となり、紐の長さは左脇より後紐は141cm、前紐は195cm、出来上り幅は7.7cmになります。

他の作りは、雅楽装束の大口と同様です。

謹んでお詫びし、訂正させていただきます。



栗原 弘

昭和14年 共立女子専門学校本科卒業
14年 共立女子専門学校勤務
25年 共立女子大学家政学部勤務
現在 共立女子大学家政学部教授
共立女子大学家政学研究所所長



河村 まち子

昭和33年 共立女子大学家政学部被服学科卒業
44年 共立女子大学家政学部研究科修了
44年 共立女子大学家政学部勤務
現在 共立女子大学家政学部助教授

時代衣裳の縫い方

—復元品を中心とした日本伝統衣服の構成技法—

定価18,000円

栗原 弘 共 著
河村まち子

昭和59年 6 月29日 初版第 1 刷発行

発行人 ● 垣本武伯

発行所 ● 株式会社 源 流 社

〒102 東京都千代田区飯田橋1-9-305

電話東京03-261-9721(代) 振替東京7-7188

印刷製本 ● 凸版印刷株式会社

©1984 Hiro Kurihara & Machico Kawamura

3077-840003-2012